

# 小杉町針原東遺跡発掘調査報告

1994年3月

富山県小杉町教育委員会

# 小杉町針原東遺跡発掘調査報告

1994年3月

富山県小杉町教育委員会



## 序

小杉町針原企業団地造成事業に伴う発掘調査は、平成元年から3年間で約17,000㎡に及び、出土遺物の整理作業などを含めると5年間に要しました。これは当町の平野部調査では、最も大規模なものであります。

検出された遺構、遺物は多岐にわたりますが特に注目されるものに弥生時代後期の井戸と中世の館跡があげられます。井戸は、当時の木製品加工技術を知るうえでたいへん貴重な資料となりました。

また館跡は、一辺96mの堀とその内側に一辺68mの堀を二重にめぐらせたもので、その内側に11棟の建物跡を擁しており、方形館跡を中心とした中世集落の一端が窺われます。さらにこの遺跡は北陸本線以北にも広がりをもっており、今後北側の調査が行なわれれば中世集落の一形態の全容が明らかになり、今回の調査結果と共にこの地域の中世の歴史を考えるうえで重要な資料となります。

本書が、今後の調査研究を進めるうえでの参考となり、今後の文化財保護と郷土の歴史を知るための一助になれば幸いです。

終わりに、長年の調査に終始ご協力いただきました地元の方々をはじめ、関係各位に深く感謝の意を表します。

平成6年3月

小杉町教育委員会

教育長 稲葉 茂樹

## 例 言

1 本書は、小杉町針原企業団地造成事業に伴って発掘調査を実施した。富山県射水郡小杉町<sup>へわり はりわら てきき</sup>戸破字針原、手崎字針原外に所在する針原東遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査は、小杉町教育委員会が調査主体となり、平成3年度には山武考古学研究所（所長 平岡和夫）調査員の協力を得て実施した。調査期間・発掘面積・調査担当者は次のとおりである。

試掘調査（第1次） 平成元年11月27日～12月21日まで延べ19日間 約3,700㎡ 納谷守幸・原田義範

試掘調査（第2次） 平成2年7月4日～7月19日まで延べ10日間 約3,722㎡ 原田義範

本調査（Y10以東） 平成2年10月22日～12月4日まで延べ18日間 約500㎡ 原田義範

本調査（拡張区） 平成2年12月5日～12月11日まで延べ6日間 約850㎡ 原田義範

本調査（Y11以西） 平成3年9月2日～12月26日まで延べ96日間 約9,300㎡

〔小杉町教育委員会；原田義範〕  
〔山武考古学研究所；桐谷 優・伊藤廉倫・大越直樹・荒井英樹〕

3 調査事務局は小杉町教育委員会に置き、平成元～3年度は社会教育課主任金山秀彰、平成4・5年度は係長堀川辰幸が事務を担当し、平成元年度を社会教育課長竹林真昭、平成2年度～3年6月までを課長荒川秀次、平成3年7月～平成4年度までを生涯学習課長盛田寿子、平成5年度を課長河畑 淳が総括した。

4 調査の実施にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから助言、指導を受けた。

5 本調査に伴う整理作業は、主な調査地区にもとづいてY35以東の部分を小杉町教育委員会の上野 章・原田義範・稲垣尚美が行ない、Y36以西の部分を平成4・5年度の2カ年にわたり、山武考古学研究所に委託して行なった。

6 本書の編集作成は、小杉町教育委員が主体になり山武考古学研究所の協力を得て行なった。

また執筆は上野 章・原田義範・稲垣尚美・桐谷 優が行なった。文責は文末に記した。

7 木製品の材同定については、パリノ・サーベイ株式会社が行ない、その分析結果を掲載した。

8 調査から報告書作成にいたるまで次の方々から指導、協力をいただいた。記して敬意を表したい。（敬称略五十音順）

伊藤隆三・大橋康二・小野正敏・狩野 陸・久々忠義・酒井重洋・高梨清志・長島正春・宮田進一・山内賢一  
山本正敏・吉岡康暢・開成測量株式会社・小矢部市教育委員会・大門町教育委員会

9 調査で得た図面・写真、遺物は小杉町教育委員会で保管しており、出土遺物には遺跡名を、HWHと略して記入した。

10 遺構の分類記号は、次の呼称を踏襲した。

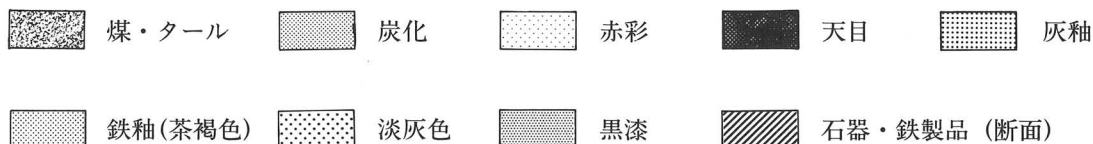
SD：溝、SB：建物、SK：土坑、SE：井戸、SX：不明、P：柱穴状ピット

## 凡 例

1 本書の方位は、座標北である。

2 土器の断面は、須恵器・珠洲を黒塗りとし、他の土器は白ぬきとして表現した。

3 遺物実測図中のスクリーントーンの貼り込みは、次のとおりの表現とした。



# 目 次

I	遺跡の位置と地形	1
II	調査の経緯	2
	1. 調査に至るまで	2
	2. 試掘調査	2
	(1)第1次試掘調査(平成元年度)	2
	(2)第2次試掘調査(平成2年度)	2
	3. 本調査	2
	(1)平成2年度の本調査	3
	(2)平成3年度の本調査	3
	4. 遺跡北側地区の試掘	4
III	調査の概要	4
	1. 立地	4
	2. 調査の方法	4
	3. 層序	4
	4. 試掘調査の出土遺物	6
	(1)平成元年度の出土遺物	6
	(2)平成2年度の出土遺物	6
	①7~13トレンチ	6
	②21~33トレンチ	6
	③39~42トレンチ	6
	④43~51トレンチ	8
	⑤53~65トレンチ	8
	⑥66~76トレンチ	8
	⑦78~81トレンチ	8
	⑧84~98トレンチ	9
	⑨66~98トレンチ	11
	⑩拡張区の出土遺物	11
	5. 本調査の遺構(Y2~40区, 拡張区A)	11
	(1)弥生時代の遺構	16
	—SK01・05・06・07・11・19~25・52・53・61・62, SD07—	16
	—SD10—	20
	—SE01・201, 拡張区A:SK01~03—	21
	(2)近世以降の遺構	21
	—SK03・05・09・10・15~17・29・30—	21
	—SK31~35・39・41・48・49・57~60, 拡張区A:SK05~08, SX01, SD01・02—	22
	—SD04~06・08・09—	23



6. 本調査の遺物 (Y 2 ~40区) .....	23
(1)縄文時代 .....	23
(2)各遺構出土の遺物 .....	27
—SX01— .....	27
—SK02・06・07, SE01, SK09・10, SD10— .....	29
—SD10上層— .....	37
—SK22・27・52・60・61— .....	38
—SK62, SE201, SE201底面, SE201付近, 包含層Y 2 ~40区出土— .....	41
—古代の遺物, 中近世の遺物, 包含層X 8 ~25Y 8 ~15区出土— .....	43
—包含層X22・23Y44・45区, X22・23Y47・48区出土, SE01, SE201— .....	49
7. 本調査の遺構・遺物 (Y36~127区) .....	52
(1)弥生時代の遺構 .....	52
—SD10(Y40~80区)・10B・200・203, SK201・202・204~210— .....	52
—SK211・213・215・217・218・220~224・227・236~239・241— .....	53
(2)弥生時代の遺物 .....	64
(3)中世の遺構 .....	73
—堀 SD201・SD300A・300B・301・305— .....	73
(4)中世・堀の出土遺物 .....	75
—SD201・300A・300B・300C— .....	75
—SD301・305— .....	76
(5)区割りについて .....	80
① 1区画の遺構 .....	80
—SK225・228— .....	80
② 2区画の遺構 .....	80
—SK235— .....	80
③ 3区画の遺構・遺物 .....	80
—SK322・334・622, SE300, SD308・320— .....	80
④ 4区画の遺構・遺物 .....	83
—SB01・02— .....	84
—SB03・04— .....	85
—SB05・06— .....	86
—SD302~304— .....	87
—SK302~305・307・315・316・318~320・326・328・SX314— .....	89
⑤ 5区画の遺構・遺物 .....	91
—SB07— .....	91
—SB08・09— .....	92
—SB10・11— .....	93
—SE335— .....	94
—SE600— .....	96

—SE602—	97
—SE603—	99
—SE604—	106
—SE606・607—	107
—SD306—	108
—SD307・309—	109
—SK330・333・335・337・338・340—	110
—SK341～344・350・351—	113
—SK601・608・609・611～613・620—	114
—SK330・337・340・344・351・609・611・620—	115
⑥X1～19Y100～127区の遺構・遺物	116
—SD100C・D・E, SD300C・312～314・349・363—	116
—SK352・353・355・358—	117
—SK359・360・373・401—	118
—SD100C・315, SK358の遺物—	118
(6)中世の遺構外出土遺物	119
①中国製磁器	119
—白磁・青白磁・青磁—	119
②国産陶磁器	119
—瀬戸・瀬戸美濃—	119
—珠洲—	122
—土師皿・その他—	125
(7)近世の遺構外出土遺物	125
—越中瀬戸—	125
—肥前系・関西系・九州系・産地不明—	127
(8)その他の遺構外出土遺物	127
IV 中世の遺構と遺物	131
V まとめ	133
引用文献	139
附章 自然科学的調査	141
1. 木製品の材同定	141
—引用文献—	146
—表1—1 材同定結果—	148
—表1—2 材同定結果—	149
—表2 木製品の用途別種類構成—	150
—図版1 材の顕微鏡写真—	151
—図版2 材の顕微鏡写真—	152
—図版3 材の顕微鏡写真—	153
—図版4 材の顕微鏡写真—	154

## 挿図目次

第1図	地形と周辺の遺跡	1
第2図	試掘調査と発掘区	折込み
第3図	遺跡北側地区の試掘と出土遺物	3
第4図	試掘調査（平成元年度分，平成2年度分：7～51トレンチ）の出土遺物	5
第5図	試掘調査（53～81トレンチ）の出土遺物	7
第6図	試掘調査（68～98トレンチ）の出土遺物	9
第7図	拡張区Aの出土遺物	10
第8図	拡張区Aの遺構配置図	10
第9図	本調査 発掘区区割図	12
第10図	X1～26Y2～40区遺構配置図	折込み
第11図	SK01・02・06・11・19～25・52・53	13
第12図	SD07, SK61・62	14
第13図	SD10（Y2～35区付近）	折込み
第14図	SE01・201, SK07	15
第15図	SK29～35・39・41・48・49・59・60	17
第16図	SK03・15～17・57・58, 拡張区A：SK01・02・04～08	18
第17図	SX01, SD01・02	19
第18図	SK05・09・10, SD04～06・08・09, 拡張区A：SK03	20
第19図	縄文土器	24
第20図	縄文土器	25
第21図	縄文土器・石器	26
第22図	SX01, SE01, SK02・06・07・09・10の出土遺物	28
第23図	SD10（Y2～40区）の出土遺物	30
第24図	SD10（Y2～40区）の出土遺物	31
第25図	SD10（Y2～40区）の出土遺物	32
第26図	SD10（Y2～40区）の出土遺物	33
第27図	SD10（Y2～40区）の出土遺物	35
第28図	SD10上層（Y2～40区），SK22・27・52・60～62の出土遺物	36
第29図	SK61・62, SE201の出土遺物	39
第30図	SE201付近, SE201（底面出土），包含層（Y2～40区）の出土遺物	40
第31図	包含層（X4～25Y3～40区）の出土遺物	42
第32図	包含層（X8～25Y8～15区, X22・23Y44・45区, X22・23Y47・48区）の出土遺物	44
第33図	SE01の出土遺物	45
第34図	SE01の出土遺物	46
第35図	SE201の出土遺物	折込み
第36図	SE201の出土遺物	折込み



第37図	SE201の出土遺物	47
第38図	SE201の出土遺物	48
第39図	X1～22 Y 36～126区遺構配置図	折込み
第40図	SD10 (Y 36～62区付近)	51
第41図	SD200・203, SK201・202・204～207	54
第42図	SK208～211・213・215・217・218・220・221	55
第43図	SK222・224・227・234～236・241	56
第44図	SD10 (Y 36～67区) の出土遺物	57
第45図	SD10 (Y 36～76区)・10Bの出土遺物	58
第46図	SD10Bの出土遺物	59
第47図	SD10B, 200の出土遺物	60
第48図	SD203, SK201・202・206の出土遺物	61
第49図	SK206・208・210・211・220・224・227の出土遺物	62
第50図	SK226・236～239・241, SX200, X1～5 Y 36～51区, X7～11 Y 43～51区の出土遺物	63
第51図	X 16 Y 51～61区, X 18～21 Y 36～70区の出土遺物	64
第52図	X 1 Y 56区の出土遺物	65
第53図	X 1 Y 56区, X 1 Y 66区, X 1 Y 76区の出土遺物	66
第54図	遺構外の出土遺物	67
第55図	SD201・300A・300B・300C・301・305	折込み
第56図	SD201・300Aの出土遺物	74
第57図	SD300 B・Cの出土遺物	77
第58図	SD300 Cの出土遺物	78
第59図	SD301・305の出土遺物	79
第60図	1区画 (SK225・228)・2区画 (SK235)・3区画 (SK322・334)	81
第61図	3区画 (SK622, SE300, SD308・320とSK622の出土遺物)	82
第62図	4区画内遺構配置図	83
第63図	SB01・02	84
第64図	SB03・04とSB03の出土遺物	85
第65図	SB05・06	86
第66図	SD302～304, SK302・303と輸入銭	87
第67図	SK304・305・307・315・316・318～320・326・328	88
第68図	SX314	89
第69図	5区画内遺構配置図	90
第70図	SB07と出土遺物	91
第71図	SB08・09	92
第72図	SB10・11	93
第73図	SE335と出土遺物	94
第74図	SE600と出土遺物	95
第75図	SE602	96

第76図	SE602の出土遺物	97
第77図	SE602の出土遺物	98
第78図	SE602の出土遺物とSE603	99
第79図	SE603の出土遺物	100
第80図	SE603の出土遺物	101
第81図	SE603の出土遺物	102
第82図	SE603の出土遺物	103
第83図	SE603の出土遺物	104
第84図	SE603の出土遺物とSE604	105
第85図	SE606と出土遺物	106
第86図	SE607と出土遺物	107
第87図	SD306と出土遺物	108
第88図	SD307・309, SK330・333	109
第89図	SK335・337・338・340	110
第90図	SK341～344・350	111
第91図	SK351・601・608・609・611・612	112
第92図	SK613・620	113
第93図	SK330・337・340・344・351の出土遺物	114
第94図	SK609・611・620の出土遺物	115
第95図	SK349・352	116
第96図	X1～19～Y100～127区遺構配置図	折込み
第97図	SK353・355・358～360・373・401	117
第98図	SD100C・315, SK358の出土遺物	118
第99図	遺構外の出土遺物（白磁・青白磁・青磁）	120
第100図	遺構外の出土遺物（瀬戸・瀬戸美濃）	121
第101図	遺構外の出土遺物（瀬戸・瀬戸美濃・珠洲）	123
第102図	遺構外の出土遺物（珠洲）	124
第103図	遺構外の出土遺物（珠洲・土師皿・八尾・瓦質火鉢・越中瀬戸）	126
第104図	遺構外の出土遺物（越中瀬戸・肥前系）	128
第105図	遺構外の出土遺物（肥前系・関西系・九州系・産地不明）	129
第106図	遺構外の出土遺物（石製品・銅製品・鉄製品）	130
第107図	調査区内の中世陶磁器出土状況と組成表	132
第108図	各時代の遺構分布	134
第109図	各時代ごとの主な出土遺物	135
第110図	出土地点ごとの器種	136
第111図	SD10出土の器種	137

# I 遺跡の位置と地形

針原東遺跡は射水郡小杉町戸破56番地外の標高約2.3mの沖積平野に所在する。

小杉町は、富山平野を二分する呉羽山丘陵の西側にあたる県西部にあり、富山市と高岡市の中に位置し、町の南側は富山市西部から大門町にかけて平野部に接して射水丘陵に連なっている。射水丘陵の地質は新世代第三紀の泥岩・砂岩層によって構成される青井谷泥岩層からなり、上部に呉羽山礫層が点在している。

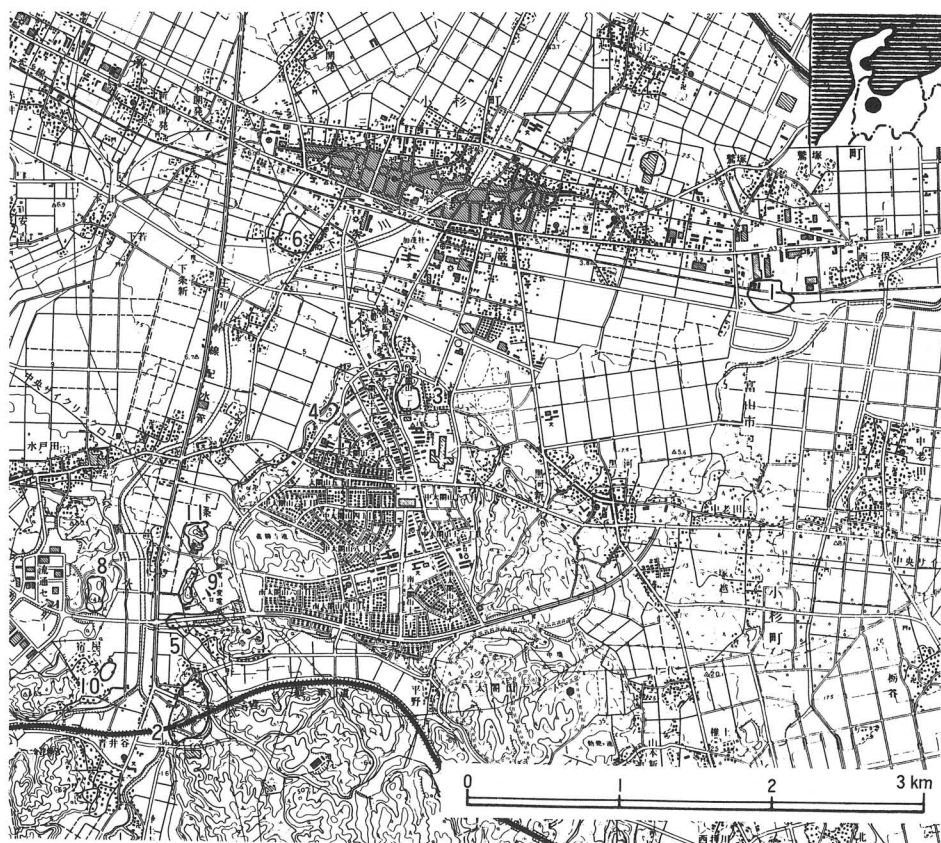
射水丘陵は、下条川やその小支流が谷を刻み樹枝状の地形をなし、起伏に富んだ小丘陵が広がっており、丘陵上には各時代の遺跡が点在している。

また、射水丘陵の東部は、呉羽山丘陵の南端と接し、射水丘陵との凹部には池多の平岡段丘礫層が堆積し境野新へと続いている。これらの礫は神通川の扇状地性の堆積物とされ、鍛冶川を中心とした扇形の地形が広がる。丘陵沿いの微高地は、現在畑地として利用されていて、多くの遺跡の所在が知られている。

周辺の遺跡をみると、下条川沿いの丘陵や平野部には、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多い。丘陵中では集落跡として住居跡や大型土坑などが発掘された上野遺跡や中山南遺跡があり、墳墓としては、方形周溝墓や台状墓が調査された囲山遺跡や南太閤山Ⅰ遺跡がある。また、平野部には、伊勢領遺跡や戸破若宮遺跡から、溝や井戸などがみつかり、これらの弥生時代の遺跡は主に後期以降に形成されることが多く、稲作農耕の定着がこの地域では後期後半に集中している。続く古墳時代には下条川流域を中心として統括した首長墓として4世紀後半頃の前方後円墳の五歩一古墳が下条川の左岸丘陵上にあり、右岸には前方後円墳の変電所西古墳が築かれる。更に近くの丘陵上には、石室をもつ宿屋古墳や群集墳の山王宮古墳などの古墳群が存在している。

古代になると須恵器窯跡や製鉄関連の生産遺跡が丘陵全体にわたって分布していることが近年の大型開発に伴う事前の調査で確認されており、古代の手工業生産に主要な役割を果たした地域として認識されている。 (稲垣)

No.	遺跡名	主な時代
1	針原東	弥生・中世
2	上野	縄文・弥生 古墳
3	囲山	弥生
4	中山南	弥生・古墳
5	南太閤山Ⅰ	縄文～古墳 奈良・平安
6	伊勢領	弥生・奈良
7	戸破若宮	弥生・中世
8	五歩一古墳	弥生・古墳
9	変電所西古墳	古墳
10	宿屋古墳	古墳
11	山王宮古墳	古墳



第1図 地形と周辺の遺跡



## Ⅱ 調査の経緯

### 1 調査に至るまで

針原東遺跡周辺の周知の遺跡としては、西側に隣接する針原西遺跡や北側約1km隔てた鷲塚遺跡が知られていた。当遺跡は、地元の生徒が、昭和63年7～8月にかけて水田や畑の表面踏査を行ない、弥生時代の土器や奈良・平安時代の須恵器・土師器、中世の土師質小皿・珠洲などを採集し遺跡の存在が明らかになったものである。合わせて北東側の西二俣からも針原東遺跡の各時代とほぼ同時代の遺物がかなり広範囲にわたって採集したことが富山考古学会の機関誌に紹介された〔中島1988〕。その直後の平成元年3月に小杉町で企業団地の建設計画が富山県の企画県民部に示され計画地内に遺跡が存在することが事業を実施する上で関係のある小杉町や富山県の開発部局に知らされた。

小杉町針原・手崎地内に係る企業団地は、富山テクノポリス計画に基づくものである。施設整備計画書によると市街地に散在する中小製造業者の移転拡大を図り、雇用確保や地域の活性化を目的としたもので、敷地面積約216,900㎡に十社程の企業を誘致して平成元年から3年にかけて敷地造成や道路・緑地の整備などを行なう予定であった。

そこで平成元年4月に小杉町商工課及び町教育委員会・富山県教育委員会では、今後の遺跡の取り扱いについて対応を協議したところ、秋の収穫後に地権者の同意を得て遺跡の範囲や内容を把握するための試掘調査を実施し、その結果を踏まえ造成計画との調整を図っていくこととなった。なお用地の買収は平成2年に進められた。

### 2 試掘調査

試掘調査は、小杉町教育委員会が調査主体となり、調査対象地の東西に走る町道177号線で北側と南側に二分して平成元・2年の1・2次に分けて水田や畑地で実施することとなった。調査の方法は重機を用い、約1m幅の試掘溝を掘り、その後作業員による精査を経て遺構・遺物の有無を調べ遺跡の状況を確認した。

#### (1) 第1次試掘調査（平成元年度）

調査は、町道177号線の南側造成地約80,000㎡を対象とし、約10m間隔にトレンチを設け合わせて84本のトレンチを入れ約3,700㎡を発掘した。調査期間は平成元年11月27日から12月21日までの延べ19日間にわたって行なった。

試掘の結果、対象地からは遺物が散発的に出土し、遺物を伴う明確な遺構が確認されなかった。出土遺物には、奈良・平安時代の須恵器・土師器と、中近世の陶磁器・木製品がある。

#### (2) 第2次試掘調査（平成2年度）

調査は、町道177号線の北側造成地約47,000㎡を対象とし、数mから約10m間隔にトレンチを設け合わせて98本のトレンチ約3,772㎡を発掘した。調査期間は平成2年7月4日から7月19日までの延べ10日間にわたって行なった。遺物は南よりが少し希薄な出土状況を示し、北側にかけて多くなる傾向があり、遺物の時期は、弥生時代から古代・中近世の陶磁器まで各時代に及んでいた。また遺構はJR北陸線沿いに集中してみられ、その範囲は東西約260m、南北約45～50mの広がりがあり、遺構が存在する範囲は、造成にあたって事前に本調査が必要となった。

なお、南側において遺構の存在が確認されないが、遺物の出土が他に比べ比較的多い地区（拡張区）約850㎡を本調査することとなった。

### 3 本調査

上記2回の試掘結果に基づいて、平成2年8月に小杉町の三役をはじめとし、商工課・教育委員会などの関係者でその取り扱いが協議された。町では用地買収後に企業団地として転売するまでの間、金利負担が増大することから当初計画どおり平成3年10月に工事を発注し、年度末には造成工事が完了することで方針が示された。

本調査は、小杉町教育委員会が調査主体で行ない、造成工事との関係から平成3年11月末まで調査終了することになった。町教育委員会では、既に他事業の遺跡調査も抱えていたことから、平成3年の本調査は、千葉県の民間調査



第2図 試掘調査と発掘区

機関の調査協力を得て、調査の促進を図ることとなった。

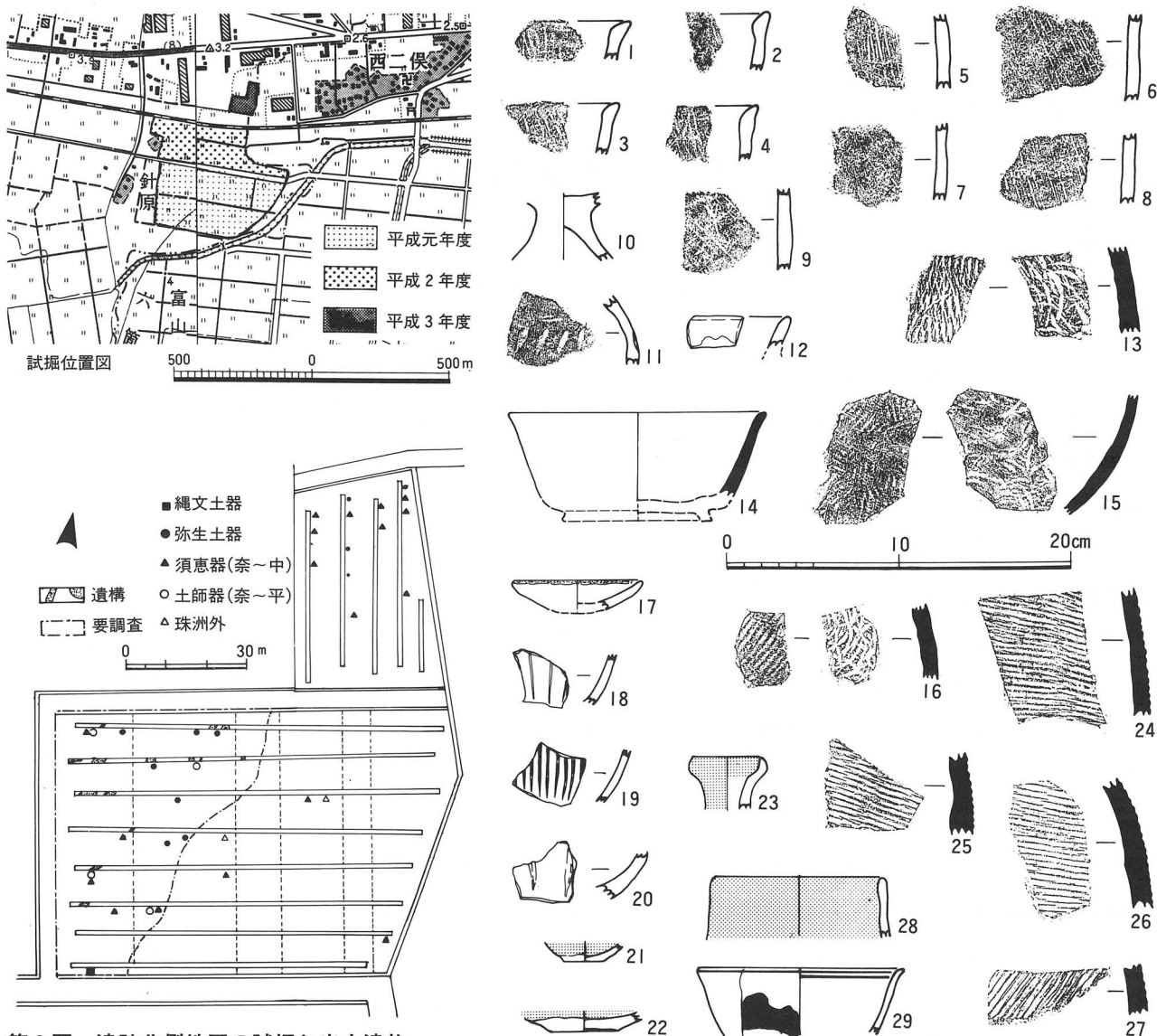
(1) 平成2年度の本調査

本調査は、東側から西側に向けて進めることとし、平成2年は遺跡の東端部約500㎡を対象とした。調査期間は10月22日から12月4日までの延べ18日間であった。検出遺構には、弥生時代の井戸や土坑などがあり、発掘区北側の浅い凹地から多くの弥生土器が出土した。

また本調査の南側にあたる拡張区は、平成3年に調査する予定であったが、太閤山ランドの造成工事による残土を利用し盛土を一部行なうことになり、急遽、約848㎡の本調査を実施することとなった。調査期間は12月5日から12月11日までの延べ6日間であった。試掘では、遺構が確認されなかったが、面的に広げたところ表土直下にわずかな掘り込みを残す弥生時代の土坑を検出した。

(2) 平成3年度の本調査

平成3年度の調査期間が9月2日から11月末と短いことから、当初、調査員4名、作業員数十名の調査体制でのぞむ予定であったが、民間の調査機関の調査協力が直前になり入ることが遅れたことや作業員不足から、調査の後半は毎週土曜日や一部祝祭日、或いは小雨の中で発掘を行ない、12月26日ようやく対象地の調査を終えた。調査の延べ期間は96日間であり、調査面積は約9,300㎡であった。



第3図 遺跡北側地区の試掘と出土遺物



#### 4 遺跡北側地区の試掘（第3図）

企業団地内の試掘調査を行なったところ遺跡の範囲は、J R北陸線の北側にも広がっていることが明らかになった。

平成3年夏頃には、J R北陸線の北側約60m隔てた水田において新たに民間会社の工場配送センターの建設計画が小杉町教育委員会に示された。そのため同年10月19日に計画地の7,616㎡を対象に試掘調査を実施した。

試掘の結果、遺物は広い範囲にわずかに散布していたが、遺構の分布は対象地の南西側から溝や土坑が確認された。南西隅の試掘トレンチでは、表土から20cm程の深さにある黄褐色粘質土の更に5～10cmの暗褐色土中から縄文土器約30点（1～9）がまとまって検出された。

出土遺物には、縄文土器・弥生土器・須恵器・中近世の陶磁器などがあり、かなりの時期幅がみられる。1～9は、縄文時代後晩期の土器であり、いずれも土器の色調・焼成もほぼ同様に似かよっており、1～2個体の破片と思われる。1～4は深鉢の口縁部で口縁端部が肥厚し内傾している。外面には細かい条線が斜め方向に走っている。10～12は弥生時代末から古墳時代初めにかけての土器で、10は高杯の脚部であり、11は甕の体部上半にヘラ状具の端を連続して用い刻みを入れたもの。12は「く」の字状口縁の甕である。

13～16は奈良・平安時代の須恵器であり、14は杯の口縁部であり、他は甕の体部片で、15は底部近くの破片である。17～27は中世の土器で、17は内外面にタール状の油脂が付いた土師質土器である。18～20は青磁の碗であり、外面に鎬を入れており、19は細かな鎬がみられ15世紀頃に属する。24～27は珠洲の甕片であり、23は瀬戸美濃の水瓶口縁部で暗黄褐色の灰釉がかかり、21・22は灰釉のかかった皿と小形の壺である。28は鉄釉をかけた越中瀬戸の碗で、29は淡青色で内外面に文様を描いた伊万里の碗である。 (上野)

### Ⅲ 調査の概要

#### 1 立地

遺跡は鍛冶川左岸の西約600mに位置し、標高約2.3mの水田及び畑地である平野部に立地する。今回の調査対象地は遺跡の南端にあたり、遺跡はさらに北側へ広がりをもっている。調査区を含む周辺の地形は、南西に位置する針原集落周辺の水田と発掘区東側に隣接する水田との高低差は約50cmほどで、東を流れる鍛冶川に向い僅かに低くなっている。また発掘区の北側は僅かに高まりを帯びている。本遺跡は、このように平野部の僅かな微高地上に存在している。

#### 2 調査の方法（第9図）

調査に際して事前に重機により耕作土を除去し、10m間隔に基準杭を設け、X軸を南北方向にとり、Y軸を東西方向にとって2m四方を1区画とするグリッドを設定して、遺物の取り上げを行なった。また、遺構の平面実測図は、20分の1を基本に遣り方測量で行なった。

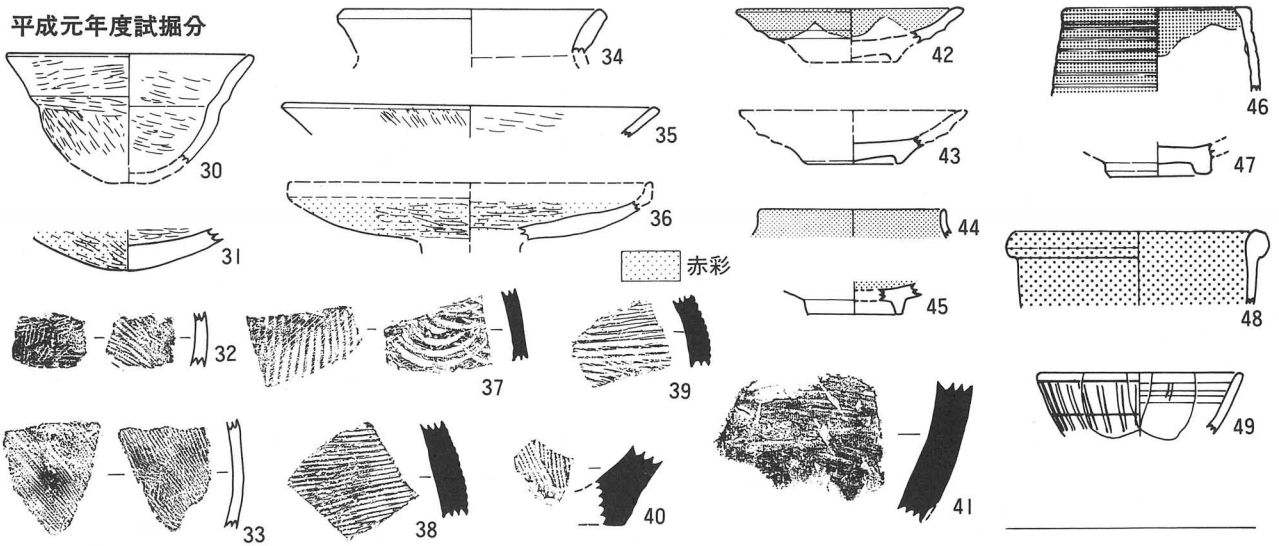
平成2年度の本調査は、Y2区から開始し遺構掘りと記録作業を平行させながら西側へと進めY10区まで行なった。また拡張区Aは北側から南へと調査を行なった。

平成3年度の本調査は、Y11区及びY36区の以東の2箇所から開始し同様な作業を平行させながら西へと進めY126区まで行なった。

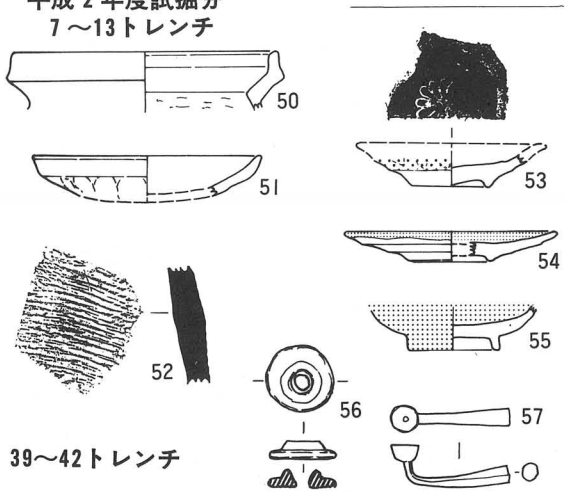
#### 3 層序

基本的層序は上層からI層明黒褐色の表土(18～30cm)、II層黒茶褐色砂質土(0～15cm)、III層黒茶褐色粘質土(0～10cm)、IV層遺構検出面の砂層または灰褐色粘質土となっている。IV層の灰褐色粘質土は、X15以北とY125の南西側でみられ、大半は砂層となっている。縄文時代の土器は、Y1～40区までのSD10を中心に分布しており、IV層の下層黒褐色粘質土層上面から多く出土している。また、弥生時代の遺物は、III層及びIV層の砂層または灰褐色粘質土に多く含まれている。古代以降の遺物はII・III層から出土が多い。 (原田)

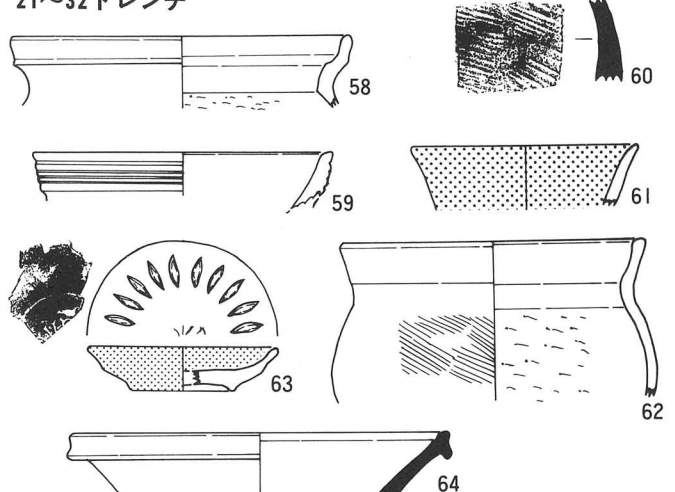
平成元年度試掘分



平成2年度試掘分  
7~13トレンチ



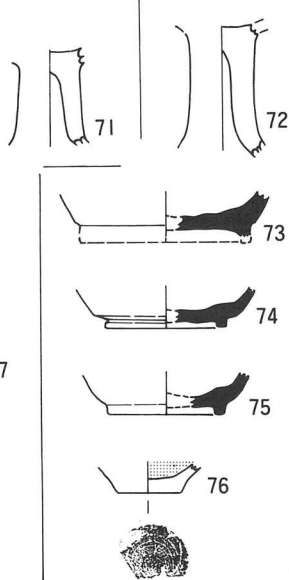
21~32トレンチ



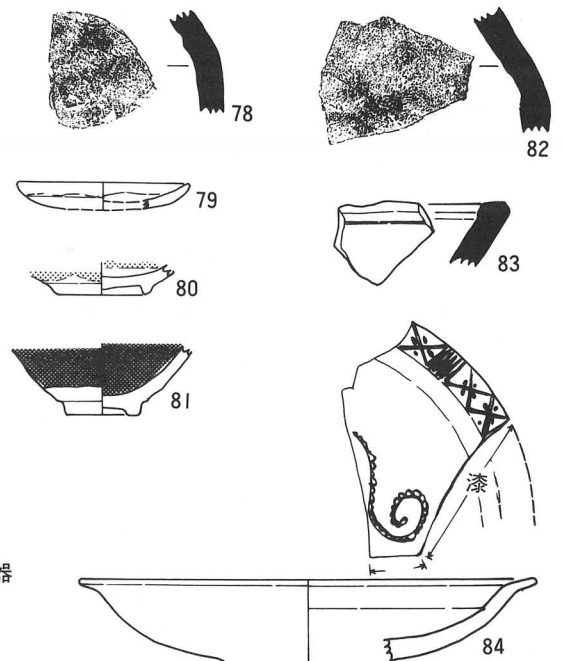
39~42トレンチ



43~51トレンチ



0 10 20cm



須恵器  
珠洲

第4図 試掘調査（平成元年度分，平成2年度分：7~51トレンチ）の出土遺物

#### 4 試掘調査の出土遺物

##### (1) 平成元年度の出土遺物 (第4図30~49)

出土遺物は弥生・奈良・平安・中近世にわたっているが、遺物量が少なく細片化したものが多く、集中的なまとまりがなく点在して出ている。

30~35は弥生土器または古墳時代初期の土器である。30は口縁部が大きく外反する鉢であり、外面をヘラミガキしている。31は外面に赤彩を施した壺の底部であり、底は厚くなっている。32・33は内外面をハケ目調整した体部片で、32の甕外面には煤状炭化物が厚く付いている。34は「く」の字状に外反した甕の口縁部であり、35は厚さが薄く、外面を軽くヘラミガキした高杯の杯部であろう。36は内外面をヘラミガキし器面を赤彩した奈良時代の高杯杯部とみられる。37は須恵器甕の体部両面にタタキ調整を加えたものであり、38~41は中世の珠洲であり、38・39・41は甕の外面に平行タタキを行なったものであり、40は片口鉢の内面におろし目を付けている。

42~49は近世陶磁器であり、42・43は越中瀬戸の皿、44は鉄釉をかけた壺の口縁部である。46は淡緑色の釉を横縞状にかけた碗で、47は内底面の見込みに緑青色の釉を付けた皿である。48は乳白色の釉をかけた碗で、49は淡い青色で文様を描いた伊万里の碗である。

##### (2) 平成2年度の出土遺物 (第4~7図50~185)

試掘対象の範囲が広く、遺物は調査区全体にわたって各所から出土しているため、遺物の説明にあたっては便宜的に何本かの試掘トレンチをまとめ、小ブロックに分け図を掲載した。試掘による遺構の確認はJR北陸線の南側約50mの範囲までであった。しかし試掘の結果、比較的遺物出土量の多い地区東西約30m、南北約30mの範囲約900mに限り再調査を実施して遺構の有無を調査した(拡張区Aと呼んだ)。

##### ① 7~13トレンチ (第4図50~57)

50は弥生時代末から古墳時代初期の有段口縁の甕であり、51は15世紀頃の土師質土器であり、口縁部をヨコナデし、体部に指頭痕が残る。52は須恵器の甕外面に平行タタキを施し、53・54は越中瀬戸の皿であり、53には灰釉をかけ内底面のまわりには低い段がめぐり、内ハゲの見込みに10弁程の印花を押す。底部は削り出し高台とし無釉であり、時期は17世紀前半にあたる。54は黄褐色の灰釉をかけた53と同様に底部側をヘラケズりする。55は京焼き風の碗で、茶褐色の釉を施した近世末から近代にかけてのものである。56は淡灰褐色の焼成良好な円盤状の土製品で、現代のもの可能性がある。57はキセルの煙管であり、形態は直径1.4cmの大きさの火皿から雁首にかけての脂返しに直角近くに折れ曲がっており、時期は特定できない。

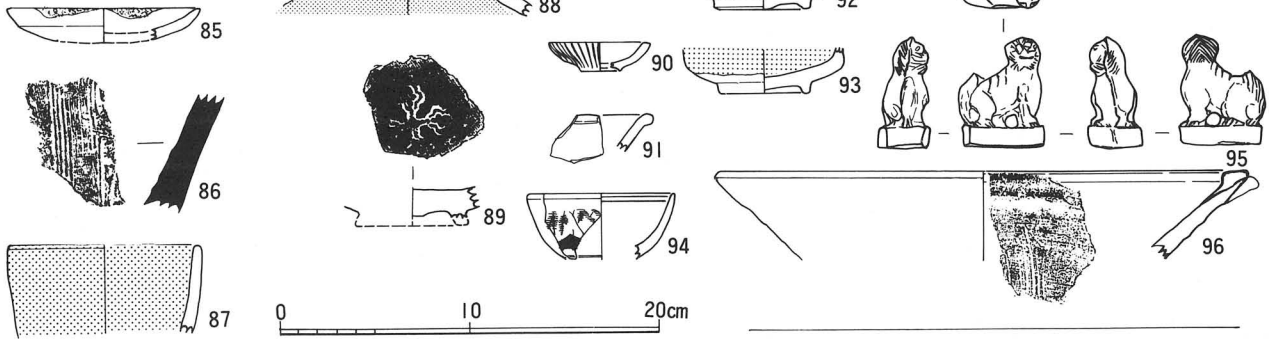
##### ② 21~33トレンチ (第4図58~64)

58・59・62は弥生時代末から古墳時代初期の有段口縁をもつ甕で、口縁部内外面をヨコナデ調整し、59には櫛状具による擬凹線を引き、58・59は体部内面にヘラケズリを行なう。60・64は須恵器であり、64は口径や傾きが不正確であるが、形態からして9世紀頃の瓶類の口縁部にあたる。63は17世紀前半の越中瀬戸の丸皿であり、内面を丸彫りして菊状にし内ハゲの内底面に印花を押したもので、深緑の釉をかけている。

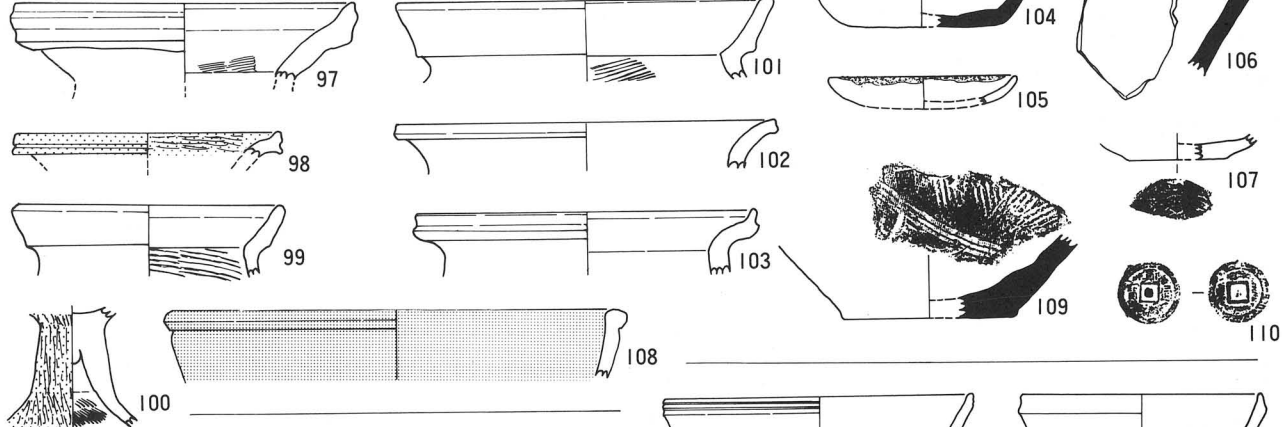
##### ③ 39~42トレンチ (第4図65~71・77)

65・66は16世紀前半の土師質土器で、口縁端部を軽くつまみ上げたもので、66にはタール状の炭化物が付着し灯明皿として利用されている。67は珠洲の外面に平行タタキを加えた甕体部である。70は9世紀頃に属する緑釉皿の口縁部にあたる小さな破片である。胎土は肌理の細かく淡褐色をした軟質の焼きである。71は弥生時代末頃の高杯脚部の棒状に伸びた柱状部にあたる。68は乳灰色の釉をかけた瀬戸美濃の瓶口縁部であり、69は中国製の天目茶碗と思われるもので、胎土は緻密で暗灰色をし重く重量感をもち、暗茶褐色の釉がかかる。77は18世紀以降の越中瀬戸であり、灰釉をかけた鉢で口縁部が屈曲し直立する。

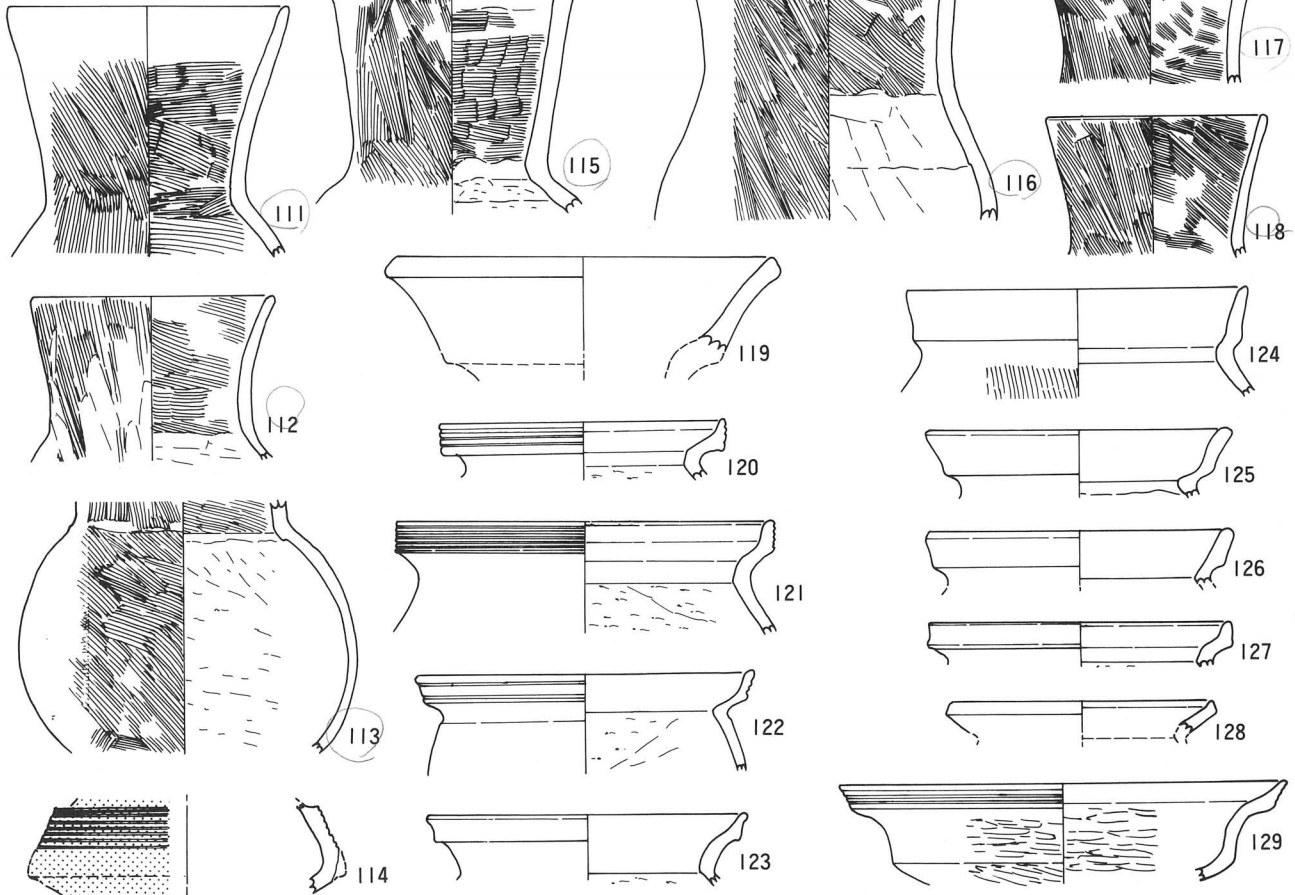
53~65トレンチ



66~76トレンチ



78~81トレンチ



第5図 試掘調査(53~81トレンチ)の出土遺物, 95は1/3

④ 43～51トレンチ (第4図72～76・78～84)

72は弥生時代末頃の高杯脚部であり、73～75は8世紀後半から9世紀にかけての須恵器であり、高台付きの杯身底部で、75の底部からの立上がりはかなり外傾する。78・82は13世紀から14世紀の瓷器系の焼き物で酸化焰焼成された八尾の甕の胎土と類似する。83は珠洲の片口鉢口縁部であり、13世紀後半から14世紀にかけての珠洲III・IV期に属する。81は16世紀に属する瀬戸美濃の天目茶碗底部にあたり、79は15世紀頃の土師質土器であり、内外面にタール状の油脂が付着する。76・80は18世紀以降の越中瀬戸で、76は底部に糸切り痕をもち内面に鉄釉をかけ、外底面及び底部寄りに墨が黒く付いている。84は近世末頃の伊万里の大皿で割れた二側面に漆がかなり付着しており、破損した面を漆で接合している。内面には淡紺色の色調で文様が描かれている。

⑤ 53～65トレンチ (第5図85～96)

85は15世紀頃の土師質土器でヨコナデした口縁部の内外面に煤状炭化物が付き、87は鉄釉をかけた越中瀬戸の壺口縁部であり、86は珠洲の片口鉢内面におろし目を刻んだもの。89・91は13～14世紀頃の青磁碗であり、89の内底面には花文が陰刻される。90・94は伊万里の皿と碗であり、90は口径が5.4cm、器高が1.5と小さな紅皿で内面と外面の上に乳白色の釉がかけられ、外面に細かな丸彫りが巡らされている。94は紺色の色調で樹木などを表現した文様が描かれている。87・92・93・96は越中瀬戸であり、87の碗、96の摺鉢は鉄釉であり、92・93の碗や皿には灰釉が用いられている。

95は高さが4.1cm、横幅が3.3cmの大きさの素焼きで狛犬を写実的に表現した完形の泥めんこに属するものである。時期ははっきりしないが近世から近代にかけて該当する。胎土には細かい土が用いられており、色調は淡褐色をなし、表面に淡褐色の釉が全体にかかっており、頭部や尾部の先端或いは台座の縁辺前面には緑色の釉が所々にかけられている。狛犬の成形は、犬部と台座が一体になった表側型と裏側型に二分された型抜きしたものを接合し一つに成形している。合わせ目の稜線には全体に粘土の盛り上がりが観察される。

⑥ 66～76トレンチ (第5図97～110)

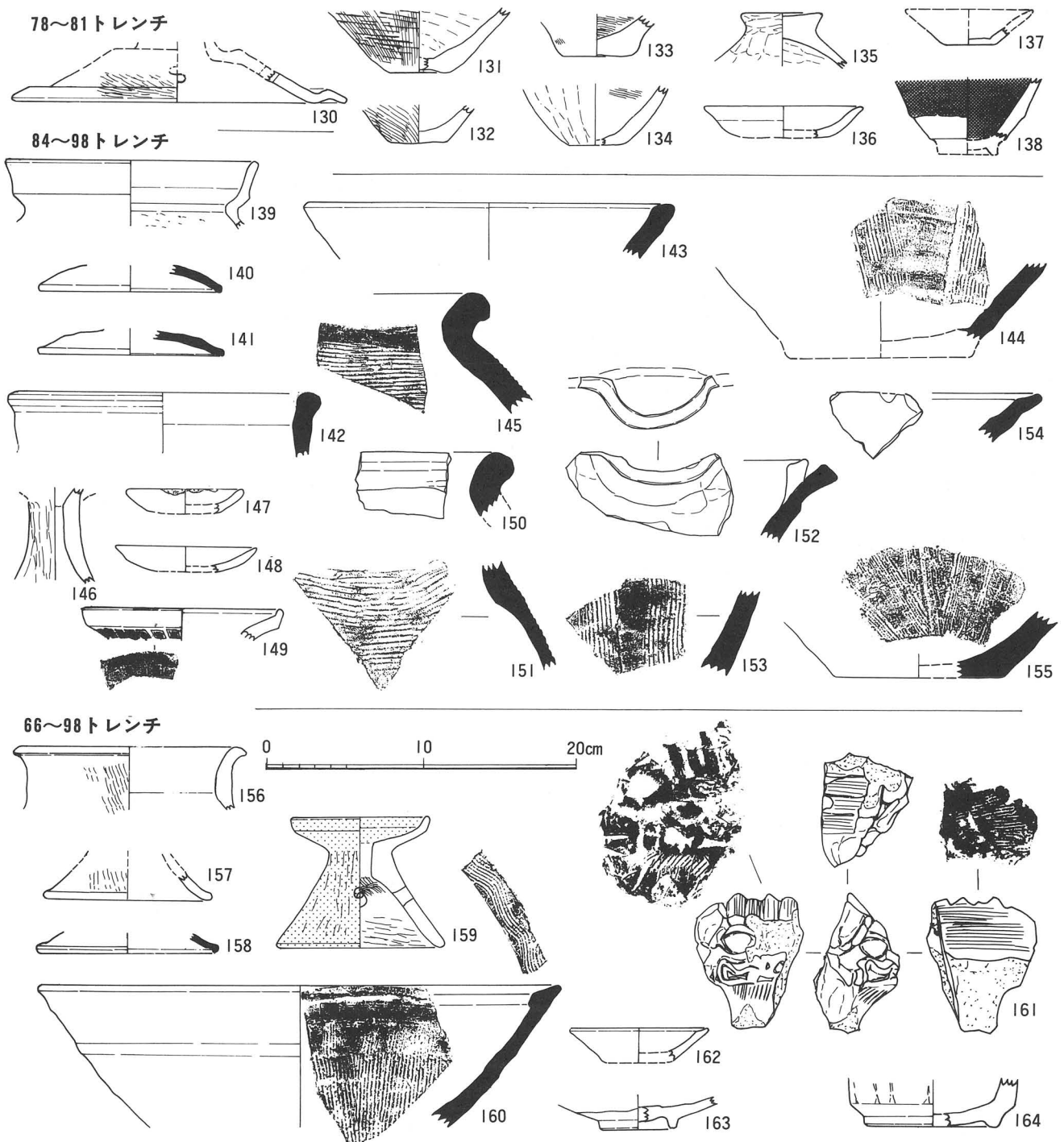
97～103は弥生時代末から古墳時代初めの土器で、97・98は壺の口縁部であり、98には赤彩を行なう。99・101は有段口縁部をもつ甕である。102・103は「く」の字状口縁をした甕で口唇部を肥厚させ、103は口縁部を上方に引き出したものであり、100は赤彩した高杯脚部である。

104は8世紀頃の須恵器の杯、105は15世紀頃の土師質土器で口縁部内外面に煤状炭化物が付いており灯明皿として用いられている。106・109は珠洲の片口鉢であり、106の口縁部は14世紀に属する珠洲IV期〔吉岡1989〕頃にあたる。107は糸切り痕を留めた越中瀬戸の皿で18世紀以降に属し、110は古銭の寛永通宝である。

⑦ 78～81トレンチ (第5・6図111～138)

111～135はいずれも弥生時代末頃の土器で、111・112・115～118は口縁部から頸部が長く伸びた壺であり、113は長頸壺の球形をなした体部である。111・118は頸部から口縁部にかけて少し外傾し開き、112・116は少し外反しながら開いており、115は有段口縁となり、116は幅広い口唇部に浅い擬凹線を二条引き、117は幅広い口唇部を無文としており、口縁部の形態にいろいろと変化をもたせている。114は赤彩した台付き細頸壺の体部で、隆帯上に擬凹線を引く。119は有段口縁の壺、120～122は有段口縁に数条の擬凹線を巡らした甕であり、123～127は内外面にヨコナデを施した無文の有段口縁の甕であり、口縁部の幅が広いものや狭いものもみられる。128は「く」の字口縁の甕で口唇部を面取りする。129は有段口縁の鉢であり、内外面をヘラミガキし口縁に擬凹線を三条引く。130は高杯の棒状有段の脚部であり、131・132は煤状炭化物が付いた甕の底部で、133・134は外面をヘラミガキした壺の底部である。135は大きなつまみをもつ蓋である。

136・137は土師質土器で、136は口縁の端部が外反し、137は底部に糸切り痕を留めた15世紀後半のものである。138



第6図 試掘調査(66~98トレンチ)の出土遺物, 161は1/3

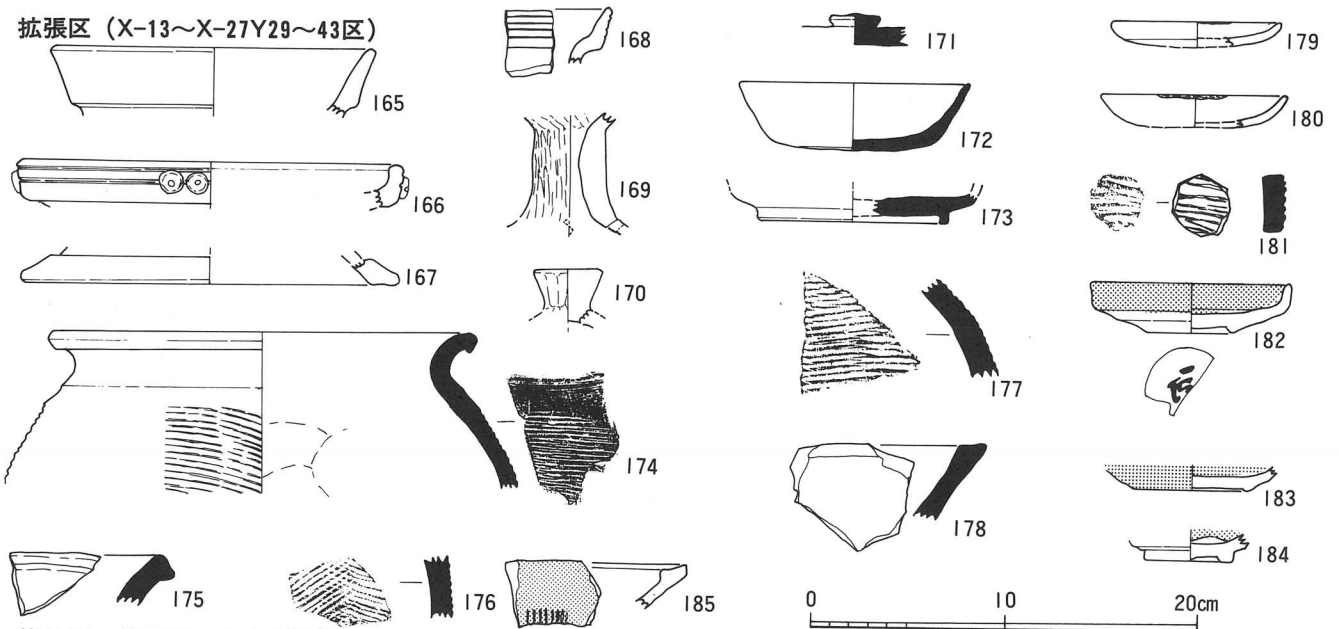
は天目茶碗である。

⑧ 84~98トレンチ (第6図139~155)

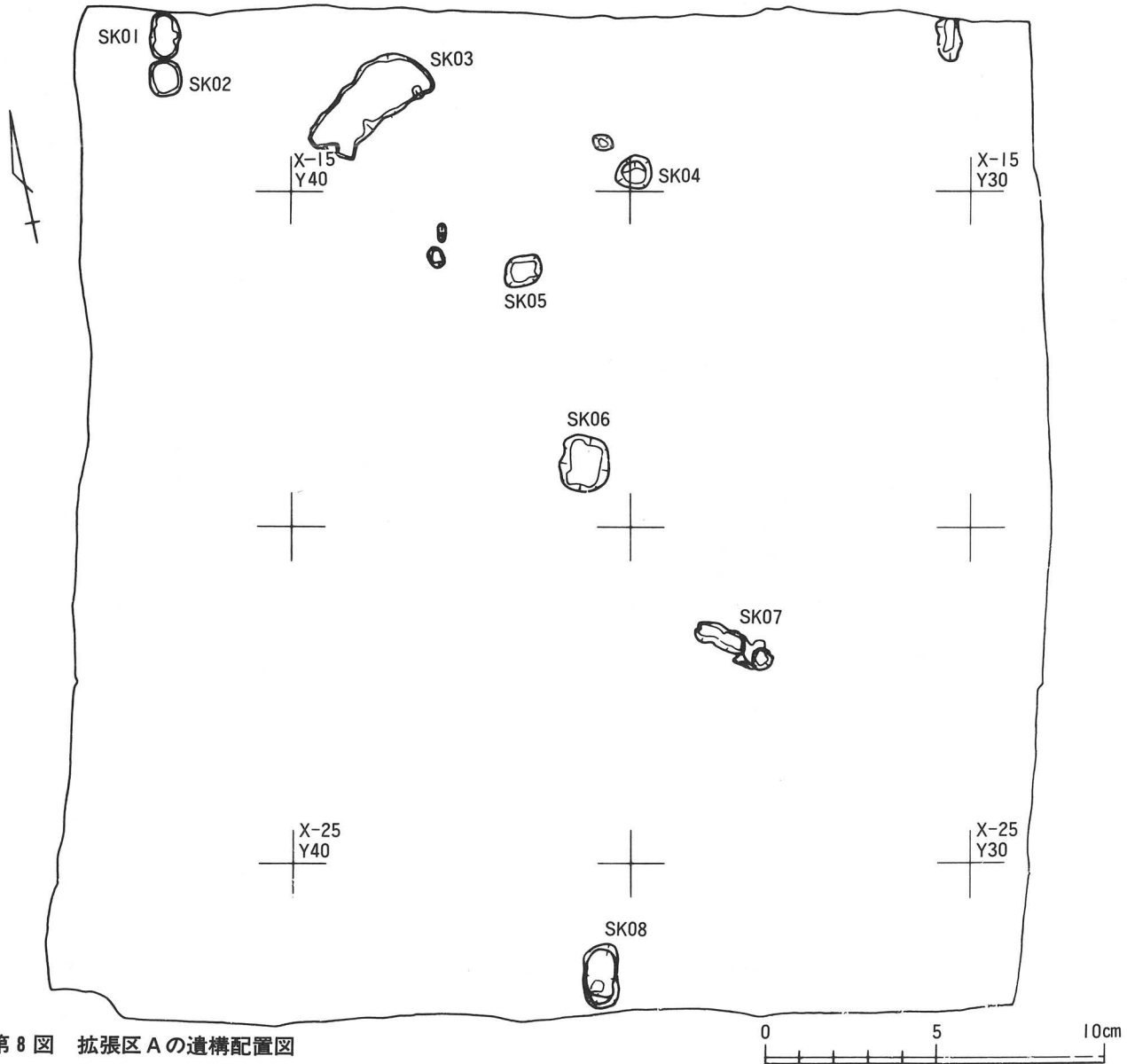
139は弥生時代末頃の有段口縁をもつ甕である。140・141は9世紀前半にあたる須恵器の杯蓋であり、口縁部の端部がわずかに内湾し丸く収まる。142~145、150~155は中世の珠洲であり、142は直立した壺の口縁端部が丸みをおびたもので、143・152は角張った口唇部をもつ片口鉢である。145・150は口縁部が短く丸みをもちながら外反した甕であり、これらの壺・片口鉢・甕は13世紀後半から14世紀にかけての珠洲III・IV期にあたる。154は口縁部が先細り外反した片口鉢で、15世紀後半の珠洲VI期に含まれよう。144・153・155は内面におろし目を引いたもので、155には細かなおろし目を間隔をあけずに施している。

また、147・148は土師質土器で、147は灯明皿として用いた15世紀頃のものであり、148は口縁端部が細く15世紀後

拡張区 (X-13~X-27Y29~43区)



第7図 拡張区Aの出土遺物



第8図 拡張区Aの遺構配置図



半から16世紀のものである。149は内外面をヘラミガキした暗茶褐色の瓦質土器で口縁部を有段とし、屈曲部に四角く巻き込むスタンプを押捺する。全体の器形ははっきりしないが、燈火器の口縁部であろうか。

#### ⑨ 66～98トレンチ (第6図156～164)

トレンチの上げ土から採取したものである。156・157は弥生時代から古墳時代初期にかけての土器で、156は甕の口縁部、157は高杯または器台の脚部にあたる。158は8世紀末から9世紀前半にかけての須恵器杯蓋である。159は78トレンチから出土した器台であり月影Ⅱ式にあたる。器台は小さな皿状の受け部に円錐状に開く脚部がつき、脚部には穴を穿ち外面をヘラミガキしたもので、外面及び受け部の内面を赤彩している。160は15世紀前半に属する珠洲Ⅴ期の片口鉢であり、幅広くした口唇部には櫛状具による波状文を施し、内面に10本程を一単位とする櫛状具によるおろし目を引いている。

161は表面の色調が淡黄橙色をなし、内芯の色調が黒褐色をした焼成が良好な獣面頭部を象った土製品の破片である。胎土には1mm以下の細かい砂粒が若干含む。獣面部は全体の約1/2弱が残り、大きく開いた目や大きく横長に閉じ合わさった口元などが立体的に表現されている。頭部毛髪は半裁竹管状のもので隆体を前方に平行して押し引いて表し、顎下には細く短い縦方向の沈線を引き毛髪が示されている。裏面にはハケ目を残した接合面がみられ、他の個体からの剝離痕を示している。類例は近世の瓶掛にみられる体部の下端からのびる脚部上端に付けられた獣面状の飾りに似た大きさである。

162は土師質土器で、口縁部内面の先端をつまんだもので15～16世紀にあたり、163は18世紀以降の伊万里の皿で、内底面を蛇の目釉ハギし乳灰色の釉をかける。164は伊万里で内面及び高台畳付を無釉としたものである。

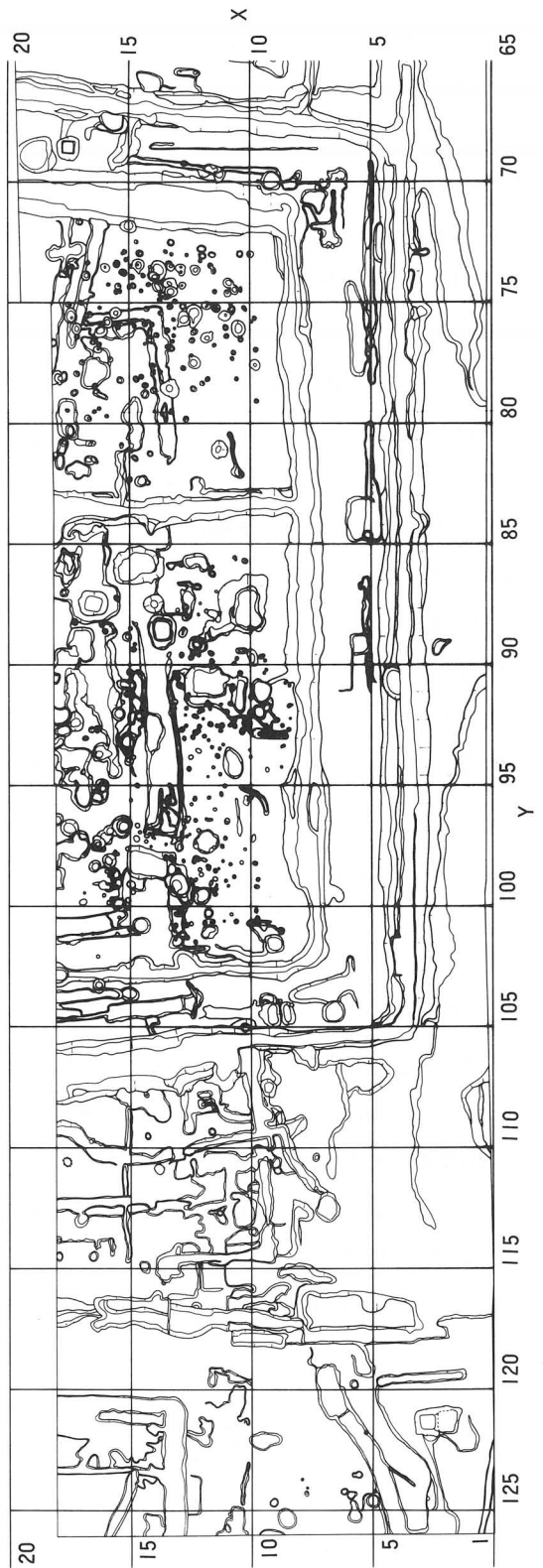
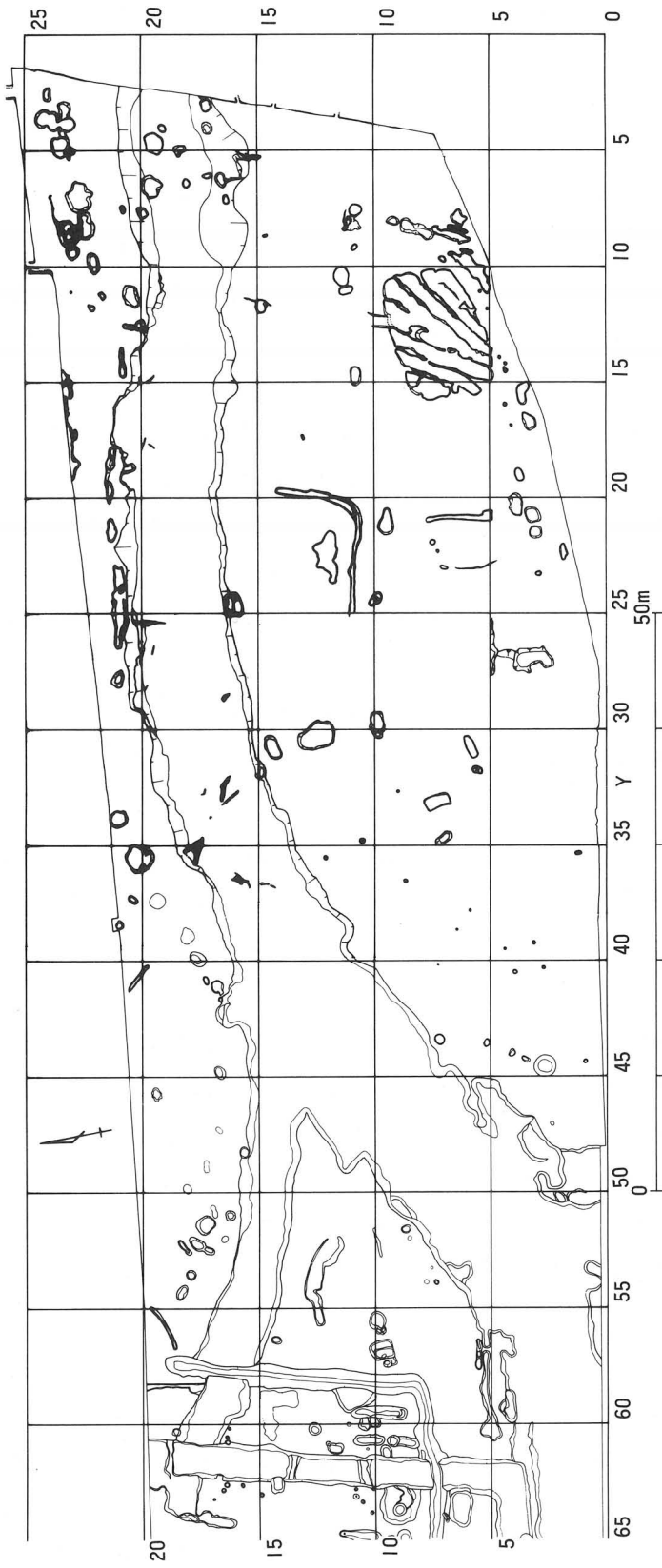
#### ⑩ 拡張区出土遺物 (第7図165～185)

拡張区から出土した遺物量は少なくいずれも小さな破片である。165～170は弥生時代末頃の土器であり、165・168は有段口縁をもつ甕である。168には櫛状具による擬凹線文を引いている。166は有段口縁をもつ壺であり、二個一對の円形浮文を張り付けている。167は高杯の脚部端部であり、169は棒状をした高杯の脚部にあたり、170は壺蓋のつまみ部分である。

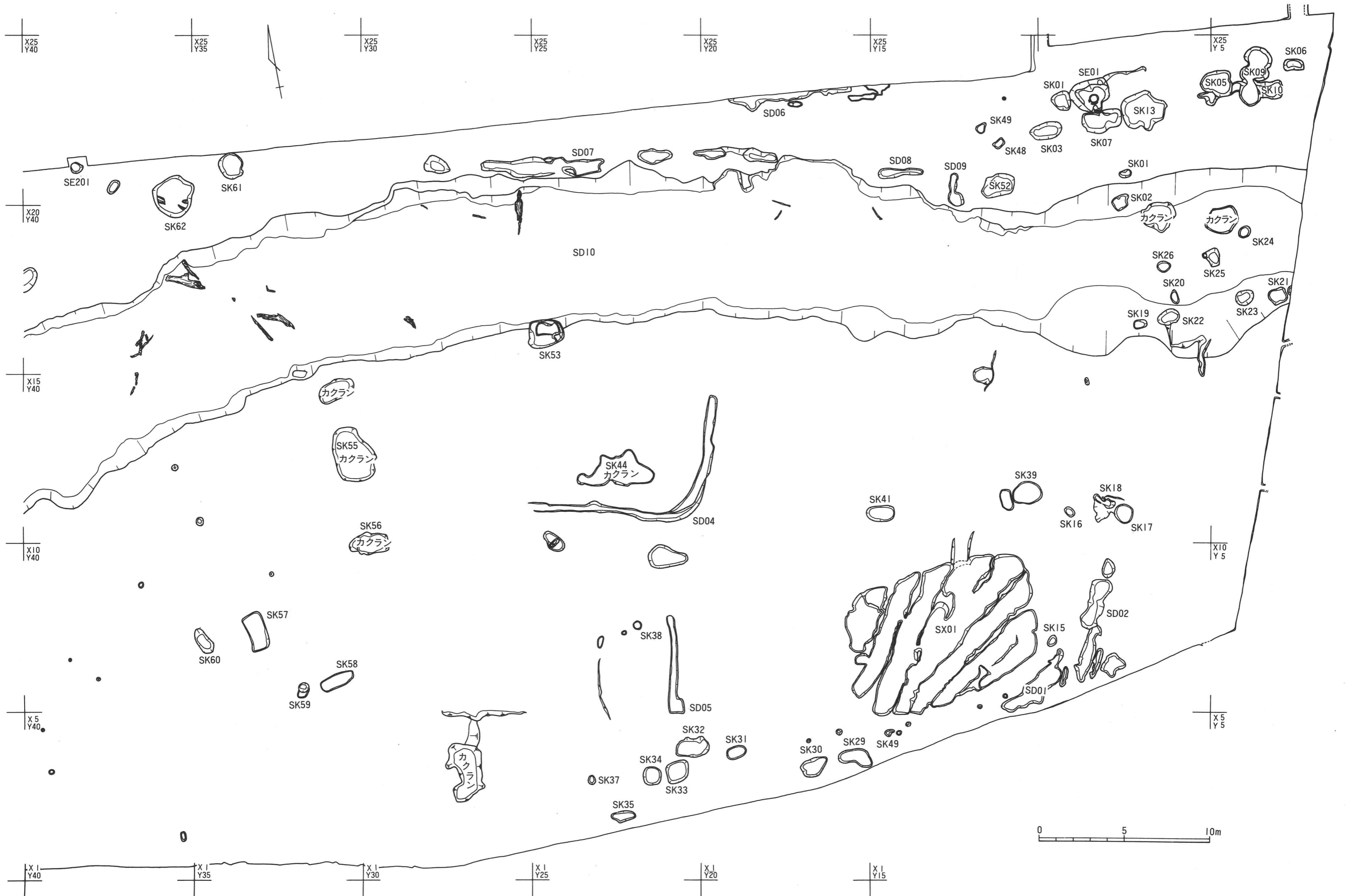
171～173は8世紀末から9世紀初めにかけての須恵器であり、172は杯蓋のつまみ、172は無高台の杯で、173は幅が狭く低い高台を付けた杯である。174～178・181は珠洲であり、174は15世紀の甕口縁部であり、176・177・181は甕の体部片で176は矢羽根状のタタキ目を付け、181は円盤状に丸く欠けている。175は壺の口縁部、178は14世紀頃の片口鉢である。179・180は15世紀頃の土師質土器であり、灯明皿として用いている。183は美濃瀬戸の灰釉の皿である。182は17世紀の越中瀬戸の皿で、黄褐色をした灰釉をかけ底部側をヘラケズリし、外底面に墨書による文字が記されている。184・185は18世紀以降に属する越中瀬戸の灰釉皿と鉄釉の摺鉢である。 (上野)

#### 5 本調査の遺構 (Y2～40区：拡張区A)

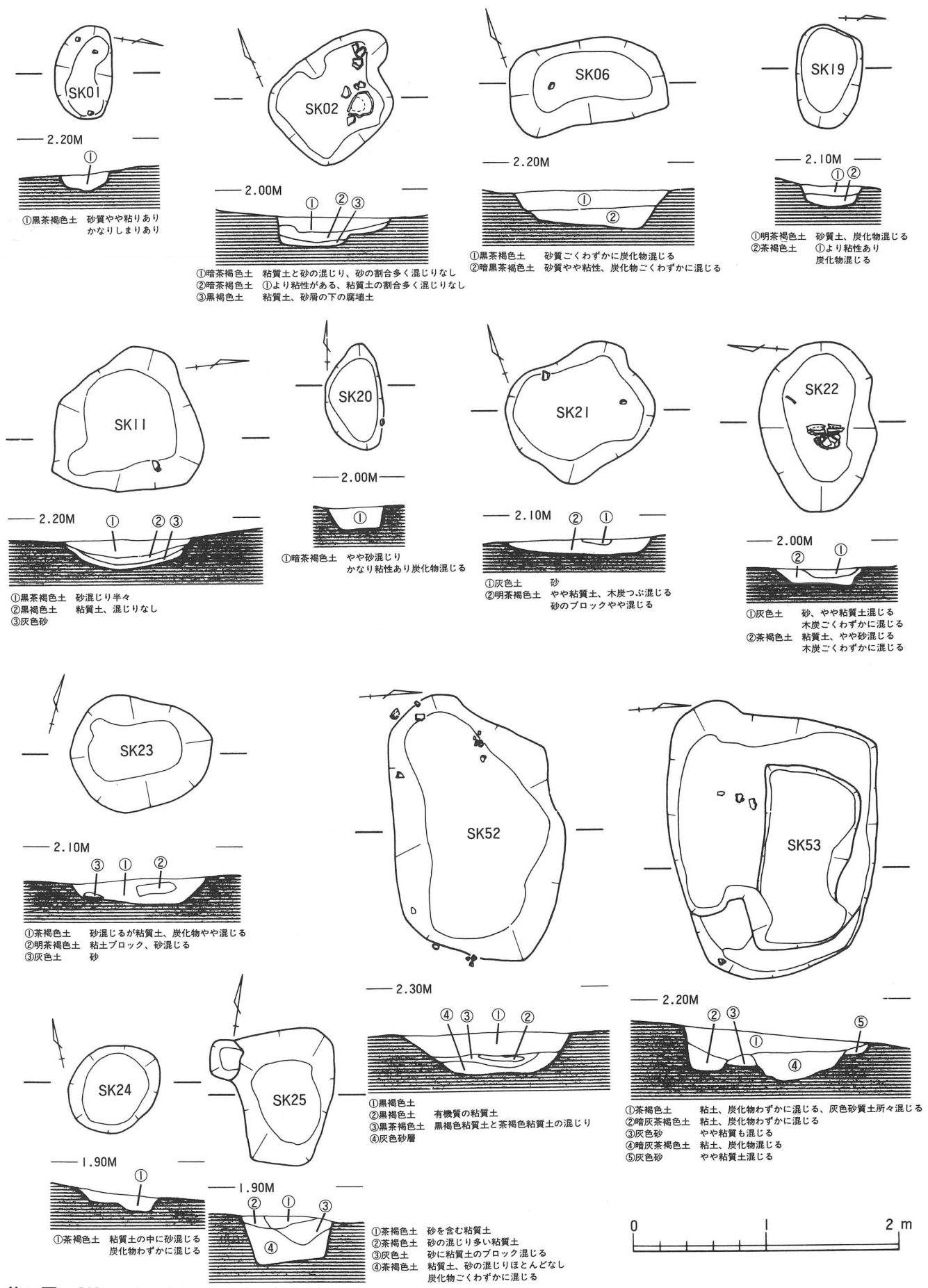
今回の調査で確認した遺構は、土坑46、溝9、井戸2、不明遺構1、小ピットなどである。この内、弥生時代末から古墳時代初期の遺構は、SK01・02・06・07・11・21・22・52・53・61・62と拡張区AのSK01・03の土坑13個、SD07・10の2本、SE01・201の井戸2基と十数個の小ピットがあげられる。他の多くの遺構は伴出遺物が少なく時期は明らかでないが覆土の状況に共通点がみられる。SK19・20・23～25・拡張区AのSK02の土坑及び小ピットでは明茶褐色や茶褐色の粘質土が堆積しており、この覆土の入ったSK02・22・61の土坑に弥生土器の甕の破片が底面近くから出土していることから古い時期に掘り込まれたと考えられる。またSD01の溝は、覆土に黒褐色砂質土が入っており、越中瀬戸の皿1点が出土している。この黒褐色砂質土に類似する覆土が入った遺構には、SK03・05・09・10・15～17・29～35・39・41・48・49・57～60と拡張区AのSK04～08の土坑、SD02・04～06・08・09の溝があり、近世以降に属する可能性が考えられる。 (稲垣)



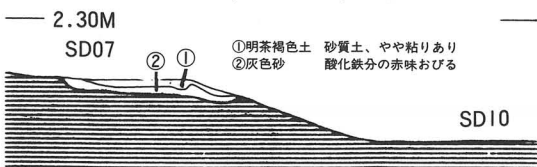
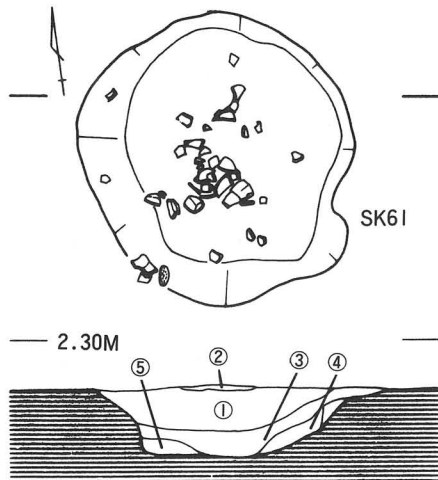
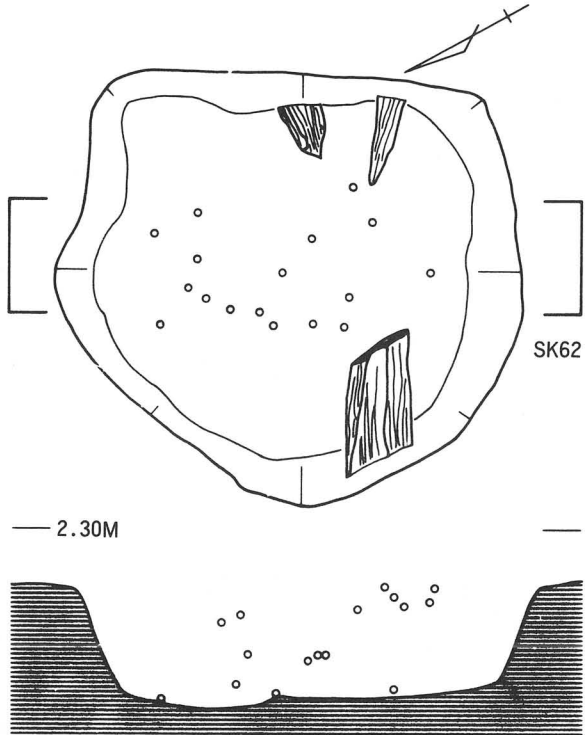
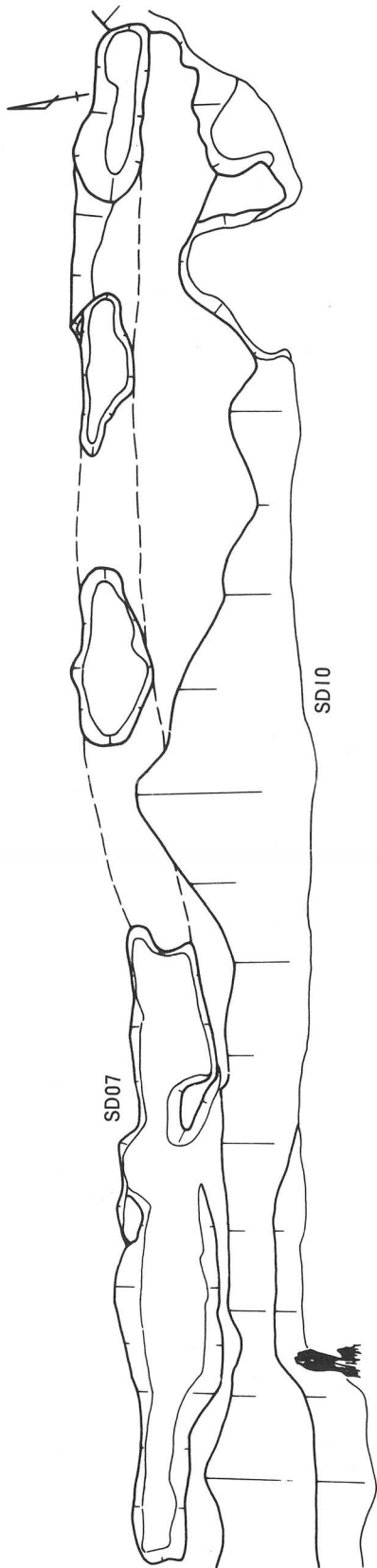
第9図 本調査発掘区区割図



第10図 X1~26Y2~40区遺構配置図



第11図 SK01・02・06・11・19~25・52・53



- ①明茶褐色土 砂質土、やや粘りあり
- ②灰色砂 酸化鉄分の赤味おびる

- ①明茶褐色土 粘質土、木炭混じる、砂質土わずかに混じる
- ②黒褐色土 ①の土との混じり
- ③灰色砂質土 やや粘質おびる
- ④青灰色砂 まじりなし
- ⑤灰色砂質土 やや粘質おびる、粘土わずかに混じる



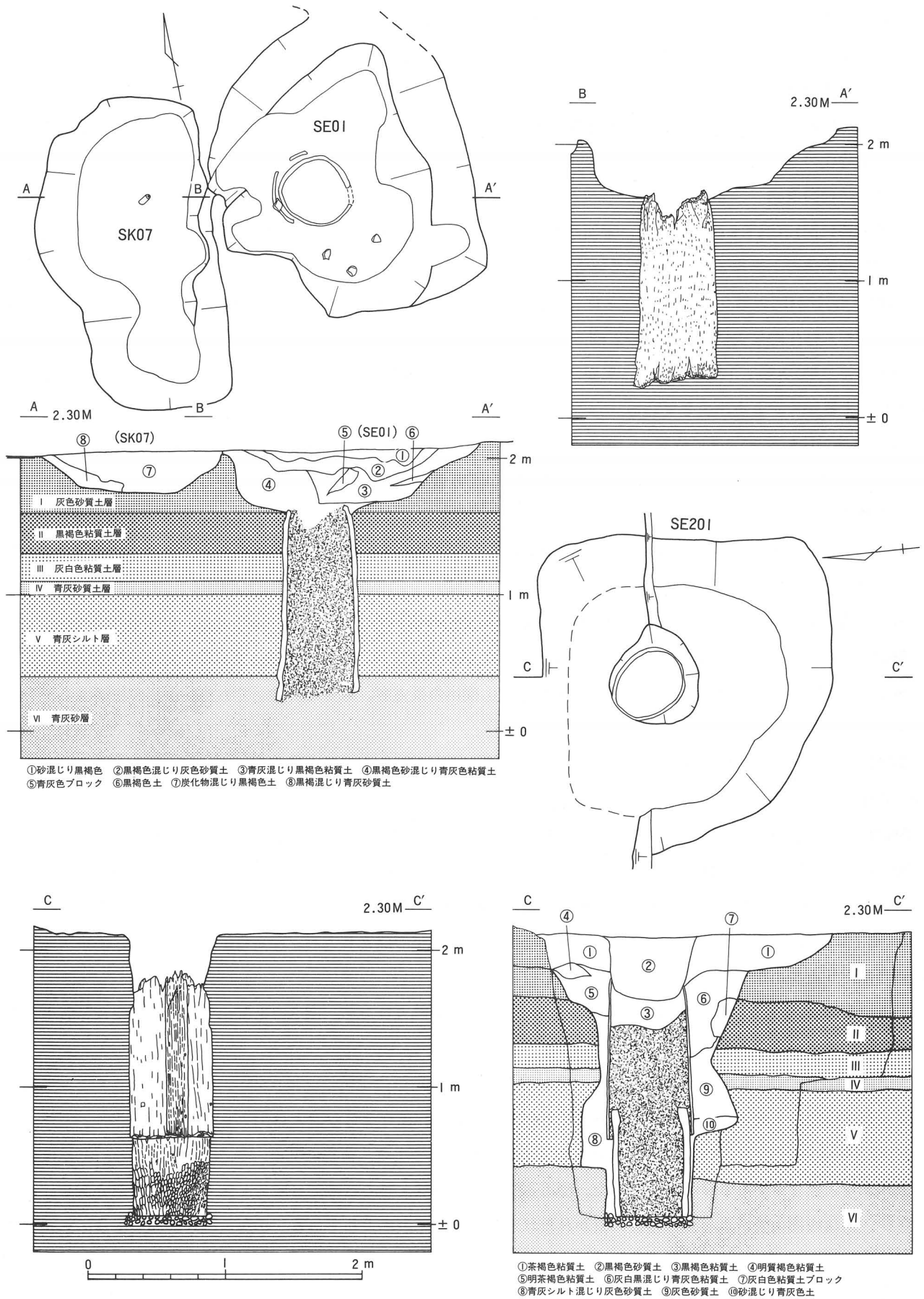
(SD07 平面図 スケール)

第12図 SD07, SK61・62

第13図 SD10 (Y2~35区付近)







第14図 SE01・201, SK07



弥生時代末から古墳時代初期にかけての遺構の分布は、SD10の溝付近で多く検出でき、特に溝の北側（X20以北）ではまとまりがみられ、集落の存在を窺わせる井戸2基も北側で検出されている。また土器も南側に比べかなり多くまとまって地山直上から出土している。

近世以降に属する遺構の分布は発掘区全体に点在しているがY1～20Y8～25区で少しまとまって検出している。以下弥生時代の遺構から説明する。

#### (1) 弥生時代の遺構

**SK01**（第11図）X21Y8区に位置し、平面が0.70m×0.40mの楕円形。深さは0.14mである。土坑の底面から弥生時代後期の甕体部の土器片3点が出土している。

**SK02**（第11図・図版第5の10）X20Y8区に位置し、平面が1.00m×0.80mの隅丸長方形。深さは0.23mである。土坑の底面から弥生時代後期に属する壺1個体分の土器片が出土している。

**SK06**（第11図）X24Y3区に位置し、平面が1.20m×0.60mの楕円形。深さは0.30mである。暗黒茶褐色粘質土から壺・甕の土器細片が8点出土している。

**SK07**（第14図）X23Y9区に位置し、平面が2.30m×1.30mの隅丸長方形。深さは0.28mである。黒褐色粘質土から高杯脚部を含め土器細片5点が出土している。SE01とは切り合い関係はなく覆土の様子から井戸と同時期に掘り込まれたと考えられる。

**SK11**（第11図）X25Y10区に位置し、平面が1.20m×1.00mの楕円形。深さは0.22mである。黒褐色粘質土から土器1点が出土している。

**SK19**（第11図）X17Y8区に位置し、平面が0.75m×0.50mの楕円形。深さは0.17mである。出土遺物はない。

**SK20**（第11図）X18Y7区に位置し、平面が0.80m×0.34mの楕円形。深さは0.19mである。出土遺物はない。

**SK21**（第11図）X18Y4区に位置し、平面が1.08m×0.86mの長方形。深さは0.13mである。土坑の底面から甕の細片1点が出土している。

**SK22**（第11図・図版第6の1・2）X17Y7区に位置し、平面が1.30m×0.90mの楕円形。深さは0.22mである。穴の底面から弥生時代後期に属する甕1個体分の土器が出土している。

**SK23**（第11図）X18Y5区に位置し、平面が1.08m×0.90mの楕円形。深さは0.21mである。出土遺物はない。

**SK24**（第11図）X20Y3区に位置し、平面が0.78m×0.62mの楕円形。深さは0.13mである。出土遺物はない。

**SK25**（第11図）X19Y5区に位置し、平面が1.02m×0.74mの隅丸長方形。深さは0.30mである。出土遺物はない。

**SK52**（第11図）X21Y11・12区に位置し、平面が2.10m×0.30mの隅丸長方形。深さは0.35mである。黒茶褐色土から甕の細片6点が出土している。

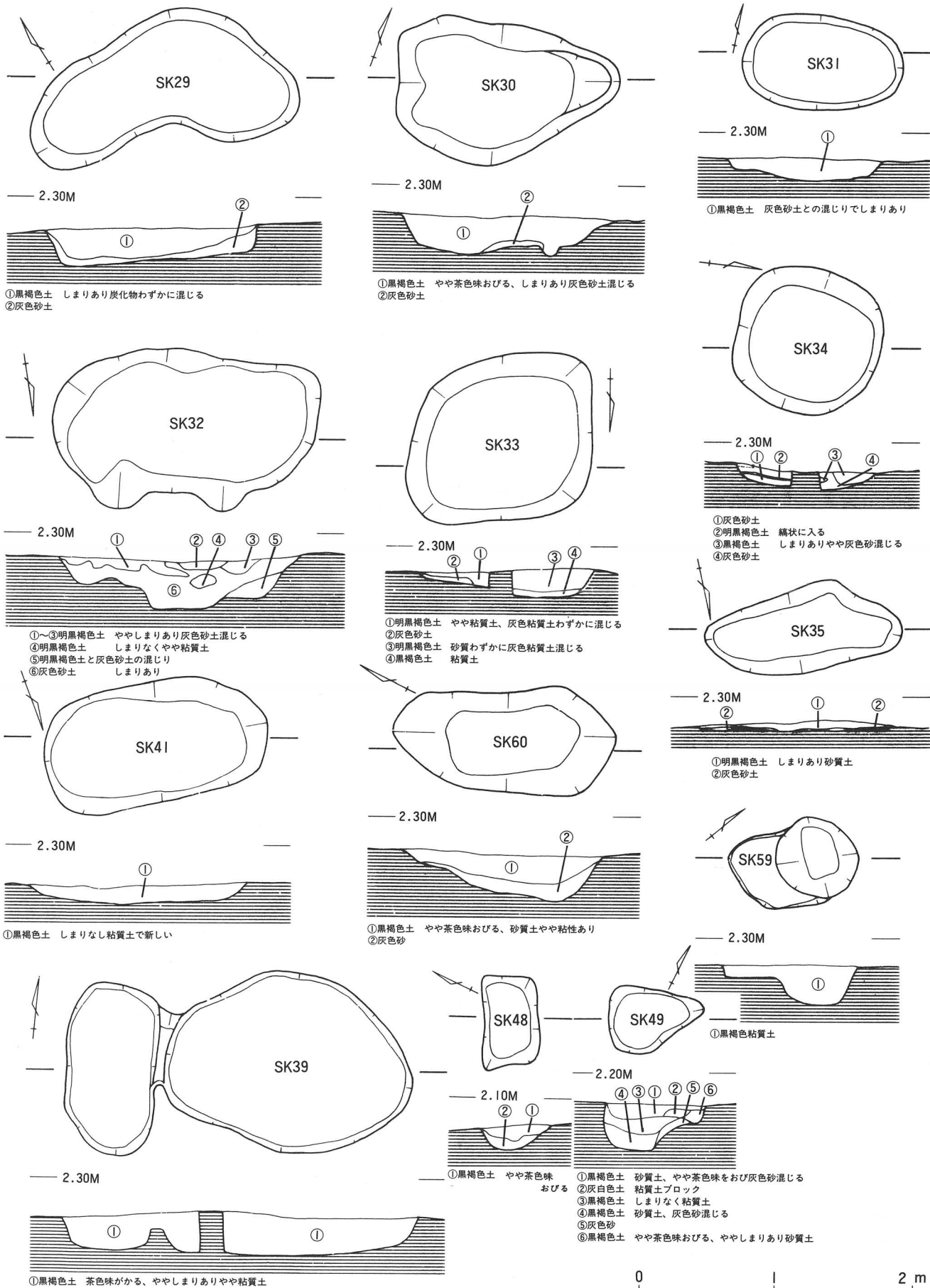
**SK53**（第11図）X25Y17区に位置し、平面が2.00m×1.60mの隅丸長方形。深さは0.36mである。茶褐色粘質土からの甕の細片4点が出土している。

**SK61**（第12図・図版第6の4）X22Y34区付近に位置したほぼ円形の土坑。直径1.50m、深さ0.30mである。黒褐色粘質土及び砂層から壺・甕の口縁部・内外面を赤彩した高杯の杯部片などが数十点出土している。

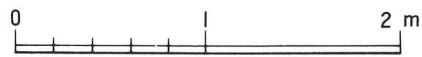
**SK62**（第12図・図版第6の3）X20Y36区に位置したほぼ円形の土坑。直径2.30m、深さ0.63mである。土器は覆土の上面から底面までかなり多く入っていた。出土遺物は壺の体部・甕の口縁部と底部・鉢・高杯の脚部である。とくに壺が、土坑底面の青灰砂層上に垂直に置かれた状態で完形で1点出土している。また土坑の底面には自然木が堆積していた。

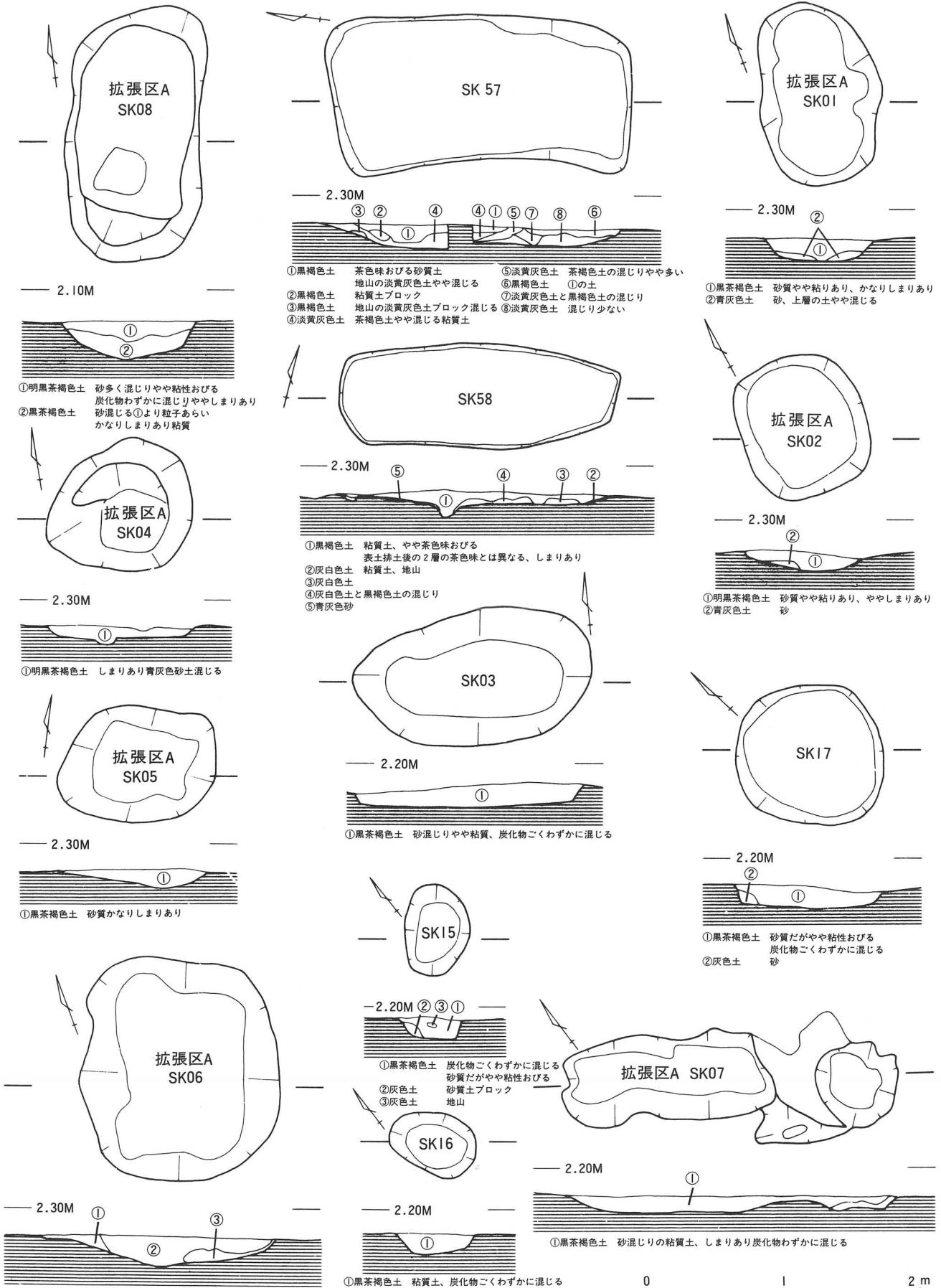
**SD07**（第12図）X22Y18～27区に位置した溝で、長さ18m、深さ0.08mを測る。SD10に平行し東西にはしる。

覆土は、砂混じりの明茶褐色粘質土で土器細片が15点出土している。



第15図 SK29～35・39・41・48・49・59・60

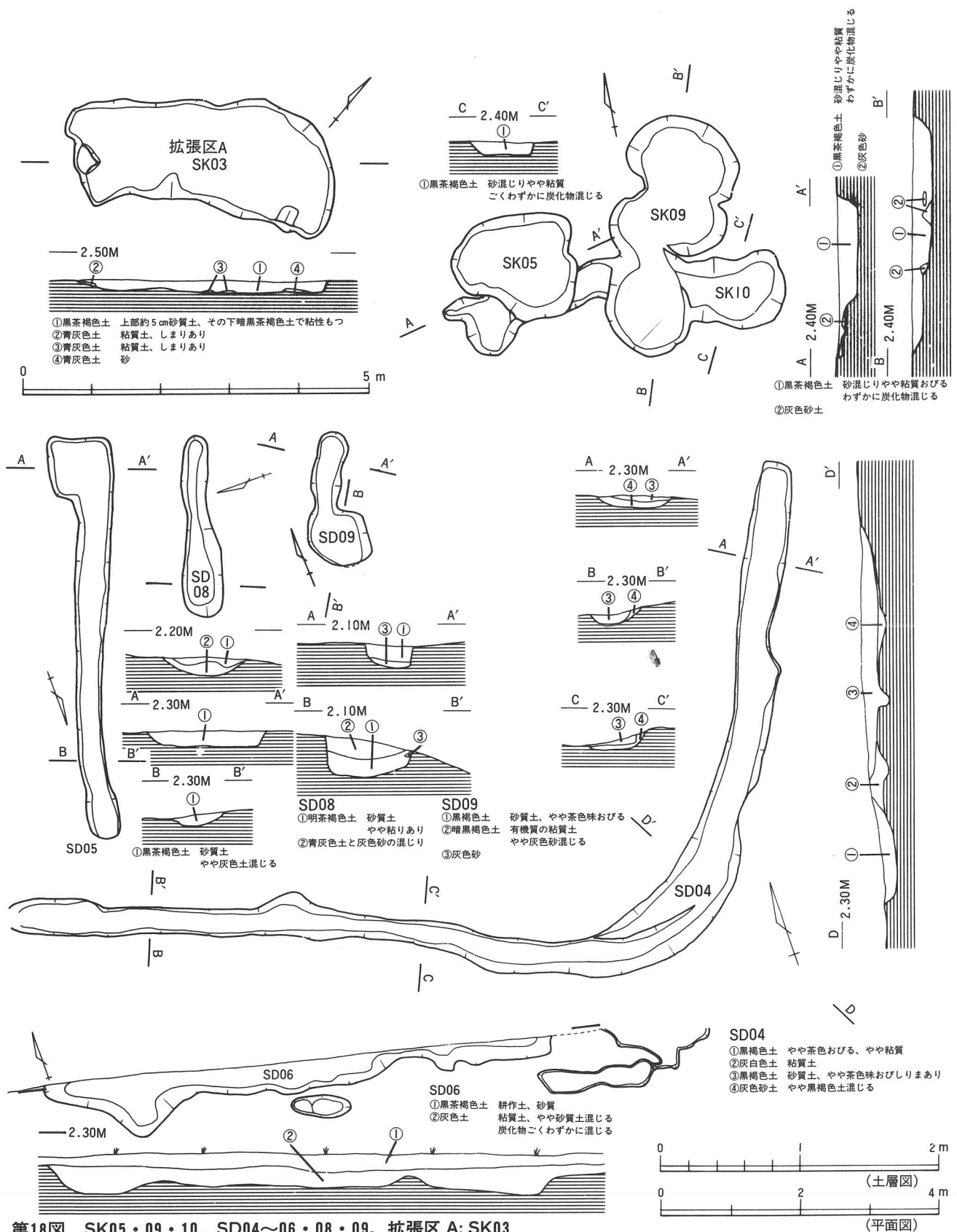




第16図 SK03・15~17・57・58, 拡張区A: SK01・02・04~08



第17図 SX01, SD01・02



第18図 SK05・09・10, SD04~06・08・09, 拡張区A: SK03

SD10 (第13図・図版第4) X1~21Y2~79区に位置した東西方向にはゆるやかな蛇行した溝で幅10m、長さ155mまで確認している。遺構確認面からの深さはほぼ一定で0.30~0.40mを測る。流水方向は調査時点では溝底面に僅かな起伏があり確認できなかったが周辺の地形から東に位置している鍛冶川方向へ流れると考えられる。覆土は、基本的には上層からの①層黒褐色土②層茶褐色粘質土③層灰色砂④層目の荒い青灰色砂に大きく四分される。土器は②層に

最も多くY35以東は溝全体にわたって細片が出土し、X5～8 Y46～48区、X6～9 Y51～56区、X2～3 Y64～67区の溝淵辺部にややまとまって出土している。③層では減少する。また③④層から流木や炭化した胡桃が出土している。縄文時代晩期後半の土器は、Y2～40区の④層と直下の黒褐色腐植土層の境から約100点余り出土している。

**SE01** (第14図・図版第5の7～9) X23Y9区に位置し、井戸枠に1本の原木の中を刳り貫いたものを用いた井戸。井戸枠上面まで掘り込まれた土坑は、楕円形で長径2.20m、短径1.90m、遺構確認面から現存する井戸枠の上端までの深さ0.46mを測る。掘り方の中央からやや西よりに上径0.50m、底径0.60m、長さ1.34～1.43mの一本を刳り貫いた井戸枠を納めている。長さは上端が腐植して本来の長さが不明であるが、土坑の上面まで井戸枠が立ち上がっていたものと仮定すれば、更に0.30～0.45mほど加算されよう。遺物は土坑からと井戸底から出土したものがある。土坑の覆土からは壺・甕・高杯が出土しており、井戸底から完形の壺や小型土器・甕と板材が数点ずつ出土している。

**SE201** (第14図・図版第6の5～7) X22Y39区に位置する井戸。井戸枠は、上段井戸側に大径木を四分割しその内側を刳り貫いた部材を用い、下段には一木から刳り貫いた桶を転用したものを利用している。上段井戸側の上径0.54m、下段の井戸側の底径0.41mを測り、遺構確認面から井戸の底までの深さは、2.04mである。下段の桶転用の井戸側は、青灰砂層に拳大の川原石を厚さ20cmほど敷きつめた上に設置している。また井戸側を納めるための掘り方はⅢ層の灰白色粘質土層まで確認でき円筒形の直径よりも8～16cmほど広く掘り込まれている。Ⅳ～Ⅵ層までは砂層・シルト層では湧水があり崩落し掘り方ははっきりしない。上段と下段接合方法は、下段の桶の上端から約23cm下がった位置から四分割した上段の部材を桶の外側に円筒状に組み合わせ、上段の部材が下にずり落ちないように柄孔(図版第47の1)を刳り柄を差し込み、桶上端で止まるよう工夫されている。また円筒形に組合わせた部材の隙間から砂が入らないように四箇所を外側から板材が取り付けられている。この内2枚の板材は、上段の部材と柄差し(図版第47の2)の方法で接合され、残りの2枚の板材は、木釘を用いて接合されていた痕跡が確認できている。遺物は、掘り方の覆土、井戸内上層と底面から出土したものがある。掘り方からは、甕・高杯・台付き鉢・蓋の破片、井戸内上層では壺の体部・底部、甕の口縁部、底部から完形の壺2点と甕・壺の口縁部・体部・底部の破片と板材十数点が出土している。

**拡張区 A : SK01** (第16図) X-14Y42区に位置し、平面が1.36m×0.92mの楕円形。深さは0.21mである。黒茶褐色粘質土の覆土から弥生土器の細片3点が出土している。

**拡張区 A : SK02** (第16図) X-14Y42区に位置し、平面が1.04m×0.92mの隅丸長方形。深さは0.16mである。覆土は明黒茶褐色粘質土で、出土物はない。

**拡張区 A : SK03** (第18図) X-14・15Y39・40区に位置し、平面が3.72m×1.48mの長方形。深さは0.13mである。遺物は、黒褐色粘質土の覆土から弥生土器3点が出土している。

## (2) 近世以降の遺構

**SK03** (第16図) X22・23Y10区に位置し、平面が0.76m×1.00mの楕円形。深さは0.14mである。出土遺物はない。

**SK05** (第18図) X24Y5区に位置し、平面が0.86m×0.76mの楕円形。深さは0.14mである。出土遺物はない。

**SK09** (第18図) X25Y4区に位置した瓢箪形の土坑。長径0.86m、短径0.76m、深さ0.14mである。出土遺物はない。

**SK10** (第18図) X24Y4区に位置し、平面が0.70m×0.50mの長方形。深さは0.21mである。出土遺物はない。

**SK15** (第16図) X8 Y10区に位置し、平面が0.68m×0.48mの楕円形。深さは0.15mである。出土遺物はない。

**SK16** (第16図) X11Y15区に位置し、平面が0.64m×0.45mの楕円形。深さは0.12mである。出土遺物はない。

**SK17** (第16図) X11Y8区に位置した円形の土坑。直径1.08m、深さ0.17mである。出土遺物はない。

**SK29** (第15図) X4 Y16区に位置し、平面が2.00m×1.00mの楕円形。深さは0.24mである。出土遺物はない。

**SK30** (第15図) X4 Y17区に位置し、平面が1.63m×1.06mの楕円形。深さは0.30mである。出土遺物はない。

SK31 (第15図) X 4 Y29・20区に位置し、平面が1.18m×0.84mの楕円形。深さは0.18mである。出土遺物はない。

SK32 (第15図) X 4・5 Y20・21区に位置し、平面が1.94m×1.08mの隅丸長方形。深さは0.34mである。明黒褐色砂質土の覆土から流れ込みと思われる弥生土器の細片1点が出土している。

SK33 (第15図) X 3・4 Y22区に位置し、平面が1.35m×1.22mの隅丸長方形。深さは0.21mである。出土遺物はない。

SK34 (第15図) X 4 Y22区に位置した隅丸方形の土坑。一辺1.07m、深さ0.21mである。出土遺物はない。

SK35 (第15図) X 2 Y23区に位置し、平面が1.44m×0.63mの楕円形。深さは0.20mである。出土遺物はない。

SK39 (第15図) X 7 Y11区に位置した瓢箪形の土坑。長軸2.54m、短軸1.34m、深さ0.30mである。黒褐色砂質土の覆土から流れ込みと思われる弥生土器細片が2点出土している。

SK41 (第15図) X11Y15区に位置し、平面が1.67m×0.90mの楕円形。深さは0.14mである。黒褐色粘質土の覆土から流れ込みと思われる弥生土器細片が2点出土している。

SK48 (第15図) X22Y12区に位置した長方形のピット状土坑。長辺2.54m、短辺1.34m、深さ0.30mである遺物は、黒褐色砂質土の覆土から流れ込みと思われる弥生土器の細片が2点出土している。

SK49 (第15図) X15Y 5 区に位置した楕円形のピット状土坑。長径0.70m、短径0.52m、深さ0.30mである遺物は、黒褐色砂質土の覆土から流れ込みと思われる弥生土器の細片が2点出土している。

SK57 (第16図) X 8 Y33・34区に位置し、平面が2.20m×1.17mの長方形。深さは0.15mである。出土遺物はない。

SK58 (第16図) X 6・7 Y31区に位置し、平面が2.05m×0.78mの隅丸長方形。深さは0.13mである。出土遺物はない。

SK59 (第15図) X 6 Y32区に位置したピット状の土坑。直径0.60m、深さ0.30mである。出土遺物はない。

SK60 (第15図) X 6 Y32区に位置し、平面が1.63m×0.74m隅丸長方形。深さは0.34mである。遺物は黒褐色砂質土の覆土から弥生土器の細片1点と須恵器杯身1点が出土している。

拡張区 A : SK04 (第16図) X-15Y35区に位置し、平面が0.98m×1.14mの楕円形。深さは0.15m である出土遺物はない。

拡張区 A : SK05 (第16図) X-17Y36区に位置し、平面が1.08m×0.87mの隅丸長方形。深さは0.13mである。遺物は、黒茶褐色砂質土の覆土から流れ込みと思われる弥生土器の細片が1点出土している。

拡張区 A : SK06 (第16図) X-19・20Y36区に位置し、平面が1.60m×1.30mの隅丸長方形。深さは0.20mである。遺物は、黒茶褐色土の覆土から弥生土器の細片が6点と須恵器1点、近代の摺鉢片1点が出土している。

拡張区 A : SK07 (第16図) X-27Y36区に位置し、平面が2.60m×0.66mの隅丸長方形。深さは0.10m である遺物はない。

拡張区 A : SK08 (第16図) X-22Y34区に位置し、平面が1.94m×1.00m の楕円形。深さは0.24m である遺物は、遺構検出面直上から珠洲の摺鉢片1点が出土している。

SX01 (第17図) X 6 ~10Y10~16区に位置し、平面が11.20m×7.80m長方形をなし、土坑内が1.00~1.40mほどの幅で畝状に区切られている。深さは0.20m と浅く、底面は平坦である。遺物は、弥生時代から古墳時代の壺・甕などの細片30点、須恵器の杯身・蓋各1点、砥石片(粘板岩製) 1点、近世末から近代の陶磁器14点、現代の瓦片3点が出土している。

SD01 (第17図) X 6・7 Y10・11区に位置し、SX01の南側の辺に平行するように東西方向にはしる長さ4.80m、幅1.20m、深さ0.20mの溝。遺物は覆土の黒褐色砂質土から越中瀬戸の皿1点が出土している。

SD02 (第17図) X 4 Y7~10区に位置し、南北方向にはしる長さ7.48m、幅0.80m、深さ0.10~0.15mの溝。遺物は



覆土の黒褐色砂質土から摩滅した弥生土器の細片 3 点が出土している。

SD04 (第18図) X11~15Y20~25区に位置する L 字状の溝。南北方向7.20m、東西方向9.40m、幅0.30~0.88mを測る。深さは0.03~0.12m程と浅い。遺物は、覆土の黒褐色砂質土から摩滅した弥生土器の細片が 8 点出している。

SD05 (第18図) X 6 ~ 8 Y21区に位置し、南北方向にはしる長さ5.84m、幅0.48m、深さ0.04mの溝。出土遺物はない。

SD06 (第18図) X4Y15~19区に位置し、東西方向にはしる溝で長さ7.28mまでを確認している。深さは0.26mの溝。遺物は、黒褐色砂質土の覆土から弥生土器の細片 8 点、須恵器の杯身 1 点が出土している。

SD08 (第18図) X21Y14・15に位置し、東西方向にはしる長さ2.60m、幅0.28~0.60m、深さ0.08mの溝。出土遺物はない。

SD09 (第18図) X21Y23に位置し、南北方向にはしる長さ1.96m、幅0.44~0.84m、深さ0.03~0.06mの溝。遺物は、黒褐色砂質土の覆土から弥生土器の甕口縁部片 1 点が出土している。 (原田)

## 6 本調査の遺物 (Y 2 ~ 40区)

### (1) 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は Y 2 ~ 40区までのSD10を中心にして分布しており、溝の下層から縄文時代晩期後半に属する土器の破片約100点余りと石器10点程が出土している。土器の器種には壺・鉢・浅鉢・深鉢があって、この内口縁部や有文の破片は、図示したものが殆どすべてであり土器の全形を復元できるものはなかった。

#### 壺 (第19図186・187)

壺の形態には二種類がある。186は、色調が淡黄褐色をした口径26cmの大ききの壺であり、直立した口縁端部を面取りし少し肥厚させ、二条の沈線を引いている。器面調整は外面を入念に磨き、内面は横方向の細かい擦痕が残る。187は口径28cm程の大ききをもち少し外反する口縁部にそって幅広の隆帯をめぐらし、その上に縦長の沈線を連続して引いており、平滑に磨かれた器面を赤彩している。

#### 鉢 (第19図188~196・200・204~206)

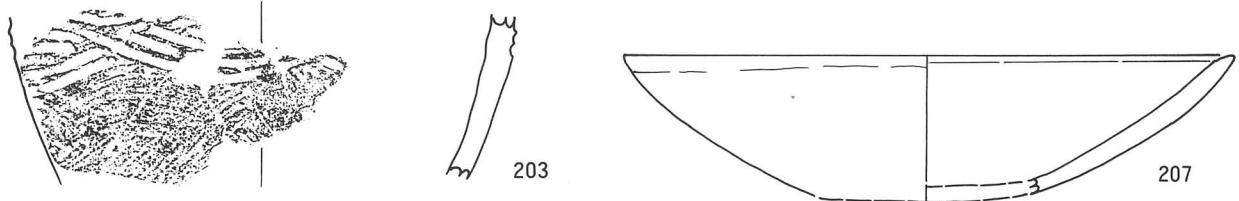
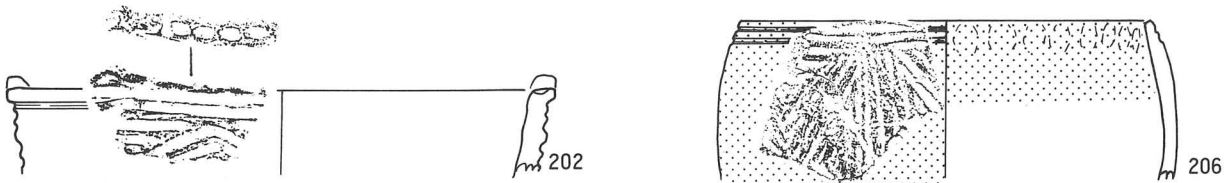
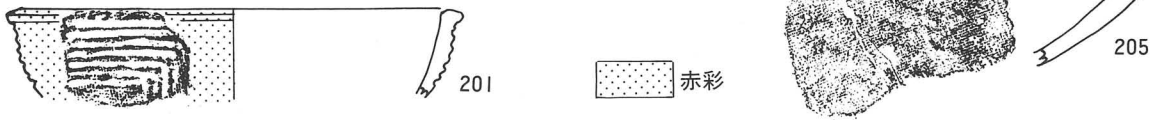
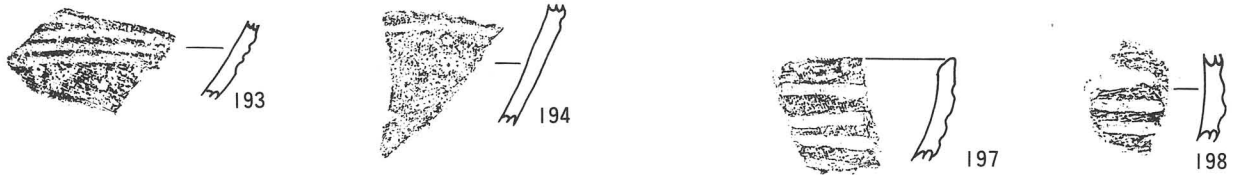
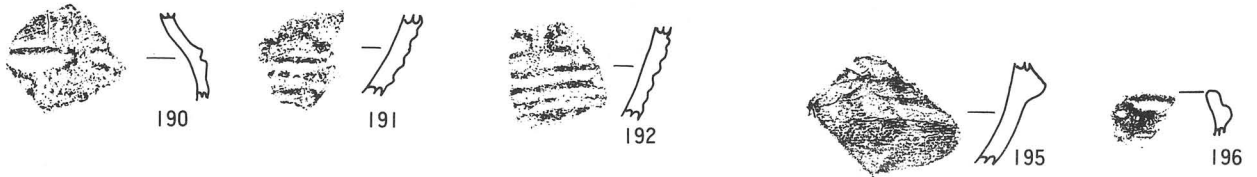
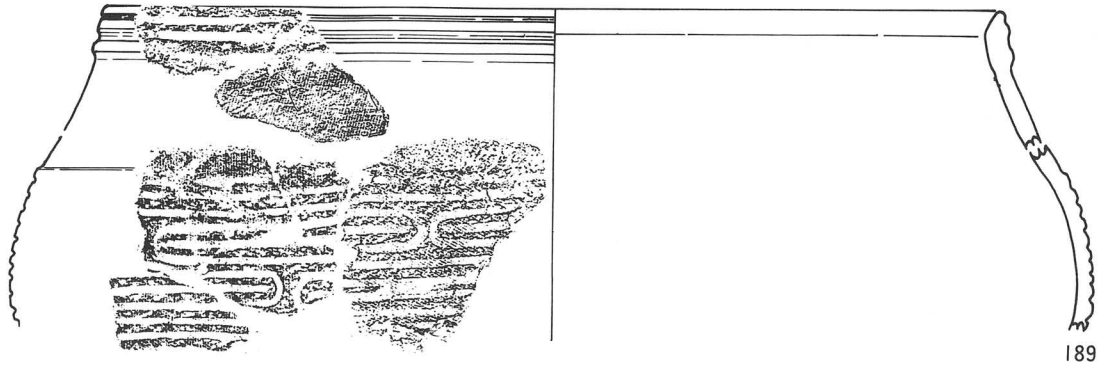
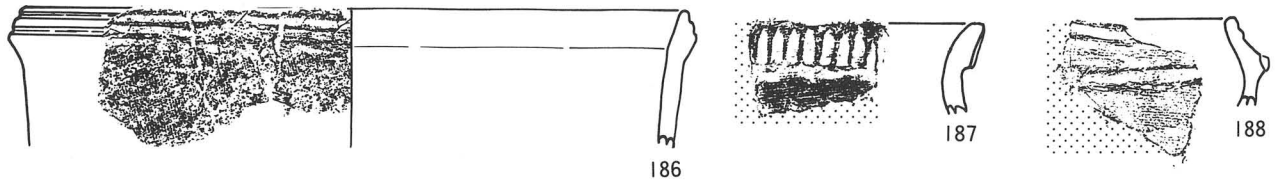
鉢の形態には189のように口縁部が小さくすぼまり、体部が丸く膨らみ底部にいたるものと、206のように体部が球形に膨らむ二種類がある。188は短く内湾する口縁部に沿って一条の隆線を配し、屈曲部には瘤状突起に二条の隆線を集約させている。内外面は入念に磨かれ、直径26cm程の屈曲部から下には煤状炭化物が内外面に付着する。この他瘤状の突起は195・196の淡褐色の器面を磨いた土器にもみられる。196は口縁部文様帯に、195は体部文様帯の下部に用いそれぞれの隆線を集約している。なお195は外面に赤彩した痕跡がわずかに観察できる。

189は口径30cm程の大ききの土器で、胎土に 1 mm程の細かい砂粒を多く含み内面の器面はあれている。口縁部の隆帯上には二条の沈線を引き、丸く張りだす体部上半にLRの縄文を地文とする文様帯を設けており、頸部及び体部下半から底部にかけて平滑に磨いている。体部の文様帯は上下に平行する二条の沈線を引き、その間に楕円形にしたメガネ状沈線を互い違いに二段にわたり配して工字文風の文様としている。

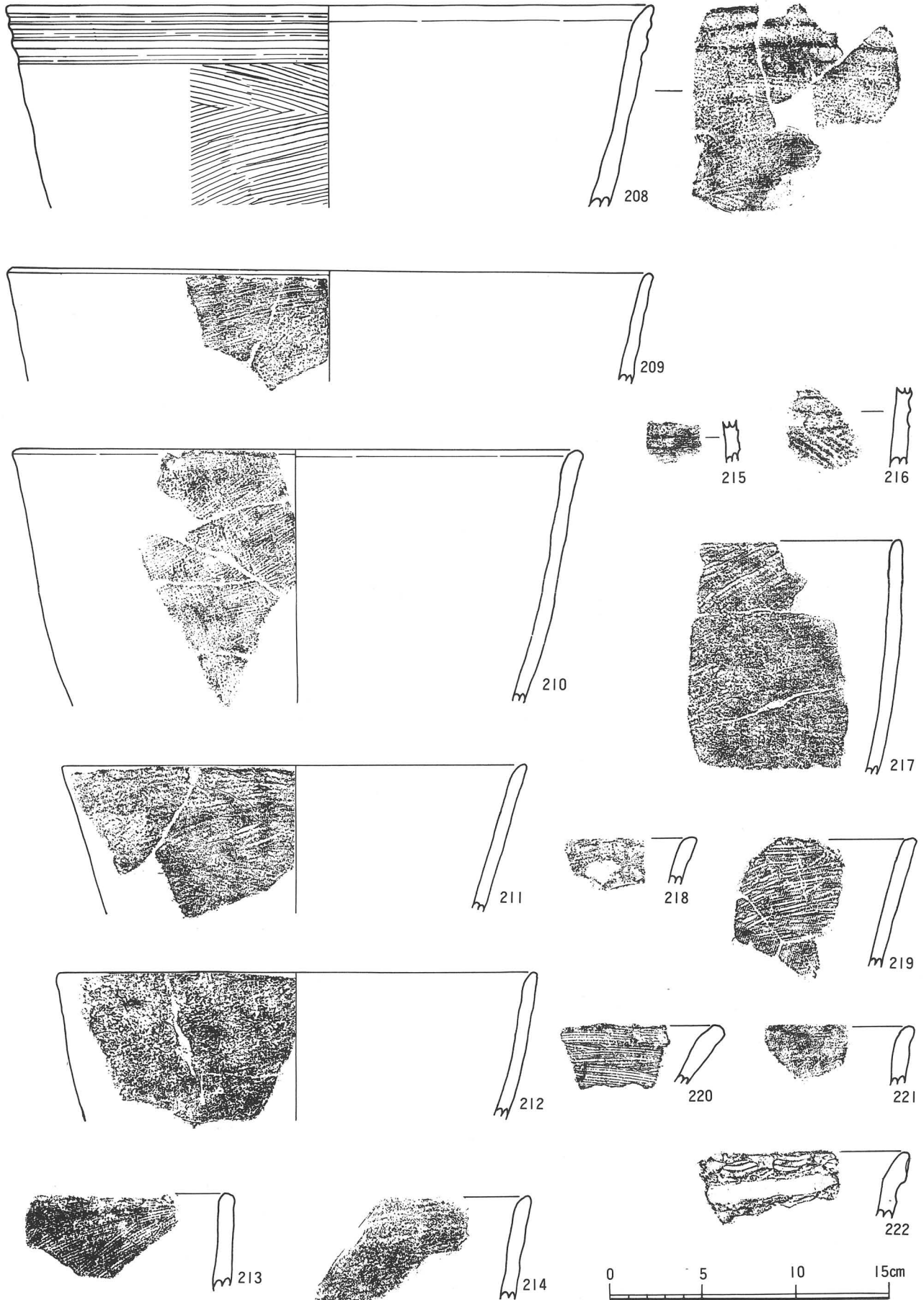
204の断面図は、189の断面に似た形状を示しており、口縁部の無文帯下から屈曲しており、粘土の張り付けがある。

190~194は同一個体の土器破片である。器面は摩滅し、表面の色調は土器中芯の灰黒褐色をなし、中に 1 ~ 2 mmの大ききの砂粒を多く含有する。190は体部の上半部の破片で、上端は口縁部にちかく肥厚しており、体部文様帯には隆線による二段の工字文が施文される。191・192の破片上方には工字文がみられ、193・194には五条の平行する隆線を巡らせており、体部文様帯の下に配される。

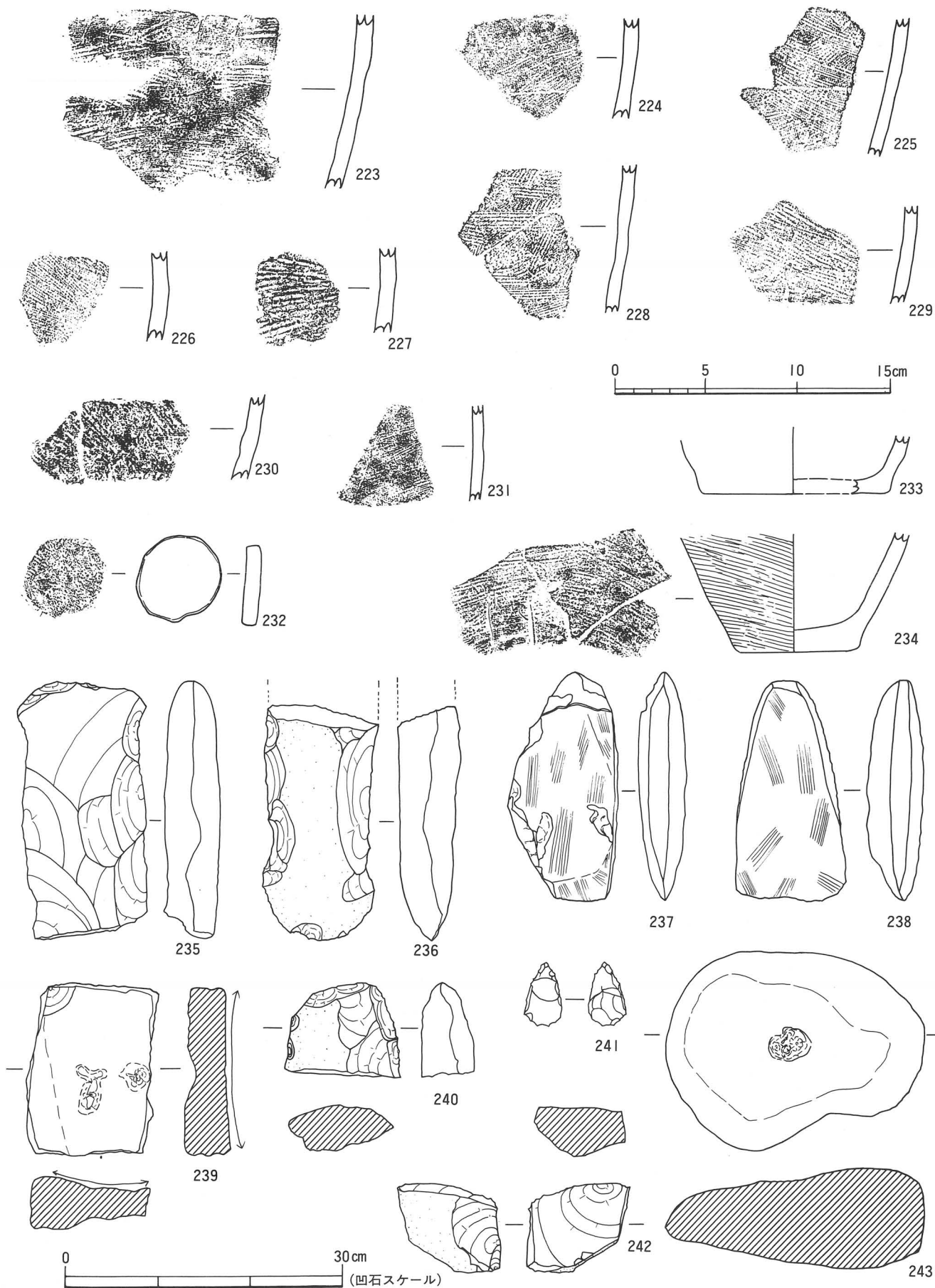
200・205は鉢の体部文様帯の下部にあたり、共に土器片の上端に二・三条の沈線を引いていて、200の外面を赤彩している。



第19図 縄文土器



第20図 縄文土器



第21図 縄文土器・石器 (235~242は1/3, 243は1/6)

一方、206は、厚さ6mm程と薄い口縁部が少し内傾した口径16cmの大きさの鉢である。外面と内面の上部には赤彩と煤状炭化物が付着している。口縁部内面には浅い指頭痕が連なっており、外面には上端に二条の沈線から垂下する縦の沈線により四角い区画を設け、区画内を綾杉状の沈線でうめている。

#### 浅鉢 (第19図199・201・207)

浅鉢の形態には、有文で半球形の体部をなす199・201と皿状をなす207の二種類がある。199は内外面を赤彩した厚さ6mm程の薄い土器で、内湾気味に外傾する口縁部に沿って二条の沈線を平行に引き、その下方には縦方向に連続した沈線を施し、更に上方の沈線から斜めに下がる二本の沈線を斜めに引ている。201は外面を赤彩した鉢で、口唇を幅広く肥厚させ、内湾ぎみの口縁部には平行する沈線を引き、破片の右側では沈線を直角に曲げて描いている。

207は、底部から直線的に伸びて口縁部にいたる形態で内外面がよく磨かれた浅い皿である。

#### 深鉢 (第19図197・198・202・203, 第20・21図208~232・234)

深鉢には有文粗製の197・198・202・203・208・215・216・222と無文粗製の土器がある。

202・203は同一個体の小型の深鉢であり、表面には厚く煤状炭化物が付着している。口唇部には小突起と列点文をつけている。上半部には、沈線による横に展開する重菱形状の文様を施しており、体部下半は条痕文を横や斜め方向に引き器面の調整を行なっている。

197・198は同一個体であり、簡素な文様をつけた深鉢である。細かい条痕文を施した口縁部には、平行する四条以上の沈線が間隔をおいて引かれており、表面に煤状炭化物が付着している。面取した口唇部は内傾しており、内面には横走りする荒い条痕文がみられる。

208は口縁部にそって指頭による浅い沈線を三条引いたものであり、同様の沈線は215・216の土器にもみられる。208は口縁部内側の先端を徐々に先細りさせており、体部には横や斜方向の条痕文を引いている。212・214も口縁部を内面側から先細りさせる。また209・210・218・221は口縁部を丸くおさめるものであり、213・219・200では少し角ばらせている。土器の口径は208・209が35cm、210が31cm、211・212が25~26cmの大きさであり、外面は横や斜方向に条痕文を施している。222は口径35cm程の大きさであり、先細りの口縁部外面には、荒い条痕文による押し引きを連続的に加え、口縁部に平行して幅広い沈線を一条めぐらせている。223~231は深鉢の体部で条痕文が施されている。233・234は条痕文の底部であり、内面に煤状炭化物が付いている。

232は条痕文の付いた土器破片を利用した円盤状の土製品で、重さ18.2gである。

#### 石器 (第21図235~243)

石器には打製石斧3・磨製石斧2・凹石2・剥片2点などが出土している。打製石斧はいずれも短冊形をなしており、一面に自然面を残し両側面を打ち欠いている。235は刃部を、236は頭部を欠損しており、240は頭部に当たる。

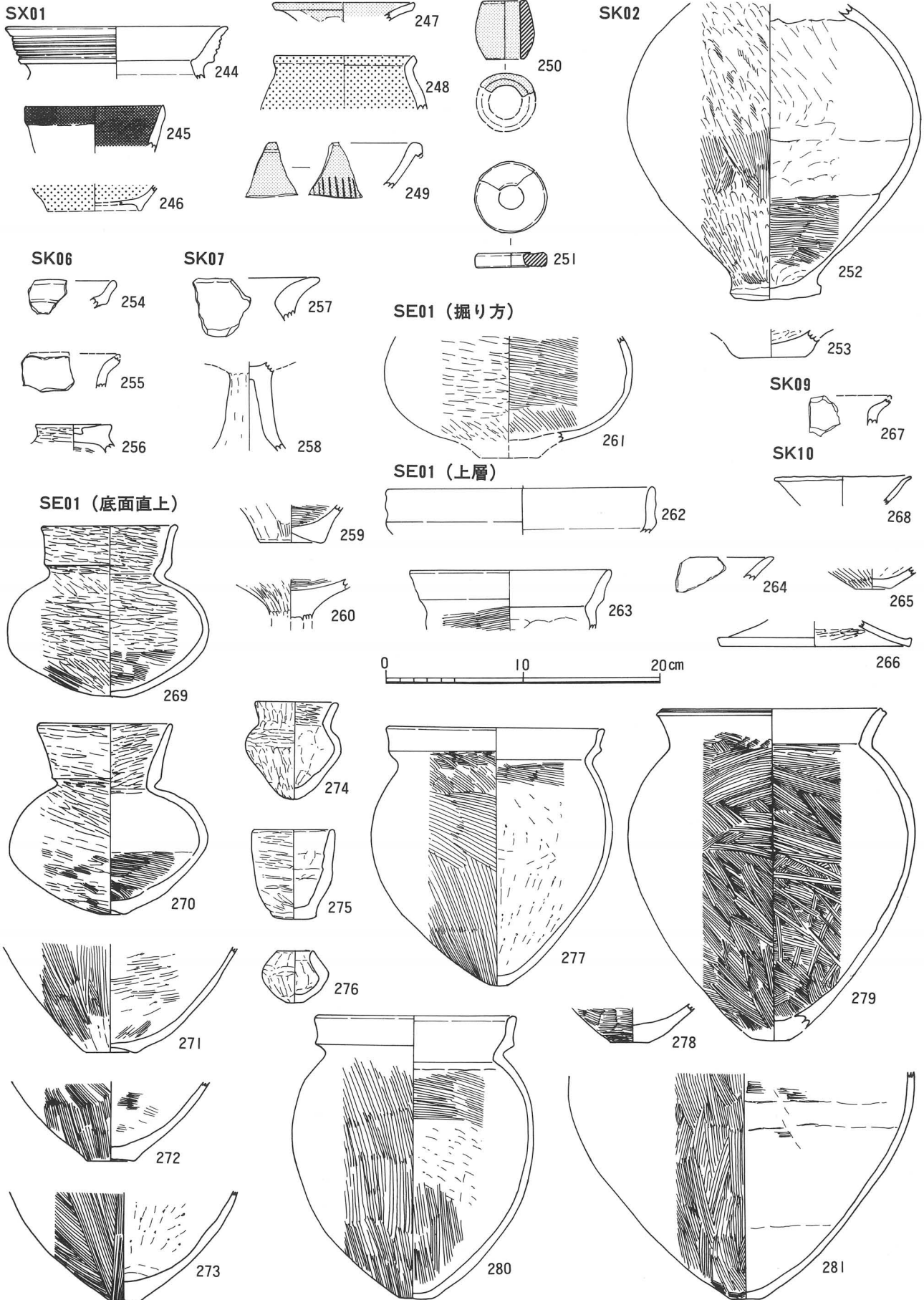
磨製石斧237は一側面が欠損し、238はほぼ全形が窺える。頭部は小さく刃部が広がるもので、横断面形は三味線胴型をなし両面が少し膨らみをもつ。石材は蛇紋岩を用いている。

砥石239は、扁平な砂岩を用い一面がよく研磨されており三箇所凹みがある。また243の凹石は扁平な一面のほぼ中央に一箇所の凹みがみられる。241は厚みをもつ剥片の側縁に二次加工を行ない、242は自然面を残した剥片である。

#### (2) 各遺構出土の遺物 (X 2~26 Y 2~Y 40の区間)

Y 2~Y 40の区間で出土した遺物には、縄文時代の土器・石器のほかに弥生時代後期末から古墳時代初期にかけての土器、木製品、奈良~平安時代にかけての須恵器・土師器、中近世の陶磁器などがあり、この内量的に多くを占めるのは弥生時代後期末から古墳時代初めにかけての遺物であり、遺構ではSD10のものが最も多い。

SX01 (第22図244~251) 244は、弥生時代から古墳時代初めにかけての有段口縁をもつ甕であり、外面に煤状炭化物がつく。先細りする口縁部は少し外反し、櫛状具による擬凹線文を引く。250は近世の越中瀬戸の陶鍾であり、表面



第22図 SX01, SE01, SK02・06・07・09・10の出土遺物



に鉄釉がかかる。大きさは高さ4.3cm、最大胴径4.2cmで中心に一孔を穿っている。

**SK02** (第22図252・253) 弥生時代末頃の壺の体部から底部にかけての破片であり、口縁部を欠いている。体部は卵形をなし、外面はハケ目調整後にヘラミガキしており、体部下半の内面にハケ目を残して、土器の接合痕が内外面に入っている。253は壺の底部である。

**SK06** (第22図254～256) 弥生時代末頃の土器で、254は内外面をヨコナデした有段口縁の甕、255は「く」の字口縁の甕の破片であり、256はつまみ部の口径が大きな蓋で外面中央が中凹みとなっている。

**SK07** (第22図257・258) 弥生時代末頃の土器で、257は「く」の字口縁の甕であり、258は高杯の脚部である。

**SE01** (第22図259～266, 269～281) 259・260・262～266は井戸枠上面に掘り込まれた土坑の覆土から出土したものであり、弥生時代末頃の土器である。261は壺体部の下半部の破片であり、外面をヘラミガキし内面をハケ目調整している。262・263は有段口縁をもつ甕であり、264は「く」の字口縁の甕である。259は外面をヘラミガキした壺の底部であり、260は高杯の杯部片、265は甕の底部、266は高杯の脚部の端部にあたる。

269～281は井戸枠を取り上げる際に、井戸底からまとまって出土したものであり、土器の保存状態が良好なため器面の調整や煤状炭化物の付着状態が良く観察できる。269・270はほぼ同形態をした壺である。口径10cm程の小さな有段口縁が付き、体部は扁平な算盤玉状をなし小指先程の中凹みの底部がつく。外面は全体にヘラミガキしているが、内面は口縁部と体部の上半部までであり、下半部はハケ目がこのころ。274～276は小型土器である。274は口径6.0cm、器高7.2cmの肩部の張りだした壺形の完形土器で、外面をヘラミガキし体部内面には指頭によるナデがみられる。275は口径6.2cm、器高6.5cmのコップ状をした鉢形の土器で、外面をヘラミガキし内面には幅1cm程の輪積み痕が残る。276は口径2.6cm、器高3.6cmの球形の無頸壺で外面をヘラミガキし内面に指によるナデが残る。

甕は復元品3個と直径2～4cmの小底部片5個を数える。器面には煤状炭化物が厚く付着し全体によく残存している。277・280は屈曲部を張りださせ強調した直立する有段口縁をもち、端部を丸く収める。卵形の体部外面にハケ目を施し、内面上半にもハケ目を残し下部をヘラケズリしている。279は「く」の字口縁部をもつ甕で、弱く外反する口縁端部は面取りされ角張る。体部内面には全体にハケ目を残している。271～273・281は甕の底部であり、底部はいずれも小さく砲弾形となっている。

**SK09** (第22図267) 267は弥生時代末頃の「く」の字状口縁をした甕片である。

**SK10** (第22図268) 268は端反りの白磁皿で口縁部を角ばらせた16世紀頃のものである。

**SD10** (第23図282～第28図543)

図の遺物は、X11～21Y2～40区にかけて存在するSD10から出土したものである。この内弥生時代末から古墳時代初めにかけての土器出土量が最も多く、器種には壺・甕・鉢・高杯・器台・蓋などがある。

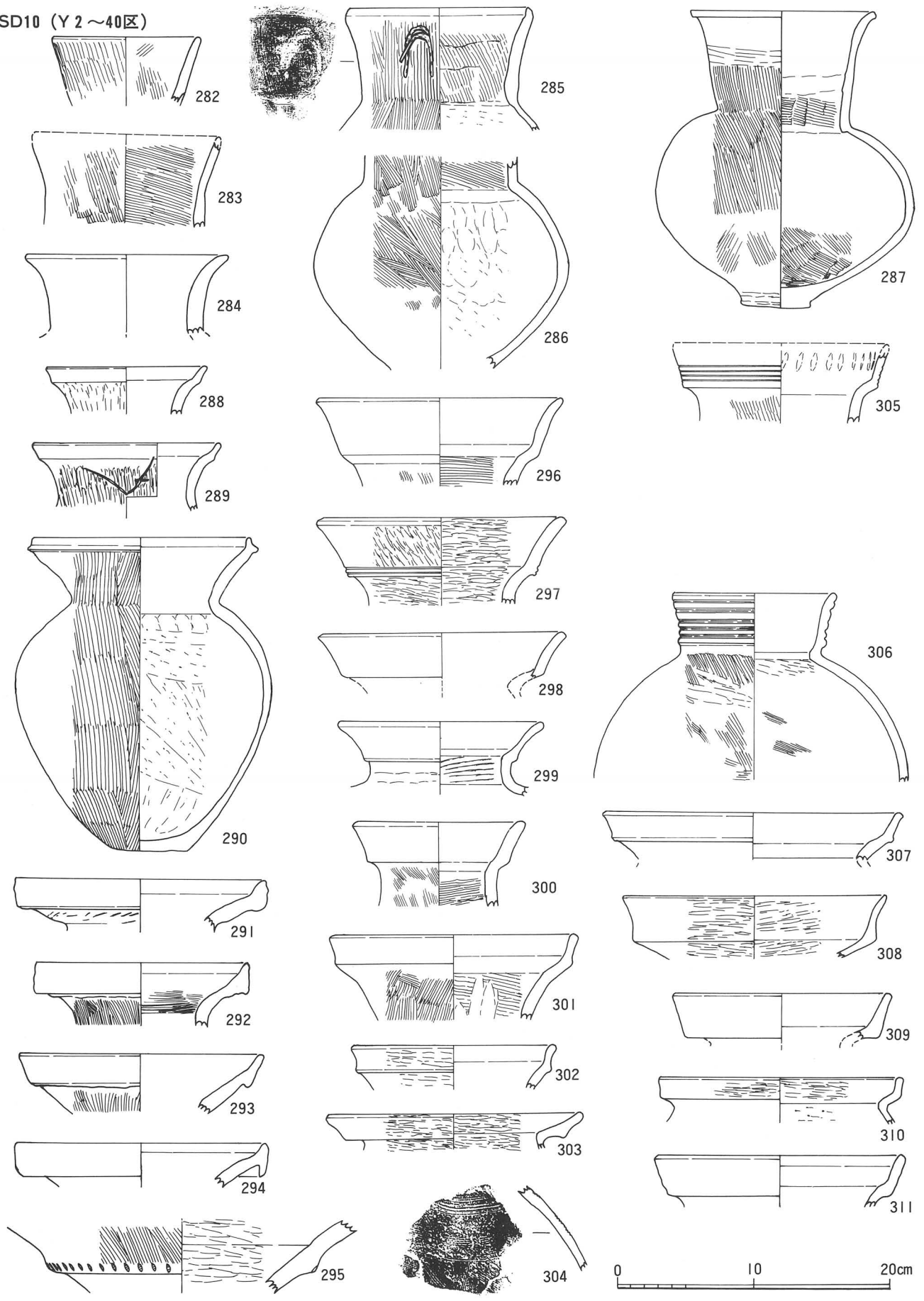
**壺** (第23図282～第24図336)

282～285は口頸部が細長く伸びたもので、284は口縁部が外反し、285は口縁端部が短く内屈し口頸部の一箇所に「∩」字状のヘラガキの記号が描かれ、体部内面を軽くヘラケズリしている。287は器高の1/3程の長さをもつ太い口頸部をつけ口縁部をヨコナデし、外面をハケ目調整した扁平な球状の体部に小底部を付けている。286は口縁部を欠損した長頸壺で体部が張り出し、287よりも丸みを有する。頸部内面は指頭によるナデを行ない下半を軽くヘラケズリしていて、286・287の体部には少し煤状炭化物が付着している。

288・289は内外面をヨコナデした有段口縁をもち、ヘラミガキした頸部に丸く外反する口縁をもつ。289にはヘラによる「V」字状の沈線を描き、更に横に短い沈線を一本引いている。

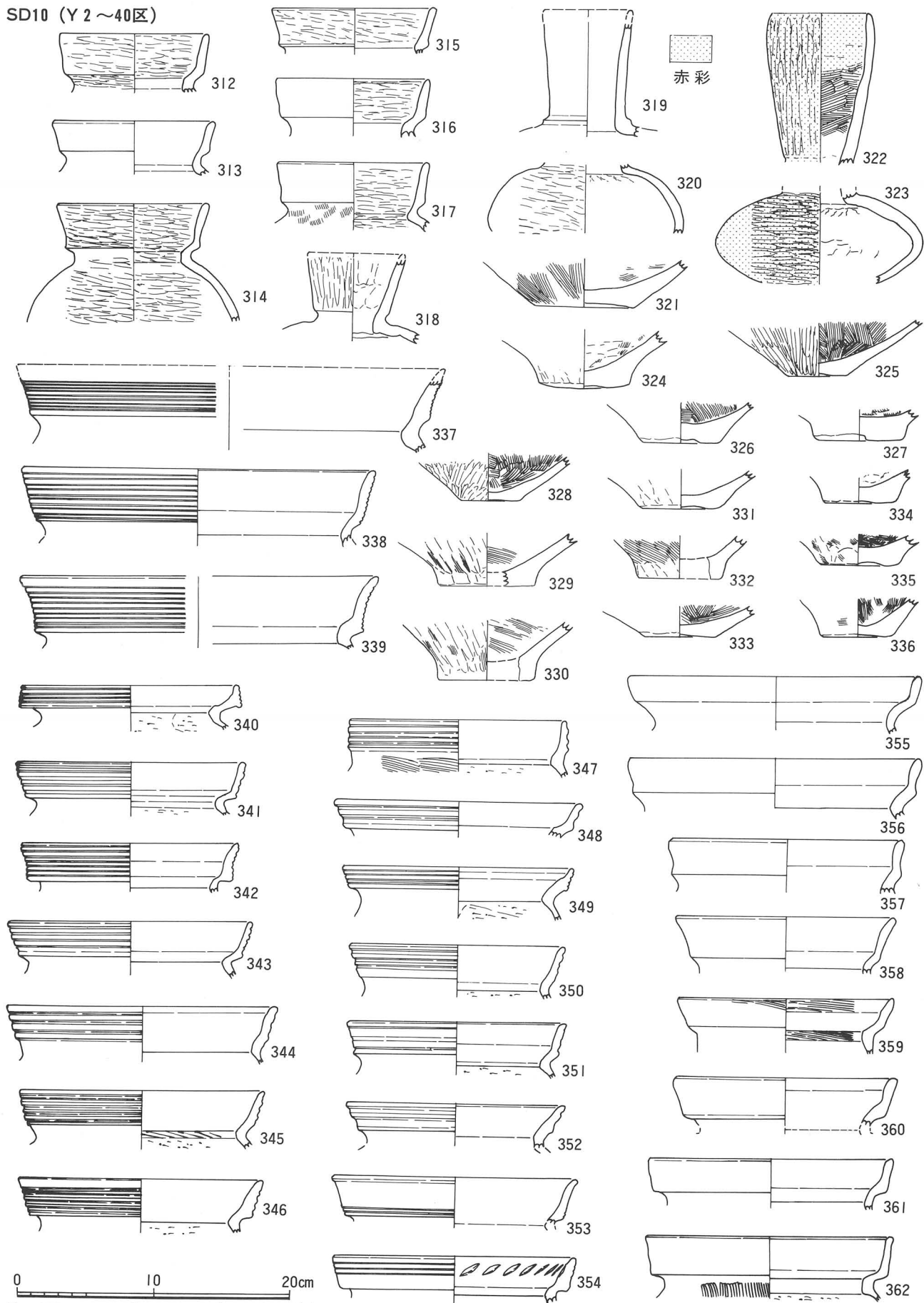
290は大きく開いた「く」の字状に外反した口縁部をつけ、口縁端部を上下に引き出している。頸部は強く屈曲させ、口径より少し大きく卵形に膨らんだ体部内面をヘラケズリしており、外面には煤状炭化物の付着がみられない。

SD10 (Y2~40区)



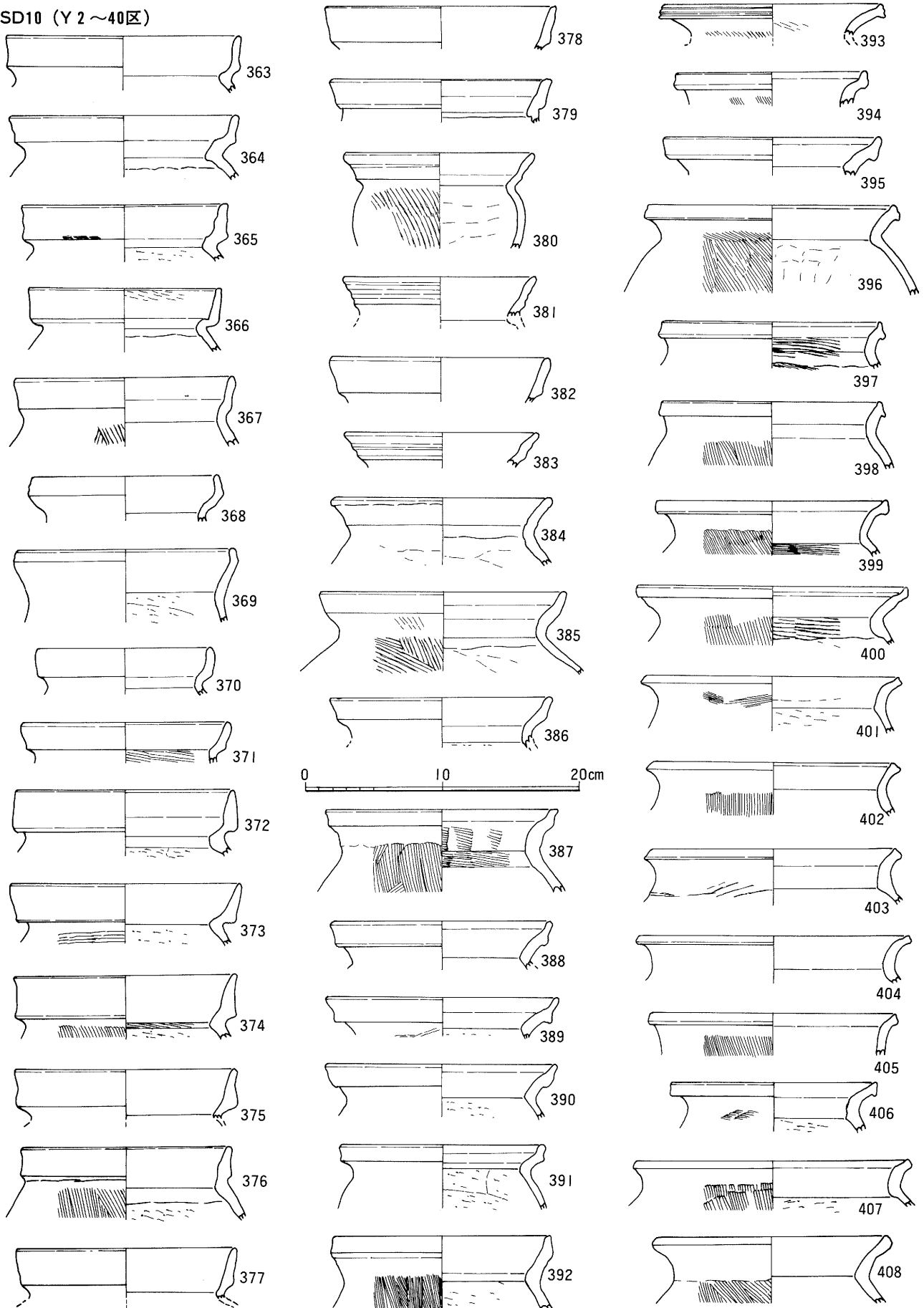
第23図 SD10 (Y2~40区) の出土遺物

SD10 (Y2~40区)



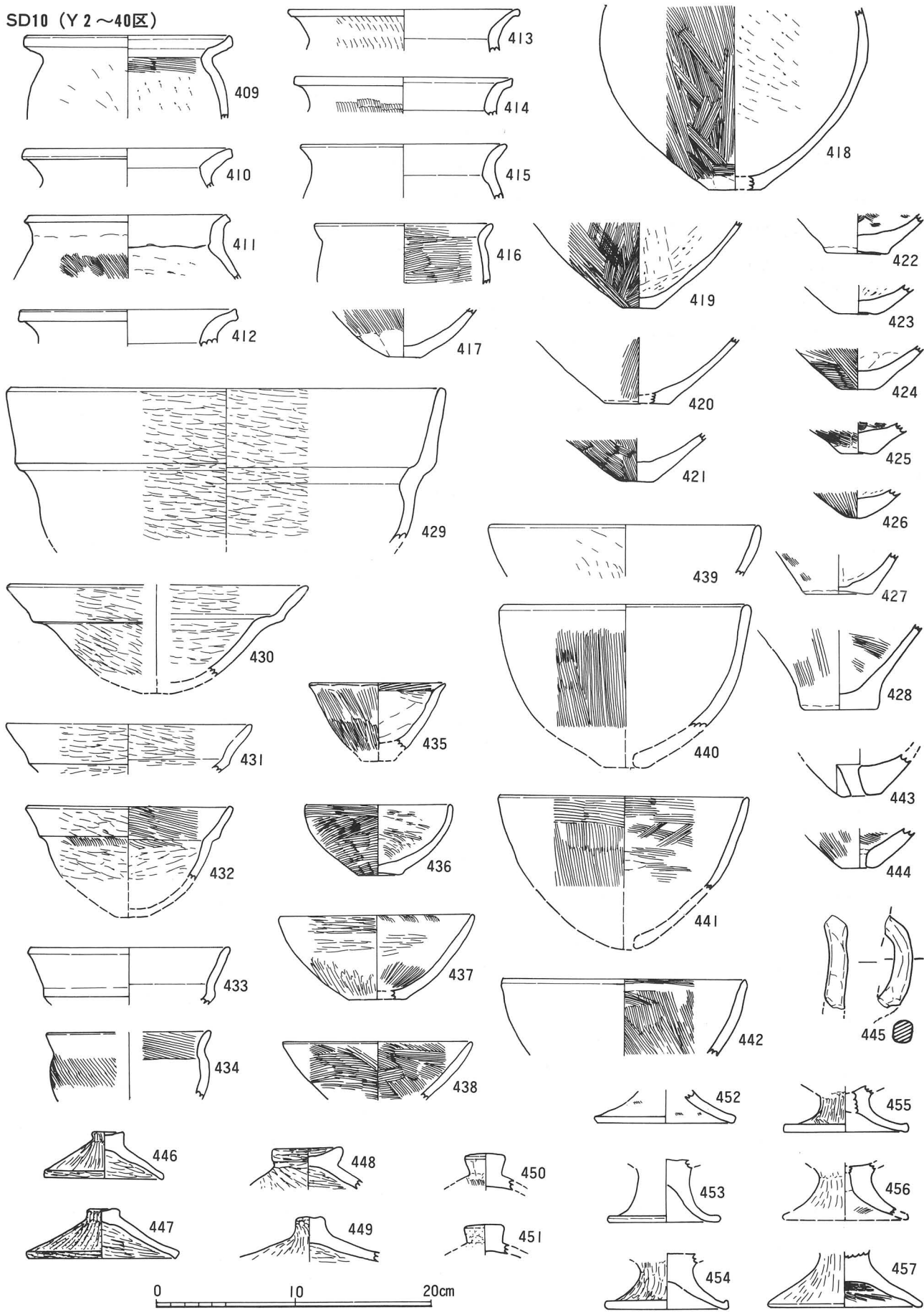
第24図 SD10 (Y2~40区) の出土遺物

SD10 (Y2~40区)



第25図 SD10 (Y2~40区) の出土遺物

SD10 (Y 2 ~ 40区)



第26図 SD10 (Y 2 ~ 40区) の出土遺物

291～294は短く外反して大きく開いた幅の狭い有段口縁がつく壺である。分厚く作られた口縁部の有段部の内外面はヨコナデ調整する。295は弱くわずかに内屈する有段部の直径が20cmを測る大型の壺であり、有段部に刻み目をいれ内面をヘラミガキしている。296～300は外反する少し長めの頸部をもち、有段口縁は幅広く外傾し、端部を丸く収める。297は内外面をヘラミガキし、有段部には二本の沈線を引いており、300は口頸部が円筒状に長くなっている。また300とほぼ同形態をした305には櫛状具による擬凹線文を描き、内面に指頭による浅い圧痕を連続して残している。301・302は長く外反する口縁部に幅の狭い有段の口縁部を付けている。

306は幅広い有段口縁に六条の擬凹線を引き、短く屈曲する頸部から口径の二倍程に大きく球形に膨らむ体部であり、内外面に部分的なハケ目を残している。307～311は幅の狭い有段口縁から短く屈曲して体部に続くもので、308・310は内外面をヘラミガキし、307・309・311はヨコナデを行なっている。312～317は全体の器形が269に似た形態をとる小さな壺であり、体部の最大径が口径の1.5倍程の大きさをなし、やや扁平な球形の体部をもつとみられ、口縁部や体部をヘラミガキするものが多く、313はヨコナデを行なっている。

318は先端を欠くが細長い筒状の口頸部をした壺で、短く屈曲する頸部は更に細くしまり体部が大きく横に膨らむ。319・322は細頸の長頸壺であり、320・323はその体部にあたる。319は頸部に低い段を巡らせており、赤彩した322は口縁部が若干膨らみをもち頸部が細くしまっている。320・323の頸部内面には成形時の絞り目をとどめ、体部は算盤玉状の扁平な形となる。

321・324～336は、直径が5cm程の大きさをした壺の底部であり、全般に少し上げ底状となっている。外面はハケ目調整をした後にヘラミガキし、内面はハケ目のままとされているものが多い。

#### 甕 (第24図337～第26図428)

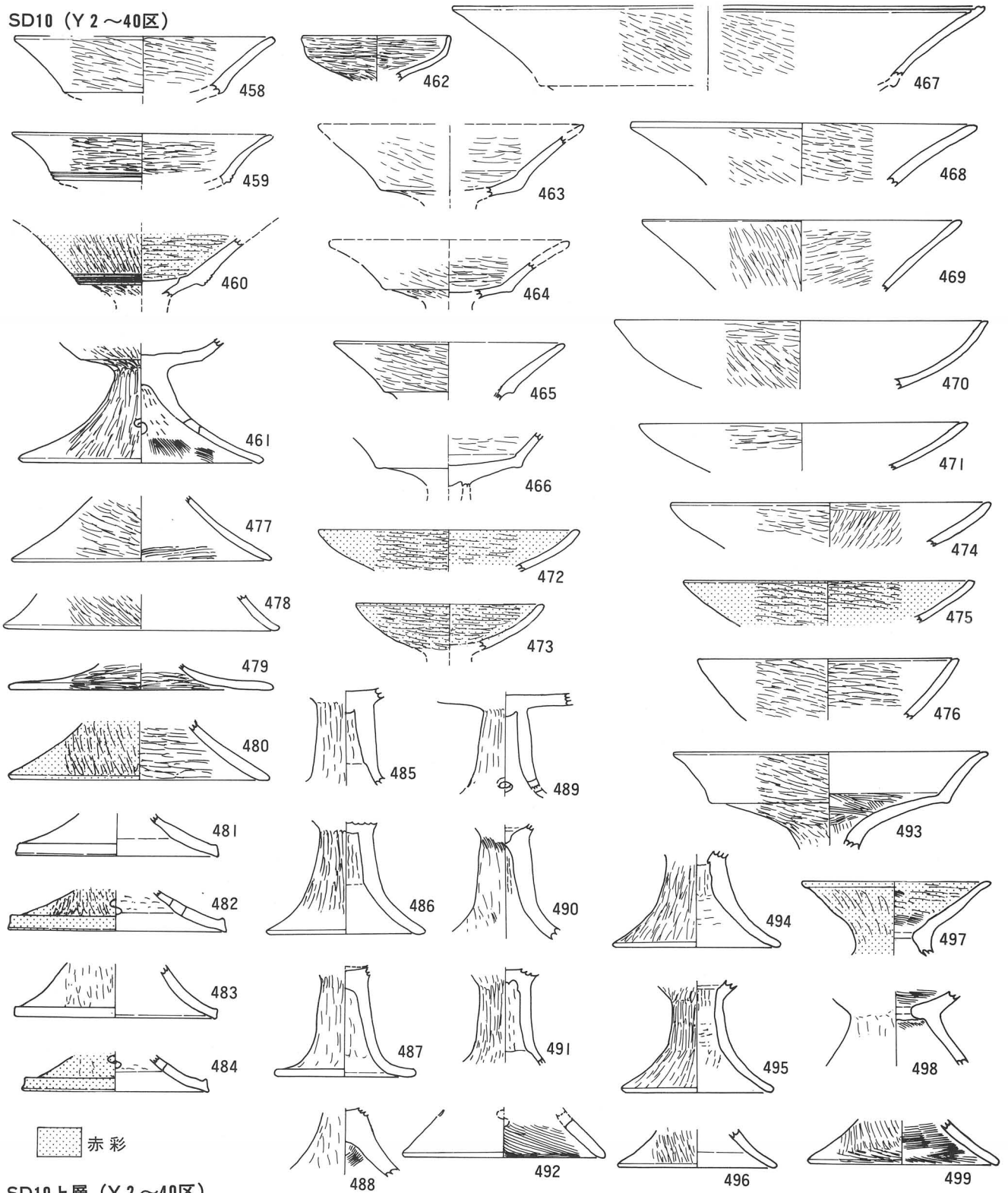
337～354は有段口縁をもつ甕に櫛状具による擬凹線文を付けたものである。337は推定口径が31cm、338・339は口径26cmの大きさをもつ大型の甕であり、338・339の外面には煤状炭化物が付着している。340は幅が狭く内傾し強く屈曲する有段口縁部をもつもので、古い様相を含み出土数が少ない。341～343は頸部の屈曲が強くくびれるもので、345～350・352～354は頸部の屈曲が弱く、口縁端部から頸部への変化は滑らかなカーブを示している。中でも350・352・353は内面が直線状となり、口縁部先端も先細りしている。345・350・352などは有段の稜や頸部のくびれが弱くなっており新しい時期に表れる形態変化がみられる。また354の内面には指頭による列点状の浅い凹みがついている。

355～383・385～392は有段口縁の内外面をヨコナデ調整した甕で、形態にいろいろな変化がある。355～367は有段口縁が直立ないし少し外反しながら立ち上がるものであり、頸部への屈曲が強く明確に折れ曲がる。368～370・372は内湾ないし内傾して立ち上がるものである。371～383は有段口縁の内面の屈曲が弱く滑らかな曲線を描いて頸部にいたっている。387は幅の狭い有段部の口唇が平坦になり受け口状をなすものであり、近江・東海系の影響を受けた土器である。385・386、388～392は有段部の幅を狭くしたものであり、391の有段部を張り出させ強調しており、392は有段部内面の屈曲が弱く端部が内傾している。

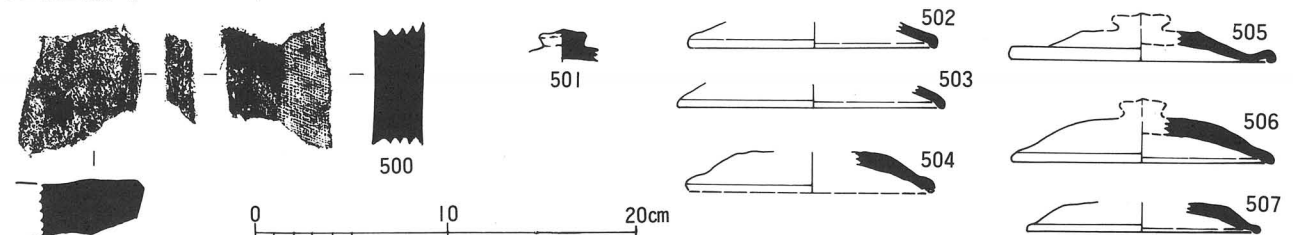
393～416は「く」の字状に外反した口縁部をもつ甕であり、口縁部から頸部までの内外面をヨコナデし、体部外面にハケ目を施し、内面をヘラケズリするものが多い。393は口唇部を両端に少し広げ二条の凹線を引いたものであり、394～399は口唇部を両端に広げ、面取りしており、400～404は口唇部を上方に広げたもので、405・406は下方に広げたものである。また410・411・413・414は外反する口唇部を面取りするものであり、415・416は外反する口縁部の先端が細くなっているものである。

417～426は甕の底部であり、外面にハケ目を残し、内面はナデかまたはヘラケズリを行なった底径が1.5～3.0cmの大きさをもっており小さな底部をなしている。427・428は形態と底径から壺の底部とみられる。

SD10 (Y 2 ~ 40区)



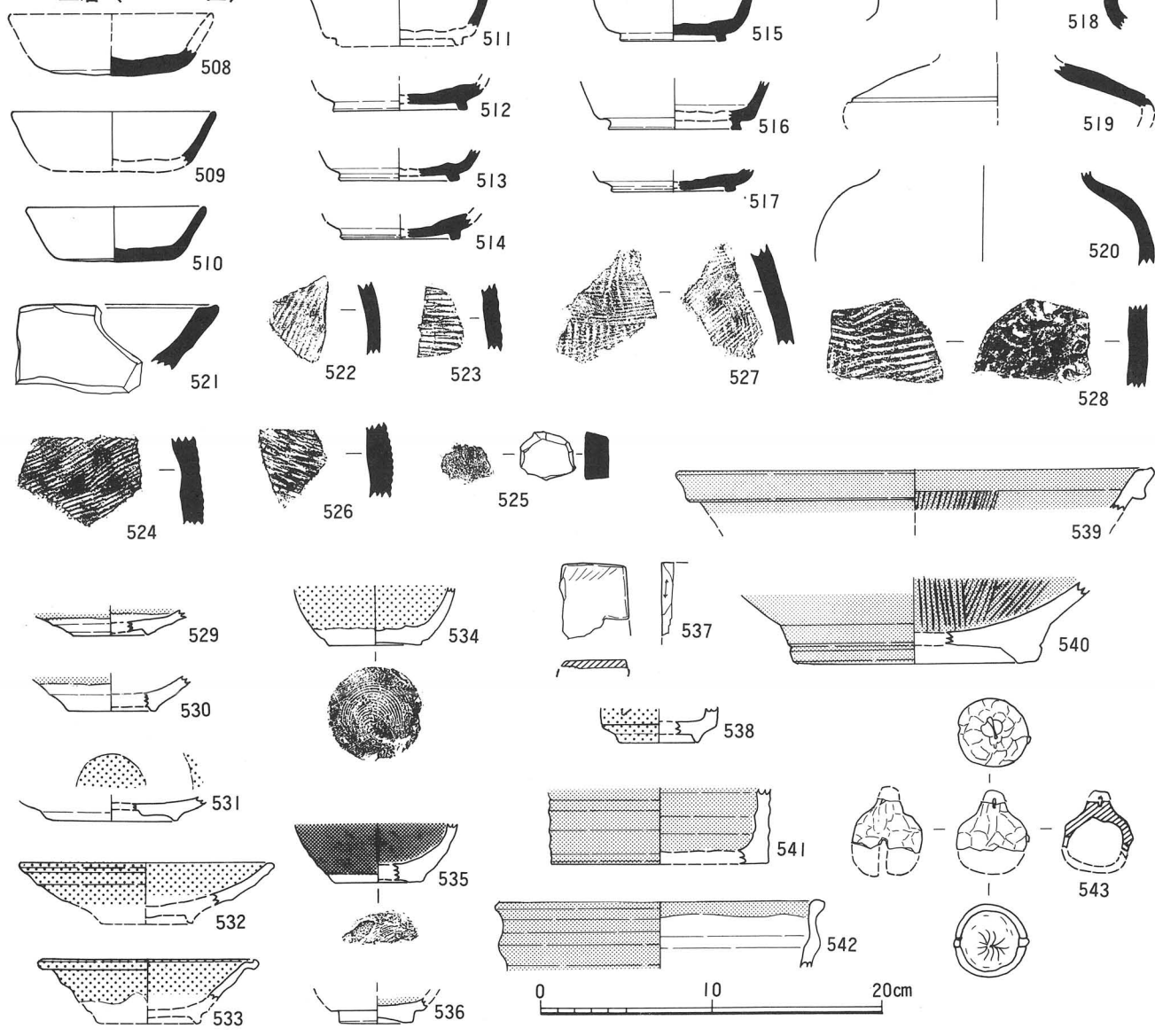
SD10上層 (Y 2 ~ 40区)



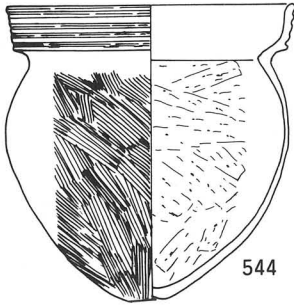
第27図 SD10 (Y 2 ~ 40区) の出土遺物



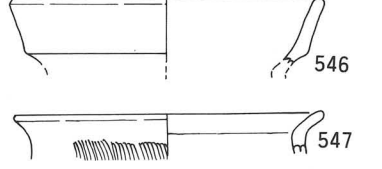
SD10上層 (Y 2 ~ 40区)



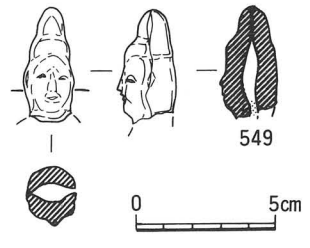
SK22



SK61



X7Y6区



SK27



SK52



SK60



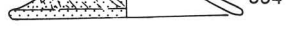
SK62



SK51



SK54



第28図 SD10上層 (Y 2 ~ 40区), SK22・27・52・60~62の出土遺物

#### 鉢 (第26図429～433, 435～444)

429～433は有段口縁をつけ、大きな口径に対し小さく椀状をなした体部に小底部をもった鉢であり、内外面をヘラミガキしている。429は口径32cm程の大型のもので、430は推定口径が22cmで、431～433は口径が14～18cmと法量に三種類の大きさが存在する。

435～438は体部が椀状をなし小さな底部がつくもので二種類の形態がある。438は外反する体部の先端が内傾し先細りする。436～438は底部から体部にかけての立ち上がりが内湾気味に大きく開き先端が丸く収まるもので、器高は口径の半分弱と低い。器面はハケ目調整後に437はヘラミガキしている。

439～441は体部が半球形をなし、底部に直径1cm程の大きさの孔をあけた鉢であり、439～442は口径が18～20cm推定器高が12cm程の大きさをもつ体部の上半のあたり、443・444は一孔を穿った底部であり、443は斜めに孔がつけられている。器面の調整はハケ目やナデが残るが、器面には煤状炭化物の付着はみられない。

445は鉢や壺の体部に付けられた細長い棒状の把手で弓のように半月状にそる。453～457は台付きの鉢や壺の脚部にあたるもので、脚部は低く末広がりになり、外面をヘラミガキしている。

#### 蓋 (第26図446～451)

446・447・449は小さなつまみから笠状に広がる蓋であり、448は直径5cm程の大きなつまみを付けたものである。また450・451はボタン状のつまみを付けたもので、内面返りのある蓋の一部にあたる。蓋の器面はヘラミガキし、447・451の外面は赤彩されている。

#### 高杯 (第27図458～491)

高杯の杯部には三形態が存在する。462は短く直立した口縁部の口径が10cmと小型の皿状をした杯部である。458・459・463～469は杯部口径が16～20cmの大きさをもち口縁部が外反しながら屈曲するものであり、459は他よりも口縁部が短く外反し、459・460の屈曲部には沈線を二～三条引いている。467は推定口径が36cm程の大型の杯口縁部であり、端部を肥厚させ二条の沈線をめぐらす。468・469は外反する口縁部の口径が22・24cmの大きさをもつもので、三種類の法量がみられる。

470～476は高杯杯部の形態が内湾気味に脚部から立ち上がり、皿状をなすもので口径が13・17～22・26cm前後の三種類の法量があって、472～475は内外面を赤彩している。脚部の形態には、485～491のように短い筒状の脚部の端部が486・487のように外反して小さく開くものと、461のように杯部から脚端部にかけて大きく開き、脚部の低いものがある。479は裾部が水平に近く低く広がるもので、477・478は461とほぼ同様な広がりをしていて、481・484は脚部端面が面取りされたものであり、480・482・484は赤彩される。

#### 器台 (第27図493～495, 497・498)

493は口径21cmの大きな有段の受け部をもつ器台であり、外面にはヘラミガキが施され、内面にはハケ目が残る。高杯杯部の形態と類似しているが柱状部の閉塞がないことから器台とした。497・498は盃状の小さな受け部を付けた器台であり、内外面をヘラミガキし297は赤彩する。短く低く広がる494・495の脚部は、筒状をした内面に絞り目があり、端部近くの内面にヨコナデ調整をしている。

#### SD10上層 (X11～21Y2～40区出土, 第27・28図500～543)

上層の出土品には弥生土器のほかに古代・中世・近世の遺物がある。

500は、SD10の北側 (X16・17Y35区) の2層淡褐色土から出土した瓦片である。瓦の色調は淡灰色をなし、胎土には、1mm以下の細砂粒を少し含み緻密であり、焼成は還元焰で堅くしまっている。瓦の側面及び縁辺の三面をヘラケズリし、凹面に布目痕が残り、凸面にはザラザラして細かい離れ砂が付いている。

501～520・527・528は奈良時代末から平安時代にかけての須恵器である。501～507は杯蓋で口径12.4～14.0cmを測

り、501は扁平な宝珠形をしたつまみである。502・507は口縁端部が下方に折れ内面に弱い稜線が入り、503・506は口縁端部が丸味をもって収めるものであり、505は口縁部が大きく湾曲し下方に折れまがっており、時期は8世紀末頃にあたる。508～510は無高台の杯であり、510は口径が10.6cm、器高が3.2cm、509は口径が12.0cm、推定器高が3.8cmの大きさをもち底部をヘラキリする。511～517は高台付きの杯で、高台が少し外方に張り出している。底部から口縁部にかけての立ち上がりは、516が少し角張り、513・515・517が少し丸みをもっている。518は外反する壺の口縁部で端部が肥厚し短い頸部に続いている。519は長頸壺の体部上半部にあたとみられ、体部の張り出す屈曲部に沈線を巡らせている。520は体部が丸くふくらむ丈長の形態をなす壺である。527・528は甕の体部片で、527の外面に平行タタキを加え内面にハケ目を施し、528の内面には同心円タタキを入れている。

521～526は中世の珠洲であり、521は片口鉢の口縁部で、角張った口唇部が少し内傾し水平にめぐり、13世紀末から14世紀頃の珠洲IV期にあたる。522～524・526は甕の体部片で器面に平行タタキが入る。525は珠洲を用いた陶製円盤であり、片口鉢の周辺を打ち欠いて円形にしたものである。

529～543は近世から近代の遺物である。529・530は鉄釉をかけた越中瀬戸の皿で、17～18世紀にあたる。534は鉄釉をかけた壺で、外底部は回転糸切りによる切り離しが行なわれる。532は黄褐色をした灰釉の越中瀬戸の皿であり、533は乳灰色をした灰釉の唐津の皿で口縁部が強く屈曲する。535は黒褐色の釉をかけた16世紀の瀬戸美濃の碗であり底部に糸切り痕が残る。537は粘板岩を用いた砥石であり、表面は使用により摩滅し一部に擦痕が残る。538は灰釉の碗で淡青色で文様を描いている。541・542は鉄釉をかけた18世紀の越中瀬戸であり、541は水差し、542は香炉であろうか。539の胎土は淡褐色をした軟質の焼成で、器面に黄緑の釉がかかる京焼きとみられる摺鉢である。540は県内で焼かれたとみられ、赤褐色の胎土をした摺鉢で全面に鉄釉がかかる。

543は淡灰褐色の素焼きの鈴であり、胎土には殆ど砂粒を含まず肌理が細かい。鈴の大きさは直径4.1cm程の球状をなしていたもので約半分が残り、上方につまみを付け紐通しのための小さな穴が刻まれている。つまみ部の内面には絞り目があり、外面を細かくみがき、輪状の断面には切り込み部が相対して入っている。

**SK22** (第28図544) 544は口径15.0cm、器高15.5cmの大きさをした有段口縁の甕であり、体部最大径と口径及び器高はほぼ同じ数値となっている。直立した口縁部には四条の擬凹線を引き外面に斜方向のハケ目を施し、内面はヘラケズリして器壁が薄くなるように調整されており、外面には全体に煤状炭化物が厚く付着している。

**SK27** (第28図545) 547は鉄釉をかけた越中瀬戸の皿であり、18世紀頃にあたる。

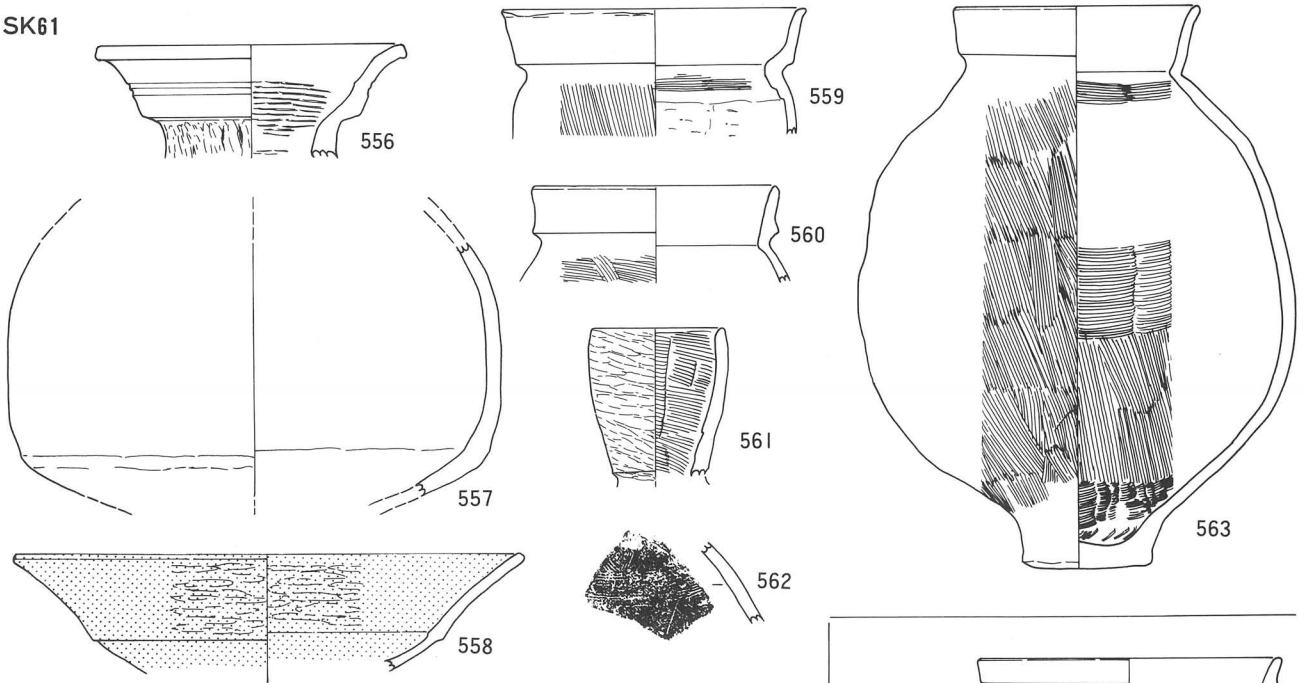
**SK52** (第28図545) 550・551は弥生時代末頃の甕の口縁部であり、550は口唇部を面取りしたもので、551は短い口縁部が強く外反したものである。

**SK60** (第28図552) 552は奈良時代末頃の須恵器で、高台の直径が7.0cmと小さく小型の杯底部である。

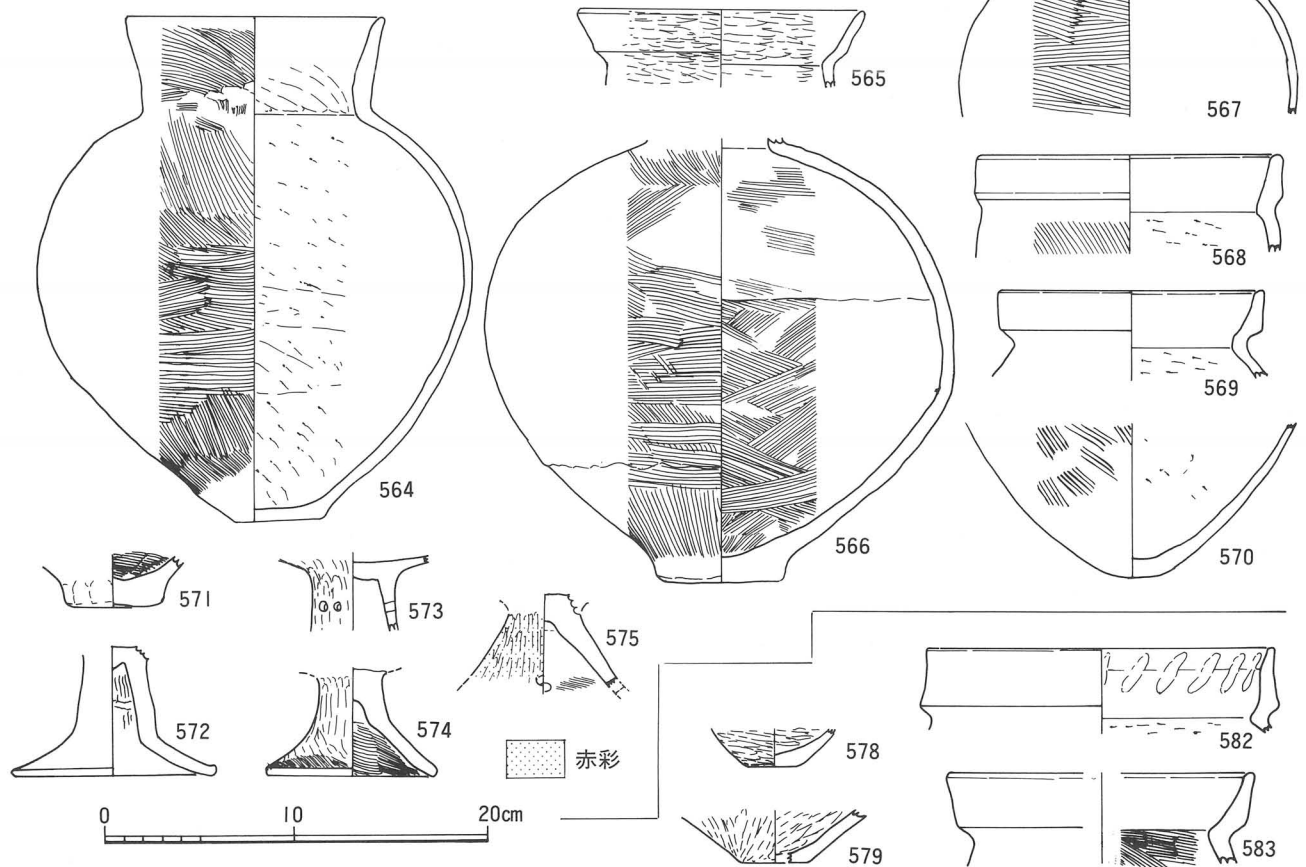
**SK61** (第28図546～548, 第29図556～563) 556・557・561～563は壺で、556は幅広い有段口縁が強く外反したもので、口縁部の内外面にヨコナデを施し、直立する頸部外面をヘラミガキし、内面にはハケ目が残る。557は壺の体部片で直径や形態の傾きに不正確さを有するが、体部下半が大きく筒状に膨らみをもち、強く屈曲して底部にいたる。屈曲部内外面には成形時の粘土接合痕が認められる。563はわずかに屈曲した有段口縁を付け、体部は細長く卵形をしていて、体部最大径の位置は下半にあって、体部下半の膨らむ位置は557の壺に似かよっている。器面の内外面は細かなハケ目調整がされている。562は壺の体部上半の破片であり、櫛状具による平行沈線文の間には、鋸歯状をした櫛描文を二段にわたり描く。胎土・文様から同一個体の破片(第23図304)がSD10から出土している。561は細頸の長頸壺で、外面をヘラミガキし内面にハケ目や接合痕が入る。

546・559・560は有段口縁の甕で、546は口縁部先端を丸く収めるが、559は先端が細く少し外反し、560は有段部の稜を外方に張りださせているが、口縁部内面は直線的のびて屈曲がなく頸部にいたる。560の外面には煤状炭化物の

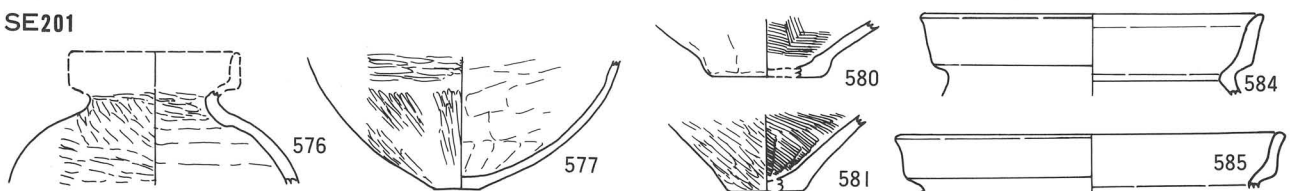
SK61



SK62

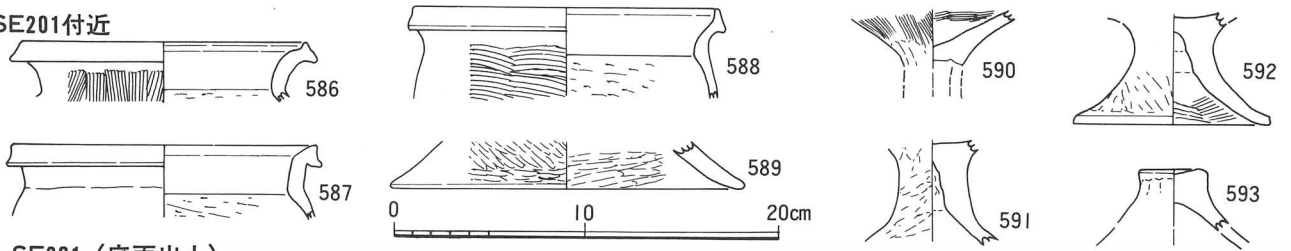


SE201

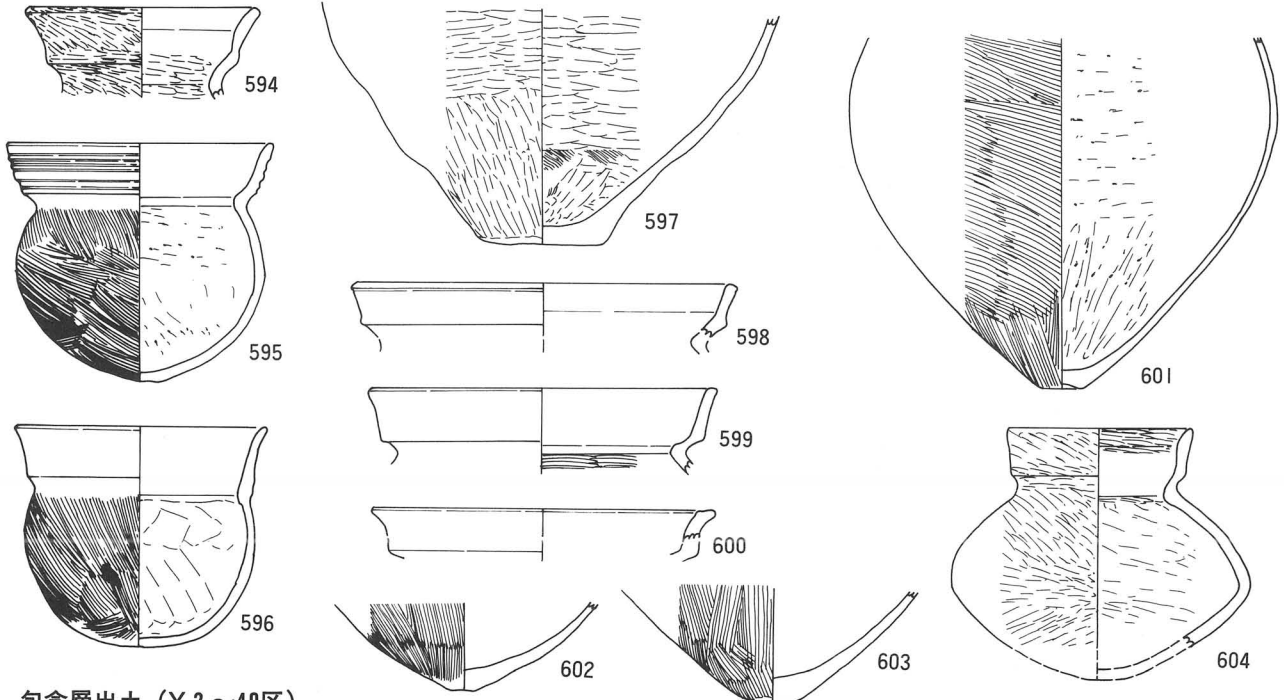


第29図 SK61・62, SE201の出土遺物

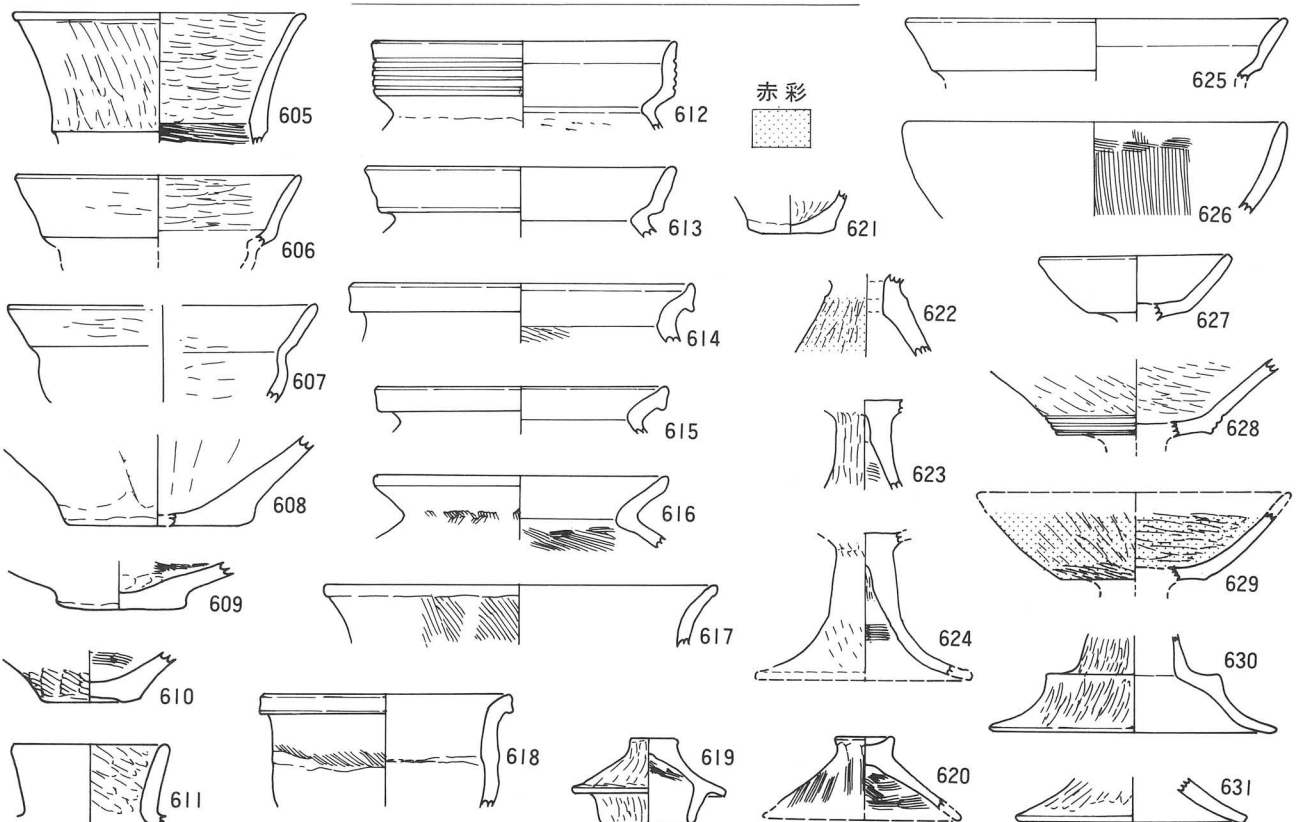
SE201付近



SE201 (底面出土)



包含層出土 (Y 2~40区)



第30図 SE201付近, SE201 (底面出土), 包含層 (Y 2~40区) の出土遺物

付着がみられる。547は「く」の字口縁部をもつ甕で、ヨコナデした口縁部は短く外反し、外面に下方に向かってハケ目を加える。

548・558は高杯の内外面をヘラミガキした杯部にあたり、赤彩した558は外反する口縁部と脚部の接合部までの長さがほぼ同じ長さをなし、548は皿状の形態である。

**SK62** (第29図564～575) 564は口縁部が短く直立する壺で、体部は最大径が上半部に位置し、細長く卵形をする。器面は外面をハケ目調整し、内面は体部から底部にかけてヘラケズリして器面を薄く削り込んでおり、調整方法は甕と同様にする。566は頸部が細くしまった丸い球形の体部をもつ壺であり、口縁部を欠いている。内外面にハケ目を残し、体部下外面に成形時の接合痕がみられ、ハケ目は底部側が縦、上半が横方向と異なっている。565は内外面をヘラミガキした有段口縁をもつ小型の鉢であり、571は外面にナデを加えた壺の底部である。

567～569は有段口縁をもつ甕であり、567には櫛状具による擬凹線文が施される。568・569は内外面をヨコナデした無文の口縁部で、内面をヘラケズリする。570は甕の体部下半の破片で底部が小さく砲弾状となる。572～575は高杯の脚部にあたり、外面をヘラミガキし脚端部が大きく開いている。573には2個一对の小穴が三箇所にあけられている。

**SE201** (第29図576～585) 576～581は壺にあたる。576は体部上半の破片内面に輪積み痕が三条残っており、外面はヘラミガキして口縁部を欠いている。577は球形の体部下半にあたり、小さな指頭状の底をもつ。578は小形の土器の底部であり、579～581の底部はいずれも底部からの立ち上がりが低く角度が似る。

582～585は有段口縁の甕であり、582は口縁部先端が先細り、内面に指頭による圧痕が連なる。また584も口縁部先端が内傾し、583・585は先端が丸く収められる。

**SE201底面** (第30図594～604) 594・597・604は壺であり、594は内外面をヘラミガキした有段口縁をもち少し長めに屈曲する頸部をもつ。604も有段口縁をもち、算盤玉形をした口径より大きく張りだした扁平な体部がつく。器面はヘラミガキする。597は、底部がやや大きくかなり大きな壺の体部下半にあたり、内外面がヘラミガキされ、胎土の接合面では断面の厚さが二箇所肥厚している。

595・596・598・599は有段口縁をもつ甕であり、595・596は口径・器高が15cm以下と似かよるが、595は口縁部に櫛状具による擬凹線文を数条施している。また、595は有段口縁から頸部への内面の屈曲が強く、596は内面の屈曲がなく有段部が内外面に肥厚させている。体部は共に球形をしているが、595の底部は指頭程の小さなもので、596は丸い底部となっている。599は有段口縁内面の屈曲が強く、598は有段口縁の幅が他に比べて狭くなっている。601～603は甕の底部で、いずれも指頭状の小さな底部であり、601は卵形の体部をもち、内面をヘラケズリしうすく削り、602・603は内面にナデを行なう。

#### **SE201付近** (第30図586～593)

586～588は「く」の字状に外反する甕で、体部を口径より少し大きく張り出させる。口縁端部は両側または片側に引き出し広く面取りし、内傾もしくは直立させ、体部内面をヘラケズリする。

589は高杯の脚端部とみられ、592は台付き鉢などの脚部にあたり、脚端部直径は半分程と低く、内面にハケ目を残す。593は笠状に広がる蓋のつまみ部である。

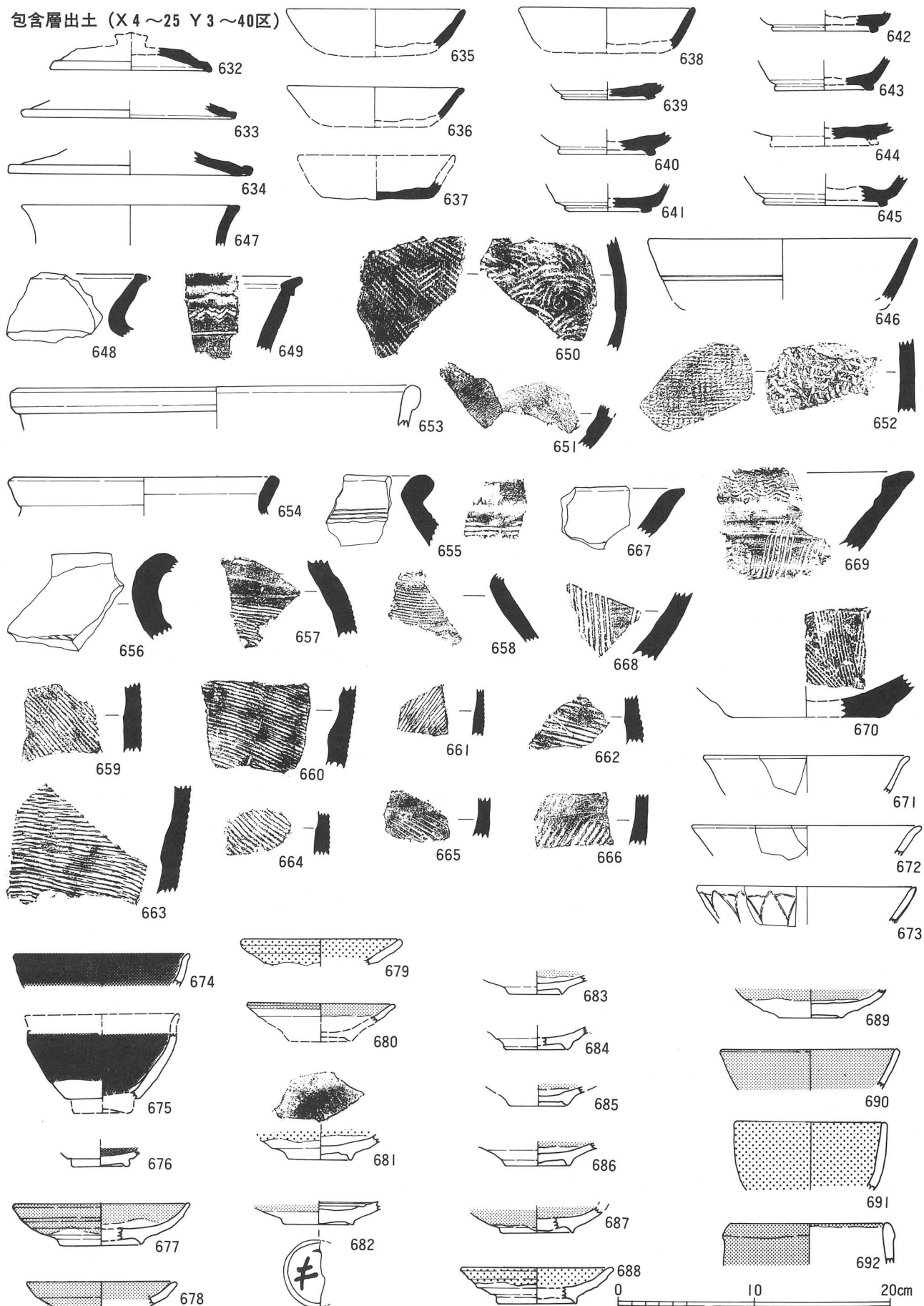
#### **包含層Y 2～40区出土** (第28図549, 第30～31図605～692)

##### **弥生時代末から古墳時代初めの遺物** (第30図605～631)

605・611・608～610は壺であり、605は外反する幅の広い有段口縁をもち、内外面をヘラミガキする。611は口径8cm程の小さく短く直立した口縁部をもち、頸部が強く折れ体部を張り出す。608・609は壺の底部であり、609は底部からの立ち上がりが低く横に広がり体部が張り出す。

606・607・625は鉢で、外反する有段の口縁部に浅く低い椀状の体部がつく形態となる。612・613は有段口縁をもつ

包含層出土 (X 4 ~ 25 Y 3 ~ 40区)



第31図 包含層 (X 4 ~ 25 Y 3 ~ 40区) の出土遺物



甕で、612には楯状具による擬凹線文を引き口縁部先端が先細る。614～618は「く」の字状に外反する甕で、614・615・618は口縁端部を上下に肥厚させる。618は小型の甕で、口径とほぼ同じ大きさに体部が弱く張り出だしている。616・617は口縁端部を軽く面取りしている。

622～624は高杯の脚で、622は柱状部上端の閉塞した塊が剥落したもので、外面が赤彩されている。623・624は細い柱状部をもち脚端部が大きく開いている。631は脚端部にあたり、627～629は高杯で、627は小皿状の杯部を付け、628の杯部下端には三条の沈線を引き、口縁部が大きく外反しながら開く。629は627の皿状の杯部と相似形をした大きな皿状の杯部をのせている。630は有段の脚部をもつ高杯とみられるが、端部がうすくなり壺の可能性も考えられる。

#### 古代の遺物（第31図632～653）

古代の遺物は653の土師器を除いてすべて須恵器であり、時期は8世紀末から9世紀前半にあたる。632～634は、杯蓋で、口径12・16・18cmの三つの法量がある。口縁端部は632が外方に開きのびるもの。633は端部が下方に少し尖るもの。634は口縁端部が屈曲するものである。635～638は高台の付かない杯で口径13cm程の大きさである。639・646には高台が付く杯である。高台は低く幅の広いものが多い。646は体部に沈線二条を巡らせる。648は「く」の字状に外反する中形の甕の口縁部であり、649は大形の甕の口縁部に楯状具による波状文と沈線を描いている。650は横瓶等の体部で、外面に平行タタキ目とカキ目、内面に同心円タタキ目調整が入る。652は甕の体部であり、651横瓶の側面に閉塞用円板の一部が接合されている。653は土師器の口縁端部に隆帯を付けたもので、形態から鍋であろうか。

#### 中近世の遺物（第31図654～692）

654～670は中世の珠洲である。654は短い口縁部が強く外反した壺であろうか。655は珠洲IV・V期の甕の口縁部、656は壺の口縁部である。657～666は外面にタタキ調整を加えた甕の体部である。667～670は摺鉢で、667は口縁先端が外方に向けて細そり、669は内傾する口縁部端面に波状文を施すことから15世紀代の珠洲V・VI期にあたるものとみられる。また670の摺鉢内面のおろし目の間隔は密接して刻まれている。671～673は13・14世紀の青磁の碗であり、671は淡灰色、672は淡灰青色の釉がかかる。

674～676は天目茶碗で、675・676は16世紀の瀬戸美濃であり、黒褐色の釉が厚くかかる。674は17世紀代の黒色の釉を施した越中瀬戸である。677～690は越中瀬戸の小皿で最も量が多く、小皿の見込みや外底面は無釉となっている。678・682・683・686・687は17世紀代の製品であり、677・680・684・685・688・689・690は18世紀にあるとみられる。この内鉄釉は677・680・683・685～687・689・690にかけられている。682には見込みに三段にわたる稜線が巡り、外底面には墨による文字が書き込まれる。灰釉は678・679・681・688に灰黄色や淡灰色の釉がかけられている。691・692は近世から明治にかけての京焼き風の焼き物で、691は素地が淡褐色をした軟質の土器で、淡黄色の釉がかけられている。また692は外面に淡褐色の釉がかけられ、口唇部には青緑色の釉をかける。

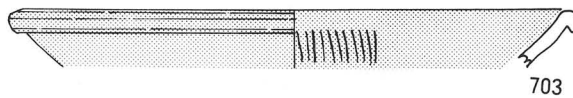
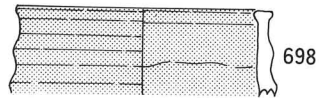
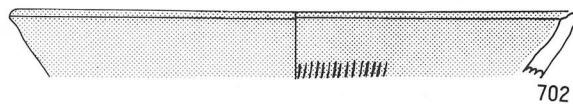
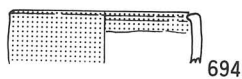
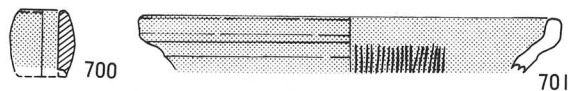
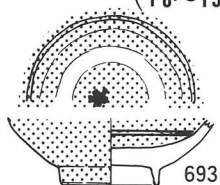
549は近世の土製品であり、肌理の細かい胎土を用いた人形の頭部にあたる。製作方法は割り型を用い前面と後面の二つの型に粘土を押し込み側面で接合している。頭部の内面には縦長の空洞があり、頸部の隙間には赤色の顔料が両面に薄くついている。

#### 包含層X8～25Y8～15区出土（第32図693～705）

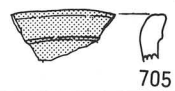
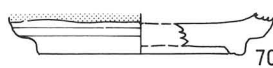
693は伊万里の見込みが蛇の目釉ハギで中心に灰青色の文様が付けられる。594は18世紀の灰釉をかけた越中瀬戸の水差しであり、口縁端部が内面に突出する。694は乳褐色の釉をかけた近世の瀬戸の碗である。

696～702は鉄釉をかけた18世紀の越中瀬戸で、696・697は口縁部が短く直立し体部が膨らむ壺である。698は水差し、699は香炉とみられ、外底部が無釉となっている。700は陶製の鉢であり中心に円筒状の穴があいている。701は受口状の口縁部をもつ鉢であり、702の鉢は外傾する口縁部の端部が外方に張り出している。703は口縁部を折り返し肥厚させ、内面におろし目をいれている。704は鉄釉をかけた鉢の底部であり、705は赤褐色の釉をかけた鉢の口縁部である。

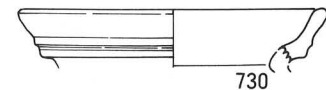
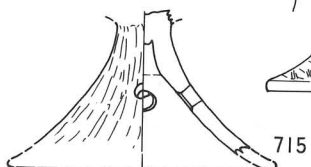
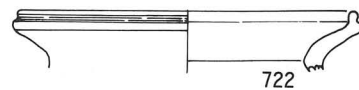
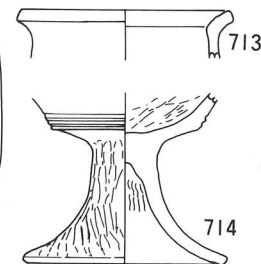
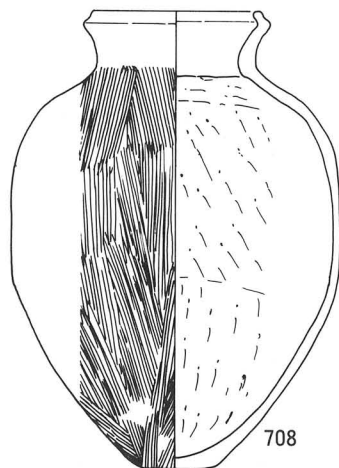
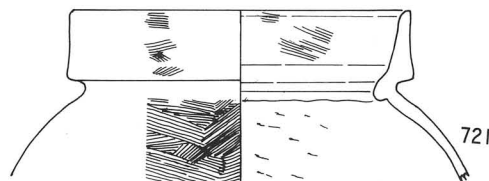
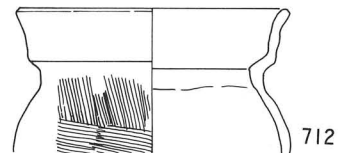
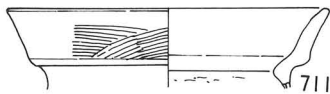
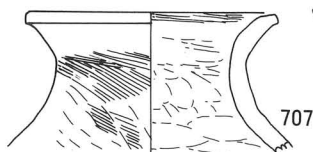
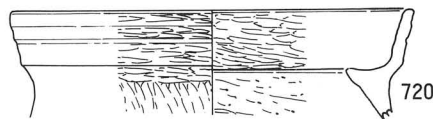
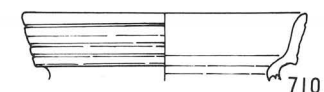
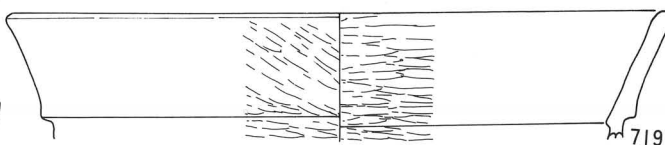
包含層出土 (X8~25  
Y8~15区)



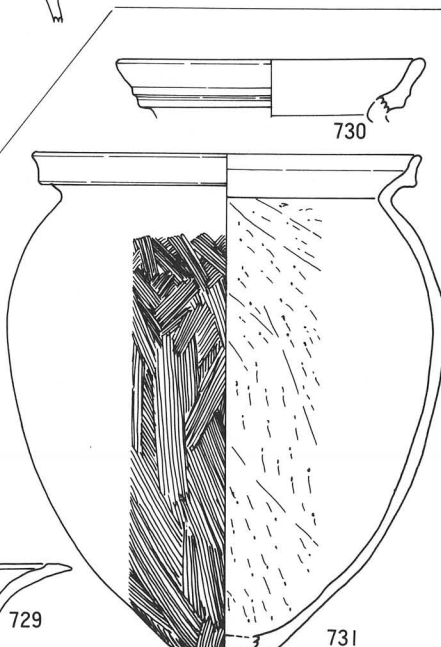
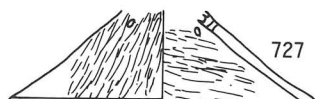
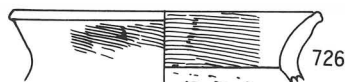
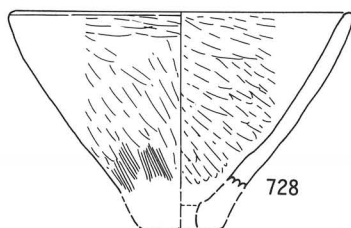
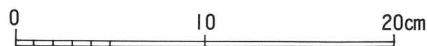
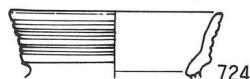
鉄釉



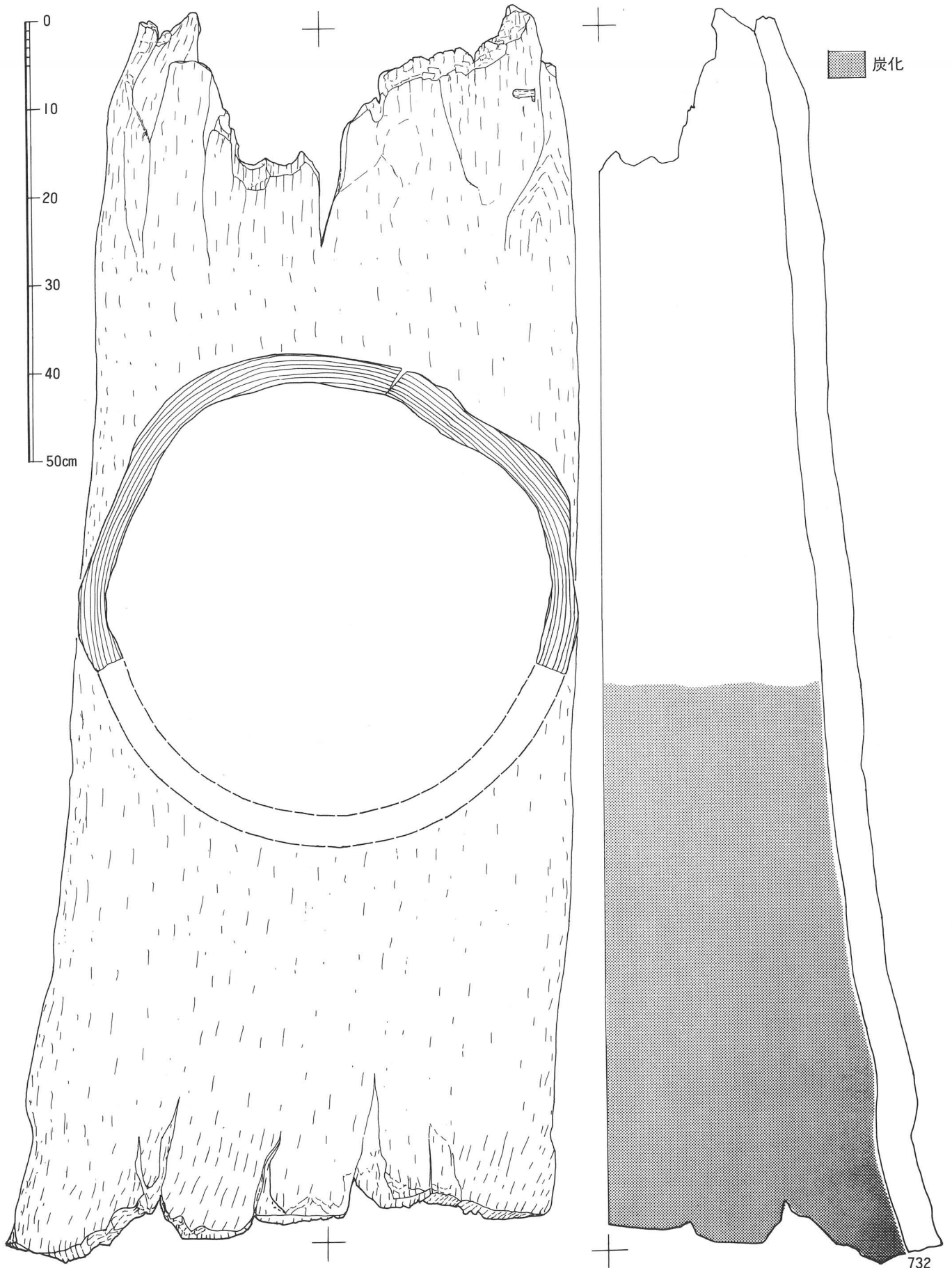
X22・23Y44・45区



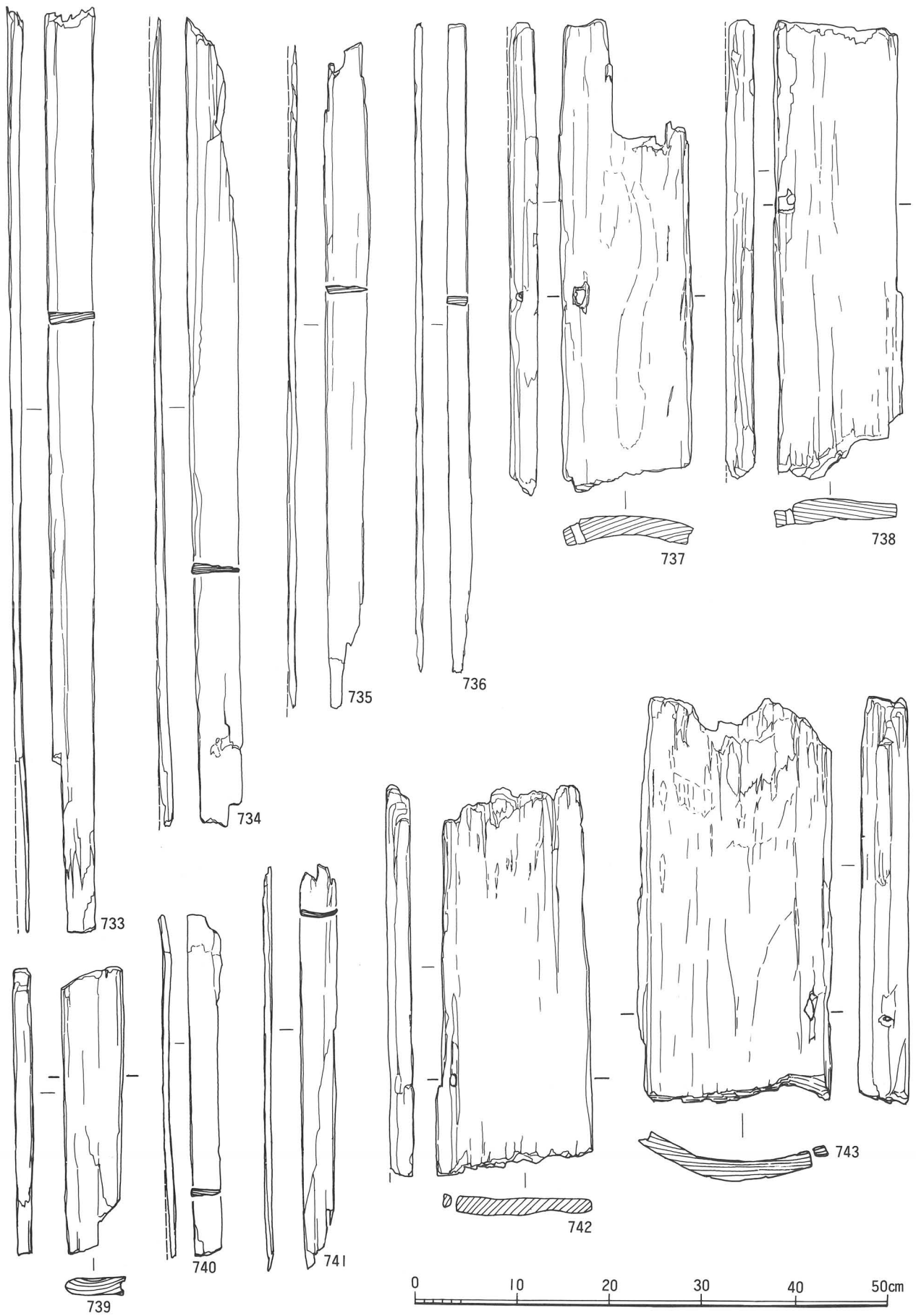
X22・23Y47・48区



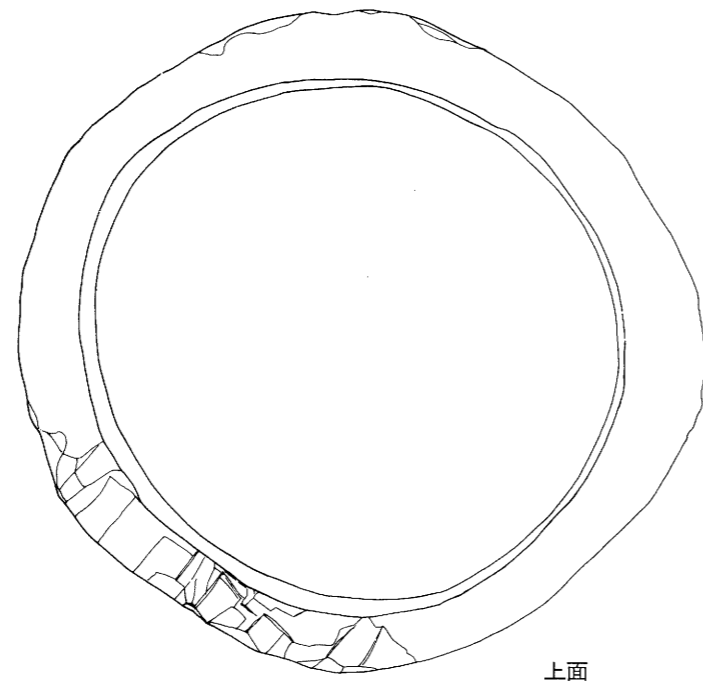
第32図 包含層 (X8~25Y8~15区, X22・23Y44・45区, X22・23Y47・48区) の出土遺物



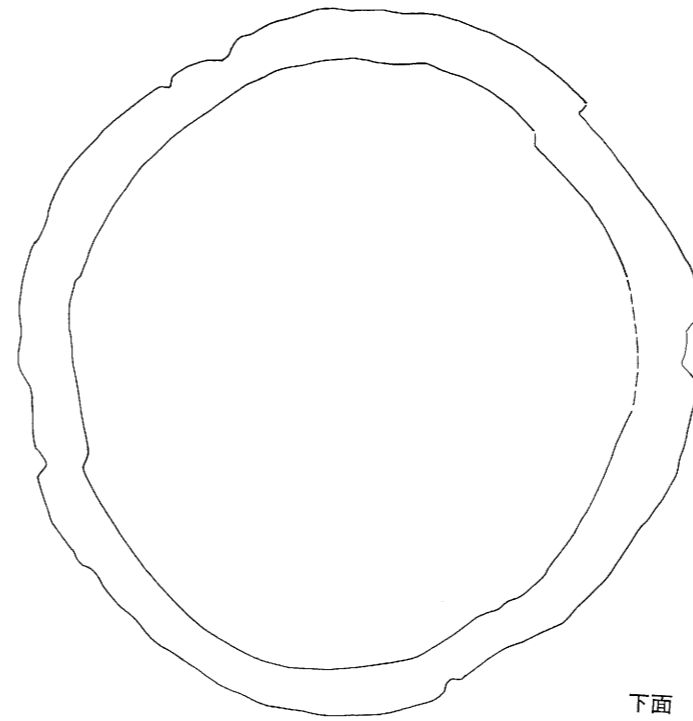
第33図 SE01の出土遺物



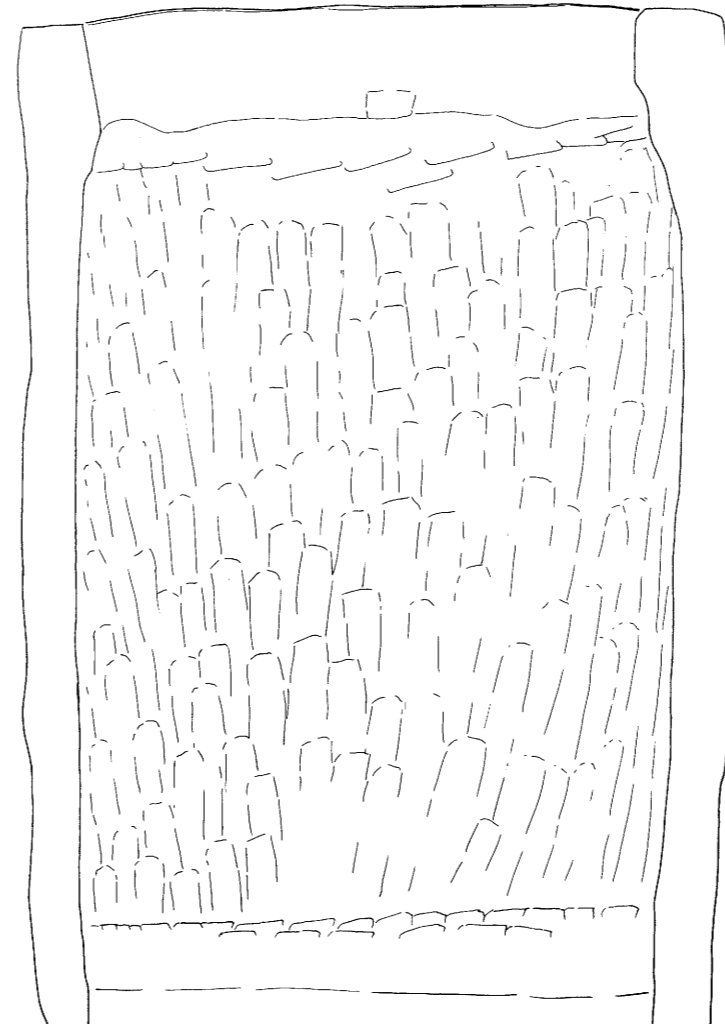
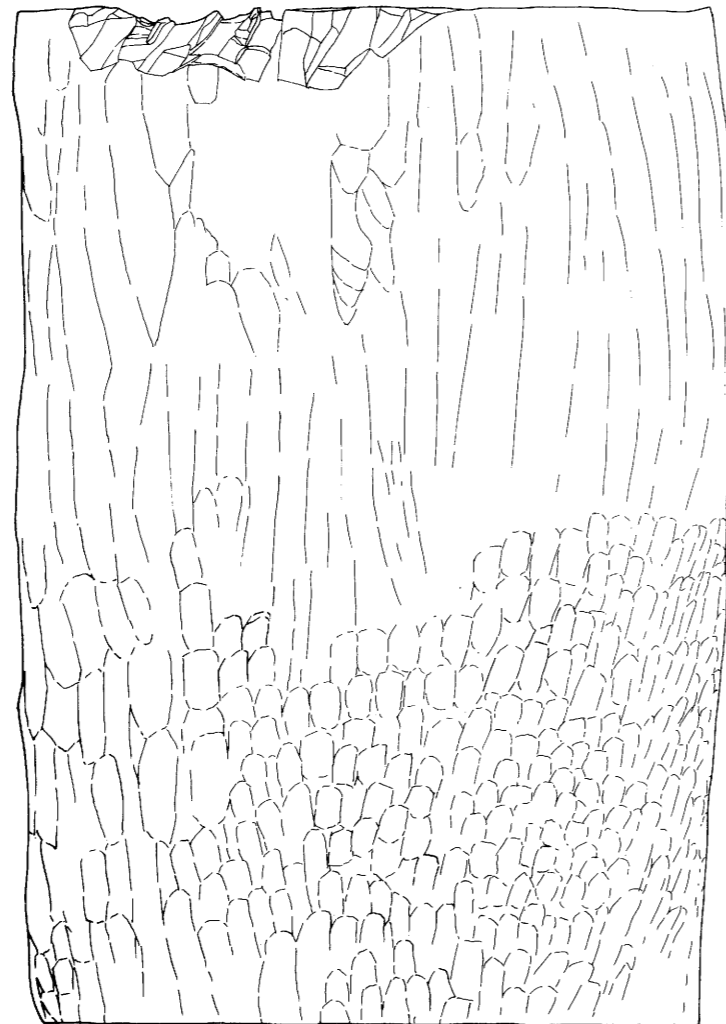
第34図 SE01の出土遺物



上面

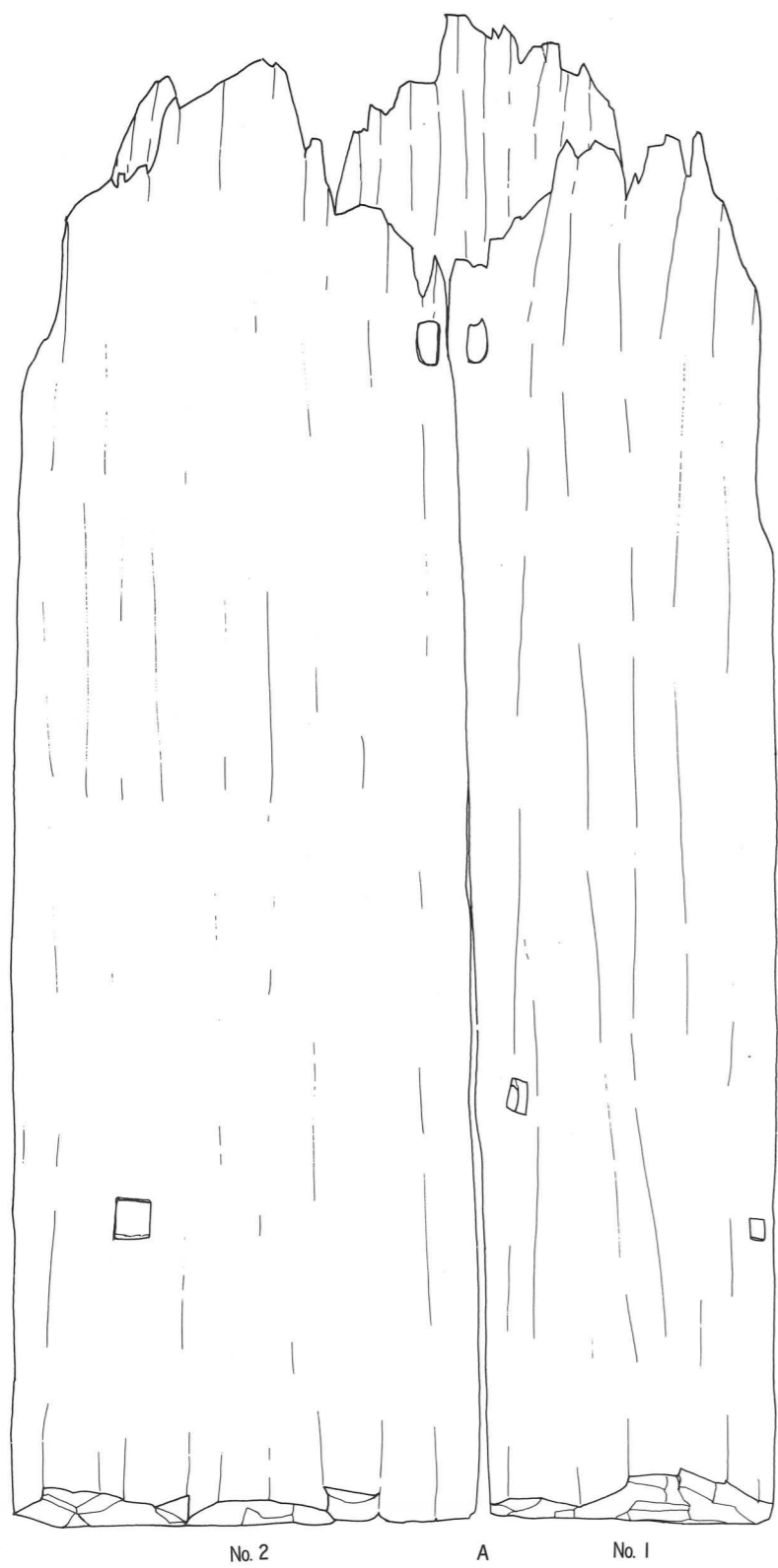


下面



744

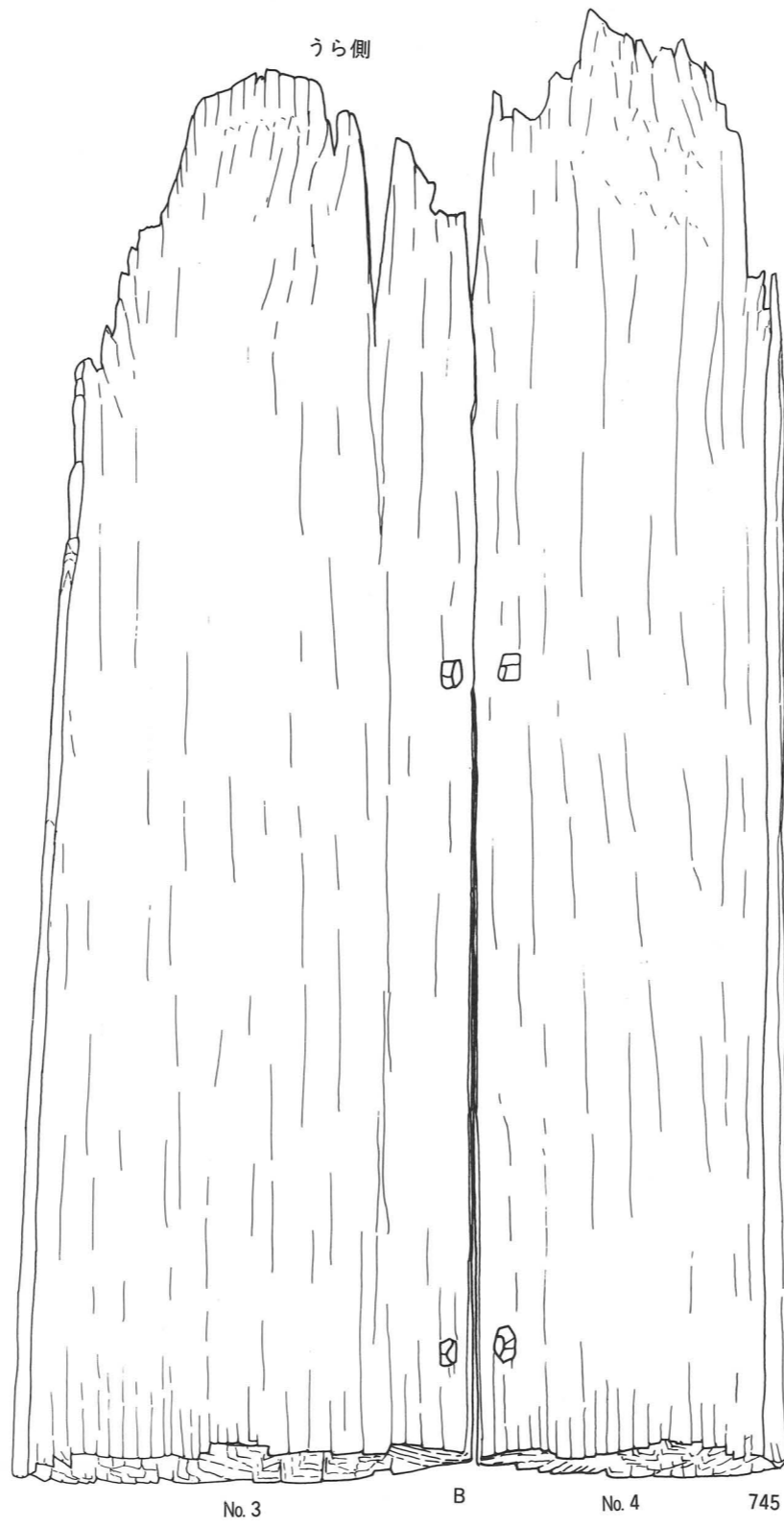
第35図 SE201の出土遺物



No. 2

A

No. 1



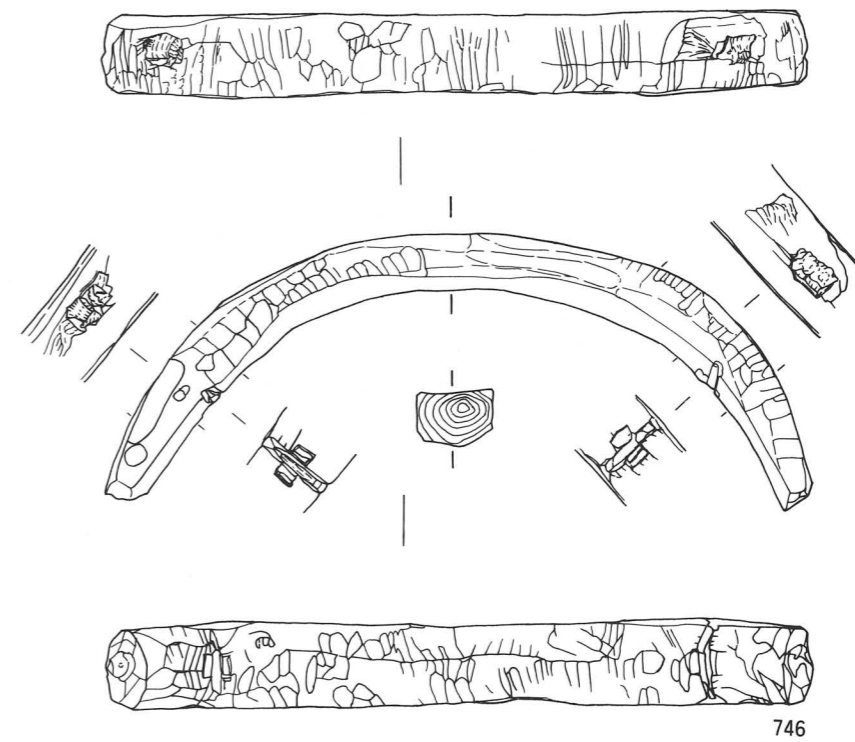
うら側

No. 3

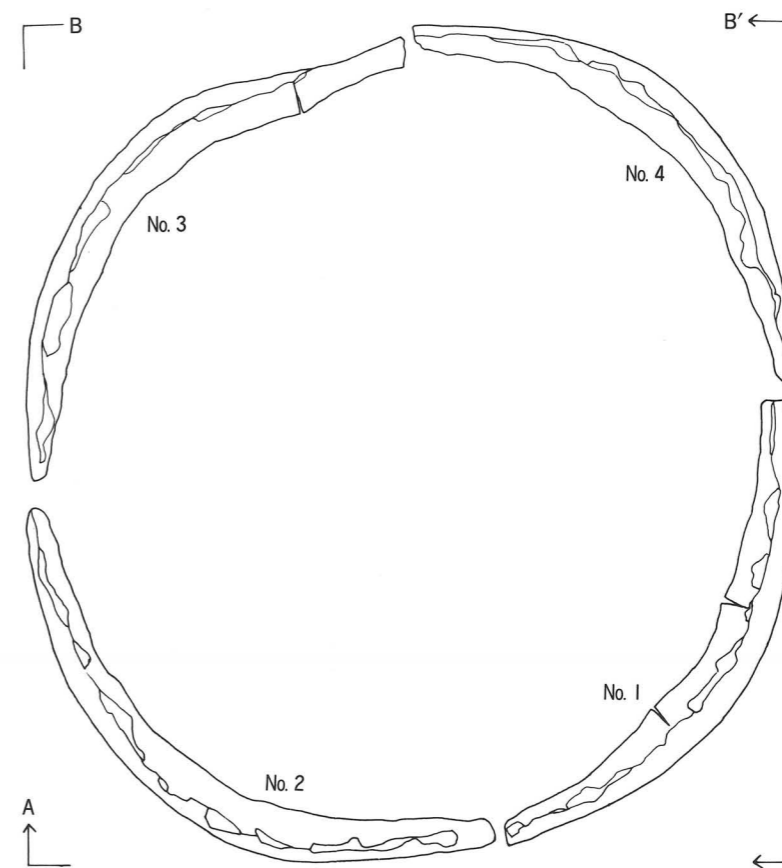
B

No. 4

745



746



No. 3

No. 4

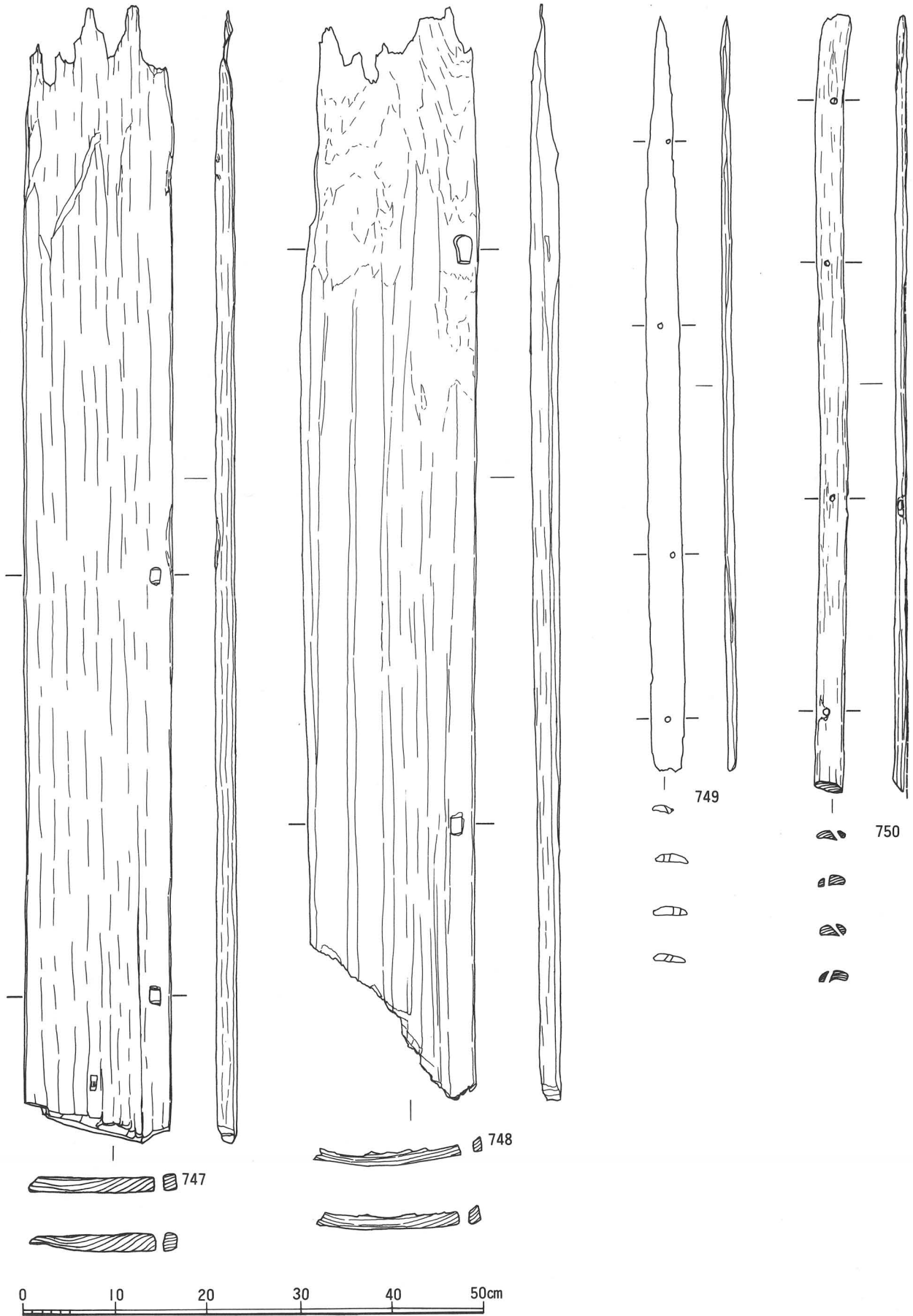
No. 1

No. 2

A

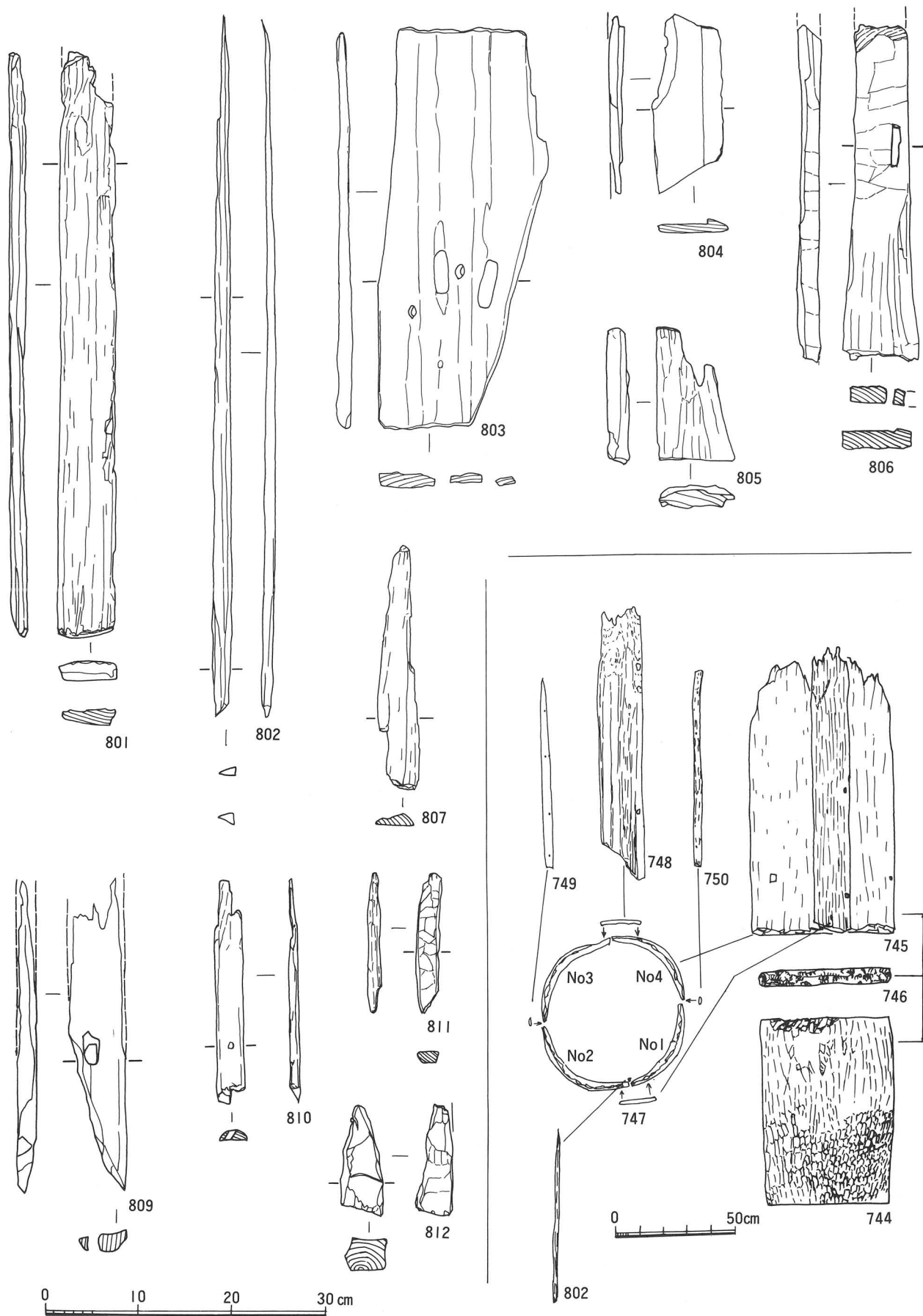
A'

第36図 SE201の出土遺物



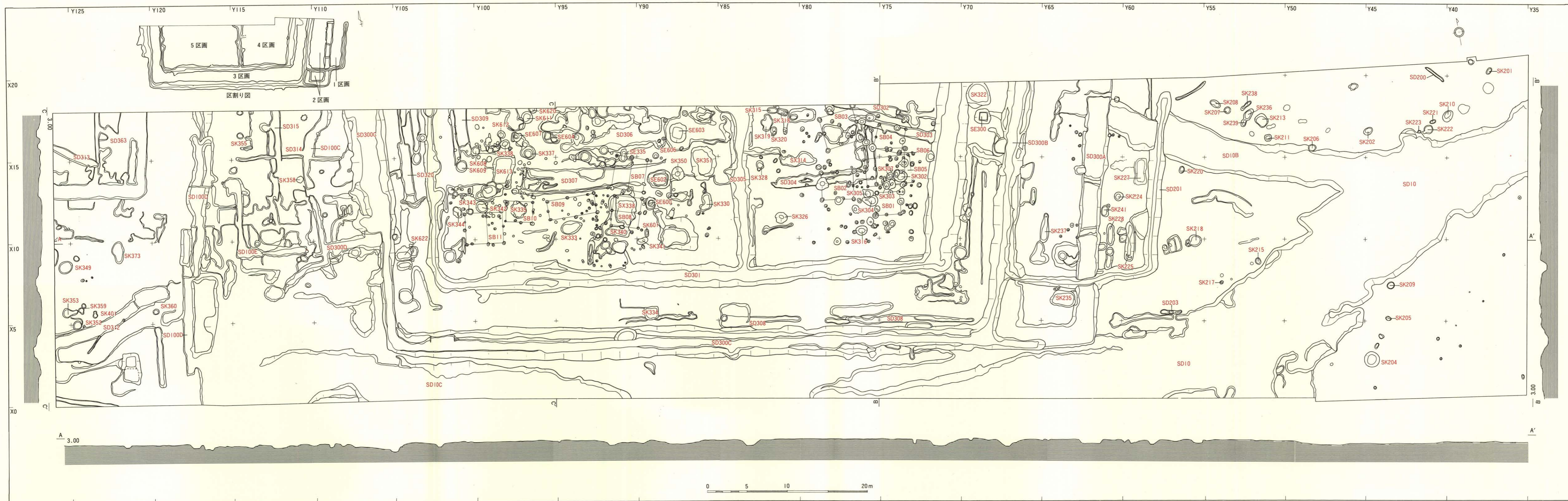
第37図 SE201の出土遺物





第38図 SE201の出土遺物





第39図 X1~22 Y36~127区遺構配置図



#### 包含層X22・23Y44・45区出土（第32図706～723）

遺物は弥生時代末から古墳時代にかけてのものである。706～708・719・720は壺であり、706は少し外反する筒状の口縁部を付け、707は口縁部が外反し体部が大きく張り出す。708は頸部を強く絞り短く外反する口縁部の先端が内傾させ丸く収める。体部は丈高の卵形をなし外面に縦方向のハケ目調整を施し、内面を薄くヘラケズリしている。また、口縁部形態が708と類似する722は内傾する口縁部に一条の沈線を入れている。

720は有段口縁をもち、器面の内外面をヘラミガキした壺である。口縁部から頸部にかけての内面屈曲部が2cm程の幅に水平に巡り、断面が内方に向って三角形に張り出している。その体部内面はヘラケズリしている。

710～712・716・717・721は有段口縁をもつ甕で、710には楕状具による擬凹線文を施し、711には有段口縁の外面にハケ目を、内面のみにヨコナデ調整を行なっている。他の破片は内外両面をヨコナデし、体部内面をヘラケズリしている。また717の頸部内面の屈曲面にもハケ目が残る。なお721は体部が強く張り出すもので、有段口縁の内外面をヨコナデしているが一部にハケ目が残る。709は小型の鉢または壺の底部であり、外面を赤彩している。

713・723は「く」の字状に外反した甕で、口縁端部は少し角ばり、713は小型の甕で短く口縁部が外反する。

714・715は高杯の脚部で、脚端部が大きく外反して開き、715には一周に四箇所の小孔があげられる。714の杯下端には沈線を配している。718は小さな脚部にあたり、鉢の脚部であろうか。

#### 包含層X22・23Y47・48区出土（第32図724～731）

724・725は有段口縁をもつもので、外面に楕状具による密接した間隔の擬凹線文を引いている。724は小型の壺であり、725は口縁部先端が先細った甕である。726は「く」の字状に外反した甕で、内外面にハケ目を留め体部内面をヘラケズリしている。728はろうと状に体部が開く鉢であり、底部を欠いているが中央に一孔があくものである。体部の内外面はヘラミガキされているが煤状炭火物の付着はない。

727は二個一対の小孔をあけた高杯の脚部であり、729は高杯の杯部で、外反した口縁部の方が柱状部までの長さより短く法仏期の時期にあたる。

#### SE01（第33・34図732～743、図版第46）

SE01の井戸側732は、原木の中を筒状に削り貫いた一木作りのものを用い、材質は小樺属の一種である。井戸側の大きさは、下端直径が60cm、中程の直径が55cm、現存する上端の直径が50cmであり、長さは最大1.43mを測る。この井戸側は、上端の腐食を除いて調査時に円筒形をなし遺存状況も良好であった。しかし、取り上げ後の保管段階で亀裂を生じ数個に割れてしまい、原形を失っている。

外面は全体に樹皮が剥がれた状態になっているが、根元側には工具による加工痕があり、内面には幅数cm余りの工具による削り痕が上下方向にほぼ全面にわたって認められる。この内面下半分は被熱を受け黒く焼け焦げた状態になっており、削り痕が表面の脆くなった部分や、炭化部を削った部分が観察され、加工にあたり火で内面を焼きこがしながら作業した様子が窺える。

733～743は井戸の中から出土した板材であり、733～736・740・741は幅が2.0～5.0cmで、厚さが1.0cmに満たない薄い板である。737・738・742・743は、幅が7～20cmで厚さが2.0cm前後の板材であり、いずれの板の一側面にも小さな孔があいている。

#### SE201（第35～38図744～750・801～812、図版第47・48）

井戸は下段に一木から削り貫いた桶744を井戸側に転用する。また上段には四枚に分割した側板745を円筒状に組み合わせ、下段の井戸側外面を取り巻くように20cm程重複して設置していた。四枚の板の合わせ目には、土の流入を防ぐために幅の狭い板をそれぞれ外面から当てられていた。更に下段の井戸側の上面には、半円状の部材を小口面に乗せた状態で検出された（第38図右下及び図版第48の746）。

上段の井戸側745は、大径木を四分割したものの内面を弧状に削り貫いている。No.1～4の各部材は上端の厚さが1.5cmあり、下端の厚さが2.5cmであり、内外面の表面が平滑に削り込まれている。四枚の部材を組合せると少し隅丸方形になるため下端の大きさは、62～70cmと幅がある。なお上端では大きさが数cm狭くなる。部材下端の幅は、No.1が41.5cm、No.2が46cm、No.3が46cm、No.4が41cmであり、41cmと46cm代に収まっている。長さは、112～121cmであるが上端は腐植して本来の長さは不明であるが、少なくとも井戸の掘り方上面まで、井戸側が立ち上がっていたものと思われ、更に20～30cmが加算されよう。またこの井戸側の材質はスギである。

この部材の下端には、工具による削り込みの加工痕が残り、側面には長さ1.5～2.0cm、幅1.0cm前後の大きさの四角い孔が上下に二個対となるようにあけられている。この孔は部材を柄差しの方法で接合させ、井戸側を円筒形に組合せていた。なおNo.1・No.2の各部材の中段には下端から23cmの高さのところ、No.1には5cm、No.2には幅6cmの大きさの四角い孔があけられている。No.1・No.2の各部材の間には、第37図747の板材（長さ130cm・幅16cm・厚さ2.2cm）が外面に当てられていた。板には二箇所2.0cm×1.0cmの角孔があるが、部材の孔の位置と少しずれている。No.1とNo.2の部材の間には、802の長さ76cm、幅2cmの厚さ1.1cmの細長い板をはさみこんでいた。

No.2・No.3の各部材の間には、前記と同じように748の板材（長さ117cm・幅19cm・厚さ2.2cm）を用いており、片方の縁辺の上下二箇所にも角孔はあけられ、柄差しの方法で板を固定したものとみられる。またNo.3とNo.4の部材間及びNo.4・No.1の部材の間に用いられていた749・750の各板は、長さ82cmと84cmで、幅が3cm程、厚さが1.2cm程の似た大きさのものが使用されていた。板には共に2～3mmの本釘を打ちこんだ小さな孔が四箇所にあいている。

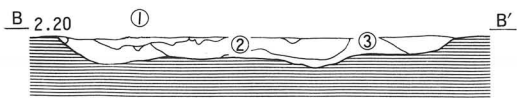
下段の井戸側744は、桶の底面側を上に向け逆さにして据えていた。桶の大きさは高さが80.8cm、外寸法は短径が39.4cmで、長径が41.4cmとほぼ円形であり、厚さ3.0～4.0cmである。底部は底板の受け部をもうけるために、下面から8.5cm高さのところが内面に向けて2.0cm程厚さを増している。

内面には幅3.0cm程の鋭く削り込む工具痕が上下方向に残り、外面にも同様の工具痕がみられる。桶の上面と下面の小口は平滑に仕上げられているが、下端外面には全体の1/5にあたる場所に、伐採時の削り痕であろうか斜め方向の加工痕が入る。材質はトネリコ的一种である。

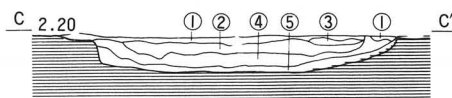
746の加工材は、本来の用途が不明である。大きさは外径が58cmで、内径が51cmの弓状にそった半月形をしている。両端を結んだ長さは56cmで、厚さは6.1～6.5cmである。原材には弓状にそった芯材の枝を用いている。その加工は両面を平坦に削り込み、弧状に反り内外面を細かく削り込む。両端は先端を鏗節のように徐々に細くし相似形に削っている。両端から11・12cmの箇所には、内側に幅1cm程で深さ3mm程の浅い「U」字状の溝を縦方向に彫り込む。溝内には高さが2.0cmで、内面の幅が3.0cm、外面で幅が4.0cmの四角い孔をあけ、別の部材を孔に埋め込んでいる。この他に井戸内からは、801・803～812の板材が出土した。

(上野)

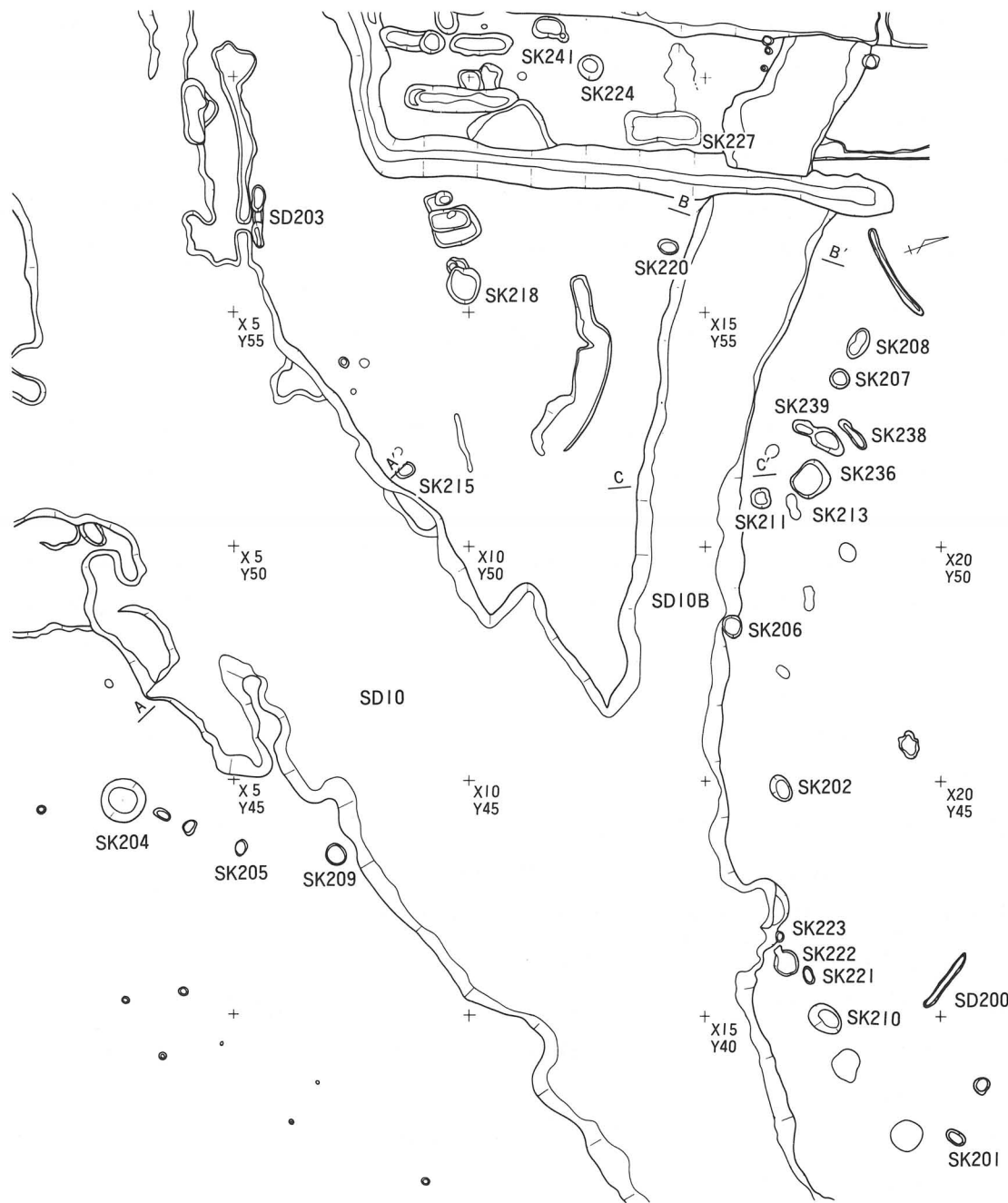
SD10B



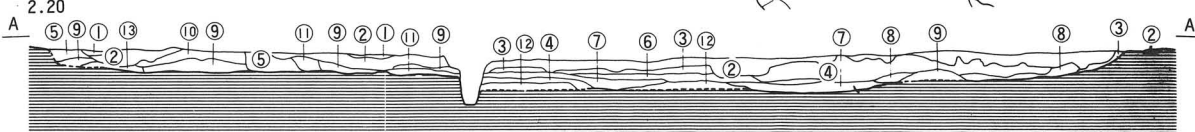
- ①黒褐色砂質土
- ②灰白色粘土
- ③青灰色砂質土



- ①黒褐色土 酸化鉄が斑状に見られる。微量の炭化粒を含む。しまり強く、やや粘性がある。
- ②灰白褐色粘質土 橙褐色を呈する酸化鉄が斑状に見られる。しまりやや強い。
- ③灰白褐色粘質土 酸化鉄部分が②に比べて少ない。しまりやや強い。
- ④灰白褐色粘質土 一部に酸化鉄化した部分が見られる。しまりやや強い。
- ⑤青灰白色砂層 一部酸化鉄化し、黄色味を帯びる。ややもろい。

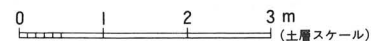


SD10



- ①黒褐色砂質土 粘性やや有り。
- ②暗灰褐色粘質土 炭化物を微量含む。
- ③明灰褐色粘質土
- ④黄灰褐色粘土
- ⑤黄灰褐色粘土 鉄分を含まず。
- ⑥暗灰褐色粘質土
- ⑦黒褐色砂質土 粘性やや有り。炭化材・木質片を少量含む。
- ⑧暗灰褐色砂質土
- ⑨青灰色砂質土
- ⑩灰色砂質土
- ⑪青灰色土
- ⑫暗灰色土
- ⑬黄灰白色土
- ⑭暗灰色土
- ⑮黄灰白色土

地山。  
粗粒。  
砂礫。炭化材。木質片を少量含む。  
砂層。やや粗粒。



第40図 SD10・10B (Y36~62区付近) (1/300)

## 7 本調査の遺構・遺物 (Y36~127区)

### (1) 弥生時代の遺構

遺構は、河川跡2条・溝1条・土坑22基を検出した。溝及び土坑の分布状況は、概して河川跡に沿う様にX61以東に構築されている。

**SD10** (Y36~80区) (第40図、図版第1の5~7) Y56付近よりX16方向に走り、南西方向に緩やかに斜行する。規模は現長70m・幅9~14m・深さ0.4~0.5mを測り、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。遺構埋土は13層に分層され、地点毎の堆積は概ね同様と言える。また、第2層の暗灰褐色粘質土よりほぼ全域に渡り、微量の炭化粒子が検出される。遺物は1~3層を中心とし、多くの弥生土器が出土した。

**SD10B** (第40図) Y46~60区をX16軸に沿い東西に走り、東方向に緩やかに斜行し、Y47地点でSD10に連結する。規模は現長28m・幅4~5m・深さ0.3~0.4mを測り、底面はY51付近では平坦でY53以西でやや起伏する。遺構埋土はY51付近で5層に、Y56付近では3層に分層され、第1層の黒褐色土より微量の炭化粒子が検出される。遺物は1層と2層の交わりを中心に、多くの弥生土器が出土した。

**SD200** (第41図) X21Y42区に位置し、主軸は34°西偏する。規模は長さ2.9m・幅0.3m・深さ0.13mを測る。遺物は弥生土器及び珠洲が出土する。

**SD203** (第41図) X6 Y58区に位置し、東西に長軸をもつ。遺構は帯状に掘り込まれた後に、不整楕円形の穴を2基穿つ。規模は長さ2.7m・幅0.5m・深さ0.06~0.15mを測り、埋土は2層に分かれる。遺物は1層より弥生土器が出土。

**SK201** (第41図) X21Y31区に位置する。平面は0.55×0.9mの楕円形を呈し、深さは0.3mを測り、底面は平坦である。埋土は2層に分かれ、2層は埋め戻し、1層は自然堆積である。遺物は2層の灰褐色砂質土より弥生土器が約10点ほど出土。

**SK202** (第41図) X18Y46区に位置する。平面は0.85×1.2mの楕円形を呈し、深さは0.2mを測り、底面は皿状である。埋土は2層に分かれ、2層は埋め戻し、1層は自然堆積である。遺物は1層の黒褐色砂質土を主体に弥生土器が約5点ほど出土。

**SK204** (第41図) X3 Y43区に位置する。平面は1.8×1.9mの円形を呈し、深さは0.38mを測り、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分かれる自然堆積である。遺物はない。

**SK205** (第41図) X6 Y44区に位置する。平面は0.5×0.7mの不整楕円形を呈し、深さは0.1mを測り、底面は平坦である。埋土は黒褐色砂質土の単層である。遺物はない。

**SK206** (第42図、図版第7の1) X17Y50区に位置する。平面は0.85×0.9mの円形を呈し、深さは0.4mを測り、底面は平坦である。埋土は3層に分かれ、2・3層は埋め戻し、1層は自然堆積である。遺物は2・3層の灰白色砂質土、黒褐色砂質土より弥生土器などが11点ほど出土。

**SK207** (第42図) X19Y55区に位置する。平面は径0.85mの円形を呈し、深さは0.16mを測り、底面は皿状である。埋土は黒褐色砂質土の単層である。

**SK208** (第42図、図版第7の2) X17Y31区に位置する。平面は0.8×1.4mの長楕円形を呈し、深さは0.1mを測り、底面は皿状である。埋土は2層に分かれる自然堆積である。遺物は弥生土器が1層と2層の交わりより多数出土。

**SK209** (第42図) X8 Y48区に位置する。平面は径0.9mの円形を呈し、深さは約0.25mを測り、底面は平坦である。埋土は2層に分かれる。遺物は1層の暗灰褐色砂質土より弥生土器細片が出土。

**SK210** (第42図) X19Y49区に位置する。平面は1.0×1.6mの不整楕円形を呈し、深さは0.3mを測り、底面は平坦である。埋土は2層に分かれ、1層には若干の炭化物を含む。遺物は1層と2層の交わりより弥生土器が4点ほど

出土。

**SK211** (第42図、図版第7の3) X18Y52区に位置する。平面は0.85×0.9mの不整楕円形を呈し、深さは0.25mを測り、底面より上面にかけてU字状に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、2層は埋め戻し、1層は自然堆積である。遺物は弥生土器が2層の灰白色砂質土より5点ほど出土。

**SK213** (第42図) X18Y53区に位置する。平面は1.3×1.65mの隅丸方形を呈し、深さは0.38mを測り、底面は平坦である。埋土は3層に分かれる自然堆積である。遺物はない。

**SK215** (第42図) X9 Y52区に位置する。平面は0.65×0.85mの不整楕円形を呈し、深さは0.22mを測り、底面は起伏があり壁は緩やかに立ち上がる。埋土は3層に分かれる自然堆積である。遺物はない。

**SK217** (第42図) X8 Y55区に位置する。平面は0.45×0.5mの不整円形を呈し、深さは0.2mを測り、底面は概ね平坦である。埋土は2層に分かれる自然堆積である。遺物はない。

**SK218** (第42図) X11Y57区に位置し、小土坑を切り込み構築される。平面は1.35×1.4mの不整楕円形を呈し、深さは0.4mを測り、底面は平坦で概ね垂直に立ち上がる。埋土は3層に分かれる自然堆積で、最上層に黄白色砂質土がのる。遺物はない。

**SK220** (第42図、図版第7の4) X15Y58区に位置する。平面は0.6×0.9mの楕円形を呈し、深さは0.17mを測り、底面は平坦である。埋土は黒褐色砂質土の単層である。遺物は弥生土器が21点ほど出土。

**SK221** (第43図) X17Y42区に位置する。平面は0.45×0.8mの楕円形を呈し、深さは0.14mを測り、底面は平坦である。埋土は黒褐色砂質土の単層である。遺物はない。

**SK222** (第43図) X18Y43区に位置する。平面は1.1×1.3mの円形を呈し、壁の一部が攪乱により消滅する。深さは0.17mを測り、底面は平坦である。埋土は黒褐色砂質土の単層である。遺物はない。

**SK223** (第43図) X18Y43区に位置する。平面は0.3×0.4mの不整円形を呈し、深さは0.8mを測り、底面は平坦である。埋土は黒褐色砂質土の単層である。遺物はない。

**SK224** (第43図) X11Y61区に位置する。平面は径1.1mの円形を呈し、深さは0.45mを測り、断面形はU字状を呈する。遺物は2層より弥生土器が出土。

**SK227** (第43図) X16Y60区に位置し、南北に長軸をもつ。平面は1.2×3.9mの長方形を呈し、深さは最深で0.15mを測る。遺物は弥生土器2点が出土。

**SK236** (第43図) X18Y53区に位置し、SK239を切り込み構築される。平面は0.9×1.5mの不整楕円形を呈し、深さは0.28mを測り、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は4層に分かれ、2層以下が埋め戻し1層は自然堆積である。遺物は弥生土器1点が出土。

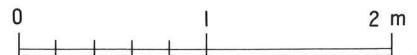
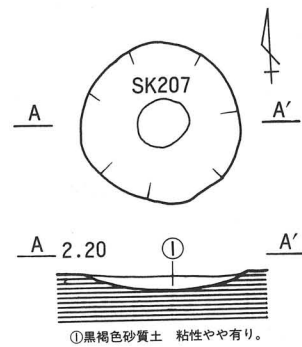
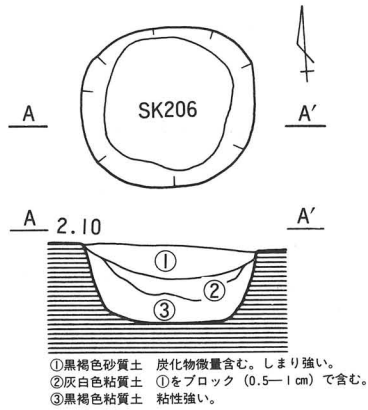
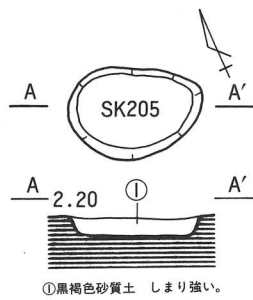
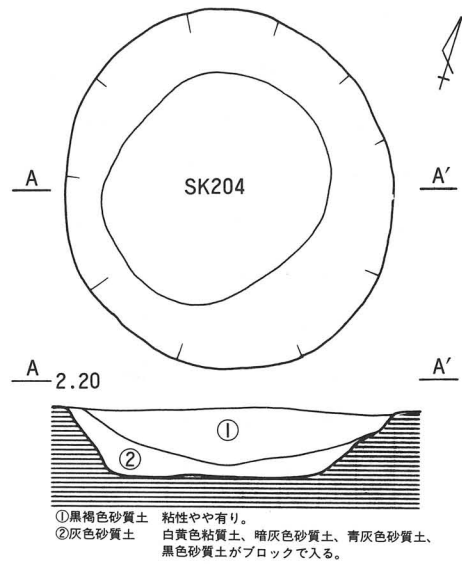
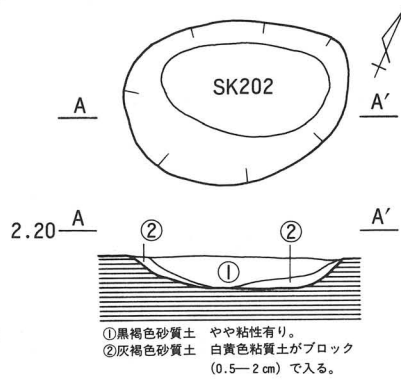
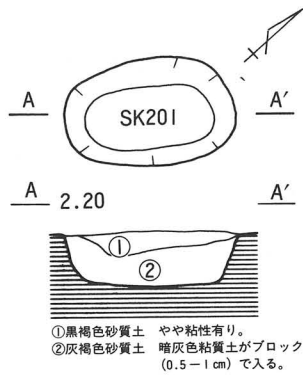
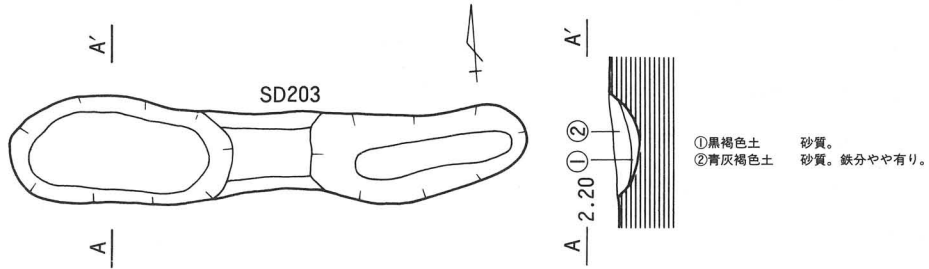
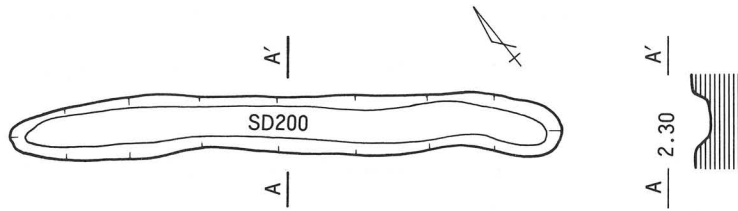
**SK237** (第43図) X11Y66区に位置する。平面は1.0×3.5mの不整長楕円形を呈し、深さは0.39mを測り、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層の黒褐色砂質土には微量の炭化材を含む。遺物は1層より弥生土器数点が出土。

**SK238** (第43図) X19Y53区に位置する。平面は0.35×1.65mの不整楕円形を呈し、深さは0.1mを測り、底面は平坦である。埋土は2層に分かれ、1層の黒褐色砂質土には微量の炭化材を含む。遺物は1層より弥生土器の細片が2点ほど出土。

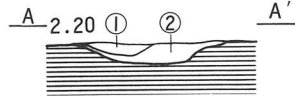
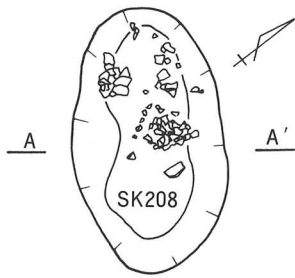
**SK239** (第43図) X18Y53区に位置し、SK236に切り込まれる。平面は0.64×1.1mの不整楕円形を呈し、深さは0.3mを測り、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は3層に分かれる。遺物は弥生土器2点が出土。

**SK241** (第43図) X13Y62区に位置する。平面は1.5×0.8mの不整長方形を呈し、深さは0.6mを測り、底面は平坦である。北東コーナーに円形の攪乱が入る。遺物は1層最上面より浮いた状態で中世土器2点を確認。

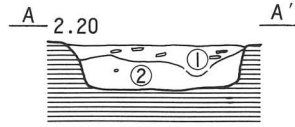
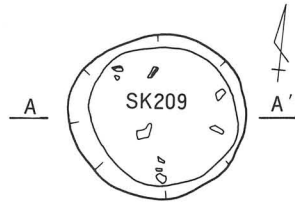




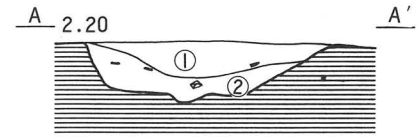
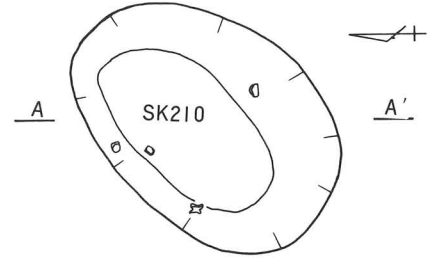
第41図 SD200・203, SK201・202・204~207 (1/40)



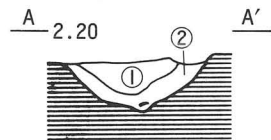
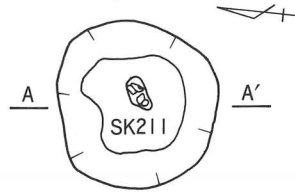
①黒褐色砂質土 しまり強い。  
②黒褐色砂質土 ①より色調暗い。



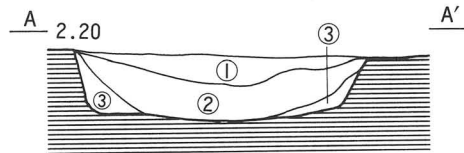
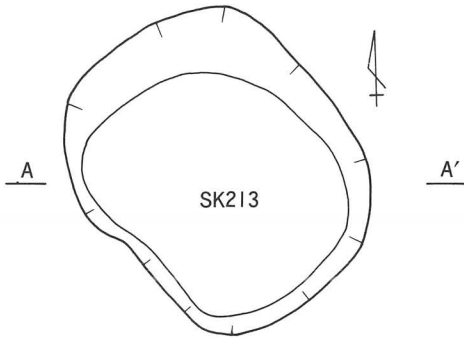
①暗灰褐色砂質土 粘性やや有り。  
②青灰色砂質土 ①を少量ブロック (0.5—1cm) で含む。



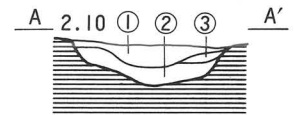
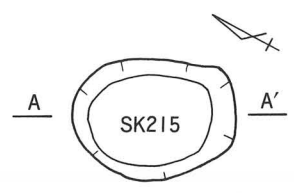
①暗灰褐色砂質土 炭化物少量含む。やや粘性有り。  
②暗灰褐色砂質土 やや粘性有り。



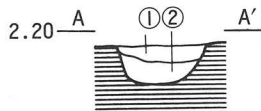
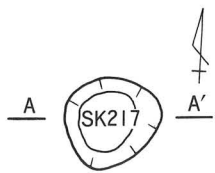
①黒褐色砂質土 しまり強い。  
②灰白色砂質土 ①がブロックで入る。



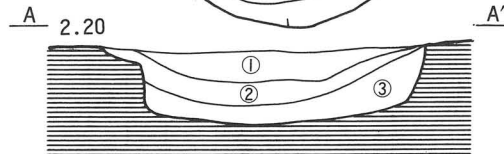
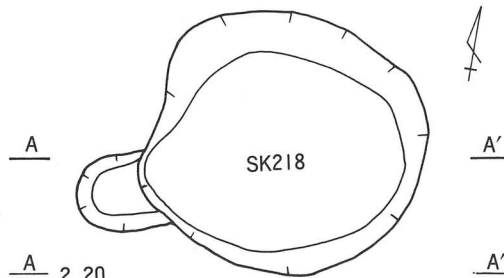
①黒褐色砂質土 粘性やや有り。  
②暗褐色砂質土 灰白色粘土がブロック (1—2cm) で入る。  
③灰褐色砂質土 酸化鉄の赤味を帯びる。



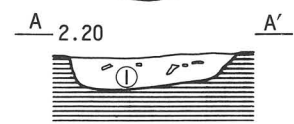
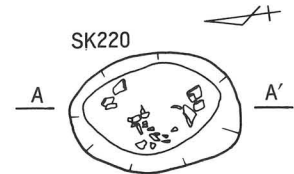
①暗褐色砂質土 粘性やや有り。  
②灰白色砂質土 しまり強い。  
③暗灰色砂質土 ①に似る。更に多くの砂を含む。



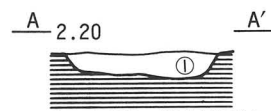
①黒褐色砂質土 しまり強い。  
②灰白色砂質土 ①がブロック (0.5—1cm) で少量入る。



①黄灰白色砂質土 しまり強い。  
②灰白色砂質土 ①がブロック (0.5—1cm) で入る。  
③黒色砂質土 粘性やや有り。



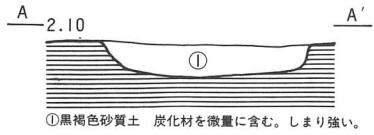
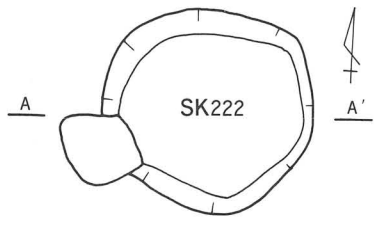
①黒褐色砂質土 しまり強い。



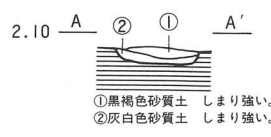
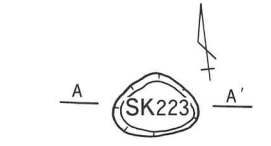
①黒褐色砂質土 炭化材を微量含む。しまり強い。



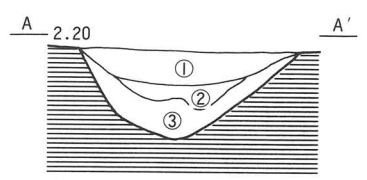
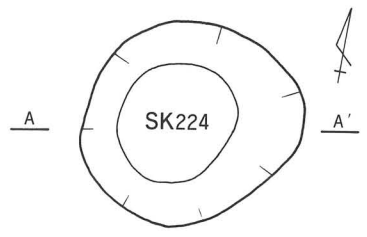
第42図 SK208~211・213・215・217・218・220・221 (1/40)



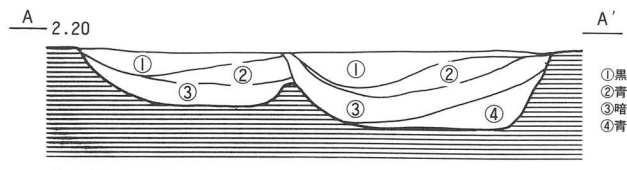
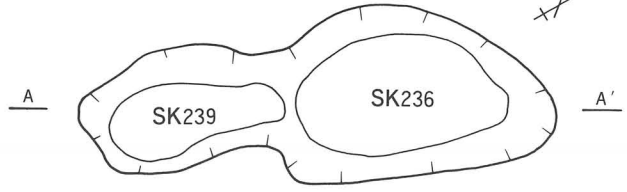
①黒褐色砂質土 炭化材を微量に含む。しまり強い。



①黒褐色砂質土 しまり強い。  
②灰白色砂質土 しまり強い。

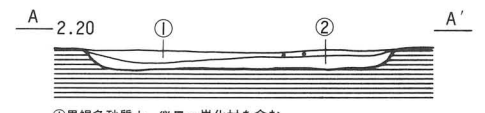
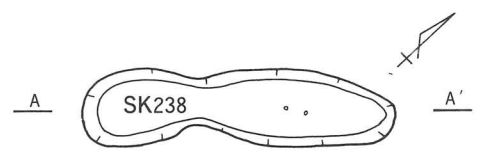


①黒褐色土 砂質だが粘性やや有り。炭化物微量含む。  
②灰白色土 粘質。①をブロック状に若干混入する。  
③黒褐色土 粘質。

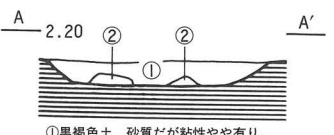
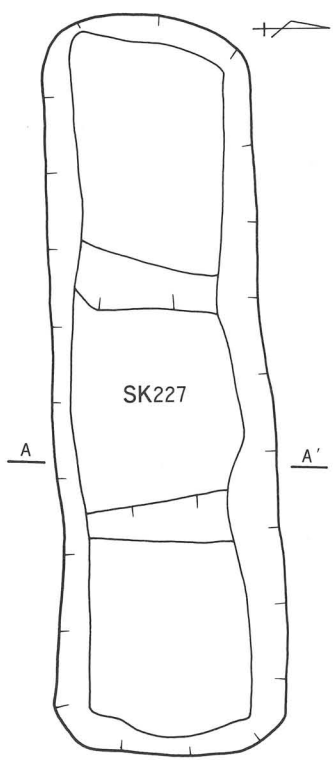


①黒褐色粘質土 微量の炭化粒子を含む。  
②灰白色砂質土 ①がブロック(1-1.5cm)で少量入る。  
③青灰色砂質土 粗砂

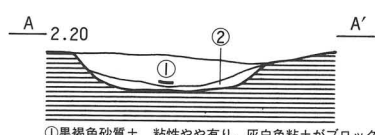
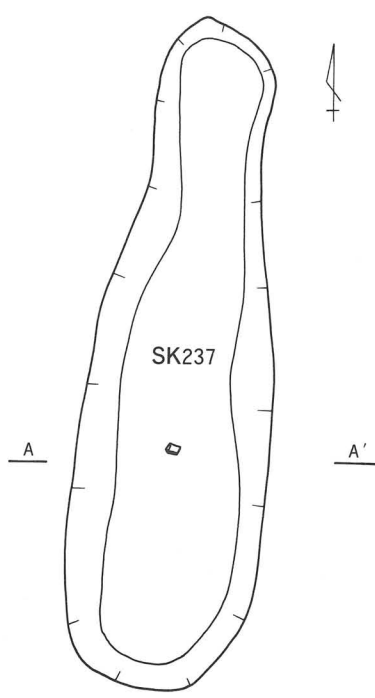
①黒褐色砂質土 やや粘性有り。灰白色粘土がブロック(0.5-1cm)で入る。  
②青灰色砂質土 灰白色粘土がブロック(0.5-1cm)で入る。  
③暗青灰色砂質土 灰白色粘土がブロック(0.5-1cm)で入る。  
④青灰色砂質土 酸化鉄の赤味を帯びる。



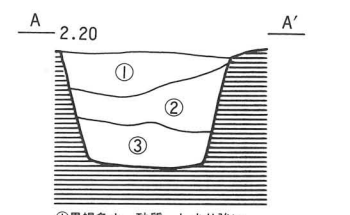
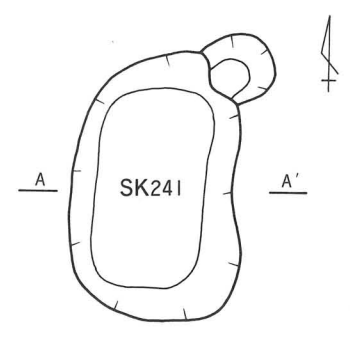
①黒褐色砂質土 微量の炭化材を含む。  
②灰白色砂質土 黄灰色粘土がブロック(0.5-1.5cm)で入る。



①黒褐色土 砂質だが粘性やや有り。  
②黒褐色土 黄褐色粘土粒を少量含む。



①黒褐色砂質土 粘性やや有り。灰白色粘土がブロック(0.5-1cm)で入る。  
②灰白色粘質土 微量の炭化粒子を含む。

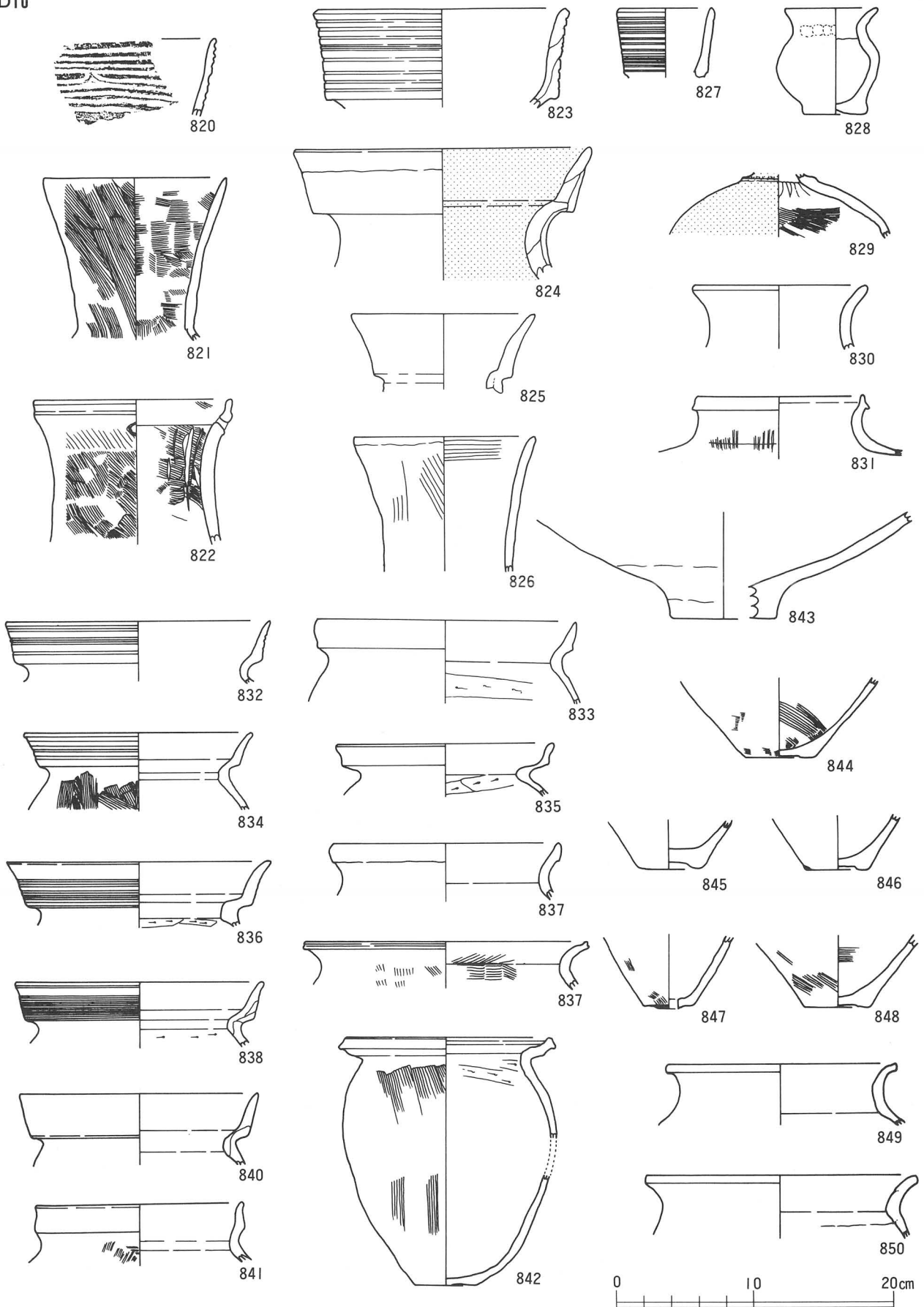


①黒褐色土 砂質。しまり強い。  
②灰褐色土 砂質。灰白色砂質土をブロック状に少量含む。  
③黒褐色土 粘質。青灰色粘質土をブロック状に少量含む。



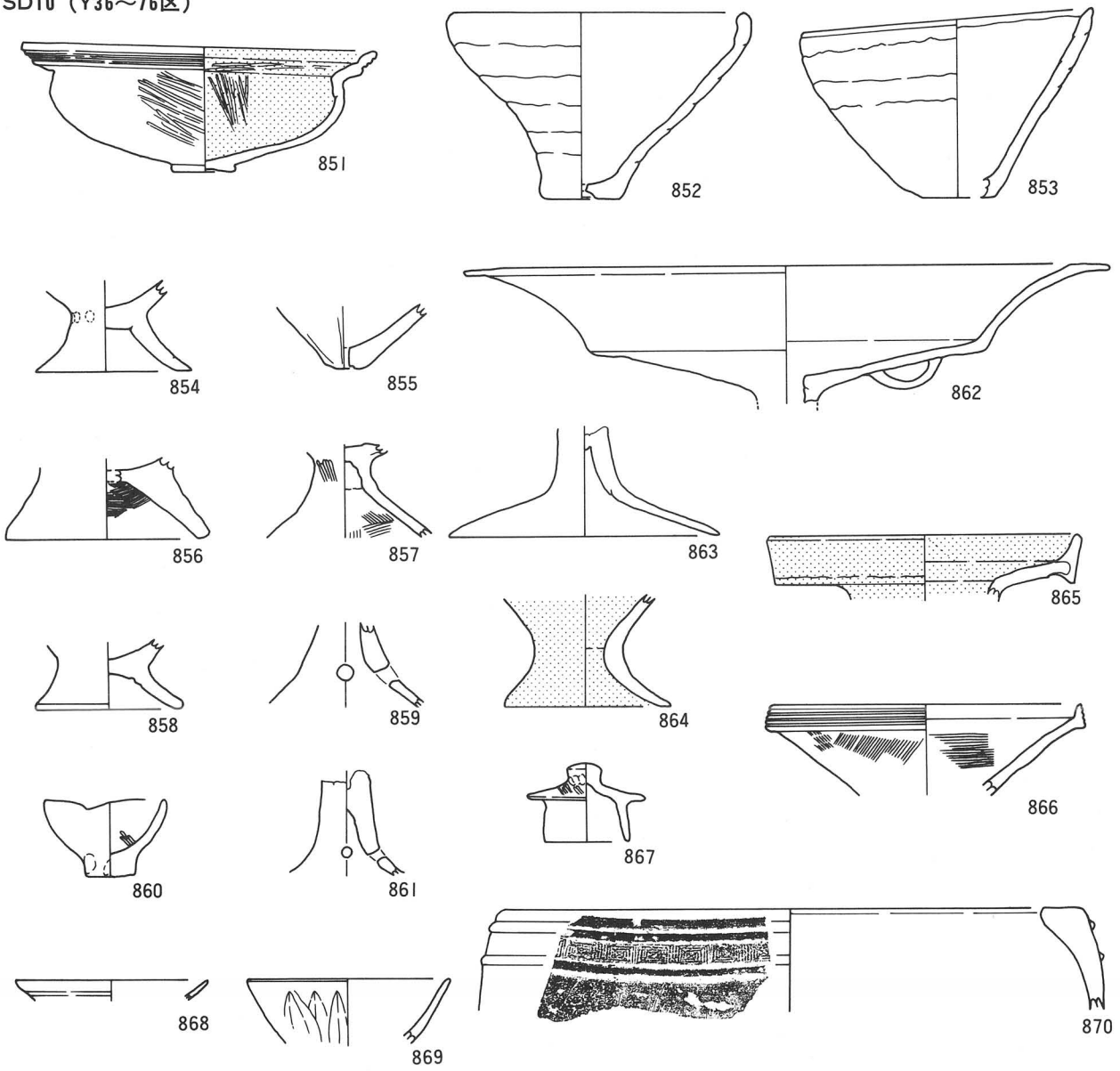
第43図 SK222~224・227・236~239・241 (1/40)

SD10

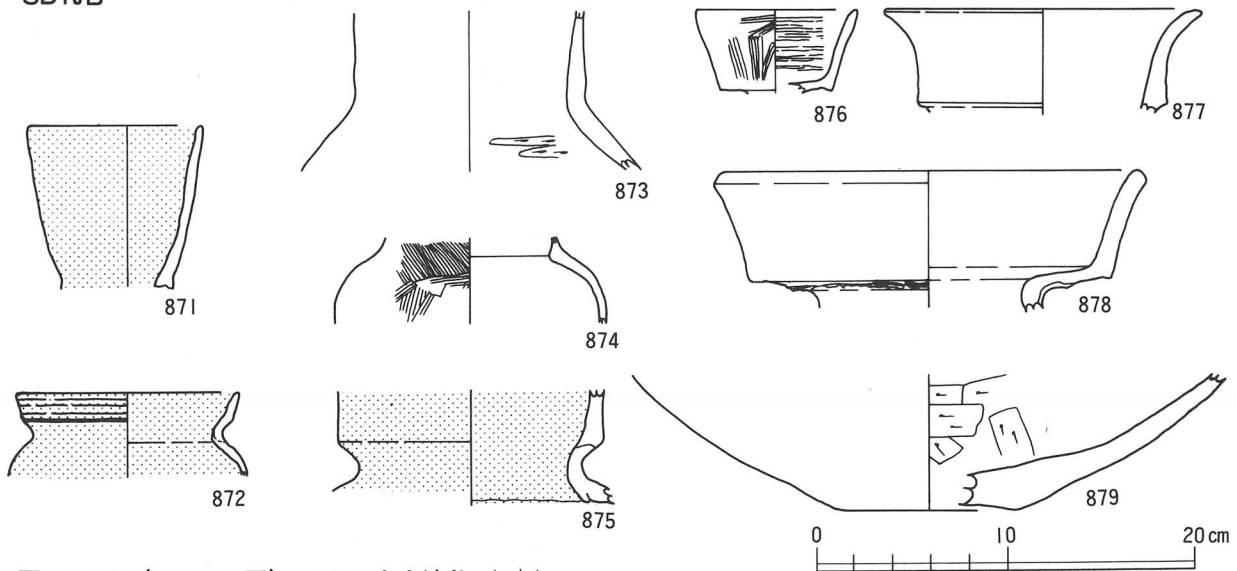


第44図 SD10 (Y36~76区) の出土遺物 (1/4)

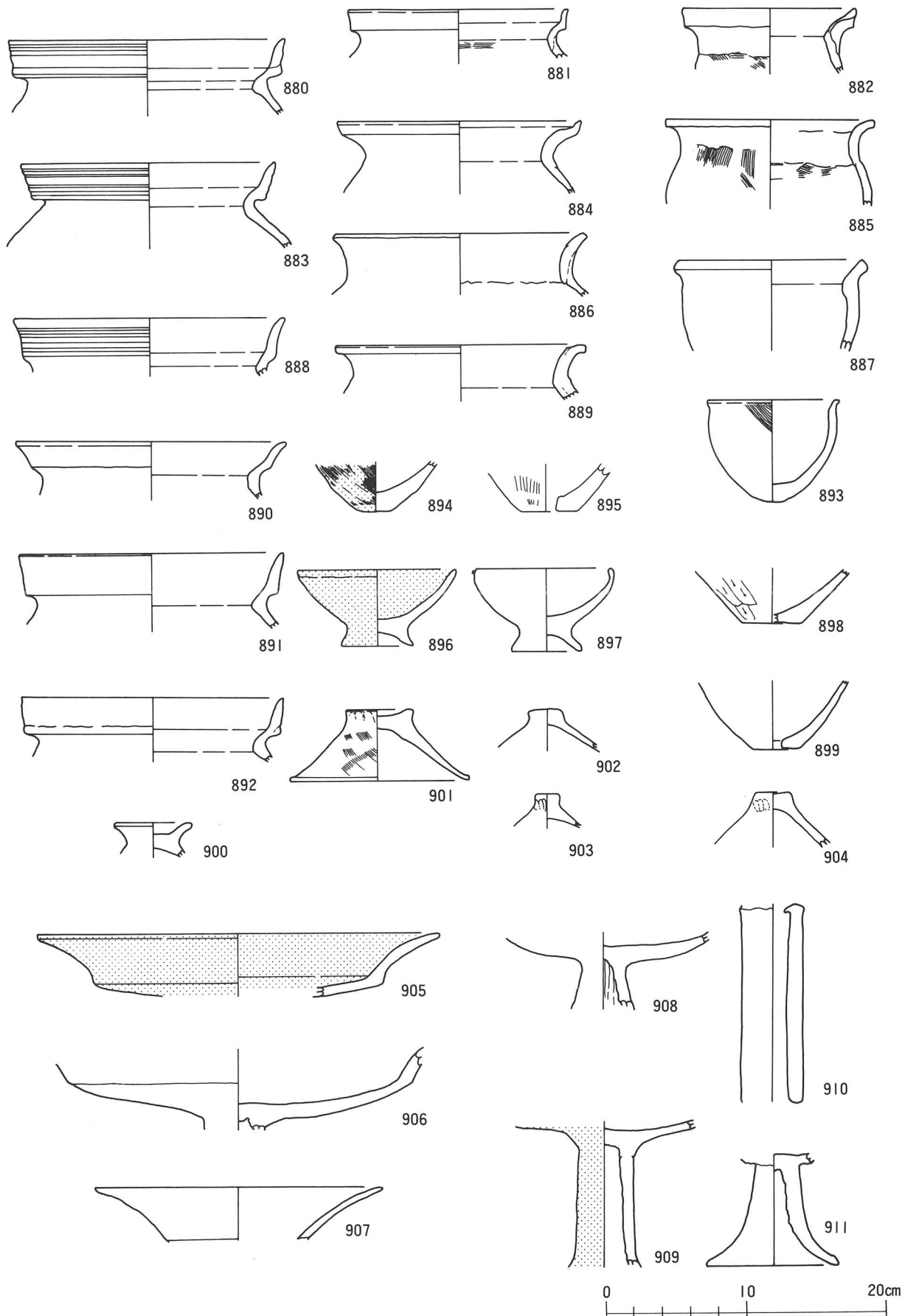
SD10 (Y36~76区)



SD10B

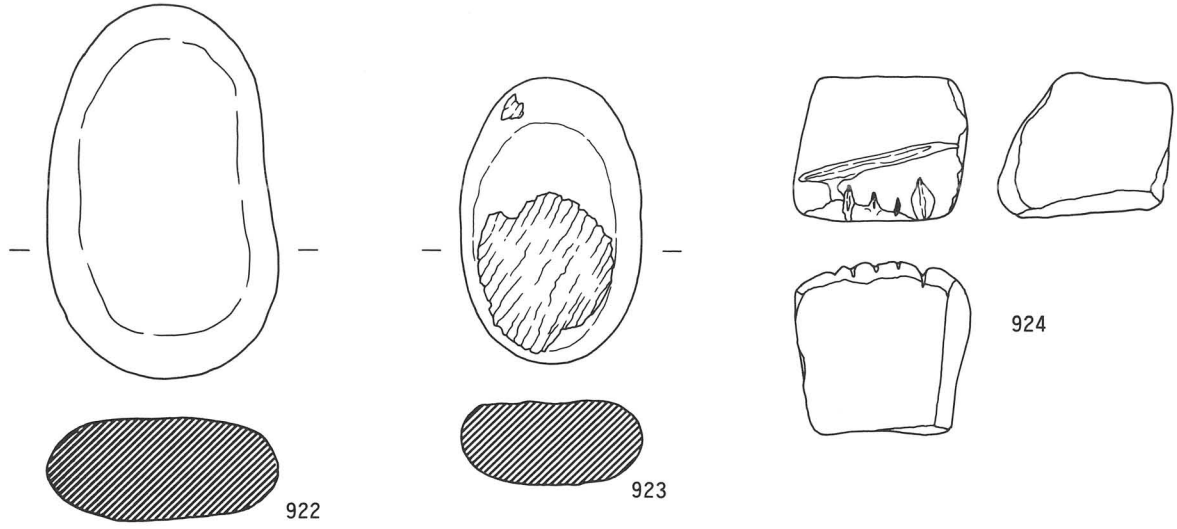
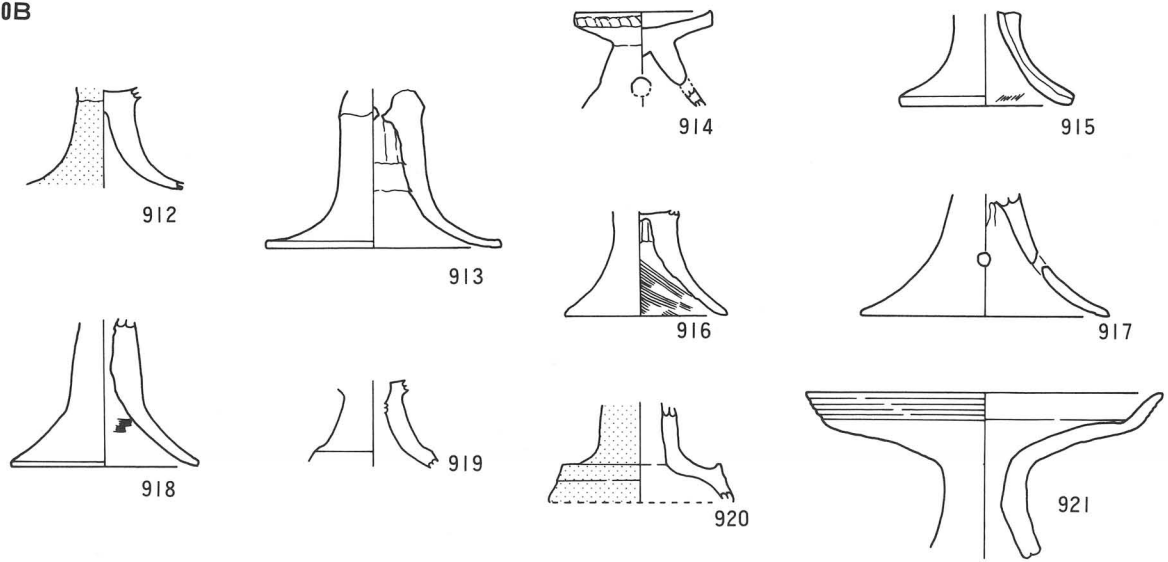


第45図 SD10 (Y36~76区)・10Bの出土遺物 (1/4)

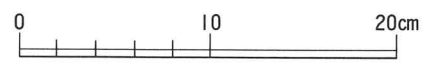
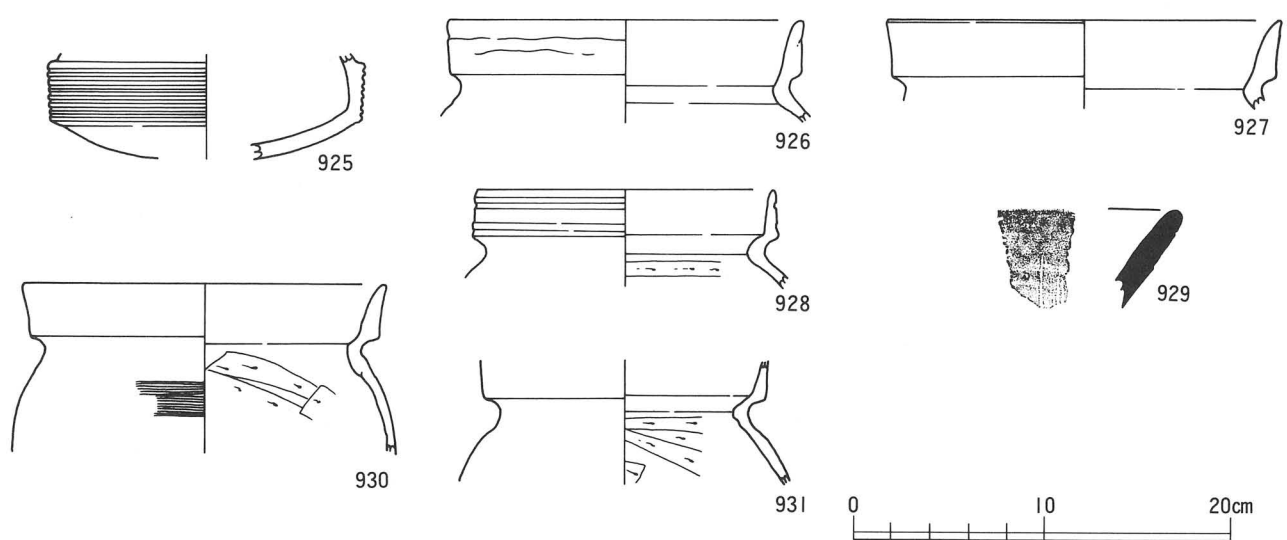


第46図 SD10Bの出土遺物 (1/4)

SD10B



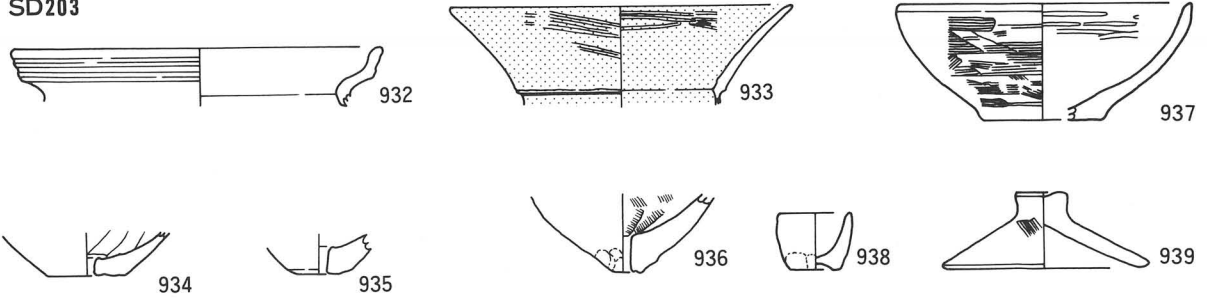
SD200



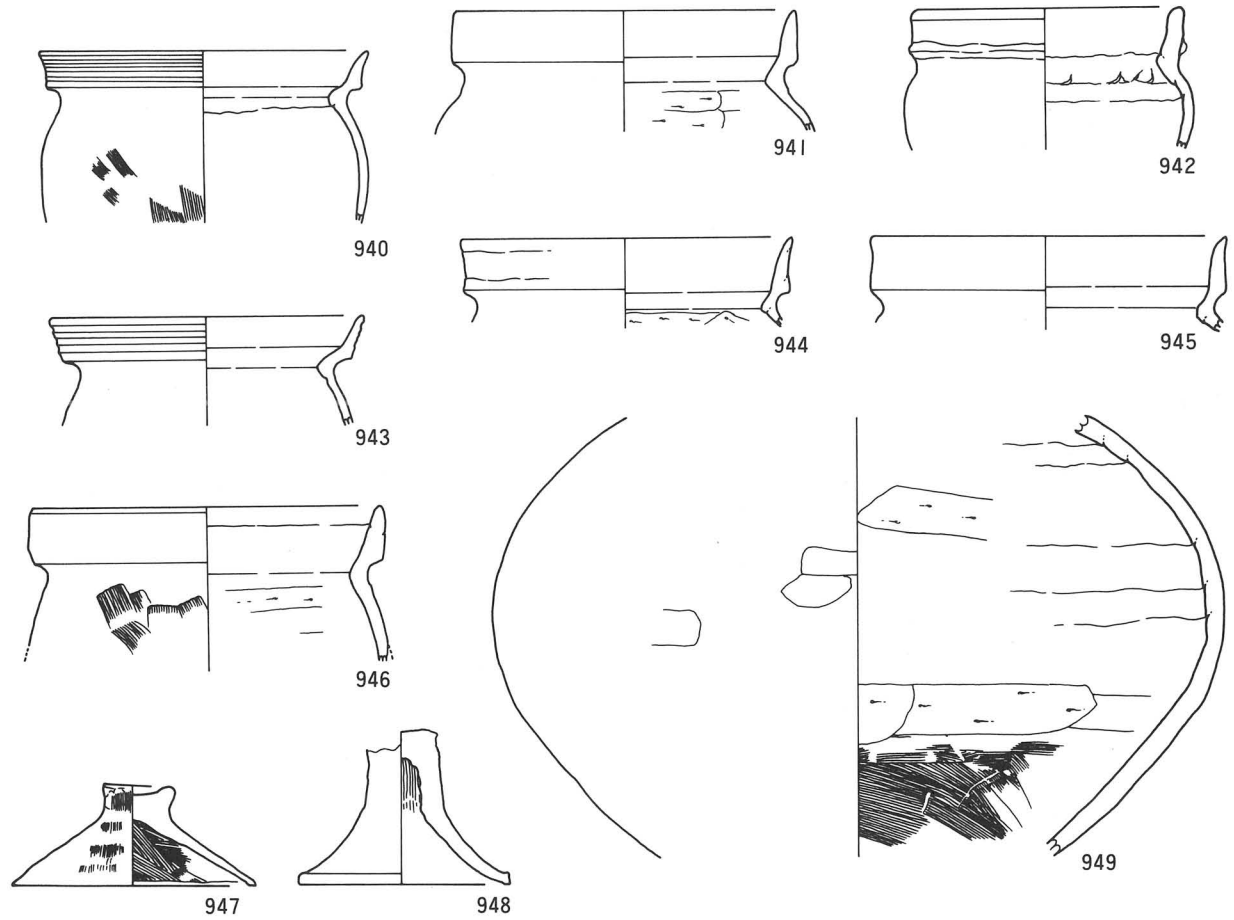
第47図 SD10B・200の出土遺物 (1/4)



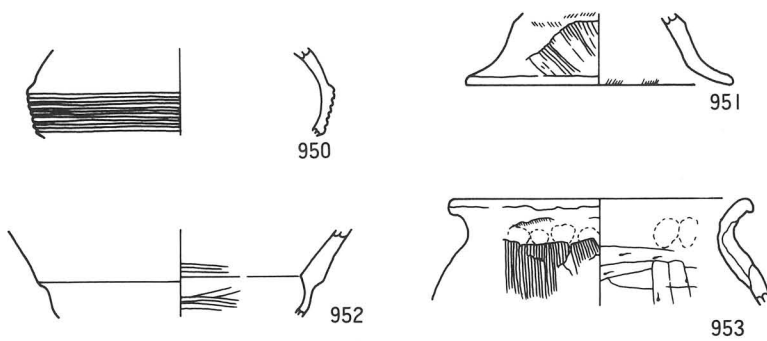
SD203



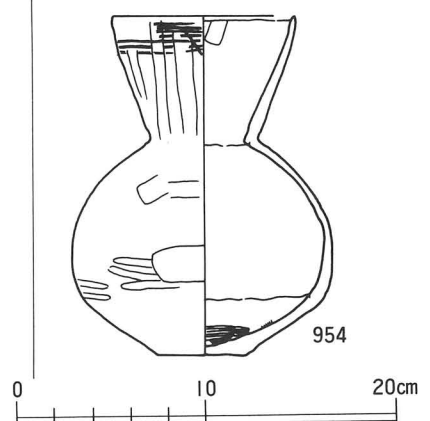
SK201



SK202

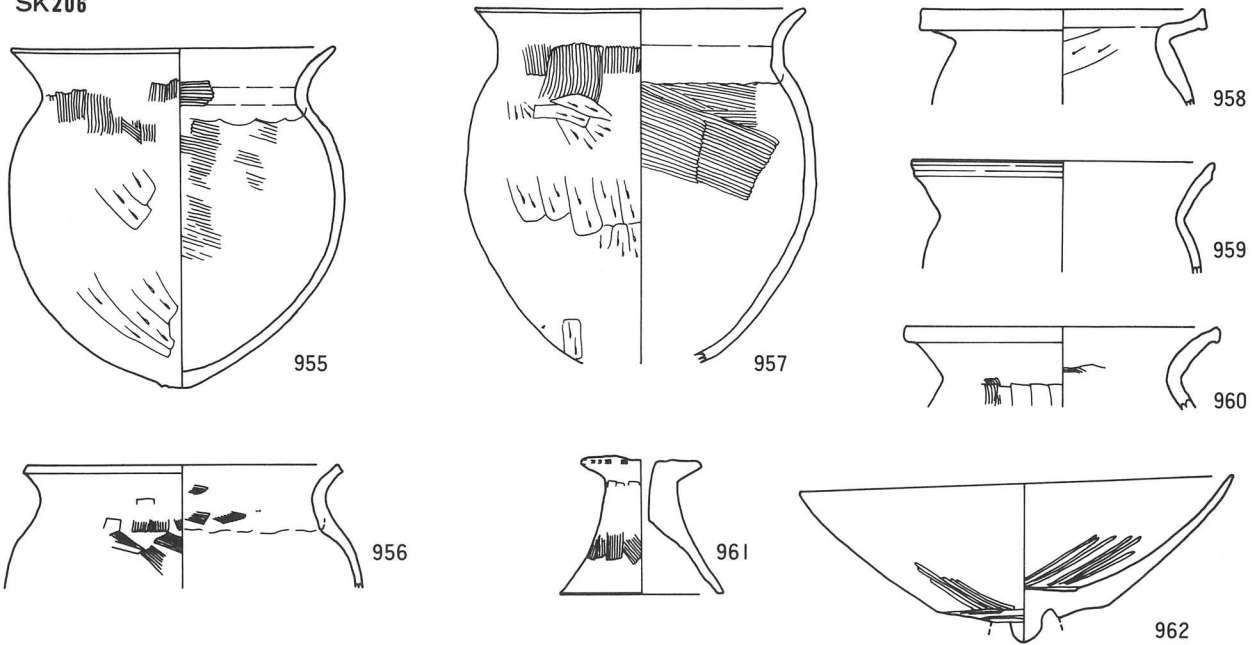


SK206

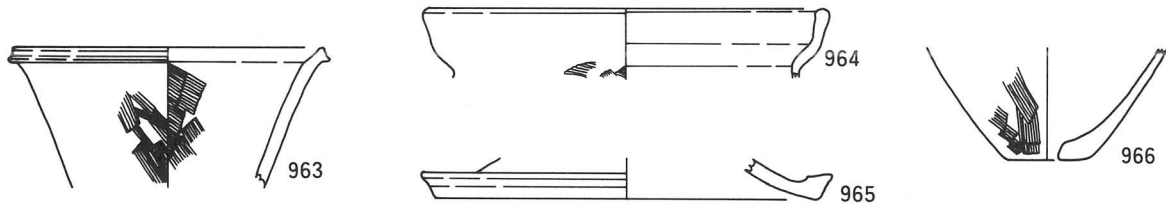


第48図 SD203, SK201・202・206の出土遺物 (1/4)

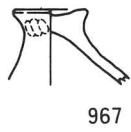
SK206



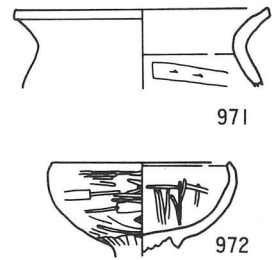
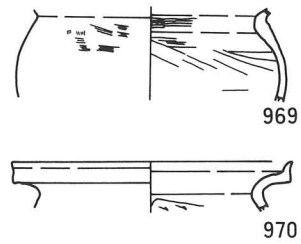
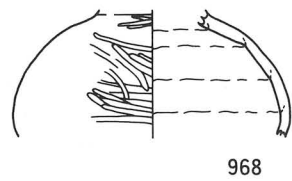
SK208



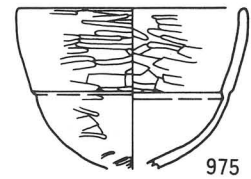
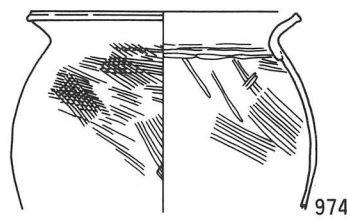
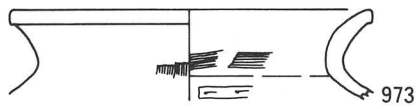
SK210



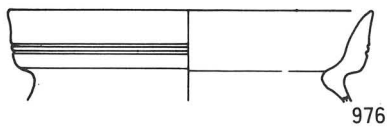
SK211



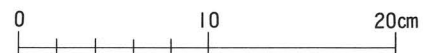
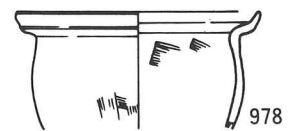
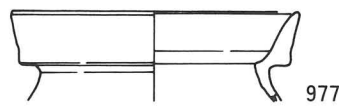
SK220



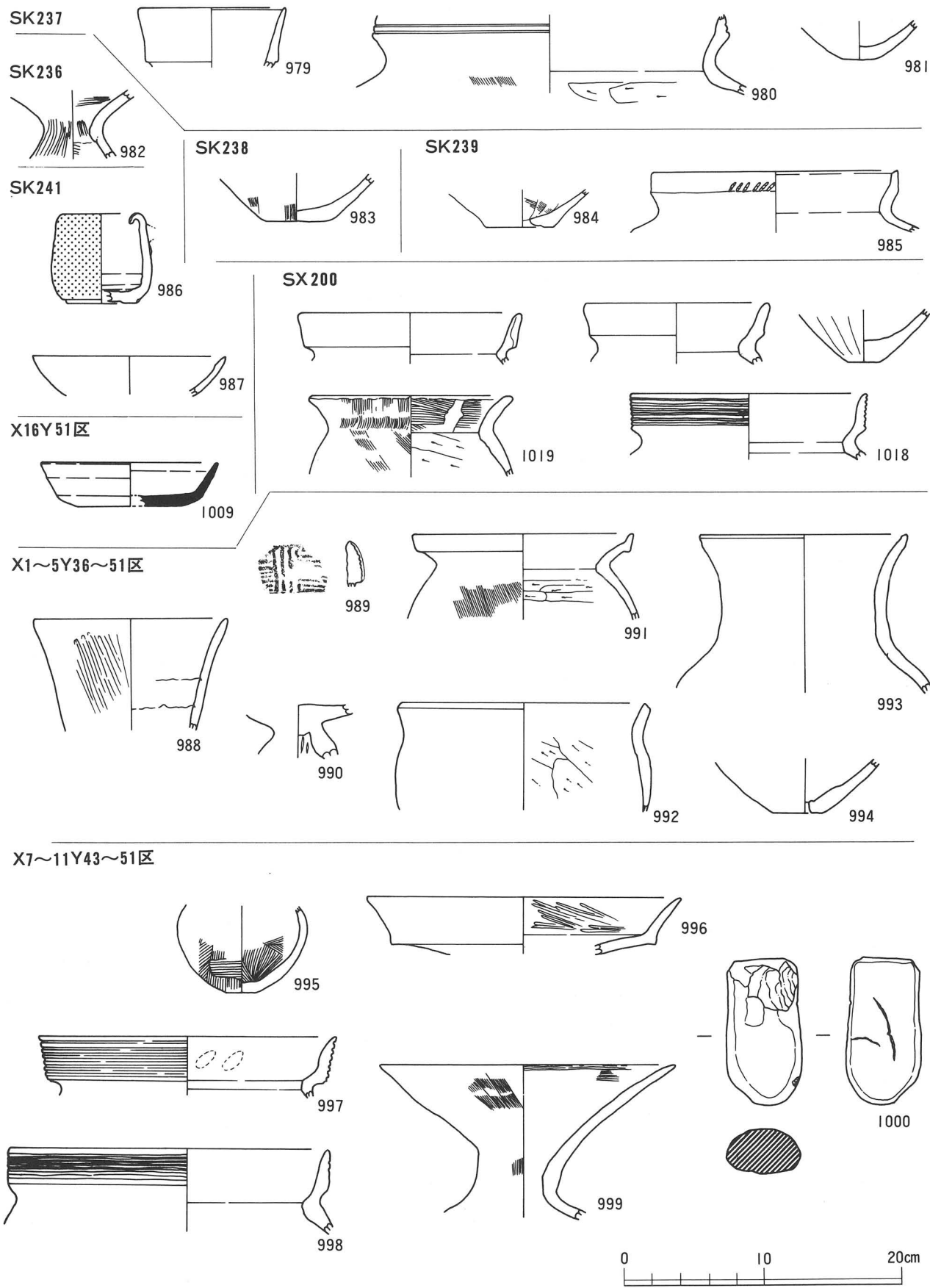
SK224



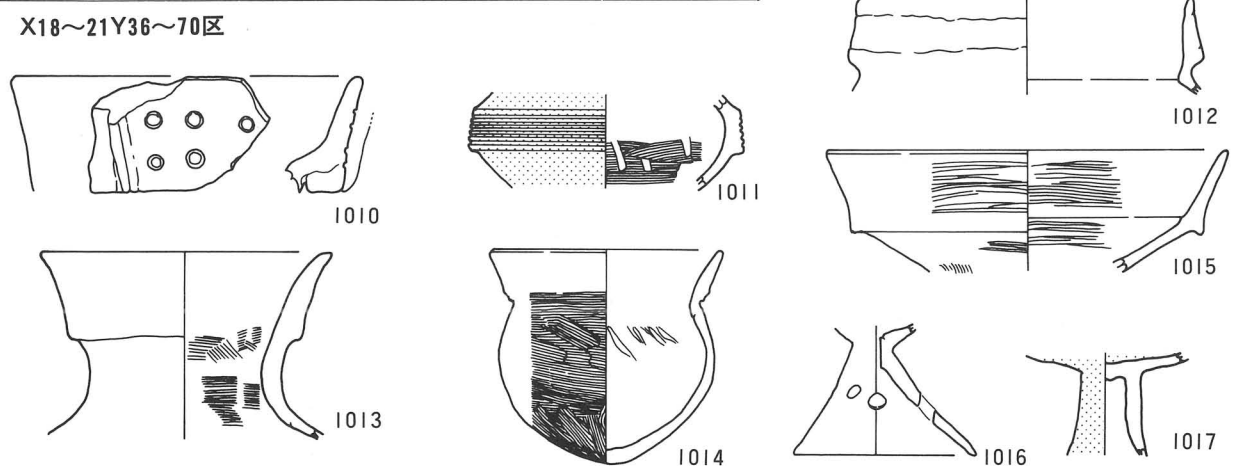
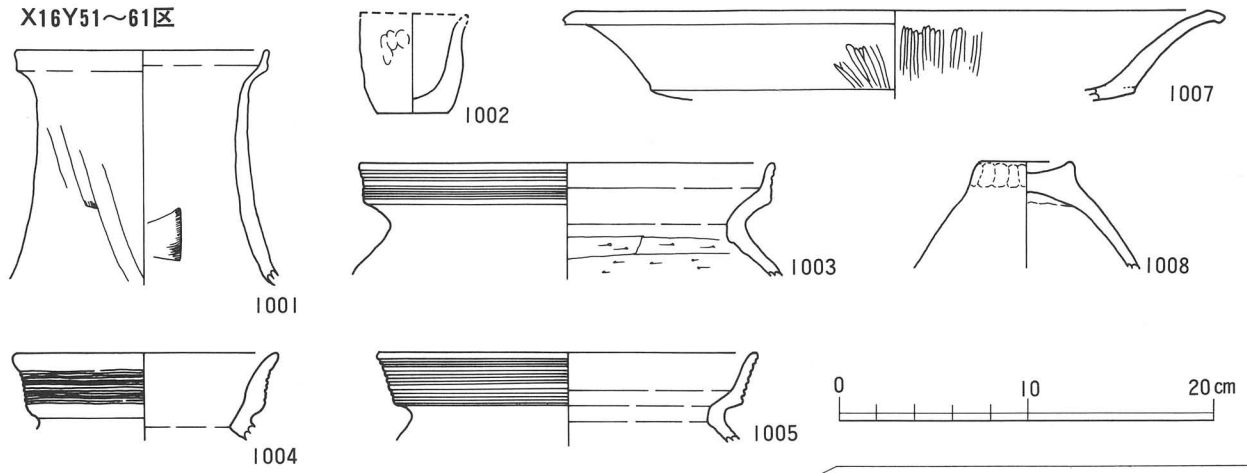
SK227



第49図 SK206・208・210・211・220・224・227の出土遺物 (1/4)



第50図 SK236~239・241, SX200, X16Y51区, X1~5Y36~51区, X7~11Y43~51区の出土遺物 (1/4)



第51図 X16Y51~61区, X18~21Y36~70区の出土遺物 (1/4)

(2) 弥生時代の遺物

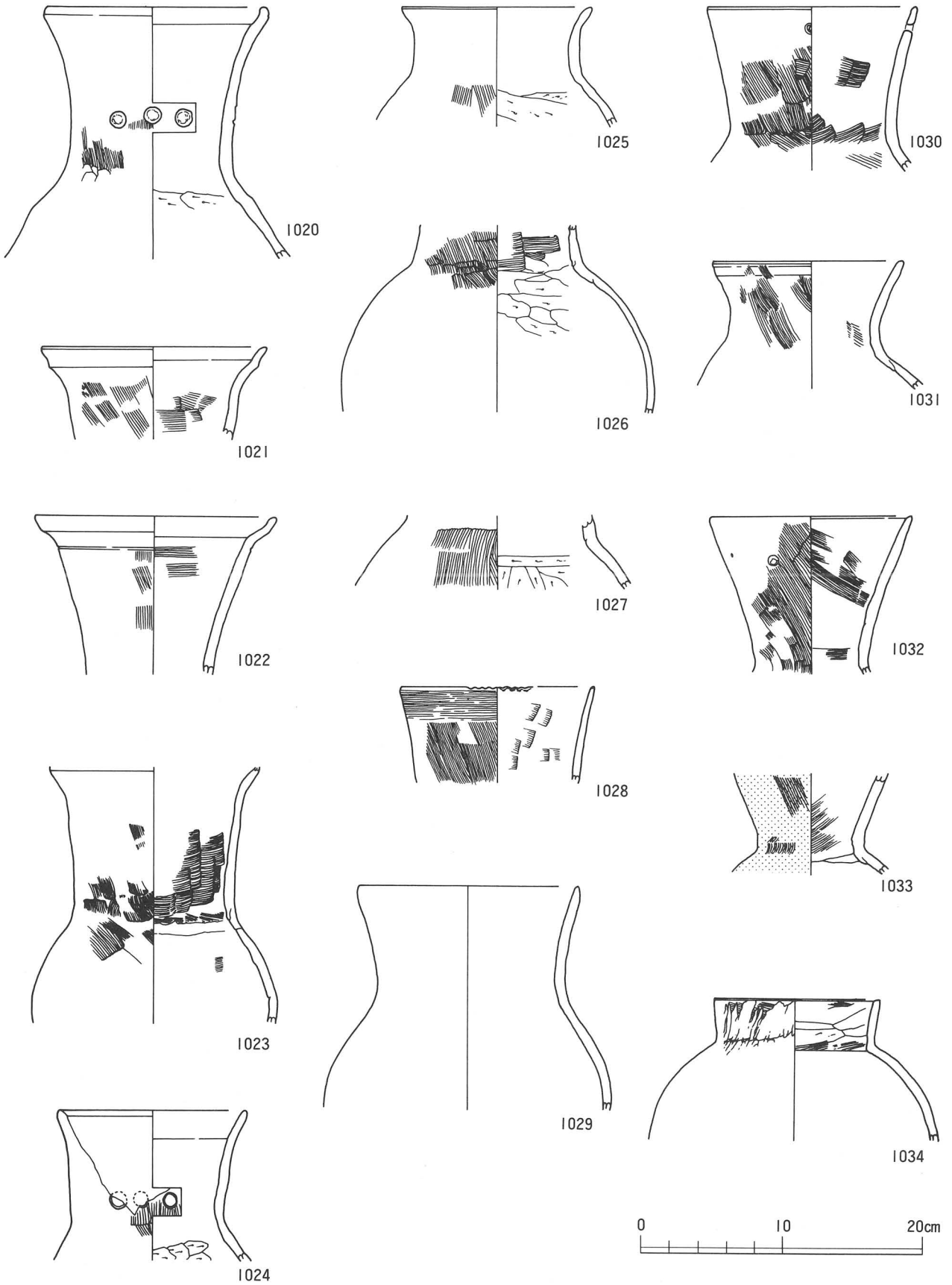
SD10 (Y36~76区) (第44・45図820~870、図版第27・第28の1)

820は縄文時代晩期後半に帰属する鉢の口縁部である。灰黒褐色を呈する器面には工字文を配し、その間には長楕円の沈線を引く。

**壺** (821~830・843・844・848) 821は口頸部が長く伸び外傾し、内外面にハケメ調整が施される。822は口縁部が長く幅のない有段口縁を持ち、口縁基部に径8mmの円孔が穿たれる。口縁部にはヨコナデ調整、内外面はハケメ調整が施される。823は幅のある有段口縁に、4条1単位と思われる楯状具により2段の擬凹線が引かれる。824は幅のない有段口縁を持ち、内面は赤彩される。825は有段口縁のやや幅のあるもので、口径は13cmを測る。826は口頸部が長く伸び、口縁部が短く外傾し、内外面に粗雑なハケメ調整が施される。827は口径7cmを測り、口頸部に12条の擬凹線が引かれる。828は口径6.5cm・器高7.2cmを測る、小型粗製の手づくね土器である。頸部には指圧痕が巡り、底部中央はやや盛り上がる。829は細頸壺で、内面にへら及びハケメ調整、外面に赤彩が施される。830は口縁部が弓なりに外傾する。843・844・848は器形、内部整形痕より壺と考えられる。843は底部を厚く仕上げ、844・848は内外面にハケメ調整が施される。

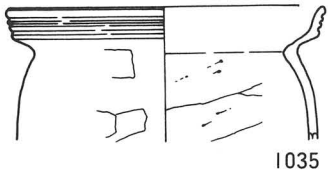
**甕** (831~842・845・846・849・850) 831は口縁部が弓なりに外反し、口縁端部を摘み上げ広げる能登甕と呼称されるものではなかろうか。832・834・836・838は有段口縁に擬凹線を引くもので、口縁部は緩やかに外反する。833・835・840・841は有段口縁を持つもので、口縁にヨコナデ調整が施される。837は口縁端部を肥厚させ有段口縁風に仕上げたものである。839・842・849・850は口縁部が[く]の字状に外反し、口縁端部は839・842が摘み上げ、849・850は角ばる。

X1Y56区

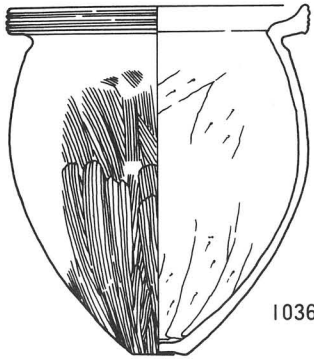


第52図 X1Y56区の出土遺物 (1/4)

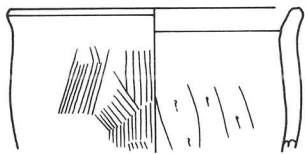
X1Y56区



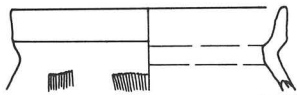
1035



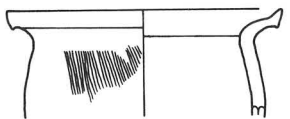
1036



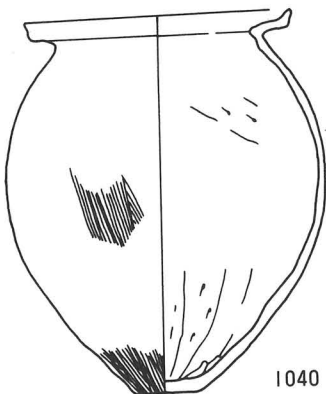
1037



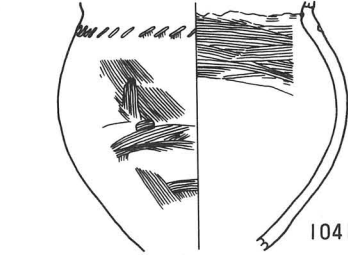
1038



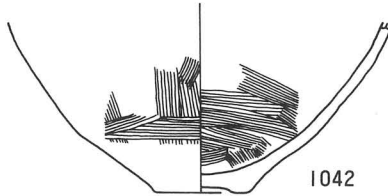
1039



1040



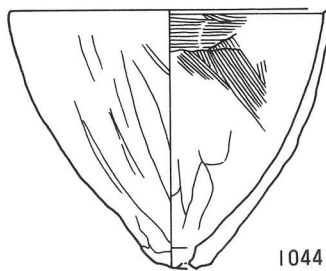
1041



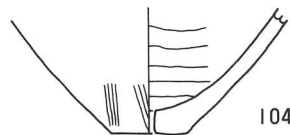
1042



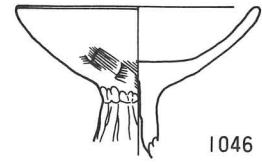
1043



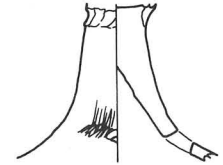
1044



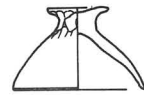
1045



1046

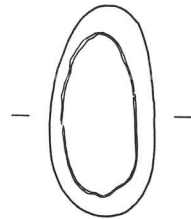


1047



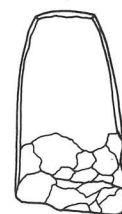
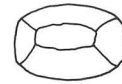
1048

X1Y66区

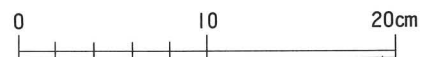


1049

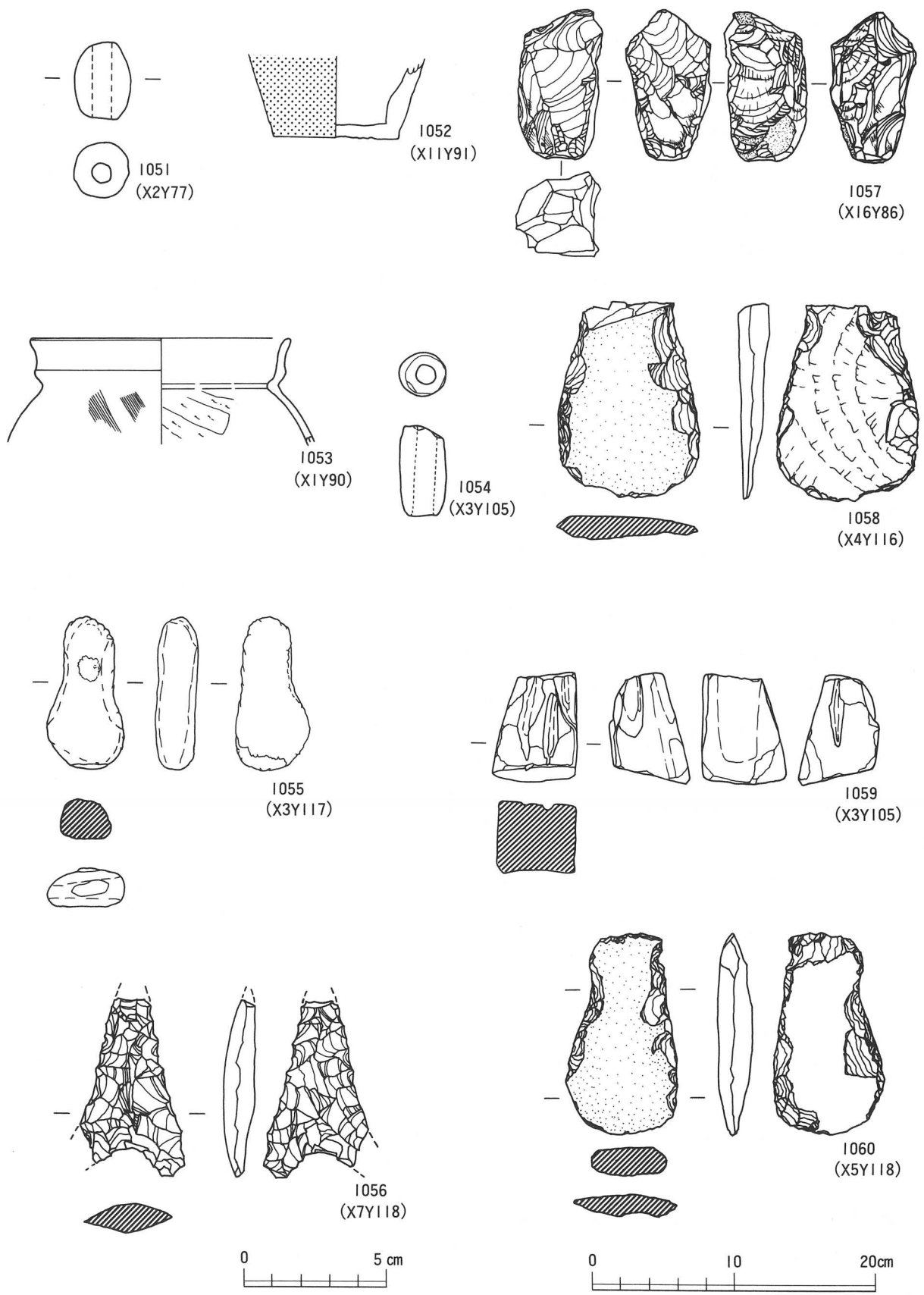
X1Y76区



1050



第53図 X1Y56区, X1Y66区, X1Y76区の出土遺物 (1/4)



第54図 遺構外の出土遺物 (1056は実大, 他は1/4)



**鉢** (847・851～853・855・860) 847・852・855は底部有孔のもので、852はキャリパー形を呈し、853は体部が内湾気味に立ち上がる。851は外傾度の高い有段口縁に擬凹線を引き、底部にはやや内返る高台を付ける。内外面に棒状具によるミガキ、内面には赤彩が施される。860は内面に棒状具によるミガキが施され、体部は内湾気味に開く。

**高坏** (854・856～859・861～863) 854・856・858は短脚で、脚端部は854が先細り、856は角ばり、858は丸く収める。857は「ハ」の字状に開脚し、859・861は短めの柱状部より裾部に至り広く開脚し、円形の透孔が穿たれる。862は口径37.5cmを測る有段の坏部で、口縁は弓なりに外傾し、端部は水平に面をとる。底部には一個の輪状の把手と思われるものが取り付けられる。863の脚部は短い柱状部より裾部に至り広く開脚する。

**器台** (864～866) 864は受け部と脚部の境は不明瞭で、内面には赤彩が施される。865・866は有段の受け部をもつもので、865は内外面に赤彩が施され、866はやや内傾した口縁に4条の擬凹線が引かれ、内外面にハケメ調整が施される。

**蓋** (867) 内面の返りが発達したもので、外面にはミガキ、つまみの基部外周には圧痕が認められる。

**白磁** (868) 15世紀前半の高台に挟りを持つ皿であろうか。色調は緑味を帯びる白泥色を呈する。

**青磁碗** (869) 腰部がやや丸みを持ち体部を直線的に伸ばし、口径は12cmを測る。器面には弁先が尖り、浮き彫り風に意匠された鎬連弁が配される。色調は渋みのある緑味青灰色を呈する。帰属年代は14世紀前半である。

**瓦質火鉢** (870) 口縁に1.4cmの間隔に2条の凸帯を巡らし、その間に時計回りの雷文が接続し配される。

**SD10B** (第45～47図871～924、図版第28の2・第29・第30の1)

**壺** (871・873～879) 871・873は口頸部が長く伸びたもので、871は内外面に赤彩が施される。874は肩部が張り出し、外面には不定方向のハケメ調整が施される。875～878はやや幅広の有段口縁を持つもので、875は内外面に赤彩され、876は内外面にヘラミガキが施される。口縁形態は様々でほぼ直立する875、直線的に外傾する876・878、口縁端部で強く外反する877がある。879は底径9.5cmを測り、内側面にヘラケズリが施される。

**甕** (880～886・888～892・894) 880・883・888は外傾した有段口縁に擬凹線を引き、881・890～892は有段口縁にヨコナデ調整を施す。882・884～886・889は口縁が「く」の字状に外反したもので、882・884は口縁端部を摘み上げ広げる。他の口縁端部は角ばる。894は外面に緻密なハケメ調整が施され、煤の付着が見られる。

**鉢** (887・893・895～899) 887・893は体部が内湾気味に立ち上がり口縁部が外傾する。端部は887が角ばり、893は横方向に軽く引き出す。895・899は底部有孔のもので、円孔径はいずれも1cmを測る。896・897は底部の作りが蓋のつまみに近似し、体部は内湾気味に立ち上がり、897は口縁端部で更に内傾する。896は内外面に赤彩が施される。

**蓋** (900～904) いずれも頂部につまみを有する笠型で、つまみ部は900・901は大きく、902・903はボタン状を呈する。

**高坏** (905～918) 905～907は有段の坏部で口縁は大きく外反し、905は内外面に赤彩が施される。908・912・915～917は脚部がラッパ状に開脚し、915は脚端部を面取り、917は円形の透孔が穿たれる。909・910は棒状タイプの脚部で、909は外面に赤彩が施される。913・918は短めの柱状部より裾部に至り広く開脚する。

**器台** (919～921) 919・920は有段の脚部で、920は外面に赤彩が施される。921は大きく開く有段の受け部を持つもので、外傾した口縁には4条の沈線が引かれる。

**石製品** (922～924) 922・923は楕円形を呈する扁平なもので、礎石として使用されたのではなかろうか。923は扁平な面に人為的な剥離が認められ、いわゆるヒカリツケの可能性も考えられる。924はきめの細かい硬質砂岩の立方体状の砥石で、使用部の断面形はV字状を呈する。

**SD200** (第47図925～931、図版第30の2)

925は台付の長頸壺と思われる。張り出した胴部に7条の擬凹線を引く。926～928・930・931は有段口縁を持つ甕

で、口縁には928が擬凹線を、他はヨコナデ調整が施される。口縁端部はいずれも先細る。929は珠洲と思われる摺鉢で、口縁端部は丸くおさめる。色調は灰色を呈し、手に持った感覚が非常に軽い。

**SD203** (第48図932~939、図版第30の3)

932は外傾する短めの口縁に擬凹線を引く有段口縁を持つ甕である。933~937は鉢である。933は有段口縁を持ち底部が塊状を呈し、内外面には棒状具によるミガキ、赤彩が施される。934~936は底部有孔で、内面には934がヘラミガキ、936はハケメ調整が施される。937は底部が平底で体部は内湾気味に立ち上がり、内面にヘラミガキ、外面にハケメ調整及びヘラミガキが施される。937は小型粗製の手づくね土器である。939は頂部に小さなつまみを有する笠型の蓋である。

**SK201** (第48図940~949、図版第30の4)

940・943は外傾する短めの口縁に擬凹線を引く有段口縁を持つ甕で、口縁端部は先細る。941・944~946は概ね直立する有段口縁にヨコナデ調整を施す甕で、口縁端部は先細る。942は口縁基部に一条の凸帯を貼り付けた有段口縁の甕で、口縁端部を丸くおさめる。947は内返るつまみを有する笠型の蓋で、内外面にハケメ調整が施される。948は高環の脚部で短めの柱状部よりラッパ状に開脚し、脚端部は軽く面を取る。949は体部中位に最大径を持ち大きく張り出す壺で、体部内面下部はハケメ調整、それより上は横方向のヘラケズリが施される。

**SK202** (第48図950~953、図版第31の1)

950は台付の長頸壺と思われる。張り出した胴部には6条の擬凹線が引かれる。951は高環の脚部と思われる。裾部は水平近くに開き、脚端部は丸くおさめる。952は有段口縁を持ち底部が塊状を呈する鉢で、稜を境に底部は器厚を減じる。953は口縁が〔く〕の字状に外反する甕で、口縁端部は角ばり頸部内外面には指圧痕が巡る。

**SK206** (第49図954~962、図版第31の2)

954は口頸部が長く伸びる壺で、口縁端部が先細る。体部は下半に最大径を持ち、底部は扁平となる。外面はナデ、ミガキが施される。955~960は口縁部が〔く〕の字状に外反し、958・968は外反度が高い。口縁端部の形状は、955・957は先細り、956・960は角ばり、958・959は摘み上げ広げる。955・957は体部が球形に張り出し、体部中位に最大径を持つ。961はラッパ状に開く脚部に扁平な受け部を持つ器台で、脚部外面及び受け部外端面にハケメ調整が施される。962は高環の環部で、体部は内湾気味に立ち上がり、内外面に棒状具によるミガキが施される。

**SK208** (第49図963~966、図版第31の3)

963は直線的に開く口頸部より口縁に至り更に外傾し、口縁端部を面取る壺で、内外面にハケメ調整が施される。964は有段口縁を持つ甕で、口縁部は弱く外傾し肥厚する。965は大きく開いた裾部を跳ね上げ、脚端部を面取りした高環の脚部と思われる。966は底部有孔の鉢で、孔径は1cmを測り外面にハケメ調整が施される。

**SK210** (第49図967、図版第31の4)

967は内返る大きなつまみを持つ笠型の蓋で、つまみ基部外周には圧痕が巡る。

**SK211** (第49図968~972、図版第31の5)

968は短い口頸部をつけた長頸壺の体部で、体部内面に明瞭な輪積痕が認められ、外面に棒状具によるミガキが施される。969~971は甕で、969は口縁部及び体部下半を欠き、口縁基部内面にハケメ調整、それ以下にヘラケズリが施される。970は強く外傾した有段口縁にヨコナデ調整が施される。971は口縁が〔く〕の字状に外反し、口縁端部が角ばれる。972は高環で脚部を欠く塊形の環部である。内外面に棒状具による緻密なミガキが施される。

**SK220** (第49図973~975、図版第31の6)

973・974は口縁が〔く〕の字状に外反する甕で、口縁端部が角ばる。973は内外面にハケメ調整、974は内面にハケメ及び棒状具によるミガキ、外面はハケメ調整を施す。975は有段口縁を持ち底部が丸底の鉢で、内外面にヘラミガキ

が施される。

**SK224** (第49図976、図版第32の1)

976は有段口縁を持つ甕で、弱く外傾した短めの口縁には擬凹線が引かれる。

**SK227** (第49図977~978、図版第32の2)

977はヨコナデ調整の有段口縁を持つ甕。978は受け口状の口縁を持つ甕で、内外面にハケメ調整が施される。

**SK237** (第50図979~981、図版第32の7)

979は口頸部が弱く外傾し、端部が先細る壺である。980は有段口縁を持つ甕で、幅の狭いやや内傾した口縁に擬凹線を引く。981は甕の底部と思われる。底径は2.5cmを測る。

**SK236** (第50図982、図版第32の3)

982は大きい受け部を持つ器台で、内外面には棒状具によるミガキが施される。

**SK238** (第50図983、図版第32の4)

983は甕の底部と思われる。底径は4.5cmを測り、外面にハケメ調整が施される。

**SK239** (第50図984・985、図版第32の5)

984は底部有孔の鉢で、孔径は1cmを測り、内面にはヘラケズリ後ハケメ調整が施される。985は有段口縁を持つ甕で、口縁外面に櫛状具による刺突文が連続する。口縁端部は角ばる。

**SK241** (第50図986・987、図版第32の6)

986は16世紀末~17世紀前半の越中瀬戸の灰釉の火入と思われる。釉は内面に錆釉、外面に透明感のある深緑色の灰釉が掛けられる。987は非クロ系の中世土師器皿で、口縁部でやや肥厚し、端部は細く尖る。

**X1~5 Y36~51区** (第50図988~1000、図版第32の8)

**壺** (988・989・993) 988は口頸部が長く伸び口縁部が弱く外反し、外面には棒状具によるヘラミガキが施される。989は台付き長頸壺の体部張り出し部の隆帯の一部と思われる。横8条の凹線状沈線に縦3条の沈線を引く。993は直立気味の頸部より口縁部に至り外反する。

**甕** (991・992) 991は口縁部の外傾度が高い有段口縁を持ち、内面にヘラケズリ、外面にハケメ調整が施される。992は口縁部が弱く外傾し、口縁端部は角ばる。内面にヘラケズリが施される。

**鉢** (994) 底部有孔のもので底径は3.5cmを測り、体部は比較的大きく開く。

**高坏** (990) 概して粗雑な作りで脚部は短く、坏底部は扁平である。

**X7~11 Y43~51区** (第50図995~1000、図版第32の9)

**甕** (995・997・998) 995は小型で体部は球状を呈し、底部は平底である。内外面にハケメ調整が施される。997・998は有段口縁に擬凹線を引き、口縁は概ね直立する。

**高坏** (996) 有段口縁の坏部で、内面には棒状具によるミガキが施される。

**器台** (999) 口径21cmを測り、脚部に対し大きな受け部を持つ。内外面にはハケメ調整が施される。

**石器** (1000) 石材は安山岩で叩き石と思われるが、明瞭な敲打痕は認められない。重さは280gを量る。

**X16 Y51区** (第51図1001~1009、図版第32の10)

**壺** (1001) 口頸部が長く幅のない有段口縁を持ち、内外面にハケメ調整が施される。

**小型土器** (1002) 小型粗製の手づくね土器で、底径4cmを測り外面に顕著な指圧痕が認められる。

**甕** (1003~1006) 1003~1005は緩やかに外反する有段口縁に擬凹線を引くタイプで、1003は口縁幅がやや狭い。

**高坏** (1007) 口径35cmを測る有段口縁の坏部で、口縁部は強く外反し端部は丸く収める。内外面にハケメ調整。

**蓋** (1008) 大きな内返るつまみを持つ笠形で、つまみ部外周には指圧痕が巡る。

須恵器 (1009) 無高台坏である。体部内外面はロクロ回転撫で、底部外面は回転ヘラ切りで底部は安定する。

X18～21Y36～70区 (第51図1010～1019、図版第33の1)

壺 (1010・1011・1013) 1010・1011は緩やかに外傾する幅の広い有段口縁を持ち、1010は口縁部に2列2段の円形刺突文、棒状浮文が施される。1011は長頸壺で張り出した胴部の隆帯上に凹線状の沈線を5条引く。内面はハケメ調整、外面は赤彩が施される。

甕 (1012・1014・1018・1019) 1012・1018は直立する有段口縁を持ち、1018の口縁には6条の擬凹線を引き、1012の外面には輪積痕が認められる。1014は口縁が[く]の字状に外反し、体部は球胴状で底部はやや尖る。内面には棒状具によるミガキ、外面には緻密なハケメ調整が施される。1019は口縁が[く]の字状に外反し、内外面にハケメ調整が施される。

高坏 (1015・1017) 1015は高坏としたが器台の可能性も考えられる。1015は口縁部が短く外傾しながら立ち上がり、内外面に棒状具によるミガキが施される。1017は短めの脚部に底部が皿状の坏部を持ち、内外面に赤彩される。

器台 (1016) 脚部は[ハ]の字状に開き3個一対の円形の透孔が穿たれ、受け部は小さく皿状を呈する。

X1Y56区 (第52・53図1020～1050、図版第33の2・第34・第35)

壺 (1020～1034・1042) 1020～1022は口頸部が長く伸び有段口縁を持ち、口縁端部は1020が内傾し、1021・1022は外傾する。1020は頸部に円形の刺突文を施す。1023～1025は口縁部が短く外傾し、1024は頸部に円形の刺突文を施す。1027・1028は口頸部及び体部下半を欠損し、基本的には内面にハケメ調整及びヘラケズリ、外面にはハケメ調整を施す。1028～1030は口頸部が弱く外傾して端部に至る。1028は口縁端部の一部を鋸歯状に仕上げ、1030は口縁部に円孔が穿たれる。1031～1033は口頸部が大きく広がり、1032は頸部に円形の刺突文、1033は外面に赤彩が施される。1034は直口する短頸の壺で、体部は球状に張り出す。1042は甕の可能性もあるが壺とした。底部は上げ底風に仕上げ径5cmを測り、体部下位の内外面はハケメ調整が施される。

甕 (1035～1041・1043) 1035・1036は強く外傾する短い有段口縁に擬凹線を引く。1036は口縁が肥厚し、内面にヘラケズリ、外面にハケメ調整が施される。1037は口縁部が弱く外傾し口縁端部は丸く収める。内面にヘラケズリ、外面にハケメ調整が施される。1038～1040は有段口縁を持ち、口縁は1038が直立し、1039は口縁端部を摘み上げ広げ、1040は水平近くに外傾する。1041は頸部をヘラ先で列点状に加飾し、内外面にハケ目調整を施す。1043は底部が上げ底風で、底径5cmを測る。内面にヘラケズリ、外面にハケ目調整を施す。

鉢 (1044・1045) いずれも底部有孔で体部は高い角度で内湾気味に立ち上がる。底部形状は1044が砲弾形、1045が平底となる。

高坏 (1046・1047) 1046は碗形の坏部を持ち、坏部外面にハケ目調整、脚部外面にミガキが施される。1047はラッパ状に開脚し、1個の円形の透孔が穿たれる。

蓋 (1048) 笠形でつまみは頂部がやや内返り、端面を横方向に引き出す。外面にミガキが施される。

X1Y66区 (第53図1049、図版第35)

一面が扁平な長楕円の石で、器面には敲打痕、擦痕等は認められない。台石等に使用されたのではなかろうか。石材は安山岩系で重さは370gを量る。

X1Y76区 (第53図1050、図版第35)

刃部欠損の定角磨製石斧である。基部は敲打痕を残し叩き石として使用する。

X2Y77区 (第54図1051、図版第35)

高さ5.5cm・最大幅5cm・重さ65gを量る管状の土錘である。

**X11Y91区** (第54図1052、図版第35)

底部扁平の土器で壺もしくは鉢と思われる。外面には赤彩が施される。

**X1Y90区** (第54図1053、図版第35)

口縁にヨコナデ調整を施した有段口縁の甕で、内面にヘラケズリ、外面にハケメ調整が施される。

**X3Y105区** (第54図1054、図版第35)

高さ6.5cm・幅3.2cm・重さ60gを量る管状の土錘である。

**X3Y117区** (第54図1055、図版第35)

側面を磨き握り部を作りだした叩き石である。重さは225gを量り、石材は安山岩系と思われる。

**X7Y118区** (第54図1056、図版第35)

基部に抉入の凹基無茎石鏃で、重さは約0.6gを量り、石材は黒曜石である。

**X16Y86区** (第54図1057、図版第35)

チャートの石核で、重さは410gを量る。先端部に敲打痕を残し、叩き石として使用されている。

**X4Y116区** (第54図1058、図版第35)

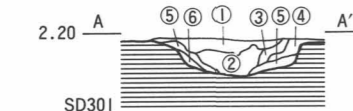
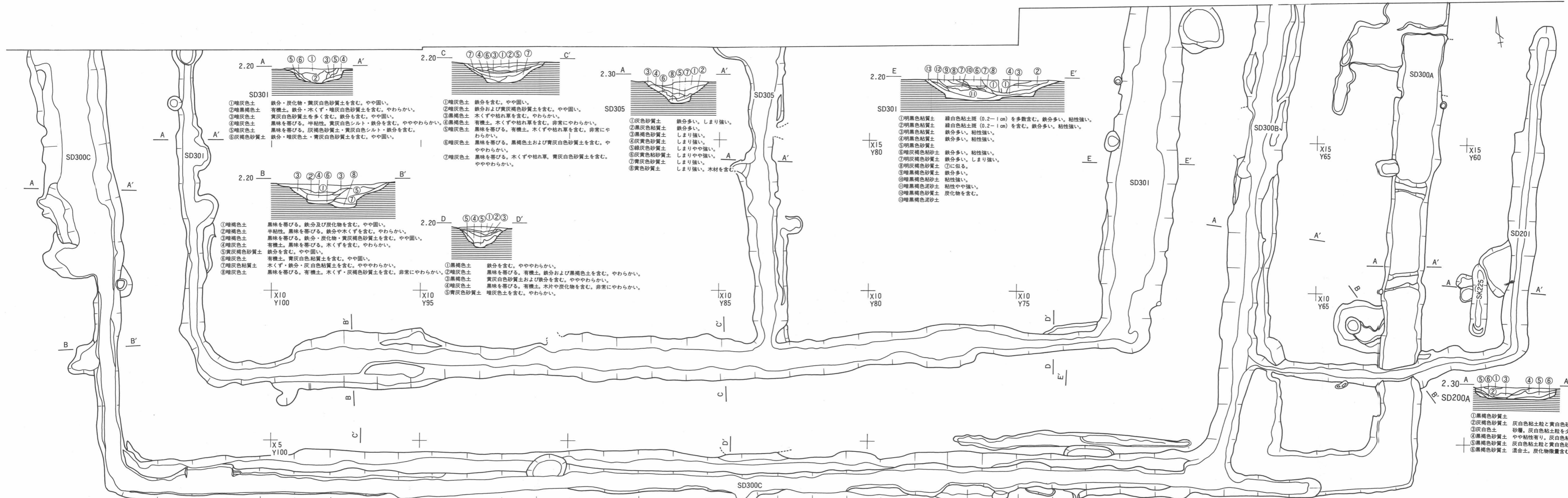
基部を欠損した石鏃で、側縁部に調整を加え、刃部は荒く作る。重さは335gを量り、石材は安山岩系である。

**X5Y105区** (第54図1059、図版第35)

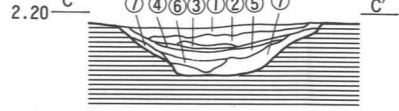
硬質砂岩の四面を利用した砥石で、擦痕の上に更に筋状の使用痕を留める。重さは300gを量る。

**X5Y118区** (第54図1060、図版第35)

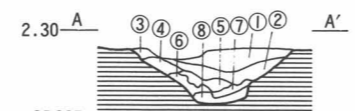
側縁部及び基部で調整を加え、刃部を荒く仕上げる石鏃である。重さは300gを量り、石材は安山岩系である。



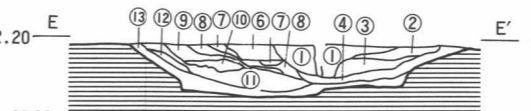
- SD301
- ①暗灰色土 鉄分・炭化物・黄灰白色砂質土を含む。やや固い。
  - ②暗黒褐色土 有機土。鉄分・木くず・暗灰色粘質土を含む。やや固い。
  - ③暗灰色土 黄灰白色砂質土を多く含む。鉄分も含む。やや固い。
  - ④暗灰色土 黒味を帯びる。半粘性。黄灰白色シルト・鉄分を含む。やややわらかい。
  - ⑤暗灰色土 黒味を帯びる。灰褐色砂質土・黄灰白色シルト・鉄分を含む。
  - ⑥灰褐色砂質土 鉄分・暗灰色土・黄灰白色砂質土を含む。やや固い。



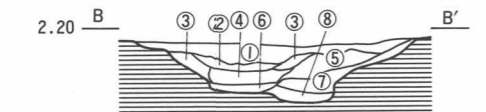
- SD305
- ①暗灰色土 鉄分を含む。やや固い。
  - ②暗灰色土 鉄分および黄灰褐色砂質土を含む。やや固い。
  - ③黒褐色土 木くずや枯れ草を含む。やや固い。
  - ④黒褐色土 有機土。木くずや枯れ草を含む。非常にやわらかい。
  - ⑤暗灰色土 黒味を帯びる。有機土。木くずや枯れ草を含む。非常にやわらかい。
  - ⑥暗灰色土 黒味を帯びる。黒褐色土および黄灰白色砂質土を含む。やややわらかい。
  - ⑦暗灰色土 黒味を帯びる。木くずや枯れ草、黄灰白色砂質土を含む。やややわらかい。



- SD305
- ①灰色砂質土 鉄分多し。しまり強い。
  - ②黒褐色粘質土 鉄分多し。
  - ③黒褐色粘質土 しまり強い。
  - ④灰褐色砂質土 しまり強い。
  - ⑤暗灰色粘質土 しまりやや強い。
  - ⑥灰褐色粘質土 しまり強い。
  - ⑦黄褐色粘質土 しまり強い。
  - ⑧黄色砂質土 しまり強い。木材を含む。



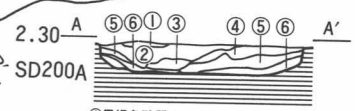
- SD301
- ①明黒色粘質土 緑白色粘土斑 (0.2-1cm) を多数含む。鉄分多し。粘性強い。
  - ②明黒色粘質土 緑白色粘土斑 (0.2-1cm) を含む。鉄分多し。粘性強い。
  - ③明黒色粘質土 鉄分多し。粘性強い。
  - ④明黒色粘質土 鉄分多し。粘性強い。
  - ⑤明黒色粘質土 鉄分多し。粘性強い。
  - ⑥暗灰色粘質土 鉄分多し。粘性強い。
  - ⑦明灰色粘質土 ⑦に依る。
  - ⑧暗黒褐色粘質土 鉄分多し。
  - ⑨暗黒褐色粘質土 粘性強い。
  - ⑩暗黒褐色粘質土 粘性強い。
  - ⑪暗黒褐色粘質土 粘性やや強い。
  - ⑫暗黒褐色粘質土 炭化物を含む。



- SD301
- ①暗褐色土 黒味を帯びる。鉄分及び炭化物を含む。やや固い。
  - ②暗褐色土 半粘性。黒味を帯びる。鉄分や木くずを含む。やや固い。
  - ③暗褐色土 黒味を帯びる。鉄分・炭化物・黄灰褐色砂質土を含む。やや固い。
  - ④暗灰色土 有機土。黒味を帯びる。木くずを含む。やや固い。
  - ⑤黄灰褐色砂質土 鉄分を含む。やや固い。
  - ⑥暗灰色土 有機土。黄灰白色粘質土を含む。やや固い。
  - ⑦暗灰色粘質土 木くず・鉄分・灰白色粘質土を含む。やややわらかい。
  - ⑧暗灰色土 黒味を帯びる。有機土。木くず・灰褐色砂質土を含む。非常にやわらかい。



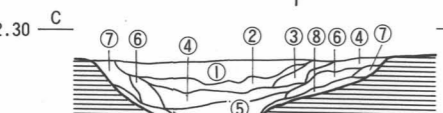
- SD301
- ①黒褐色土 鉄分を含む。やややわらかい。
  - ②暗灰色土 黒味を帯びる。有機土。鉄分および黒褐色土を含む。やわらかい。
  - ③黒褐色土 黄灰白色砂質土および鉄分を含む。やややわらかい。
  - ④暗灰色土 黒味を帯びる。有機土。木片や炭化物を含む。非常にやわらかい。
  - ⑤黄褐色砂質土 暗灰色土を含む。やわらかい。



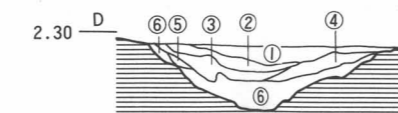
- SD200A
- ①黒褐色砂質土 灰白色粘土粒と黄白色砂粒をブロック状に含む。
  - ②灰褐色砂質土 砂層。灰白色粘土粒を少量ブロック状に混入する。
  - ③灰白色土 やや粘性有り。灰白色粘土粒を微量混入する。
  - ④黒褐色砂質土 灰白色粘土粒と黄白色砂粒を微量混入する。
  - ⑤黒褐色砂質土 混合土。炭化物微量含む。



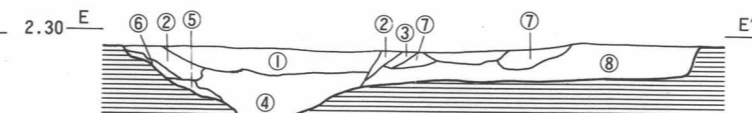
- SD300C
- ①暗褐色土 少量の砂。わずかな鉄分の沈着。粘性やや強い。
  - ②暗褐色土 少量の砂を混入。粘性やや強い。
  - ③暗褐色土 色調②に似る。多くの砂を含む。粘性やや強い。
  - ④暗褐色土 ③より更に多量の砂を含む。粘性やや強い。



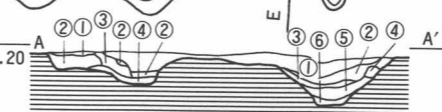
- SD300C
- ①暗褐色粘質土 鉄分・炭化物・木くずを含む。やややわらかい。
  - ②暗褐色粘質土 半粘性。鉄分を含む。やや固い。
  - ③暗褐色粘質土 半粘性。鉄分および灰褐色砂質土を含む。やわらかい。
  - ④暗褐色粘質土 半粘性。木くずを含む。やわらかい。
  - ⑤暗褐色粘質土 有機土。ヘド口層。非常にやわらかい。
  - ⑥暗褐色粘質土 半粘性。鉄分や木くずを含む。やわらかい。
  - ⑦暗褐色粘質土 半粘性。鉄分や灰褐色砂質土。黄灰褐色粘質土を含む。やややわらかい。
  - ⑧灰褐色砂質土 黄灰褐色粘質土・暗褐色土を含む。やや固い。



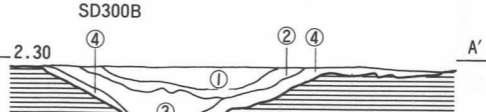
- SD300C
- ①黒褐色粘質土 粘性やや有り。
  - ②暗褐色粘質土 粘性やや強い。
  - ③暗褐色粘質土 粘性やや強い。砂がブロック (0.5-1cm) が入る。
  - ④暗褐色粘質土 黒味を帯びる。有機質土層。非常にやわらかい。
  - ⑤黄灰白色砂質土 暗灰色土を含む。やややわらかい。
  - ⑥黄灰白色砂質土 暗灰色土と黄褐色粘質土を微量に含む。やや固い。
  - ⑦黄褐色粘質土 鉄分を多く含む。黄灰白色砂質土を若干含む。やややわらかい。
  - ⑧黄灰白色シルト 鉄分と黄灰白色砂質土を含む。やや固い。



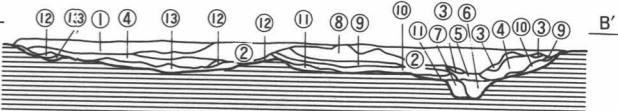
- SD300C
- ①暗褐色粘質土 粘性やや有り。
  - ②暗褐色粘質土 細粒。しまり強い。
  - ③暗褐色粘質土 ①よりも粘性強し。
  - ④暗褐色粘質土 暗灰色粘質土に黄褐色砂粒を混入する。ややしまり有り。
  - ⑤暗褐色粘質土 粘性有り。
  - ⑥黒色粘土



- SK225
- ①暗褐色粘質土 粘性やや有り。
  - ②暗褐色粘質土 細粒。しまり強い。
  - ③暗褐色粘質土 ①よりも粘性強し。
  - ④暗褐色粘質土 暗灰色粘質土に黄褐色砂粒を混入する。ややしまり有り。
  - ⑤暗褐色粘質土 粘性有り。
  - ⑥黒色粘土



- SD300B
- ①暗褐色粘質土 粘性やや有り。灰色砂質土を少量含む。炭化物微量。
  - ②暗褐色土 灰色砂質土を少量含む。
  - ③黒色粘質土 粘性やや有り。
  - ④黄灰白色土 自然堆積土の崩落。砂層。



- SD300C
- ①暗褐色土
  - ②暗褐色土
  - ③灰白色土
  - ④暗褐色土
  - ⑤暗褐色土
  - ⑥黒色土
  - ⑦暗褐色土
  - ⑧灰白色土 砂層。
  - ⑨黄灰白色土 砂層。
  - ⑩黄灰白色土
  - ⑪暗褐色粘質土 砂層。黒褐色粘質土粒を混入する。
  - ⑫暗褐色土 砂層。確混じり。

第55図SD201・300A・300B・300C・301・305 (1/200)



### (3) 中世の遺構

検出された5条の堀は、規模・形態に差を持ちながら有機的に連なり、四至を東西南北にそろえた区画(郭)を形成している。堀の配列は、SD300BがSD301を圍繞し、SD305はSD301を東西に分断する。更に、SD201・300AはSD300B・Cより北方向に対し逆L字状に張り出す。これにより堀全体の東西長は96m、南北現長は調査区内で38mを測り、X軸に沿う溝は概ね東西方向に、Y軸に沿う堀はY81を境とし真北より東側で東へ16°、西側で東へ6°傾く。各堀は、基底レベル標高0.4~0.7mの範疇にあり流水も少なく雨水や湧水が滞水し、砂質土中に構築されたこととあいまって、堀機能を維持するための恒常的な補修が看取される。また、各堀間の埋土に明瞭な重複関係が認められないことより、ほぼ同時期に機能した事が予想される。なお、SD201を除きY軸に沿う堀は、更に調査区外北方向に伸びることが確認されている。

**SD201** (第55図、図版第9の1~3) SD300Aに直行し、SD300Bに連絡する逆L字状の溝であり、北方向に伸びる部分は調査区手前のX19付近で途絶する。規模は、上幅1.5~1.7m、深さ0.6~0.8mを測り、断面形はコの字状より約45°の傾斜で立ち上がる。埋土は、上層が黒褐色、下層が暗灰色を基調とする自然堆積層である。遺物の出土状況は弥生土器の他、珠洲が少量出土している。

**SD300A** (第55図、図版第9の4~6) SD300Bに連絡する逆L字状の畝堀である。規模は上幅2.5~3m、深さ0.5~0.6mを測り断面形はコの字状を呈する。南北の堀内には、地山である暗灰色砂質土を掘り残して構築した畝が2箇所遺存する。いずれの畝も上幅0.5~0.7m、基底幅1~1.2mを測り畝の隔たりは6mとなっている。また、堀内の土層観察によれば一度自然埋没した後に、若干の縮小をともない再構築された様相が伺われる。遺物の出土状況は上層より弥生土器が少量出土している。

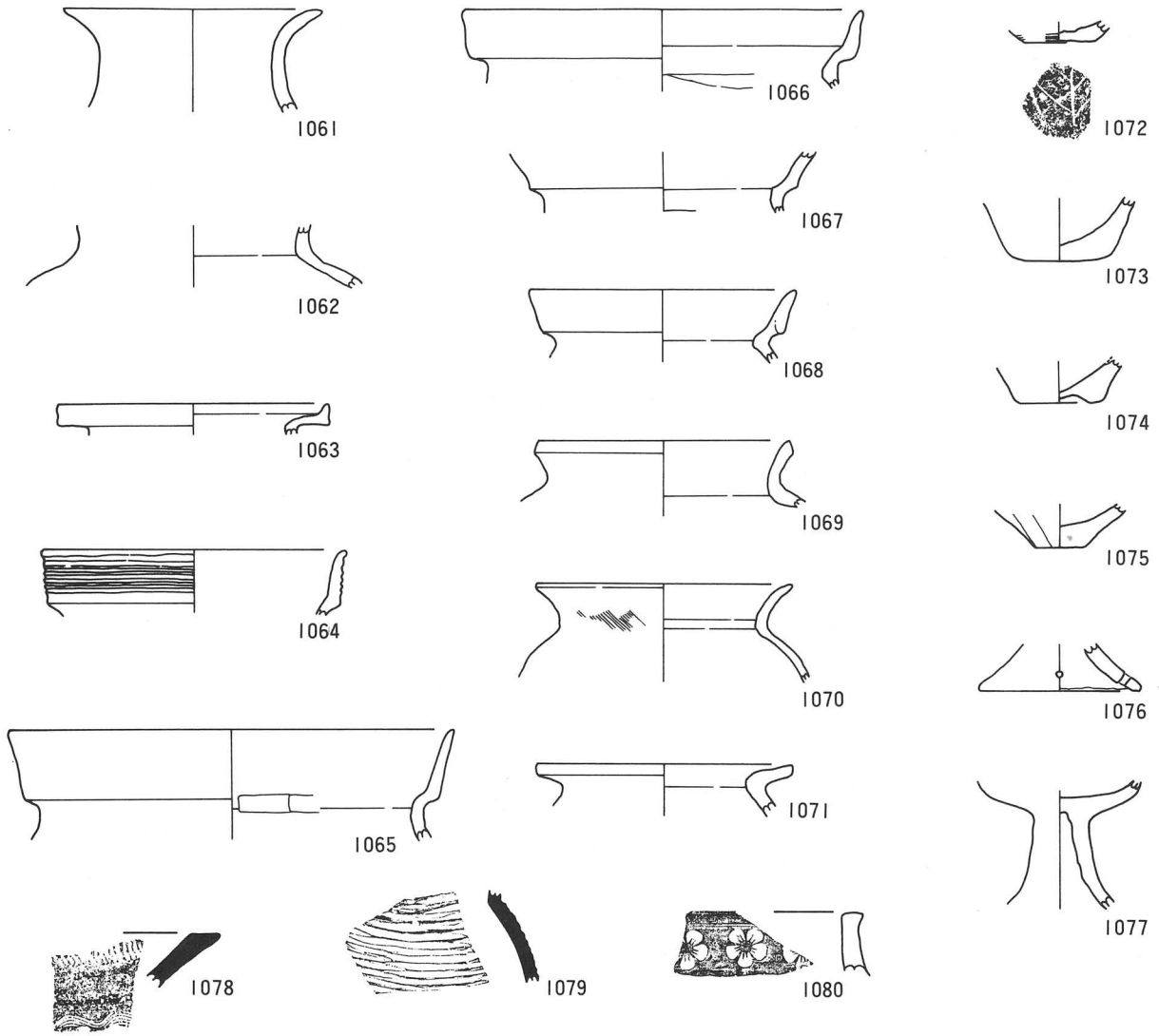
**SD300B・C** (第55図、図版第8の3・第10の1) SD301をコの字状に圍繞する外堀で、東西長68m・南北現長38mを測る。規模は、上幅1.5~4.5m、深さ1.5~3mで断面形はコの字状より30~45°の傾斜で立ち上がるものが基本形となる。また、Y71~76区間には、堀の開口部北側に連続する幅1mほどのテラス状の整地面が認められる。埋土は、黒褐色を基調とした自然堆積土である。遺物の出土状況は、中層~上層にかけて弥生土器、珠洲、天目碗、空輪などが少量出土している。

**SD301** (第55図、図版第10の2~4) [コ]の字状を呈しSD300B・Cに併走する内堀で、東西長37m・南北現長22mを測る。規模は上幅2.2~4.5m、深さ1.1~1.6mで、断面形は平坦な底面より約30°前後の角度で立ち上がる逆梯形を基本とするが、Y103付近ではU字状を呈する。埋土は、黒褐色を基調とする自然堆積土であり、X16Y73軸付近の土層観察によればSD304と同様に、一度自然埋没した後に2/3程度の規模をもって再構築された様相が伺われる。遺物の出土状況は、上層中心に弥生土器、中世土師器、中世陶磁器が少量出土している。

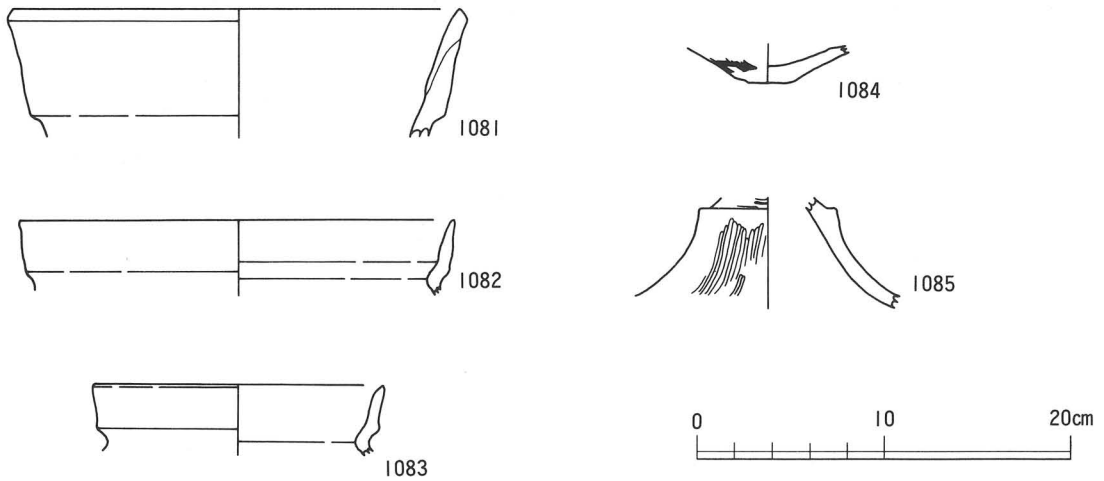
**SD305** (第55図) Y84軸を南北に走り、SD301を東西に区画する溝である。規模は、上幅1.9~2.5m、深さ0.6~0.7mで断面形は平坦な底面より30~35°の傾きで立ち上がる。堀内のX16軸付近には、若干ではあるが畝の存在を示す痕跡が見受けられ、工法、形態はSD300Aに近似するのではなかろうか。遺物の出土状況は、上層より珠洲が少量出土している。



SD201



SD300A



第56図 SD201・300Aの出土遺物 (1/4)

#### (4) 中世・堀の出土遺物

**SD201遺物** (第56図、図版第36の1) 1061~1077は弥生土器、1078・1079は珠洲、1080は瓦質土器である。1061は口縁部が短く外傾する壺である。色調は浅黄橙色を呈し、口径は14.5cmを測る。1062は壺で色調は灰白色を呈し、胎土には微砂粒を含み、焼成はあまい。1063は受け口状の口縁を持つ甕で、口径は15cmを測る。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には粗砂粒を多く含む。1064は有段口縁に擬凹線を引く甕で、口縁部が直立し口縁端部で外傾する。色調は浅黄橙色を呈し、口径は17cmを測る。1065は有段口縁の幅のあるタイプの甕で、直線的に外傾する。色調は浅黄橙色を呈し、胎土には多くの粗砂粒を含む。1066・1067・1068は有段口縁が短く外傾度が高い甕で、口縁にはヨコナデ調整が入る。色調及び胎土はいずれも浅黄橙色を呈し、粗砂粒を多く含む。1069・1070は口縁が〔く〕の字状に外反した甕で、口縁端部は1069が角ばり、1070は丸くおさめる。1071は口縁が強く〔く〕の字状に外反した甕である。色調は浅黄橙色を呈し、口径は14.5cmを測る。1077は高坏である。坏部内底面は平坦で、脚部は段を作らずラッパ状に開脚する。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は精良。1078は珠洲の摺鉢である。口縁は肥厚した内端に広く面を取り、櫛目波状紋を加飾する。色調は青灰色を呈する。年代は15世紀代の珠洲V期に比定される。1079は珠洲の壺T種である。右下がりに叩き締められ、3cm当たりの叩き条数は7条を数える。色調は内面が赤褐色、外面は青灰色を呈する。1080は15世紀前半代の瓦質火鉢の頸部である。外面にはスタンプによる梅花文が連続して押捺され、口縁端部は水平に面を取り、外端は外方向に挽き出される。

**SD300A遺物** (第56図、図版第36の2) 1081~1085は弥生土器であり、いずれも埋土上層に包蔵される流れこみの土器である。1081はやや幅広の有段口縁をもつ壺で、口縁は弱く外傾しながら直線的に開く。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は微砂粒で焼成はややあまい。1082・1083は有段口縁の幅のあるタイプの甕で、口径は1082が23cm、1083は14.5cmを測る。色調はいずれも浅黄橙色を呈し、胎土には粗砂粒を多く含む。1084は甕の底部で、外面にはハケメ調整が施される。1085は有段脚の高坏で、袖部は大きく開く。色調は浅黄橙色を呈し、外面には緻密なヘラミガキが施される。

**SD300B遺物** (第57図、図版第36の3) 1086・1087は弥生土器で、1088~1092は珠洲である。1086・1087は頂部につまみを持つ笠形をした蓋で、通気孔は持たない。1087は内外面に緻密なミガキが施される。色調はいずれも浅黄橙色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。1088は2.5cm前後の口縁を外反させた甕で、口縁内面には降灰がかかる。1089は口縁端部が肥厚し〔く〕の字状に外反する甕で、口縁端面は水平となる。3cm当たりの叩き条数は8条を数える。1090は壺もしくは甕で、3cm当たりの叩き条数は13条を数える。色調は外面が鼠黒色、内面は青灰色を呈し、胎土は精良。1091・1092は摺鉢である。1091は卸し目の原体幅が1.5cmを測り、1帯当たりの条数は6条を数える。色調は灰色を呈し、胎土には粗砂粒を少量含む。1092は卸し目の原体幅が1.7cmを測り、1帯当たりの条数は8条を数える。また、卸し目は内側面のみ施される底止めである。

**SD300C遺物** (第57・58図、図版第36の4・第37) 1093・1094は弥生土器で、1095は奈良時代後半の須恵器、1096~1098は瀬戸美濃、1099~1114は珠洲、1115は火鉢、1116・1117は石製品である。出土状況は、いずれも2・3層を中心に包蔵されていた。1093は有段口縁の幅のあるタイプの甕で、口縁の内外にはヨコナデ調整が施される。色調は浅黄橙色を呈し、口径は15.5cmを測る。1094は手ずくねによる小型土器である。色調は浅黄橙色を呈し、底径4cm・高さ3cmを測る。1095は須恵器の坏蓋で、紐は擬宝珠形である。1096は古瀬戸の卸し皿で、内側面には片切彫りの卸し目がわずかに認められる。口縁端面は内側に挽き出され、釉は灰釉で黄緑色を呈する。1097は古瀬戸の瓶子である。釉は灰釉で黄緑色を呈し、底径は10.5cmを測る。帰属年代は1096・1097とも14世紀代と思われる。1098は瀬戸美濃の天目茶碗で、口唇はあまりくびれず口縁端部は丸くおさめる。釉は鉄釉で茶褐色を呈し、口唇のくびれには黒釉が施される。1099は紐叩打成形による壺T種である。口頸部は直立ぎみにこしらえ、口縁短部を外方向に挽き出す。帰属年代は14世紀代の珠洲IV期に比定される。1100は紐轆轤成形による壺R種である。色調は暗灰色を呈し、底径は6.5cmを測

る。1101は口縁部が〔く〕の字状に外反し、端部を丸くおさめる甕である。色調は暗灰色を呈し、3cm当たりの叩き条数は12条を数える。1102～1107は珠洲の壺もしくは甕である。1102は3cm当たりの叩き条数は10条を数え、色調は青灰色を呈する。1103は綾杉紋に叩き締められ、3cm当たりの叩き条数は9条を数える。1104は3cm当たりの条数は13条を数え、色調は青灰色を呈する。1105は3cm当たりの叩き条数は8条を数え、色調は外面が鼠黒色、内面は暗灰色を呈する。1106は3cm当たりの叩き条数は9条を数え、胎土中には若干の植物繊維を混入する。1107は3cm当たりの叩き条数は8条を数え、内面には方形基調の当て具痕が明瞭に認められる。1108～1114は珠洲の摺鉢である。1108は体部が直線的に開き、口縁端部がやや外反して面を取る。色調は暗褐色を呈し、胎土には粗砂粒を少量含む。帰属年代は珠洲IV期に比定される。1109は体部が直線的に開き、口縁部は肥厚した内端部に広く面を取る。色調は暗灰色を呈し、口径は34cmを測る。卸し目の原体幅は2.8cmで、1帯当たりの条数は9条を数える。帰属年代は15世紀代の珠洲V期であろう。1110は口縁端部がほぼ水平に面を取る。色調は灰色を呈し、胎土には粗砂粒を多く含む。1111は卸し目の原体幅が3cmを測り、1帯当たりの条数は10条を数える。色調は灰色を呈し、胎土は比較的緻密である。1112は卸し目の原体幅が3.5cmを測り、1帯当たりの条数は13条を数える。色調は灰色を呈し、内底部の卸し目は摩滅している。1113は卸し目の原体幅が2cmを測り、底部の切り離しは静止糸切である。色調は灰色を呈し、胎土は比較的緻密である。1114は卸し目の原体幅が3cmを測り、1帯当たりの条数は10条を数える。色調は灰色を呈し、底部の切り離しは静止糸切りである。1115は15世紀前半の瓦質火鉢で、外面底部付近には1条の凸帯が巡る。1116は五輪塔の風空輪部で、石質は軟質砂岩である。1117は叩き石で、礫下面には明瞭な敲打痕が認められる。重さは3kgを量り、礫面は被熱により黒く変色する。

**SD301遺物**(第59図、図版38の1) 1118は須恵器、1119は青磁、1120・1121は瀬戸美濃、1122～1125は珠洲、1126～1129は中世土師器、1130は瓦質土器である。出土状況は、いずれの土器も埋土中位より上層にかけて包蔵されていた。1118は甕で口縁部は〔く〕の字状に外反し、内面には同心円紋状の当て具痕が認められる。1119は青磁の端反り碗で、15世紀前半の所産と思われる。釉は厚くかけられ色調はやや黄ばんだ緑色を呈し、口径は14.5cmを測る。1120は15世紀前半代の三足を持つ香炉である。釉は鉄釉で色調は茶褐色を呈する。1121は15世紀前半代の三足盤である。口縁端部断面は三角形に近い形状で、端部外面には浅い溝が一周する。釉は灰釉で色調は黄緑色を呈し、割れめには漆つぎが認められる。1122は14世紀代の珠洲IV期に比定される甕で、口縁部が肥厚し短く〔く〕の字状に外反する。色調は灰色を呈し、外面には降灰がかかる。1123は15世紀前半の珠洲V期に比定される壺で、3cm当たりの叩き条数は8条を数え、色調は褐色を呈する。1124は壺もしくは甕で、3cm当たりの叩き条数は9条を数え、色調は外面が鼠黒色、内面が灰色を呈する。1125は摺鉢である。色調は灰色を呈し、底径は10cmを測る。1126はロクロ系、1127～1129は非ロクロ系の16世紀前半に比定される中世土師器の皿である。1126は体部が直線的に立ち上がり、口径8.5cm・器高1.8cmを測る。見込みには白色顔料が付着している。1127・1128は口縁部外面上半の横方向のナデ、内面見込みの横方向のナデが施され、底部には指頭圧痕が認められる。色調は灰白色を呈し、口径は1127が11.5cm、1128は11cmを測る。1129は口径8cm・器高1.5cmを測り、色調はにぶい黄橙色を呈する。1130は15世紀前半代の瓦質火舎で、スタンプによる梅花紋が連続して押捺される。

**SD305遺物**(第59図、図版第38の2) 1131は古瀬戸、1132～1135は珠洲、1136は石製品である。1131は15世紀初めごろの灰釉筒形容器と思われる。色調は黄緑色を呈し、胎土は灰色で少量の黒色微粒子を含む。1132は甕で、口縁部は〔く〕の字状に外反し口縁端部は垂下する。1133は壺もしくは甕で、3cm当たりの叩き条数は11条を数える。色調は外面、内面とも灰色を呈する。1134は摺鉢で、卸し目の原体幅は2.4cmを測り、1帯当たりの条数は9条を数える。色調は褐色を呈し焼成は甘い。1135は摺鉢で、卸し目の原体幅は3.3cmを測り、1帯当たりの条数は9条を数える。色調は灰色を呈し、胎土には粗砂粒を少量含む。1136は叩き石で、礫の上下面には敲打痕が認められる。重さは650gを量る。

SD300B



1086



1087



1089



1090



1088

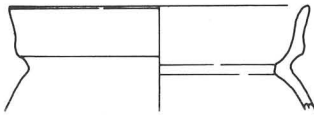


1091



1092

SD300C



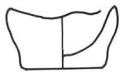
1093



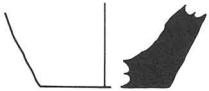
1099



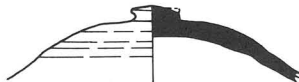
1104



1094



1100



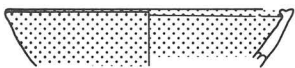
1095



1101



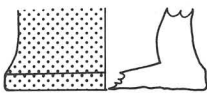
1105



1096



1102



1097



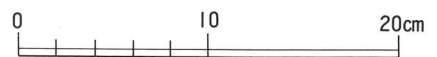
1103



1106

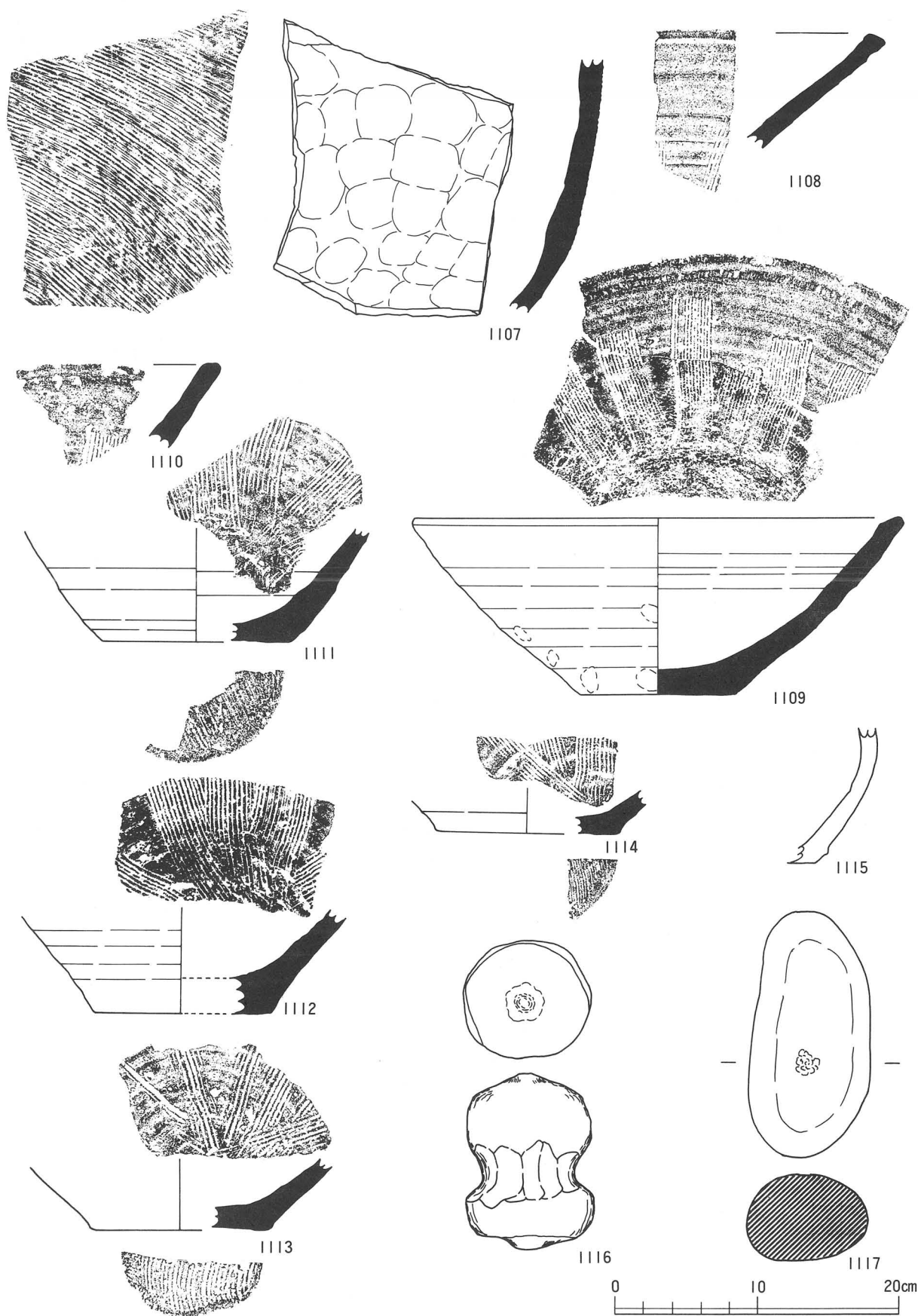


1098



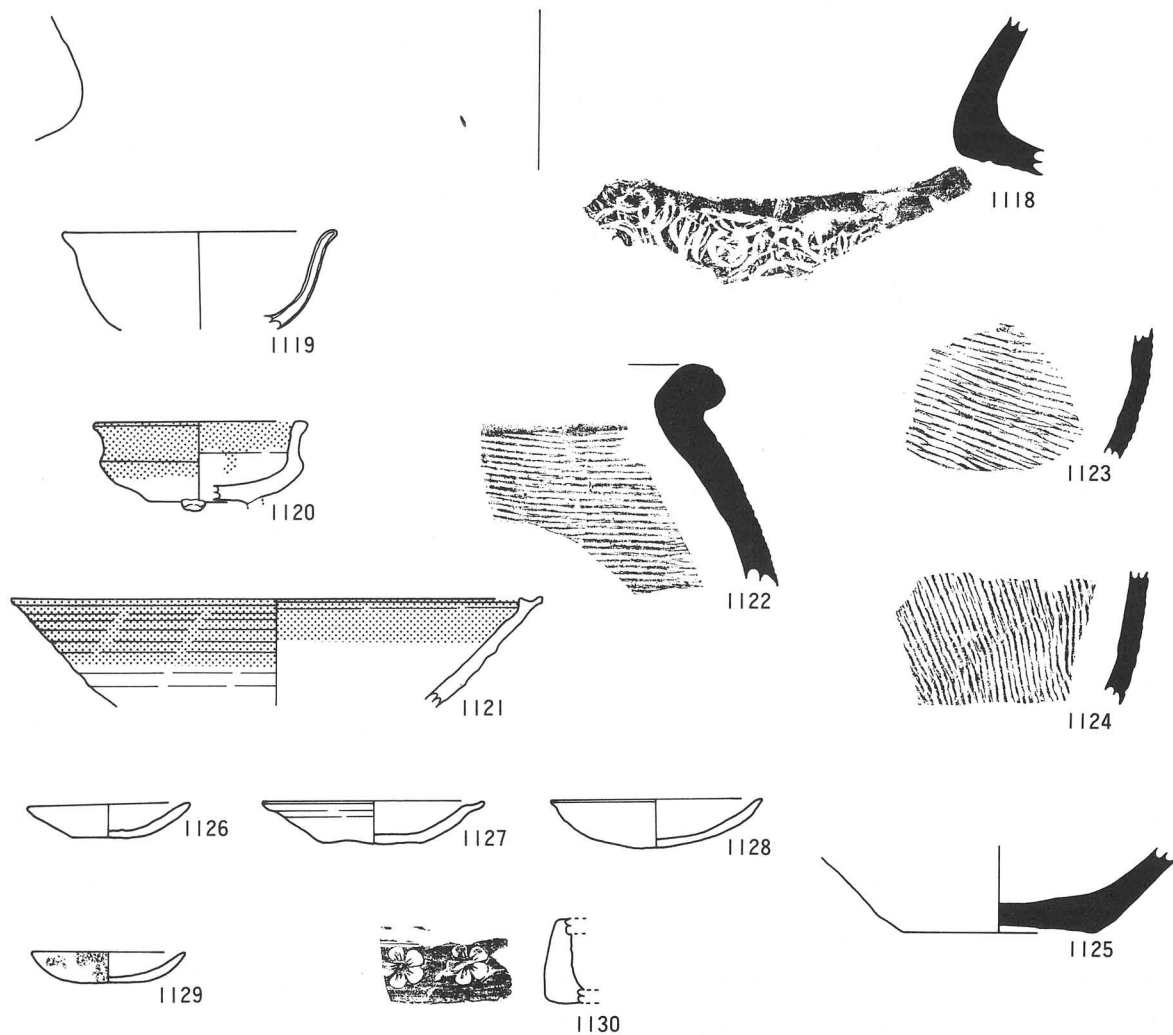
第57図 SD300B・300Cの出土遺物 (1/4)

SD300C

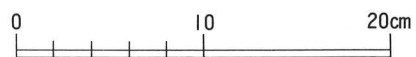
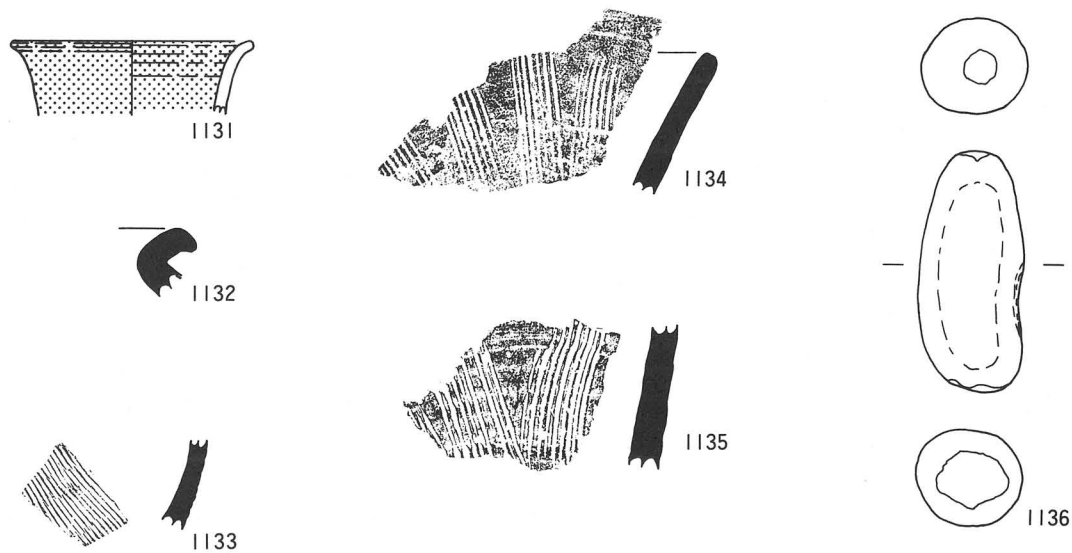


第58図 SD300Cの出土遺物 (1/4)

SD301



SD305



第59図 SD301・305の出土遺物 (1/4)

## (5) 区割りについて

前項に於いて説明を行なった堀により形成された空間を、空間相互に於ける機能的差異を想定し、巨視的に5区画(第39図)に分け、各区画より検出された遺構とそれに伴う遺物を区画毎に順をおって説明を行なう。なお、区割りにあたり各堀の機能年代は、同時期もしくは概ね同時期であったとの考えに立脚した。

① 1区画の遺構 SD201とSD300Aに囲まれた区画で、面積は225㎡を測る。区画内より、南北に長軸を持つ方形基調の土坑2基を記載する。

SK225(第60図) X11Y60区に位置する。平面は1.1×4.5mの不整長方形を呈し、深さは0.3mを測る。断面形はU字状で二段に掘り込まれる。埋土は3層に分かれ、1層の黒褐色砂質土に自然石1点を包蔵する。

SK228(第60図) X12Y62区に位置する。平面は0.9×2.5mの不整長方形を呈し、深さは0.3mを測る。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は4層に分かれ、遺物はない。

② 2区画の遺構 SD300AとSD300Bにより区画され、更にSD201により南端部が区画されている。その結果、幅7.5m、南北現長30mを測り、平面長方形の区画を形成する。面積は225㎡を測る。遺構は土坑1基を記載する。

SK235(第60図) X8Y64区に位置する。平面は1.8×3.1mの方形基調で、深さは0.4mを測る。底面は皿状を呈し、埋土は6層に分かれる人為堆積である。遺物はない。

③ 3区画の遺構・遺物 SD300B・CとSD301に囲まれて形成された当区画は、幅4～5mの規模を持って[コ]の字状に巡り、現面積は911㎡を測る。区画内には土坑3基、井戸跡1基、溝状遺構2条が検出されている。また、調査時に於いて土塁の存在は確認されなかった。

SK322(第60図、図版第14の4) X19Y70区に位置し、SD301を切り込む。平面は2.85×3.1mの不正円形を呈し、深さは0.4mを測り、底面は平坦である。埋土は3層に分かれる自然堆積土で、2層には炭化粒子を微量含む。遺物はない。

SK334(第60図) X6Y90区に位置する。平面は1.6×1.7mの方形を呈し、深さは0.32mを測り、底面は平坦である。埋土は4層に分かれる自然堆積で、2層には炭化粒子を微量含む。遺物はない。

SK622(第61図) X10Y105区に位置する。平面は1.7×2.0mの不定形を呈し、深さは0.4mを測り、底面は概ね平坦である。埋土は3層に分かれる自然堆積土である。遺物は2層より珠洲2点が出土。

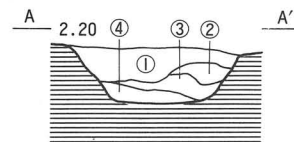
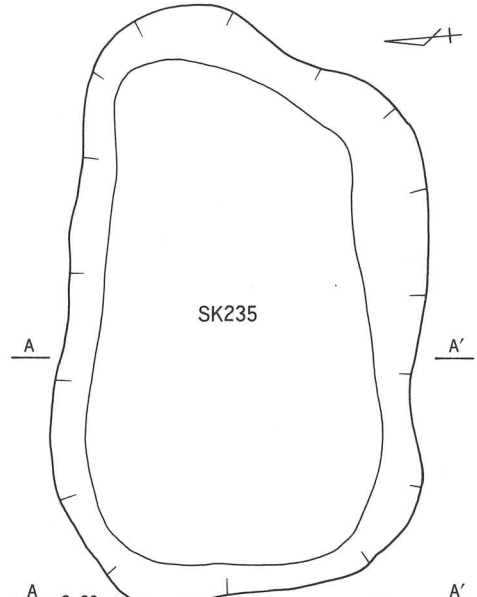
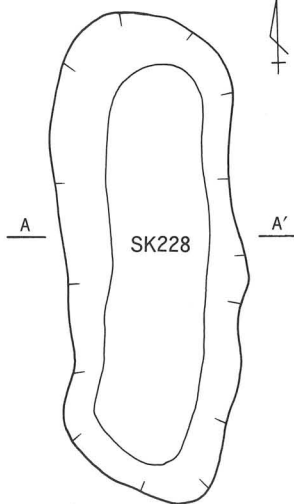
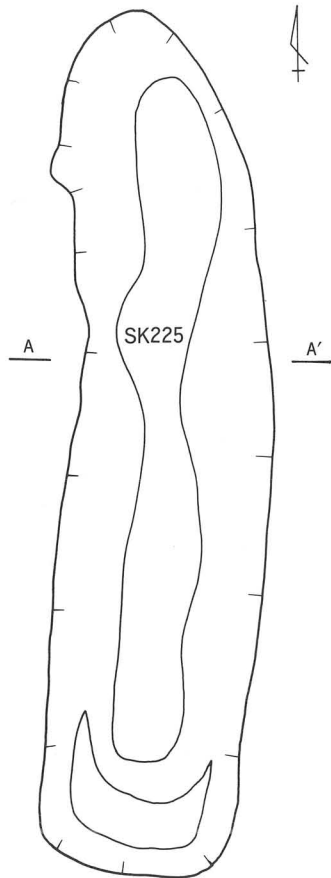
遺物(第61図、図版第38の3) 1137は珠洲の壺もしくは甕で、3cm当たりの叩き条数は7条を数え、色調は暗灰色を呈する。

SE300(第61図、図版第15の1) X16Y70区に位置する。形態は開口部より摺鉢状に掘り込み、更に基底部に向かって垂直に掘り下げた、所謂ロート状の素掘り井戸である。規模及び平面形は開口部で東西長1.9m・南北長1.7mの不整長方形で、基底部は1辺1.0mの正方形を呈し、南北辺は31°東偏する。深さは1.9mを測り、調査時に於ける湧水層まではば達する。出土遺物はない。

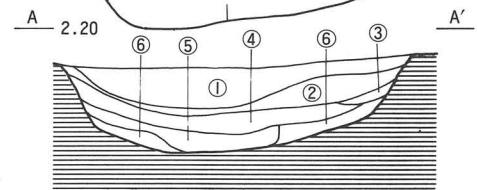
SD308(第61図) X17Y86区に位置しSD300Cに沿い東西に走る。総長は31.5mを測り、X79Y89区間は途絶する。規模は幅0.4～0.9m、深さ0.3mを測り、断面形はU字状を呈する。埋土は黒褐色を基調とした単層である。遺物はない。

SD320(第61図) X13Y23区間をSD300Cに沿い南北に走り、現長は12.3mを測る。規模は幅1.5m、深さ0.25mを測りX17以北では規模を縮小し、幅0.4m、深さ0.25mとなる。また、南端部は不定形な攪乱により消滅している。遺物はない。

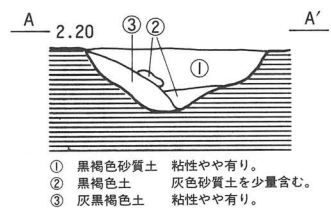




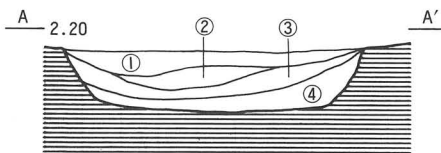
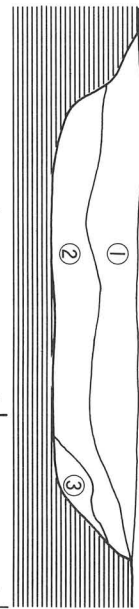
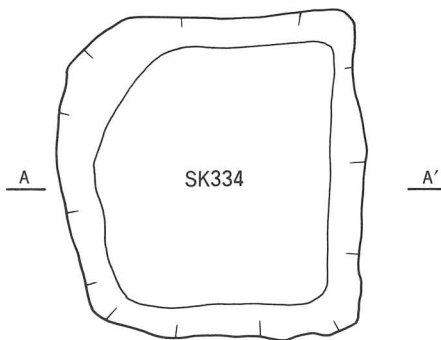
- ① 黒褐色砂質土 粘性やや有り。灰白色粘土がブロック (1-2 cm) が入る。
- ② 灰白色粘土質
- ③ 灰白色砂質土
- ④ 青灰色砂質土



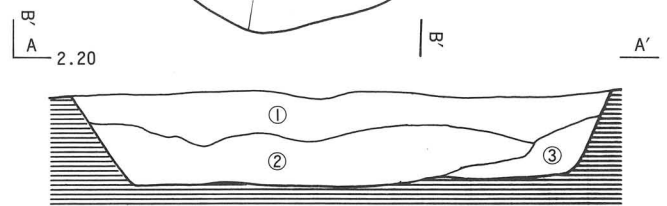
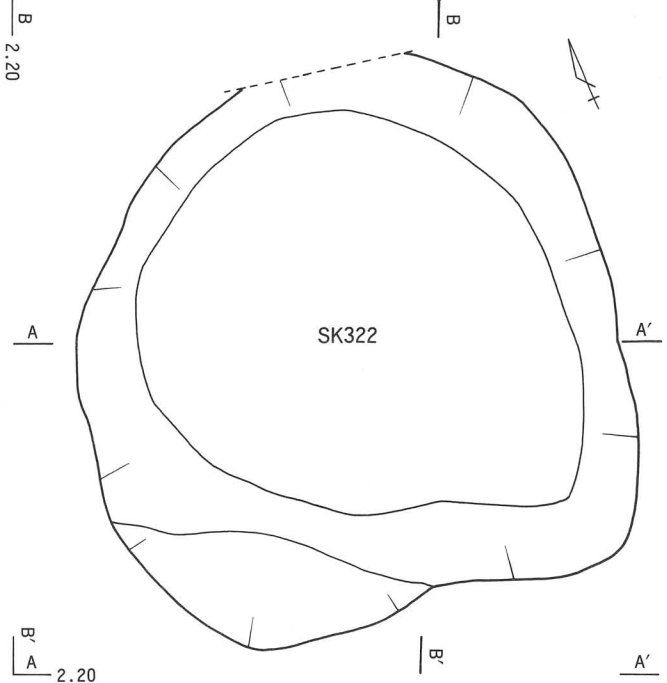
- ① 黄灰色砂質土 黒褐色砂質土を少量含む。
- ② 灰白色砂質土 黒褐色砂質土、黄灰色砂質土を少量含む。
- ③ 黄灰白色砂質土 自然堆積層の崩落層。
- ④ 黒褐色砂質土 やや粘性有り。
- ⑤ 灰白色砂質土 粗粒
- ⑥ 青灰白色砂質土 自然堆積層の崩落層。



- ① 黒褐色砂質土 粘性やや有り。
- ② 黒褐色土 灰白色砂質土を少量含む。
- ③ 灰黒褐色土 粘性やや有り。



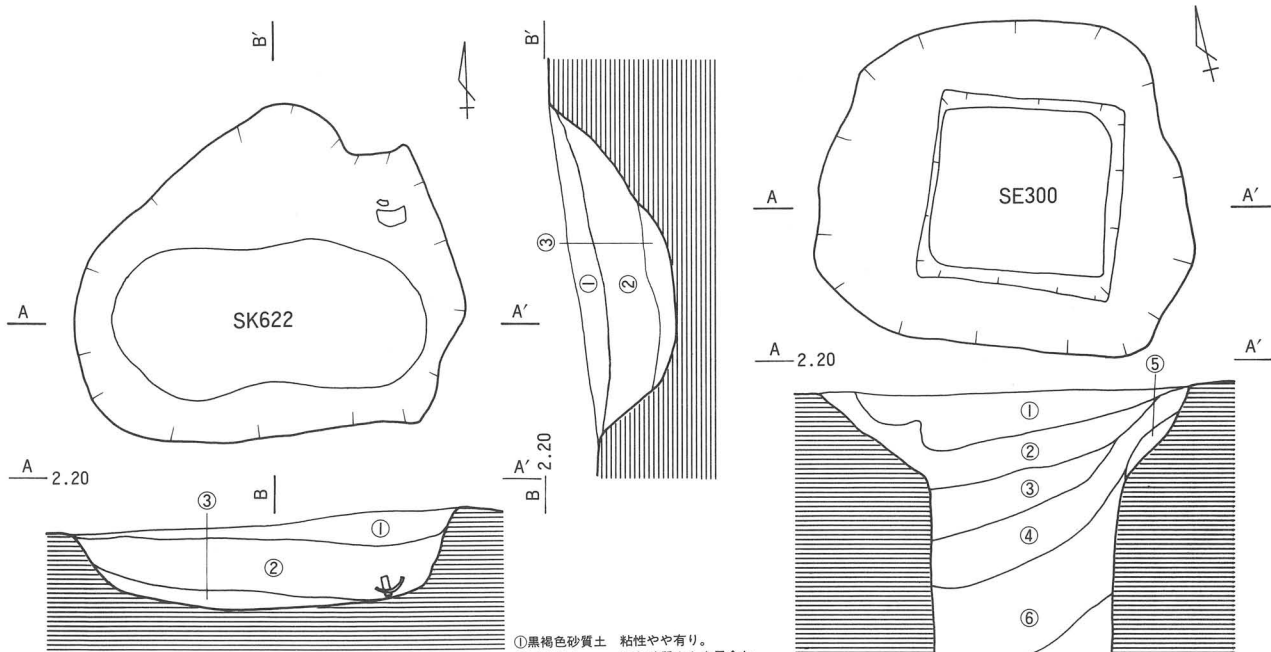
- ① 黒褐色土 酸化鉄の赤味を帯びる。やわらかい。
- ② 黒褐色砂質土 灰白色砂質土、炭化粒子を少量含む。
- ③ 黒褐色砂質土 灰白色粘質土、灰白色砂質土を少量含む。
- ④ 青灰色砂質土 灰白色粘質土、灰白色砂質土を少量含む。



- ① 黒褐色土 酸化鉄の赤味を帯びる。
- ② 暗褐色土 黒味を帯びる。炭化粒子を少量含む。やわらかい。
- ③ 暗褐色土 黒味を帯びる。青灰白色砂質土を少量含む。



第60図 1区画 (SK225・228), 2区画 (SK235), 3区画 (SK322・334) (1/40)

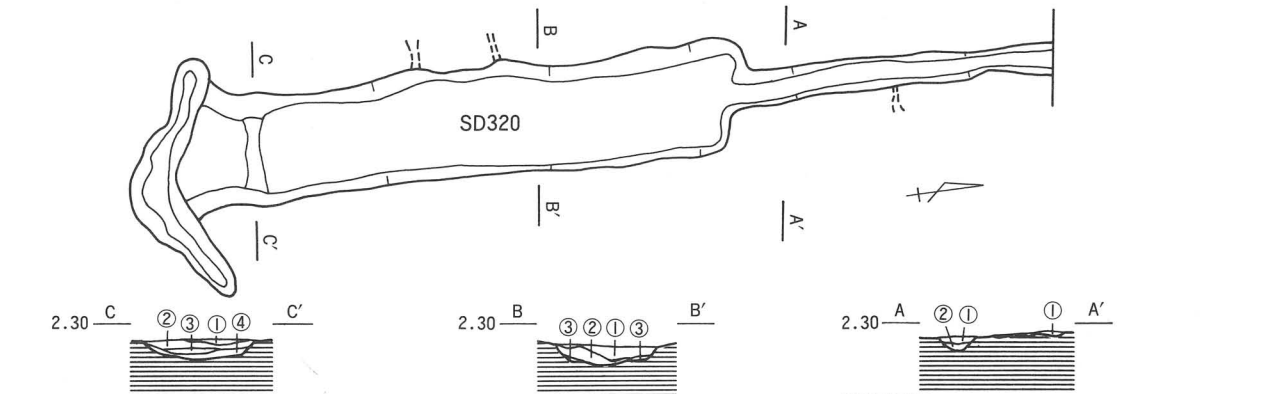
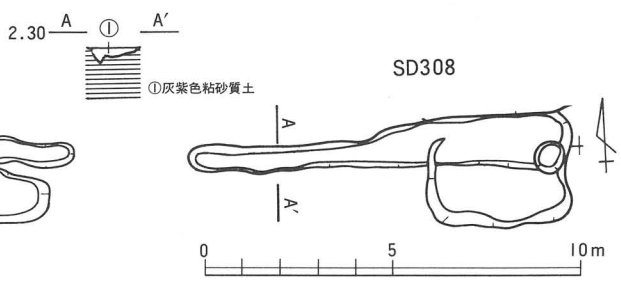
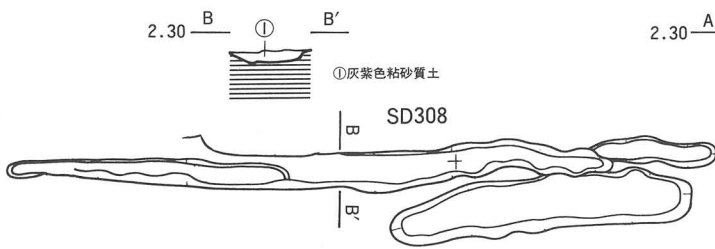


- ①黒褐色砂質土 粘性やや有り。
- ②黒褐色土 灰色砂質土を少量含む。
- ③灰黒褐色土 粘性やや有り。
- ④黒褐色土 酸化鉄の赤味を帯びる。やわらかい。
- ⑤灰白色粘質土 灰褐色粘質土を含む。やわらかい。
- ⑥灰白色粘質土 黒褐色土少量含む。
- ⑦青灰色砂質土 黒褐色土、暗灰色土がブロック (1-5cm) で入る。しまり強い。



0 10cm

0 1 2m



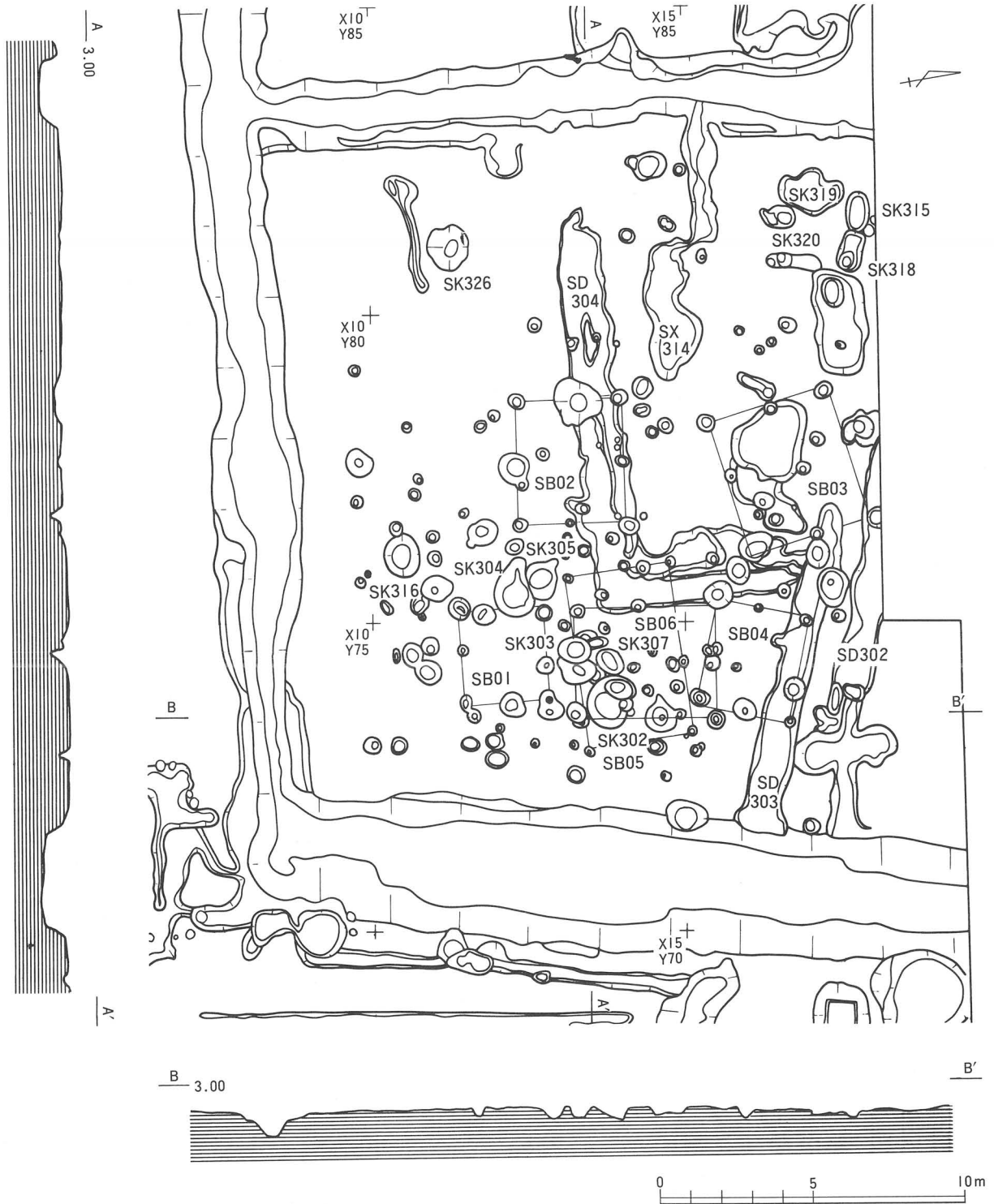
- ①暗灰褐色砂質土 灰白色砂質土粒をブロックに少量含む。
- ②黒褐色砂質土
- ③暗灰褐色砂質土 黒褐色粘質土粒と暗灰色砂質土粒を含む。
- ④灰白色砂質土 炭化物と暗灰色砂粒を少量含む。

- ①黒褐色砂質土
- ②暗灰褐色砂質土 黒褐色粘質土粒と暗灰色砂質土粒を含む。
- ③灰白色砂質土 炭化物と暗灰色砂粒を少量含む。

- ①黒褐色砂質土
- ②暗灰褐色砂質土 黒褐色粘質土粒と暗灰色砂質土粒を含む。

0 2.5 5m

第61図 3区画 (SK622, SE300 (1/40), SD308 (1/200)・320 (1/100)) とSK622の出土遺物 (1/4)



第62図 4区画内 遺構配置図 (1/200)

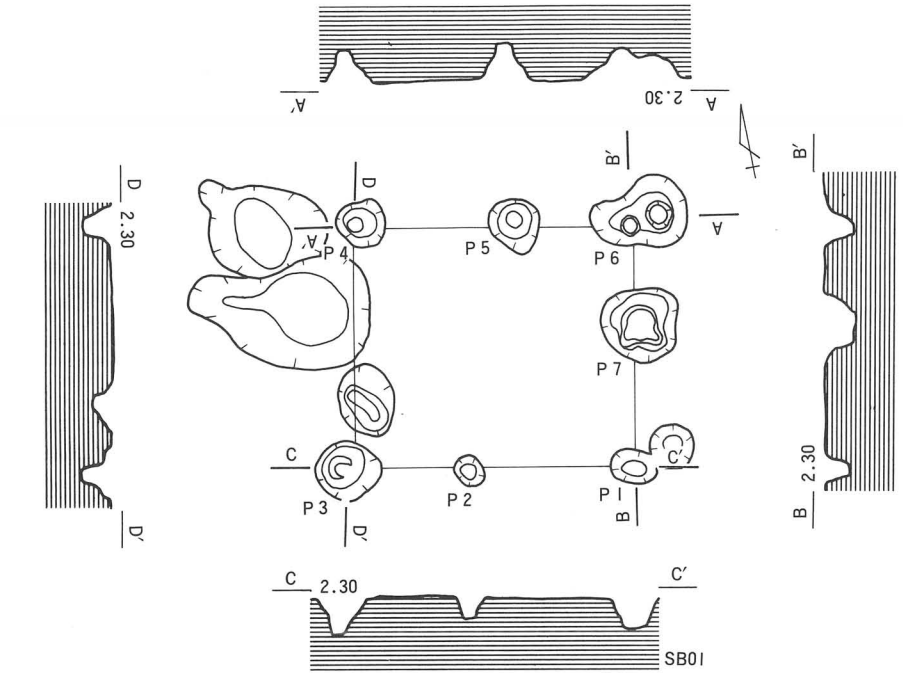
④ 4区画の遺構・遺物 当区画内面積は432㎡を測り、標高は1.9～2.3mの範疇にある。区画内には多くの落ち込みが存在するが、多くは現代の所産であり、遺構と認めがたいものである。また、堀に沿って東及び南側に小ピットがある程度の規則をもって存在し、該期柵列跡を彷彿とさせるが、これもまた遺構と認めがたい。結果として遺構と認知したものは、掘立跡6棟、溝3条、土坑12基である。

掘立はいずれも副屋的な小規模なもので、SB05が総柱、他はいずれも側柱式である。庇柱や縁束を付設する傑出した主屋の建物は認められない。各建物間に於ける主軸方向及び配置形態はSB01・02が概ね東西に主軸を揃え、SB01の西妻側柱列とSB06の西平側柱列が柱筋を揃える。SB04はSB10と桁行方位を揃え、SB03・05の主軸はN-81°～91°E

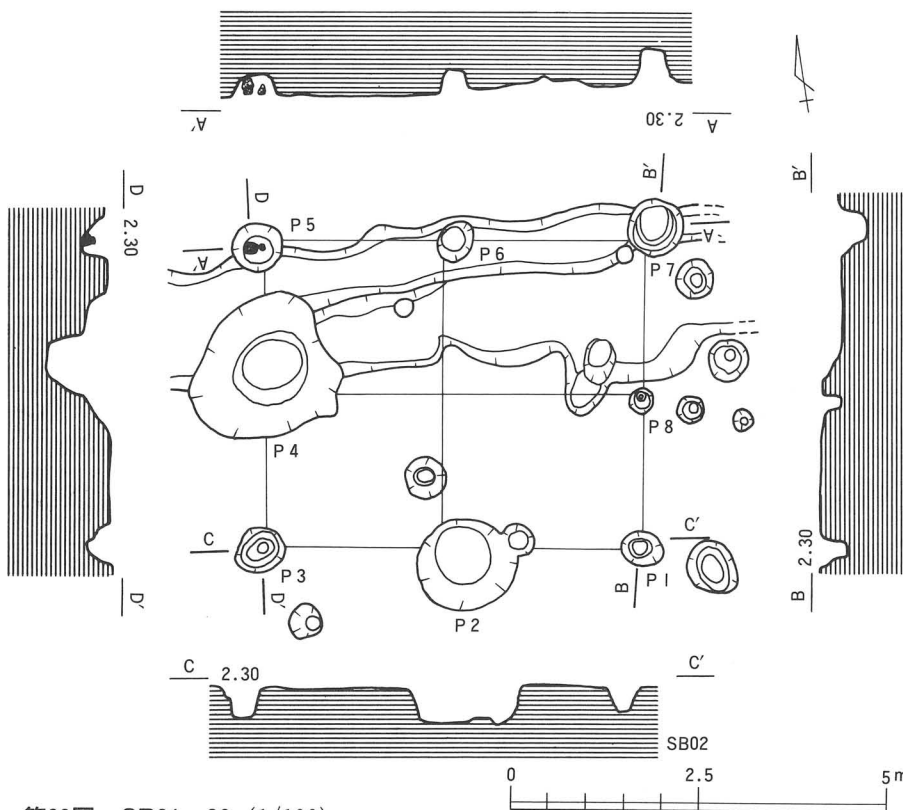
の範疇にある。

溝はSD302・303が平行関係にあり、主軸は65°西偏する。SD304はL字状を呈し、南北溝の主軸は6°西偏する。いずれも排水溝もしくは区画溝が想定される。

土坑は、形状・規模がバラエティに富んでおり、埋土は概して自然堆積といえる。出土遺物は極めて少ない。

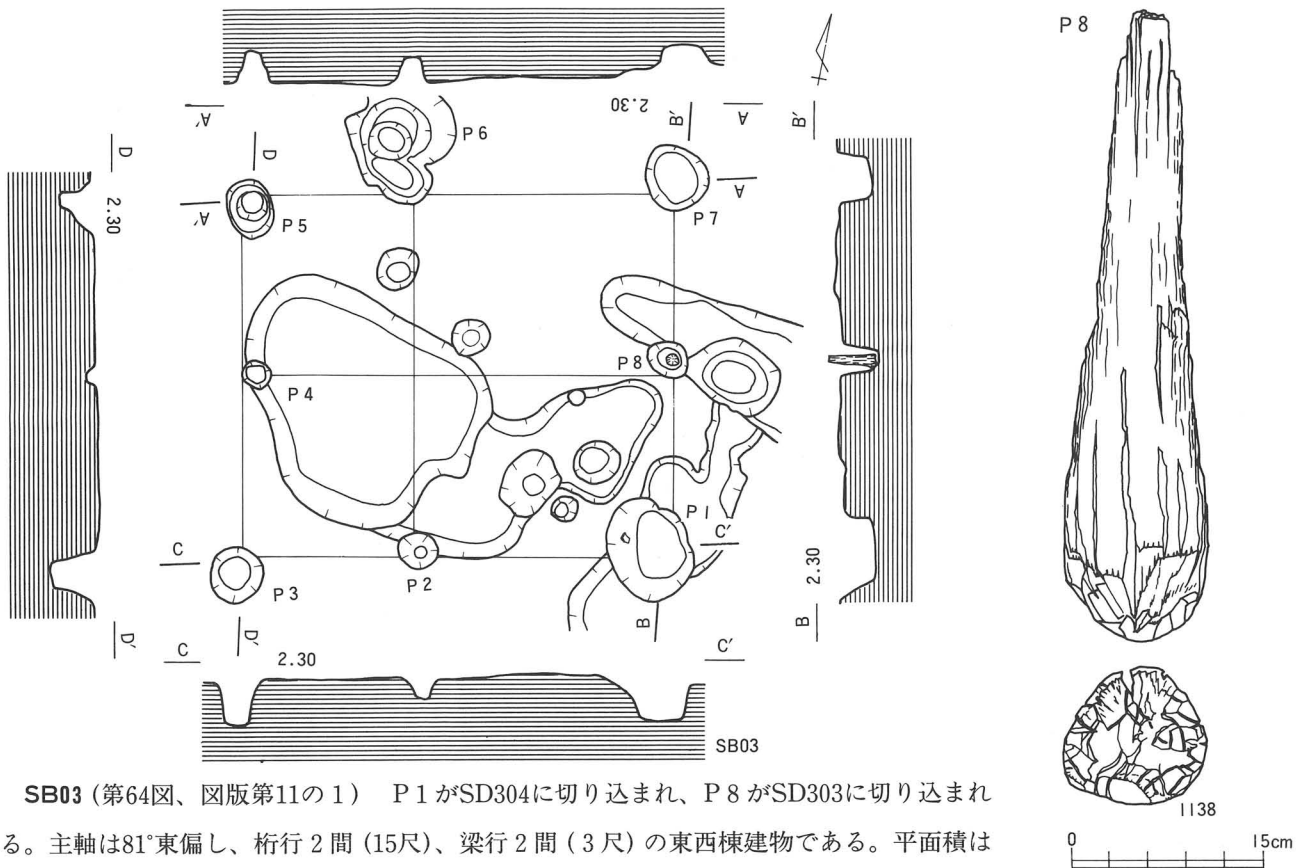


**SB01** (第63図、図版第11の1・2) SK304に切り込まれ、西妻側の柱穴1基が消滅している。主軸は79°西偏し、桁行2間(10尺)、梁行2間(10尺)の東西棟建物である。平面積は7.2㎡を測る。南側の桁行柱間寸法は芯々でP1～2は1.8m(6尺)、P2～3は1.2m(4尺)、東側梁行でP6～7は1.1m(3.7尺)、P7～1は1.4m(4.7尺)を測る。柱掘方の埋土は暗褐色を基調とした砂質土で出土遺物はない。



**SB02** (第63図、図版第11の1・3) SD304により切り込まれる。主軸は78°西偏し、桁行2間(13尺)、梁行2間(11尺)の東西棟建物である。平面積は12.2㎡を測る。P2～3は現代の穴により消滅し、P5には石製の礎盤と思われる石が3個遺存する。北側の桁行柱間寸法は芯々でP5～6は2.1m(7尺)、P6～7は2.1m(7尺)、東側梁行でP7～8は1.8m(6尺)、P8～9は1.1m(3.7尺)を測る。柱掘方の埋土は、暗褐色を基調とした砂質土で出土遺物はない。

第63図 SB01・02 (1/100)

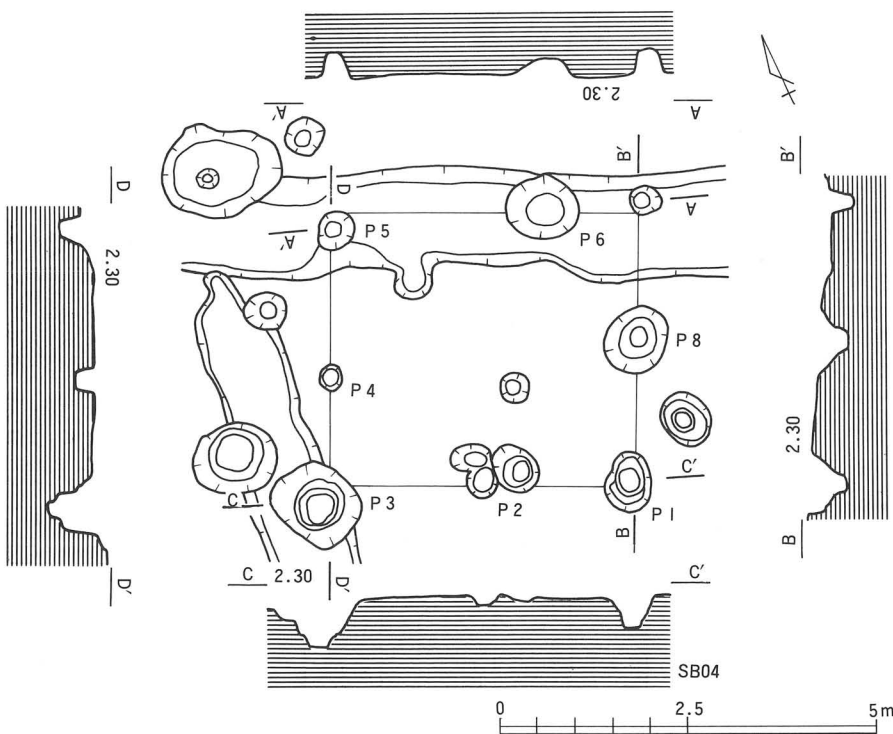


**SB03** (第64図、図版第11の1) P1がSD304に切り込まれ、P8がSD303に切り込まれる。主軸は81°東偏し、桁行2間(15尺)、梁行2間(3尺)の東西棟建物である。平面積は18㎡を測る。南側の桁行柱間寸法は芯々でP1~2は2.4m(8尺)、P2~3は2.1m(7尺)、東側梁行でP7~8は1.95m(6.5尺)、P8~9は1.95m(6.5尺)を測る。

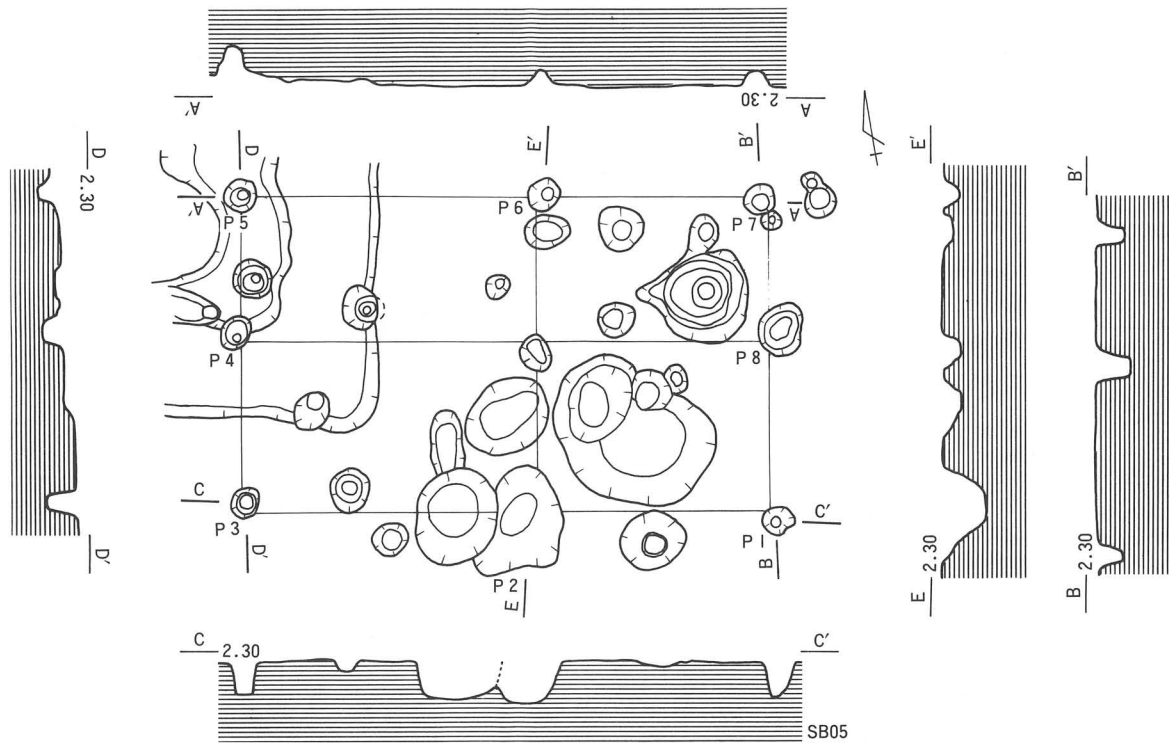
**遺物** (第64図、図版第30の1) 1138はP8に遺存する柱根で、現存長38cm・最大径12cmを測り、種類はヤマザクラの心持丸材である。底面には手斧によるはつり痕が明瞭に観察できる。手斧の刃幅は3.5cm程度であろう。また、P1

より浮いた状態で珠洲が1点出土する。

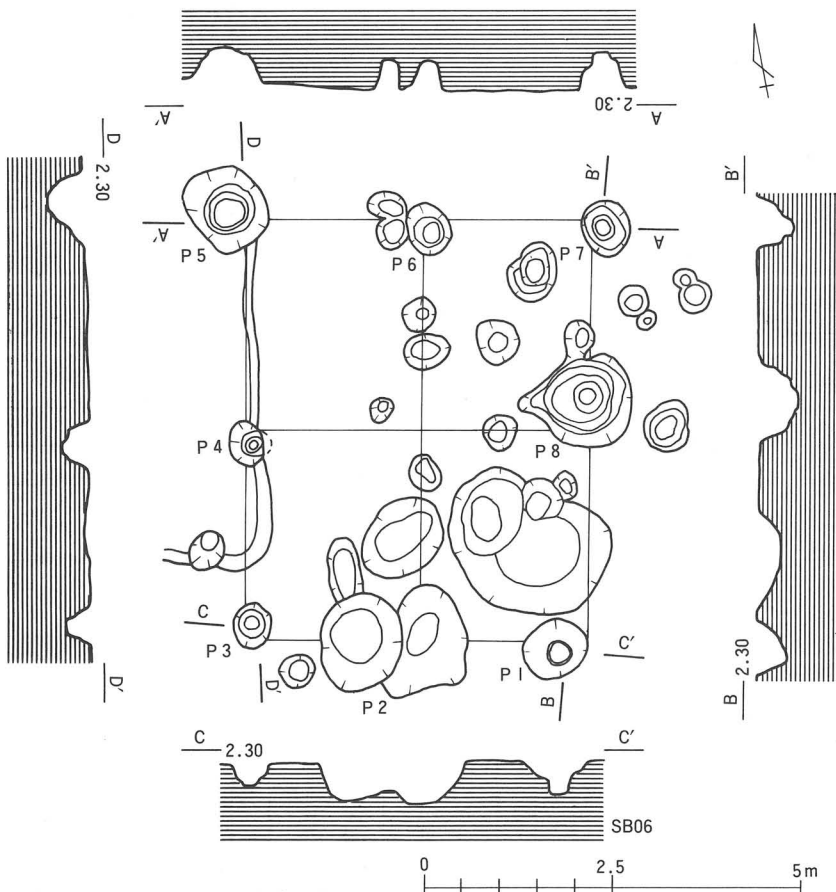
**SB04** (第64図、図版第11の1・第12の1) SD303に切り込まれる。P3はSB06のP5と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。主軸は69°西偏し、桁行2間(11尺)、梁行2間(9.5尺)の東西棟建物である。平面積は8.91㎡を測る。南側の桁行柱間寸法は芯々でP1~2は1.2m(4尺)、P2~3は2.1m(7尺)、東側梁行でP7~8は1.35m(4.5尺)、P8~9は1.5m(5尺)を測る。柱掘方よりの遺物はない。



第64図 SB03・04 (1/100) とSB03の出土遺物 (1/6)

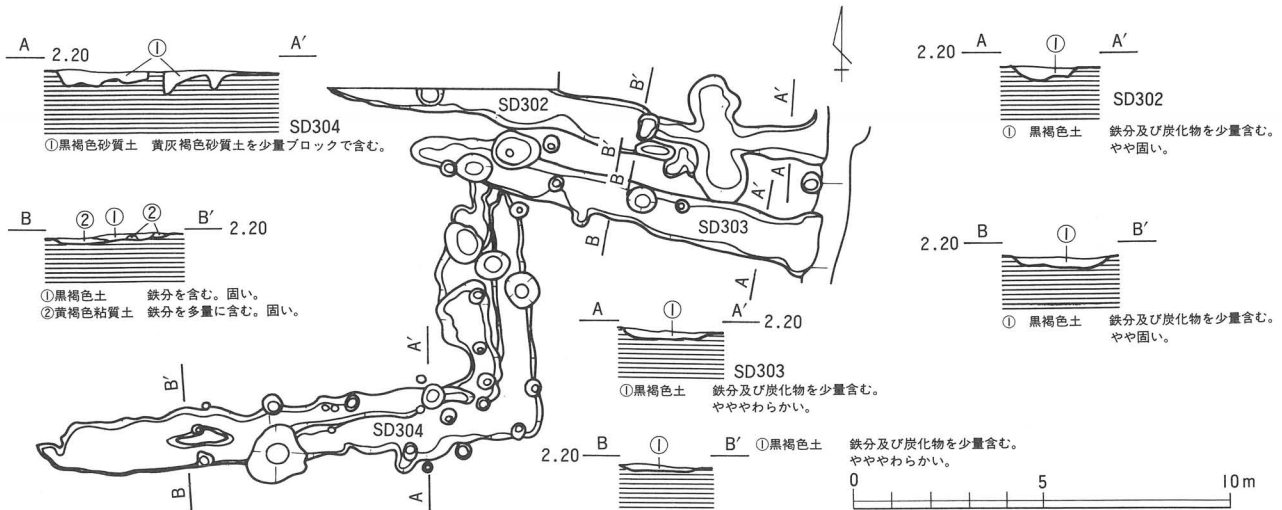


**SB05** (第65図、図版第11の1・第12の2) P2はSK303に切り込まれ、P4・5はSD304に切り込まれる。主軸は91°東偏し、桁行2間(18.7尺)、梁行2間(11尺)の総柱建物である。平面積は18.5㎡を測る。南側の桁行柱間寸法は芯々でP1～2は2.7m(9尺)、P2～3は2.91m(9.7尺)、東側梁行でP3～4は1.8m(6尺)、P4～5は1.5m(5尺)を測る。柱掘方よりの出土遺物はない。



**SB06** (第65図、図版第11の1・第12の2) P5はSB04のP3と重複する。主軸は7°東偏し、桁行2間(15尺)、梁行2間(12尺)の南北棟建物である。平面積は14.9㎡を測る。東側の桁行柱間寸法は芯々でP7～8は1.8m(6尺)、P8～9は2.7m(9尺)、南側の梁行でP1～2は1.5m(5尺)、P2～3は2.1m(7尺)を測る。柱掘方の埋土は暗褐色土を基調とした砂質土で、出土遺物はない。

第65図 SB05・06 (1/100)



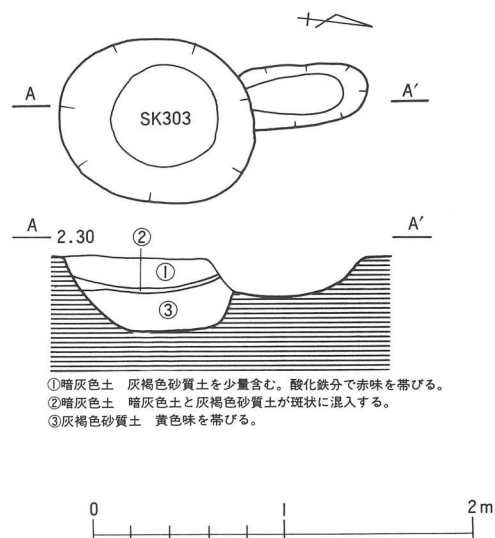
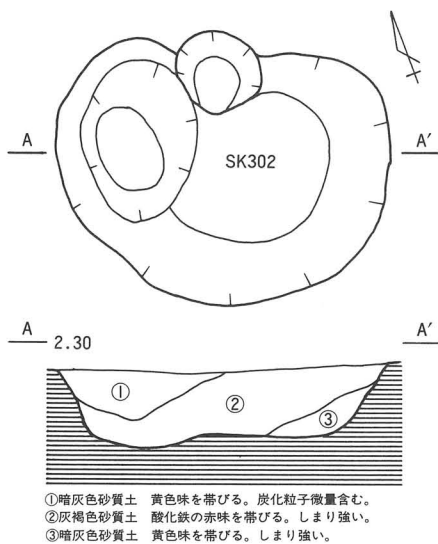
**SD302** (第66図) X72Y80区間を東西に走る斜行溝である。主軸は65°西偏し、SD303と平行関係にあり、SD301に連結する。規模は幅0.8~1.1m・深さ0.1~0.25m・現長12.5mを測る。

**遺物** (第66図、図版第38の4) 1139~1143は中国輸入の銅銭で、1140・1143は判読不明。1139は3.5gを量る皇宋通宝で、初鑄年代は北宋宝元2年(1039年)である。1141は一文字が欠損しているが元豊通宝と思われる。初鑄年代は北宋元豊元年(1078年)である。1142は1.8gを量る開元通宝で、初鑄年代は唐武徳4年(621年)である。また、1140は3.2g、1143は1.8gを量る。

**SD303** (第66図) SD301に連結し、SD304に重複する。規模は幅0.7~1.0m・深さ0.1m・長さ11mを測る。

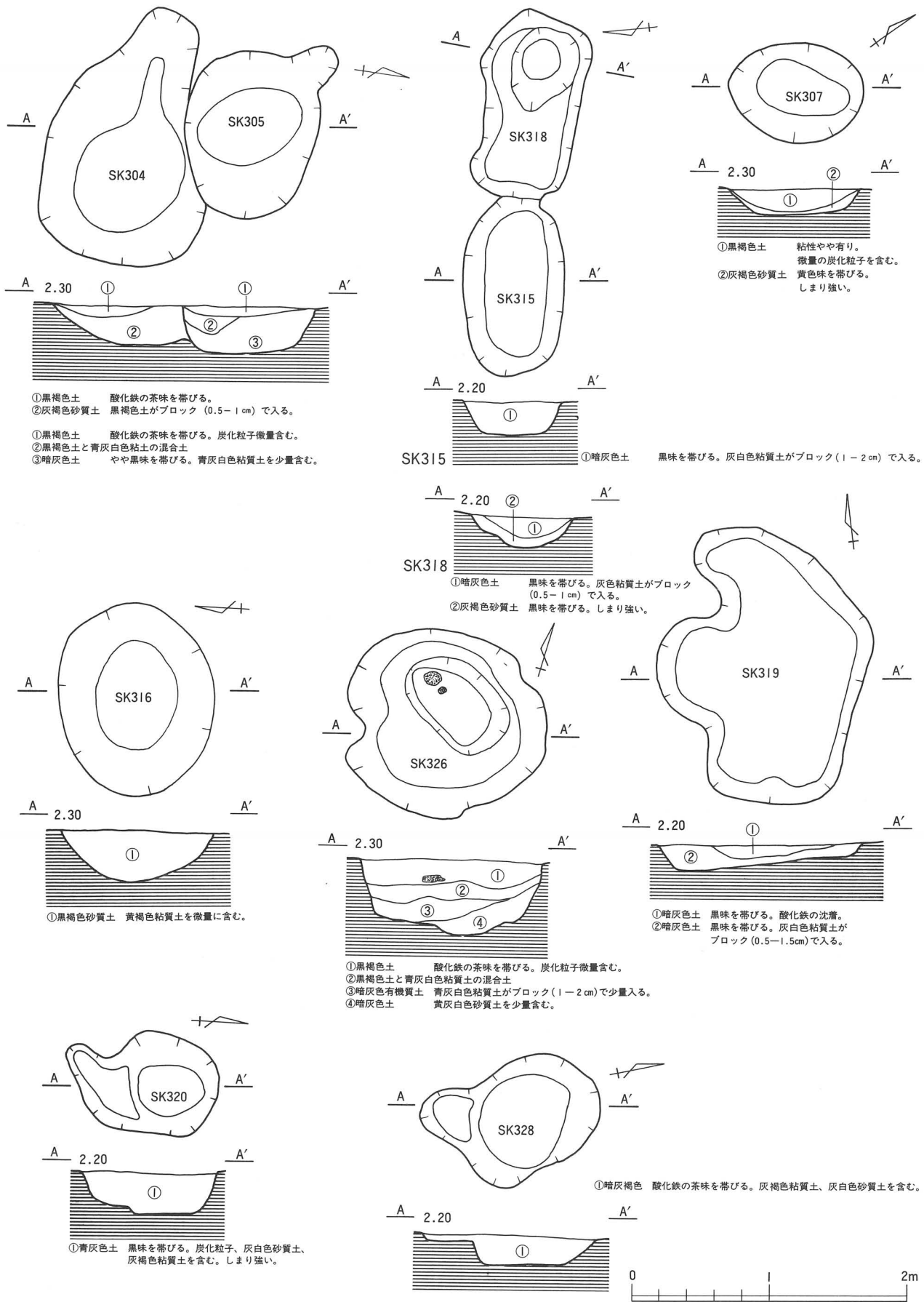
**SD304** (第66図) L字状を呈し、SB02を切り込む。東西溝の主軸は84°西偏し、東西を走るSD301に平行する。規模は長さ13m・幅1.3m前後・深さ0.05~0.1mを測る。南北溝の主軸は6°東偏し、南北を走るSD301に平行する。規模は長さ6.5m・幅1m前後・深さ0.1mを測る。遺物はない。

**SD 302**

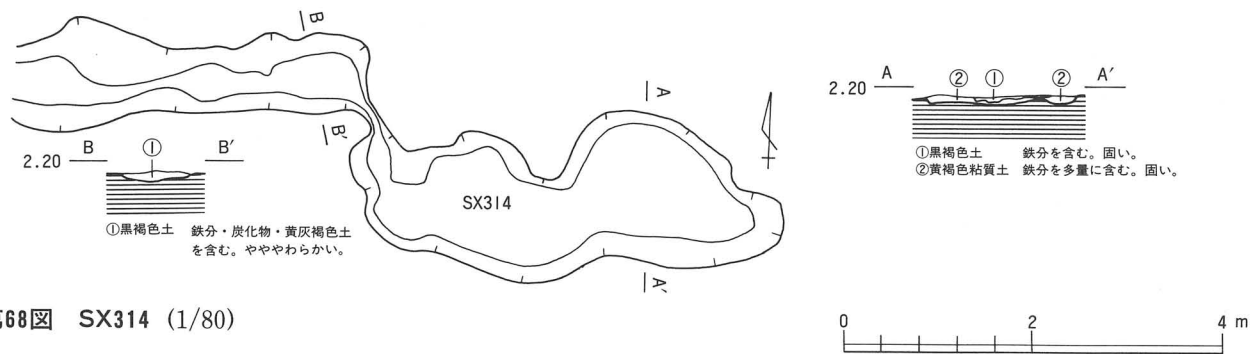


第66図 SD302~304 (1/200), SK302・303 (1/40) と輸入銭 (1/2)





第67図 SK304・305・307・315・316・318~320・326・328 (1/40)



第68図 SX314 (1/80)

**SK302** (第66図) X14Y75区に位置する。平面は、 $1.5 \times 1.8$ mの不整形を呈し、深さは $0.35 \sim 0.45$ mを測り、底面には2箇所の落ち込みが認められる。埋土は3層に分かれ、2・3層は埋め戻し、1層は自然な堆積である。遺物はない。

**SK303** (第66図) X13Y75区に位置し、黒褐色砂質土を埋土とする土坑を切り込み構築される。平面は $0.85 \times 1.0$ mの円形を呈し、深さは $0.4$ mを測り、底面は平坦である。埋土は3層に分かれる自然堆積で、1層には炭化粒子を微量含む。遺物はない。

**SK304** (第67図、図版第15の1) X13Y76区に位置し、SK305に切られる。平面は $1.2 \times 1.9$ mの無花果型を呈し、深さは $0.27$ mを測り、底面は皿状である。埋土は2層に分かれる自然堆積である。遺物はない。

**SK305** (第67図、図版第15の1) X13Y76区に位置し、SK304を切り込む。平面は $0.95 \times 1.2$ mの不整楕円形を呈し、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分かれ1層には炭化粒子を微量含む。遺物はない。

**SK307** (第67図、図版第15の2) X14Y75区に位置する。平面は $0.75 \times 1.0$ mの楕円形を呈し、深さは $0.18$ mを測り、底面は平坦である。埋土は2層に分かれる自然堆積で1層には炭化粒子を微量含む。遺物はない。

**SK315** (第67図) X18Y82区に位置し、SK318に隣接する。平面は $0.7 \times 1.0$ mの楕円形を呈し、深さは $0.22$ mを測り、底面は平坦である。埋土は暗灰色土の単層である。遺物はない。

**SK316** (第67図、図版第15の3) X11Y77区に位置する。平面は $1.1 \times 1.6$ mの楕円形を呈し、深さは $0.38$ mを測り、断面はU字形である。埋土は黒褐色を基調とした単層である。遺物はない。

**SK318** (第67図) X18Y81区に位置し、SK315に隣接する。平面は $1.0 \times 1.3$ mの不正方形を呈し、底面は起伏に富む。埋土は2層に分かれる。遺物はない。

**SK319** (第67図) X19Y83区に位置する。平面は不定形で時間差の少ない複数の遺構の連結形とも考えられる。深さは $0.20$ mを測り、底面は平坦である。埋土は2層に分かれ1層には酸化鉄の沈着が認められる。遺物はない。

**SK320** (第67図) X17Y82区に位置する。平面は $0.7 \times 1$ mの不整形を呈し、深さは $0.30$ mを測り、底面は平坦で南側に1段高いテラス状の張り出しを伴う。埋土は青灰色を基調とした単層の埋め戻し土である。遺物はない。

**SK326** (第67図、図版第15の5) X12Y82区に位置する。平面は $1.4 \times 1.4$ mの不整円形を呈し、深さは $0.45 \sim 0.55$ mを測り、底面は2段に掘り込まれている。埋土は4層に分かれ1層には炭化粒子を微量含む。2層より石2個が出土。

**SK328** (第67図、図版第15の6) X15Y83区に位置する。土坑2基の連結形と思われるが土層観察によれば、切り合い関係は認められない。埋土は暗灰褐色の単層である。遺物はない。

**SX314** (第68図) Y80～Y85区間を東西に走る不定形な遺構である。遺構幅は最大で $1.6$ m・最小で $0.8$ m・深さは $0.15$ m程度を測る。底面のレベルは若干ではあるが、東より西方向にかけて高さを減じながら、SD301に連結する。出土遺物はない。



第69図 5区画内遺構配置図 (1/200)

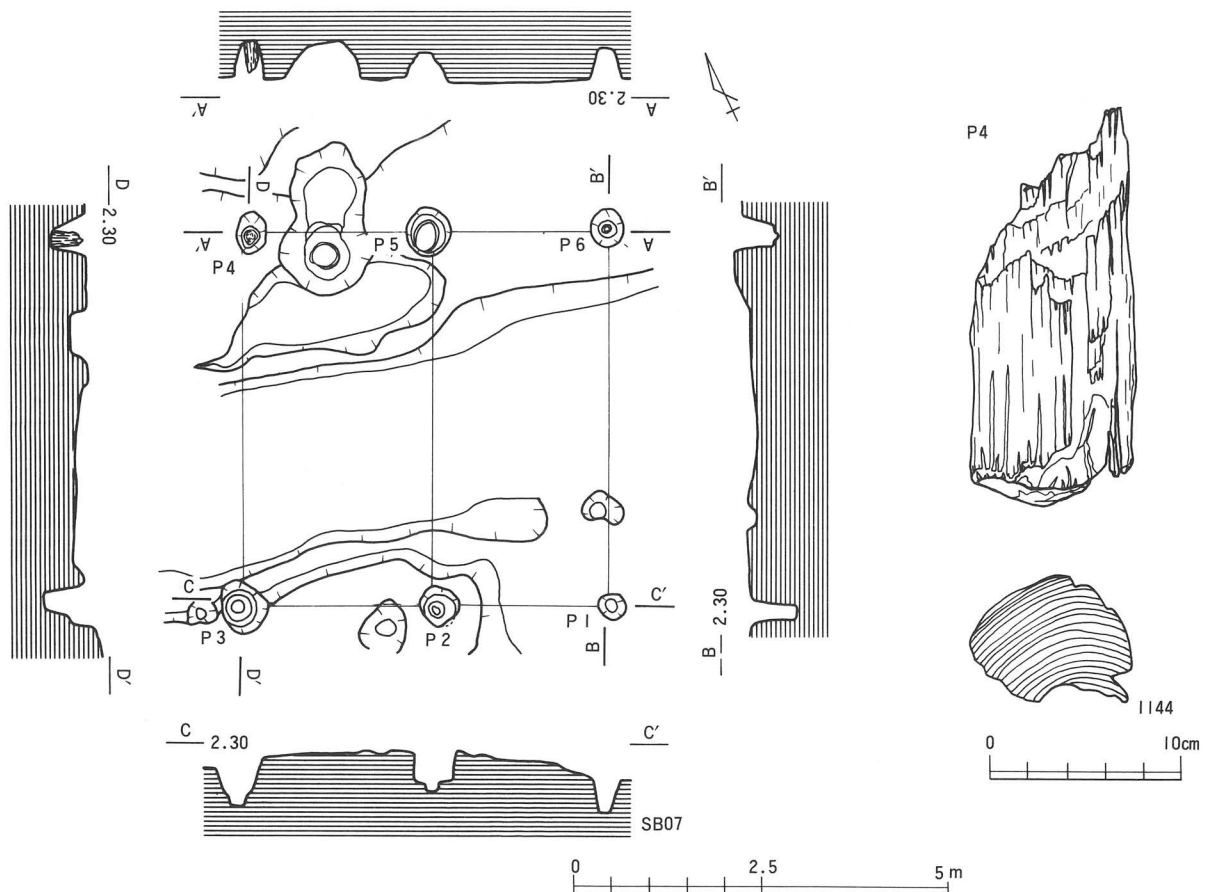
⑤ 5区画の遺構・遺物 当区画内面積は、4区画の1.5倍にあたる663㎡を測り、標高は1.9～2.4mの範疇にある。区画内には多くの落ち込みが存在するが、現在の所産と思われる物も数多い。遺構として認知した物は掘立跡5棟、井戸跡7基、溝3条、土坑17基である。

掘立跡はいずれも副屋的な小規模な物で、柱掘方の重複関係は見られない。SB09～11は、区画内に於いて唯一砂層の堆積が見られず、比較的安定した微高地上に立地する。各建物間に於ける配置形態は、SB07・08東側柱列が柱筋を揃え、SB09・11の妻側柱列が方位を揃える。

井戸はSE300を除きすべて当区画内に集中する。分布状況はSB08～11が所在する微高地上を避けるように鑿井されている。規模・形態・構法は様々で、今回土坑として認識した遺構の中にも井戸機能が想定される物も少なくない。

溝は、不定形で東西に延びるSD306、区画中央部にあって東西軸に主軸を一致させるSD307、SD305に併走し、南北軸に主軸を一致させるSD309が構築されている。SD307・309については、区画溝の可能性が高い。

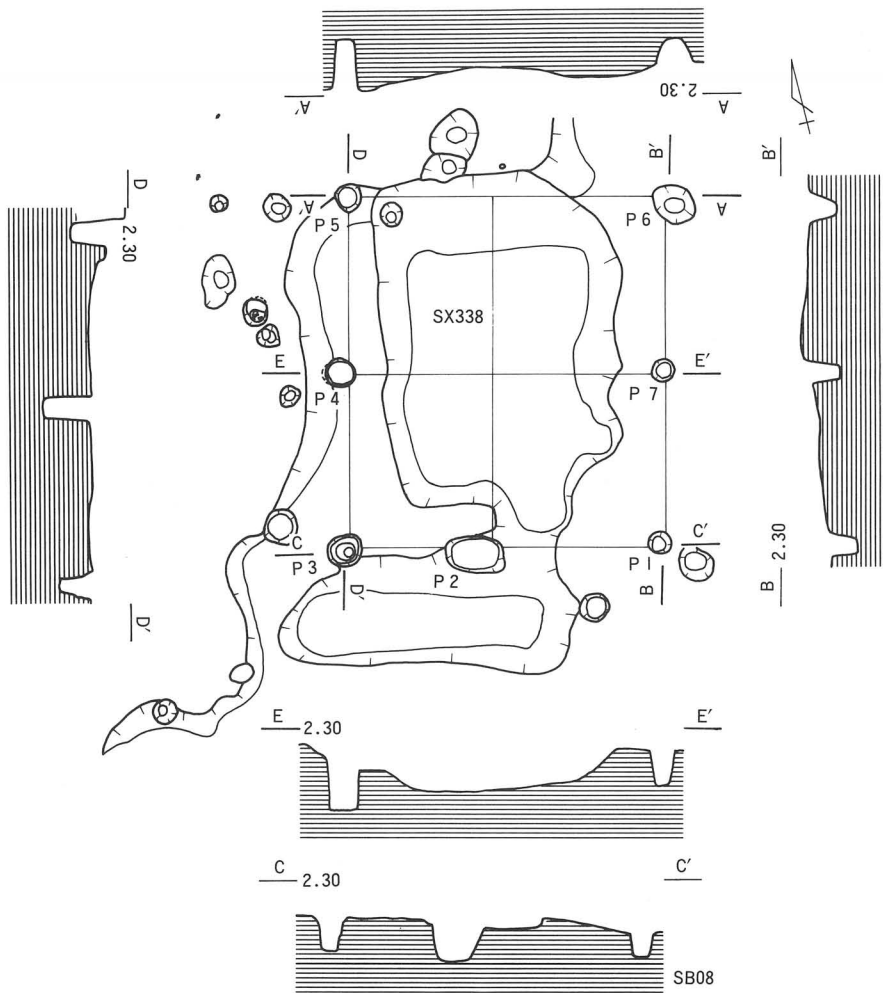
土坑は、規模・形状がバラエティであるが、概して円形が主体となる。また、SK613は平面が長方形の堅穴で、底面が平坦であること、壁が垂直に近く掘り込まれていた可能性があること、東壁のコーナーに柱穴と思われる小ピットを付設すること、以上により方形堅穴建築跡の可能性が考えられる。SX338についても、SB08を側柱と理解するならば、やはりSK613に近似した遺構と理解される。



第70図 SB07 (1/100) と出土遺物 (1/4)

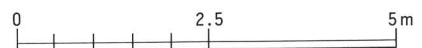
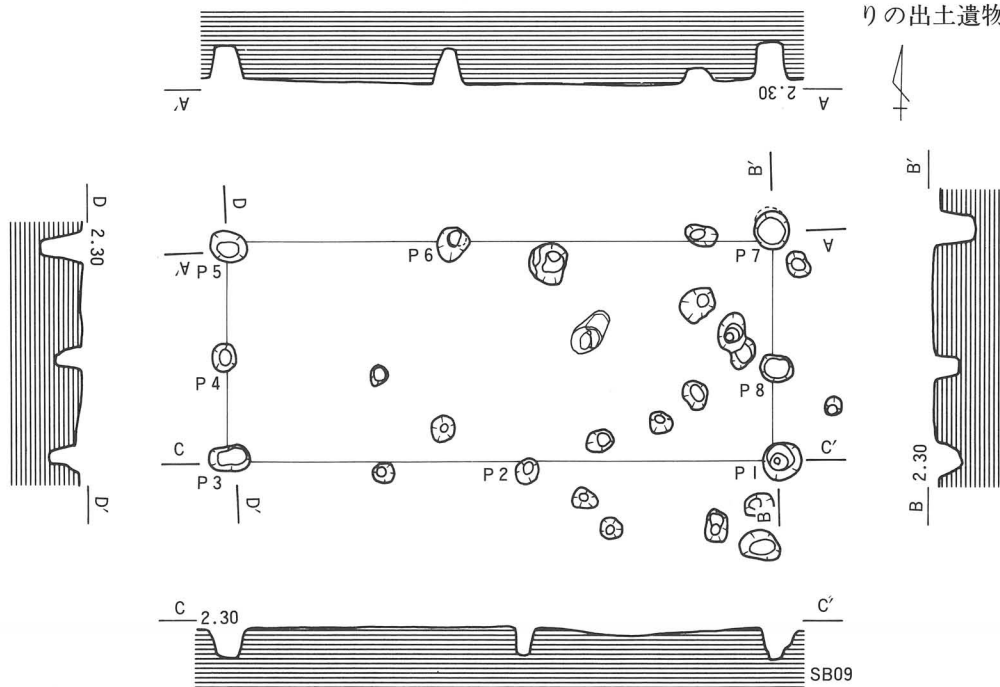
SB07 (第70図) SD307を跨ぎ、SE335の主要部を平面的に取り込む。南北軸は6°東偏し、桁行2間(13尺)、梁行1間(13尺)の建物跡である。平面積は16㎡を測る。柱間寸法は芯々でP1～2が1.8m(6尺)、P2～3は2.0m(6.7尺)、P3～4は3.9m(13尺)を測る。

遺物 (第70図、図版第49の2) I144はP9に遺存するクリの木を用いた柱根で、最大径8cm・現存長26cmを測る。底面及び側面は腐食し、外側に刃幅約3.5cmを測る、手斧によるはつきり痕が認められる。

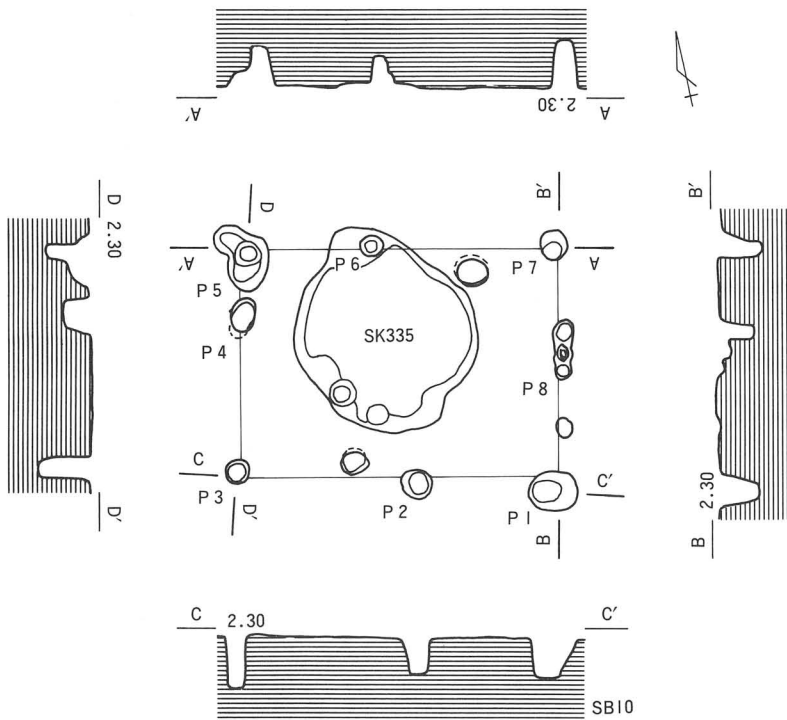


**SB08** (第71図) SX338を四  
周する。主軸は15°東偏し、桁行  
2間(12.7尺)、梁行2間(11尺)  
の南北棟建物跡である。平面積  
は12.8㎡を測る。柱間寸法は  
芯々でP 1～2 は1.8m (6  
尺)、P 2～3は1.8m (6尺)の  
等間で、P 3～4 は1.8m (6  
尺)、P 4～5は1.5m (5尺)を  
測る。柱掘方よりの出土遺物は  
ない。

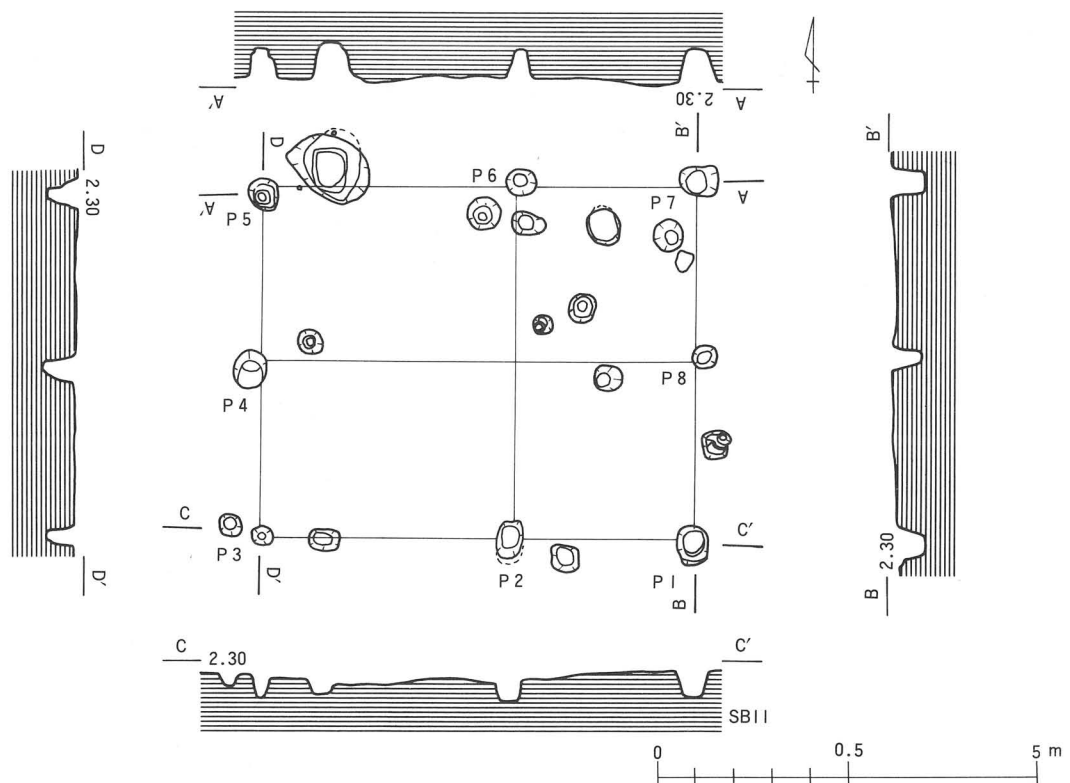
**SB09** (第71図、図版第12の  
3・第13の2) 主軸は93°東  
偏し、桁行2間(19尺)、梁行2  
間(8尺)の東西棟建物跡であ  
る。平面積は12.8㎡を測る。柱  
間寸法は芯々でP 1～2 は2.6  
m(8.7尺)、P 2～3は3.0m(10  
尺)、P 3～4 は1.2m (4尺)、  
P 4～5は1.2m(4尺)、P 5～6  
は2.4m(8尺)を測る。柱掘方よ  
りの出土遺物はない。



第71図 SB08・09 (1/100)

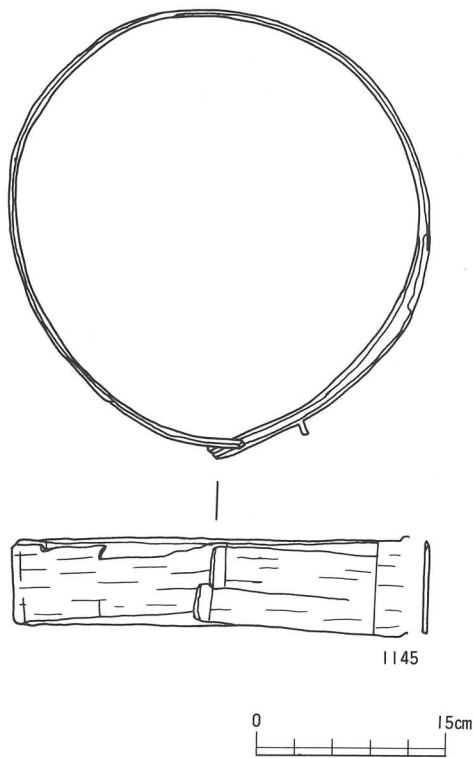
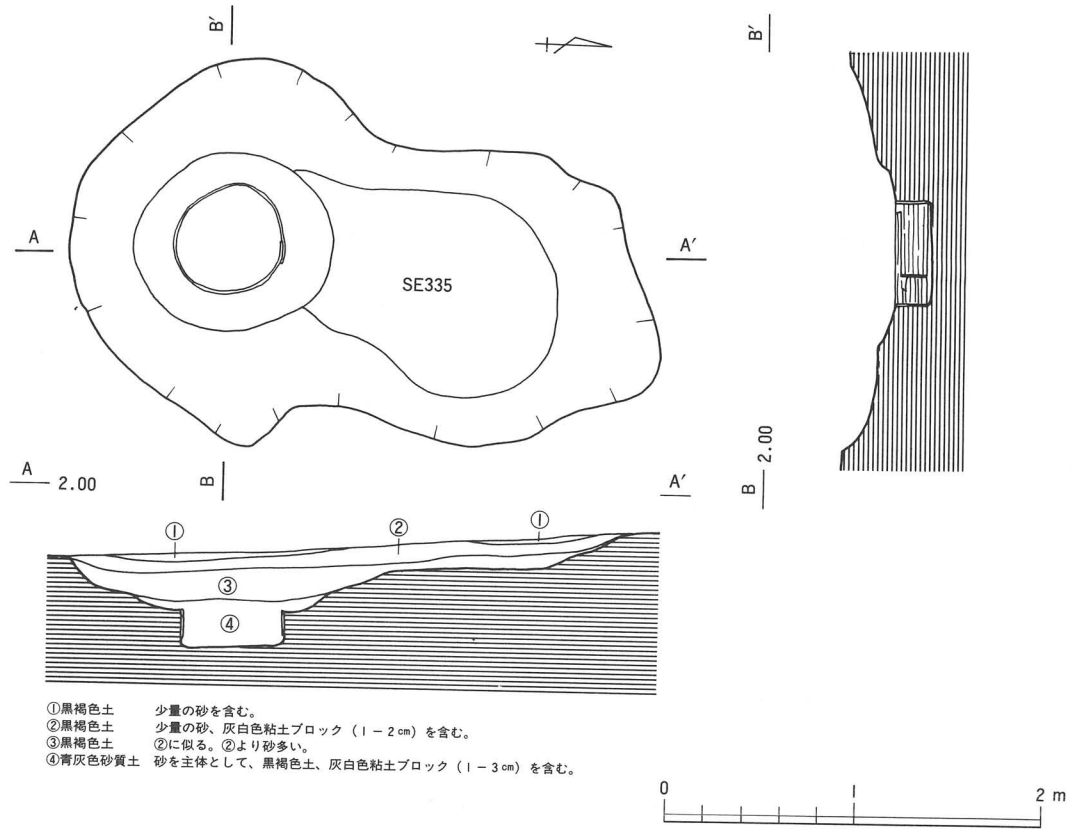


SB10 (第72図、図版第12の3・第13の1・3) 主軸は69°西偏し、桁行2間(11尺)、梁行2間(8尺)の東西棟建物跡である。平面積は7.9㎡を測る。柱間寸法は芯々でP1~2は1.4m(4.7尺)、P2~3は1.9m(6.3尺)、P3~4は1.8m(6尺)、P4~5は0.6m(2尺)、P5~6は1.3m(4.3尺)、P6~7は2.0m(6.7尺)、P7~8は0.9m(3尺)、P8~9は1.5m(5尺)を測る。柱掘方よりの出土遺物はないが、P8の隣りの浅い落ち込みより珠洲1点が出土。



第72図 SB10・11 (1/100)

SB11 (第72図、図版第12の3・第13の1) 主軸は95°東偏し、桁行2間(15尺)、梁行2間(12尺)の東西建物跡である。平面積は17㎡を測る。柱間寸法は芯々でP1~2は1.8m(6尺)、P2~3は2.7m(9尺)、P3~4は1.8m(6尺)、P4~5は1.8m(6尺)を測る。柱掘方は直径0.25~0.40m、深さ0.25~0.40mとばらつくが基底レベルは斉一である。

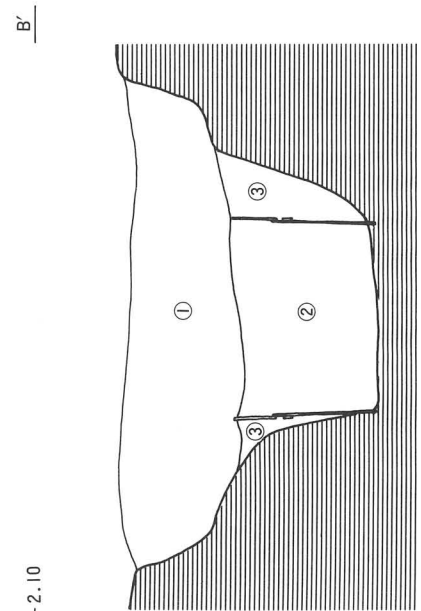
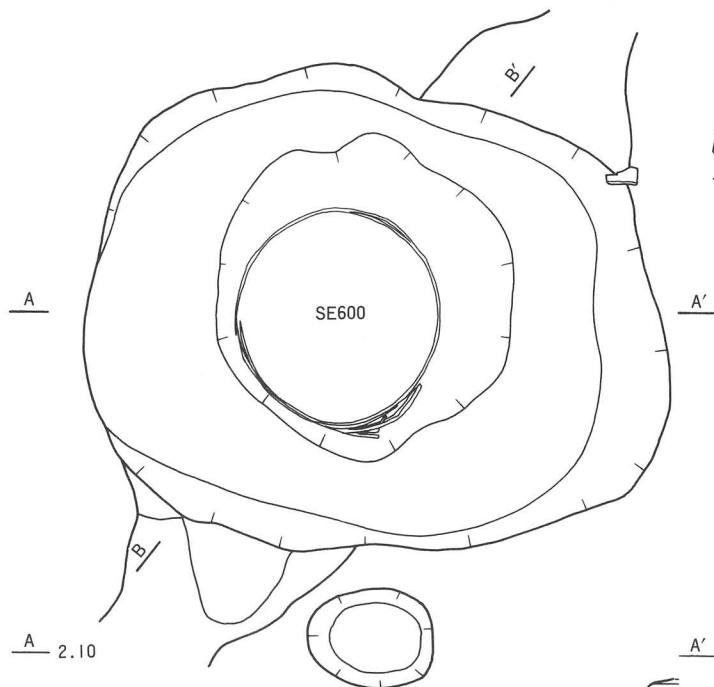


**SE335** (第73図、図版第14の2) X15Y91 区に位置する。平面は東西長1.0m・南北長1.5mのダルマ形である。南側の1段深く掘り込まれた箇所には打ち込みによると思われる単式の曲物が設置される。曲物の基底レベルは標高0.6mを測り、調査時には滞水状態にあった。北側の浅く掘り込まれた箇所は、いわゆる井戸口部に相当するのではなかろうか。また、出土遺物はなく、開鑿・使用時期は不明である。

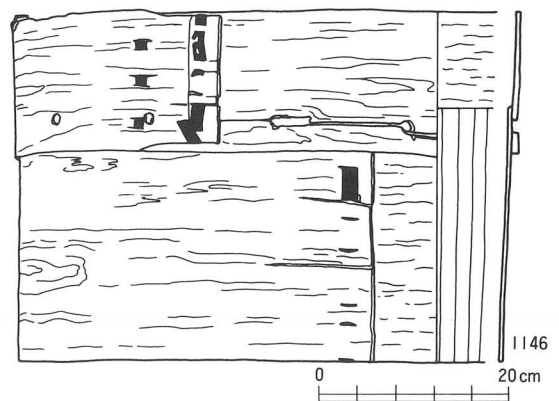
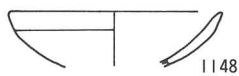
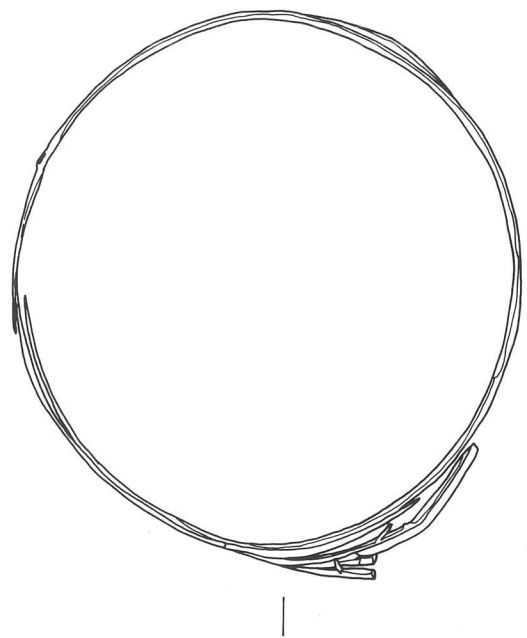
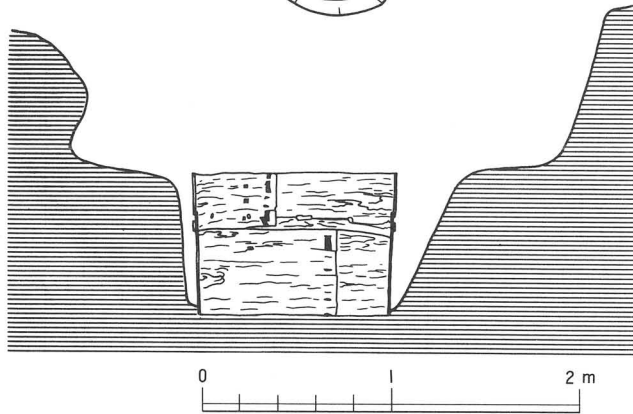
**遺物** (第73図、図版第49の4) 1145は井壁保設(井戸側)を具備したスギ製の水溜曲物である。径は28cm・高さ8cm・厚さ2mmを測る。結合法は樺綴じであるが樺皮は遺存しない。

第73図 SE335 (1/40) と出土遺物 (1/6)





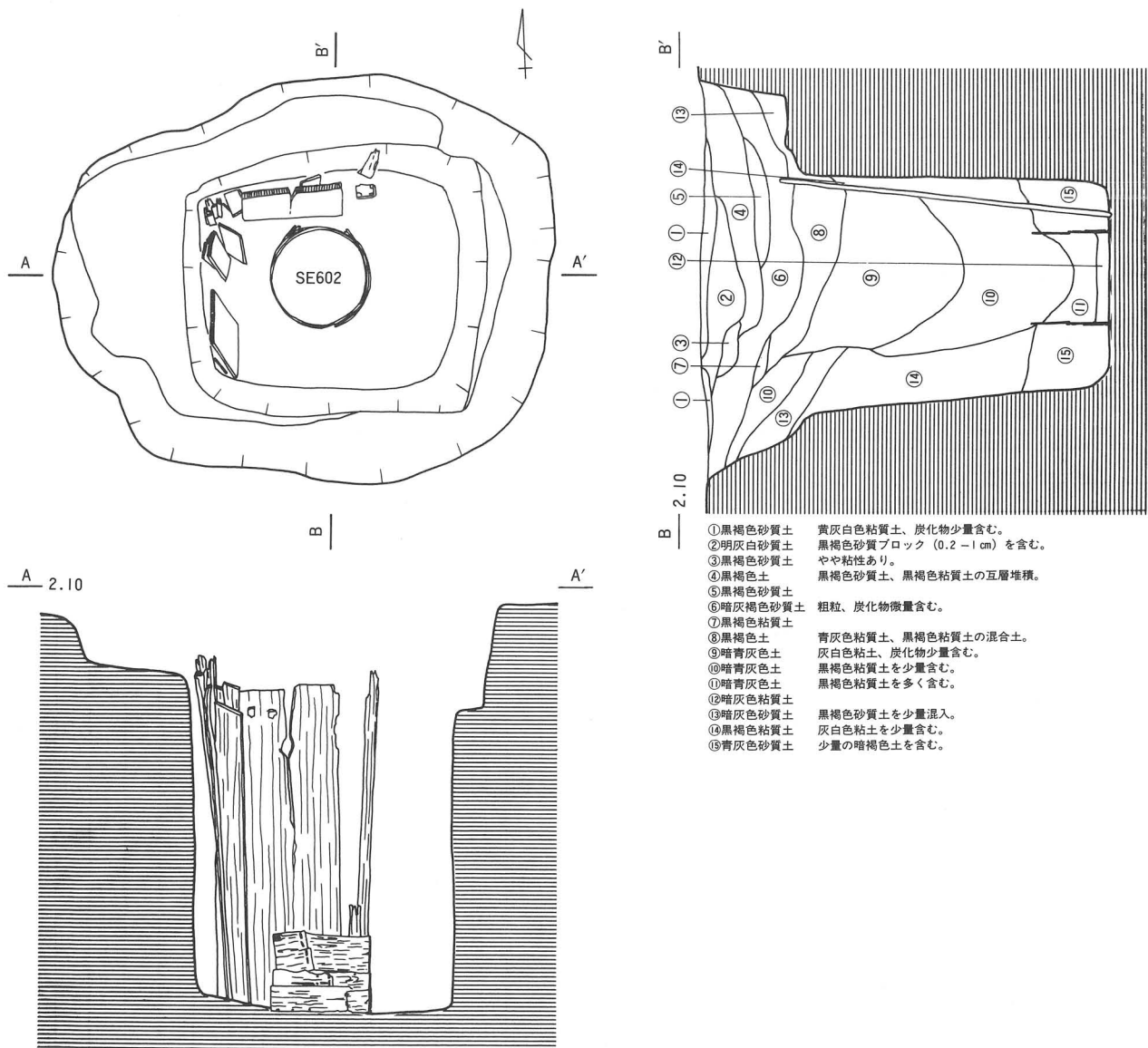
- ① 黒褐色土 灰白色粘質土、灰白色砂質土、黒色土、  
黄褐色粘質土を斑状に含む。
- ② 暗灰色粘質土 黄褐色粘質土、灰褐色砂質土を含む。
- ③ 暗灰色粘質土 黒味強い。暗灰色土、灰褐色砂質土を含む。



第74図 SE600 (1/40) と出土遺物 (1146は1/8, 他は1/4)

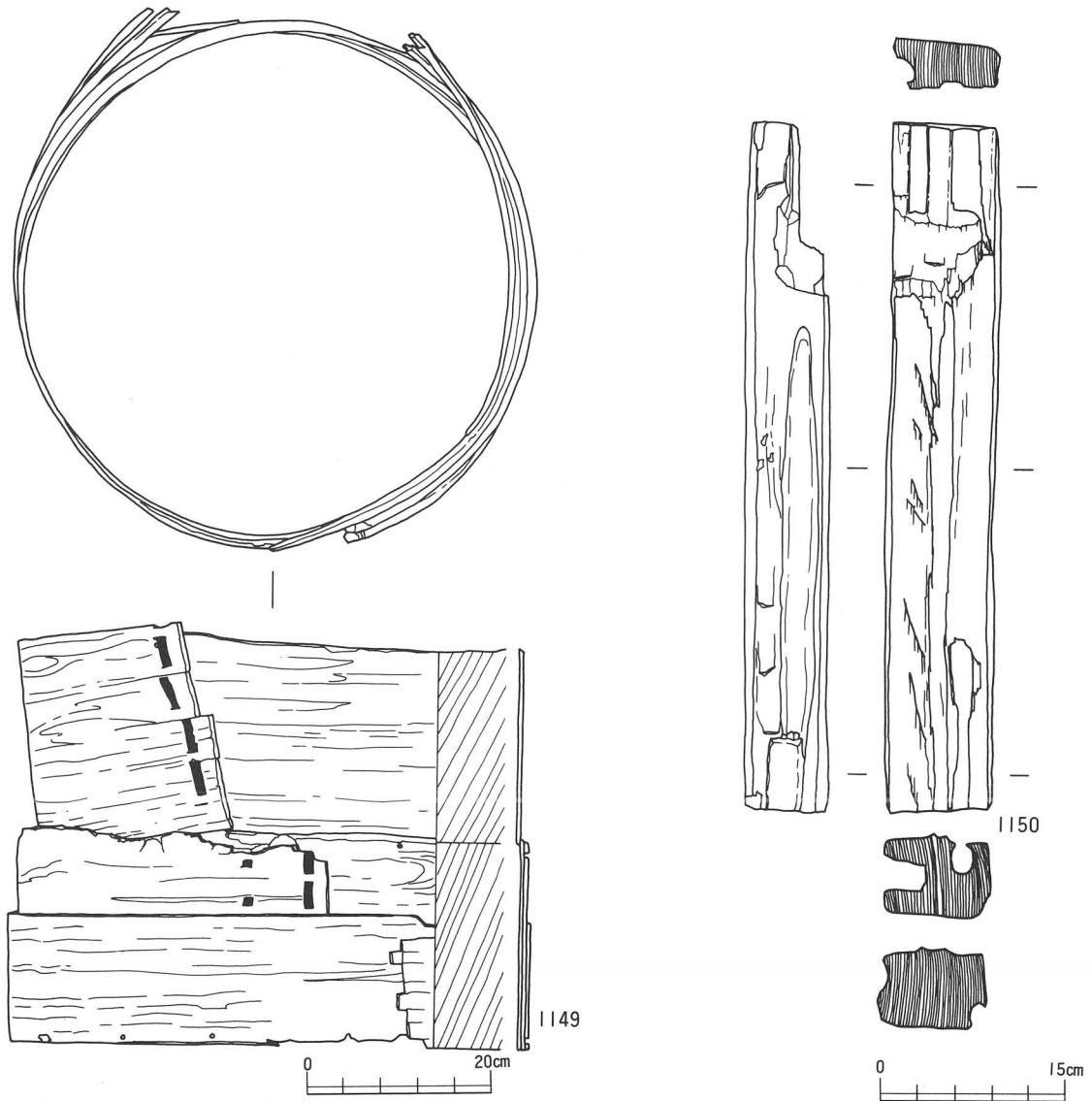
SE600 (第74図、図版第14の3～5) X13Y90区に位置する。形態は開口部より斜状に掘り込み、更に曲物を設置する為の掘り方を持つ2段掘りの複式曲物を設置した井戸である。規模及び平面形は、開口部で東西長1.5m・南北長1.3mの不整形、掘り方上面は東西長0.8m・南北長0.85mの不整形、基底部分は曲物径に一致する0.5mの円形である。基底レベルは、標高0.9mを測り、調査時に於いては滞水状態にあった。遺物は、3層の裏込め土より珠洲1点、1層と2層の交界より中世土師器1点が出土した。開鑿・使用時期は出土土器より15世紀後半代の年代が想定される。

遺物 (第74図、図版第38の5・第49の5) 1146は2段組のスギ製曲物である。下段は径51cm・高さ27cm・厚さ2mmを測り、内面に縦位のケビキが1～2cm間隔で施される。上段は径53cm・高さ15cm・厚さ2～3mmを測り、下段径を上段径が上回る。曲物の結合方法は上段2列3段、下段は1列3段の樺綴じである。上段の下部には木釘留の結束孔(φ3～5mm)が巡る。1147は珠洲V期にあたる15世紀代の壺である。1148は15世紀後半代の非ロクロ系中世土師器の皿で、口径11.0cm・器高2.6cmを測る。口縁部外周に丁寧なヨコナデ調整、内面見込みにヨコナデ調整が入る。器厚は底部より口辺に向けて肥厚し口縁付近で減じる。色調は白味を帯びる灰褐色。



- ① 黒褐色砂質土 黄灰白色粘質土、炭化物少量含む。
- ② 明灰白砂質土 黒褐色砂質ブロック (0.2～1cm) を含む。
- ③ 黒褐色砂質土 やや粘性あり。
- ④ 黒褐色土 黒褐色砂質土、黒褐色粘質土の互層堆積。
- ⑤ 黒褐色砂質土
- ⑥ 暗灰褐色砂質土 粗粒、炭化物微量含む。
- ⑦ 黒褐色粘質土
- ⑧ 黒褐色土 青灰色粘質土、黒褐色粘質土の混合土。
- ⑨ 暗青灰色土 灰白色粘土、炭化物少量含む。
- ⑩ 暗青灰色土 黒褐色粘質土を少量含む。
- ⑪ 暗青灰色土 黒褐色粘質土を多く含む。
- ⑫ 暗灰色粘質土
- ⑬ 暗灰色砂質土 黒褐色砂質土を少量混入。
- ⑭ 黒褐色粘質土 灰白色粘土を少量含む。
- ⑮ 青灰色砂質土 少量の暗褐色土を含む。

第75図 SE602 (1/40)

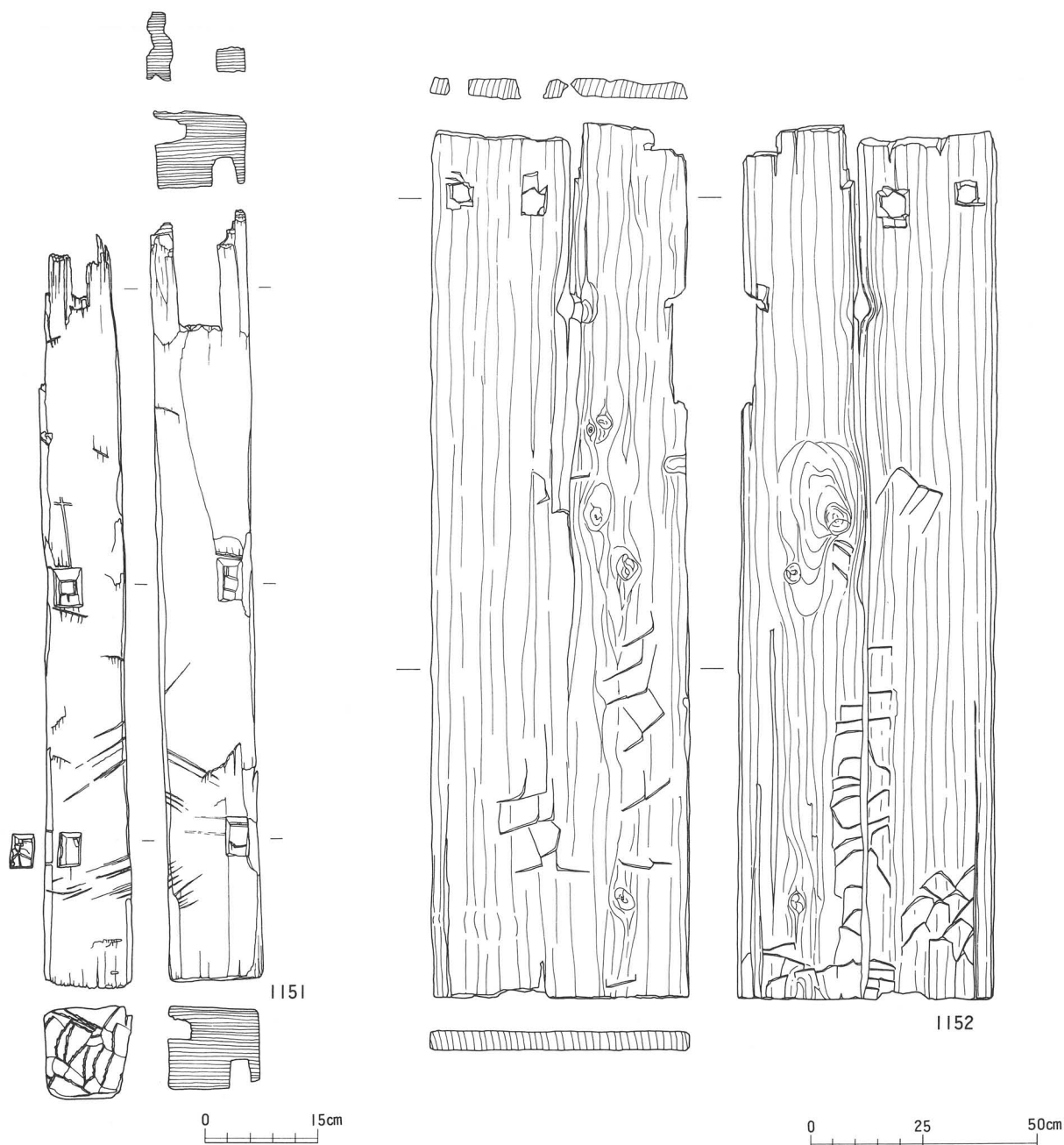


第76図 SE602の出土遺物 (1149は1/8, 1150は1/6)

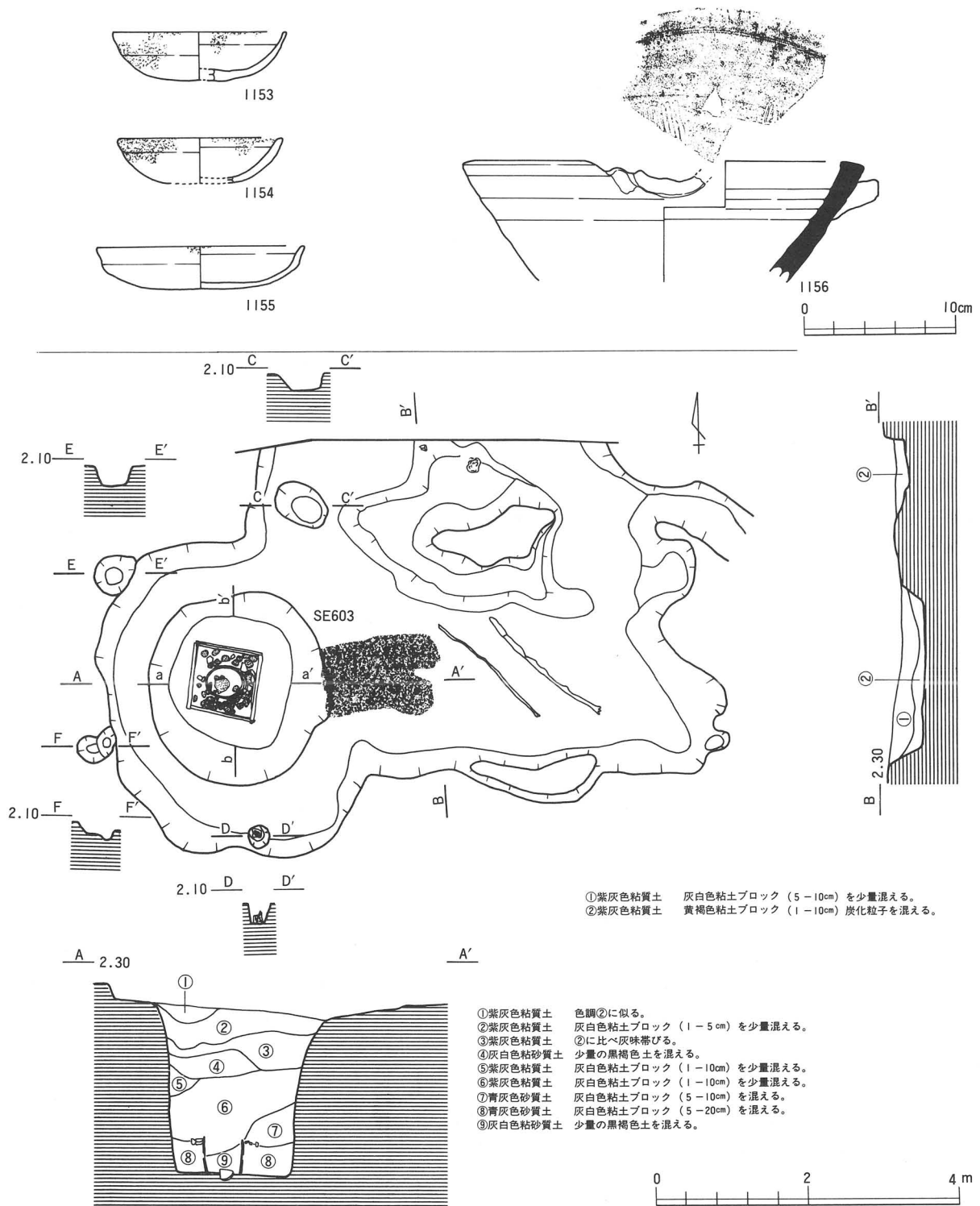
SE602 (第75図、図版第14の6・7) X14Y89区に位置し、開口部、基底部の東西辺はY軸にはほぼ一致する。平面は開口部・基底部とも方形基調で、2段に掘り込まれる。規模は開口部で東西長2.85m・南北長2.35m、基底部で東西長1.25m・南北長1.45mを測る。基底レベルは標高-0.35mを測り、発掘調査時の湧水点より約0.3m程掘り下げられる。地下施設には北辺・東辺に縦板が方形に遺存し、更に板の合わせ目に薄い目地で裏打ちをする。中央部には3段に組まれた水溜めの複式曲物が設置されている。井戸型式は横棧が検出されないものの、隅柱が北辺隅に遺存する事より、縦板組隅柱横棧どめ井戸と思われる。また曲物内の基底に堆積する青灰色粘質土(12層)は、濾過機能を有したのではなかろうか。遺物は珠洲1点、中世土師器3点が9層より出土した。開鑿・使用時期については定かではないが、前述の土器に比定されるならば15世紀代の鑿井が予想される。なお、地上施設(井桁)は検出されない。

遺物(第76~78図、図版第49の3・第50) 1149は2段組の曲物にタガが2重に取り巻く。いずれも材質はスギである。下段は径55cm・高さ23cm・厚さ2mm、上段は径54.5cm・高さ21cm・厚さ2~3mmを測り、上段が入れ子で入る。上・下段とも内面に1~2cmの斜状のケビキが施こされる。結合法は樺綴じで、上段は1列4段綴じ、下段は2列4段綴じである。タガはいずれも木釘留の結束孔( $\phi 2 \sim 3$ mm)が巡る。1150はスギを用いた建築部材で詳細は不明である。残存長は55cm・長辺9cm×短辺6cmの角材で、1面に2×3cmの柄穴が穿たれ、側面に縦に走るU字状の腐食痕を留める。木面にはケズリ痕が連続して残る。1151はスギを柁目取りした隅柱である。残存長は1.0m・長辺12cm×

短辺11cmの角材で2面に3×3cmの柄穴が穿たれる。柄穴は下より17cmと58cmの位置にあり、87cmの位置には隅柱を貫通させ横棧を支持したと思われる柄穴が認められる。1152は長さ193cm・幅57cm・厚さ4cmを測るスギを用いた縦板である。上部には5×4cm程の穴が2箇所穿たれており、筏穴ではなかろうか。木面の中位より下位にかけては上から下へケズリ痕(5~8cm)が連続する。1153~1155は、非クロ系の中世土師器皿である。いずれも口縁部内外面を中心として油痕が認められ、燈明皿として使用されている。1153は口径11cm・器高3cmを測り、口縁外周に丁寧なヨコナデ調整が入る。色調は灰褐色を呈する。1154は口径8cm・器高3cmを測り、口縁外周に丁寧なヨコナデ調整が入り、若干の陵が認められる。器厚は底部より口縁に向けて肥厚し、口唇で減じる。色調は灰白色を呈する。1155は口径13.5cm・器高2.8cmを測る。また、外面には口縁より底部にかけて斜状の粘土接合痕が観察される。帰属年代はいずれも15世紀代と思われる。1156は珠洲V期に比定される15世紀代の片口摺鉢である。体部はほぼ直線的に開き、端面で面を取る。色調は内外面とも鼠黒色を呈する。



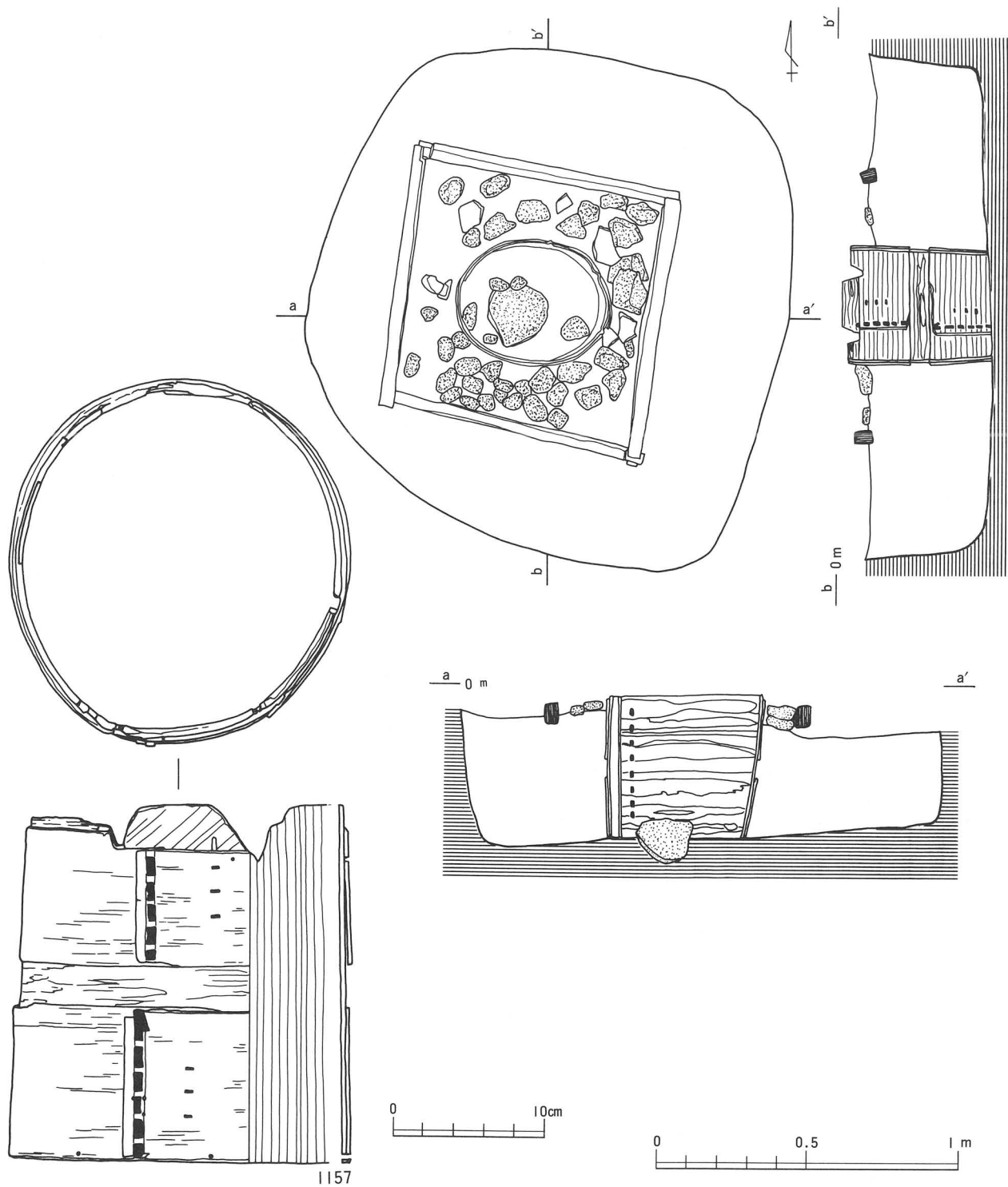
第77図 SE602の出土遺物 (1151は1/9, 1152は1/15)



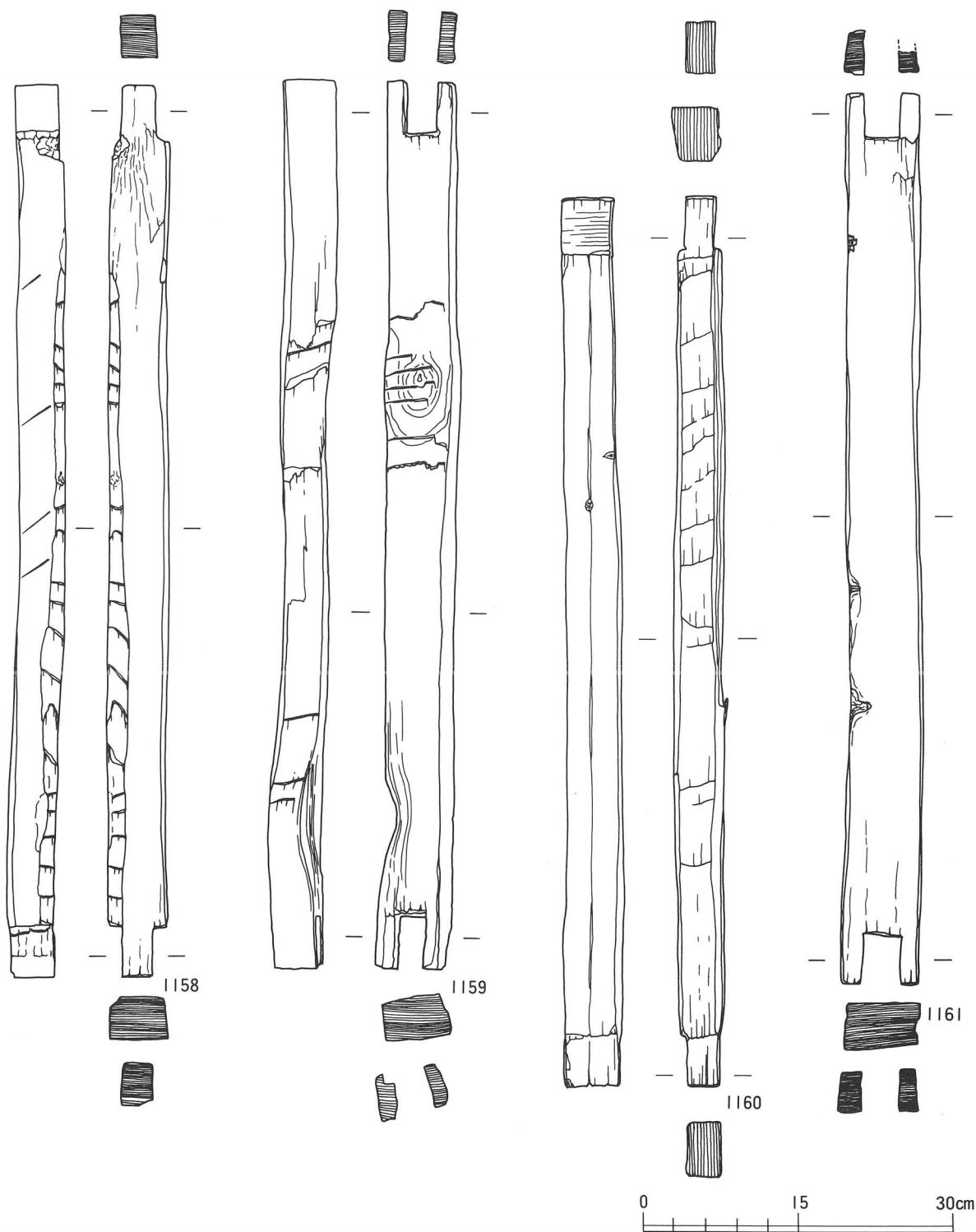
第78図 SE602の出土遺物 (1/4) と SE603 (1/80)

SE603 (第78・79図、図版第14の8) 当遺構はX17Y89区に位置し、東西長約5m・南北現長4.4mを測る方形基調の堅穴状遺構内に鑿井される。堅穴内は平坦で、床面には2本の炭化した樹枝や井戸開口部へと続く炭化層(2~5mm)が遺存する。井戸本体には覆屋の柱穴と思われる4本の柱穴が四周し、P1には柱根が遺存する。井戸掘方の規模は、開口部東西長2.2m・南北長2.5m、基底部は、東西長1.5m・南北長1.65mを測る。南北軸は17°東偏し、平面は方形基調である。掘り方の基底レベルは標高-0.5mで、調査時に於ける湧水点より0.5m程深く掘り込まれる。地下施設(井戸側)には棧が組まれた状態で出土し、棧の中央部には底を抜いた桶が設置され、棧と桶の間には拳等大の礫が疎雑に敷き詰められる。また、縦板や隅柱は出土せず断面観察に於いても、遺存及び抜き取りを示す積極的状况は看取さ

れなかった。しかしながら、井戸掘方が方形基調で、開口部と基底部の規模に差が少ない事、井壁が危弱である事、覆土上位よりバラバラ状態の棧が更に一組出土している事などにより、井戸型式は縦板組横棧どめ井戸に水溜桶を設置した物であったと思われる。遺物の出土状況は、箸状木製品・木製へら・建築用材が2・3層を中心に出土し、珠洲が横棧内に敷き詰められた礫に混じり出土している。開鑿・使用時期は前述の珠洲より14世紀後半以降が想定される。



第79図 SE603 (1/20) と出土遺物 (1/8)

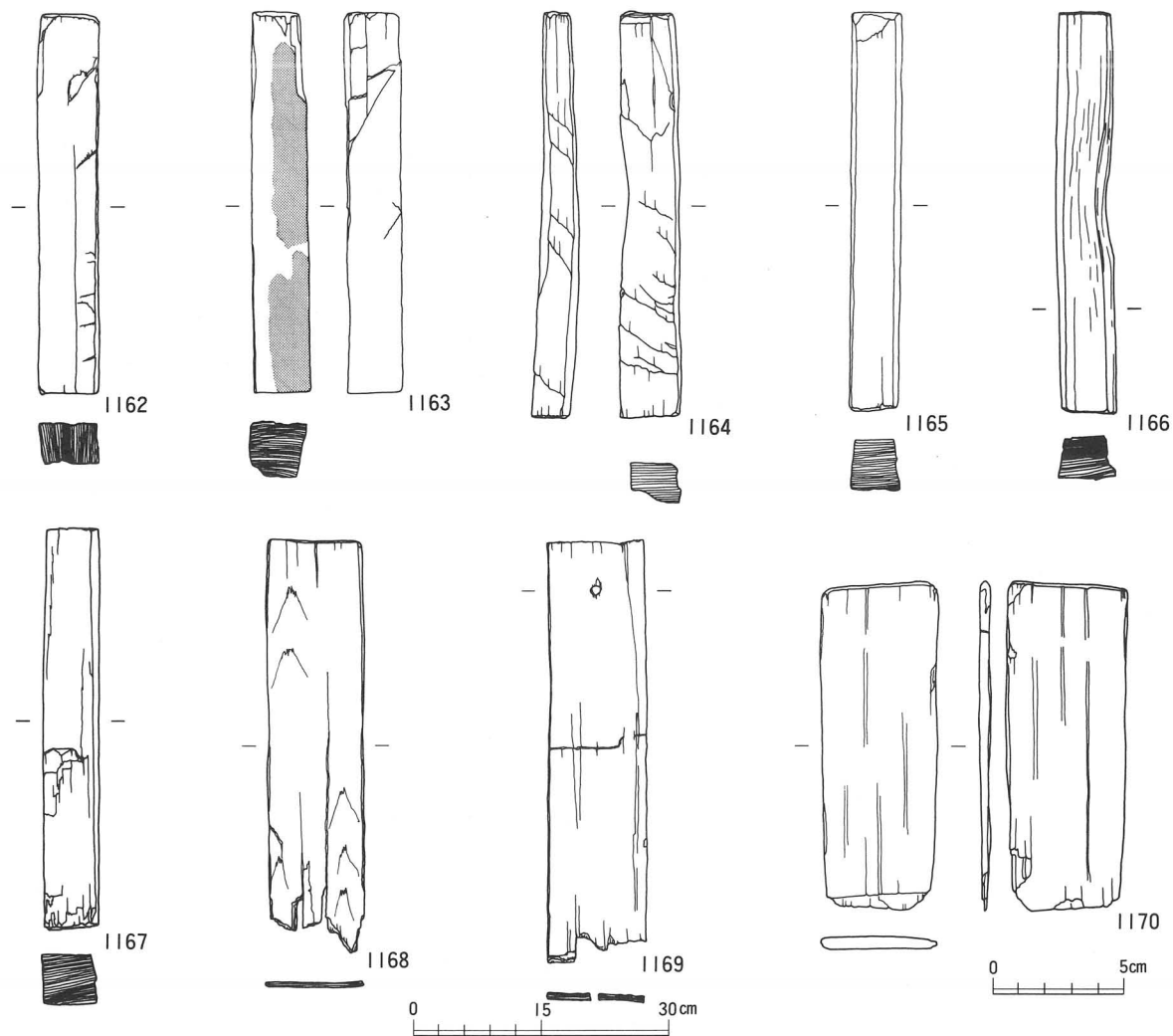


第80図 SE603の出土遺物 (1/6)

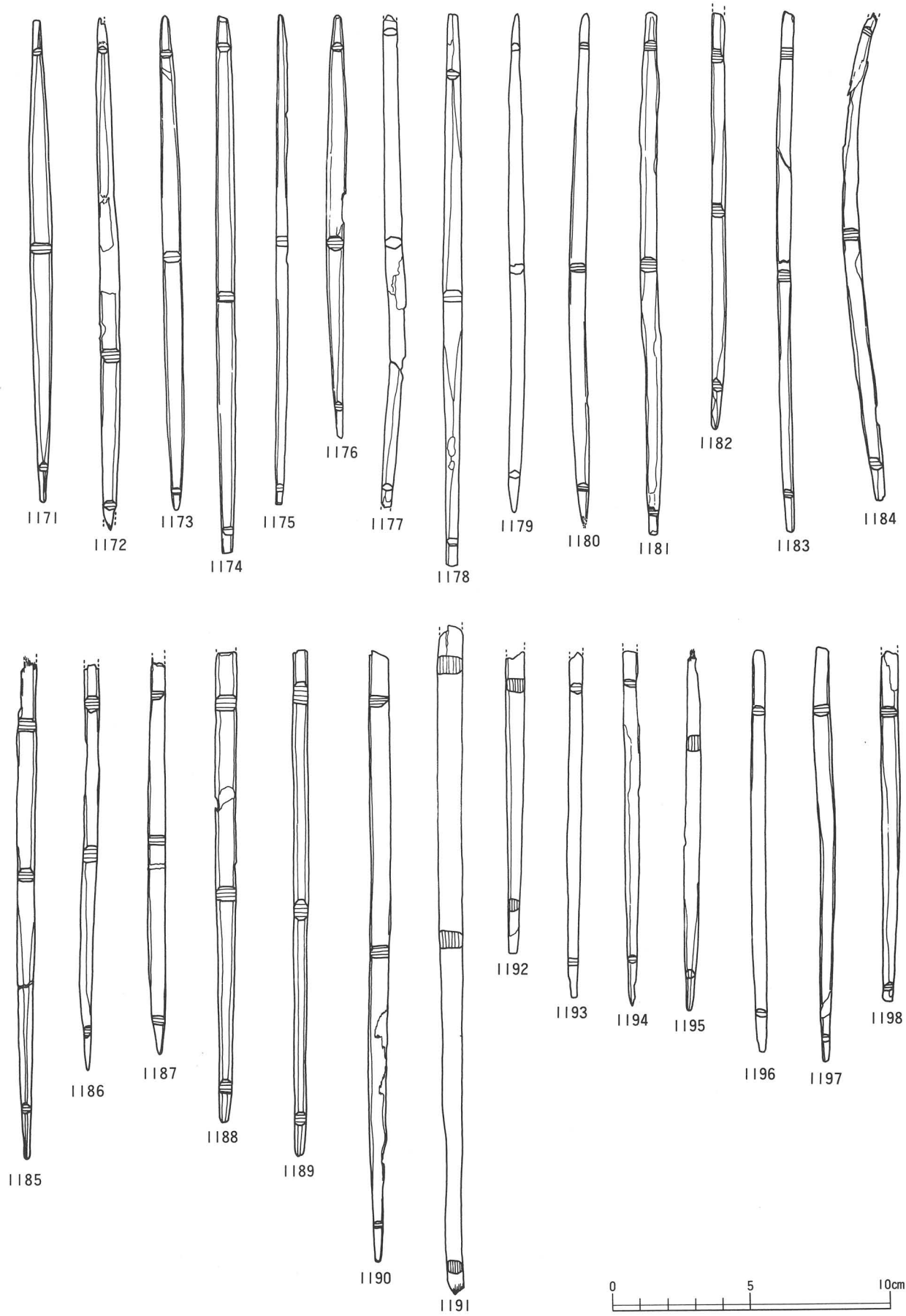
遺物 (第79～84図、図版第39の1・第51～53の1) 1157はスギ製の水溜桶である。桶には上・下段に一重のタガが取り巻き規模は径42.5cm・高さ47cm・厚さ4～5mmを測る。内面には縦位もしくは斜状のケビキが1～2cmの間隔で施される。結合法は1列8段の樺綴じである。上段のタガは径43.0cm・高さ18cm・厚さ3mmを測る。結合法は2列5段及び3段の樺綴じで、上位には木釘留の結束孔が巡る。下段のタガは径43.0cm・高さ20.5cm・厚さ3mmを測る。結合法は2列6段及び3段の樺綴じで、下位には木釘留の結束孔が巡る。1158～1161はスギを柾目取りした棧である。仕口は目違い柄組みの横棧で、柄形態は目地柄 (道切り柄) である。規模はいずれも長さ87.0～87.6cm・幅5～7cm・



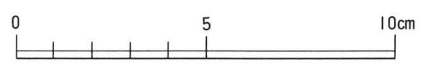
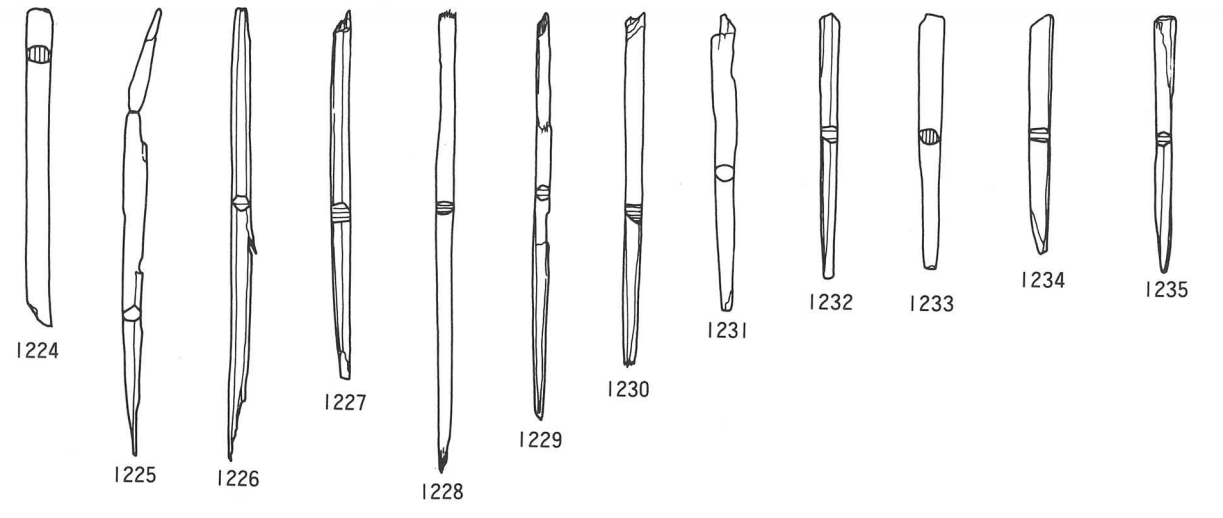
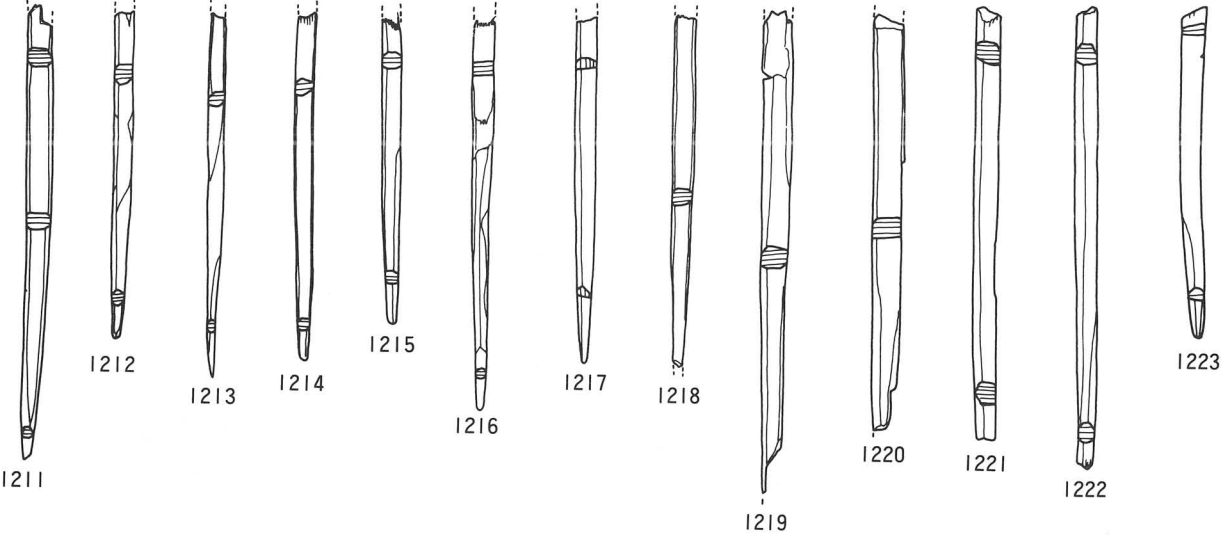
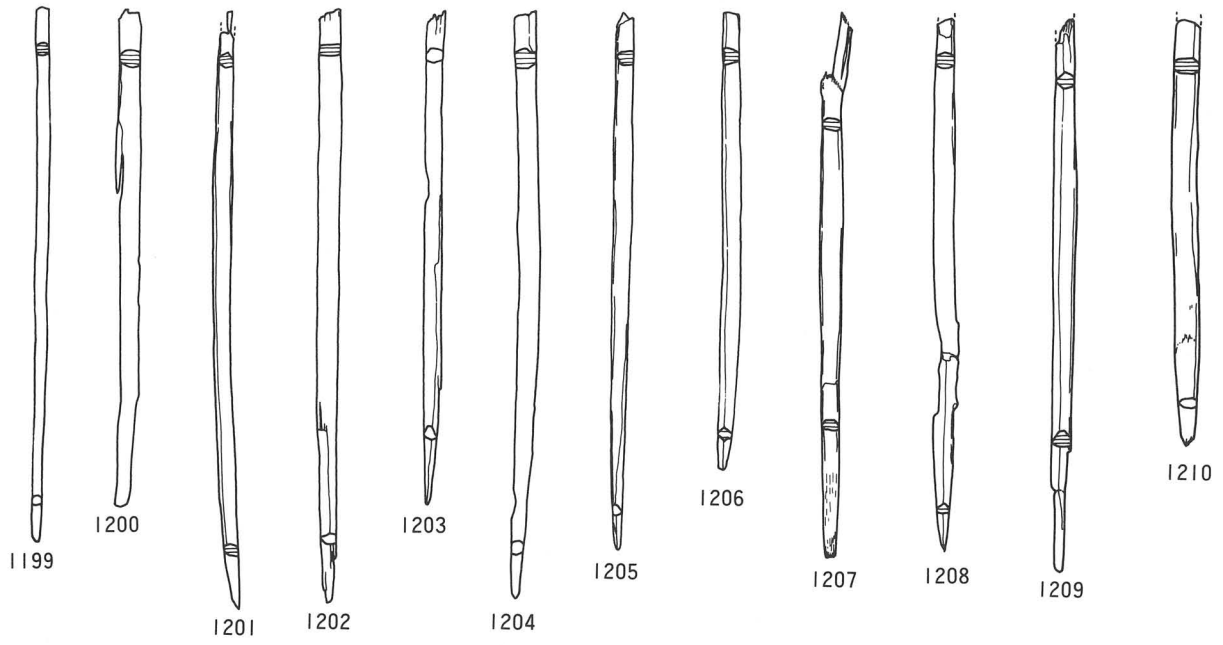
厚さ4.3～5 cmの範疇にある。木面には連続するケズリ痕を残す物もある。1162～1167はスギ製の建築部材であるが、詳細は不明である。出土状況は不規則で、6層より出土している。規模は、1162が長さ44cm・幅6.5cm・厚さ4.5～6 cm、1163～1167は長さ46～47cm・幅4.5～6 cmを測り規格性を有する。1168・1169は縦板と縦板のすき間を裏打ちした目地板として使用されていた物ではなかろうか。1169の上部にはφ1 cmの円孔が中心に穿たれており、建築部材を井戸側の一部として転用したと思われる。規模は残存長45cm・幅11cm・厚さ8 mmを測る。材質はスギである。1170はヘラ状の木製品である。規模は長さ12.5cm・幅4.5cm・厚さ4 mmを測り、先端部のみ1 mmとなる。また、木面には墨痕等も視認されず呪札・聞香札等の可能性は少ない。1171～1235は箸状木製品である。材質はスギが主流で、アスナロ、クロベが少量加わる。規格性については欠損している物が多い為定かではないが、長さ6.5～24cm・最大幅4～9 mmを測り、ばらつきが多い。表面は6面をカットして工作している物が多い。1236～1242は珠洲で、帰属年代は14世紀代の珠洲IV期に比定される。1236・1237は同一個体の紐轆轆成形による、壺R種である。底径は9.5cmを測り、色調は鼠黒色を呈する。1238は甕で、口縁端部が厚く丸みをもって、[く]の字状に折り曲がる。外面の平行叩き条数は3 cm当たり9条を数え、色調は青灰色を呈する。1239・1240は甕の胴部である。外面の叩き目は右下がり、叩き条数は3 cm当たり9条を数える。色調は青灰色を呈する。1241・1242は摺鉢である。1241は片口鉢で、口縁端部を内方向にわずかに引き出す。色調は暗灰色を呈し、卸し目の原体内の条数は9条である。1242は口縁端部が水平に面を取り、色調は鼠黒色を呈する。



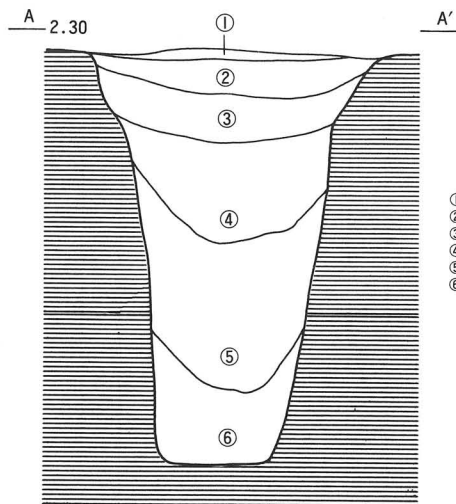
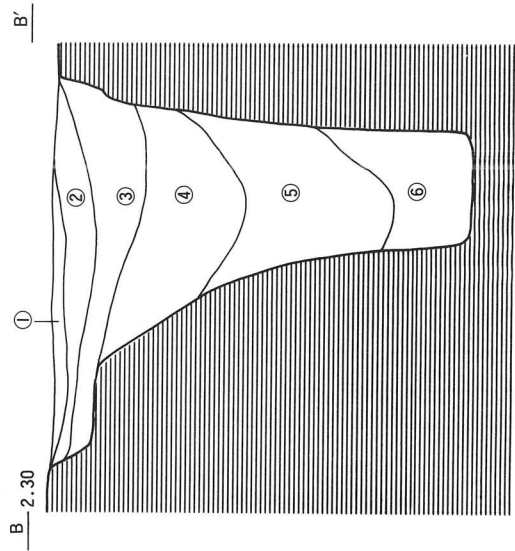
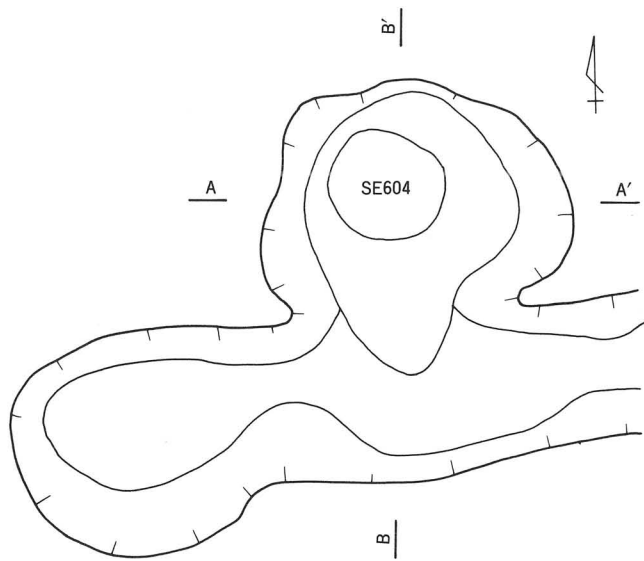
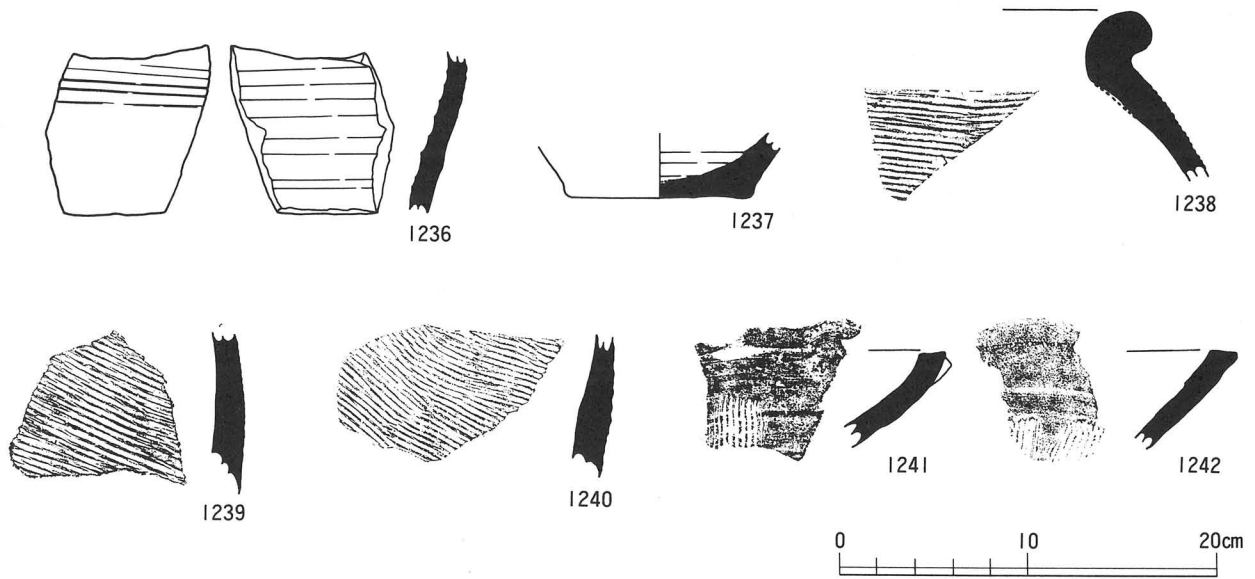
第81図 SE603の出土遺物 (1170は1/2, 他は1/7)



第82图 SE603出土遺物 (1/2)



第83図 SE603の出土遺物 (1/2)

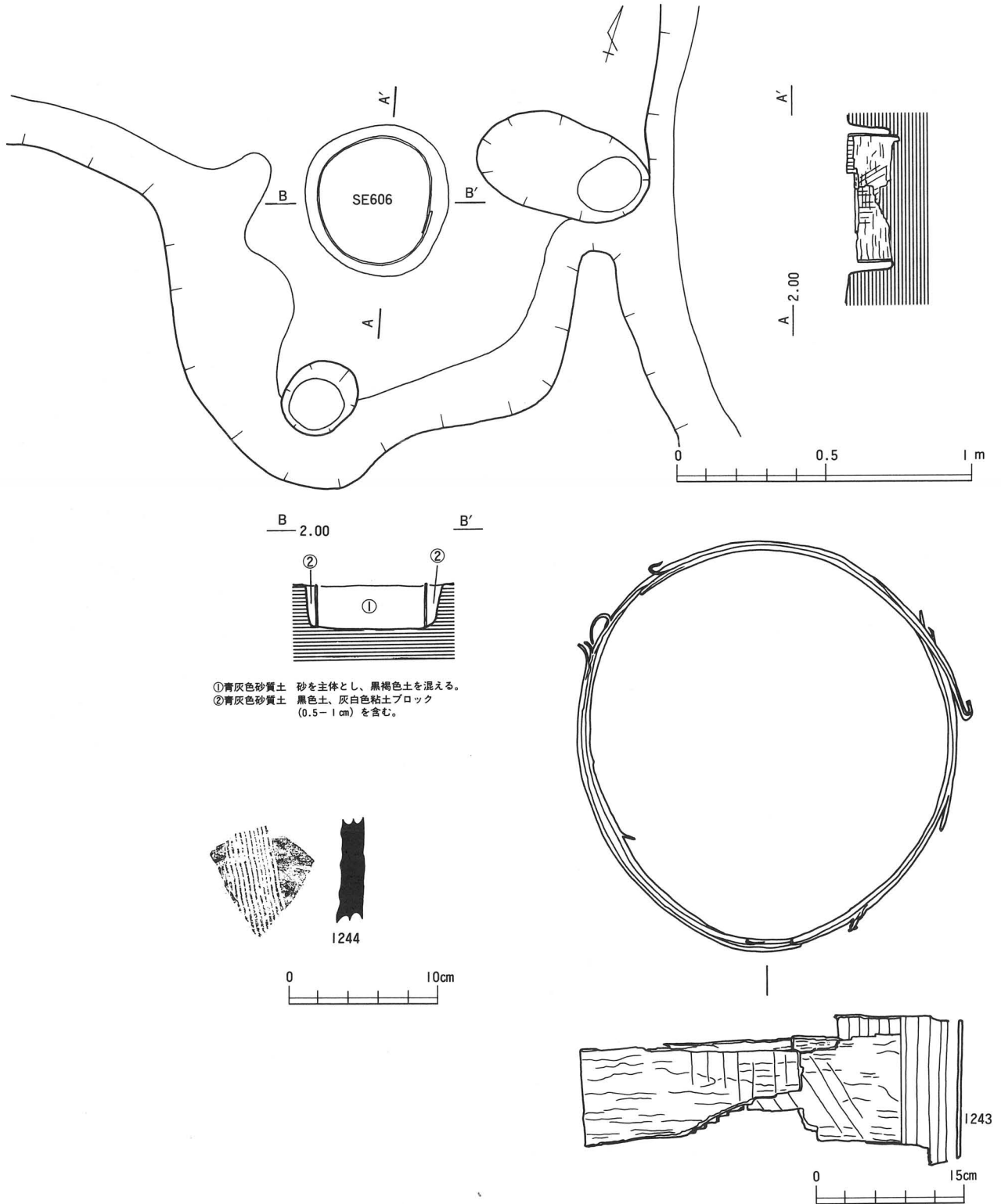


- ①黒褐色土 少量の砂質土を含む。
- ②黒褐色土 ①より色調やや明るい。
- ③灰黒褐色土 少量の砂質土、灰白色粘質土を含む。
- ④黒褐色土 青灰色砂質土、灰白色粘質土がブロック（1-3cm）で入る。
- ⑤黒褐色土 ④に似る。色調④より明るい。
- ⑥黒褐色土 青灰色砂質土、多くの灰白色粘質土がブロック（1-5cm）で入る。



第84図 SE603の出土遺物 (1/4) と SE604 (1/40)

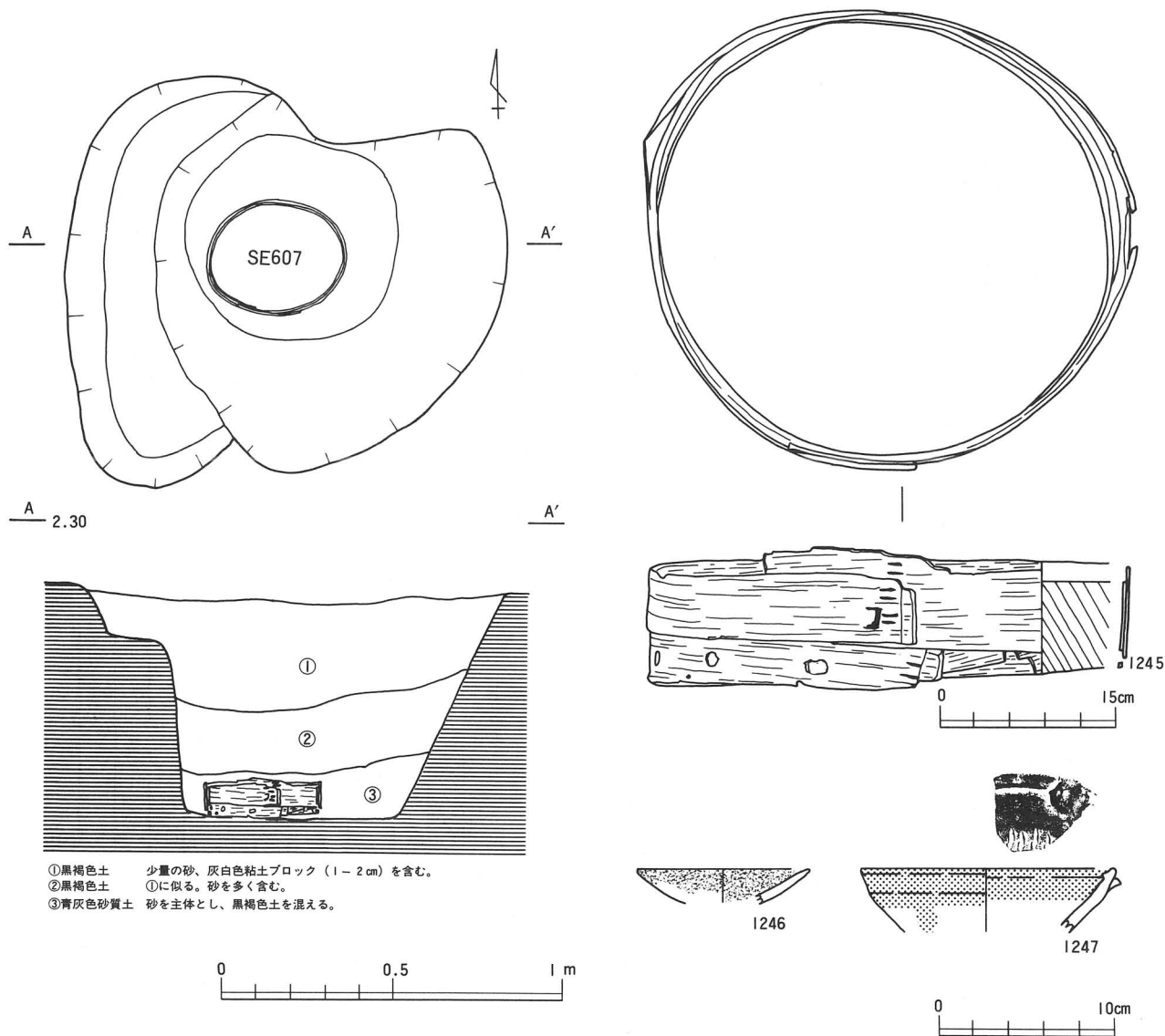
**SE604** (第84図、図版第14の9) X17Y94区に位置し、SD306と重複関係にある。土層観察によれば、SD306と共存もしくはそれ以前に鑿井されたと理解できる。規模及び平面形は、開口部で東西長1.5m・南北長1.4m、基底部で東西長0.6m・南北長0.6mを測り、ともに円形基調としている。基底レベルは標高0mを測り、調査時に於ける湧水点に達している。井戸型式は円筒形の素掘り井戸である。また、開鑿・使用時期は、当遺構より出土遺物がないものの、SD306との重複関係より15世紀前半以降が想定される。



第85図 SE606 (1/20) と出土遺物 (1244は1/4, 1243は1/6)

**SE606** (第85図) X11Y89区に位置し、SD306内に鑿井される。SD306との新旧関係は定かではない。規模及び平面形は上面が0.95m・基底部が0.8mを測り、設置された曲物より一回り大きな掘り方となる。基底レベルは標高1.35mを測り、調査時には曲物内底面に若干の滞水が認められた。土器は珠洲の摺鉢1点が出土した。

**遺物** (第85図、図版第39の2・第53の2) 1243は井壁保設(井戸側)を具備したスギ製の単式曲物である。規模は径41cm・器高15cm・厚さ2mmを測り内面及び表面の一部には、幅1~2cmのケビキが縦位もしくは斜状に施される。1244は珠洲の摺鉢である。卸し目の原体幅は3cmで、1帯あたりの条数は10条である。色調は暗灰色を呈する。

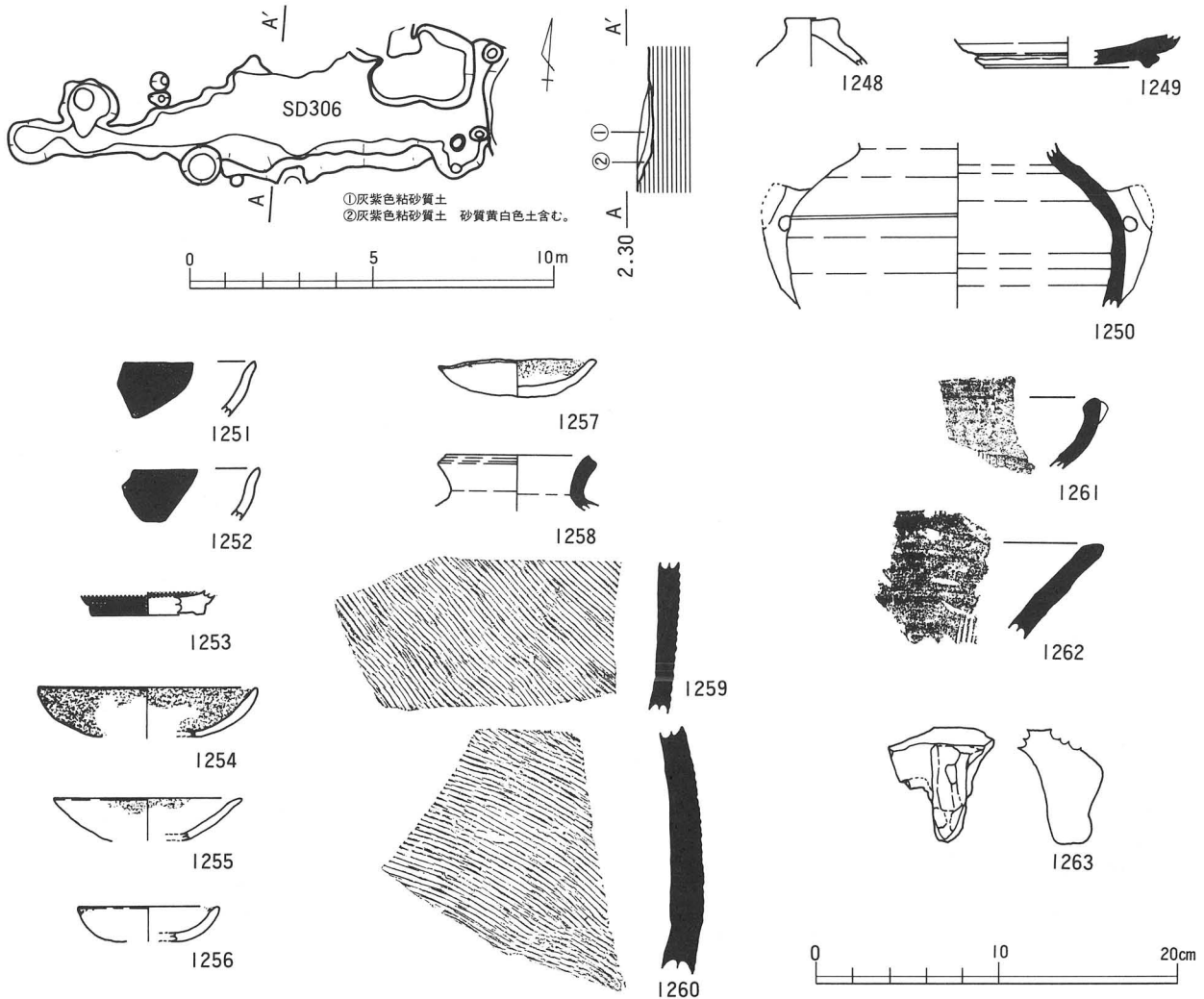


**第86図 SE607 (1/20) と出土遺物 (1245は1/6, 他は1/4)**

**SE607** (第86図、図版第14の10) X17Y98区に位置する。規模及び平面形は開口部で、東西長1.27m・南北長1.1mの不定形、基底部は東西長0.6m・南北長0.6mの円形を呈し、中央部南西よりに曲物が設置される。基底レベルは標高0.55mを測り、調査時には2層中位より滞水が認められた。

**遺物** (第86図、図版第39の3・第53の2) 1245は2段組のスギ製曲物である。下段は径40.3cm・高さ7.2cm・厚さ1mmを測り、内面には幅1~1.5cmのケビキが施される。結合法は1列2段の樺縦じで、下位には径1.5cm程の結束孔が巡る。上段は径40.6cm・高さ8cm・厚さ1mmを測り、上段径が下段径を上回る。結合法は2列2段及び1段の樺縦じである。1246は中世土師器皿である。口径は10cmを測り、色調は灰白色を呈する。内・外面には煤が付着しており、

燈明具として使用されている。1247は14世紀後半～15世紀前半代の瀬戸の卸し皿である。口縁部内外面に薄く緑味青灰色の灰釉がかかる。口縁端部は内側に挽きだされ縁帯をなす。内底面にはヘラの片彫による卸し目が施される。



第87図 SD306 (1/200) と出土遺物 (1/4)

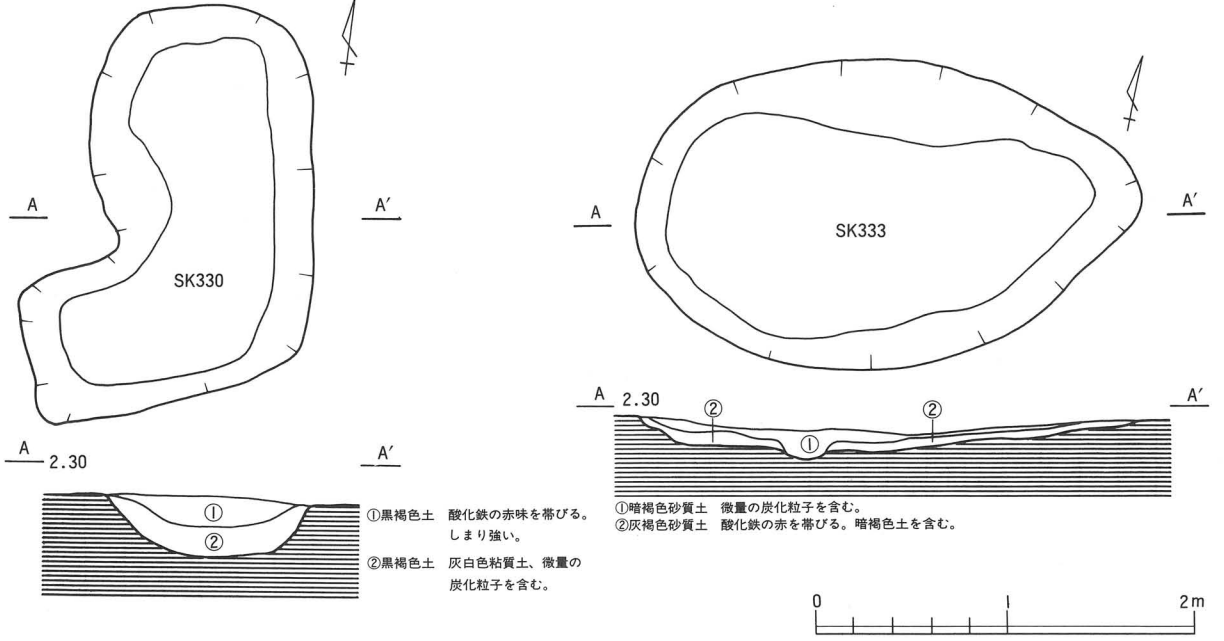
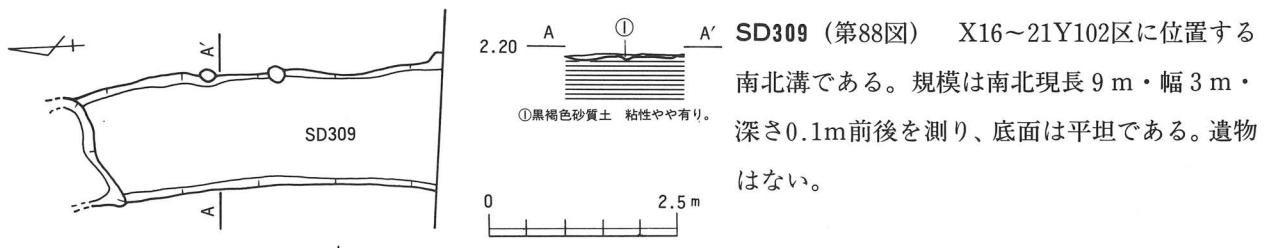
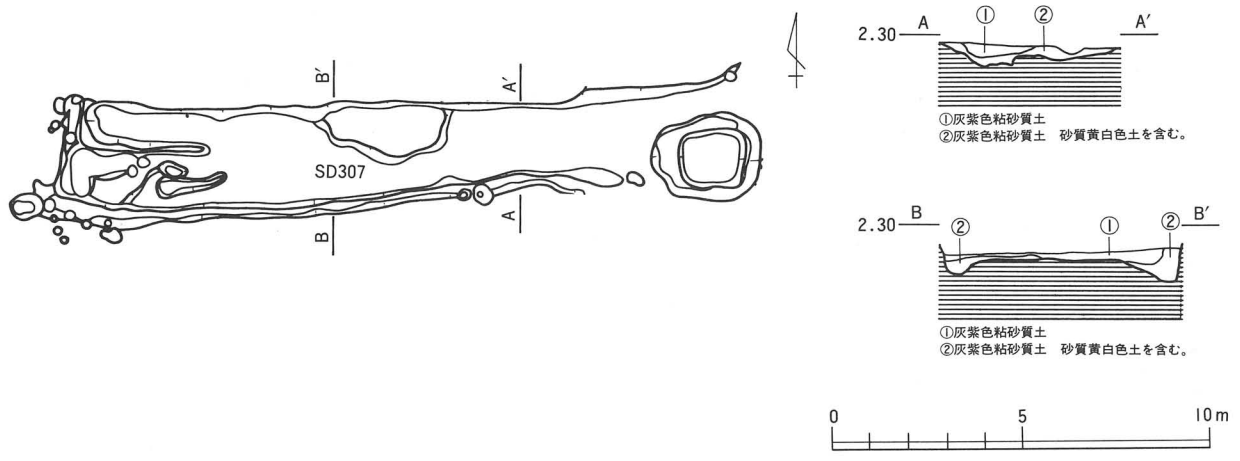
**SD306** (第86図) X18Y90区に位置し、SE604・606と重複関係にある。規模は東西長13m・最大南北長3m・深さ約0.3mを測り、平面は不定形を呈する。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物は2層を中心として包蔵されていた。

**遺物** (第86図、図版第39の4) 1248は弥生時代後期後半の蓋である。つまみはやや外反ぎみに立ち上がり、上部がややくぼむ。色調は浅黄色を呈し、胎土は精良。1249は須恵器の坏である。高台外端部が挽き出され縁帯をなしている。底径は10.5cmを測る。内底部には若干の墨痕が認められ、硯として転用されたと思われる。帰属年代は8世紀後半～9世紀初頭と思われる。1250は単孔の双耳壺である。頸部には1条の沈線が巡り、耳はシャープに面取りされる。頸部にはオリーブ色の自然釉がかかる。帰属年代は9世紀中葉～後半であろうか。1251～1253は、16世紀前半代の瀬戸美濃系の天目碗である。1251・1252は内湾する体部より口縁に至りやや外傾する。釉調は鉄釉で黒褐色を呈する。胎土は白色でやや粗い。1253は高台で断面は逆梯形。釉は外底面、畳付けまで黒褐色の鉄釉がかけられる。1254～1257は、15世紀後半～16世紀代の中世土師器である。いずれも煤・油煙の付着が見られ、燈明具として使用されている。1254は口径12cm・器高5.3cmを測り、器厚は底部(3mm)より口縁(6mm)にかけて肥厚する。口縁部は内外面にヨコナデ調整が入る。色調は灰褐色である。1255は口径10cm・器高2.5cm・厚さ5mm前後を測

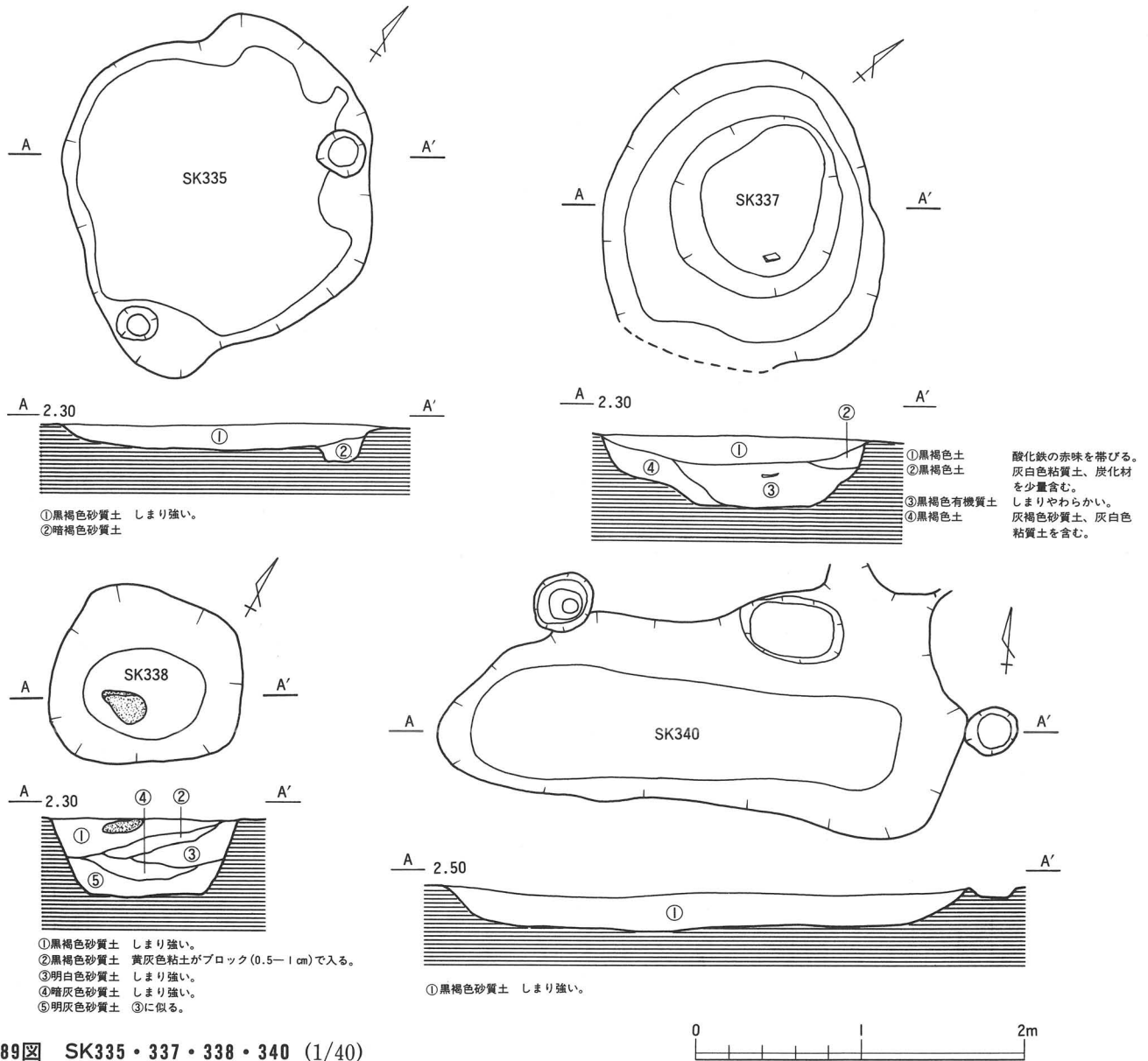


る。色調は灰白色で胎土はすいひした様な緻密なものである。1258~1262は珠洲である。1258は紐轆轆成形による壺R種の頸部である。口径は7.5cmを測り、口縁端部は外傾して面をなす。色調は鼠黒色を呈し、胎土は緻密。1259・1260は珠洲の甕である。いずれも3cm当たりの平行叩き条数は10条を数える。色調は1259が灰褐色、1260は青灰色を呈する。1261・1262は珠洲の摺鉢である。1261は内傾して面をなし、色調は外面が鼠黒色、内面が暗灰色を呈する。1262は体部が直線的に開き、口縁端面は水平に面を取り、色調は暗灰色を呈する。帰属年代は15世紀代の珠洲V期に比定される。1263は瓦質火鉢の獣足脚である。表面は丁寧な面取りをする。

**SD307** (第88図) X15Y90~98区に位置する東西溝である。主軸は96°東偏する。規模は長さ1.7m・幅2.2~3.2m・深さ1m前後を測り、南側には幅0.4m・深さ0.2m程の側溝が付設される。底面は概ね平坦である。また、東側の延びはSE602に至り途絶しており、SE602との関連性が伺われる。遺物はない。



第88図 SD307 (1/200)・309 (1/100), SK330・333 (1/40)



第89図 SK335・337・338・340 (1/40)

**SK330** (第88図、図版第15の7) X13Y86区に位置し、平面はL字状を呈する。土坑2基の連結形と思われるが新旧関係は不明である。埋土は2層に分かれる自然堆積土。遺物はない。

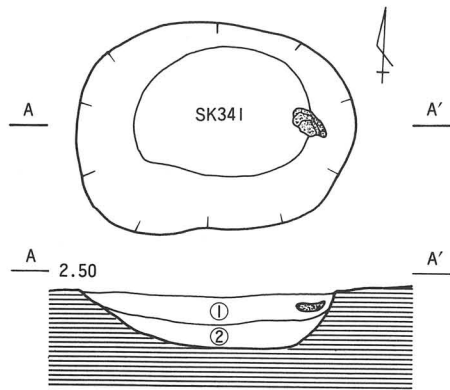
**SK333** (第88図) X11Y95区に位置する。平面は1.7×2.7mの無花果形を呈し、深さは最深で0.15mを測り底面は皿状である。遺物はない。

**SK335** (第89図) X12Y98区に位置し、SB10の柱穴列に囲繞される。平面は1.9×2mの不正円形を呈し、深さは0.15mを測り、底面は皿状である。埋土は2層に分かれる自然堆積である。遺物はない。

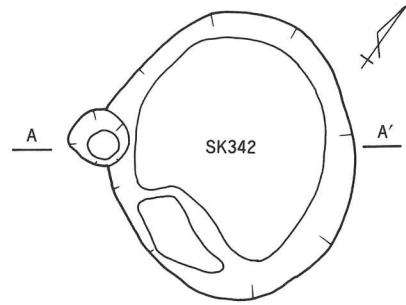
**SK337** (第89図) X16Y97区に位置し、壁の一部が攪乱により消滅する。平面は1.8×1.9mの不正楕円を呈し深さは0.40mを測り、底面は平坦で2段に掘り込まれる。埋土は黒褐色を基調とし4層に分かれる。遺物は珠洲1点、石5点が3層より出土する。

**SK338** (第89図) X16Y99区に位置する。平面は1.1×1.15mの不定形を呈し、深さは0.45mを測り、底面は平坦である。埋土は5層に分かれ、1層より扁平な石が1点出土する。

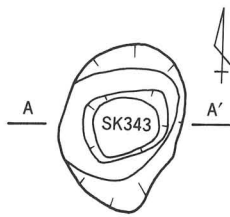
**SK340** (第89図) X11Y92区に位置し、SB08に壁の一部を切られる。平面は1.1×3.0mの不正方形を呈し、深さは0.2mを測り、底部は平坦である。埋土は黒褐色砂質土の単層である。遺物は珠洲1点が出土。



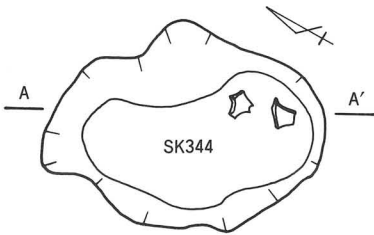
- ①黒褐色砂質土 やわらかい。
- ②黒褐色砂質土 酸化鉄の赤味を帯びる。やわらかい。



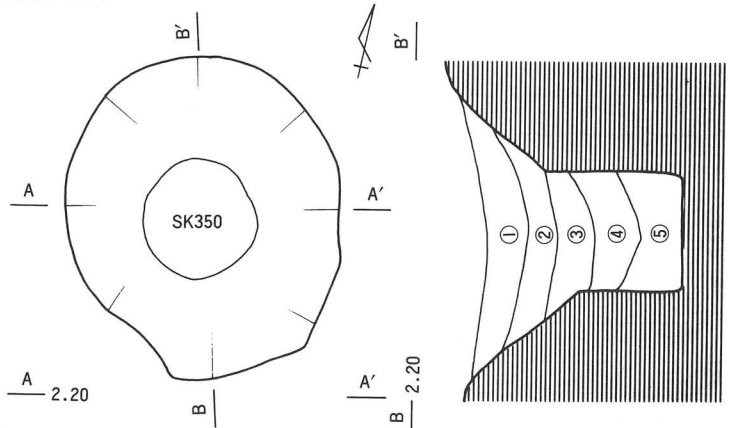
- ①暗褐色土 炭化粒子、灰白色砂質土を含む。しまりが強い。
- ②暗褐色土 炭化粒子を多量に含む。やわらかい。
- ③暗褐色土 酸化鉄の茶味を帯びる。灰白色砂質土を含む。やわらかい。
- ④暗褐色土 少量の炭化粒子、多くの灰褐色粘質土、灰白色粘質土を含む。
- ⑤暗褐色土 灰褐色砂質土を含む。やわらかい。
- ⑥暗灰色土 黄灰白色粘質土を多く含む。
- ⑦黄灰白色粘質土 暗褐色土を含む。
- ⑧暗灰色土 灰褐色砂質土、青灰色砂質土を含む。しまりが強い。



- ①暗褐色砂質土 微量の炭化粒子を含む。しまりが強い。
- ②暗褐色土 少量の砂、炭化粒子を含む。しまりが強い。
- ③黒褐色土 少量の砂、炭化粒子を含む。しまりが強い。



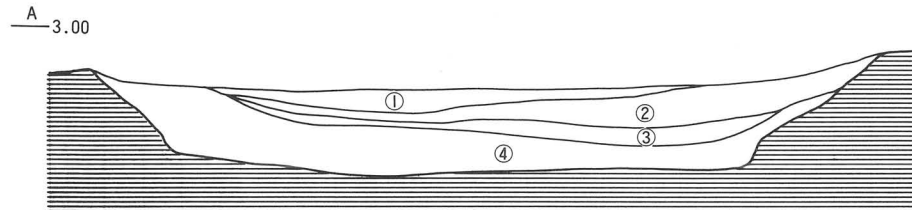
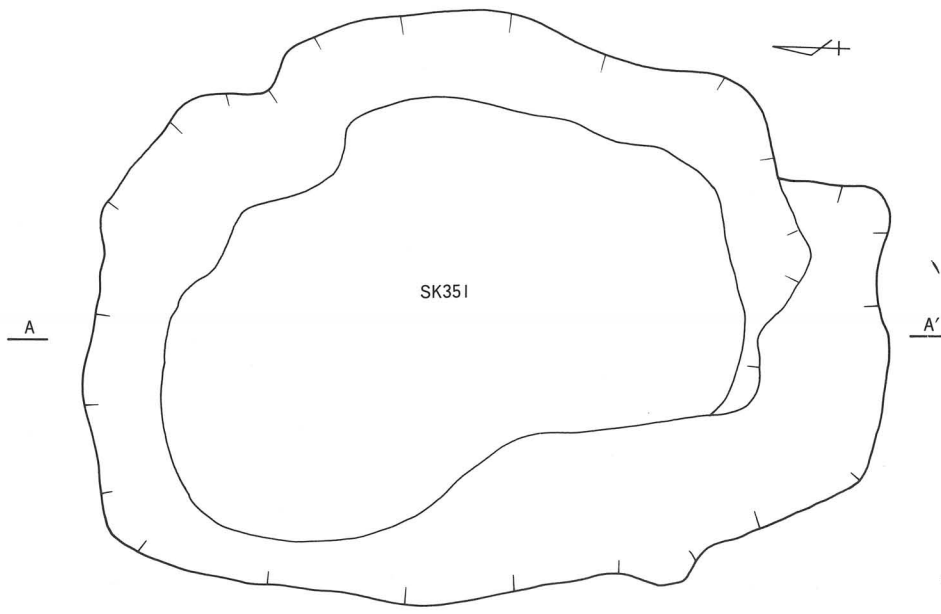
- ①黒褐色土 灰褐色砂質土、灰褐色粘質土を含む。しまりが強い。
- ②暗灰色土 灰褐色砂質土、灰褐色粘質土を含む。粘性やや有り。
- ③灰褐色砂質土 黒褐色土を含む。しまりが強い。



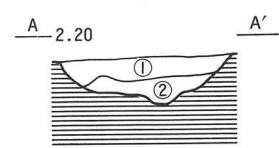
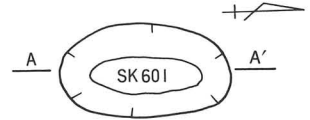
- ①黒褐色砂質土 やや茶味を帯びる。
- ②黒褐色粘質土 やや茶味を帯びる。
- ③灰色土 シルト層。やや黒褐色土が混じる。
- ④灰色土 シルト層と灰色砂の混じり。やや黒褐色土も混じる。しまりなし。
- ⑤灰色土 シルトブロック



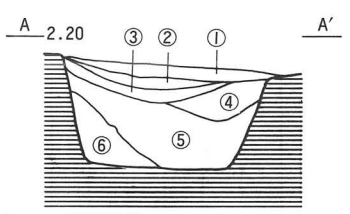
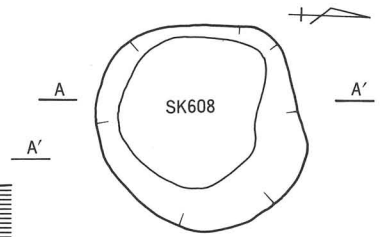
第90図 SK341~344・350 (1/40)



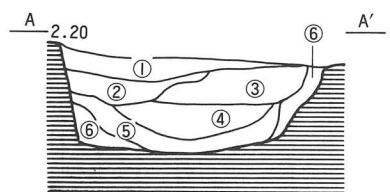
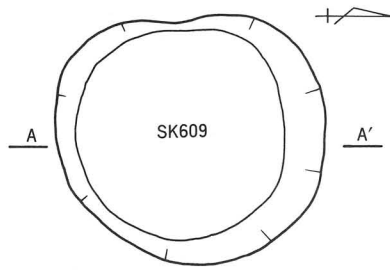
- ①黒褐色土 灰白色粘質土、灰褐色粘質土、黒色土、暗褐色土を含む。しまり強い。
- ②暗灰色土 灰白色砂質土、灰白色粘質土を含む。しまりやわらかい。
- ③暗灰色有機質土 灰白色砂質土を少量含む。
- ④暗灰色土 酸化鉄を赤味を帯びる。灰色砂質土を少量含む。



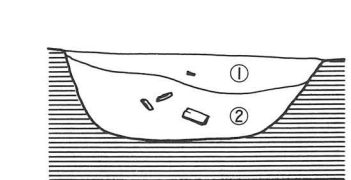
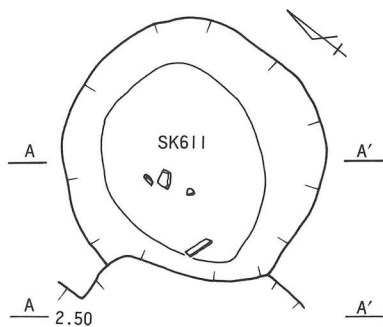
- ①暗灰色土 黒味を帯びる。灰白色粘質土がブロック(1-2cm)で入る。
- ②暗灰色土 灰白色粘質土、灰白色砂質土がブロック(1-2cm)で入る。



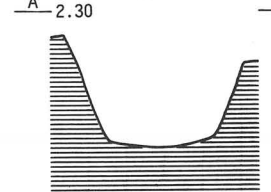
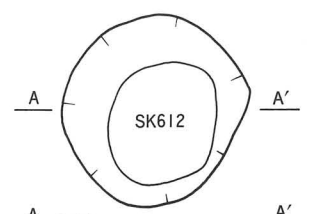
- ①暗灰色土 黒味を帯びる。
- ②暗灰色土 しまり強い。
- ③暗灰色土 灰白色砂質土を少量含む。
- ④暗灰色土 灰白色粘質土を多く含む。しまり強い。
- ⑤暗灰色有機質土 酸化鉄の茶味を帯びる。
- ⑥灰白色砂質土 灰白色砂質土を少量含む。酸化鉄の茶味を帯びる。



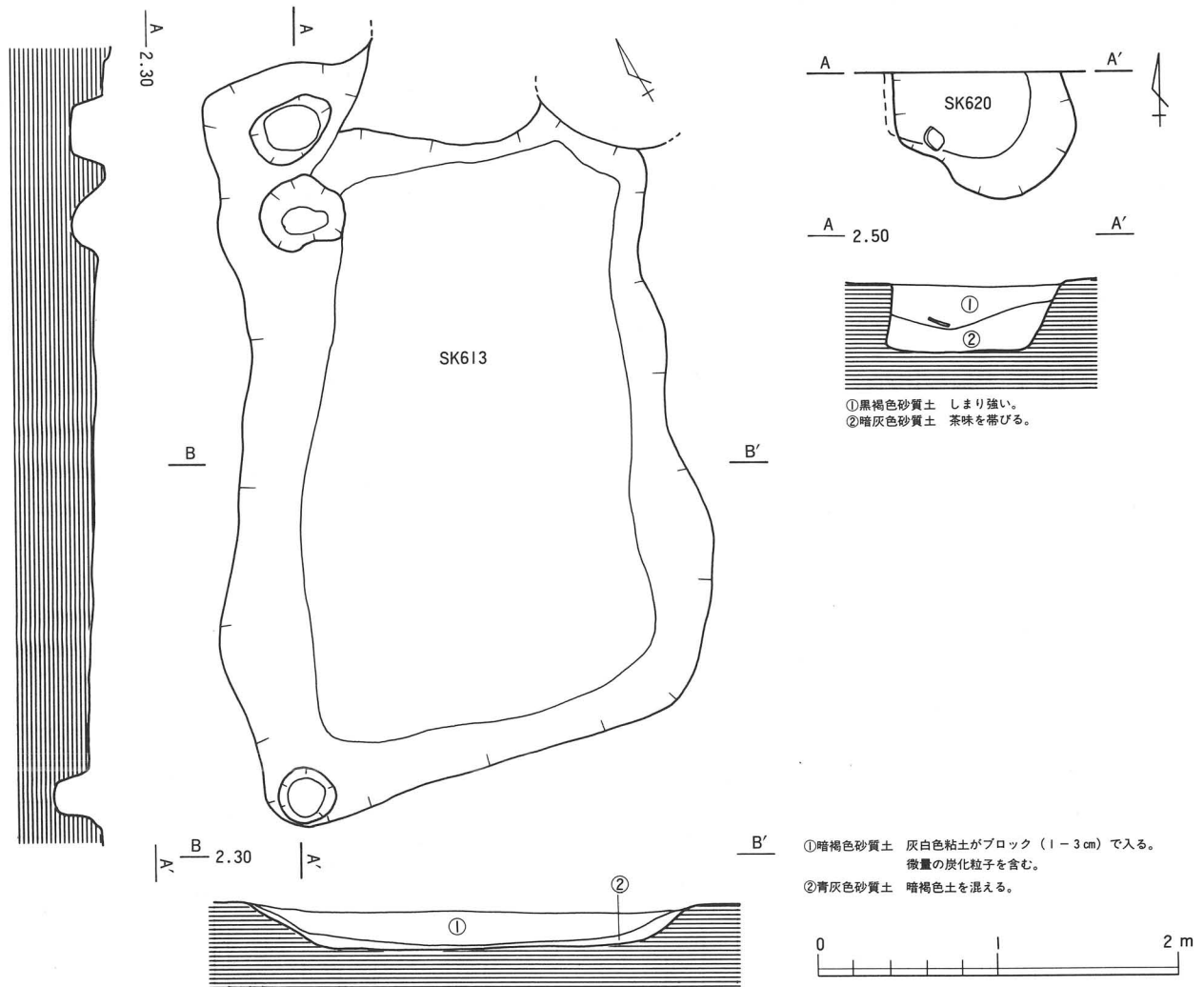
- ①黒褐色土 酸化鉄の茶味を帯びる。炭化粒子微量含む。
- ②黒褐色粘質土 炭化粒子、灰白色砂質土を少量含む。
- ③黒褐色土 灰白色砂質土、灰白色粘質土、灰褐色粘質土を含む。
- ④暗灰色土 黄色味を帯びる。灰白色粘質土、灰白色砂質土を含む。
- ⑤暗灰色有機質土 灰褐色砂質土、灰褐色粘質土を含む。
- ⑥灰白色砂質土 青味を帯びる。灰褐色砂質土を含む。



- ①黒褐色砂質土 しまりが強い。
- ②暗灰色砂質土



第91図 SK351・601・608・609・611・612 (1/40)



第92図 SK613・620 (1/40)

**SK341** (第90図) X11Y91区に位置する。平面は1.1×1.4mの不整楕円を呈し、深さは0.25mを測り、底面は平坦である。埋土は2層に分かれる自然堆積である。

**SK342** (第90図、図版第15の8) X12Y100区に位置する。平面は1.4×1.5mの不整形円形を呈し、深さは0.65mを測り、底面は平坦で、壁は概ね垂直に立ち上がる。埋土は8層に分かれ、2層には多量の炭化粒子を混える。遺物はない。

**SK343** (第90図、図版第15の9) X12Y101区に位置する。平面は開口部で不整形円形、基底部で方形を呈する。深さは0.75mを測り、2段に掘り込まれる。埋土は3層に分かれ、2層には微量の炭化粒子を混える。構築形態より井戸機能が想定される。遺物はない。

**SK344** (第90図、図版第15の10) X12Y102区に位置する。平面は1.1×1.6mの不整形を呈し、深さは35cmを測り底面は概ね平坦である。埋土は3層に分かれる。遺物は1層より珠洲2点が出土。

**SK350** (第90図、図版第16の1) X14Y88区に位置する。開口部が1.4×1.7m・基底部0.55×0.55mの不整形円形を呈し、深さは1.4mを測り、底面は平坦である。断面形状はロート状で2段掘りとなる。滞水層までの掘り込みはないものの、素掘りの2段掘り井戸の可能性が高い。遺物はない。

**SK351** (第91図、図版第16の2) X15Y86区に位置する。平面は3.1×4.2mの不整形を呈し、深さは0.4mを測り、底面は平坦である。埋土は4層に分かれる自然堆積である。遺物はない。

**SK601** (第91図) X11Y90区に位置する。平面は 0.5×0.99mの楕円形を呈し、深さは0.2mを測り、底面は凹凸である。埋土は2層に分かれる人為堆積である。遺物はない。

**SK608** (第91図、図版第16の6) X16Y100区に位置する。平面は 1.3×1.4mの不整円形を呈し、深さは0.54mを測り、底面は平坦で、壁は概ね垂直に立ち上がる。埋土は6層に分かれる。遺物はない。

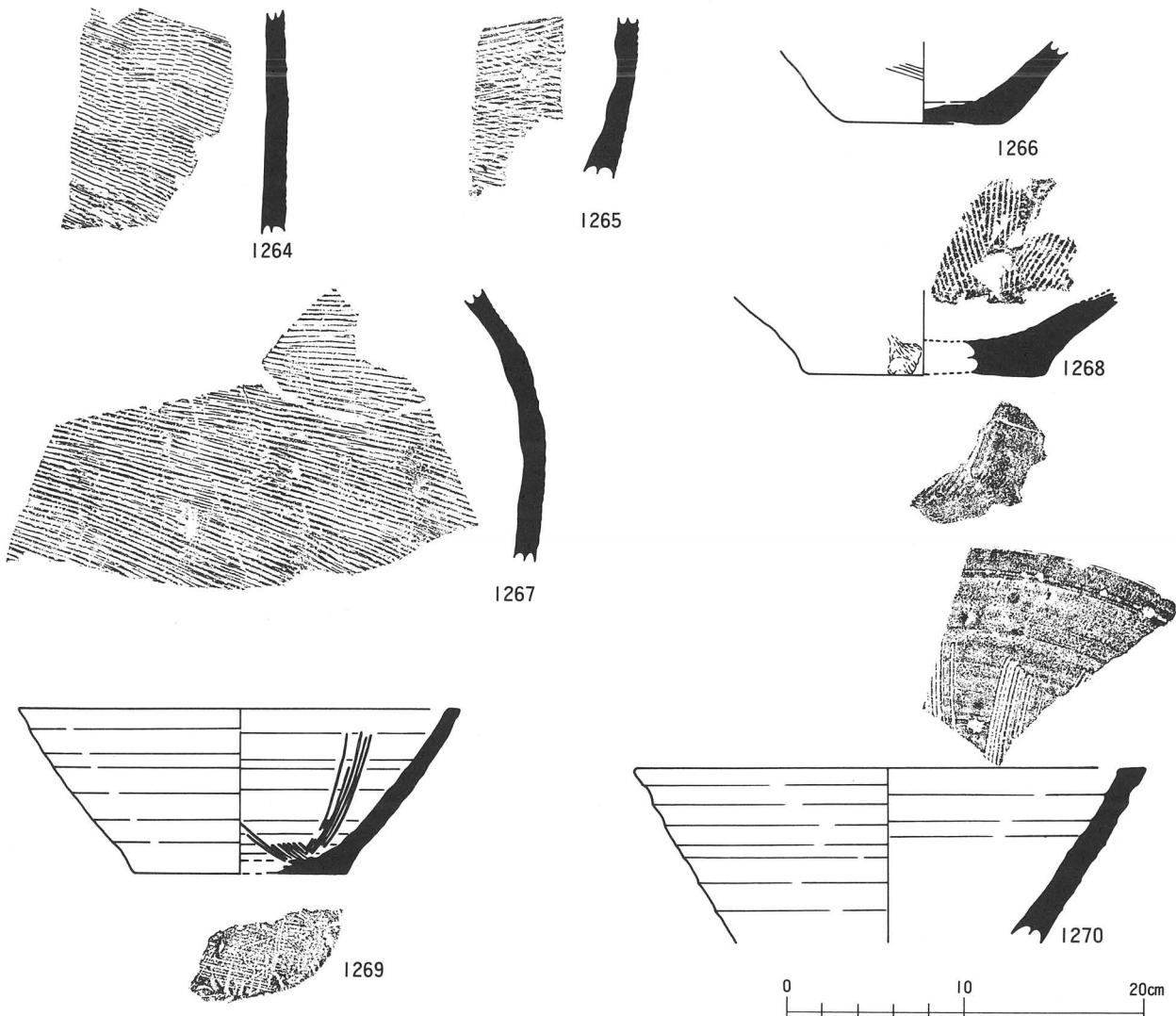
**SK609** (第91図、図版第16の7) X15Y101区に位置する。平面は1.3×1.4mの円形を呈し、深さは0.5mを測り、底面は平坦である。埋土は6層に分かれ、2層に炭化粒子を微量含む。遺物は珠洲1点が出土。

**SK611** (第91図、図版第16の8) X18Y97区に位置する。平面は1.4×1.4mの円形を呈し、深さは0.45mを測り、底面は平坦である。埋土は2層に分かれる自然堆積である。遺物は1・2層より珠洲4点が出土。

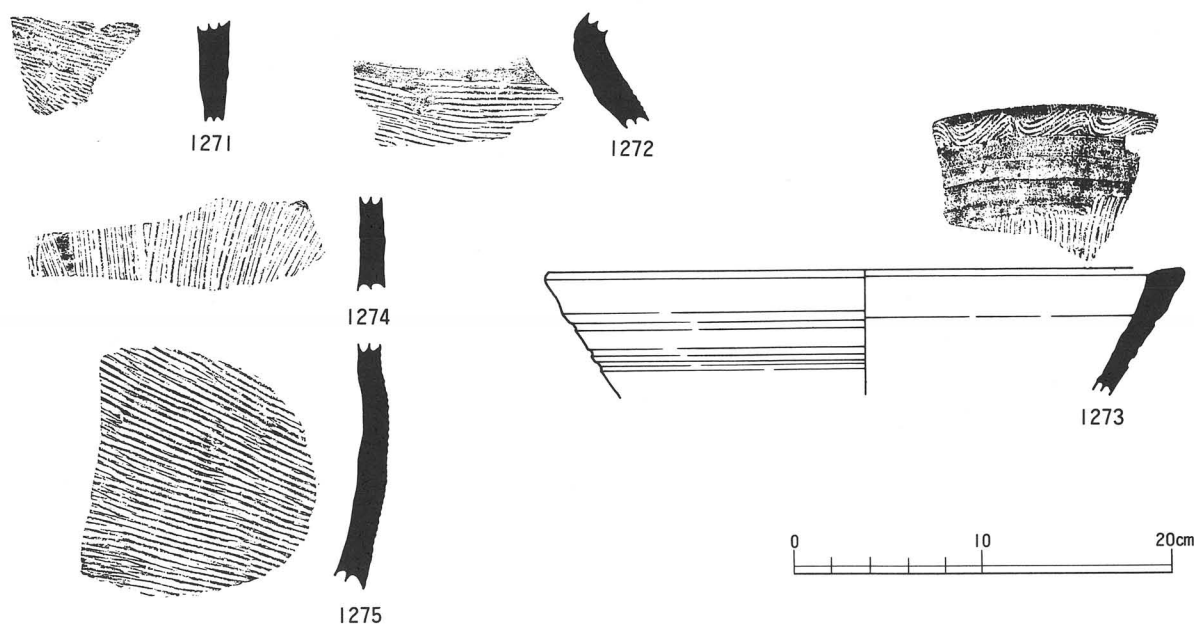
**SK612** (第91図、図版第16の9) X17Y99区に位置する。平面は0.9×1.0mの不整円形を呈し、深さは0.55mを測る。遺物はない。

**SK613** (第91図、図版第16の10) X15Y99区に位置し、北壁方向には近・現代の遺構が複雑に連なる。平面は2.4×3.4mの不整形を呈し、深さは0.2mを測り、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層に微量の炭化粒子を混える。西壁には壁柱を彷彿とさせる小ピットが伴う。

**SK620** (第91図) X18Y97区に位置し、遺構の一部は調査区外へ延びる。底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、1層には珠洲1点を包蔵する。



第93図 SK330・337・340・344・351の出土遺物 (1/4)



第94図 SK609・611・620の出土遺物 (1/4)

**SK330遺物** (第93図、図版第39の5) 1264は珠洲の壺もしくは甕で、3 cm当たりの叩き条数は11条を数える。色調は内外面とも青灰色を呈し、胎土には少量の粗砂粒を含む。

**SK337遺物** (第93図、図版第39の6) 1265は珠洲の壺もしくは甕で、頸基部からやや下がった部分は水平に叩き締め、第二段よりは右下がり、左下がりの叩きが重複する。色調は暗灰色を呈し、胎土は比較的精良である。

**SK340遺物** (第93図、図版第39の7) 1266は珠洲の摺鉢で、外側面の一部には櫛状工具により加飾される。色調は暗灰色を呈し、内側黄灰色の降灰釉がかかる。

**SK344遺物** (第93図、図版第39の8) 1267は珠洲の壺もしくは甕で、右下がりに叩き締められ、3 cm当たりの叩き条数は10条を数える。色調は青灰色を呈し、割れ口の一部には補修用の漆が付着する。1268は珠洲の摺鉢で、卸し目の原体幅は3 cmを測り、1帯当たりの条数は11条もしくは12条を数える。色調は青灰色を呈し、外面下端には指圧痕が認められ、底部の切り離しは静止糸切りである。

**SK351遺物** (第93図、図版第40の1) 1269は14世紀代の珠洲IV期に比定される摺鉢で、体部は直線的に開き口縁部端面は水平に面を取る。卸し目の原体幅は2.3cmを測り、1帯当たりの条数は8条を数える。色調は暗灰色を呈し、口径24.5cmを測る。1270は14世紀代の珠洲IV期に比定される摺鉢で、体部は直線的に開き口縁端面は水平に面を取る。卸し目の原体幅は2.3cmを測り、1帯当たりの条数は11条を数える。色調は青灰色を呈し、口径は28cmを測る。

**SK609遺物** (第94図、図版第40の2) 1271は珠洲の壺もしくは甕で、口頸基部より下は水平に叩き締め、第二段より右下がり、左下がりの叩きが重複する。色調は暗灰色を呈する。

**SK611遺物** (第94図、図版第40の3) 1272は珠洲の甕で、3 cm当たりの叩き条数は10条を数える。色調は鼠黒色を呈し、胎土には黒色微粒子を多く含む。1273は15世紀代の珠洲V期に比定される摺鉢で、口縁部は肥厚した内端に広く面を取り、そこに櫛目波状紋体を巡らす。色調は青灰色を呈し、口径は33cmを測る。1274は珠洲の摺鉢で、卸し目は緻密に施される。色調は暗灰色を呈する。

**SK620遺物** (第94図、図版第40の4) 1275は珠洲の甕で、右下がりに叩き締められ、3 cm当たりの叩き条数は10条を数える。色調は青灰色を呈する。



⑥X1～19Y100～127区の遺構 溝はX7以北のY106～107区間に集中し、比較的小規模な溝が連続・連結を繰り返しながら、東西もしくは南北に走る。遺構の覆土はいずれも黒褐色を基調とした物で、東側に展開を見せる中世の溝との明瞭な差異は認められない。また、遺構の性格については不明であるが、配置関係及び覆土よりY106区以东の中世遺構との有機的機能が想定される。土坑は円形基調5基・不定形4基の計9基を検出した。

SD100C (第96図) X13以北Y111区に位置する南北溝である。SD314と重複関係にあるが、土層観察による時間的差異は認められない。規模は現長10m・幅0.6～1.7m・深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。遺物は漆器碗が1点出土する。

SD100D (第98図) Y118区に位置する。巨視的に4条の溝が形態・規模に差を持ちながら、南北に連なり機能する。規模は現長32m・幅1.5～2.7m・深さ0.1～0.5mを測る。遺物はない。

SD100E (第96図) X10～15Y111～116区間に位置するL字状の溝である。主軸は東西溝が96°東偏し、南北溝が6°東偏する。規模は東西溝8.8m・南北溝9m・幅0.9～1.3m・深さ0.15～0.2mを測る。遺物はない。

SD300D (第96図) SD300Cに連結する斜行溝である。形態は東西に走る溝にL字状の溝が連結し、更に小規模な溝が複雑に重複する。重複関係については定かではないが、いずれの遺構覆土も黒褐色を基調とし酷似している。規模は東西溝が幅1.6～1.8m・深さ0.25～0.35m、L字状の溝は幅0.6～0.8m・深さ0.2～0.3mを測る。遺物はない。

SD312 (第96図) X4～8Y120～127区以西に位置する。規模現長15m・幅1.6～2.0m・深さ0.15mを測り、東端で拡幅する。拡幅した方形基調の部分は一段と低く掘り下げられており、水溜めの感がある。遺物はない。

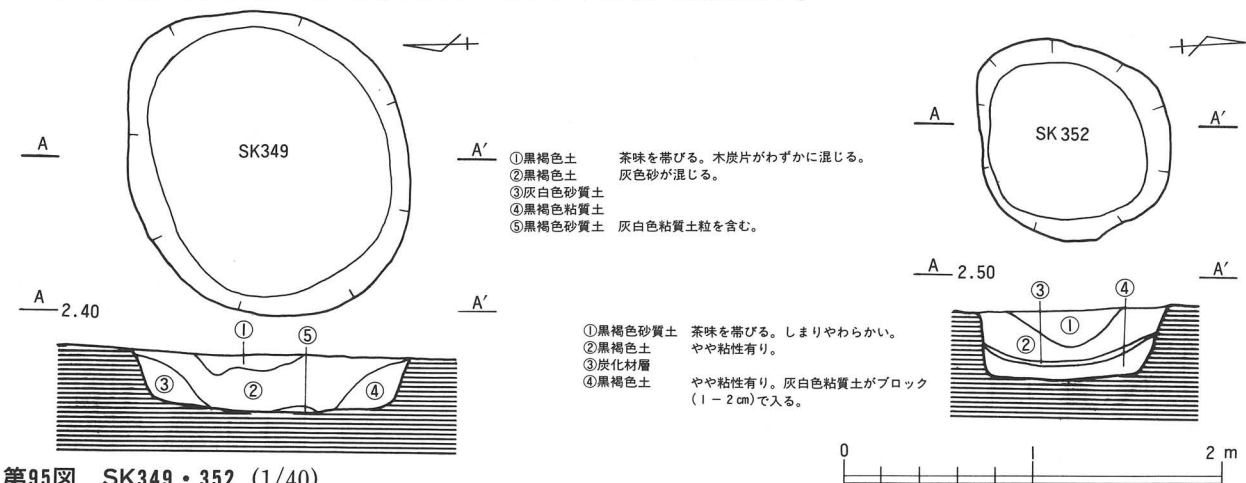
SD313 (第96図) X15～17Y124～127区以西に位置する。規模は現長6m・幅0.8～1.1m・深さ0.25mを測る。基底レベルは一様である。遺物はない。

SD314 (第96図) X16Y109～115区に位置する東西溝である。SD100C・SD315に直行し重複関係にあるが、土層観察による時間的差異は認められない。規模は長さ13m・幅0.4～0.5m・深さ0.15～0.2mを測り、基底レベルは一様である。遺物はない。

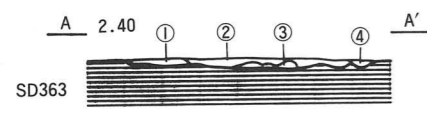
SD315 (第96図) Y113軸に沿う南北溝で、北方向に若干の傾きを持つ。X16以南での掘り込みは、自然の起伏に取り込まれ消滅する。規模は幅0.8～1.2m・深さ0.3～0.4mを測る。遺物は珠洲1点、石器1点が出土。

SD363 (第96図) X14～22以北Y122～126区以西に位置し、主軸は座標方眼に合う。平面は現状においてL字状を呈し、規模は幅1.8～2.0m・深さ0.2～0.25mを測る。また、区画内を幅0.4～0.6m・深さ0.1mの溝が南北に走る。遺物はない。

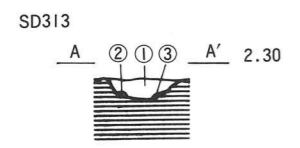
SK349 (第95図) X9Y126区に位置する。平面は0.6×1.8mの無花果形を呈し、深さは0.45mを測り、底面は平坦で、壁は概ね垂直に立ち上がる。埋土は2層に分かれる。遺物はない。



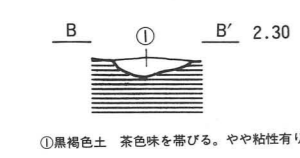
第95図 SK349・352 (1/40)



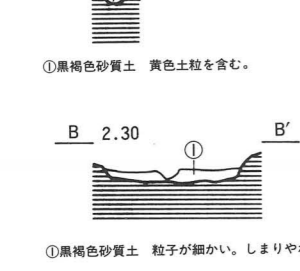
SD363  
 ①灰色砂 灰色シルト土のブロックが混じる。  
 ②黒褐色土 灰茶褐色粘質土のブロックが混じる。  
 ③灰色砂 やや粘質の灰土を含む。  
 ④黒褐色土



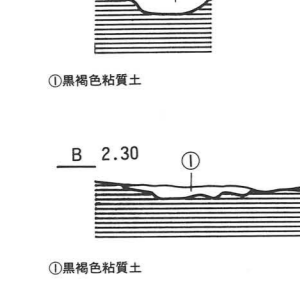
SD313  
 ①黒褐色土 茶色味を帯びる。やや粘性有り。  
 ②灰色砂  
 ③灰色砂



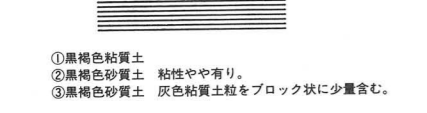
SD312  
 ①黒褐色粘質土 黄色土粒を含む。



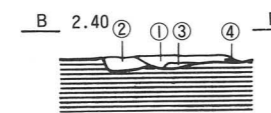
SD100D  
 ①黒褐色粘質土



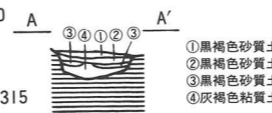
SD100E  
 ①黒褐色粘質土



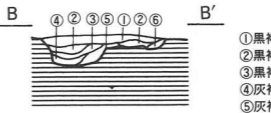
SD300D  
 ①黒褐色粘質土  
 ②黒褐色粘質土 粘性やや有り。  
 ③黒褐色粘質土 灰色粘質土粒をブロック状に少量含む。



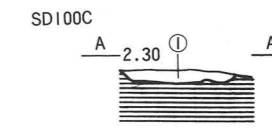
SD315  
 ①明黒褐色土 茶色味強い灰茶褐色粘質土のブロックが混じる。  
 ②黒褐色土 灰茶褐色粘質土のブロックが混じる。  
 ③灰茶褐色粘質土 ①がブロックで混じる。  
 ④灰褐色土 シルト



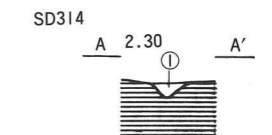
SD100C  
 ①黒褐色粘質土 やや粘性有り。灰白色砂粒・黄褐色粘土を微量含む。  
 ②黒褐色粘質土 やや粘性有り。灰白色砂粒・黄褐色粘土を少量含む。  
 ③黒褐色粘質土 灰白色砂質土粒と黄褐色粘土を少量含む。  
 ④灰褐色粘質土 黄褐色粘土粒を少量含む。



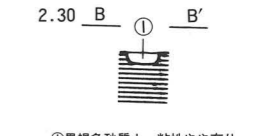
SD100B  
 ①黒褐色粘質土 やや粘性有り。灰白色砂粒・黄褐色粘土を微量含む。  
 ②黒褐色粘質土 やや粘性有り。灰白色砂粒・黄褐色粘土を少量含む。  
 ③黒褐色粘質土 灰白色砂質土粒と黄褐色粘土を少量含む。  
 ④灰褐色粘質土 黄褐色粘土粒を少量含む。  
 ⑤灰褐色粘質土 灰白色砂質土粒を少量含む。  
 ⑥黒褐色粘質土



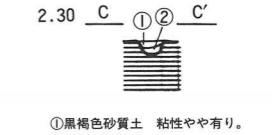
SD100C  
 ①黒褐色粘質土 青灰色砂質土をブロック状に含む。



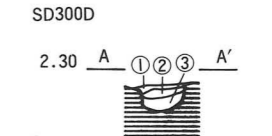
SD314  
 ①黒褐色粘質土 粘性やや有り。



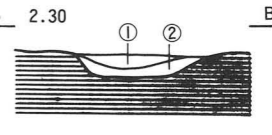
SD300D  
 ①黒褐色粘質土 粘性やや有り。



SD300D  
 ①黒褐色粘質土 粘性やや有り。  
 ②灰褐色粘質土



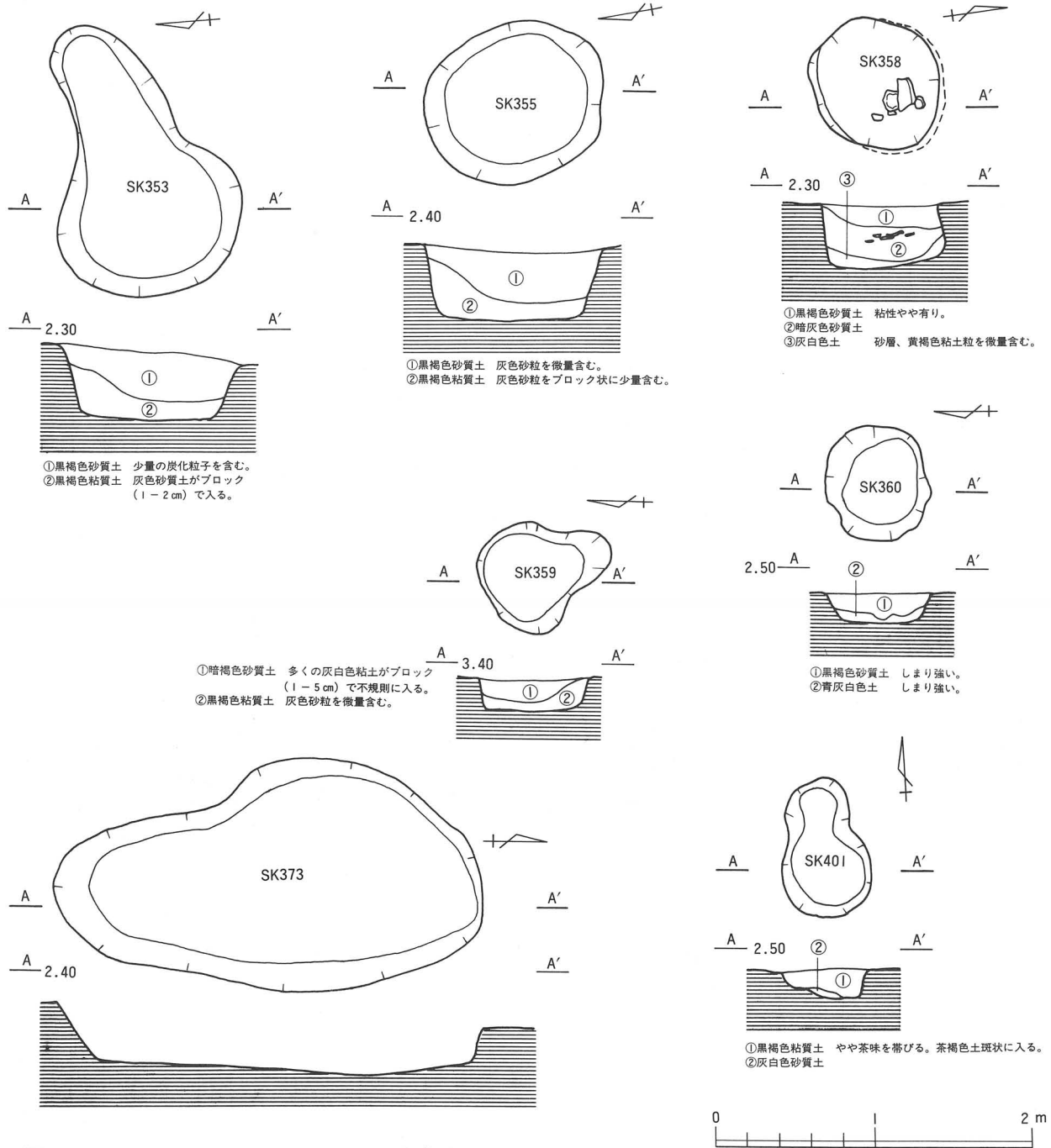
SD300D  
 ①黒褐色粘質土 灰白色砂質土、黄褐色粘土を微量に含む。  
 ②黒褐色粘質土 粘性やや有り。灰白色砂質土を微量に含む。  
 ③黒褐色粘質土 灰色砂粒を微量に含む。



SD300D  
 ①黒褐色粘質土 灰白色砂質土、黄褐色粘土を微量に含む。  
 ②黒褐色粘質土 粘性やや有り。灰白色砂質土を微量に含む。



第96図 X1~19Y105~127区遺構配置図 (1/200)



第97図 SK353・355・358～360・373・401 (1/40)

SK352 (第95図、図版第16の3) X5 Y125区に位置する。平面は 1.0×1.1m の不整形円形を呈し、深さは0.35mを測り、底面は平坦で、壁は概ね垂直に立ち上がる。埋土は4層に分かれ、3層は層厚4cmを測る炭化層である。遺物はない。

SK353 (第97図) X6 Y126区に位置する。平面は短軸 1.2×長軸1.8mの無花果形を呈する。深さは0.4mを測り、底面は平坦である。埋土は2層に分かれる自然堆積土である。遺物は瀬戸美濃1点が出土。

SK355 (第97図) X17Y115区に位置する。平面は 1.0×1.1mの不整形円形を呈し、深さは0.45mを測り、底面は平坦で、壁は概ね垂直に立ち上がる。埋土は2層に分かれる。遺物はない。

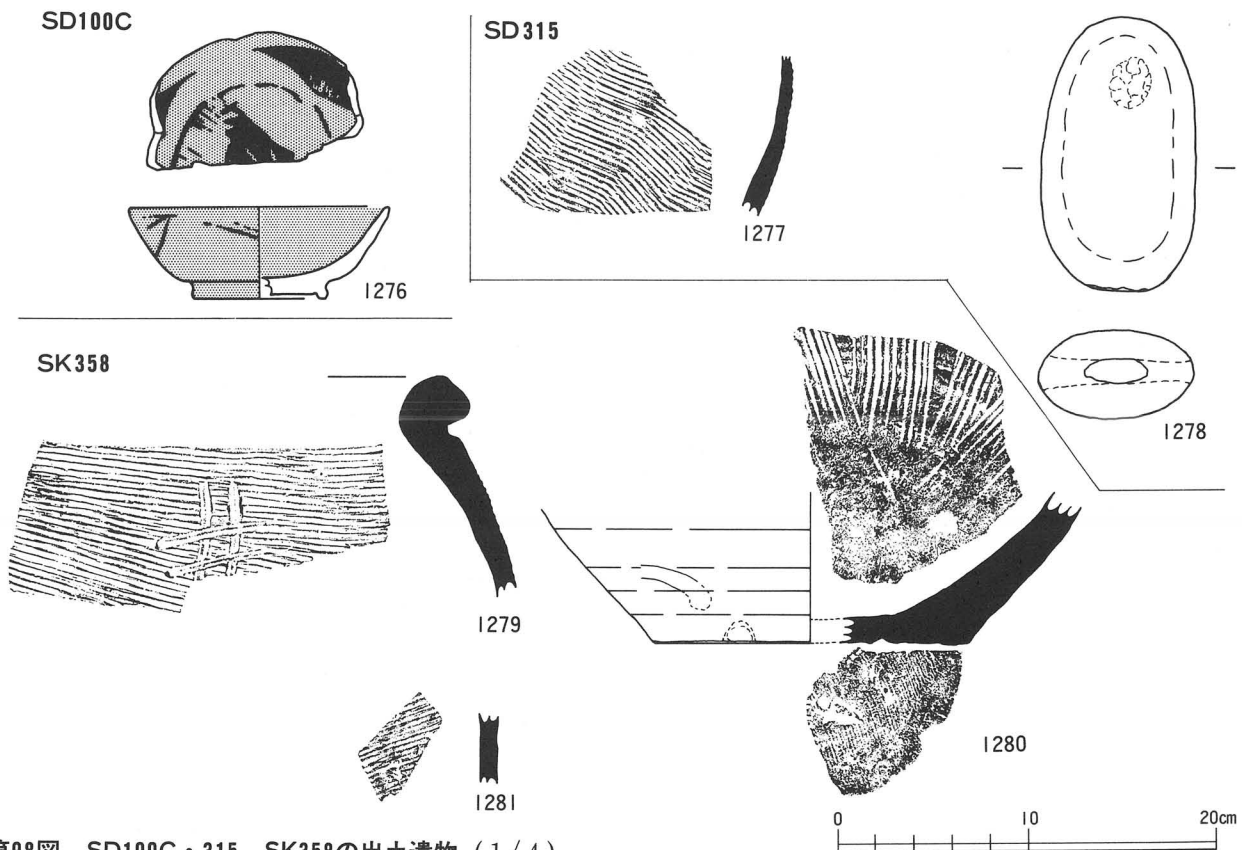
SK358 (第97図) X14Y112区に位置する。平面は径0.8mの円形を呈し、深さは0.45mを測り、底面は平坦で、北壁方向は小さく内傾して立ち上がる。埋土は3層に分かれ、2層より珠洲3点が出土。

SK359 (第97図) X 6 Y125区に位置する。平面は 0.7×0.8mの不定形を呈し、深さは0.2mを測り、底面は平坦である。埋土は2層に分かれる。遺物はない。

SK360 (第97図、図版第16の4) X 6 Y120区に位置する。平面は 0.6×0.8mの不整形を呈し、深さは0.2mを測り、底面は平坦である。埋土は2層に分かれる。遺物はない。

SK373 (第97図、図版第16の5) X10Y123区に位置する。平面は 1.2×2.7mの無花果形を呈し、深さは0.2mを測り、底面は平坦である。遺物はない。

SK401 (第97図) X 6 Y124区に位置する。平面は 0.4×0.8mの無花果形を呈し、深さは0.2mを測る。埋土は2層に分かれる。遺物はない。



第98図 SD100C・315, SK358の出土遺物 (1/4)

SD100C遺物 (第98図、図版第53の3) 1276は比較的浅い体部と低い高台を持ち、汁椀と考えられる漆器である。木取りは木目に対して垂直に取る堅木取りで、素地はロクロ挽きで作られている。法量は口径13.6cm・底径6.9cm・器高4.9cmを測る。地は黒漆で塗られ、見込みには赤漆で扇、内底には圈線が描かれる。

SD315遺物 (第98図、図版第40の5) 1277は珠洲の甕である。右下がりの叩き条数は10条を数える。色調は暗青灰色を呈し、胎土は比較的精良で、良く焼きしめられる。1278は偏平楕円の敲き石である。下端には 1.5×3.0cmの敲打痕を持ち、上部中央には凹みを有する。法量は、長さ14cm・幅8cm・重量950gを測る。また、全体に被熱による黒みを帯びる。

SK358遺物 (第98図、図版第40の6) 1279は珠洲IV期に比定される甕で、肥厚した口縁は短く外反する。頸基部以下には [井] の記号状刻文を入れ、3cm当たりの叩き条数は8条を数える。色調は暗灰色を呈し、胎土には粗砂粒を多く含む。1280は摺鉢で、卸し目の原体幅は4.2cmを測り、1帯当たりの叩き条数は11条を数える。底径は16.5cmを測り、底部の切り離しは静止糸切りで、外面下端には指圧痕が認められる。色調は暗灰色を呈し、胎土には粗砂粒を多く含む。1281は甕で、3cm当たりの叩き条数は11条を数える。

## (6) 中世の遺構外出土遺物

### ①中国製磁器

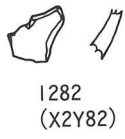
**白磁** (第99図、図版第41) 9点の皿が検出されている。帰属年代は、1282・1283が14世紀代、1284・1285は14世紀末～15世紀中葉、1286～1290が15世紀前半と思われる。1282は釉がやや暗い灰白色を呈し、灰白色の胎土には少量の黒色微砂粒を含む。1283は口ハゲの皿と思われる。釉は灰白色を呈し、灰白色の胎土には少量の黒色微砂粒を含む。1284・1285は高台をアーチ状に抉り、底部付近は露胎となる。釉は黄味を帯びる白濁色を呈し、内底面には貫入がはいる。また、1285は高台内に赤漆による十字紋を有し、割れ口の一部に漆継ぎが認められる。1286は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部内面は水平に面を取る。釉は透明度のある白濁色を呈し、胎土は灰白色を呈する。1287は体部が直線的に立ち上がり、口縁部内端面はやや尖る。釉は灰白色を呈し、外面下半は露胎となる。1288は高台内部が盛り上がり、底部付近は露胎となる。高台は「ハ」の字状にこしらえ、外端面は面取りされる。釉は白濁色を呈し、胎土は灰白色を呈する。1289は高台内部が盛り上がり、底部付近は露胎となる。釉は透明感のある白濁色を呈し、細かな貫入がはいる。また、内底面には圈状の窪みが僅かに認められる。1290は畳付を除き底部付近は露胎となり、高台は荒く仕上げる。釉は白濁色を呈し、胎土は灰白色を呈する。

**青白磁** (第99図、図版第41) 1291は14世紀前半に帰属する梅瓶の細片で、外面には渦紋が配され、釉は明緑灰色を呈する。胎土は灰白色を呈し、堅致に焼かれる。

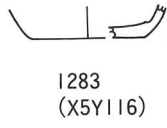
**青磁** (第99図、図版第41) 1292～1302は碗、1303は盤である。帰属年代は、1292が14世紀前半～後半、1293～1298は14世紀後半～15世紀前半、1299～1301は15世紀前半、1302は15世紀後半～16世紀前半、1303は14世紀前半と思われる。1292は直線的に体部を伸ばし、口縁部端がやや外反する。外面には浮き彫り風に表現された鎬蓮弁紋が配される。釉はくすんだ緑味青灰色を呈し、厚くかけられる。1293～1295は口縁部が外反し、口縁端面を丸くおさめる玉縁口縁の端反碗である。釉は1293・1295がくすんだ緑味青灰色、1294はやや明るい緑味青灰色を呈し、胎土はいずれも暗灰色を呈する。1296・1297は口縁部が直進し、外側面には蓮弁紋が配される。釉はいずれも緑味青灰色を呈し、胎土は暗灰色を呈する。1298は畳付及び高台内は露胎となる。釉は厚くかけられ、色調は透明感のあるやや濃い緑味青灰色を呈する。1299の外底面は蛇の目釉剥ぎの露胎圏で、底部中央はやや盛り上がる。釉は露胎圏を除き総釉で、色調は不透明な明青灰色を呈する。1300は口縁部が直進し、外側面には弁先が尖ることなく丸い、幅のある蓮弁が配される。釉は暗い緑味青灰色を呈する。1301は口縁が直進し、端面は丸くおさめる。釉は透明感のある緑味青灰色を呈する。1302の外側面には口縁直下に連続する弧線を線刻し、その山より縦線を下す形骸化した線蓮弁が配される。口縁部は肥厚し、釉は灰味が強い緑味青灰色を呈する。1303は口縁部を水平に近い角度で折り曲げ、口縁端面はやや尖る。釉は透明感のある緑味青灰色を呈する。

### ②国産陶磁器

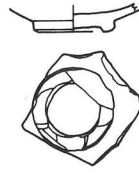
**瀬戸・瀬戸美濃** (第100図、図版第42・第43の1) 製品には、平碗、折縁皿、小皿、天目碗、卸し皿、鉢、摺鉢、瓶子、合子がある。1304は瀬戸の合子もしくは薬壺と呼ばれるもので、14世紀代の所産である。外側面には2段の剣先紋が巡り、その下段には草花が印花される。釉は黄色味を帯びる緑色を呈し、印花された部分を中心に遺存する。また、内面には指圧痕が認められる。1305は15世紀前半の平碗で、口縁部は内傾し、口縁端面はやや幅広く内側に面を取る。釉は透明感のある緑味青灰色を呈し、口径は18cmを測る。1306～1308は15世紀前半の皿で、1306は口縁部を水平に近い角度で折り曲げ、口縁端面は丸くおさめる。1307・1308は口縁部の折り返しが弱く、口縁部内面には幅広い溝が巡る。口径は1306が11cm、1307は24cm、1308は27cmを測る。釉はいずれも透明感のある緑味青灰色を呈する。1309は15世紀代の小皿で、内面には菊花紋がスタンプされる。釉は緑味青灰色を呈し、内底面及び高台は露胎となる。1310～1315は15世紀代の天目碗で、1310・1311は体部の立ち上がりが強く口縁部はややくびれ端部は玉縁状となる。



1282  
(X2Y82)



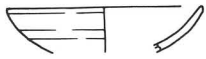
1283  
(X5Y116)



1284  
(X15Y66)



1285  
(X10Y71)



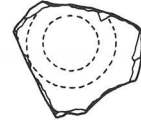
1286  
(X2Y58)



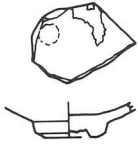
1287  
(X17Y96)



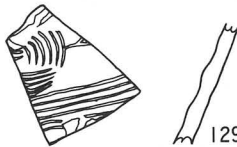
1288  
(X12Y53)



1289  
(X20Y79)



1290  
(X15Y66)



1291  
(X20Y46)



1292  
(X20Y102)



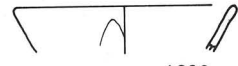
1293  
(X17Y52)



1294  
(X65Y45)



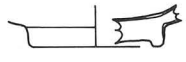
1295  
(X7Y44)



1296  
(X15Y96)



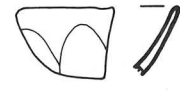
1297  
(X2Y0)



1298  
(X20Y93)



1299  
(X17Y90)



1300  
(X15Y66)



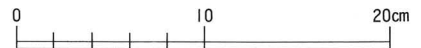
1301  
(X8Y5)



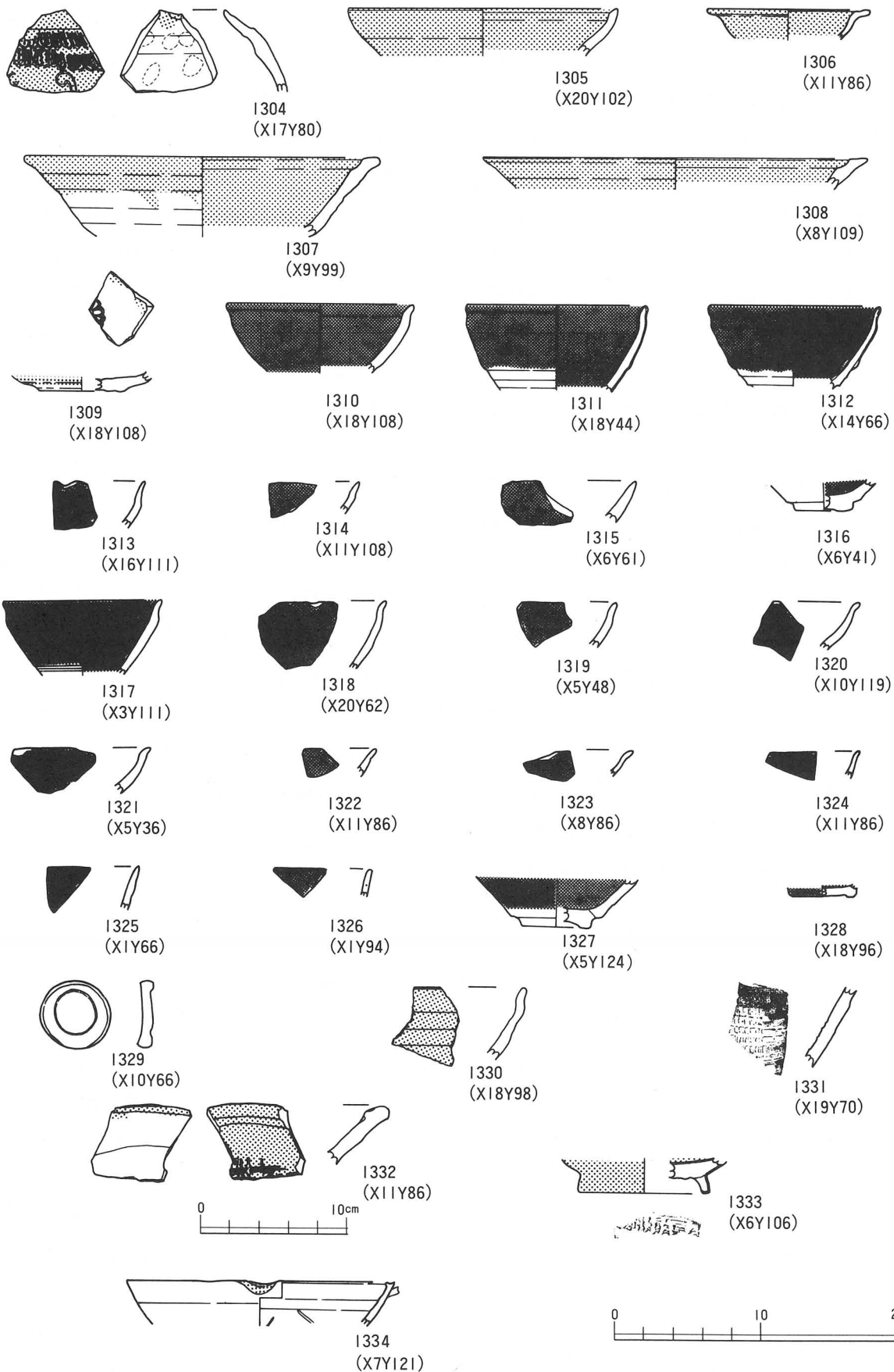
1302  
(X20Y79)



1303  
(X14Y9)



第99図 遺構外の出土遺物（白磁・青白磁・青磁）（1291は1/2，他は1/4）

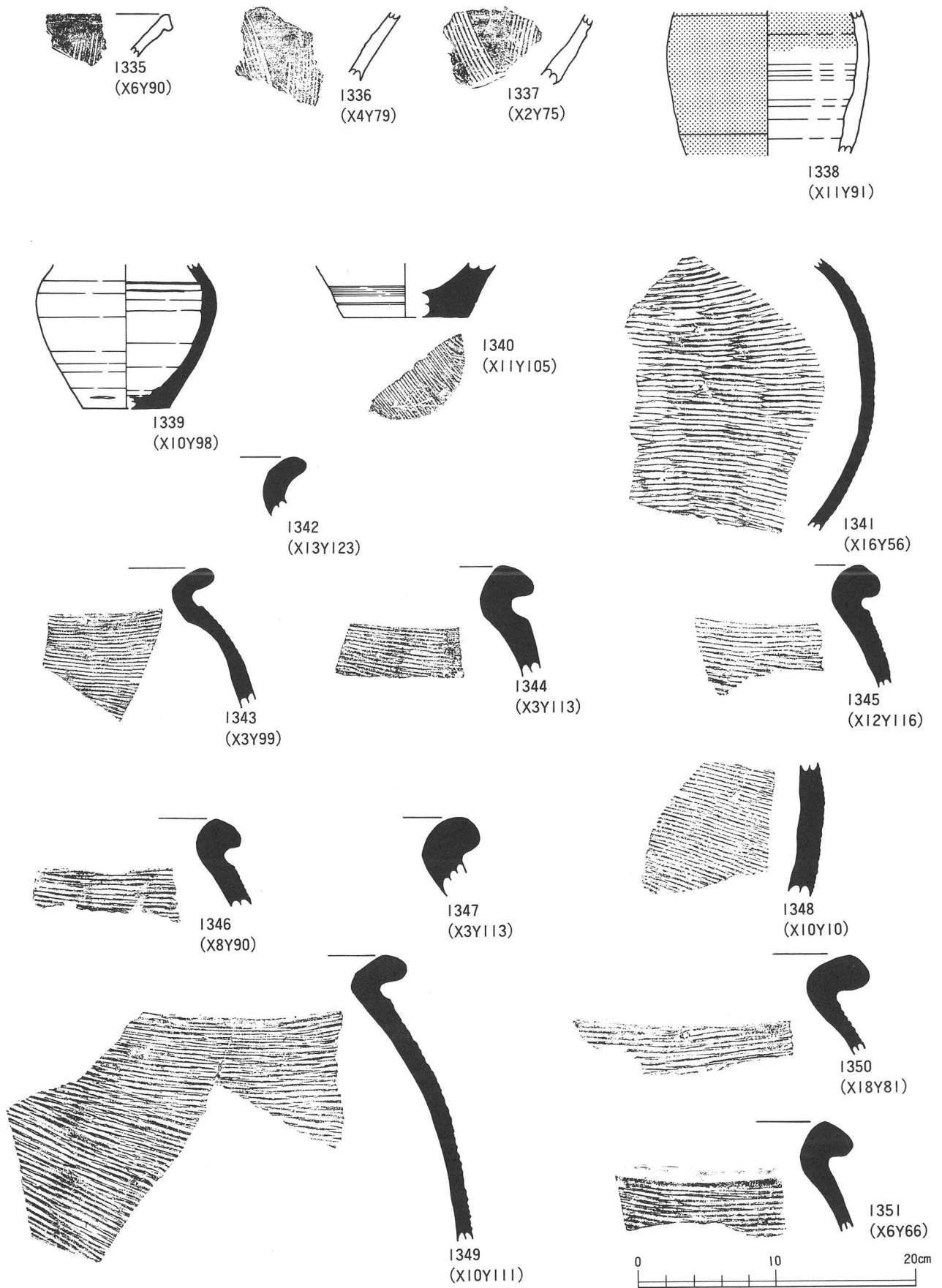


第100図 遺構外の出土遺物（瀬戸・瀬戸美濃）（1332は1/2，他は1/4）

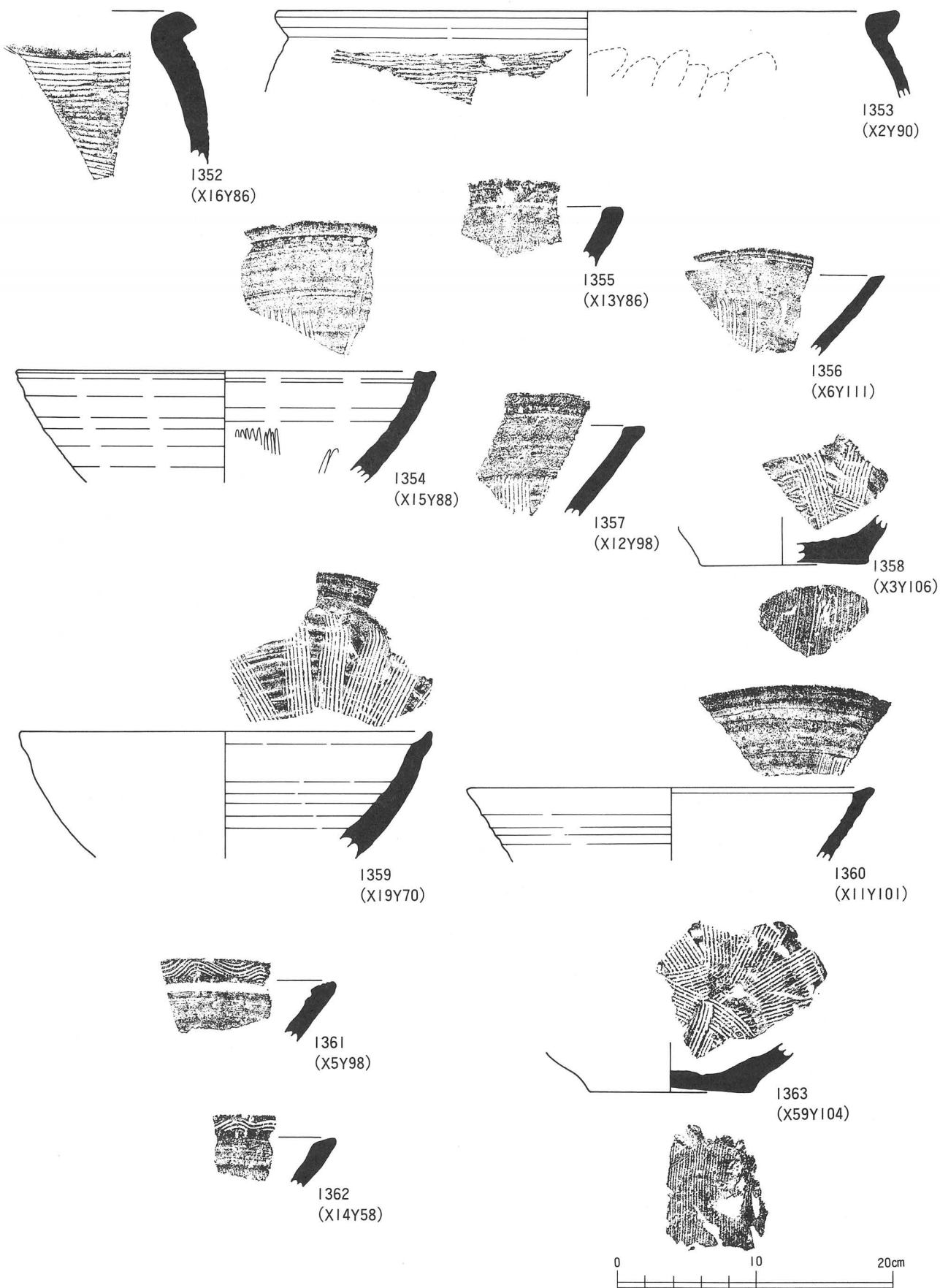


釉は厚くかけられ1310が漆黒色、1311は艶消しの黒色を呈し、底部付近は厚く錆釉が施される。口径は1310が12.3cm、1311は11.5cmを測る。1312は体部がやや湾曲し、口縁端部は玉縁状となる。釉は鉄釉で口縁部が褐色、体部は漆黒色を呈し、口径は13cmを測る。1313・1314は口縁部がややくびれ、端部は薄くなる。釉は鉄釉で口縁部が褐色、体部は漆黒色を呈する。1315は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部に至り器厚を減じる。釉は鉄釉で漆黒色を呈する。1316は15世紀代の天目碗の内反り高台で、高台脇辺の切り込みは比較的浅く、高台周辺は露胎となる。釉は鉄釉で漆黒色を呈し、高台径は4cmを測る。1317～1327は16世紀前半の天目碗である。1317は体部が直線的に開き口縁部がくびれる。釉は鉄釉で色調は茶褐色を呈し、高台周辺には薄い錆釉が施され、口径は11cmを測る。1318～1321は口縁部がくびれ、口縁端部が玉縁状となる。釉は鉄釉で色調は光沢のある黒褐色を呈する。1322は口縁部が僅かにくびれ、釉は鉄釉で色調は黒褐色を呈する。1323・1324は口縁部が僅かにくびれ、釉は鉄釉で色調は艶のない茶褐色を呈する。1325・1326は体部より直進し、口縁端部で薄くなる。釉は鉄釉で色調は艶のない茶褐色を呈する。1327は高台径4.5cmを測る内反の高台で、高台脇の削り込みはやや広い。釉は鉄釉で漆黒色を呈し、高台周辺は露胎となる。1328は畳付を含め茶褐色の鉄釉が施され、高台径は4.5cmを測る。1329は高台外周の上端を面取りし、平滑に仕上げる。高台部は露胎で、内底面には漆黒色を呈する鉄釉が施され、高台径は4.5cmを測る。1330は15世紀前半の灰釉天目で、口縁部がくびれ端面に僅かな稜をもつ。色調は透明感のある緑味灰白色を呈する。1331・1332は15世紀代の卸し皿で、1331の卸し目は内側面の横方向にヘラで斜めに切り込み、後に縦方向に切り込む。体部上半の内外面には、黄緑色もしくは白濁色を呈する灰釉が掛け分けられる。1332は口縁端部が肥厚し、口縁内側に小突起が形成される。卸し目は概して粗雑に、ヘラで縦横に切り込む。釉は透明感のある黄緑色を呈し、体部外側面は露胎とする。口径は18cmを測る。1333は底卸し皿で、卸し目は鋭くヘラで斜めに切り込み、条痕は2方向に直交する。釉は緑味青灰色を呈し、高台内底面を除き薄くかけられる。1334は15世紀代の片口の摺鉢で、口縁端面は内方向に引き出され浅い溝が巡る。釉は片口部に灰緑色の灰釉が若干認められる。1335～1337は15世紀代の摺鉢で、いずれも赤褐色の鉄釉が掛けられる。1335は口縁下端が斜め方向に引き出され縁帯をなす。1336は使用頻度の高い摺鉢で、卸し目は摩滅し釉は剥落する。1337は卸し目の原体幅は2cmを測り、1帯当たりの条数は6条を数える。1338は15世紀代の灰釉の瓶子である。ロクロ水挽き成形で、器面はヘラケズリ調整をしている。釉は透明感のある淡黄緑色を呈し、釉むらが著しい。

珠洲（第101～103図、図版第43の2・第44の1） 器種は1339～1341が壺、1342～1353は甕、1354～1365は摺鉢の基本3種が見られる。帰属年代は珠洲陶器編年のⅣ・Ⅴ期を中心とし、各々では1339・1340がⅢ～Ⅳ期、1341はⅤ期、1342はⅢ期、1343～1348はⅣ期、1349～1353はⅤ期、1354～1358はⅣ期、1359～1363はⅤ期、1364・1365はⅥ期に比定される。1339は壺R種のC類で、底径は6cmを測る。色調は灰白色を呈し、胎土には粗砂粒を少量含む。1340は外底部に木葉痕が加飾され、外側面下端には弱い沈線が6条認められる。色調は灰白色を呈し、底径は9cmを測る。底部の切り離しは静止糸切りである。1341は3cm当たりの叩き条数が10条を数え、割れ口の一部には漆継ぎが認められる。1342は円頭口縁で、弓なりに長く外反する。1343は円頭口縁で、長く〔く〕の字状に外反する。1344・1345は口縁部が肥厚垂下し、3cm当たりの叩き条数は1344が10～11条、1345は8条を数える。1346は口縁部が肥厚し、端面を軽く面取る。3cm当たりの叩き条数は8条を数える。1347は円頭口縁で強く外傾する。1348は3cm当たりの叩き条数が10条を数え、割れ口の一部には漆継ぎが認められる。1349・1350は口縁部が肥厚し、〔く〕の字状に外反する。3cm当たりの叩き条数は1349が8条、1350は6条を数え、1350には口縁端面及び外側面に、霜降り状の降灰が掛かる。1351は口縁部を〔く〕の字状に折り曲げ、肥厚した端面で広く面を取る。1352は口縁部が短く外反し、口縁下端を水平に仕上げる。1353は口縁端面で面を取り、端部下端で軽く面取る。口径は45cmを測り、頸部内面には横方向に連続する指圧痕が認められる。1354は体部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁下端を面取る。口径は30cmを測り、卸し目



第101図 遺構外の出土遺物（瀬戸・瀬戸美濃・珠洲）（1/4）



第102図 遺構外の出土遺物（珠洲）（1/4）

の原体幅は3cmで、一帯当たりの条数は9条を数える。1355～1357は体部が直線的に立ち上がり、口縁端部が水平に面を取る。色調は暗灰色を呈し、胎土には粗砂粒及び黒色微粒子を少量含む。1358は卸し目が放射状に施され、原体幅は2.5cm、条約は10条である。底部の切り離しは静止糸切りで、底径は12cmを測る。1359は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部内面に内凹みの面を取る。口径は30cmを測り、卸し目の原体幅は3cmで、一帯当たりの条数は7条を数える。1360は体部が直線的に立ち上がり、口縁端部が肥厚し、端面は内傾して幅広に面を取る。色調は暗灰色を呈し、口径は24.5cmを測る。1361～1365は口縁内端面に櫛目波状紋体加飾される。1361は波長間隔が5cm前後を測り、下部には一条の溝が巡る。1362は波長間隔が2.5cmを測り、色調は暗灰色を呈する。1363は卸し目の原体幅が2.5cmで、一帯当たりの条数は10条を数える。1364・1365は櫛目波状紋及び卸し目原体は粗大となり、施溝が比較的浅い。波長間隔は1364が4cm前後、1365は5cm前後を測る。

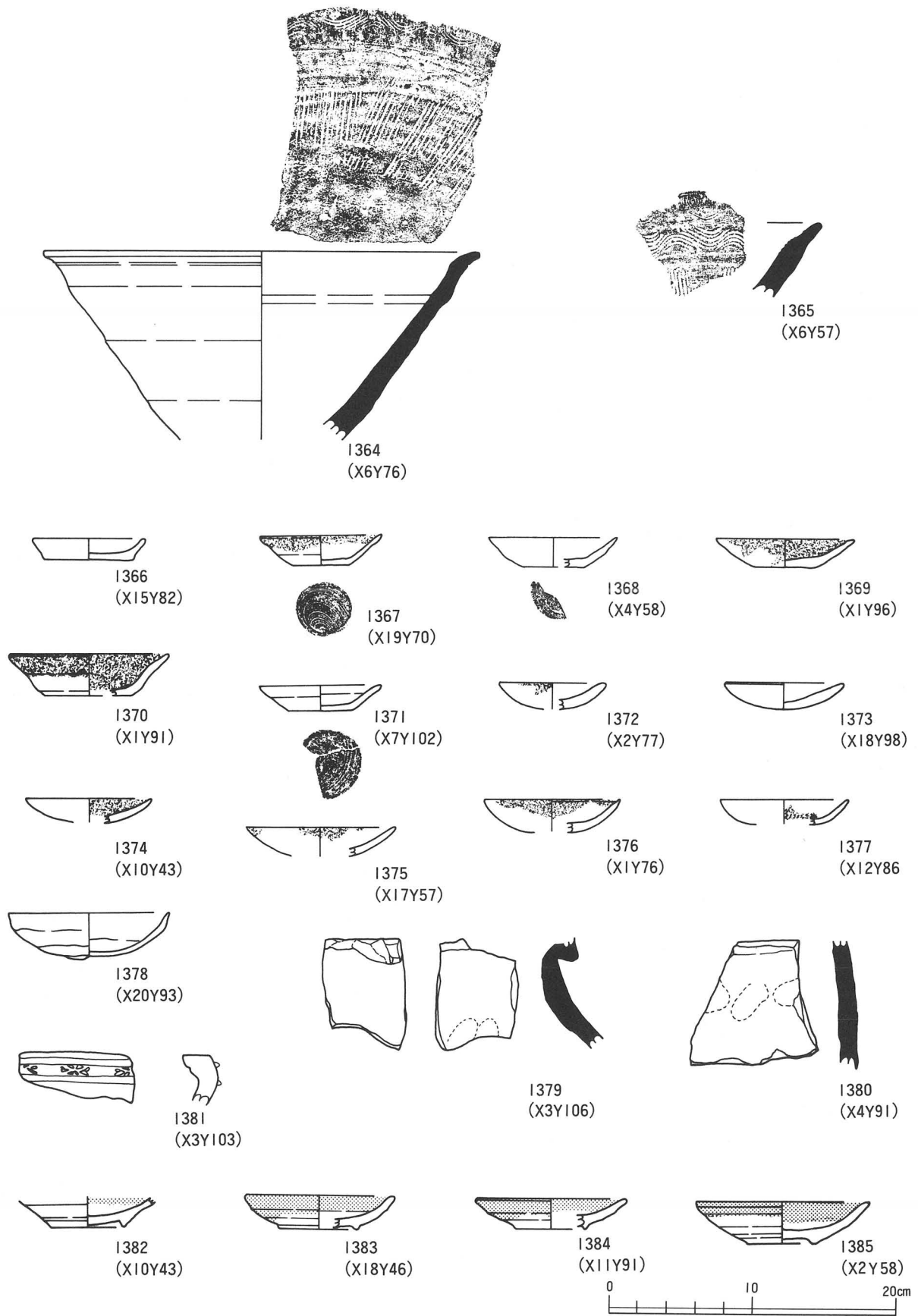
**土師皿**（第103図、図版第44の2）土師質の皿は、外底部に糸切り痕を残すロクロ系の1366～1371と手づくねもしくは型おこしによる非ロクロ系の1372～1378に大別され、帰属年代は1366が14世紀末～15世紀前半、他は15世紀前半～16世紀代と思われる。また、1371・1373を除き、口縁部内外面を中心として煤、油煙痕が付着しており、燈明皿として使用されていた。1366は口径8cm・底径6cm・器高1.5cmを測り、口径と底径の差が小さく、体部は短く開く。色調は灰白色を呈し、胎土は精良で軟質。1367は口径8.5cm・器高2.0cmを測り、体部は直線的に立ち上がり口頸部でくびれる。色調は褐色を呈し、胎土は精良。1368は口径9.0cm・器高2.0cmを測り、体部は直線的に立ち上がり口縁端部は尖る。色調は褐色を呈し、胎土は精良。1369は口径9.5cm・器高2.0cmを測り、器面全体に煤、油煙痕が付着する。体部形状、色調、胎土は1368に似る。1370は口径11cm・器高3cmを測り、体部中位より口縁部に至りやや外反する。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は精良。1371は口径8.5cm・器高1.8cmを測り、体部は内湾気味に立ち上がる。色調は灰白色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。1372～1375は体部は穏やかに内湾して立ち上がり、体部と底部の境は不明瞭。口径及び器高は1372が7.5cmの2.0cm、1373は8.0cmの2.0cm、1374は9.0cmの1.5cm、1375は口径10.5cmの2.0cmを測る。色調はいずれも淡黄色を呈し、1372・1373はやや厚手に仕上げる。1376は口径9.5cm・器高2.0cmを測り、体部は内湾気味に立ち上がり口縁端部は尖る。色調は褐色を呈し、胎土には粗砂粒を含む。1377は口径9.0cm・器高1.8cmを測り、底部は偏平で体部は素直に立ち上がる。色調は灰白色を呈し、胎土は精良。1378は口径11cm・器高3.0cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、体部外面上半及び口縁部内面に横ナテ調整が施される。色調は白色を呈し、胎土は精良。

**その他**（第103図、図版第44の2）1379・1380は13世紀後半～14世紀前半代の八尾焼の大甕である。1379は口縁形状はN字状を呈し、色調は褐色を基調とする器面に、泡立つような黄緑色の降灰がかかり、胎土には大粒の砂粒を含む。1381は14世紀後半～15世紀前半代の瓦質の火鉢である。口縁は内方向に張り出す水平口縁で、下位には一条の弱い溝が巡る。口縁部外面には2条の凸帯を巡らせ、その間に花紋を連続押捺する。

#### (7) 近世の遺構外出土遺物

近世の遺物としては、越中瀬戸、肥前系、関西系、九州系などがある。

**越中瀬戸**（第103・104図、図版第44の3）器種は1382～1392が皿、1393は碗、1394は鉢、1395・1396は摺鉢、1397は袋物で、帰属年代はいずれも16世紀後半～17世紀前半の範疇にある。1382～1389はいずれも低い角度で直線的に立ち上がり、口縁部付近もしくは体部上位で僅かな段を形成する。釉は1382～1386が鉄釉、1387・1388は灰釉で、外底周辺及び内底面には施釉されない。釉は概して薄く粗雑にかけられ、色調は鉄釉が紫味茶褐色、灰釉は淡黄色を呈し、胎土は1382・1386が暗灰色、他は褐色を呈する。口径及び器高は1383・1384が10.5cmの2.3cm、1385は12cmの3cm、1386は14cmの3.5cm、1387は10cmの2.5cm、1388は11.5cmを測る。1389は鉄釉の菊皿で、色調は茶褐色を呈する。1390は厚手の作りで、口径は10cmを測る。釉はくすんだ黄緑色の灰釉を基調とし、茶褐色の鉄釉が点彩される。



第103図 遺構外の出土遺物（珠洲・土師皿・八尾・瓦質火鉢・越中瀬戸）（1/4）

1391は見込みに菊花紋が押捺され、外底面には墨痕が認められる。1392は見込みに桜花紋が押捺され、外底部周辺には透明感のある灰緑色の灰釉が粗雑に掛けられる。1393は体部に不定形な凹みを有し、口径は10cmを測る。

1394は底径5.5cmを測り、底部の切り離しは回転糸切りである。釉は茶褐色を呈する鉄釉が薄く施される。1395は口縁部が肥厚し、端面が幅広に面を取り、端面下端に強いヨコナテ調整が入る。1396は口縁端面が外方向に引き出され、外面に緑帯をなす。釉はいずれも茶褐色を呈する鉄釉が薄く施される。1397は底部の切り離しが回転糸切りで、外側面には茶褐色を呈する鉄釉が粗雑に施される。

**肥前系**（第104・105図、図版第45の1） 器種は1398～1400が皿、1401～1411は碗、1412は燈明具である。1398は体部が下位で僅かな段を形成し、浅い角度で直線的に立ち上がる。釉は口縁内外面に暗灰黄色の灰釉が施され、帰属年代は16世紀後半～17世紀前半代である。1399は17世紀後半～18世紀前半代の色絵皿で、見込みには竹、草花紋が描かれる。1400は18世紀後半～19世紀初頭の染付皿で、草花が描かれる。1401は口径11cm・器高5.5cmを測り、体部は直線的に立ち上がる。釉は茶褐色の鉄釉が薄くかけられ、高台周辺は露胎である。帰属年代は17世紀前半～中葉である。1402は17世紀中葉～後葉の染付碗で、外側面には弱い線状の紋様が描かれる。釉は総釉で、内面は明緑灰色、外面は灰白色を呈する。1403は17世紀後半～18世紀前半代の碗で、体部は緩やかに立ち上がる。釉は口縁端面が茶褐色の鉄釉、他は透明感のある黄褐色の灰釉が掛けられる。1404～1406は17世紀後半～18世紀前半代の台付の碗で、畳付を除き総釉となる。釉は透明感のある淡黄色を呈し、1404には細かな貫入が入る。1407は17世紀後半～18世紀前半代の刷毛目の碗である。体部及び口縁部にくびれを有し、釉は黄色味を帯びる白濁色を呈し、畳付を除き薄く掛けられる。1408は18世紀前半～中葉の京焼き風の深皿で、見込みには呉須による山水紋が描かれる。釉は透明感のある淡黄色を呈し、細かな貫入が入る。1409・1410は18世紀代の染付の碗である。1411は17世紀後半～18世紀前半代の、蒟蒻印判による染付の碗である。1412は18世紀代の鉄泥灯火皿である。

**関西系**（第105図、図版第45の1） 1413は17世紀後半～19世紀代の鉄絵陶器の碗である。釉はくすんだ灰緑色を呈し、畳付を除き総釉となる。見込み及び外側面には鉄絵が施される。1414は19世紀代の急須の蓋と思われる。色調は茶褐色を呈し、体部外周には連続する指圧痕が認められ、内底の隅には小さな双孔が穿たれる。

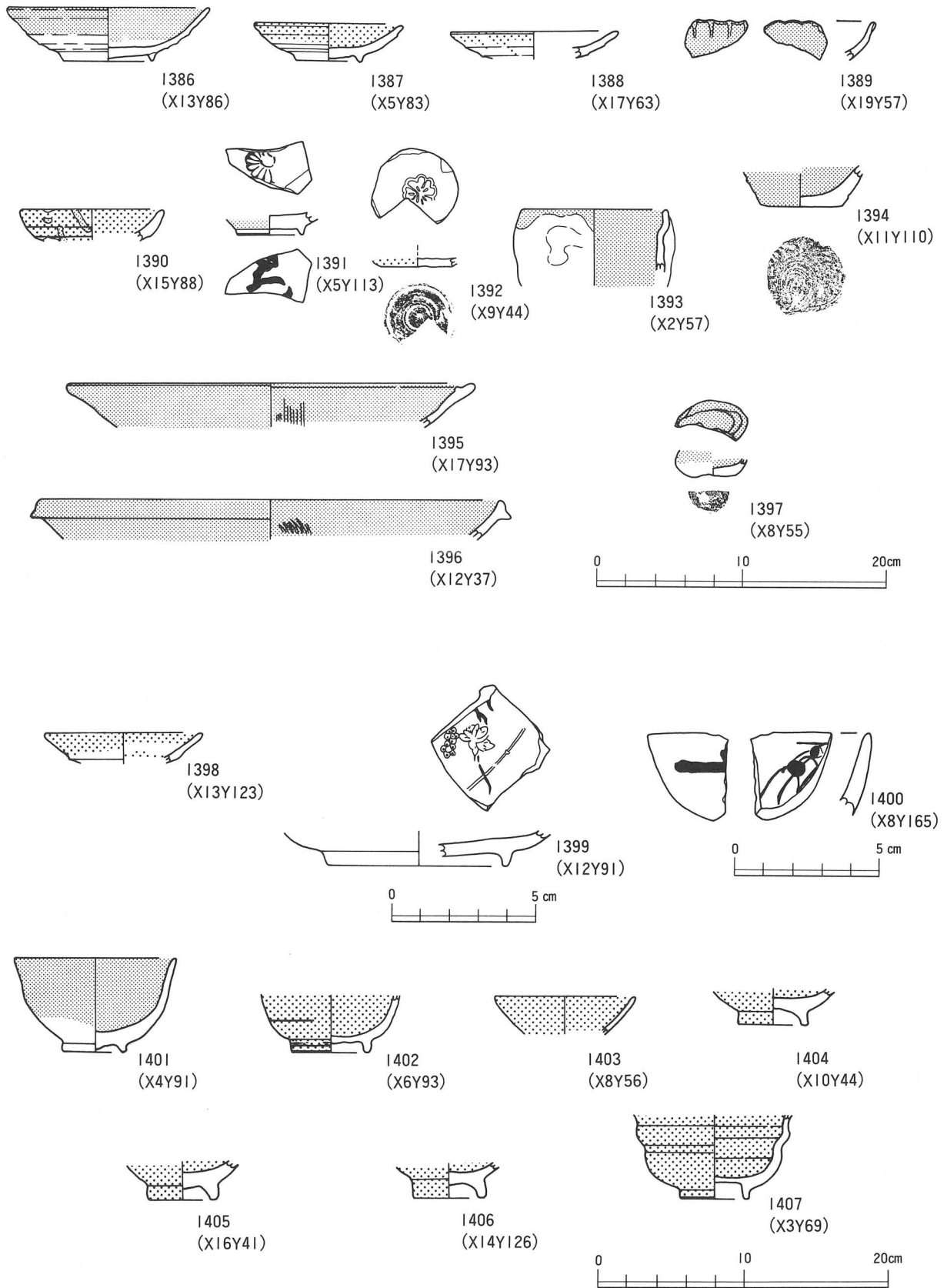
**九州系**（第105図、図版第45の1） 1415は鉄釉の小皿であろうか。底部の切り離しは回転糸切りで、底径は3.5cmを測る。釉は茶褐色を呈し、薄く粗雑に掛けられる。

**産地不明**（第105図、図版第45の1） 1416は16世紀末～17世紀前半代の灰釉の小瓶である。釉は灰色を呈し、釉むららが著しく、外底部周辺は露胎である。胎土は褐色を呈し、底部の切り離しは回転糸切りである。1417は17世紀後半～19世紀代の緑釉流し碗である。1418・1419は幕末～明治にかけてのもので、1418は色絵碗、1419は鉄泥の摺鉢である。1420・1421は火入で、釉は深みのある灰緑色の灰釉が外体部及び口縁部内面に薄く掛けられる。

#### (8) その他の遺構外出土遺物

**石製品**（第106図、図版第45の2） 1422・1423は長方硯である。1422は陸から海にかけて使用痕である細かな擦痕が認められ、背面には墨が付着する。石材は灰色を呈する砂岩である。1423は中央部が凹レンズ状を呈する程に使用され、側面には墨が付着する。石材はやや緑味の黒色を呈するシェール(SHALE)である。1424は粒子の細かい硬質砂岩の砥石で、仕上げ用と思われる。3面に渡り使用されており、細かい擦痕が横方向を中心として認められる。1425は石製の礎板と思われる。表面は扁平で裏面は中央部やや上がる。

**銅製品**（第106図、図版第45の2） 1426～1436は中国輸入の銅銭で、1426は唐銭、1427～1432は北宋銭、1433は明銭、1434～1436は判読不明である。名称及び初鑄年代は1426が開元通宝(621年)、1427は皇宋通宝(1039年)、1428は熙寧元宝(1068年)、1429・1430は元豊通宝(1078年)、1431は元祐通宝(1086年)、1432は紹聖元宝(1094年)、1433は永樂通宝(1408年)である。重さは1426が1.5g、1427～1432は2.1～2.8g、1433は2.3gを量る。1437は二つにわ

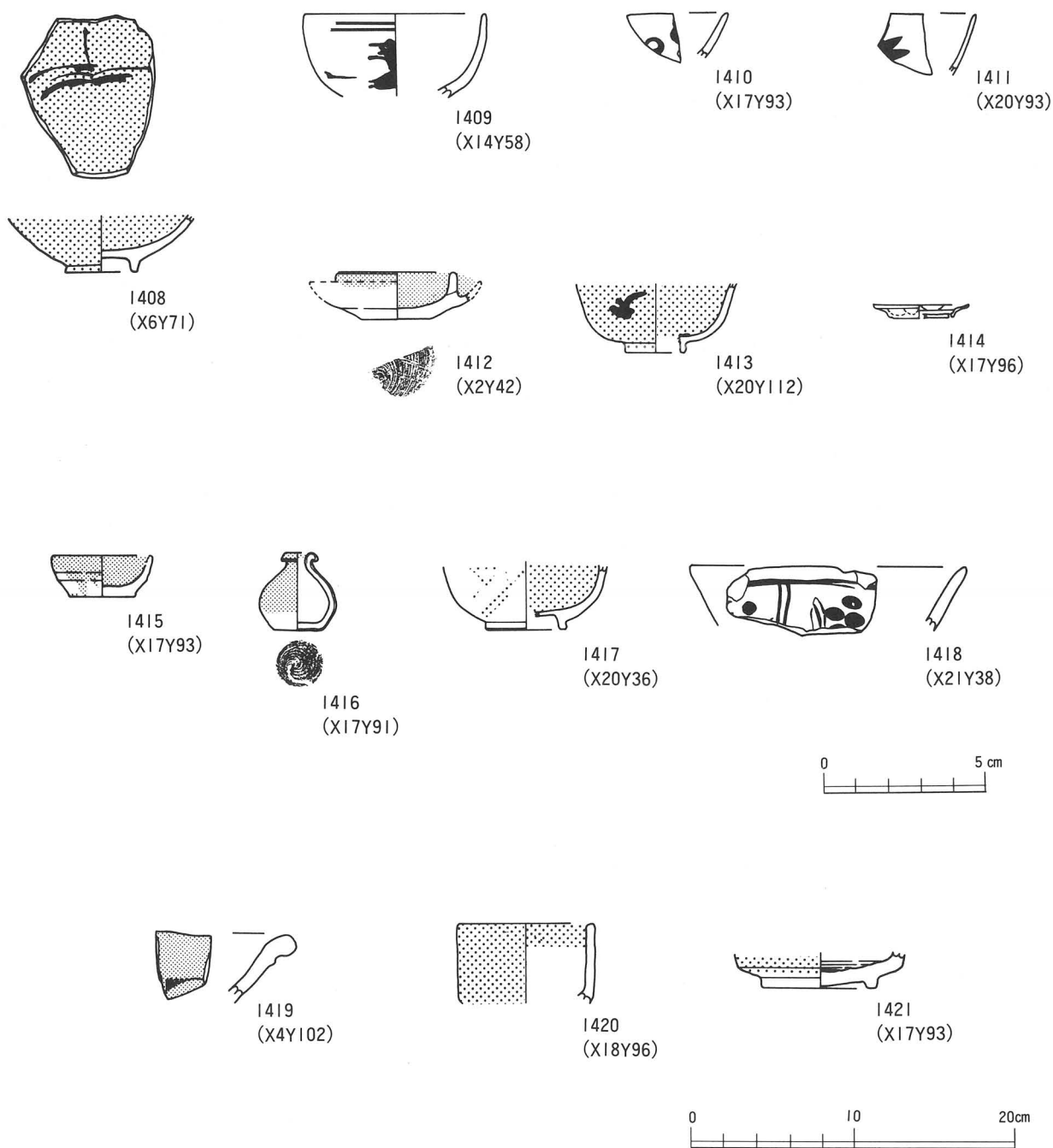


第104図 遺構外の出土遺物（越中瀬戸・肥前系）（1399・1400は1/2，他は1/4）

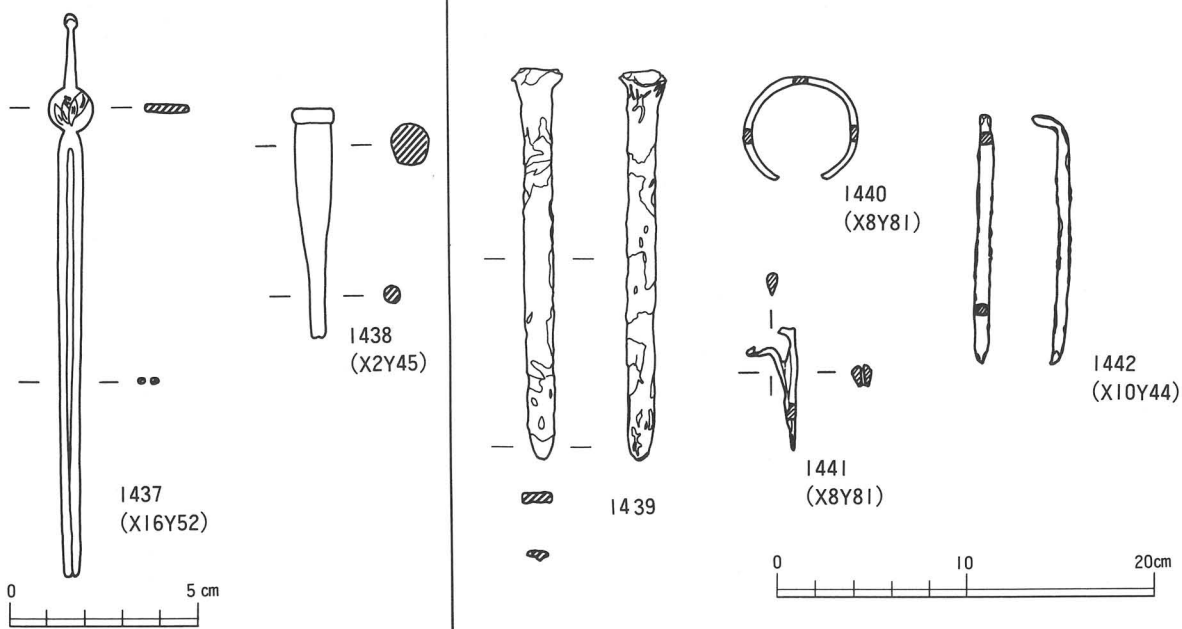
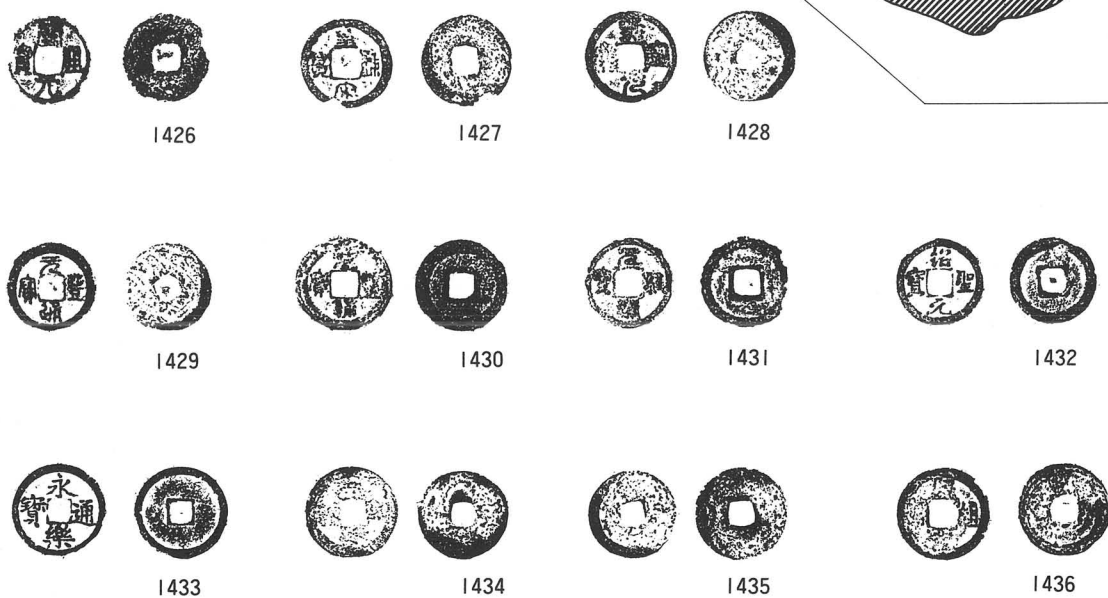
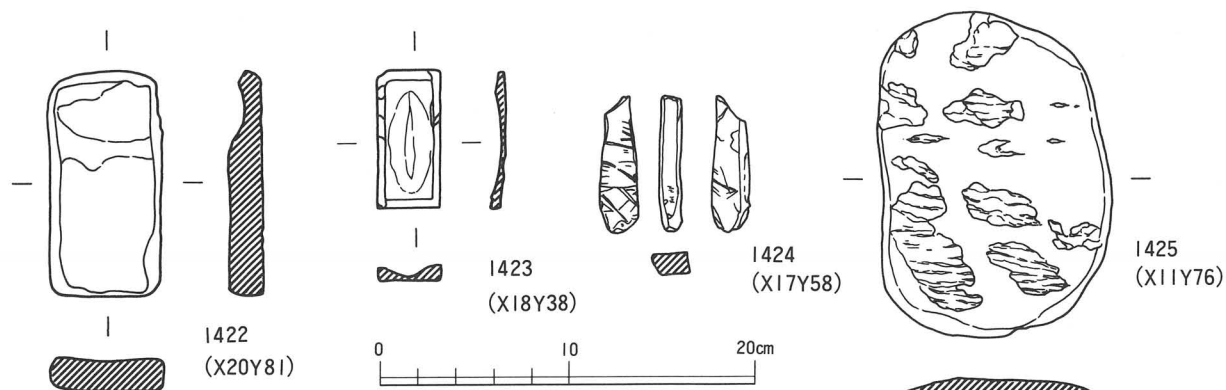


かれた脚を持つ簪である。頭部の先端には耳かきを有し、頭部には茗荷と思われる紋が表裏に陰刻される。1438は煙管の吸い口で、吸い口の基部は急激に細くなる。

**鉄製品** (第106図、図版第45の2) 1439はへら状の鉄製品である。長さ20.5cm・厚さ4mmを測り、表裏には顔料風の物質が1mm程度の厚さをもって付着する。1440は環状の鉄製品で径6cm・厚さ5mmを測り、1/7程度開口する。1441・1442は釘である。1441は体部下端を除き二つに割れ、頭部は全長の1/3程度折り曲げる。1442の頭部は釘幅と同一の幅で、伸展したまま叩かれ加工され、それを頭部としているようである。 (桐谷)



第105図 遺構外の出土遺物 (肥前系・関西系・九州系・産地不明) (1418は1/2, 他は1/4)



第106図 遺構外の出土遺物（石製品・銅製品・鉄製品）（1426～1438は1/2，他は1/4）

## IV 中世の遺構と遺物

**遺構** 堀により区画された空間は、調査区内に於いて東西長一町(96m)、南北現長38mの規模を持ち、区画内には掘立建物跡、井戸跡、溝、土坑が存在する。それらは規模、構造の側面に於いて較差を持ち、有機的に機能したと思われる。堀は二重に巡り、外堀にはL字状を呈する二条の堀が連結する。二重に構築された堀は雨水や湧水を滞水させ、防御機能の他に灌漑機能を有したとも推測される。また、外堀に西地区(Y107以西)に展開する一見規則的な溝群は、Y106以東に所在する堀と遺構埋土が酷似する事や、至近に散在する出土遺物より、堀と同時期に構築された防衛施設とも推測される。

掘立建物跡は4区画及び5区画より11棟検出され、何れも副屋的な小規模な物であり、区画相互の規模的差異は少ない。規模は2×2間、2×1間で、平面積は7.2~18.5m<sup>2</sup>の範疇にあり、柱間寸法、掘り込みはバラツキが多い。各建物間の配列関係は、公的な建物に多く見られる[コ]の字、[L]の字形の配列はとらず非相称的と言える。

井戸は5区画に集中して鑿井され、掘り込みが湧水層まで達する物、滞水層まで穿たれる物に二別される。前者の井戸工法には縦板組隅柱横棧どめ、縦板組横棧どめ、素掘井戸が有り、後者は曲物を埋設し水溜めとした物である。井戸場所は何れも微高地上を避ける様に鑿井され、湧水層、滞水層までの深淺が工法、場所を規定する様である。

区画内に存在する溝は掘り込みが浅く、堀に連結するもの、概ね堀に沿うか直行するものがあり、排水溝もしくは区画溝が想定される。土坑は規模、形態がバラエティーで、円形基調の物が主となり、出土遺物は少ない。

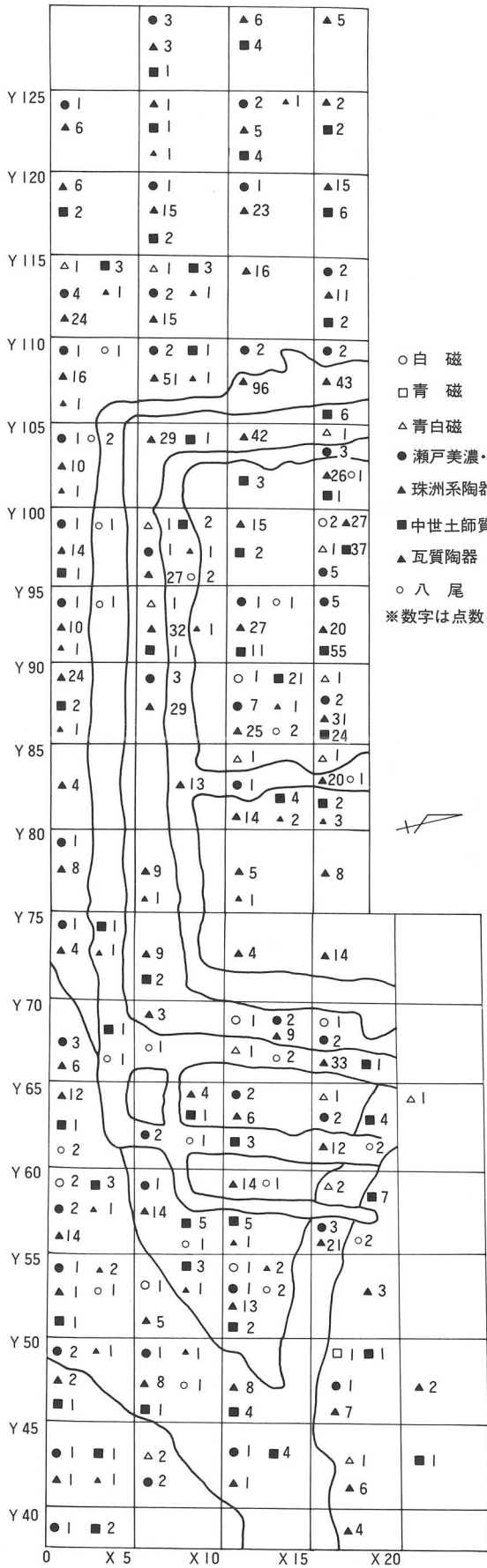
以上概略を述べた遺構群は一般に方形館と呼称され、中世在地領主の居館と考えられている。しかしながら当遺跡は部分的な発掘に止まっており、全容を知るには至らない。従って今後の調査事例を踏まえ、更なる検討を加える必要がある。なお、機能年代は土器組成(第2表)より14世紀~16世紀前半を想定して大過無いと思われる。

**遺物** 遺跡より採取された中世陶磁器の組成、出土位置を数値化する事は、その遺跡の性格や空間利用を考察する上で有効な指標になると考えられる。本遺跡では数値化に際し、他の遺跡でも共通な一次的な数値である破片数を用いた。この場合破片化の度合いにより差が生じ、各数値は原理的に指數的な仮数値となる。しかし、組成比は元の比率に近似すると考えられ、概ねの傾向は把握できよう。

中世陶磁器の組成(第107図、第1~3表) 出土した陶磁器の種類及び破片数と比率(第3表)は、白磁9点(0.6%)・青白磁1点(0.07%)・青磁17点(1.0%)・瀬戸美濃86点(0.6%)・珠洲系陶器1068点(71%)・中世土師器259点(17.3%)・瓦質陶器30点(2.0%)・八尾焼29点(2.0%)となる。最も高い比率を示した陶器は、貯蔵具・調理具といった必須分野的な珠洲系陶器であり、かなり安定した供給が伺われる。逆に、奢侈的な輸入陶磁器は27点(1.67%)、付加分野的な天目茶碗は23点(1.5%)・瓶子は2点(0.13%)で、比較的低い比率に留まる。

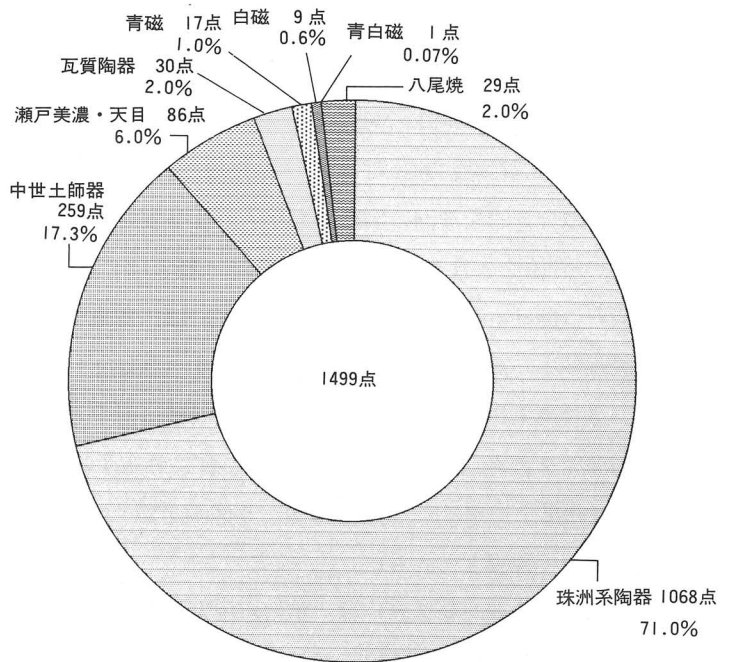
調査区内に於ける遺物の出土状況(第1表)は、各遺物とも濃淡はあるものの、調査区内全域に散在し、概して区画内は区画外より高い出土数値を示す。注目すべきは4・5区画である。5区画は面積が調査面積の7.1%を占めるのに対し、遺物出土比率は総体の28%を占め、面積に対する出土比率は平均値の約4倍となる。特に中世土師器の比率は高く約60%を占め、区画内の北方向寄りに密に分布する。それに比して4区画は面積が調査面積の4.6%を占めるのに対し、遺物出土比率は5.5%に留まり、5区画を除く調査区平均値を下回る。区画内の分布状況は5区画よりに集中し、他は極めて疎密と言える。

各陶磁器の年代観(第2表)は、年代が確定できる物のみを抽出して記載した。それによる各陶磁器の点数的ピークは、輸入陶磁器が14世紀後半~15世紀代、瀬戸美濃は15世紀~16世紀前半、珠洲系陶器は壺・甕が14世紀代、摺鉢は15世紀代、中世土師器は15世紀後半~16世紀代、瓦質火鉢は15世紀前半に認められる。従って、総体としてのピークも、概ね前述した年代に近似する事が予想される。(桐谷)



第1表 出土状況

年代	器形	世紀					総点数
		13	14	15	16	17	
白磁	皿		→ 2点	→ 2点	→ 5点		9点
青白磁	梅瓶		→ 1点				1点
青磁	碗		→ 1点	→ 9点	→ 1点	→ 1点	12点
	盤		→ 1点				1点
瀬戸美濃	平碗			→ 1点			1点
	折縁皿			→ 3点			3点
	小皿			→ 1点			1点
	天目碗		→ 1点	→ 10点	→ 1点	→ 11点	23点
	卸し皿		→ 1点	→ 1点			4点
	摺鉢			→ 2点	→ 2点		4点
	瓶子		→ 1点	→ 1点			2点
珠洲系陶器	合子		→ 1点				1点
	壺		→ 13点	→ 4点	→ 1点	→ 1点	19点
	甕		→ 4点	→ 1点	→ 21点	→ 5点	31点
中世土師器	摺鉢		→ 2点	→ 7点	→ 13点	→ 3点	25点
	皿		→ 1点	→ 25点			26点
瓦質陶器	火鉢		→ 3点				3点
八尾焼	甕		→ 2点				2点



第3表 組成比率

第107図 調査区内の中世陶磁器出土状況と組成表

## V まとめ

針原東遺跡は、射水丘陵から約2 km隔てた標高2.3m前後の沖積平野に立地する遺跡であり、平野部のわずかな微高地上に存在している。平成元年度から平成3年度にかけて実施された発掘調査によって、縄文時代晩期後半、弥生時代後期～古墳時代初め、奈良・平安時代、鎌倉～室町時代、江戸時代から近代にかけての各時代の及ぶ遺物や遺構が検出されている。

### 1 縄文時代

遺物は、調査区の東端に位置する Y2～40 区にかけて存在する河道跡である SD10 の下層から土器約100点と石器10点余りが出土し、Y41 以西では石器がわずかに点在していた。土器の器種には、壺・鉢・浅鉢・深鉢があり、所属時期は、晩期後半の大洞 C<sub>2</sub>～大洞 A 式にかけてのものである。北陸では当期の資料は多くはないが、類例は石川県下野遺跡を標識とした下野式〔吉岡1971〕や、最近の研究成果による〔久保1991〕、後続する長竹式の時期に該当する。富山県内では、上市町丸山 A 遺跡出土資料による 2 期（大洞 C<sub>2</sub>）、3 期（大洞 A 式）とされる時期に当たる〔酒井1976〕。

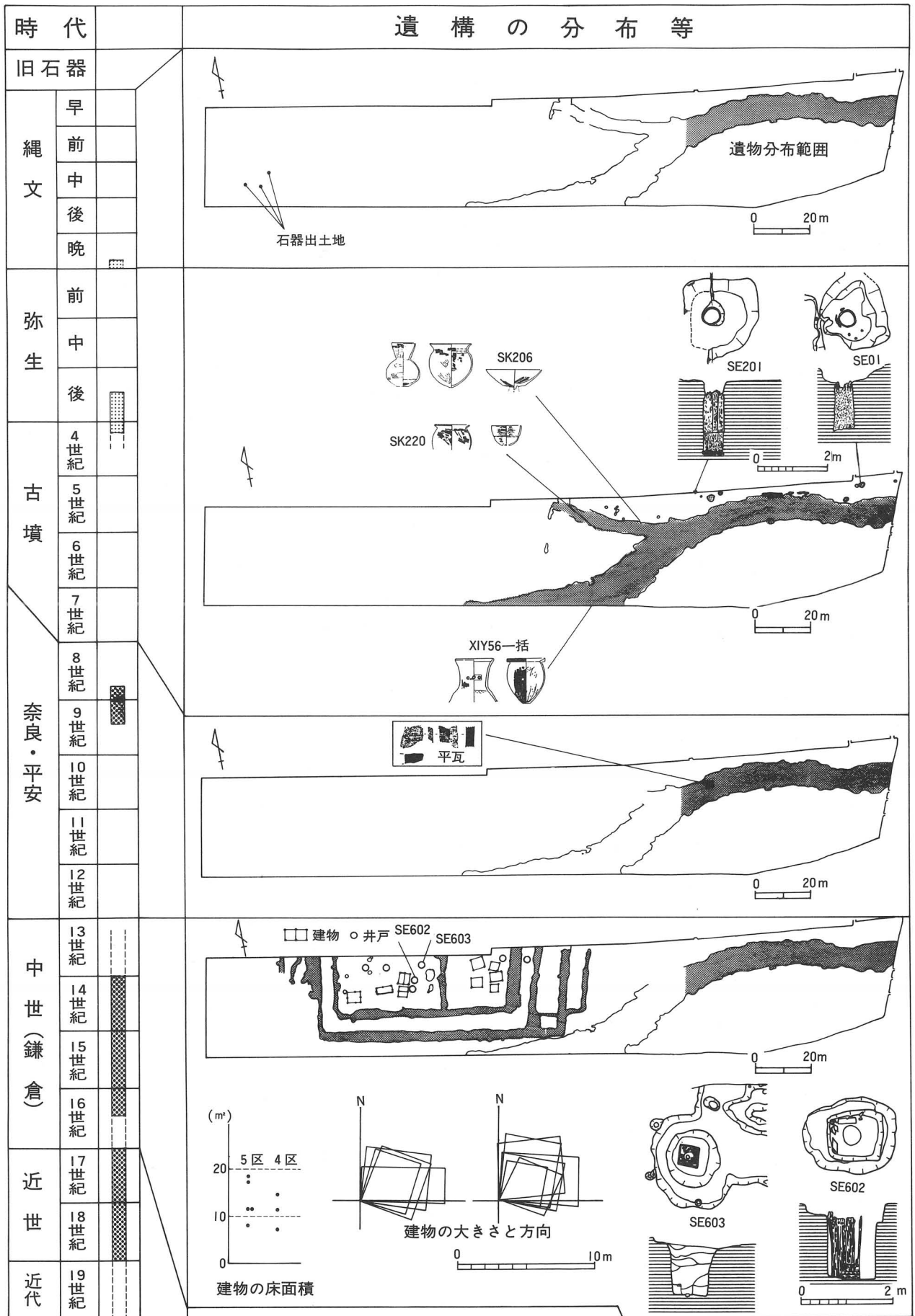
壺には有文精製の口縁部 2 例がある。2 期の鉢には、体部に眼鏡状沈線による工字文風の文様を入れるもの（第19図189）、或いは瘤状突起へ隆線を集約した大洞系の文様（第19図188・195）や、工字文をもつ鉢（第44図820）が含まれる。また隆線による工字文（第19図190～194）の鉢は 3 期にあたる。この他、2 期の丸山 A 遺跡出土の浅鉢例の縦位の綾杉文様が施されている。深鉢には、口縁部が外反する突帯文の深鉢 1 点があり、他は有文と無文粗製のもの二種がある。2 期の有文深鉢には、小突起を口縁部に付け体部上半に千本科草本茎による太い沈線によって、横位の重菱文状の文様を引いたもの（第19図203）や、太い沈線を引き口唇部に楯状具による押圧がしたものがある。また指頭による平行沈線を引いたもの（第20図208・216）は、3 期に含まれよう。

周辺の縄文晩期の遺跡には、当遺跡の西方3.0kmに位置する丘陵先端上に立地した中山中遺跡（別名；石坂遺跡、瑞穂農場遺跡）があり、晩期中頃の中屋式以降から後半の大洞 A 式にかけての土器の出土が報告されている〔木倉1959、上野1992〕。また、出土量はわずかであるが、谷間に立地した南太閤山 I 遺跡でも晩期中頃の中屋式の土器〔池野他1982〕が見つかっている。当遺跡では、平野部から遺構の確認はされていないが弥生時代に先行して晩期後半にすでに一定量の土器や石器を伴う生活跡が認められる。

### 2 弥生～古墳時代

弥生時代後期から古墳時代初めにかけての遺構・遺物は、X65 以東の SD10、SD10-B に沿って存在しており、中でも土坑や井戸は北側から多く検出された。幅10m程の大きさをもつ河道跡である SD10 の土層堆積状況は、縄文時代から弥生時代及び古代、中近世にかけて自然に徐々に埋まっていて、下層近くから多くの縄文土器や弥生土器が出土している。また幅 5 m 程の SD10-B は、弥生時代末にはすでに上層近くまで埋まっていて、延長30m程にわたって浅い溝状の窪みに土器を敷き詰めたように大量に廃棄されていて、SD10 に次いでかなりの量の土器が出土している。この出土土器は、弥生時代後期後半の法仏 II 式から古墳時代初めにかけての古府クルビ期までの時期のものであり、中でも主体をなすのは月影 II 式である。法仏 II 式から月影 I 式にかけての土器は、X1Y56 区周辺からまとめて出土した土器（第52・53図）や、試掘調査による 80 トレンチ出土（第 5 図111～113、115～118・129）の土器が上げられる。土器の中でも長頸壺の占める割合が高く、幅の狭い有段口縁の甕や、高杯においては杯部の口縁部から脚部までの長さの比率で、外反した口縁部の長さが短い SD10（第46図95）、SD10-B（第46図95）の高杯に時期差が表れている。

Y60 区以東において主体をなす土器は、月影 II 式にあたる時期である。遺構では、SD10、SD10-B、SE01、SE201、

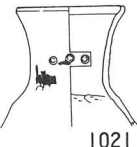
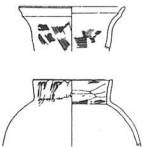

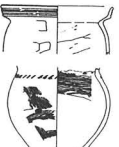
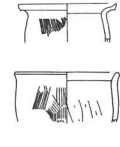


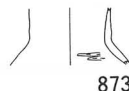
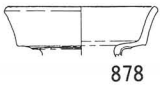

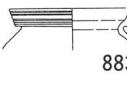

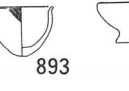







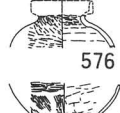
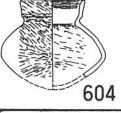
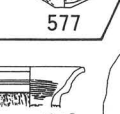

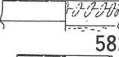

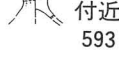

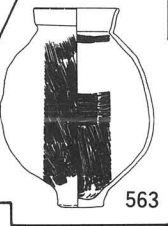



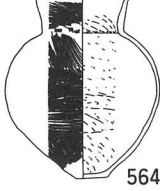
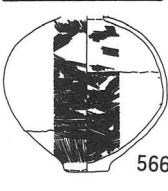
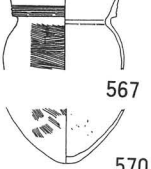
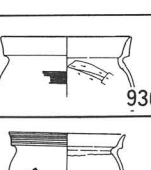


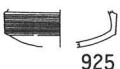
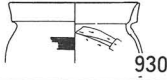



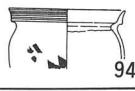
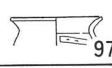


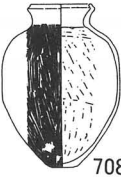




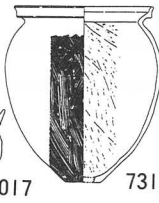



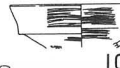



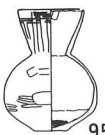
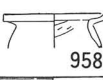
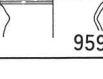

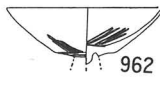


第108図 各時代の遺構分布

	縄文土器				石器			
縄文時代								
奈良～平安時代	須恵器				はじき土器・瓦			
中世 (鎌倉・室町時代)	珠洲		八尾		はじ土師皿		輸入陶磁器	
	瀬戸							
瓦質土器		木製品		古銭		石製品		
越中瀬戸		肥前系		伊万里(染付)		産地不明 土製品		
近世～近代 (江戸～明治)								

第109図 各時代ごとの主な出土遺物



	壺	甕	小型土器	鉢	蓋	高杯	器台				
XI Y56区 一括	 1021										
SD 10B	 873	 878	 871	 883	 885	 893	 897				
SE 01	 267	 277	 279	 274	 275	 267					
SE 201	 576	 604	 577	 595	 582	 586	 593				
SK 61	 556	 563	 561	 559			 558				
SK 62	 564	 566	 567	 570	 565	 572					
SD 200 203		 925	 930		 933						
SK 201 211	 707	 968	 940	 971	 947	 972					
包 含 層	 708	 605	 1016	 720	 1017	 731	 618	 129	 729	 1018	 630
SK 220			 974	 975							
SK 206	 954		 958	 959	 955		 962				

0 10 20 30 40 cm

第110図 出土地点ごとの器種

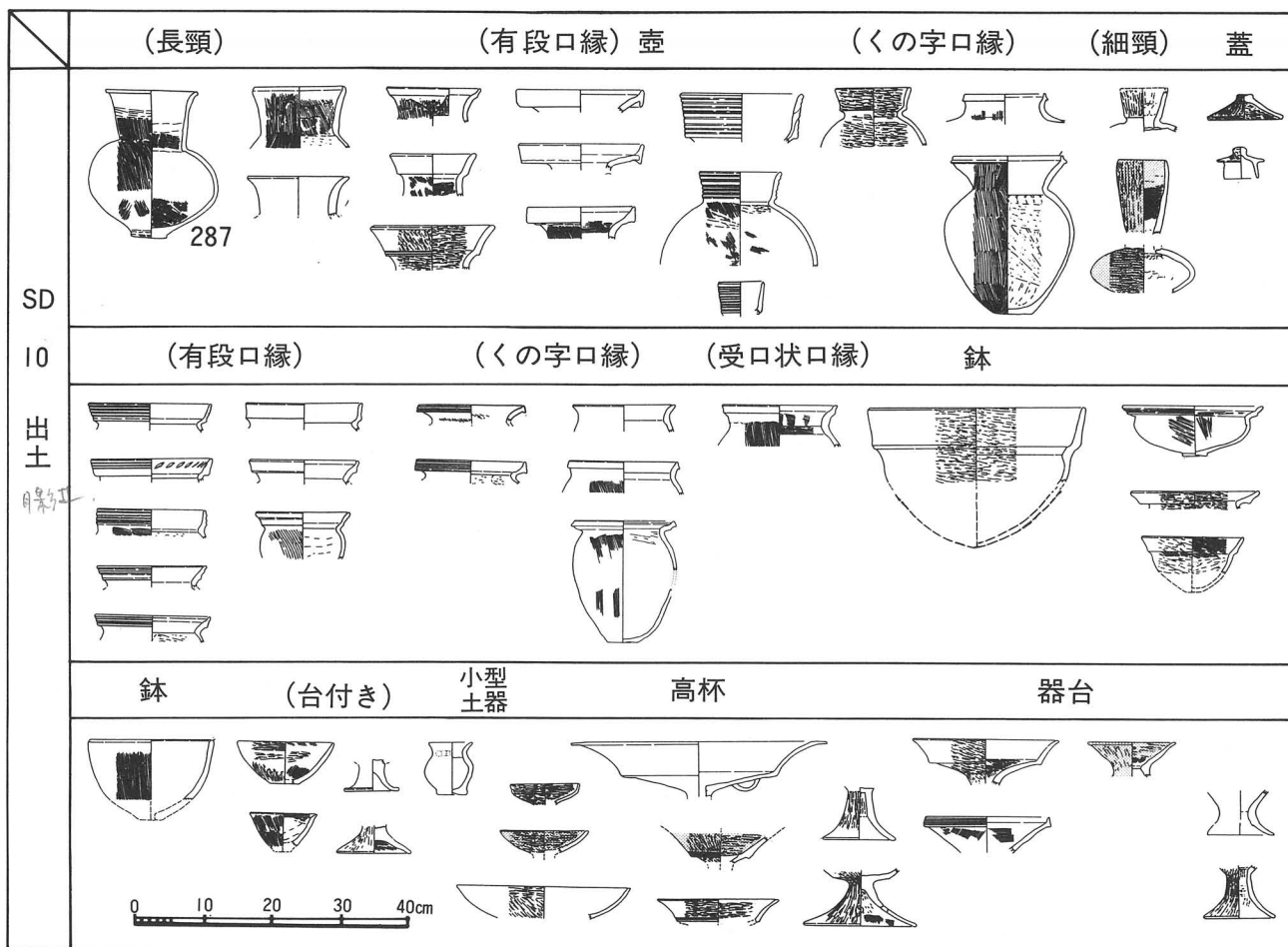
SK21・62、SD200、SK201・211 から出土した土器が該当する。後続する古墳時代初めの古府クルビ期の時期の主な遺構は少なく、SK206・220 の出土土器である。

県内を初めとした北陸の弥生時代の遺跡の動向は、後期になって遺跡数が大幅に増加する傾向が知られており、後期でも後半に集中している。しかし、県内では、後続する古府クルビ期の遺跡数は少なく、最近では中核的な遺跡が突然断絶する理由の一つとして水田の老朽化〔樫田1994〕が考えられる。

当遺跡の周辺 2 km の範囲内における弥生時代後期から古墳時代初めにかけての遺跡は、西方に中山南遺跡、中山中遺跡、三谷遺跡があり、北方に戸破若宮遺跡・鷲塚村中遺跡があり、東方に西二俣遺跡の所在が知られている。各遺跡の時期は、月影Ⅰ・Ⅱ式の時期を中心に最も遺跡数が増加していて、平野部を望む丘陵の縁辺上や平野にかけての一带に集落が形成されている。

### 3 奈良・平安時代

奈良時代後半から平安時代前半の遺物は、SD10 の上層を中心に検出されており、試掘調査対象地内からも散発的に出土しているが、明確な遺構は検出されていない。須恵器では供膳具の杯と貯蔵具の壺・横瓶・甕が出土しており、土師器では煮沸具の鍋が出土しているにすぎない。遺物の中に 1 点であるが還元炎焼成した灰青色の平瓦が出土している。平瓦の凸面について離れ砂から県内の出土例を参考にすると、瓦の時期は奈良時代後半にあたとみられる。これまでに周辺遺跡から瓦は出土しておらず、どのような経緯で遺跡に持ち込まれたのか明らかでない。県内では古代の瓦の出土例は窯跡を含めて 35 例と少なく〔西井1987〕、廃寺や国分寺、国府関係遺跡以外の遺跡ではいずれも 1～数点と出土数量が少なく、瓦が出土した遺跡の性格も明らかでない。



第111図 SD10 出土の器種

#### 4 中世

中世の遺構・遺物については先のIV章に記載されているとおりである。調査区内から検出された東西長一町（96m）、南北現長38mの規模をもつ区画は、出土遺物から14～16世紀前半にかけて機能したもので、中でも15世紀前半から半ばを中心とした一般に方形館と呼ばれる中世在地領主の居館と考えられている。二重の堀に囲まれた東側の4区と1.5倍の広さを有する西側の5区での掘立柱建物規模には床面積の比較でも大きな差はなくいずれも小規模な建物である。

県内では、発掘調査された館跡として福野町寺家新屋敷館跡の報告がある〔安念他1988、山本他1989〕。二次にわたる調査によると、幅5～7m、深さ2.5m程の堀の北辺が74mで、東辺で61mの大きさをもつ長方形の区画をなし、幅8～10mの土塁が北側と東側に遺存していた。堀内の出土遺物から存続時期は、14世紀とされ堀や土塁の規模から南北朝の平地城館として据えられている。

周辺の東海北陸自動車関連の発掘調査による福光町胡麻堂遺跡 A3 地区では〔岸本他1992〕、14世紀後半から15世紀初めの幅1.0～2.5mで、深さ10～50cmの溝で囲まれた東西約42m、南北約31mの大きさの方形空間を館跡と考えている。溝内の西側部分に掘立柱建物と広場、東側部分に竪穴状土坑と井戸が配され、溝の東西の幅の狭い部分を出入口とし、四周から土塁や板塀は検出されていないが、それらが想定されている。また、福野町田尻遺跡では、12世紀後半～13世紀前半にL字状に巡る幅1.0～1.5mの溝で囲った一辺40m以上の長さをもつ大きな区画をもち、空間内に3間×4間以上の大きさで、床面積が約80～320㎡の掘立柱建物を伴う。更に13世紀後半から14世紀には、幅0.5～1.0mの溝による一辺が20m程の小さな区画を設け、方形の空間内には主に3間×4間の大きさで、床面積が40㎡程度の大きさの掘立柱建物を伴っていて、時期が新しくなると区画と建物の規模が小規模となっている。

更に福光町胡麻堂遺跡 CI 地区では〔岸本他1990〕、調査地区内での溝幅が2.7m、深さ80cmで、長辺41m、南辺16mの大きさをした「コ」の字状に巡る区画内から掘立柱建物や井戸、土坑などが検出されていて、15・16世紀を中心とした「ロ」の字状をした方形館と推測されている。

小杉町白石遺跡では、調査地内での長さが50m程で幅4m、深さ1.2m程のL字状にめぐる溝に囲まれた空間から井戸22基、掘立柱建物3棟などが検出されており館跡とみられている〔原田他1993〕。

このように最近の発掘調査により、堀や溝で方形やL字状に囲った部分から掘立柱建物や井戸、土坑などを配している館跡と考えられている調査例が明らかにされている。当遺跡では幅1.5～4.5m、深さ1.5～3.0mの外堀と内堀の間に土塁は存在していないが、堀に平行する遺構の空白部に土塁が存在した可能性は否定できない。内側の空間を更に大小に二分しているが検出された掘立柱建物はいずれも他遺跡例に比べても小規模なものであった。館跡としては、規模や堀形態をよく留めているがどのような性格の館跡であったか今後の調査例を待ちたい。（上野）

## 参考・引用文献

- 安念幹倫・林 浩明・高岡 徹 1988 『寺家新屋敷館跡』 福野町教育委員会
- 石井 進・萩原三雄 1991 『中世の城と考古学』
- 石川県考古学研究会 1986 「シンポジウム『月影式』について」
- 上野 章 1991 『小杉町中山中遺跡発掘調査報告概要』 小杉町教育委員会
- 上野 章 1992 『小杉町白石遺跡発掘調査報告概要』 小杉町教育委員会
- 上野 章 1992 『小杉町戸破若宮遺跡発掘調査概要』 小杉町教育委員会
- 上野 章・原田義範 1992 『小杉町伊勢領遺跡発掘調査概要』 小杉町教育委員会
- 上野 章・原田義範 1992 『小杉町埋蔵文化財調査一覧 1991年度』 小杉町教育委員会
- 加古千恵子・岸本一宏・平田博幸 1990 『山垣遺跡』 兵庫県教育委員会
- 檜田 直 1994 「弥生水田の老朽化」『シンポジウム古代の水田を考える』 帝塚山考古学研究所
- 亀井明德 1986 『日本貿易陶磁史の研究』
- 木倉豊伸 1959 「郷土文化の黎明」『小杉町史』 小杉町
- 岸本雅敏・宮田進一・神保孝造・安念幹倫・北川美佐子・高梨清志・酒井聖子 1990 『東海北陸自動車関連発掘調査概報(1)』 財団法人富山県文化振興財団
- 岸本雅敏・宮田進一・神保孝造・安念幹倫・島田美佐子・河西健二・佐藤聖子・佐賀和美・田中美智子・伊佐智法・山本慎子 1992 『東海北陸自動車関連発掘調査概報(3)』 財団法人富山県文化振興財団
- 旧芝離宮庭園調査団 1988 『旧芝離宮庭園』
- 久々忠義 1986 「富山県における『月影式』土器について」「シンポジウム『月影式』について」 石川県考古学研究会
- 久保正弘 1991 「北陸地方西部の大洞 C<sub>2</sub>～大洞 A 式直後の土器編年」『東日本における稲作の受容』 東日本埋蔵文化財研究会
- 酒井重洋 1982 「上市町眼下新丸山 A 遺跡」『大境』 第6号 富山考古学会
- 田嶋明人 1986 「土師器からみた古墳時代土器群の変遷」『漆町遺跡 I』 石川県埋蔵文化センター
- 手塚直樹・斉木秀雄他 1982 『長岡京古文化論叢』 中山修先生古稀記念事業会
- 富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学会 1993 『珠洲大畠窯』
- 西井龍儀 1987 「富山県出土古瓦一覧表」『北陸の古代寺院—その源流と古瓦—』 北陸古瓦研究会
- 原田義範・稲垣尚美 1993 『小杉町埋蔵文化財発掘調査一覧 1992年度』 小杉町教育委員会
- 山本正敏・林 浩明 1989 『寺家新屋敷館跡II』 福野町教育委員会
- 吉岡康暢 1971 「石川県下野遺跡の研究」『考古学雑誌』 第56巻4号 日本考古学会
- 吉岡康暢 1989 『珠洲の名陶』 珠洲資料館
- 吉岡康暢 1989 『日本海域の土器・磁器—中世編—』 六興出版
- 若林喜三郎・里瀬七郎 1976 『珠洲市史』 第1巻 珠洲市役所



## 附章 自然科学的調査

針原東遺跡から出土した木製品の材同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

針原東遺跡（小杉町戸破所在）は、庄川と神通川に挟まれた射水平野に位置する。射水平野は、第2射水湖と呼ばれる湖が潟となり、埋積されて形成された沖積平野である（藤井 1988）。平野の周囲には、蜷ヶ森・小竹貝塚が所在し、同貝塚で行われた放射性炭素（ $^{14}\text{C}$ ）年代測定値は $4,800 \pm 200\text{y.B.P.}$ と報告された（木越・藤井 1965）。本遺跡は、この平野のほぼ中央部に立地している。

本地域周辺では、平野南部に接する射水丘陵で南太閤山遺跡を中心とする数多くの遺跡が調査され、炭窯や製鉄炉から検出された多くの炭化材について調査が行われている（島地ほか 1982；島地・林 1983a, 1983b, 1984；林 1988）。また、富山湾東岸にあたる魚津市の海岸付近や入善町沖には、海面上昇によって埋没した埋没林や海底林が発見され、詳細な調査が行われている（藤井・奈須 1988；魚津埋没林博物館 1992）。これらの埋没林とは成因がやや異なると考えられるが、本地域にも埋没林は認められる。大門町小泉遺跡では、縄文時代前期後半に比定される樹根が出土し、カシ類・クヌギ節・ハンノキ・クリが同定されている（林・島地 1982）。また、大門町布目沢東遺跡では、縄文時代後期末～晩期初頭の泥炭層が検出され、花粉・珪藻・植物珪酸体・種実遺体・流木等の調査が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社 1991）。これらの調査により、本地域の過去の植生や人間の木材利用の状況が徐々に明らかになってきている。しかし、建築部材や木器の用材については、上市町江上遺跡・東江上遺跡・中小泉遺跡・正印新遺跡・飯坂遺跡で行われた調査事例（飯島・長谷川 1984）以外知られていない。そのため、本地域における建築部材や木器の用材選択については、時代毎や器種毎による特徴が十分に把握されているわけではない。

針原東遺跡では、これまでの発掘調査により、弥生時代の井戸址・土坑、中世館跡とそれに付随すると考えられる溝状遺構・土坑等が検出されている。また、掘立柱建物跡や井戸址も検出された。これらの中には当時の構造材が残存しているものも認められ、土坑中からは漆器椀や箸等の木製品も検出されている。

今回の分析調査では、掘立柱建物跡から検出された柱根や井戸の木杵等の建築部材、漆器や箸等の木製品を対象として材同定を行い、弥生時代及び中世の用材選択の特徴を把握する。

### 1 試料

試料は、井戸杵や柱材等の建築部材、曲物や箸状木製品等の木器など99点（No.1～99）である。試料は、その多くが中世のものと考えられているが、SE-01とSE-201井戸の試料は弥生時代のものとされている。

### 2 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ゴム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定した。

### 3 結果

99点の試料は、11種類に同定された（表1）。各種類の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、学名・和名は「原色日本植物図鑑 木本編〈I・II〉」（北村・村田 1971, 1979）にしたがい、一般的な性質については「木の事典 第1巻～第17巻」（平井 1979-1982）も参考にした。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科

試料番号：1-21、23-31、35-41、56、59-61、63-70、N1-7、11、12、19、22-24、27、29、30

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

スギは、本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

・クロベまたはアスナロ (*Thuja standishii* (Gord.) Carriere and/or *Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.)

ヒノキ科

試料番号：22、34、57、58、62

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。晩材部には樹脂細胞が認められ、その水平壁にはじゅず状の肥厚が認められる。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型からヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。以上の特徴からクロベかアスナロのいずれかと考えられるが、特定するには至らなかった。

アスナロは、本州・四国（徳島県）・九州に分布する日本特産の常緑高木である。材は軽軟で加工性は中庸である。耐朽性が高く、建築・土木・器具材など各種の用途が知られている。一方、ネズコは本州・四国に分布する常緑高木で、日本特産種である。材は軽軟で加工は容易、強度は小さいが保存性は高い。建築・家具・器具材など各種の用途が知られている。

・ハンノキ属の一種 (*Alnus* sp.) カバノキ科

試料番号：33

散孔材で、管孔は放射方向に2～4個が複合または単独、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は段階穿孔を有し、段数は10～30、壁孔は密に対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～30細胞高のものと集合放射組織とがある。柔組織は短接線状～散在状。年輪界はやや不明瞭。

ハンノキ属は国内に約10種が自生し、ハンノキ (*Alnus japonica* (Thunb.) Steud.) の仲間 (=ハンノキ亜属) とヤシャブシ (*A. firma* Sieb. et Zucc.) やミヤマハンノキ (*A. crispa* (Aiton) Pursh subsp. *maximowiczii* (Call) Hult) の仲間 (=ヤシャブシ亜属) に分けられる。後者についてはミヤマハンノキ属 (*Duschekia*) として独立させる見解もある。いずれも根に根瘤菌が共生しているため痩地でもよく生育する。材はやや軽軟～やや重硬で、加工は容易、薪炭材や各種器具材などとして用いられるほか、炭が黒色火薬の原料となる種類もある。

・ブナ属の一種 (*Fagus* sp.) ブナ科

試料番号：53、55

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合、横断面では多角形、管壁厚は中庸～薄く、分布密度は高い。道管は単および段階穿孔を有し、段階穿孔の段数は10前後、壁孔は大型で対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性III型、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。柔組織は短接線状および散在状。年輪界は明瞭～やや不明瞭。

ブナ属には、ブナ (*Fagus crenata* Blume) とイヌブナ (*F. japonica* Maxim.) の2種類がある。ブナは北海道南部（黒松内低地帯以南）・本州・四国・九州に、イヌブナは本州（岩手県以南）・四国・九州の主として太平洋側に分布する。イヌブナのほうがブナより低標高地から生育し、またブナのような大群落をつくることはない。ブナは、日本の冷温帯落葉樹林を代表する樹木で、かつては東日本の山地に広く生育していたが、近年、植林などによって生育地が激減している。材はやや重硬で、強度は大きい加工はそれほど困難ではなく、耐朽性は低い。木地・器具・



家具・薪炭材などの用途があったが、最近では各種の用途に用いられている。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.) ブナ科

試料番号：N21、26

環孔材で孔圏部は、1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形、小道管は管壁は中庸～厚く、横断面では角張った円形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が2年目に熟するグループで、クヌギ (*Quercus acutissima* Carruthers) とアベマキ (*Q. variabilis* Blume) の2種がある。クヌギは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州に、アベマキは本州（山形・静岡県以西）・四国・九州（北部）に分布するが、中国地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材、楳木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。アベマキはクヌギによく似た高木で、樹皮の Cork 層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るが、さらに重い。用途もクヌギと同様であるが、樹皮が厚いため薪材にはむかず、炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.) ブナ科

試料番号：N8-10、25

環孔材で孔圏部は、1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ (*Quercus mongolica* Fischer ex Turcz.) とその変種ミズナラ (*Q. mongolica* Fischer ex Turcz. var. *grosseserrata* (Bl.) Rehder et Wilson)、コナラ (*Q. serrata* Murray)、ナラガシワ (*Q. aliena* Blume)、カシワ (*Q. dentata* Thunberg) といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田以南）・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (*Q. acutissima* Carruthers) に次ぐ優良材である。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科

試料番号：43-46、49、50、52、N20、28

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、ともに管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道西南部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、楳木や海苔粗朶などの用途が知られている。

・ヤマザクラ (*Prunus jamasakura* Sieb. ex Kozdumi) バラ科

試料番号：42

環孔性を帯びた散孔材で管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～5細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状および散在状。年輪界はやや不明瞭。

ヤマザクラは、本州(関東地方以西)・四国・九州の山中に生育する落葉高木である。材の硬さは中程度～やや重硬・強靱で、加工は容易、保存性は高い。各種器具材をはじめ、機械・家具・楽器・建築・薪炭材など様々な用途が知られている。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科

試料番号：54

散孔材で管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3(5)個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列し、肉眼ではリップル・マークとして認められる。柔組織はターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

トチノキは北海道(南西部)・本州・四国・九州の主として谷沿いの肥沃地に生育する落葉高木で、東北地方に多く九州には少ない。材は軽軟で、加工・乾燥が容易で、耐朽性は小さい。器具・家具材や旋作材・木地などに用いられる。

・リョウブ (*Clethra barbinervis* Sieb. et Zucc.) リョウブ科

試料番号：47

散孔材で管壁厚は中庸、横断面では角張った円形、単独。道管は階段穿孔を有し、段は多数、壁孔は交互状～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～4細胞幅、1～30細胞高。柔組織は散在状。年輪界はやや明瞭。

リョウブは北海道(渡島半島)・本州・四国・九州の主として陽好地に生育する落葉高木である。材はやや重硬で、割裂しにくく加工はやや困難、器具・旋作・玩具・薪炭材などに用いられる。

・トネリコ属の一種 (*Fraxinus* sp.) モクセイ科

試料番号：51、N13-18

環孔材で孔圏部は2～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列する放射組織は同性(～異性Ⅲ型)、1～3(5)細胞幅、1～40細胞高であるが、20細胞高前後のものが多い。柔組織は周囲状およびターミナル状、時に階層状の配列を示す。年輪界は明瞭。

トネリコ属には、シオジ (*Fraxinus spaethiana* Lingelsh.)、トネリコ (*F. japonica* Blume)、アオダモ (*F. serrata* (Nakai) Murata) など約8種が自生する。このうちヤマトアオダモ (*F. longicuspis* Sieb. et Zucc.)・マルバアオダモ (*F. sieboldiana* Blume)・アオダモは北海道・本州・四国・九州に、ヤチダモ (*F. mandshurica* Rupr. var. *japonica* Maxim.) は北海道・本州(中部地方以北)に、トネリコは本州(中部地方以北)に、シオジは本州(関東地方以西)・四国・九州に分布する。いずれも落葉高木である。材の性質は種によって異なるが、一般には中庸～やや重硬で、靱性があり、加工は容易で、建築・器具・家具・旋作・薪炭材などの用途が知られる。

#### 4 考察

今回同定した木製品は、大きく建築・土木材と木器に分類できる(表2)。このうち、建築・土木材では井戸材、柱根、杭の3種類について同定を行った。これらの同定結果を見ると、試料の多くはスギであった。スギが建築材をはじめとする木製品等に多く用いられる傾向は、県内の上市町江上遺跡・東江上遺跡・中小泉遺跡・正印新遺跡・飯坂遺跡でも認められる(飯島・長谷川 1984)。このような傾向は富山県だけでなく、北陸地方の各県で見られ(川村

1983；嶋倉 1979、1987；鈴木・能城 1988、1989、1990)、鈴木・能城 (1990) はこのようなスギに代表される北陸地方を「スギ文化圏」と呼んでいる。今回の結果は、これまでに見られた傾向に一致しており、北陸地方一帯でスギが広く利用されていたことを示している。

今回スギに同定された木製品は、弥生時代及び中世の井戸材、曲物、桶、箸状遺物である。これらの木製品は、過去の調査事例を見ると、針葉樹材が多く用いられる傾向がある。(島地・伊東 1988)。したがって、今回確認されたスギの多用は、これまで知られている各遺跡の事例にみられた用材選択の傾向と一致している。今回同定した中では、井戸材でスギ以外にクロベまたはアスナロ、ハンノキ属(柱痕)、クヌギ節、コナラ節、クリ、トネリコ属が同定されている。特に弥生時代とされる SE-201 では、スギ以外のこれらの木材が多く使用されている。この井戸は、中世の井戸が曲物で作られていたのに対し、木の中心部をくり貫いて作られた井戸であり、製作方法が異なる。使用される木材の違いは、時代による用材選択の違いや井戸の製作方法の違いによって選択する樹木も異なっていたことを示唆する。ただし、SE-201 ではスギも一部使用されており、即断はできない。今後さらに資料蓄積を行った上で再検討する必要がある。

スギに次いで多いクリは、同定された全てが建築・土木材であった。クリは国産材の中でも強度が高く、耐朽性もある。そのため、柱材等の建築部材に適した材といえる。北陸地方では、各時代の住居址等から出土した柱材とされる試料にしばしばクリが同定される(例えば、藤 1986；能城・鈴木 1989など)。また、北陸地方の縄文時代に象徴的な巨大木柱列が全てクリで作られていることはよく知られており(古池 1986、藤 1986)、このような用材が縄文時代から北陸地方で広く行われたことを示している。北陸地方では、このようなクリ材の持つ特性が古くから認識されていたことが示唆される。また、ヤマザクラとリョウブがクリと共に柱根に1点ずつ同定されている。いずれの材も強度があり、柱材としても使用可能であったと考えられる。しかし、クリではなくこれらの種類が選択された背景については不明である。

漆器にはブナ属とトチノキが同定されたが、これらの木材が漆器に用いられる例は全国的にみられる(島地・伊東 1988)。また、これらの木材はいずれも加工が容易であり、現在でも漆器の木地として用いられる。これらの結果は漆器の木地に対する価値観が過去から現在まで変わっていないことを示唆する。

今回同定された木材は、全体で11種類になる。これらのうち、多く同定されたスギとクリは、大門町布目沢東遺跡で行われた古墳時代以降の花粉分析でも認められている。スギとクリ以外にも、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属(クヌギ節・コナラ節)、トチノキ、トネリコ属の花粉化石が認められている(パリノ・サーヴェイ株式会社 1991)。また、近接する上野赤坂 A 遺跡、野田 A 遺跡、東山 II 遺跡、表野遺跡、南太閤山 II 遺跡や椎土遺跡等の生産遺跡で行われた古代の燃料材と推定される炭化材の調査では、多様な種類が同定されている(島地ほか 1982；島地・林 1983a、1983b、1984；林 1988)。その多くは落葉広葉樹で構成され、クスノキ科やヤブツバキ等の常緑広葉樹が少数混在する。これらの調査結果から、本地域では古墳時代以降、落葉広葉樹やスギを中心とする植生が卓越し、一部沿海地等には常緑広葉樹が生育していたことが推定される。また、現在県内の平野部では天然スギを見ることはできないが、スギが分布を拡大した時期には平野部にもスギが生育していたことが推定されている(魚津埋没林博物館 1992)。今回同定を行った木製品は、このような遺跡周辺や近隣の山々に生育していたと推定される樹木の中から、用途に応じて樹木を選択し利用したものと考えられる。

<引用文献>

- 林 昭三 (1988) 椎土遺跡出土木炭の樹種、「椎土遺跡・塚越貝坪遺跡発掘調査概要」、p.41-45、小杉町教育委員会
- 林 昭三・島地 謙 (1982) 埋没林の樹種、大門町埋蔵文化財報告第 5 集「小泉遺跡」、p.79-81、大門町教育委員会
- 平井信二 (1979-1982) 木の事典 第 1 巻～第 17、かなえ書房
- 藤井昭二 (1988) 富山県西部地域、日本の地質『中部地方 II』編集委員会編「日本の地質 5 中部地方 II」、p.147-149、共立出版株式会社
- 藤井昭二・奈須紀幸編 (1988) 海底林 黒部川扇状地入善沖海底林の発見を中心として、163p. 東京大学出版会
- 藤 則雄 (1986) 植物遺体、「石川県能登町 真脇遺跡 - 農村基盤総合整備事業能登東地区真脇工区に係る発掘調査報告書- (本文編)」、p.407 - 410、能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- 飯島泰男・長谷川益夫 (1984) 木製品の樹種、「北陸自動車道遺跡調査報告- 上市町木製品 (本文)・総括編-」、p.89-96
- 川村恵洋 (1983) 曾根遺跡出土木材の識別、新大演報16、p.75-82.
- 木越邦彦・藤井昭二 (1965) 射水平野とその周辺産の炭質物の絶対年代とその意義、富山県放生潟周辺の地学的研究、2、p.13-19.
- 北村四郎・村田 源 (1971、1979) 原色日本植物図鑑 木本編< I・II >、453p. 545p. 保育社
- 古池 博 (1986) 木柱根その他木材ならびに大型堅果類の植物学的検討、「金沢市新保本町チカモリ遺跡 - 第 4 次発掘調査兼土器編-」、p.203-226、金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会・金沢市新保本町第一土地区画整理組合
- 能城修一・鈴木三男 (1989) 米泉遺跡出土材の樹種、「金沢市米泉遺跡」、p.263-277
- パリオ・サーヴェイ株式会社 (1991) 布目沢東遺跡 自然科学分析報告、大門町埋蔵文化財調査報告第 7 集「大門町企業団地内遺跡発掘調査報告書 (1) - 布目沢東遺跡・布目沢北遺跡-」 p.81-118、富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会
- 嶋倉巳三朗 (1979) 木製品の樹種、「鳥浜貝塚 - 縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査 1 -」、p.151-157、福井県教育委員会
- 嶋倉巳三朗 (1987) 寺地遺跡出土材の樹種、「史跡 寺地遺跡」、p.449-456、新潟県西頸城郡青梅町
- 島地 謙・林 昭三 (1983a) 出土木炭の樹種、「県民公園太閤山ランド内遺跡群調査報告 (2) 石太郎 A 遺跡・石太郎 C 遺跡・土代 A 遺跡・新造池 A 遺跡・東山 II 遺跡・野田 A 遺跡」、p.57-61、富山県教育委員会
- 島地 謙・林 昭三 (1983b) 出土木炭の樹種、「都市計画道路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要 高山遺跡・東山 I 遺跡・東山 II 遺跡・表野遺跡・南太閤山 I 遺跡・南太閤山 II 遺跡」、p.68-73、富山県教育委員会
- 島地 謙・林 昭三 (1984) 出土木炭の樹種識別、「都市計画道路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要 (2) 南太閤山 I 遺跡・南太閤山 II 遺跡」、p.34、富山県教育委員会
- 島地 謙・伊東隆夫編 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧、296p. 雄山閣
- 島地 謙・林 昭三・伊東隆夫 (1982) 出土木炭の樹種、「富山県小杉町 上野赤坂 A 遺跡 - 県民公園太閤山ランド内遺跡群発掘調査報告書 (1) -」、p.27 - 29、富山県教育委員会
- 鈴木三男・能城修一 (1988) 田名遺跡出土木製品の樹種の調査結果について、三方町文化財調査報告書第 8 集「田名遺跡」、p.56-70、三方町教育委員会

- 鈴木三男・能城修一（1989）水白モンシヨ遺跡出土木製品の樹種、「石川県鹿島郡鹿島町水白モンシヨ遺跡」、p.102－113、石川県埋蔵文化財センター
- 鈴木三男・能城修一（1990）江跨遺跡出土木製品の樹種について、三方町文化財調査報告書第9集「江跨遺跡」、p.51－59、三方町教育委員会
- 魚津埋没林博物館（1992）埋没林のはなし ―埋没林研究の歴史を中心として―、81p.

表1-1 材同定結果

番号	遺構・試料名	品名	時代	材同定結果(種類)	備考
1	SX-333 井戸	井戸材(曲物)	中世	スギ	1段組 2段組の上 2段組の下 2段組の上 2段組の下
2	SK-600 井戸	井戸材(曲物)	中世	スギ	
3	SK-600 井戸	井戸材(曲物)	中世	スギ	
4	SK-602 井戸	井戸材(曲物)	中世	スギ	
5	SK-602 井戸	井戸材(曲物)	中世	スギ	
6	SK-602 井戸	タガ(上)	中世	スギ	
7	SK-602 井戸	タガ(下)	中世	スギ	
8	SK-602 井戸	タガ	中世	スギ	
9	SK-602 井戸	隅柱	中世	スギ	
10	SX-602 井戸	隅柱	中世	スギ	
11	SK-602 井戸	縦板	中世	スギ	
12	SK-602 井戸	縦板	中世	スギ	
13	SK-602 井戸	縦板	中世	スギ	
14	SK-602 井戸	縦板	中世	スギ	
15	SK-602 井戸	縦板	中世	スギ	
16	SK-603 井戸	曲物(桶)	中世	スギ	
17	SK-603 井戸	タガ(上)	中世	スギ	
18	SK-603 井戸	タガ(下)	中世	スギ	
19	SK-603 井戸		中世	スギ	
20	SK-603 井戸		中世	スギ	
21	SK-603 井戸		中世	スギ	
22	SK-603 井戸		中世	クロベまたはアスナロ	
23	SK-603 井戸		中世	スギ	
24	SK-603 井戸		中世	スギ	
25	SK-603 井戸		中世	スギ	
26	SK-603 井戸		中世	スギ	
27	SK-603 井戸		中世	スギ	
28	SK-603 井戸		中世	スギ	
29	SK-603 井戸		中世	スギ	
30	SK-603 井戸		中世	スギ	
31	SK-603 井戸		中世	スギ	
32	SK-603 土抗		中世	スギ	
33	SK-603 井戸	柱痕	中世	ハンノキ属の一種	
34	SK-603 井戸	目地板	中世	クロベまたはアスナロ	
35	SK-603 井戸	目地板	中世	スギ	
36	SK-603 井戸	不明	中世	スギ	
37	SK-606 井戸	曲物	中世	スギ	
38	SK-607 井戸	曲物(上)	中世	スギ	
39	SK-607 井戸	曲物(下)	中世	スギ	
40		曲物	中世	スギ	
41	SK-623 土坑	桶の底?	中世	スギ	
42	SB- 3 掘立柱建物	柱根	中世	ヤマザクラ	
43	SB- 7 掘立柱建物	柱根	中世	クリ	
44	P- 1 柱穴	柱根	中世	クリ	
45	P- 2 柱穴	柱根	中世	クリ	
46	P- 3 柱穴	柱根	中世	クリ	
47	P- 4 柱穴	柱根	中世	リョウブ	
48	P- 5 柱穴	柱根	中世	クリ	
49	P- 6 柱穴	柱根	中世	クリ	
50	出土位置不明	杭	中世	クリ	
51	出土位置不明	杭	中世	トネリコ属の一種	

表1-2 材同定結果

番号	遺構・試料名	品名	時代	材同定結果(種類)	備考
52	出土位置不明	杭	中世	クリ	
53	SD-10C X17Y11	漆器	中世	ブナ属の一種	
54	SD-10C X14Y88	漆器	中世	トチノキ	
55	出土位置不明	漆器	中世	ブナ属の一種	
56	SK-602 井戸	箸状遺物No.39	中世	スギ	
57	SK-602 井戸	箸状遺物No.41	中世	クロベまたはアスナロ	
58	SK-602 井戸	箸状遺物No.49	中世	クロベまたはアスナロ	
59	SK-602 井戸	箸状遺物No.25	中世	スギ	
60	SK-602 井戸	箸状遺物No.34	中世	スギ	
61	SK-602 井戸	箸状遺物No.21	中世	スギ	
62	SK-602 井戸	箸状遺物No.56	中世	クロベまたはアスナロ	
63	SK-602 井戸	箸状遺物No.57	中世	スギ	
64	SK-602 井戸	箸状遺物No.16	中世	スギ	
65	SK-602 井戸	箸状遺物No.15	中世	スギ	
66	SK-602 井戸	箸状遺物No.14	中世	スギ	
67	SK-602 井戸	箸状遺物No.17	中世	スギ	
68	SK-602 井戸	箸状遺物No.65	中世	スギ	
69	SK-602 井戸	箸状遺物No.54	中世	スギ	
70	SK-602 井戸	箸状遺物No.66	中世	スギ	
71	SE-01	?	中世	スギ	
72	SE-01	?	弥生時代	スギ	
73	SE-01	?	弥生時代	スギ	
74	SE-01	井戸側	弥生時代	スギ	
75	SE-01	井戸側?	弥生時代	スギ	
76	SE-01	?	弥生時代	スギ	
77	SE-01	井戸側	弥生時代	スギ	
78	SE-01	井戸側	弥生時代	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
79	SE-01	井戸側	弥生時代	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
80	SE-01	井戸側	弥生時代	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
81	SE-201	井戸(上)	弥生時代	スギ	
82	SE-201	井戸(上)	弥生時代	スギ	
83	SE-201	井戸(下)	弥生時代	トネリコ属の一種	
84	SE-201	井戸(下)	弥生時代	トネリコ属の一種	
85	SE-201	井戸(下)	弥生時代	トネリコ属の一種	
86	SE-201	井戸(下)	弥生時代	トネリコ属の一種	
87	SE-201	井戸(下)	弥生時代	トネリコ属の一種	
88	SE-201	井戸(下)	弥生時代	トネリコ属の一種	
89	SE-201	棧?	弥生時代	スギ	
90	SE-201	棧のクサビ	弥生時代	クリ近似種	
91	SE-201	棧のクサビ止め	弥生時代	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
92	SE-201	?	弥生時代	スギ	
93	SE-201	井戸側	弥生時代	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
94	SE-201	井戸側	弥生時代	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
95	SE-201	井戸側	弥生時代	スギ	
96	SE-201	井戸側	弥生時代	クリ	
97	SE-201	井戸側	弥生時代	スギ	
98	SE-201	井戸側	弥生時代	スギ	
99	SE-201	井戸側(下)	弥生時代	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	

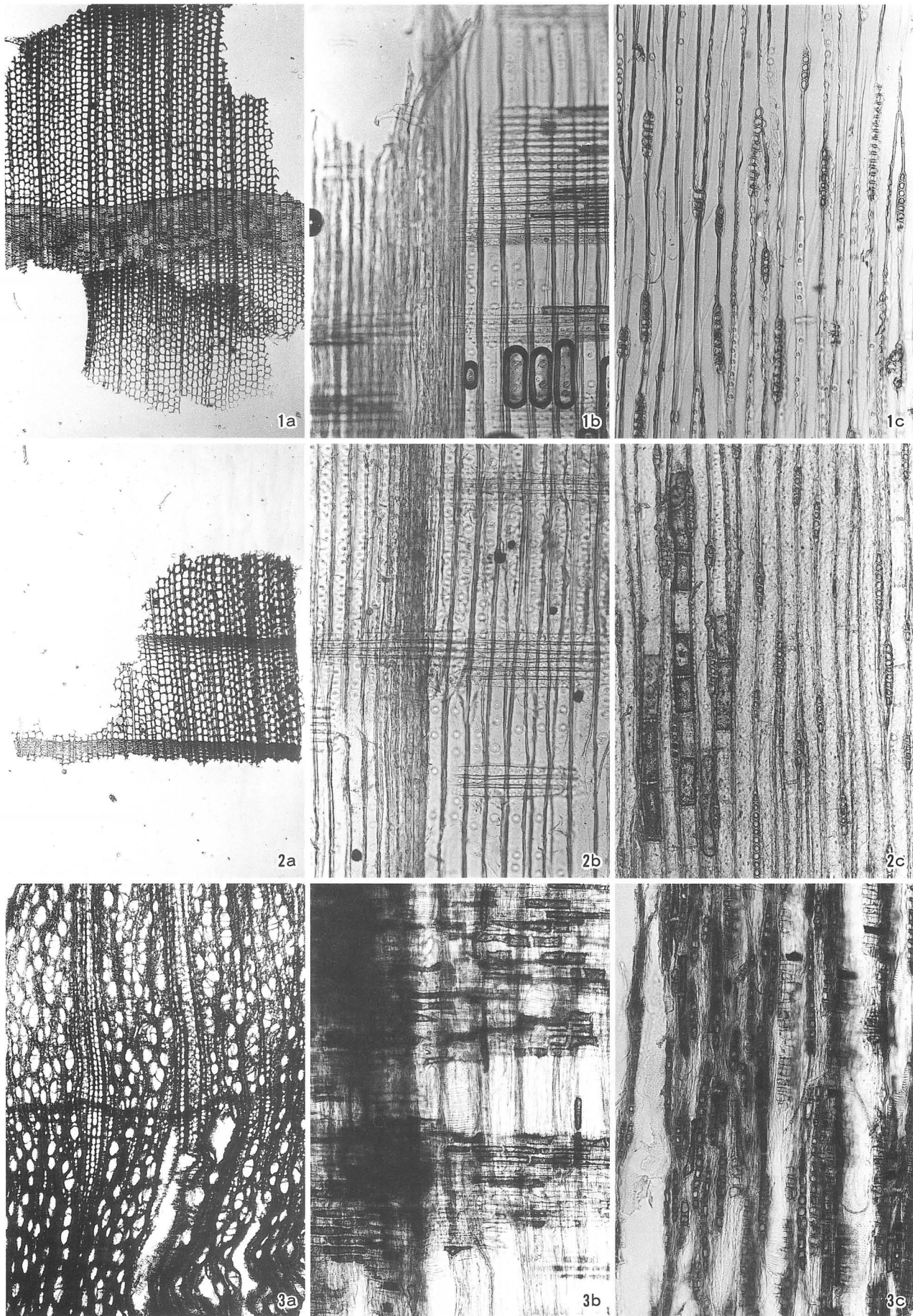
表2 木製品の用途別種類構成

用途 種類	建築・土木材			木製品				用途不明	合計
	井戸材	柱根	杭	曲物	桶	漆器	箸状遺物		
スギ	40			4	2		12	6	64
クロベまたはアスナロ	2						3		5
ハンノキ属	1								1
ブナ属						2			2
クヌギ節	2								2
コナラ節	5								5
クリ*	2	6	2						10
ヤマザクラ		1							1
トチノキ						1			1
リョウブ		1							1
トネリコ属	6		1						7
合計	58	8	3	4	2	3	15	6	99

\*：近似種を含む



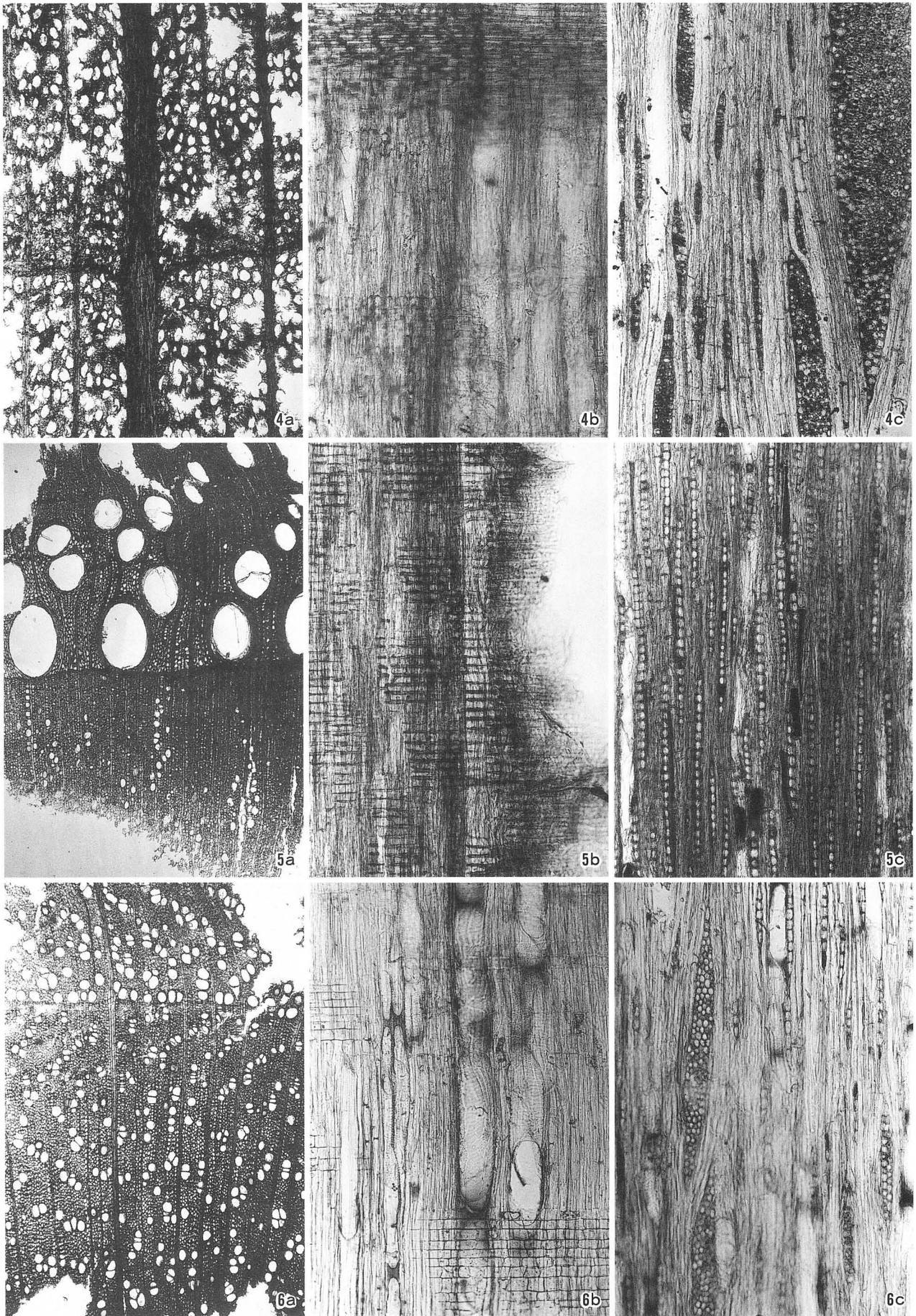
図版1 材の顕微鏡写真(1)



1. スギ (No.28)  
 2. クロベまたはアスナロ (No.34)  
 3. ハンノキ属の一種 (No.33)  
 a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200 $\mu$ m:a  
 200 $\mu$ m:b,c

図版 2 材の顕微鏡写真(2)



4. ブナ属の一種 (No.53)

5. クリ (No.46)

6. ヤマザクラ (No.42)

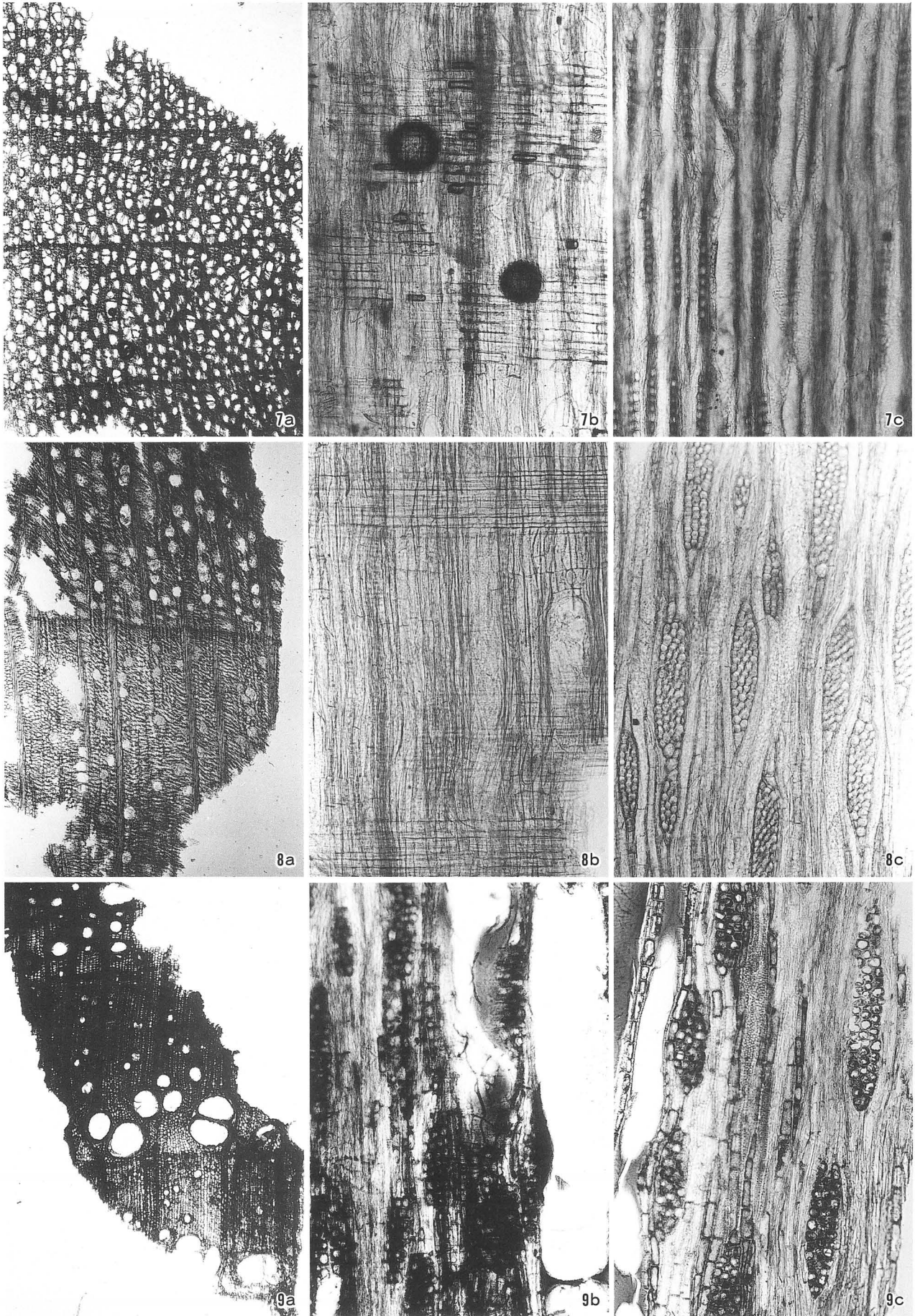
a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200 $\mu$ m:a

200 $\mu$ m:b,c

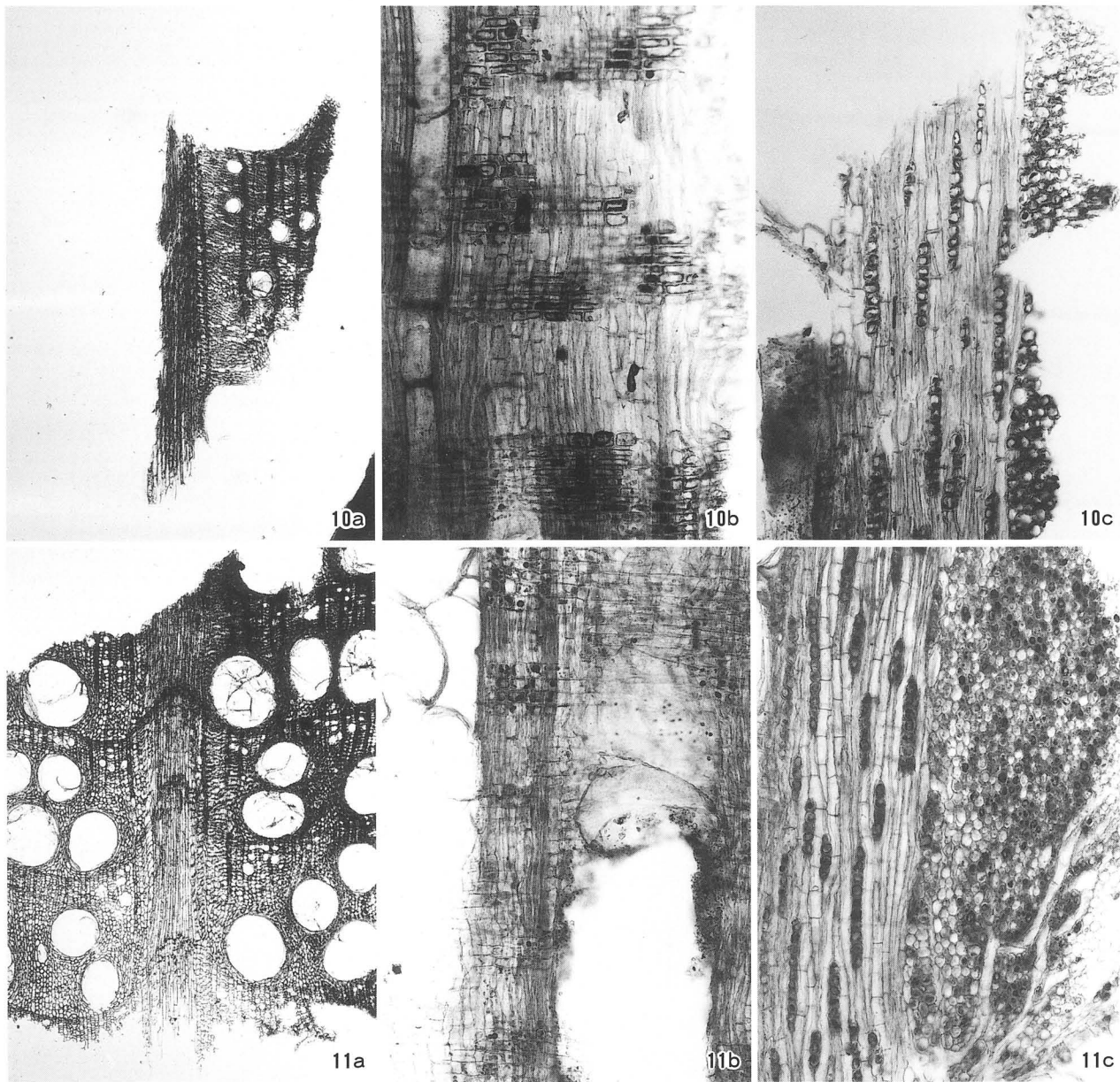


図版3 材の顕微鏡写真(3)



7. トチノキ (No.54)  
 8. リョウブ (No.47)  
 9. トネリコ属の一種 (No.51)  
 a : 木口, b : 柾目, c : 板目

200 $\mu$ m:a  
 200 $\mu$ m:b,c



10. コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (No.94)

11. コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (No.79)

a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200 $\mu$ m:a

200 $\mu$ m:b,c





針原東遺跡





1. 近景  
(東から)



2. 調査区東側  
(南西から)



3. 調査区西側  
(南東から)

図版第 3

1. X20~25  
Y2~10区付近  
(西から)



2. X5~25  
Y2~10区付近  
(南から)



3. 拡張区A全景  
(西から)







1

1. 2. SD10  
弥生土器の  
出土状態



2



3

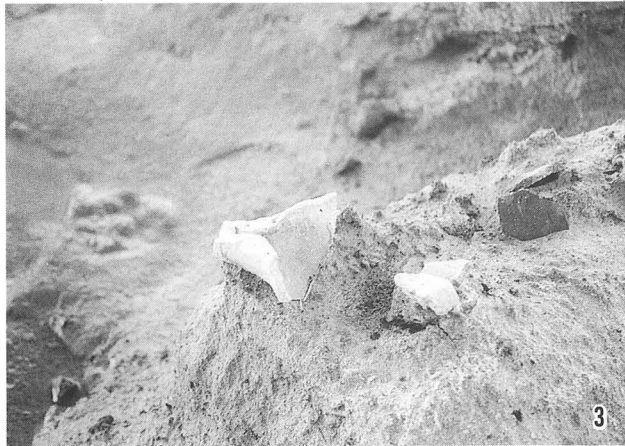
3. SD10完掘  
X20~25  
Y2~30区  
(南東から)



図版第 5



1. 2. 発掘調査風景



3~6. SD10  
遺物出土状況



7~9. SE01



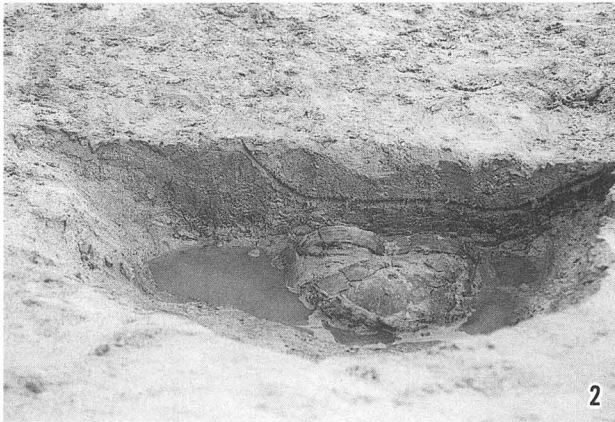
10. SK02



図版第 6



1



2



3



4



5



6

- 1. SK22  
土器出土状態
- 2. SK22の土層

- 3. SK62
- 4. SK61

5~7. SE201

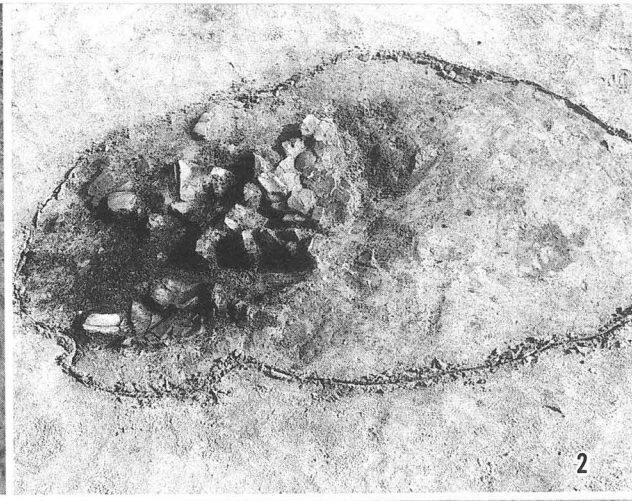
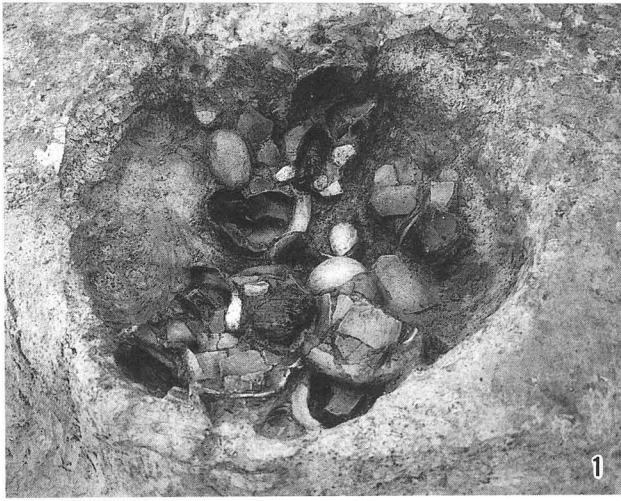


7



图版第 7

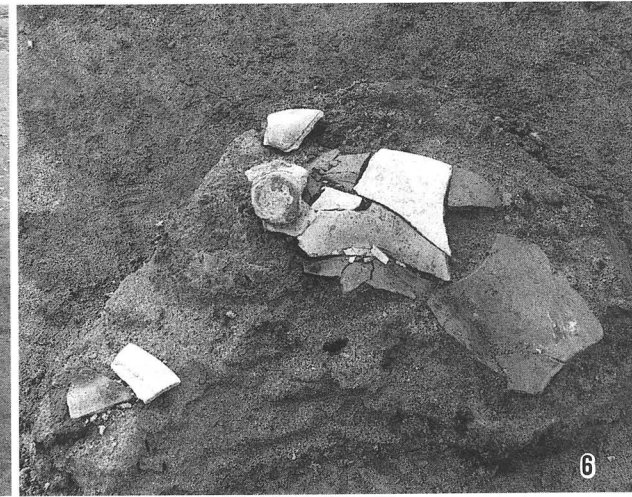
- 1. SK206
- 2. SK208



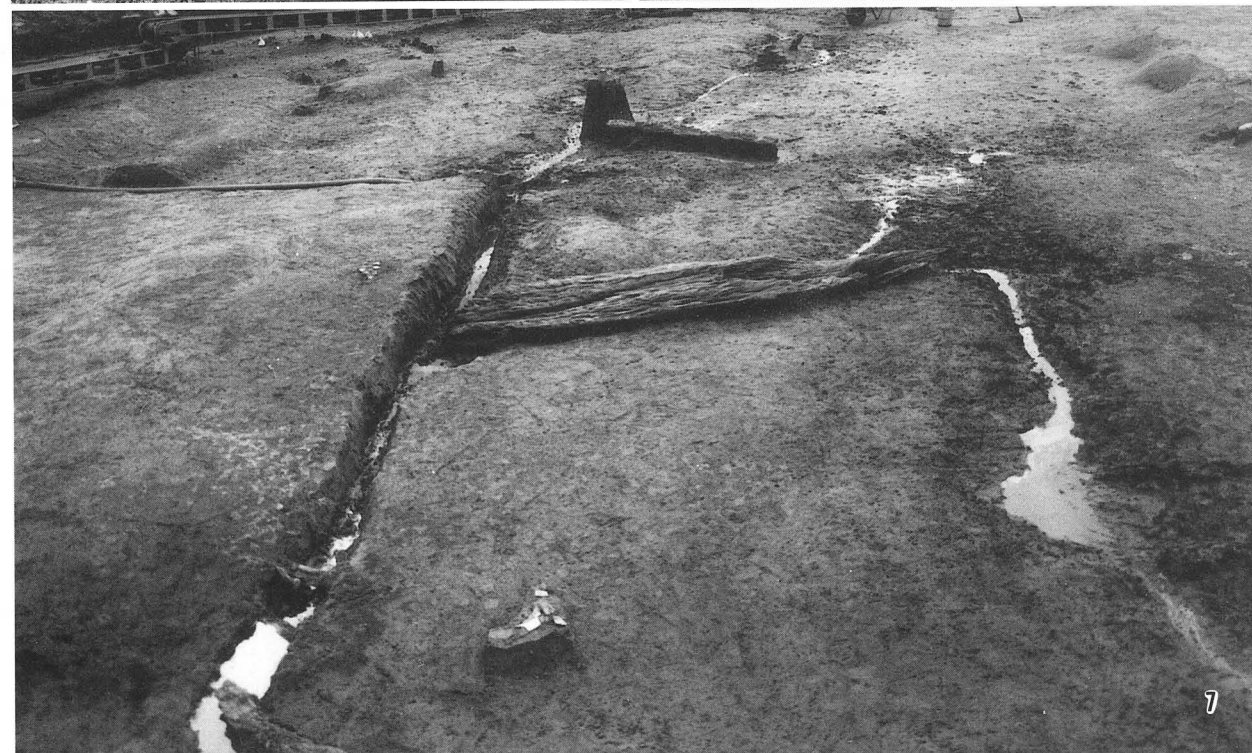
- 3. SK211
- 4. SK220



- 5. SD10  
X56Y61区
- 6. SD10  
X 9 Y47区



- 7. SD10







1. 調査区全景  
(西から)



2. 調査区全景  
Y61以西  
(東から)



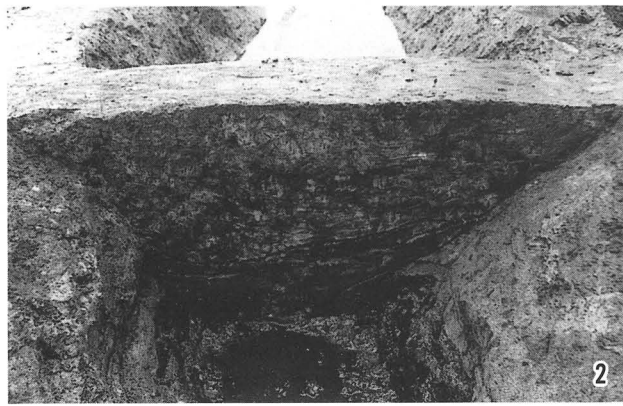
3. SD300C  
(東から)

図版第 9

1. SD201  
X 8 Y56  
(南から)



2. SD201(AA')  
3. SD201(BB')



4. SD300A  
(南から)



5. SD300A  
6. SD300A  
(土橋)







1. SD300B  
(北から)



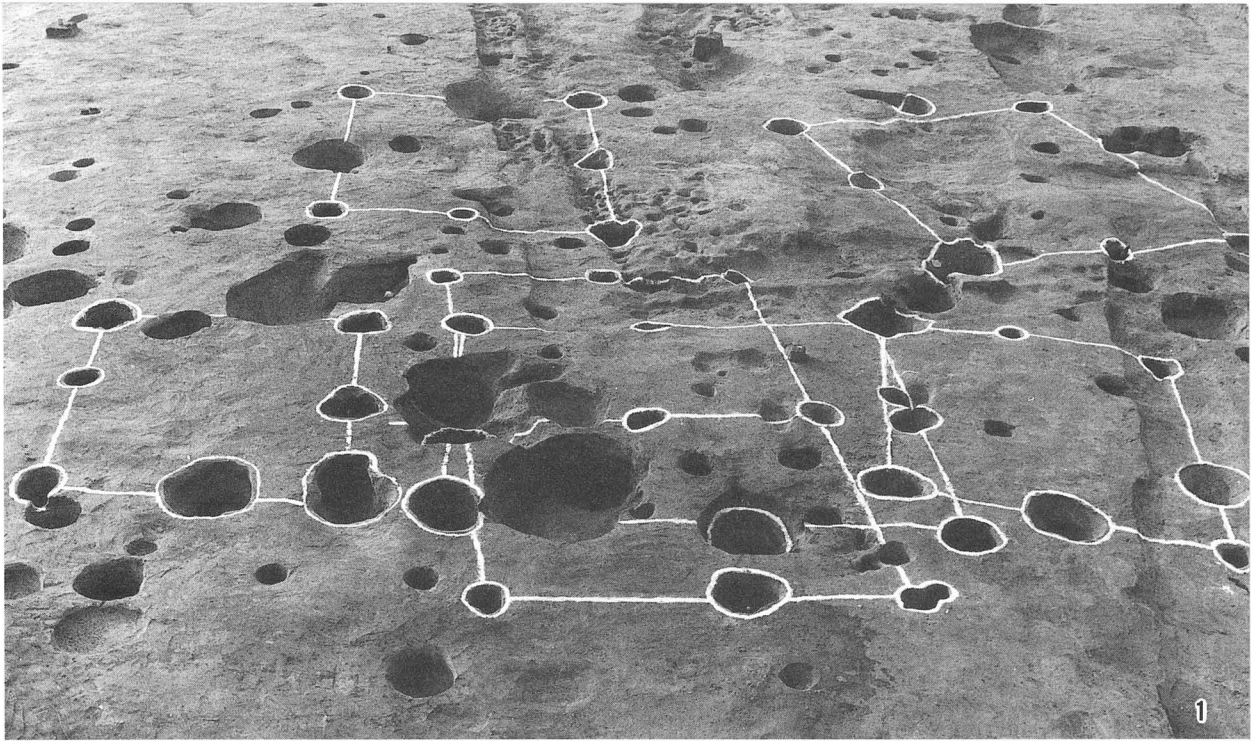
2. SD301  
X8~20Y71区  
(南から)



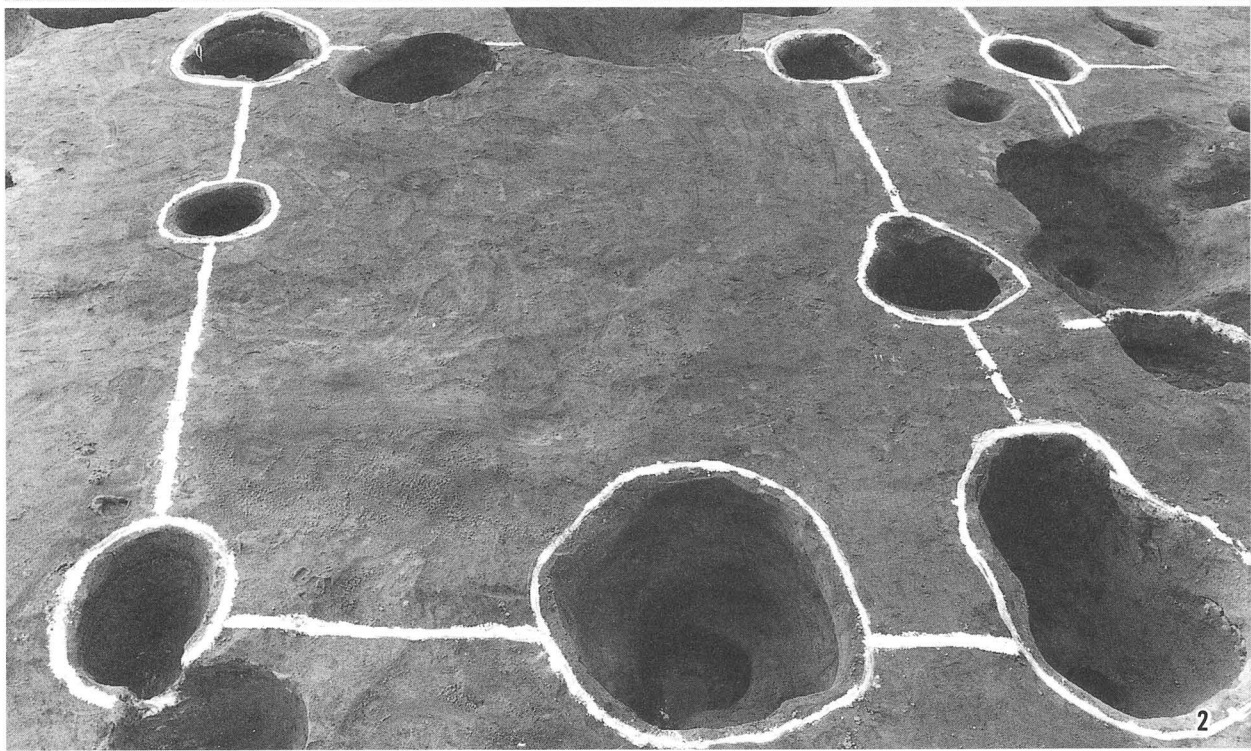
3. SD301  
X8~20Y103区  
(南から)  
4. SD301(EE')



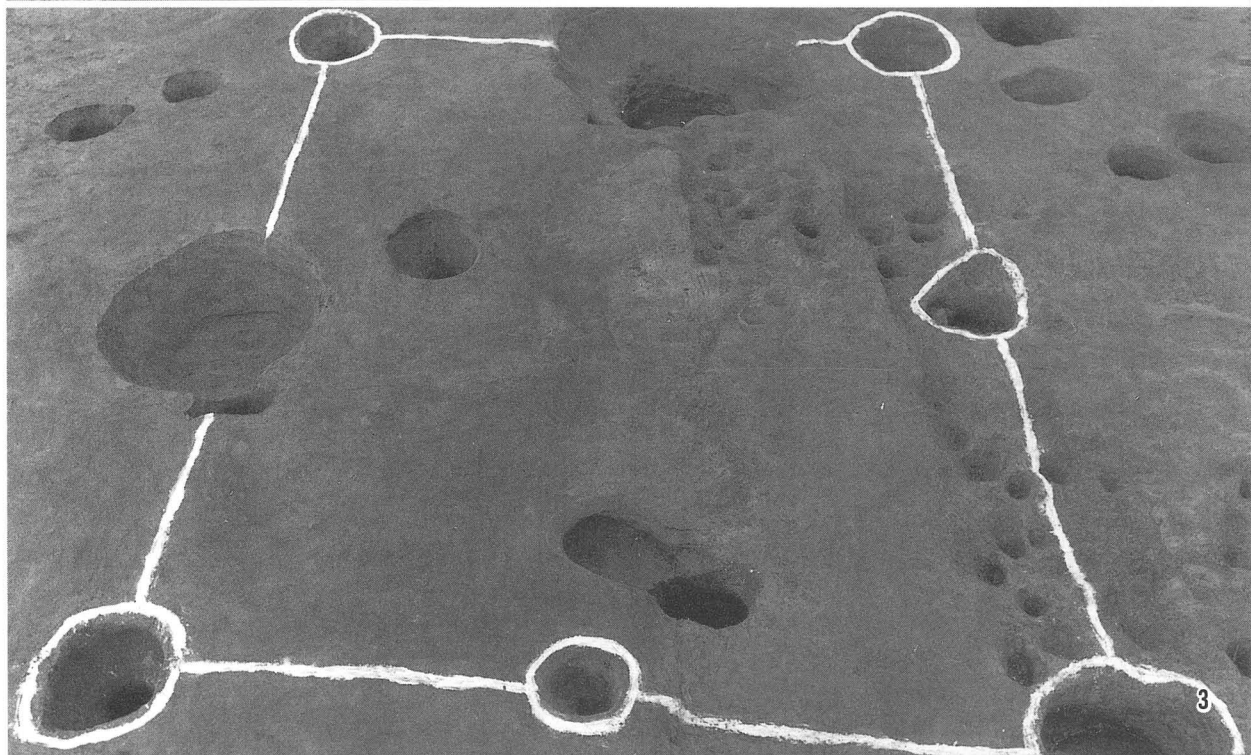
1. SB01~06  
(東から)



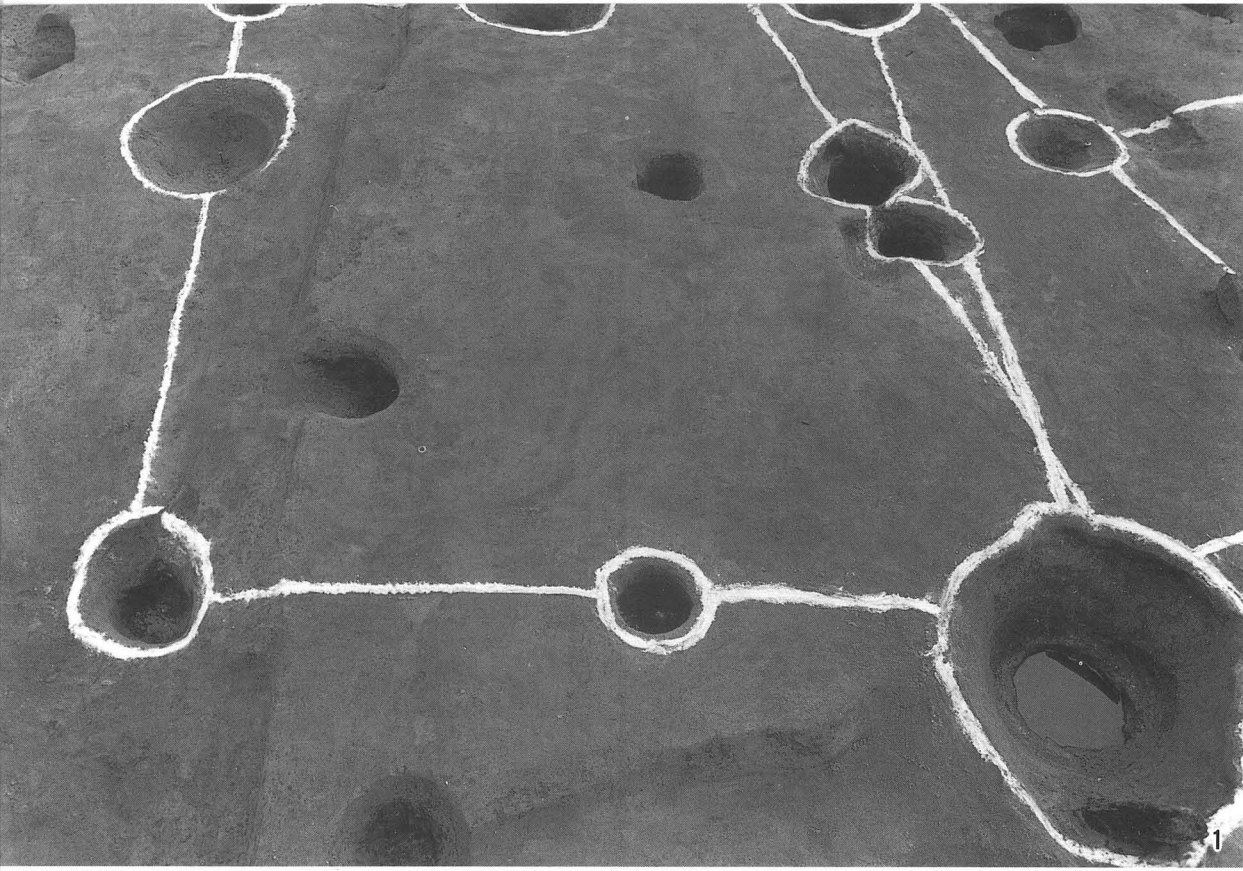
2. SB01  
(東から)



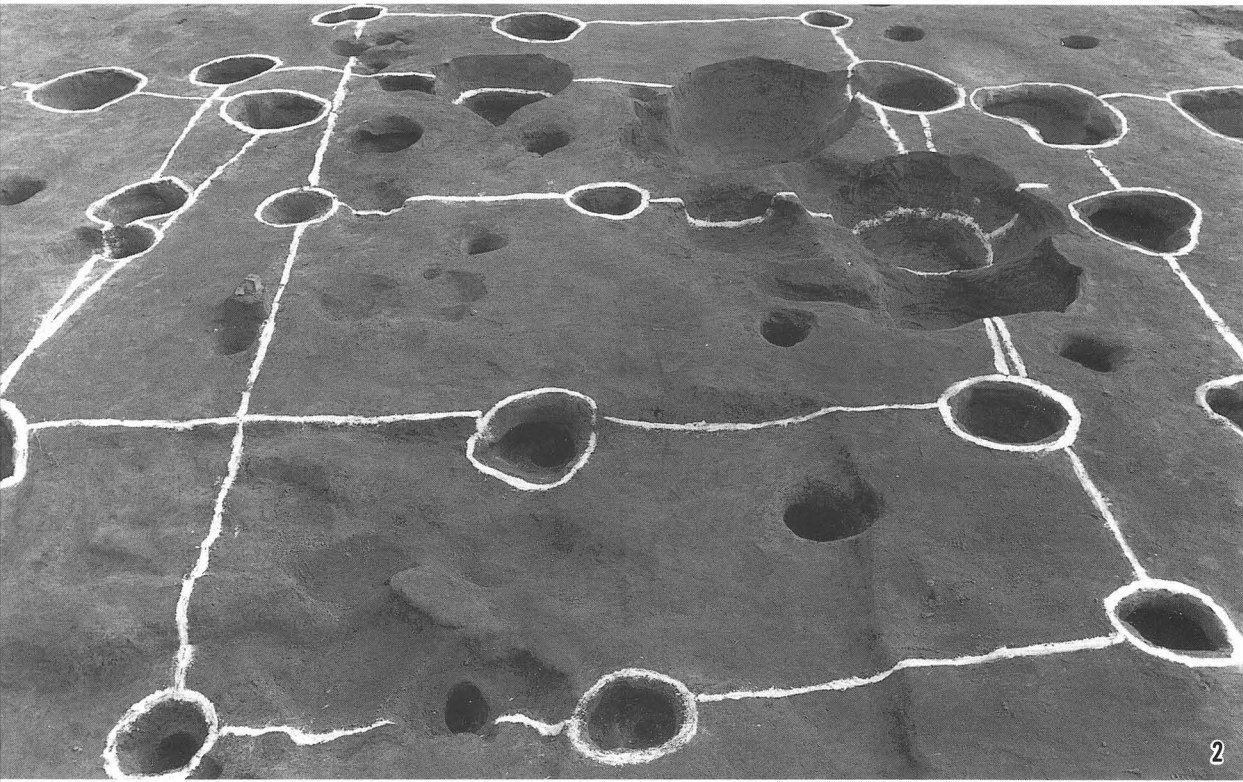
3. SB02  
(東から)



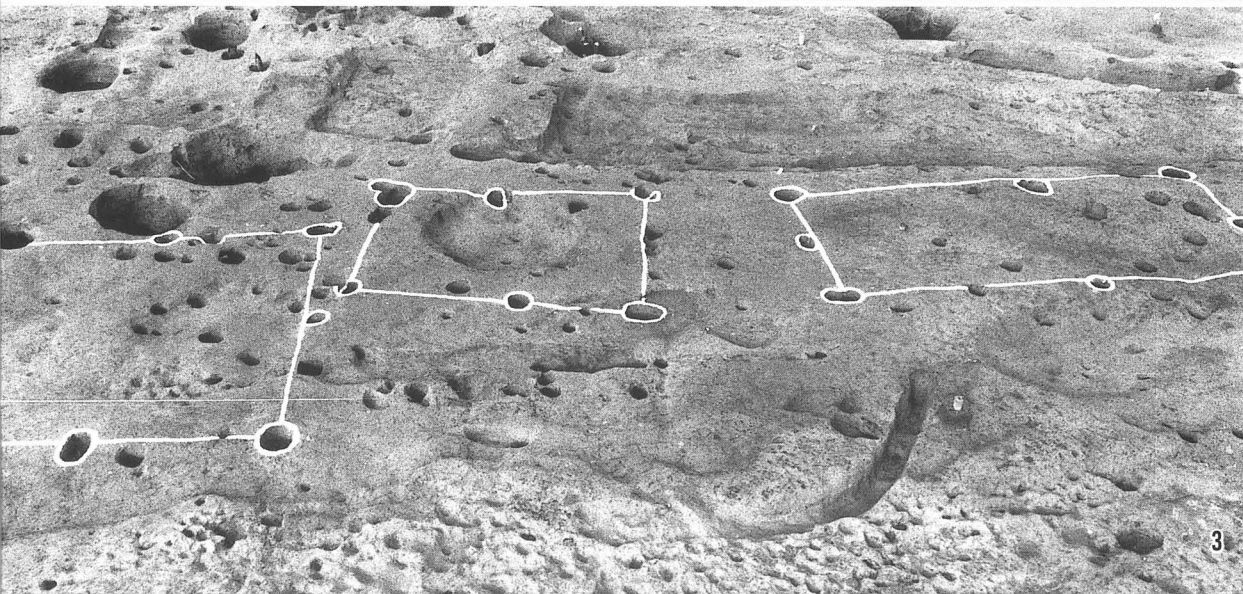




1. SB04  
(北西から)

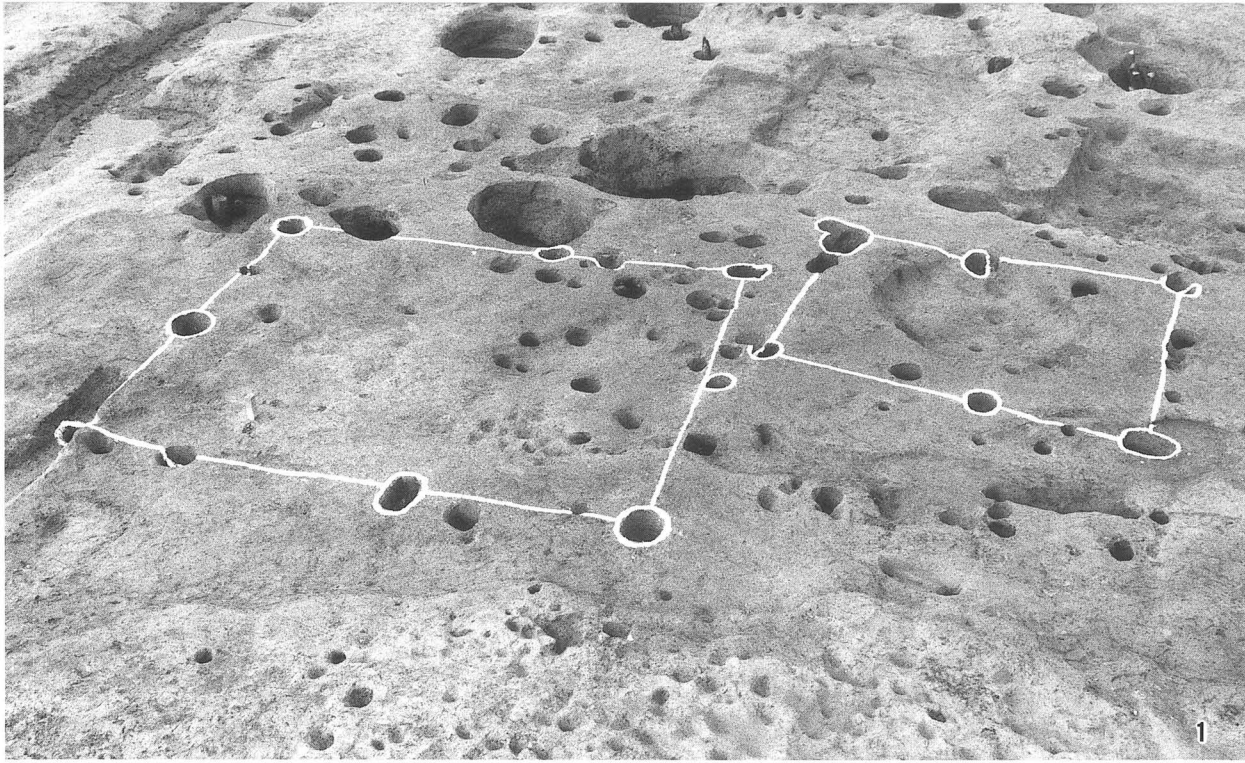


2. SB05(手前)  
SB06  
(西から)



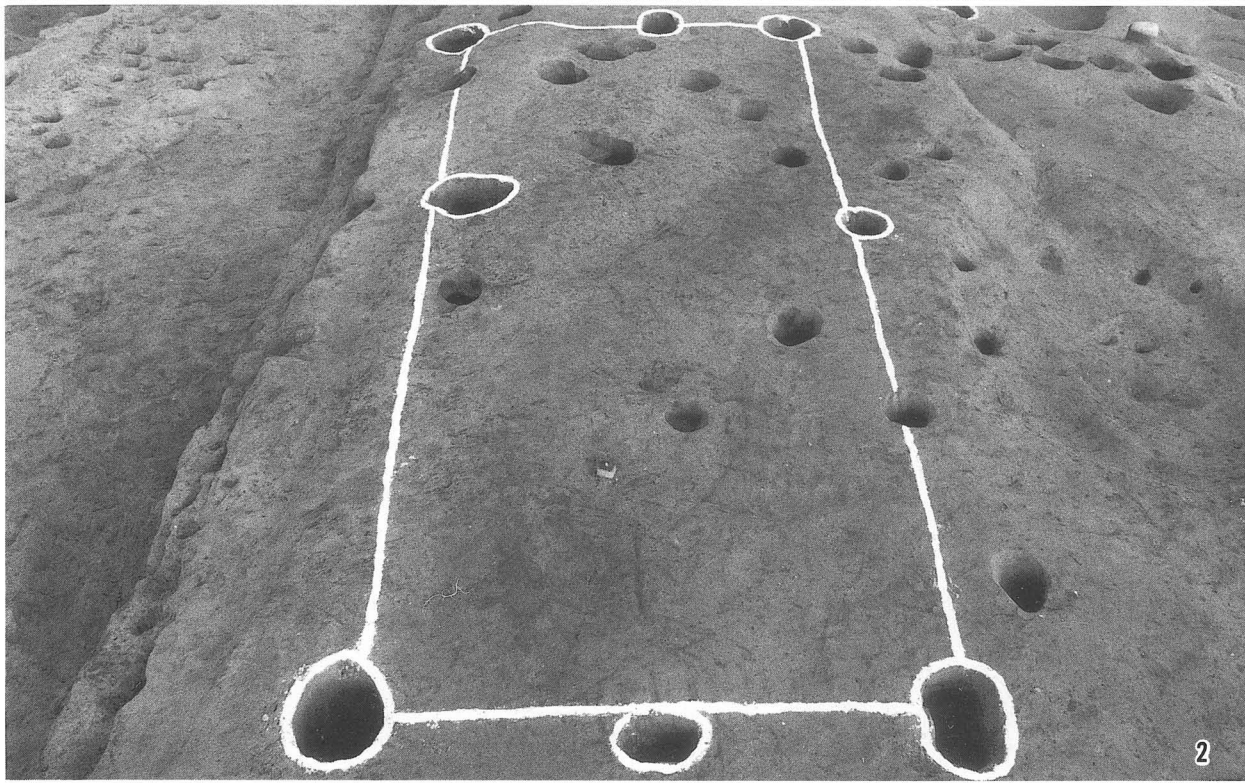
3. SB09(右)  
SB10(中央)  
SB11(左)  
(南から)





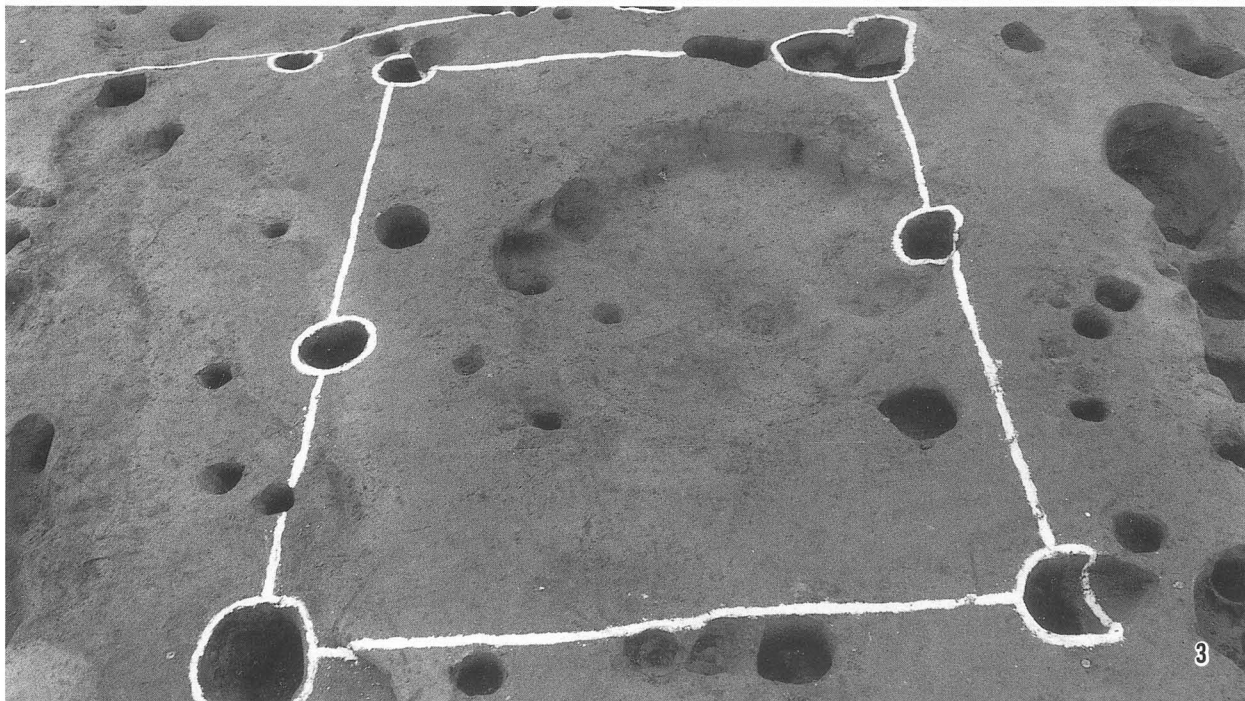
1. SB10(右)  
SB11(左)  
(南から)

1



2. SB09  
(西から)

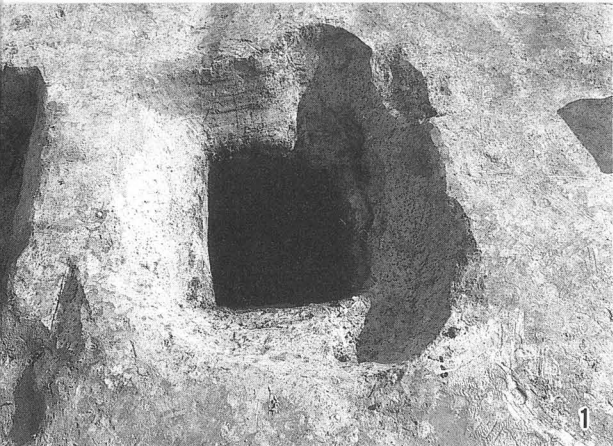
2



3. SB10  
(東から)

3

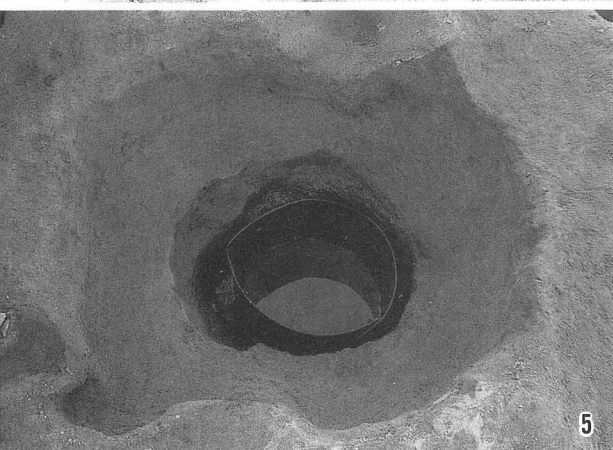




1. SE300  
2. SE335



3. SE600  
4. SE602



5. SE600  
6. SE602



7. SE602  
8. SE603



9. SE604  
10. SE607



図版第15

1. SK304・305  
2. SK307



3. SK316  
4. SK322



5. SK326  
6. SK328



7. SK330  
8. SK342



9. SK343  
10. SK344







1. SK350  
2. SK351



3. SK352  
4. SK360



5. SK373  
6. SK608



7. SK609  
8. SK611



9. SK612  
10. SK613







図版第18

試掘調査の出土遺物

1. 平成2年度  
78~98トレンチ

1

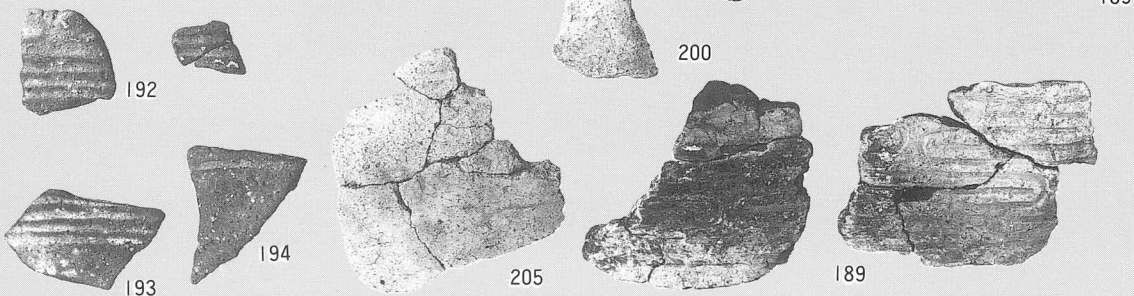
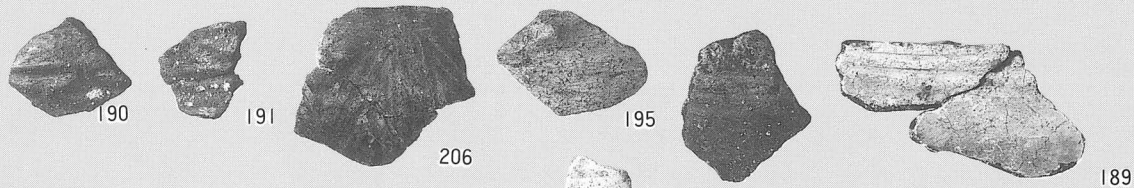
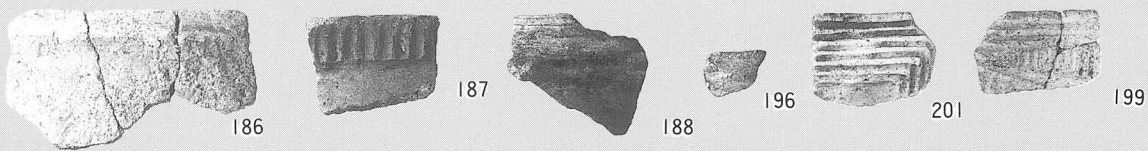
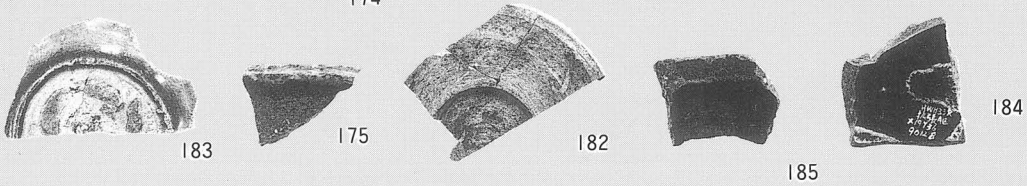
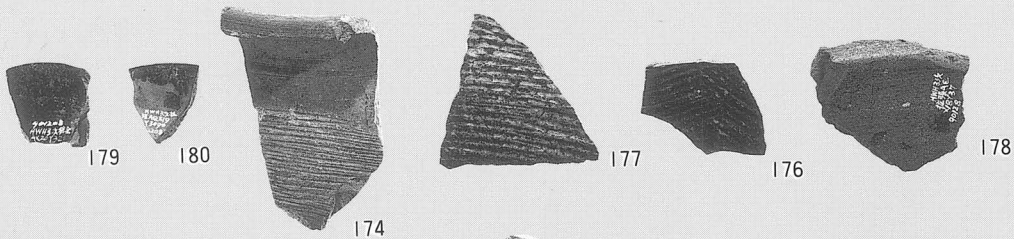
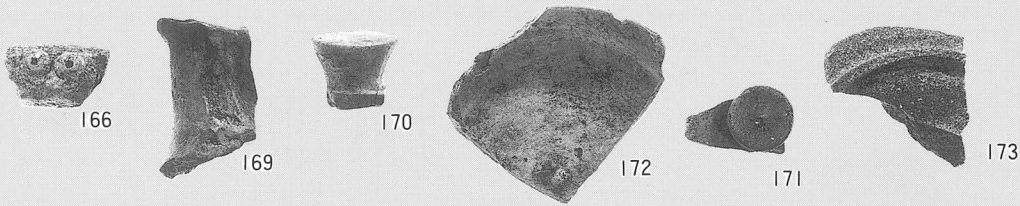
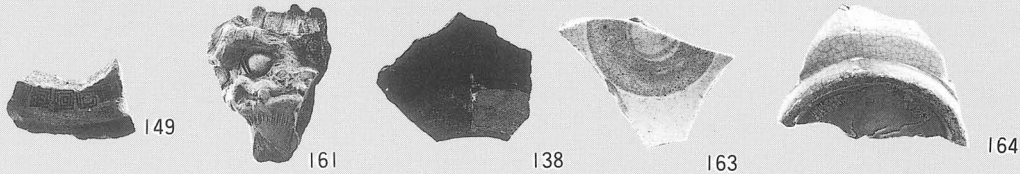
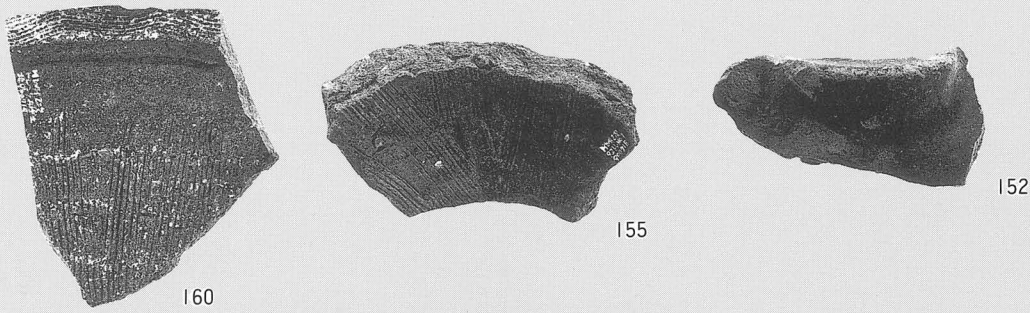
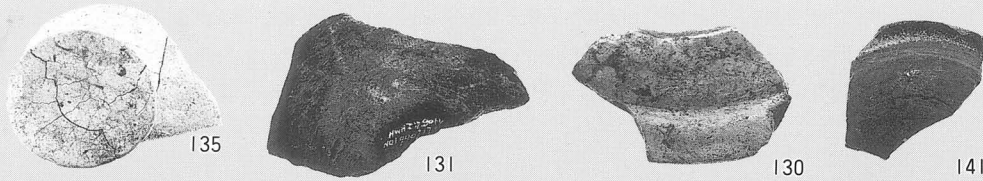
2. 平成2年度  
拡張区A

2

本調査の出土遺物

3. (縄文土器)

3

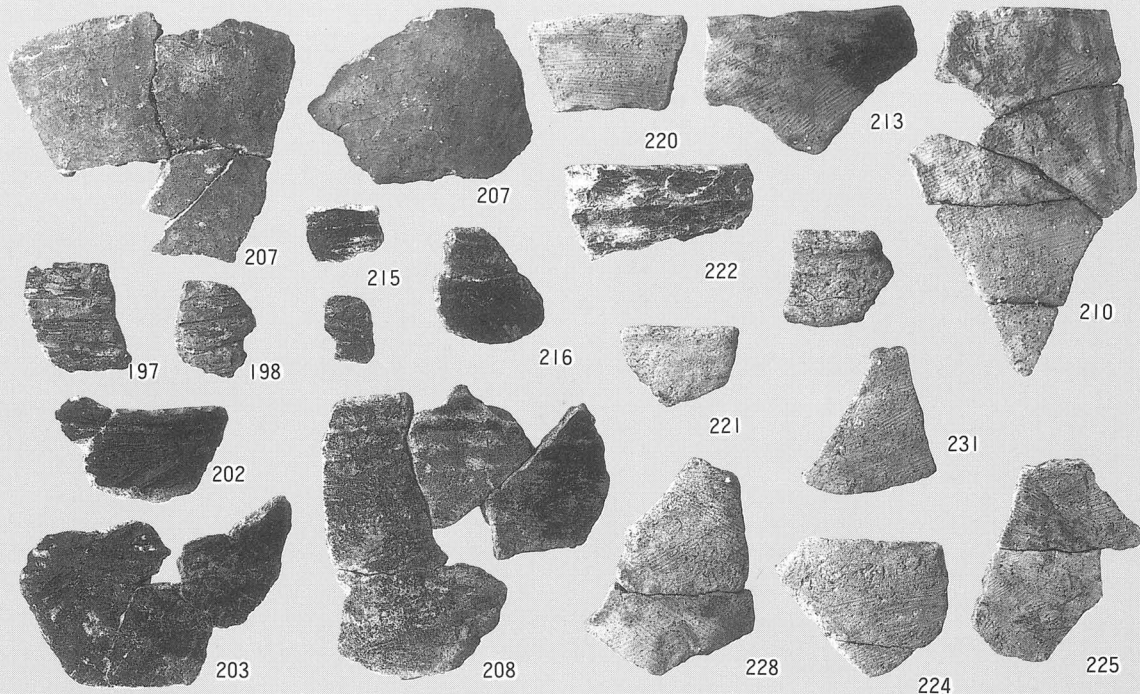




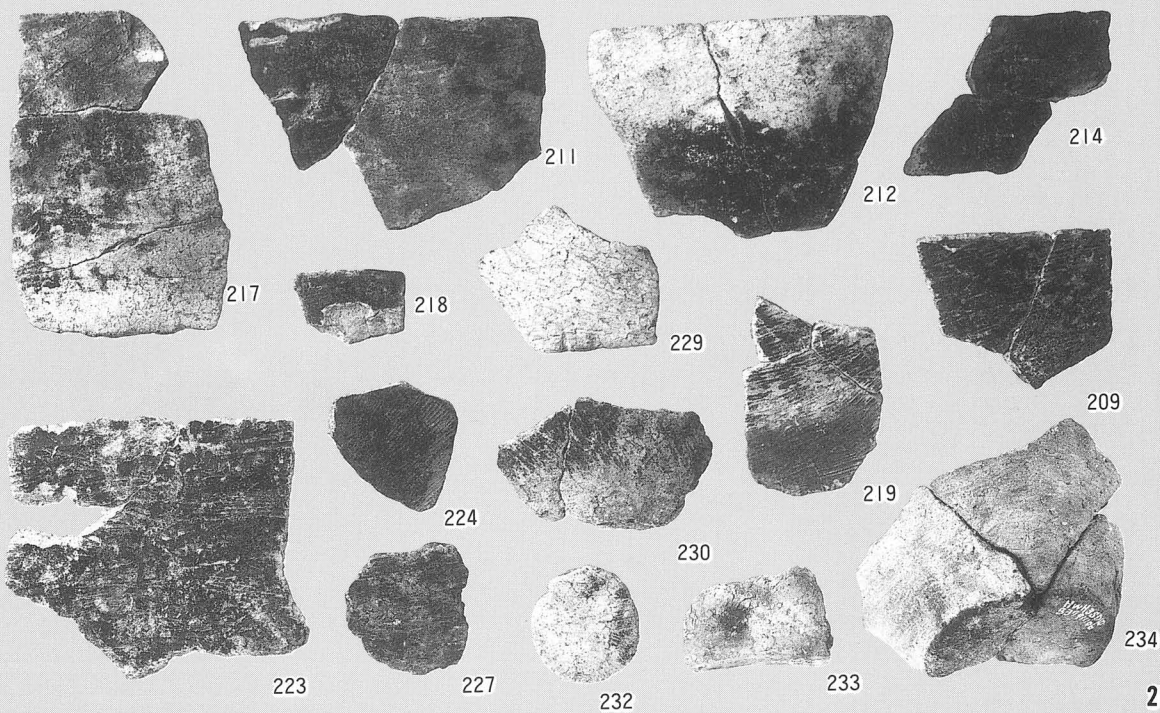
図版第19

本調査の出土遺物

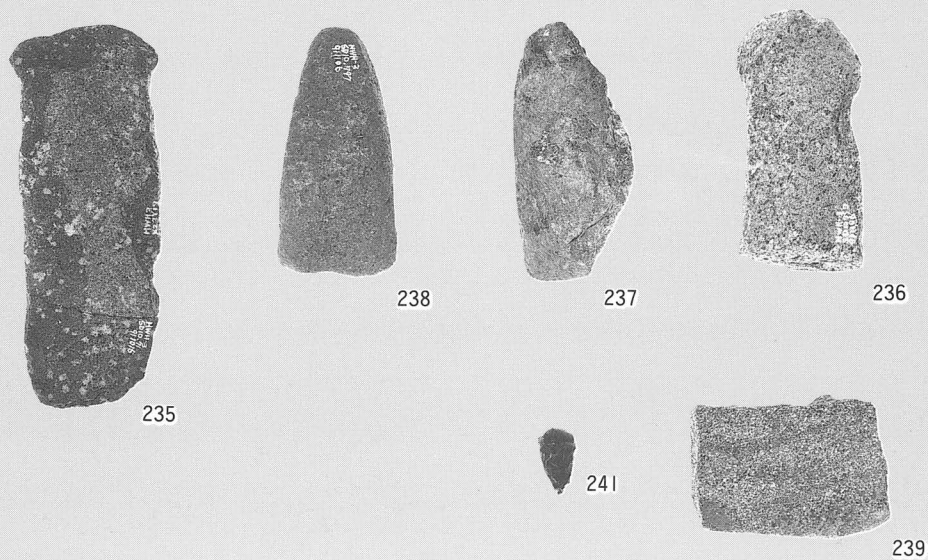
1. 縄文土器



2. 縄文土器



3. 石器





図版第20

遺構の出土遺物  
(弥生土器)



1

1. 各遺構出土



277

2



280

3

2~5. SE01  
(5は1/2)



279

4



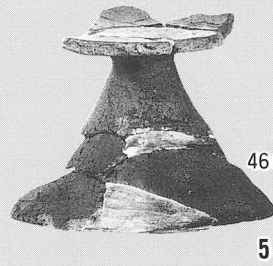
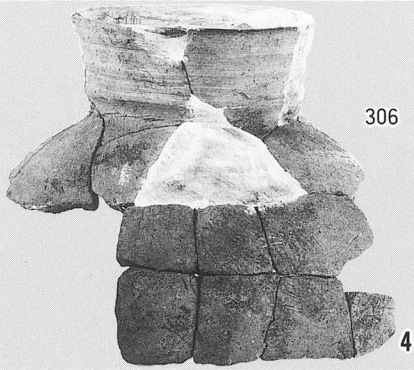
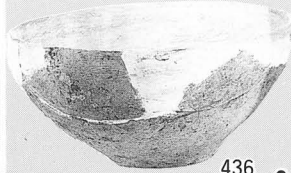
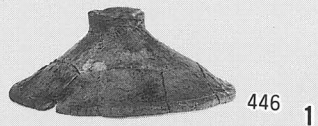
269

5



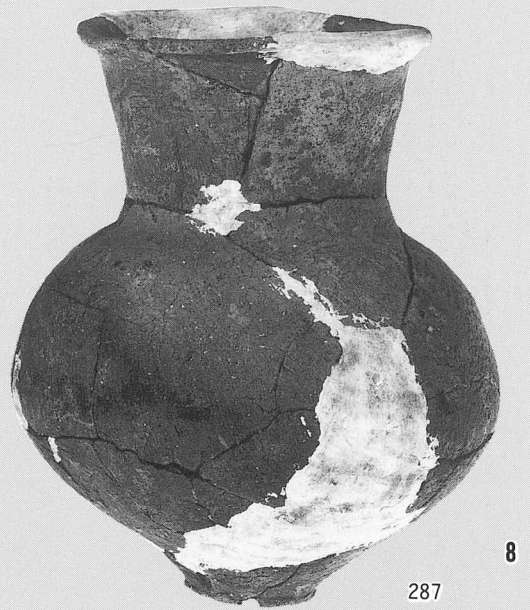
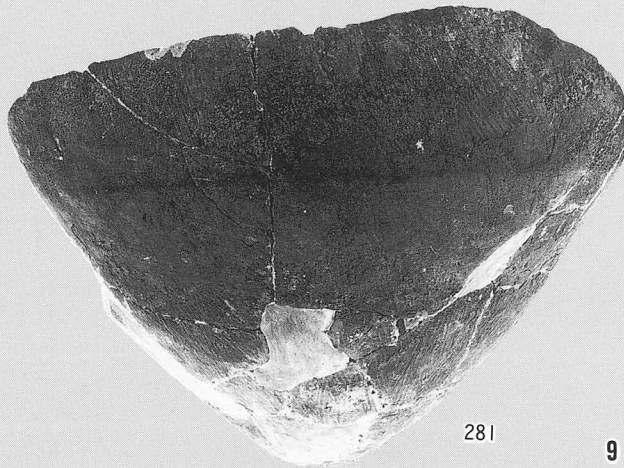
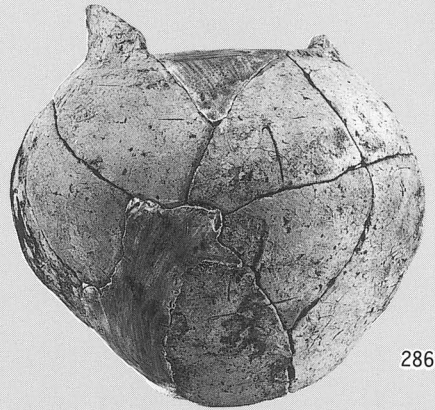
図版第21

遺構の出土遺物  
(弥生土器)



1.2.4.5.7.  
8.11. SD10

3.6.9. SE01  
(3は1/2)



10. SK02

11



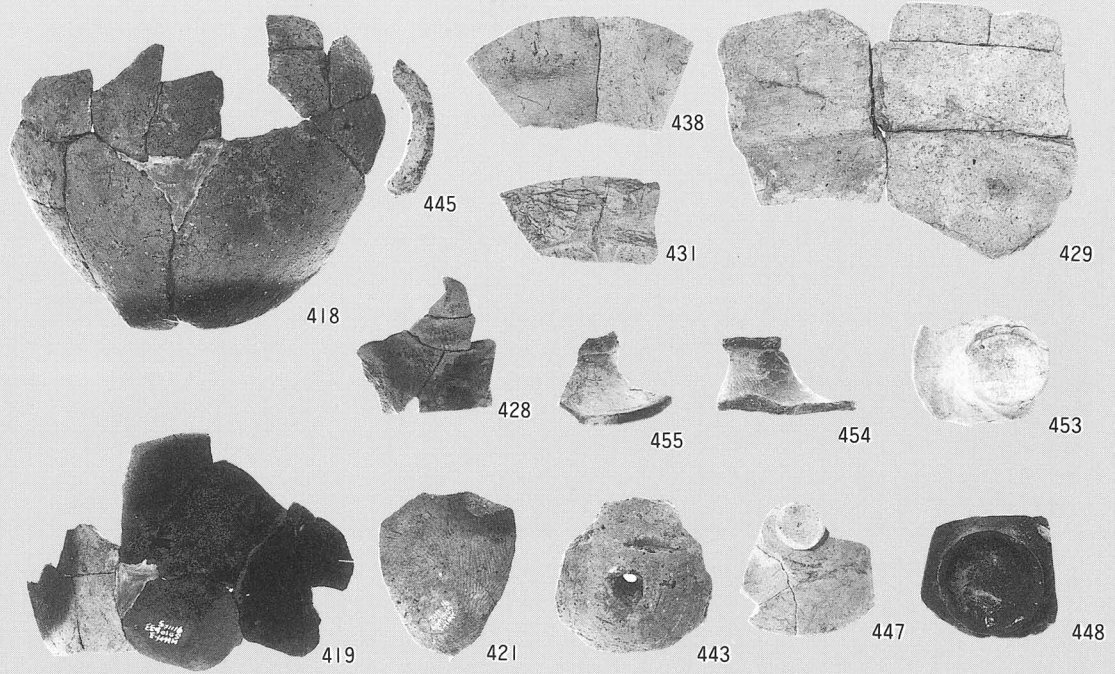




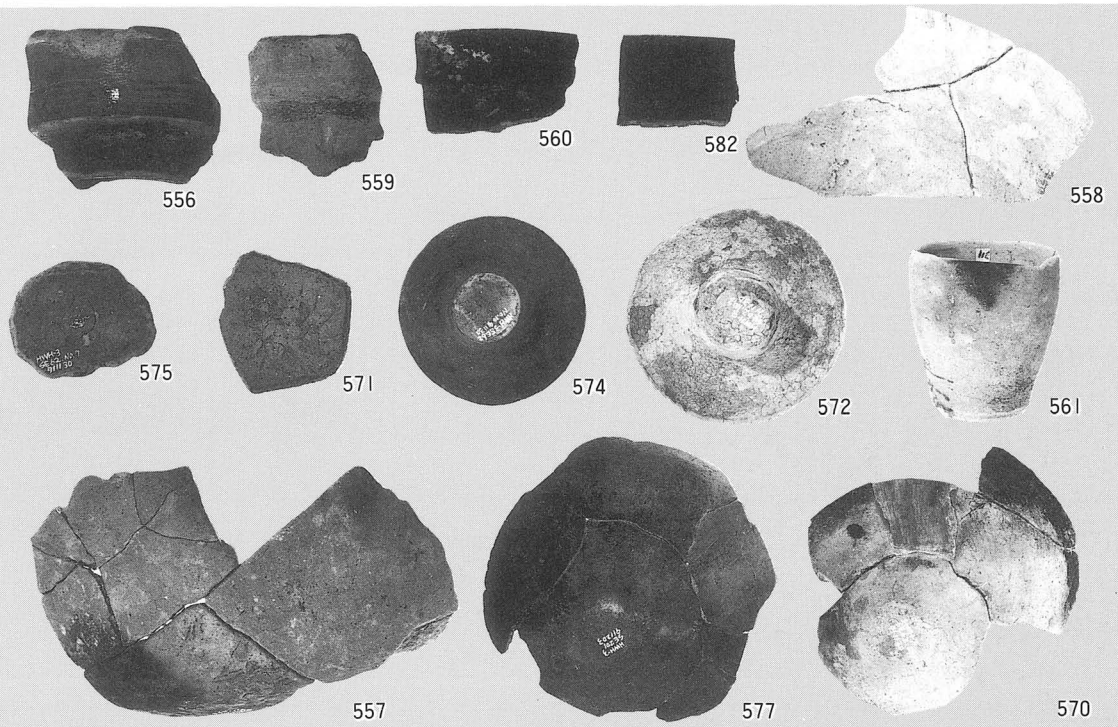
図版第23

遺構の出土遺物  
(弥生土器)

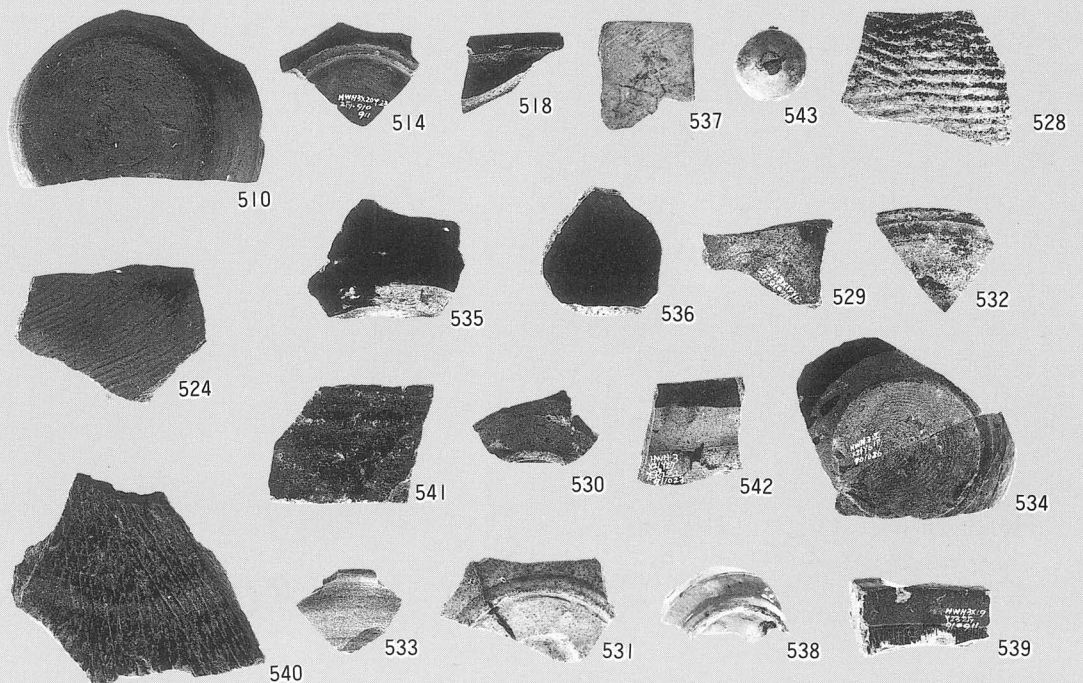
1. SD10  
(Y2~40区)



2. SK61  
(556~561)  
SK62  
(570~572・  
574・575)  
SE201  
(577・582)



(古代以降)  
3. SD10上層  
(Y2~40区)





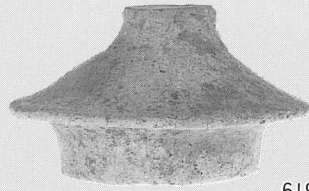
図版第24

遺構・遺構外の  
出土遺物  
(弥生土器)



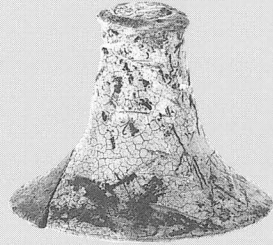
564

1



619

2



572

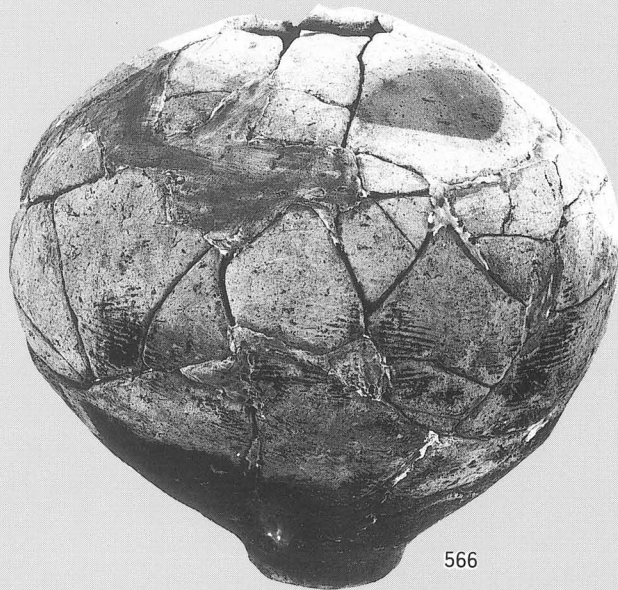
3

1. 3. 5. SK62  
2. 遺構外出土  
(1/2)



544

4



566

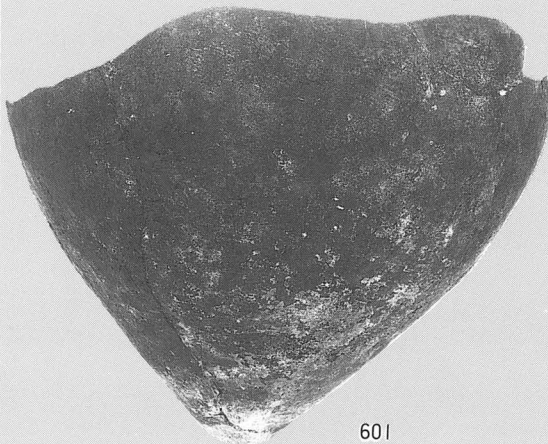
5

4. SK22



563

6



601

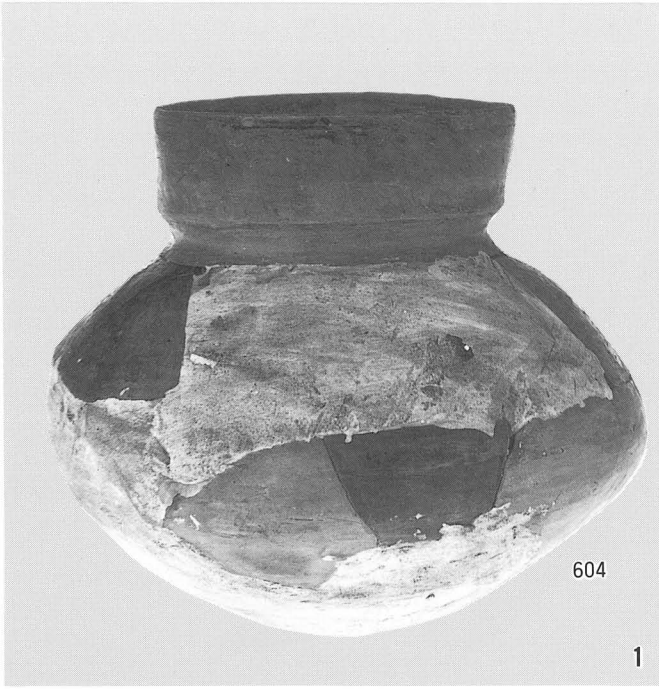
7

6. SK61  
7. SE201

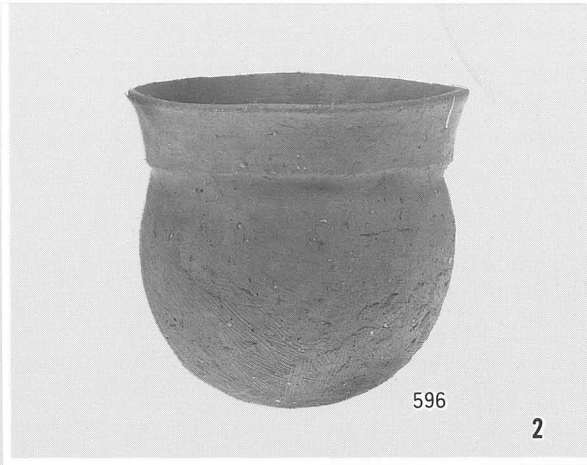


図版第25

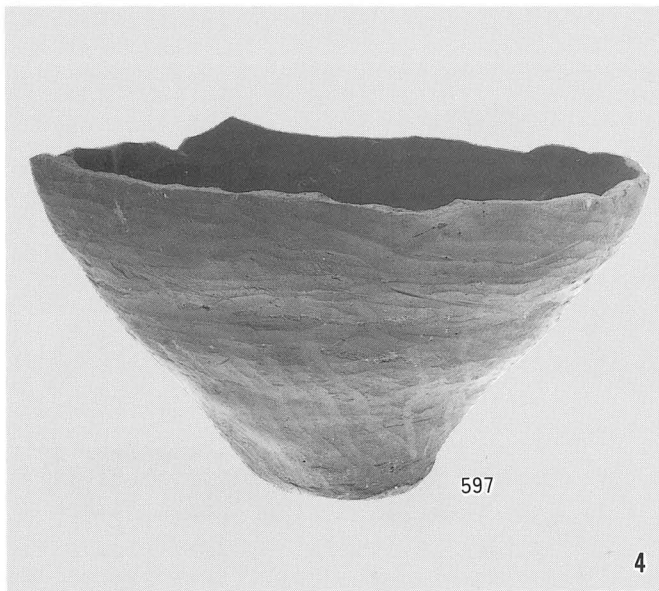
遺構・遺構外の  
出土遺物  
(弥生土器)



1



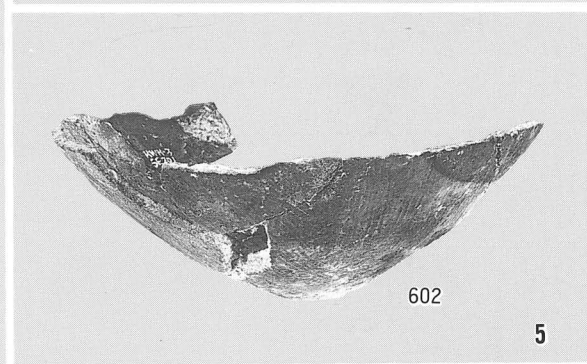
2



4



3



5

1~5. SE201  
(1は1/2)



6



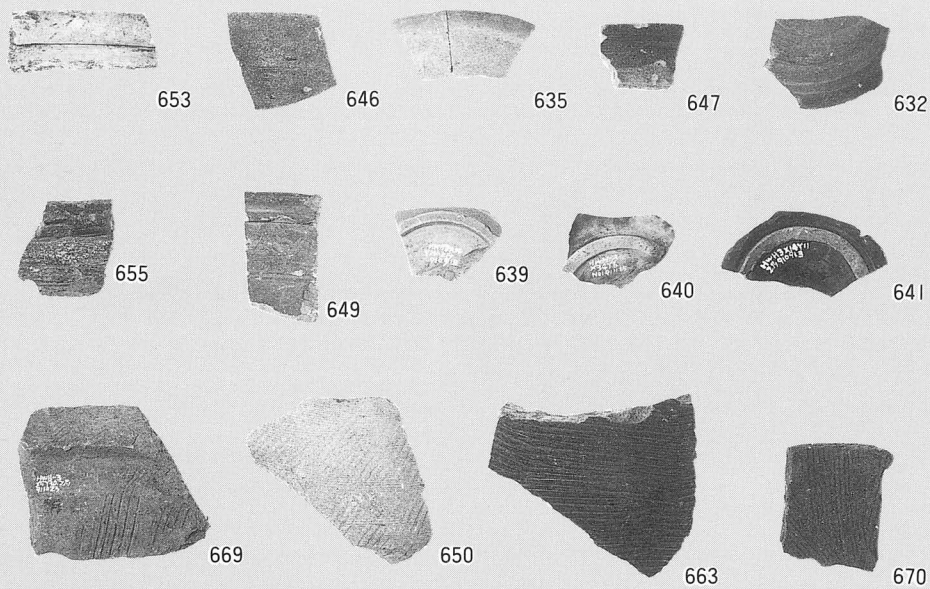
7

6. X22Y48区  
7. X22・23  
Y44・45区



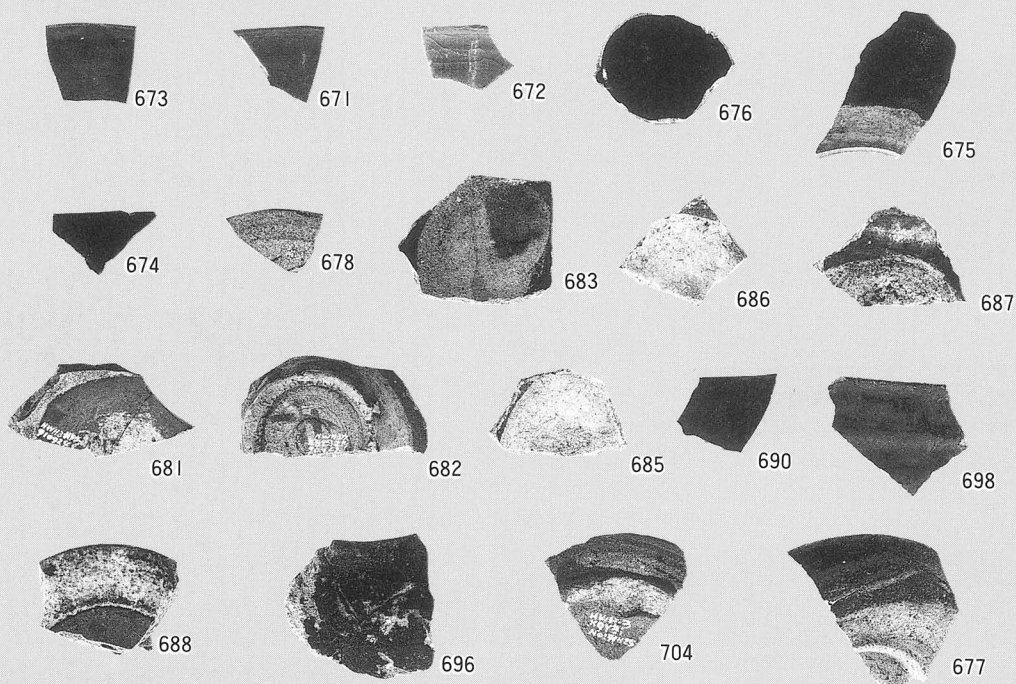
図版第26

包含層の出土遺物  
(古代以降)



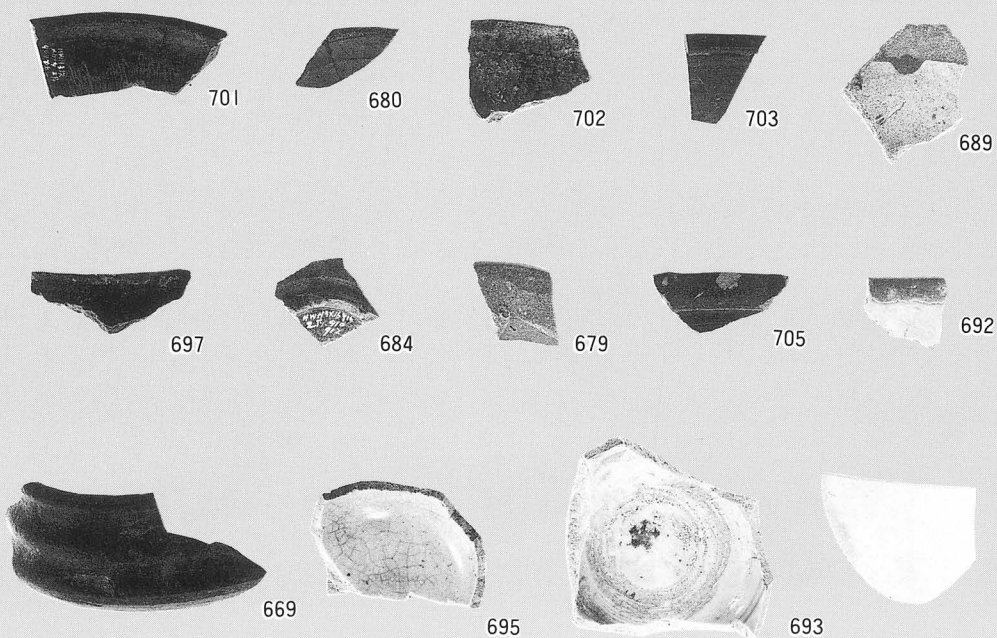
1

1. X4~25  
Y3~40区



2

2. X4~25Y3~40区  
671~678  
681~683  
685~688  
690  
X8~25Y8~25区  
696・698・704



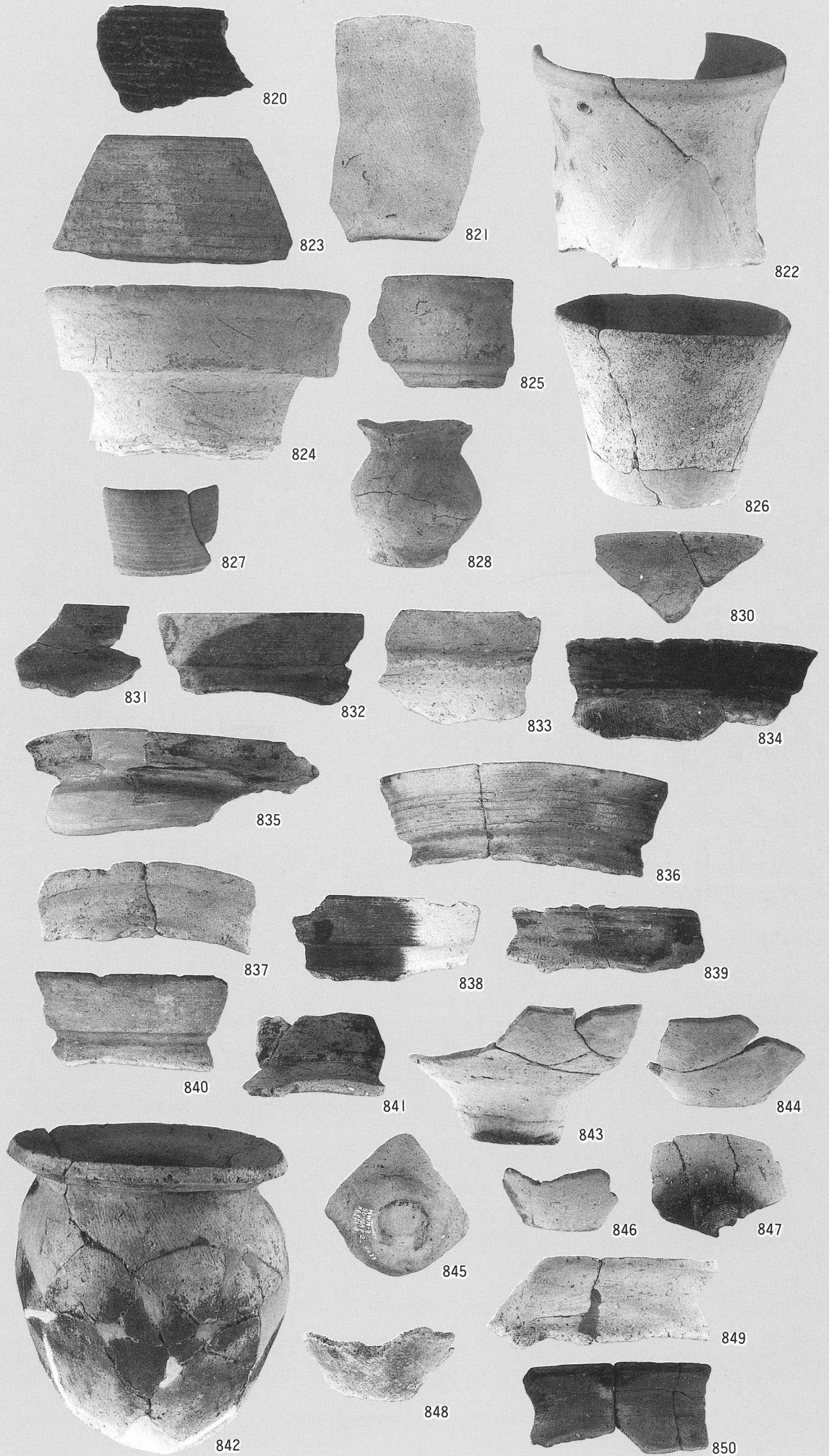
3

3. X4~25Y3~40区  
679・680・684  
689・691・692  
X8~25Y8~25区  
693・695・697  
699・701~703  
705

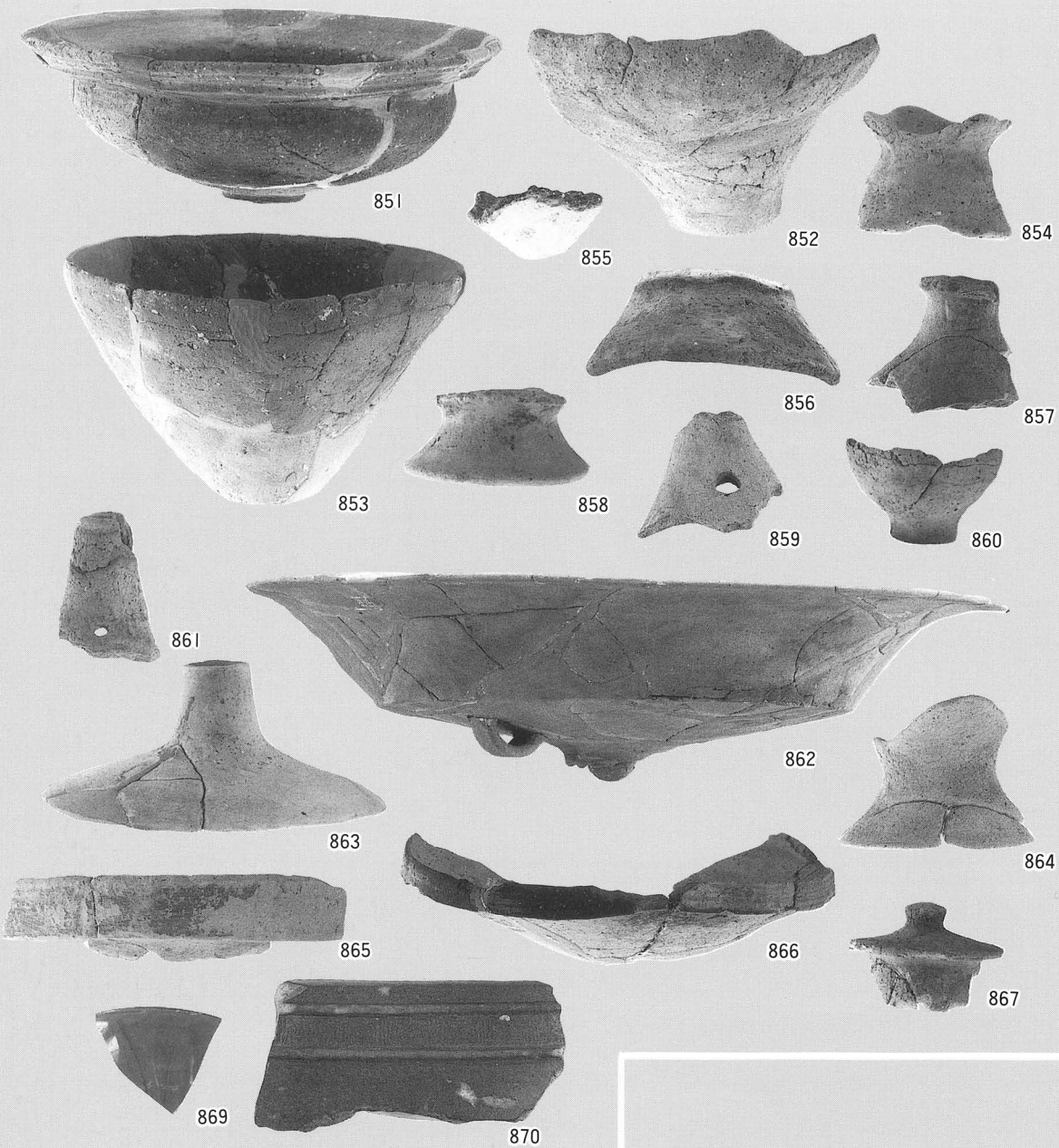


図版第27

遺構の出土遺物  
SD10  
(Y36~76区)

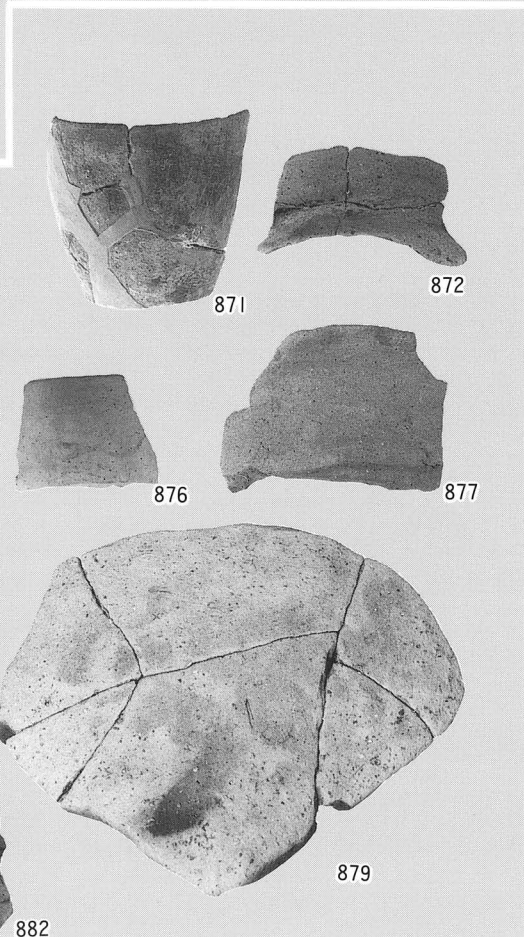






1. SD10  
(Y36~76区)

1



2

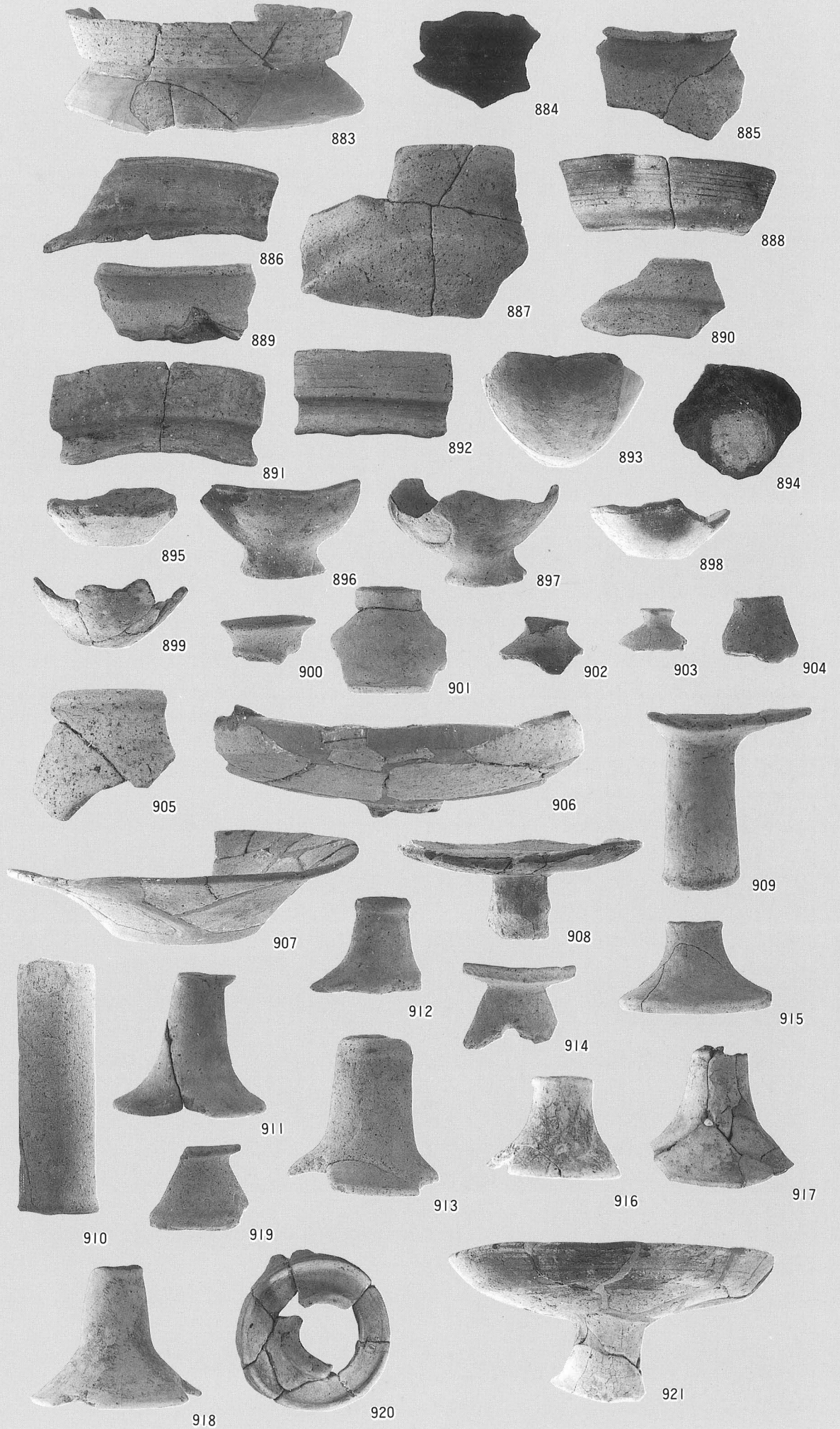
2. SD10B



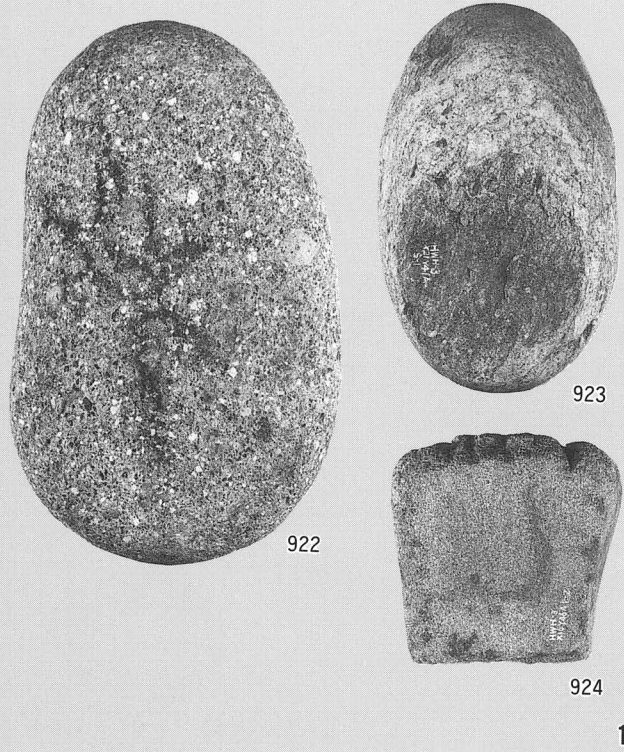
図版第29

遺構の出土遺物  
(弥生土器)

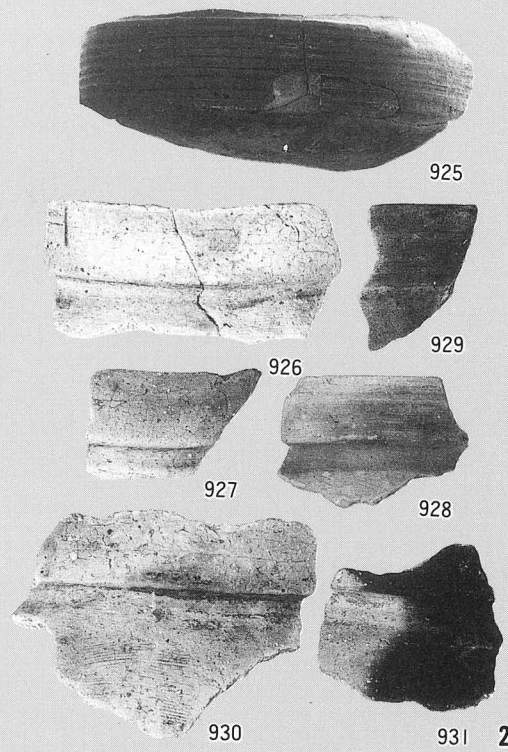
SD10B





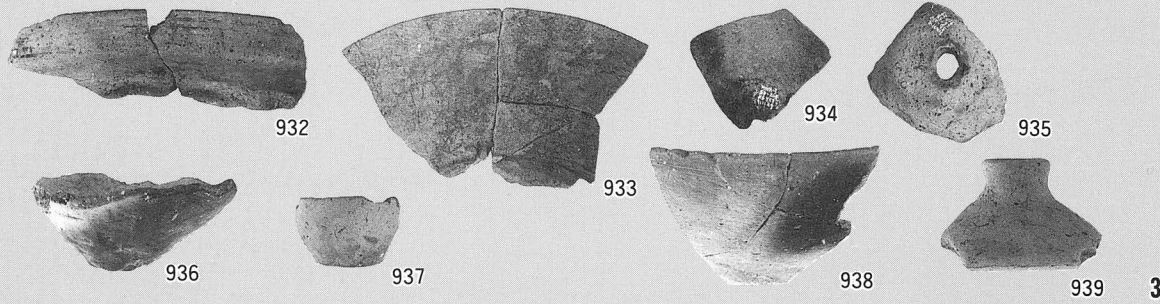


1



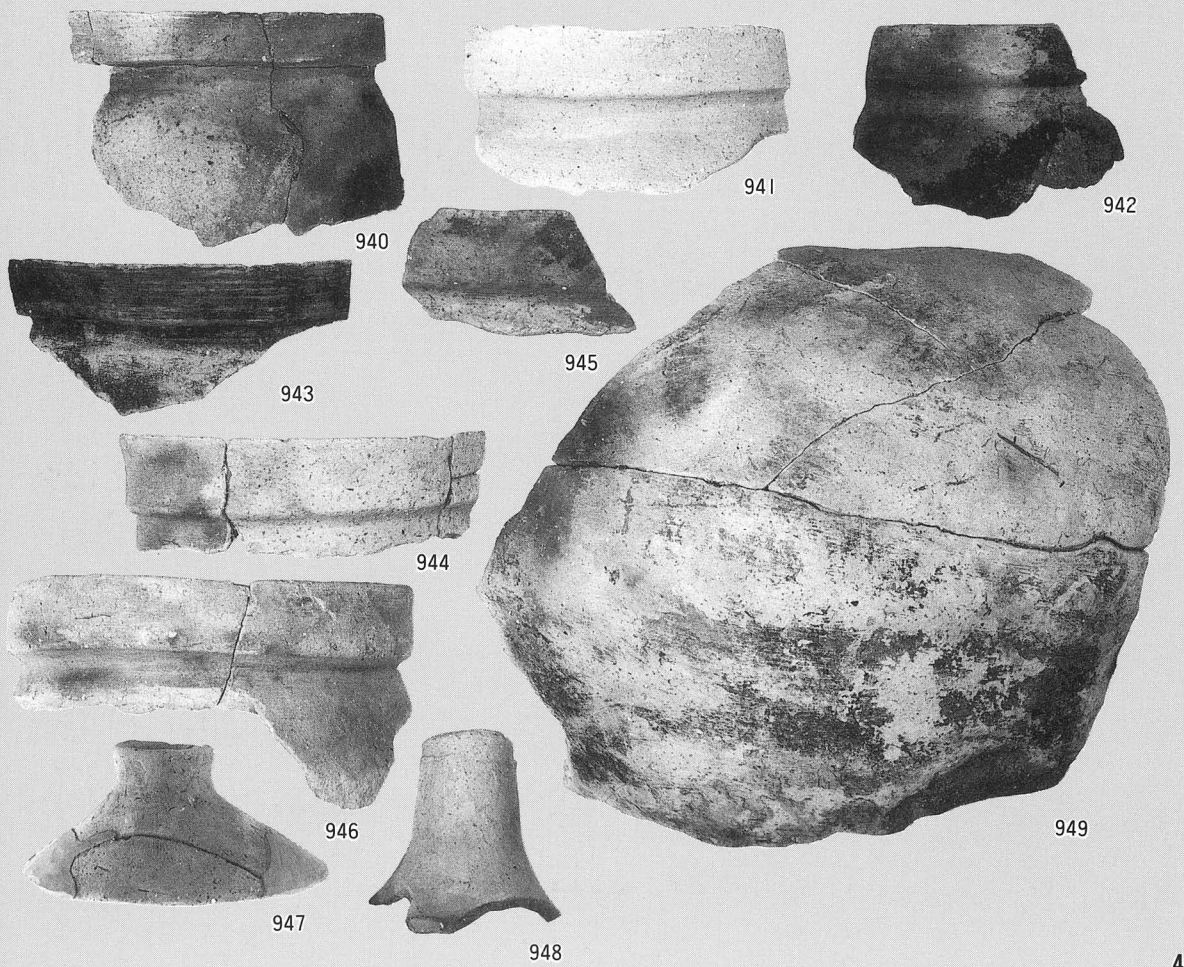
2

1. SD10B  
2. SD200



3

3. SD203



4

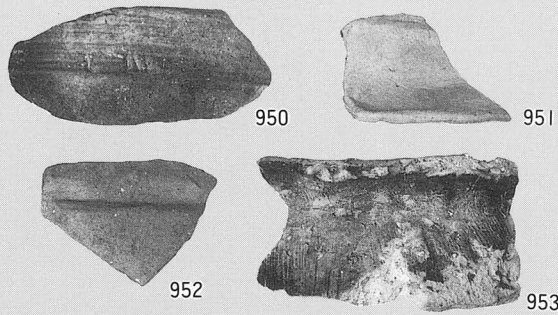
4. SK201



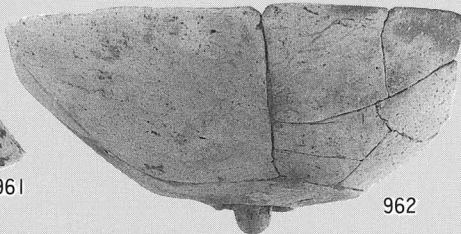
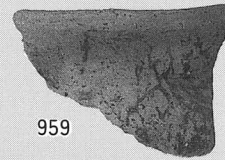
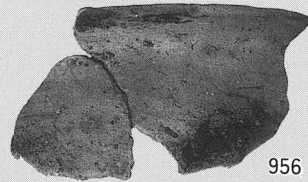
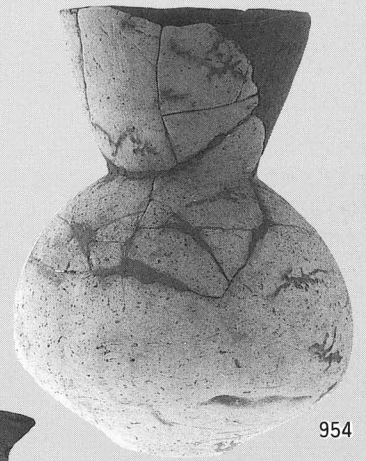
図版第31

遺構の出土遺物  
(弥生土器)

1. SK202

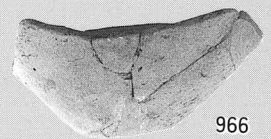
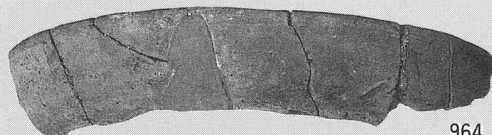


1



2. SK206

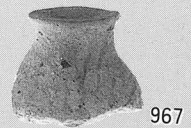
2



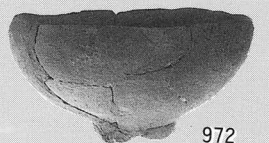
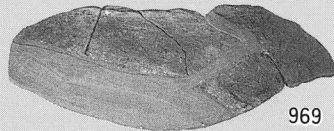
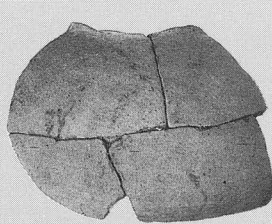
3. SK208  
4. SK210



3

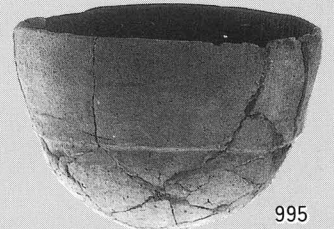
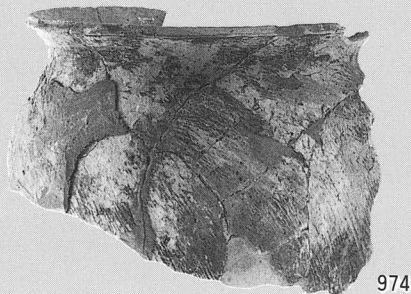
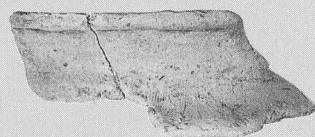


4



5. SK211

5



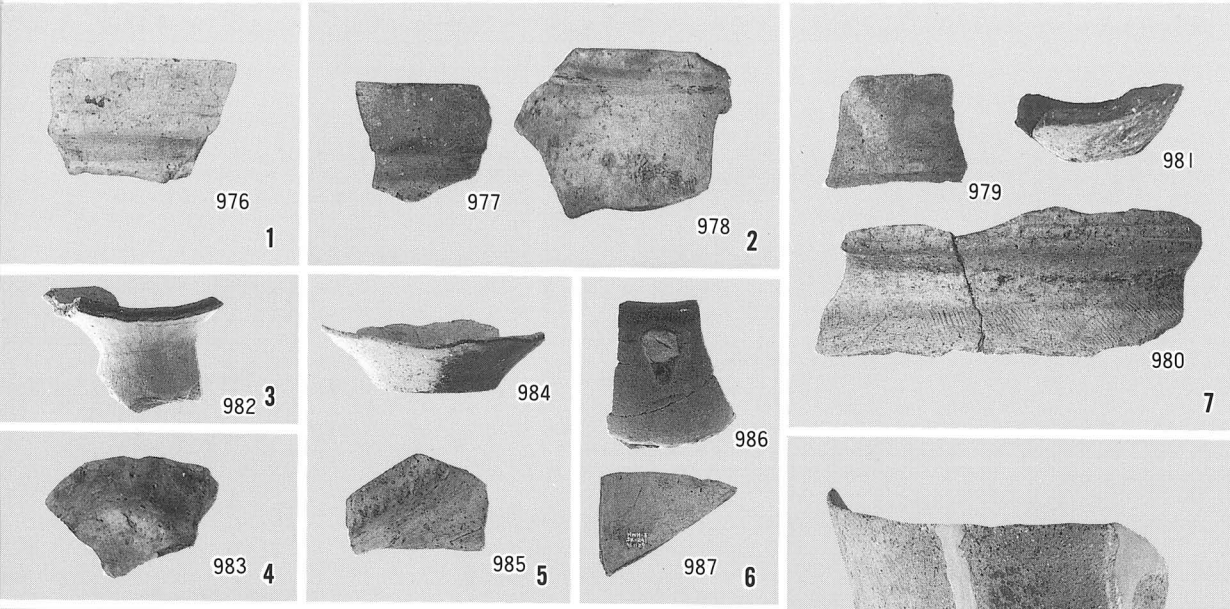
6. SK220

6

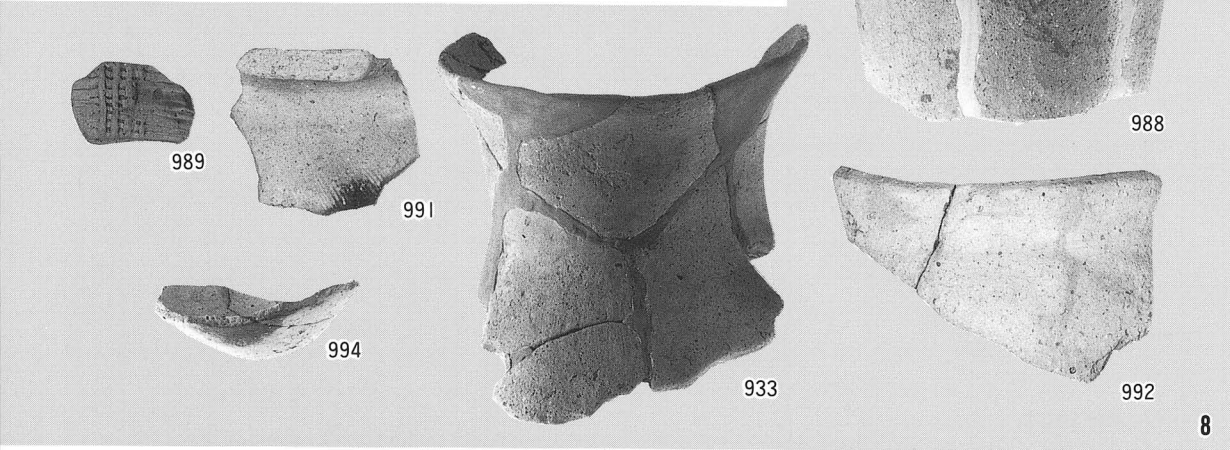


図版第32

遺構の出土遺物

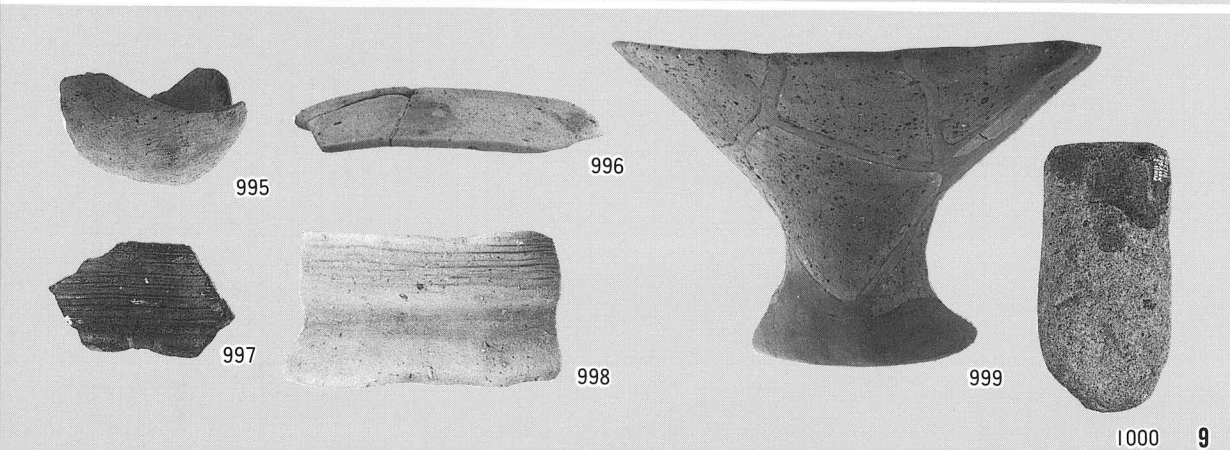


- 1. SK224
- 2. SK227
- 3. SK236
- 4. SK238
- 5. SK239
- 6. SK241
- 7. SK237

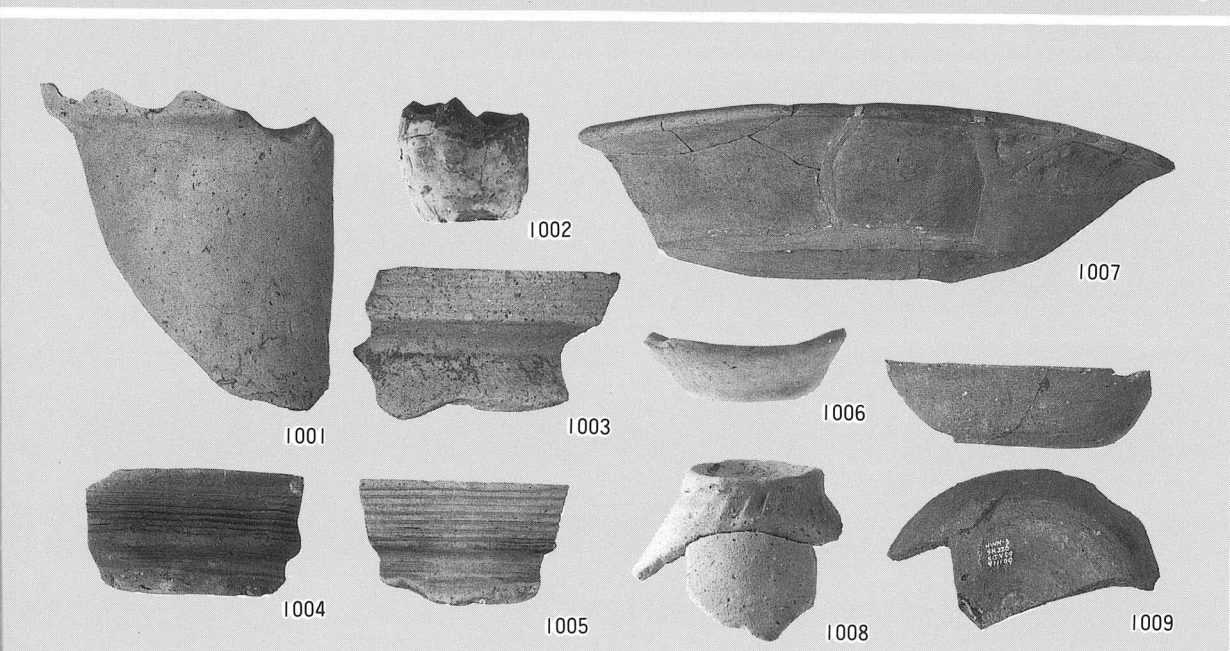


遺構外の出土遺物

- 8. X 1 ~ 5  
Y36 ~ 51区



- 9. X7 ~ 11  
Y43 ~ 51区

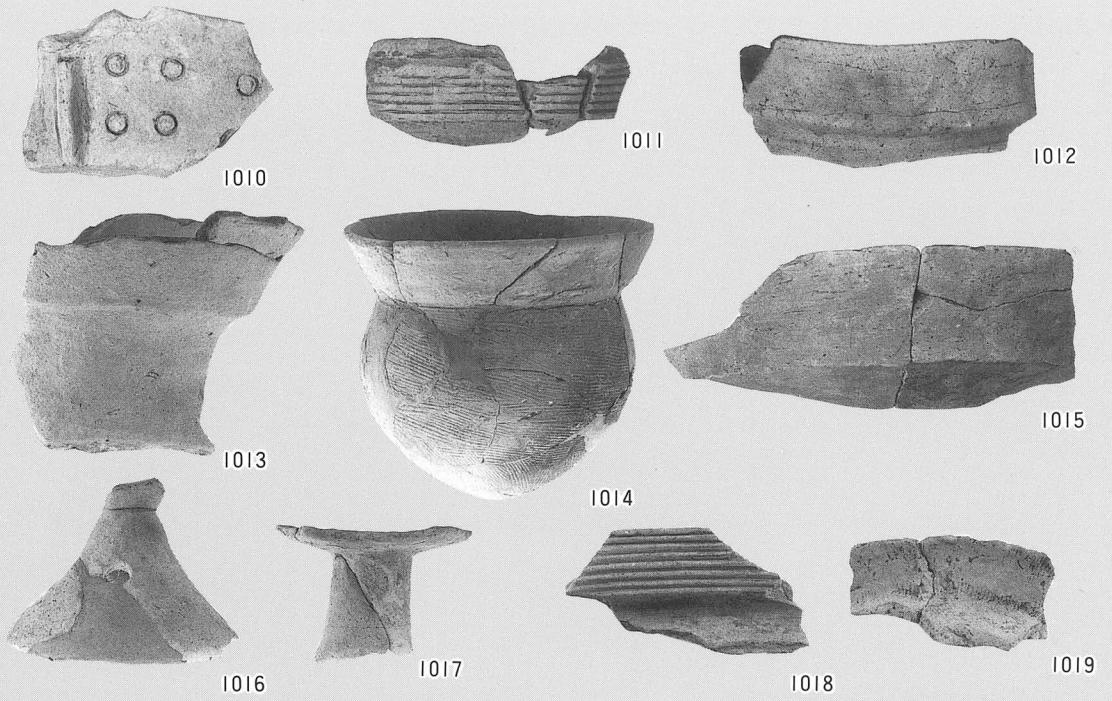


- 10. X16Y51 ~ 61区



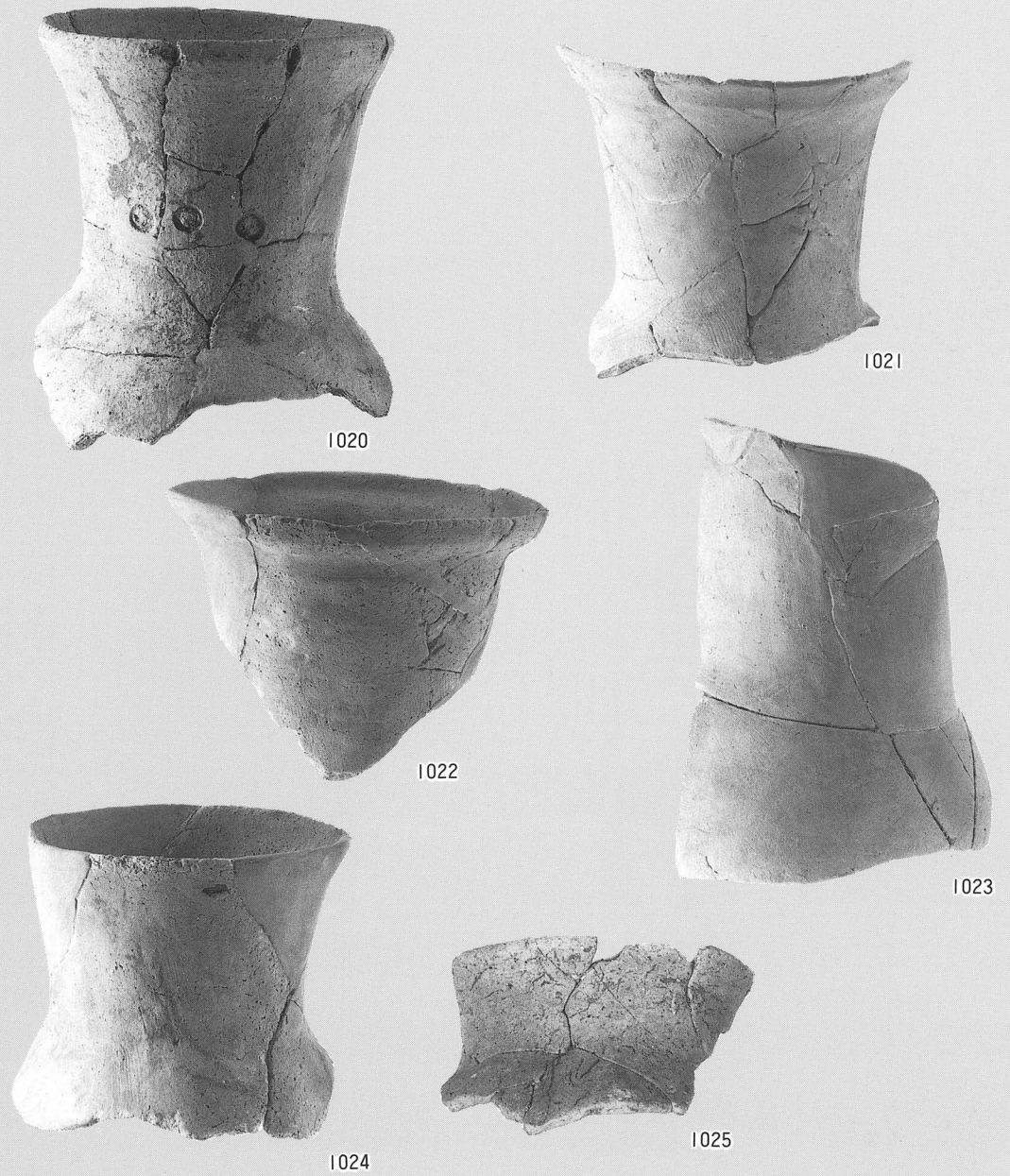
図版第33

遺構外の出土遺物  
(弥生土器)



1. X18~21  
Y36~70区

1



2. X1Y56区

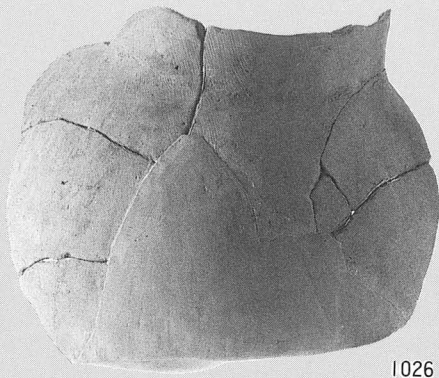
2



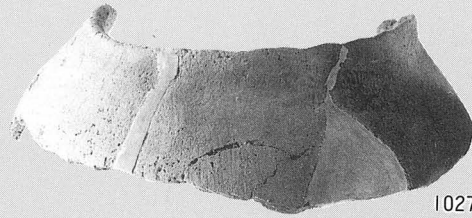
図版第34

遺構外の出土遺物  
(弥生土器)

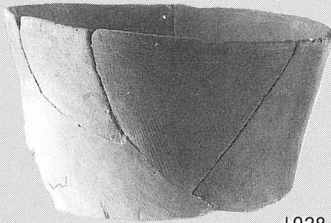
X1Y56区



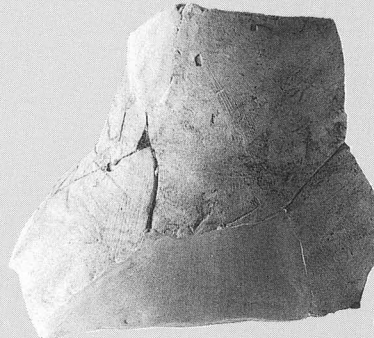
1026



1027



1028



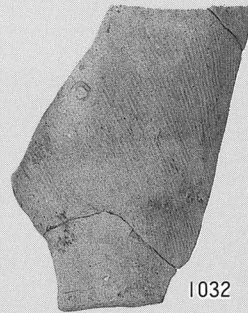
1029



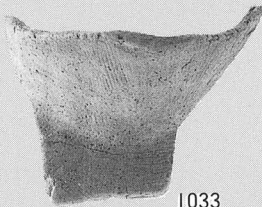
1030



1031



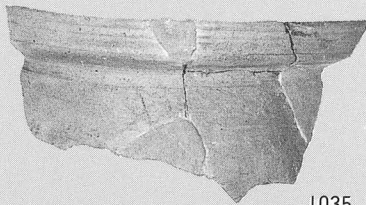
1032



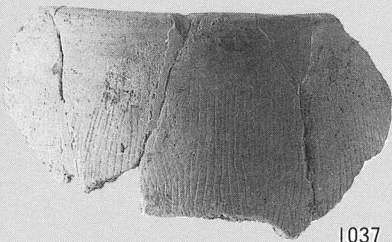
1033



1034



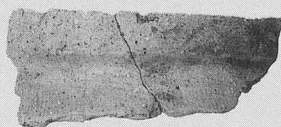
1035



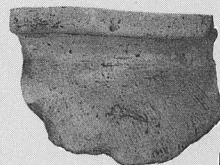
1037



1036



1038



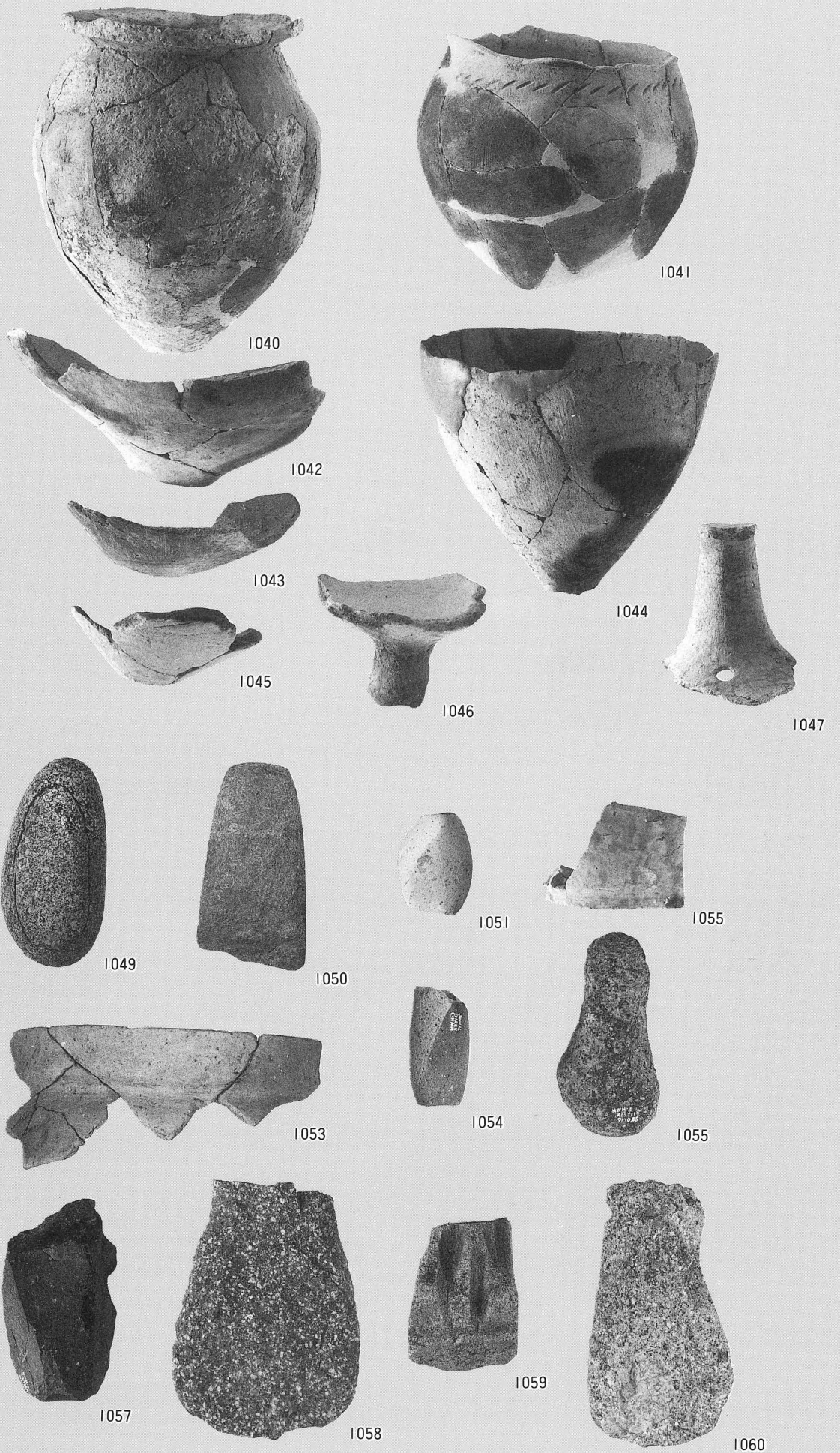
1039



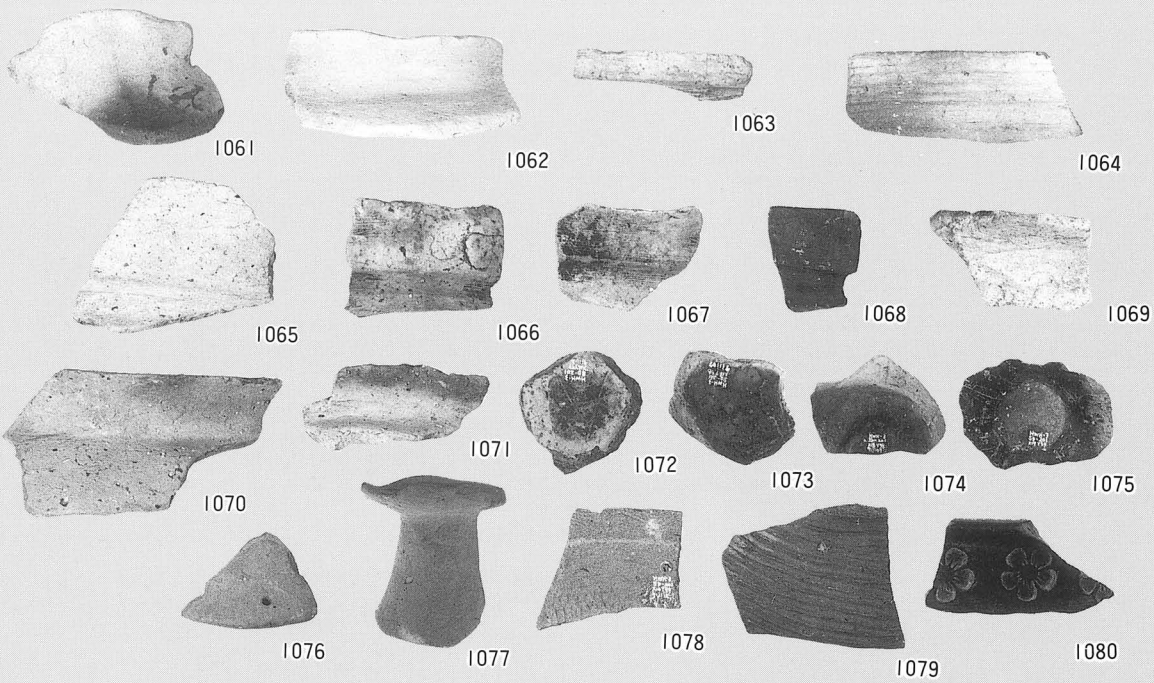
図版第35

遺構外の出土遺物  
(弥生土器  
石器)

X1Y56区

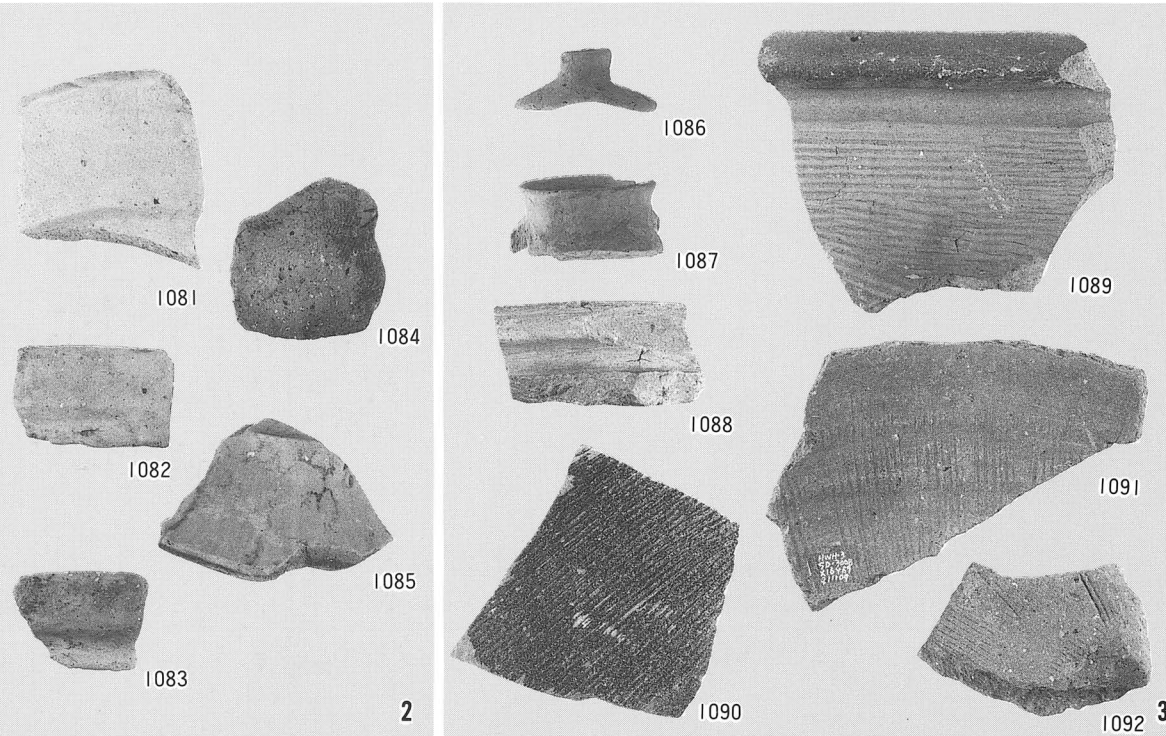






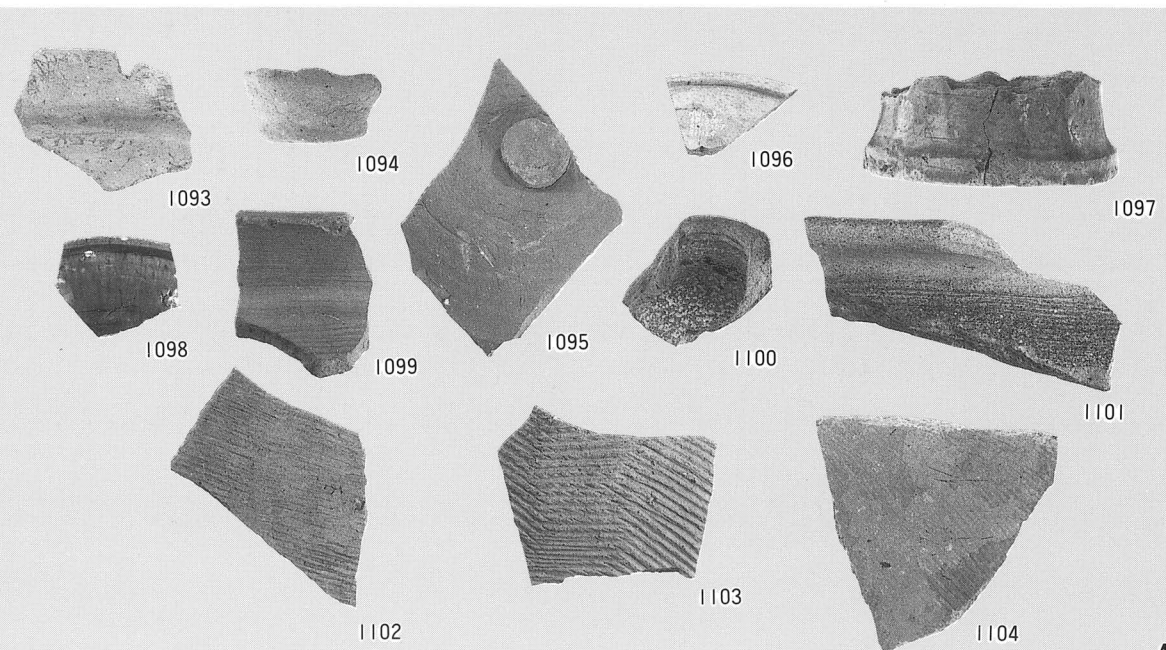
1. SD201

1



2. SD300A  
3. SD300B

3



4. SD300C

4



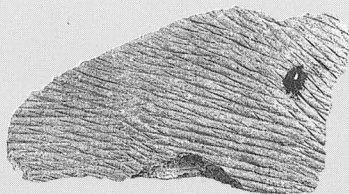
図版第37

遺構の出土遺物  
(中世)

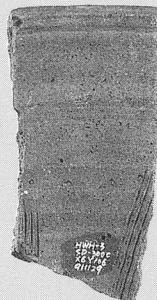
SD300C



1105



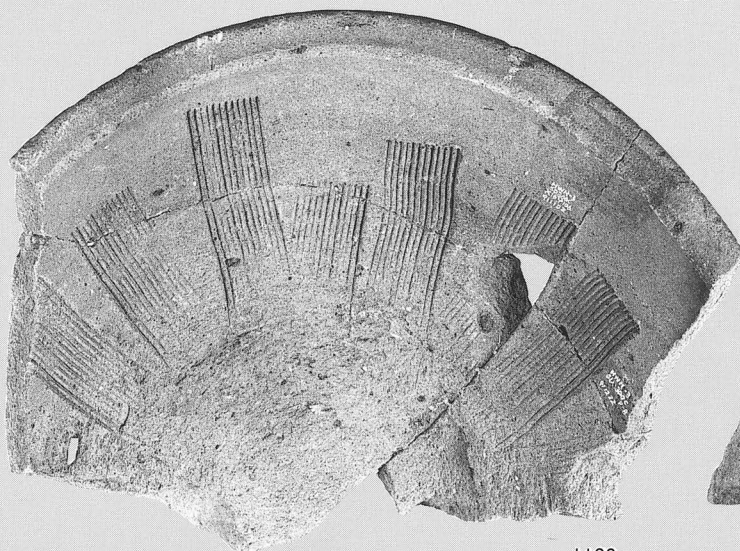
1106



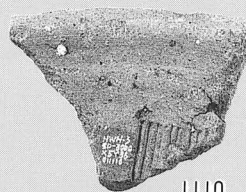
1108



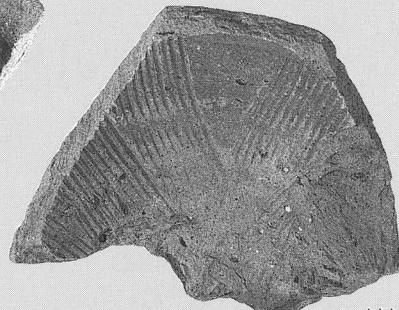
1107



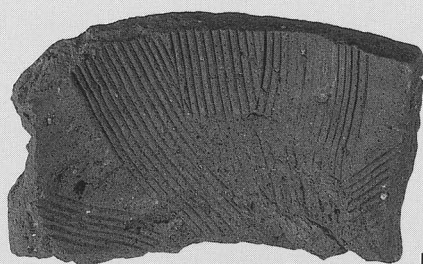
1109



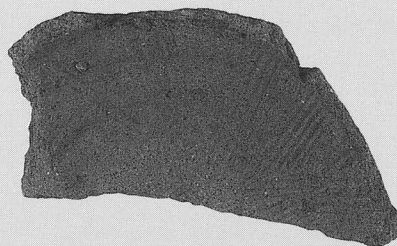
1110



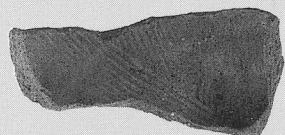
1111



1112



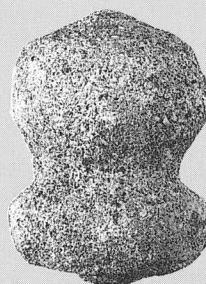
1113



1114



1115

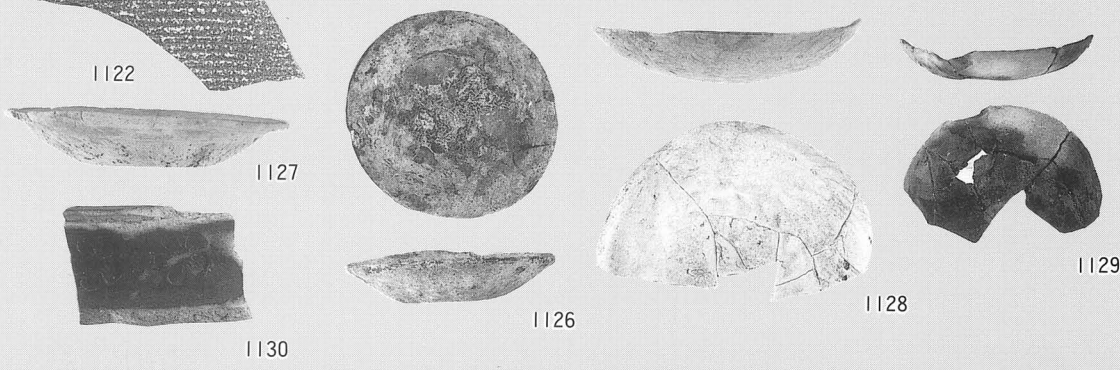
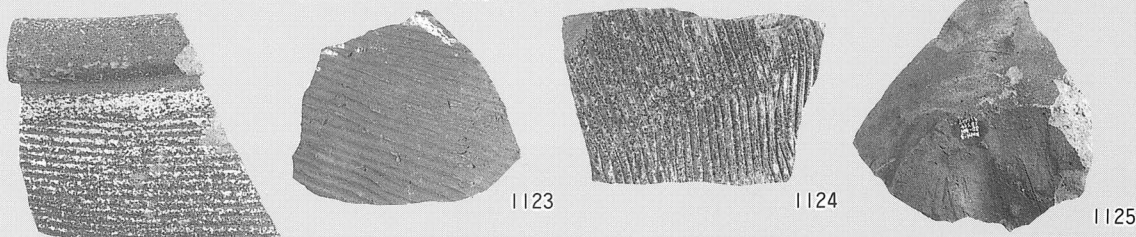
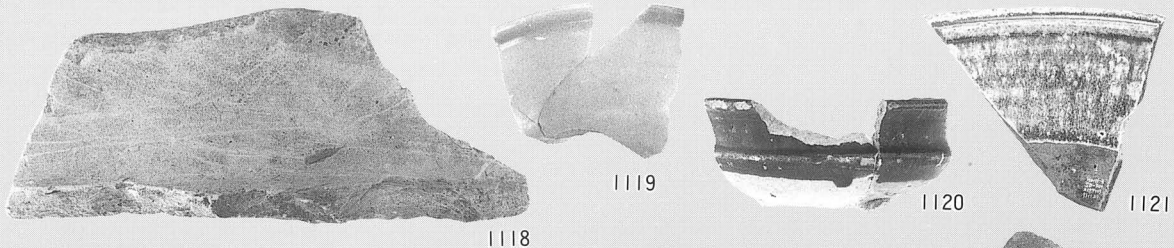


1116



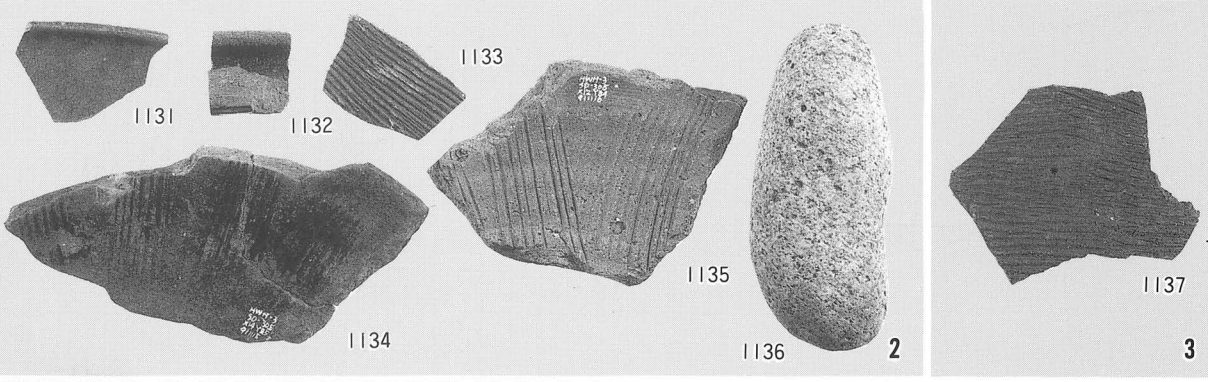
1117





1. SD301

1



2. SD305

3. SK622

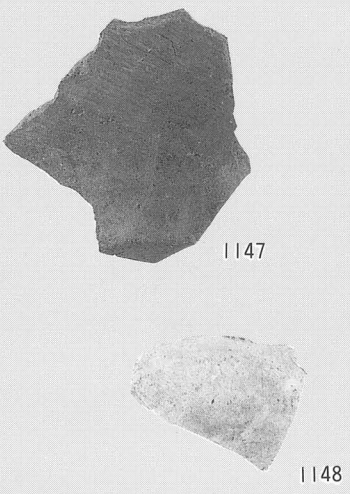
2

3

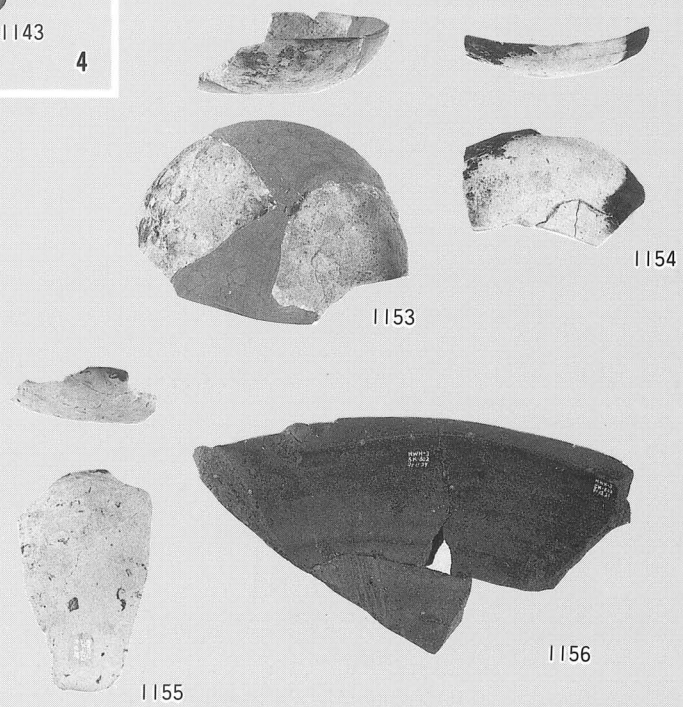


4

4. SD302



5



6

5. SE600

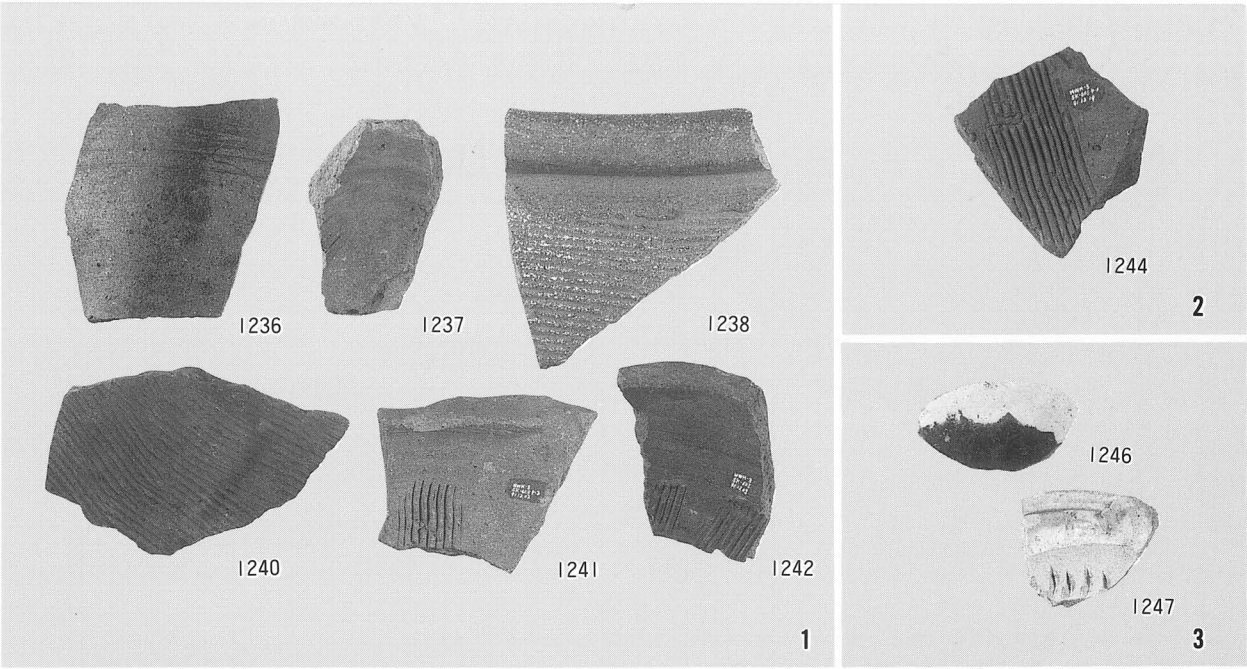
6. SE602



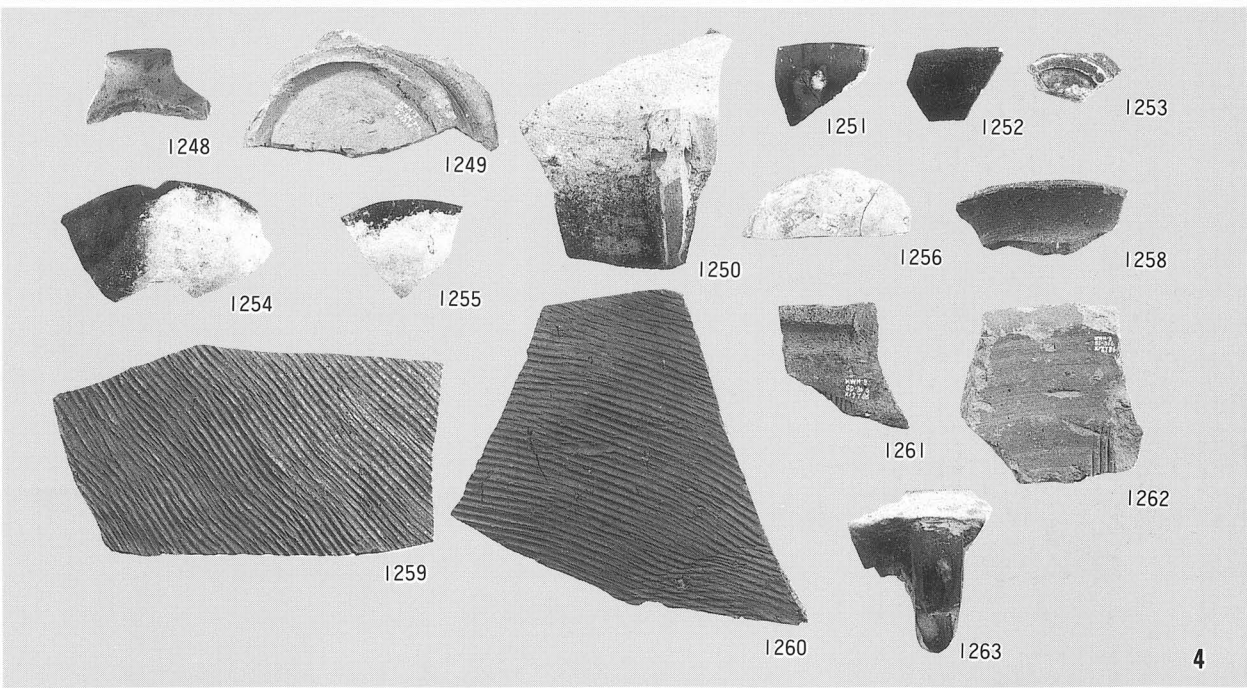
図版第39

遺構の出土遺物

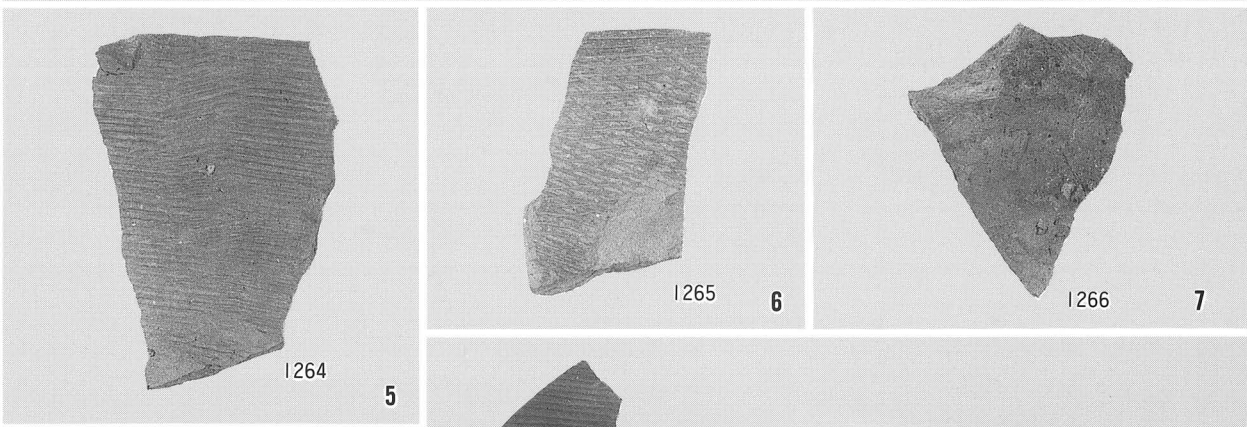
- 1. SE603
- 2. SE606
- 3. SE607



- 4. SD306



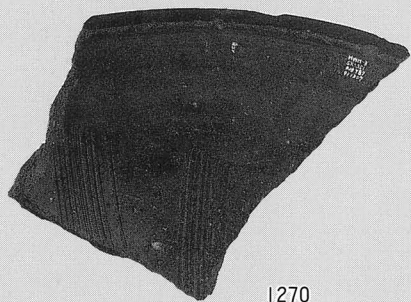
- 5. SK330
- 6. SK337
- 7. SK340



- 8. SK344





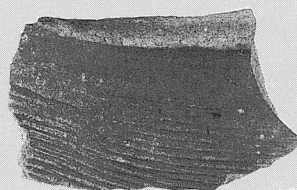


1

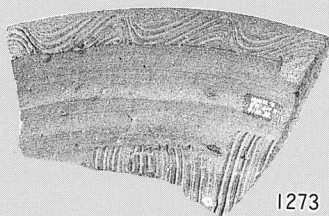


1271

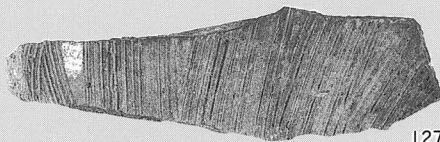
2



1272



1273



1274

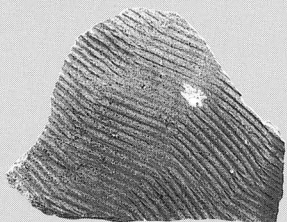
3

- 1. SK351
- 2. SK609
- 3. SK611

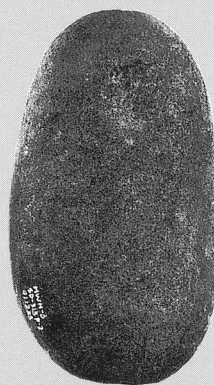


1275

4



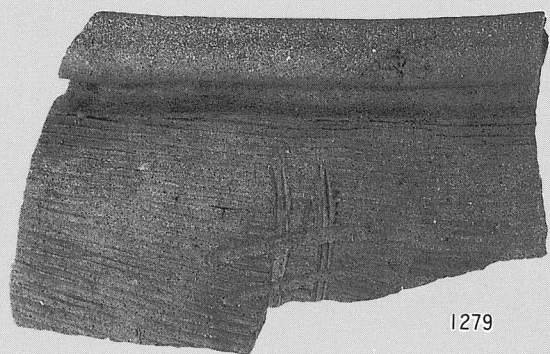
1277



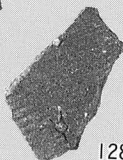
1278

5

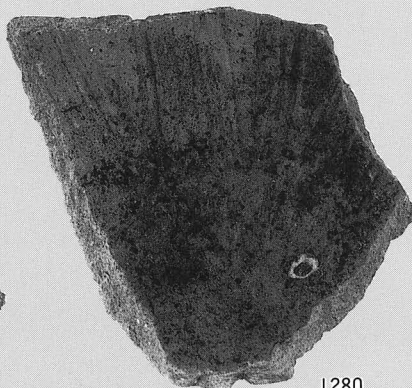
- 4. SK620
- 5. SD315



1279



1281



1280

6

- 6. SK358



図版第41

遺構外の出土遺物

1. 中国製磁器  
(内面)

白磁

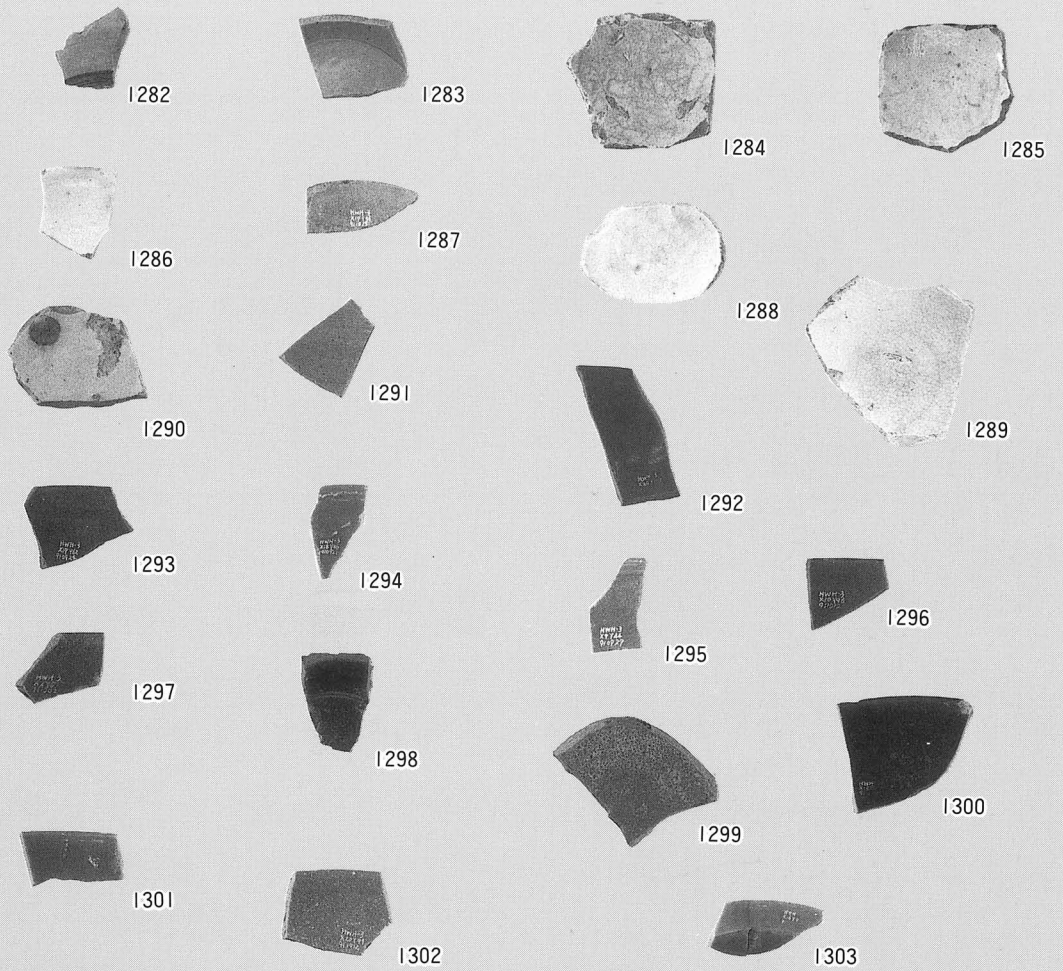
1284~1290

青白磁

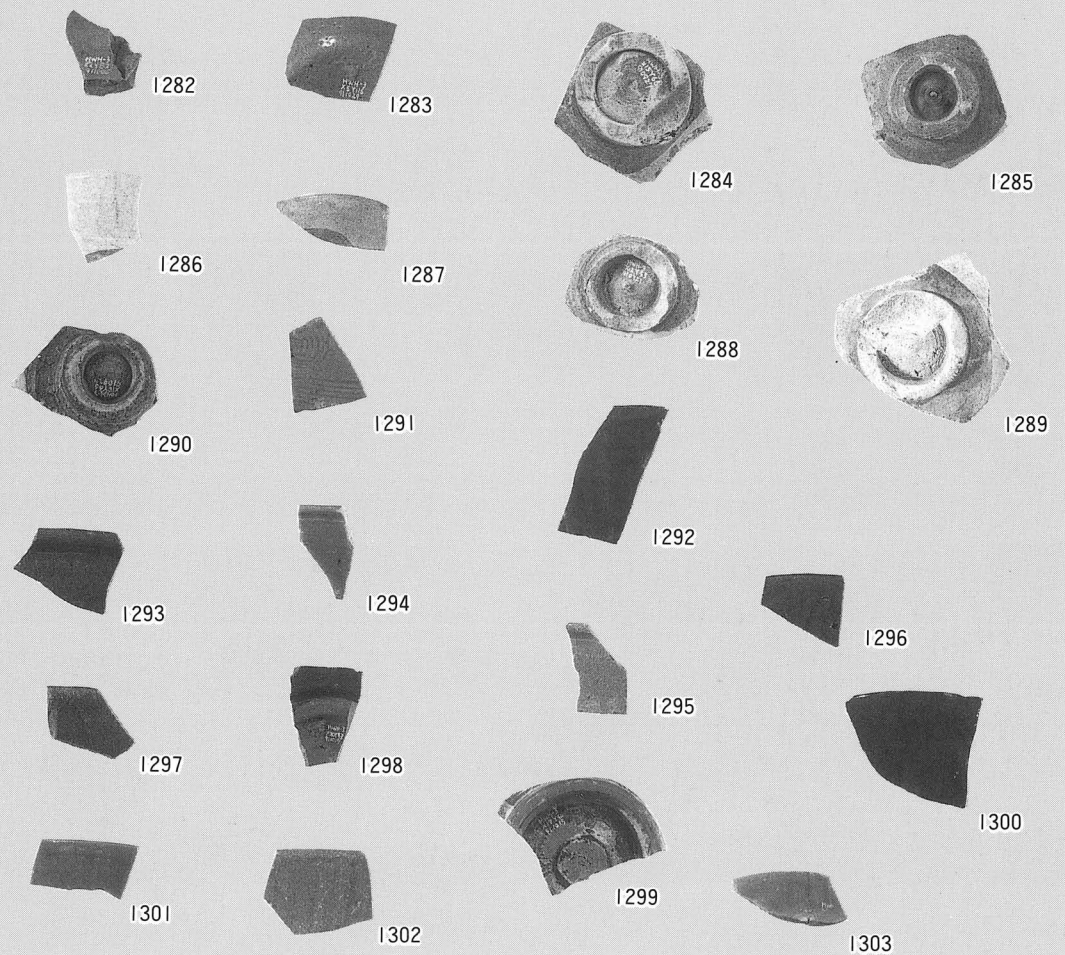
1291

青磁

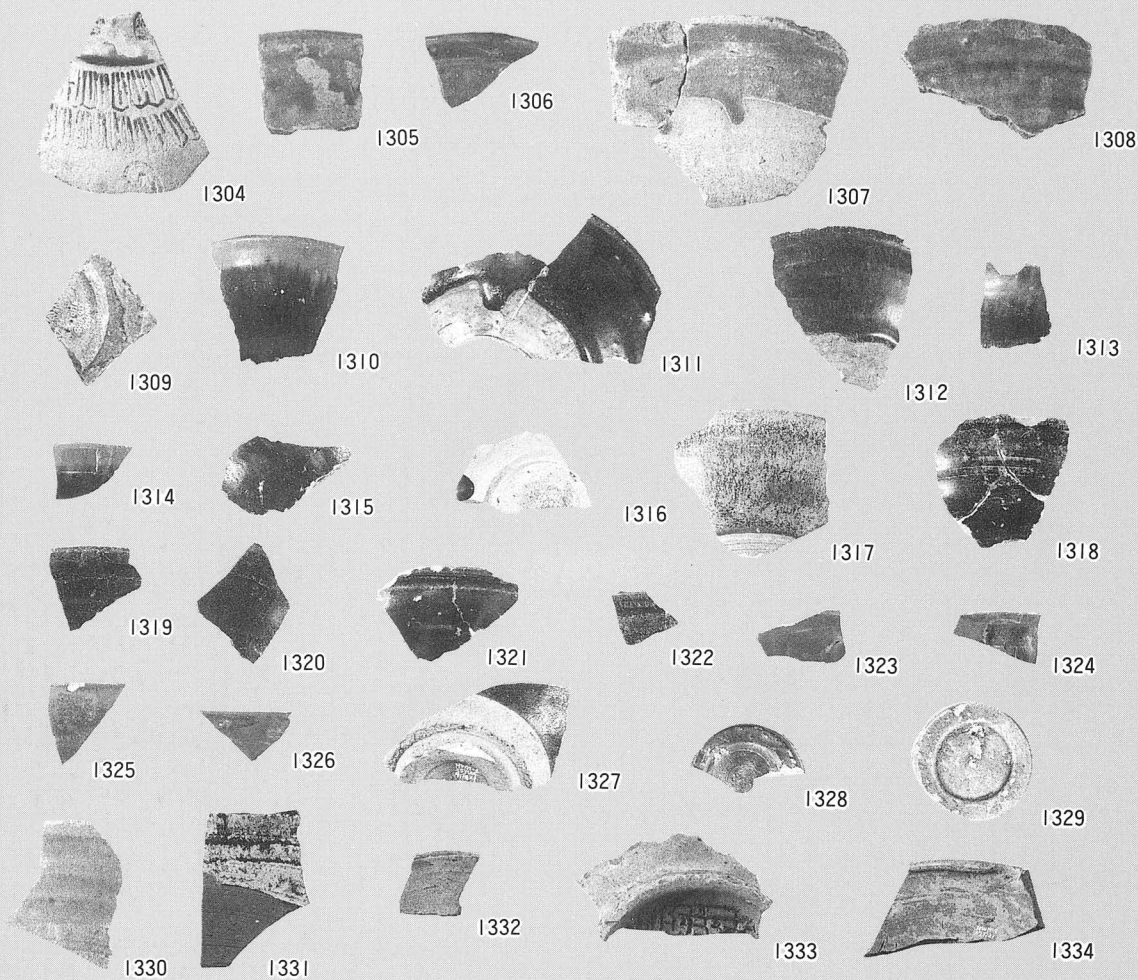
1292~1303



2. 中国製磁器  
(外面)

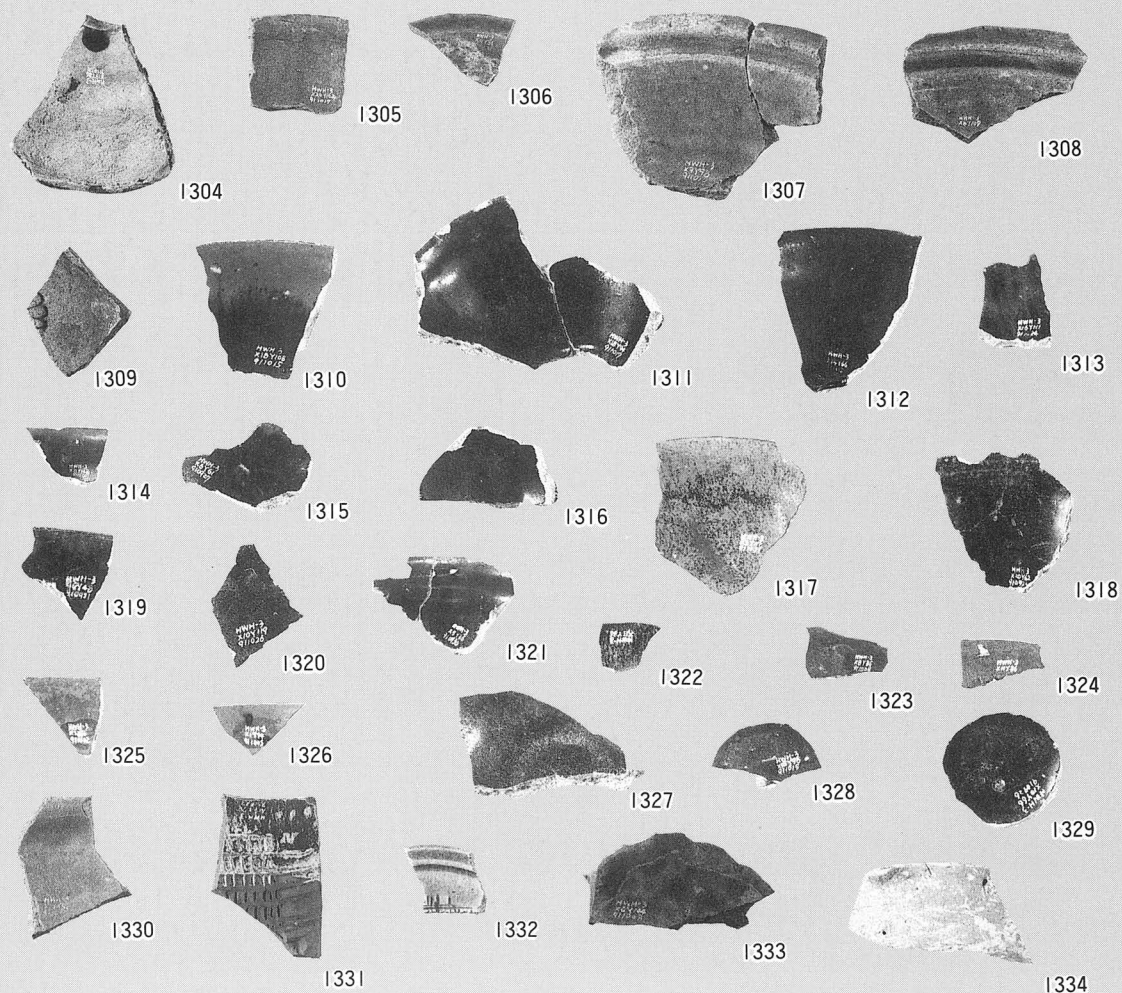






1

1. 国産陶磁器  
(外面)  
瀬戸・瀬戸美濃

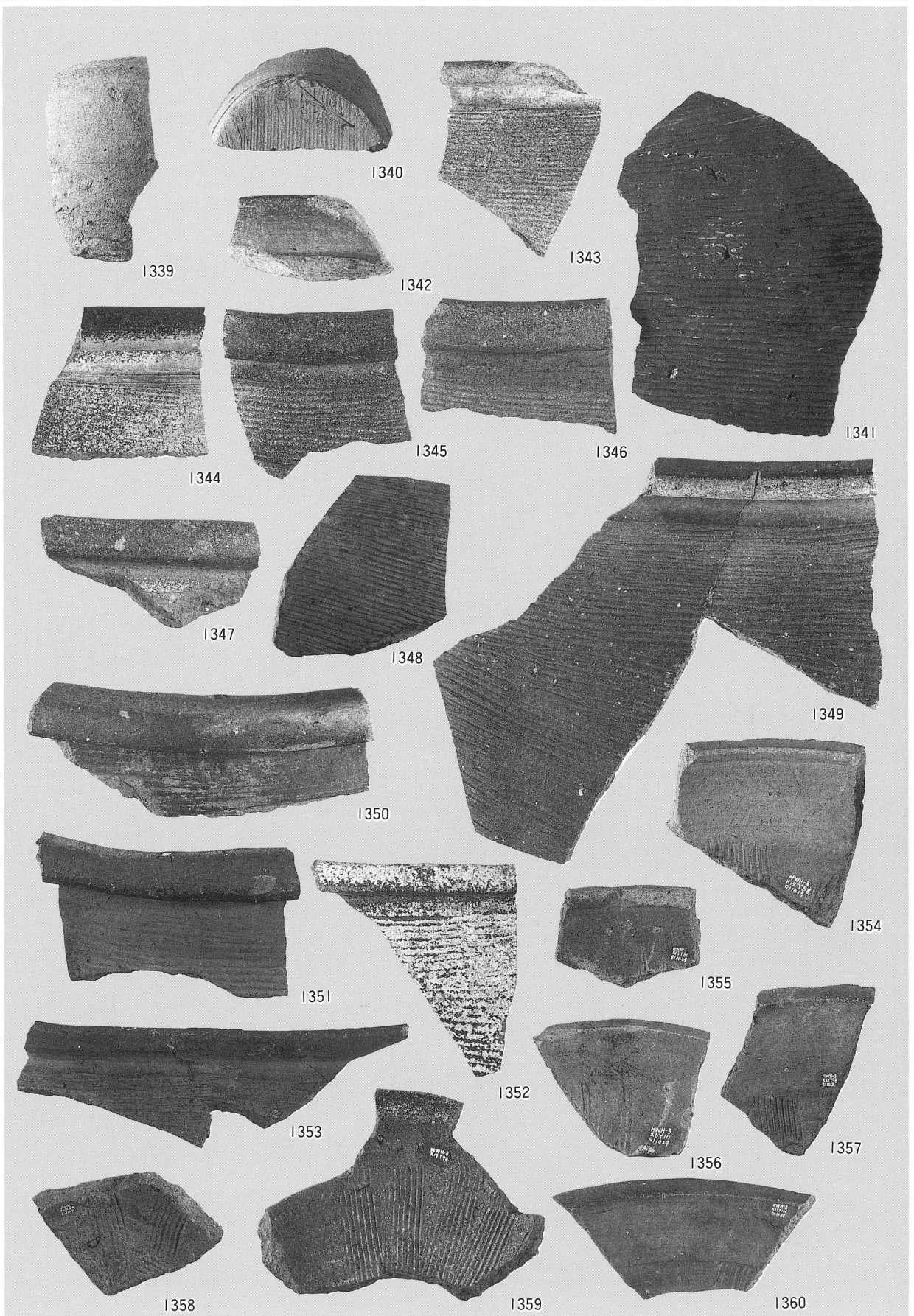
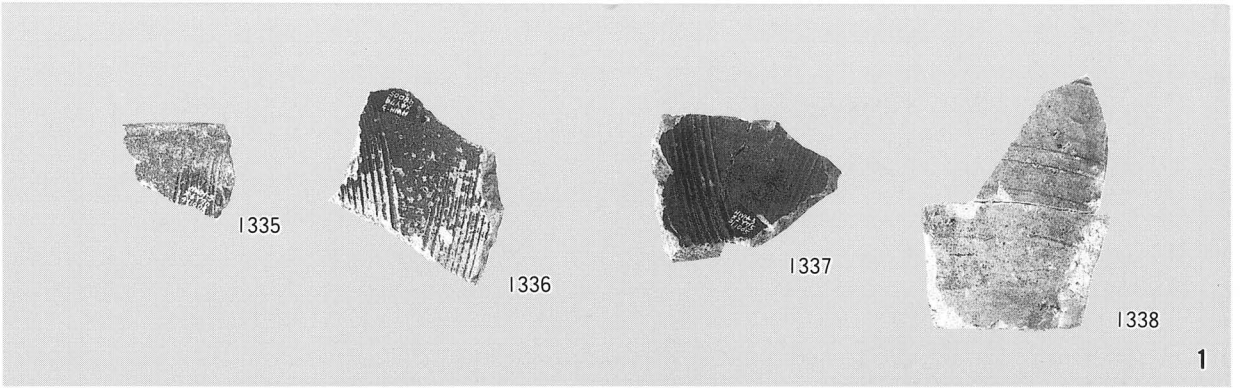


2

2. 国産陶磁器  
(内面)

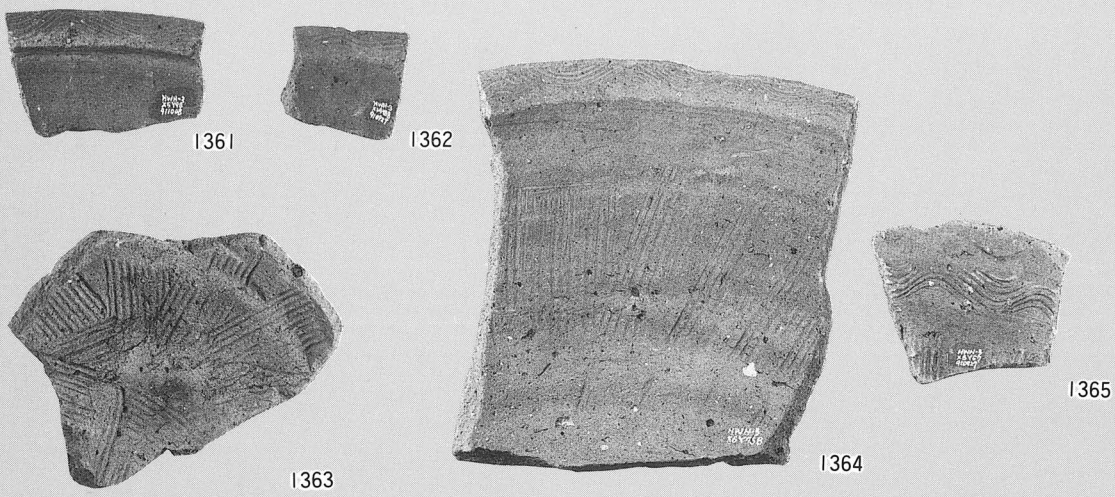


1. 国産陶磁器  
瀬戸美濃



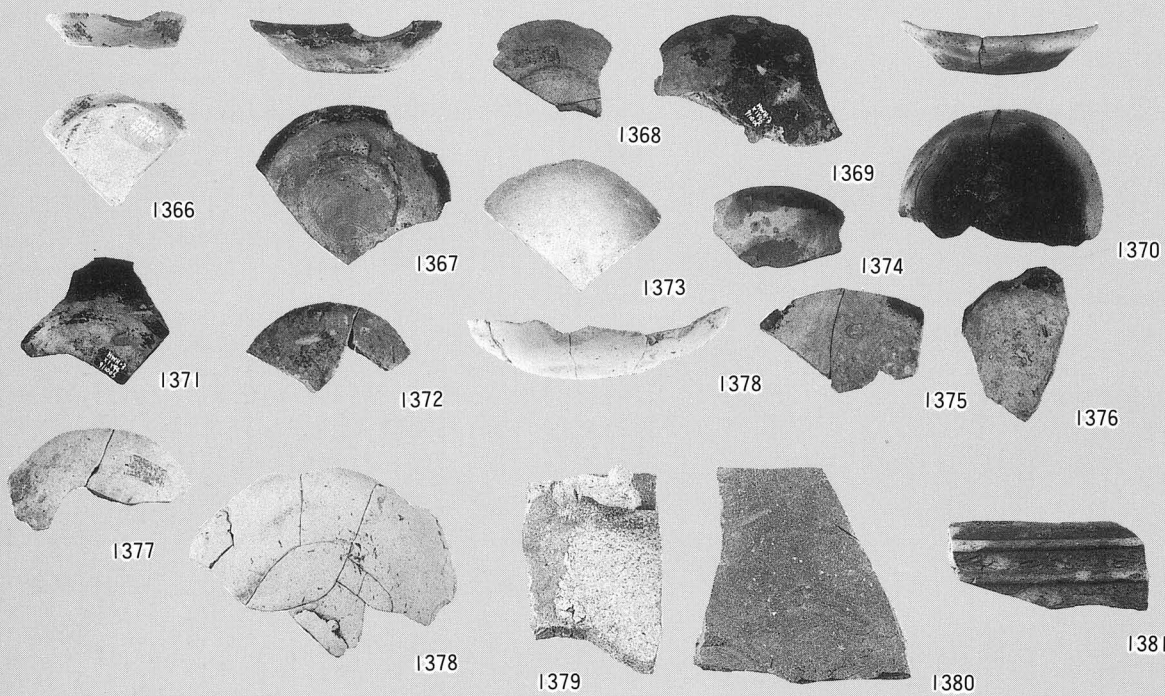
2. 珠洲





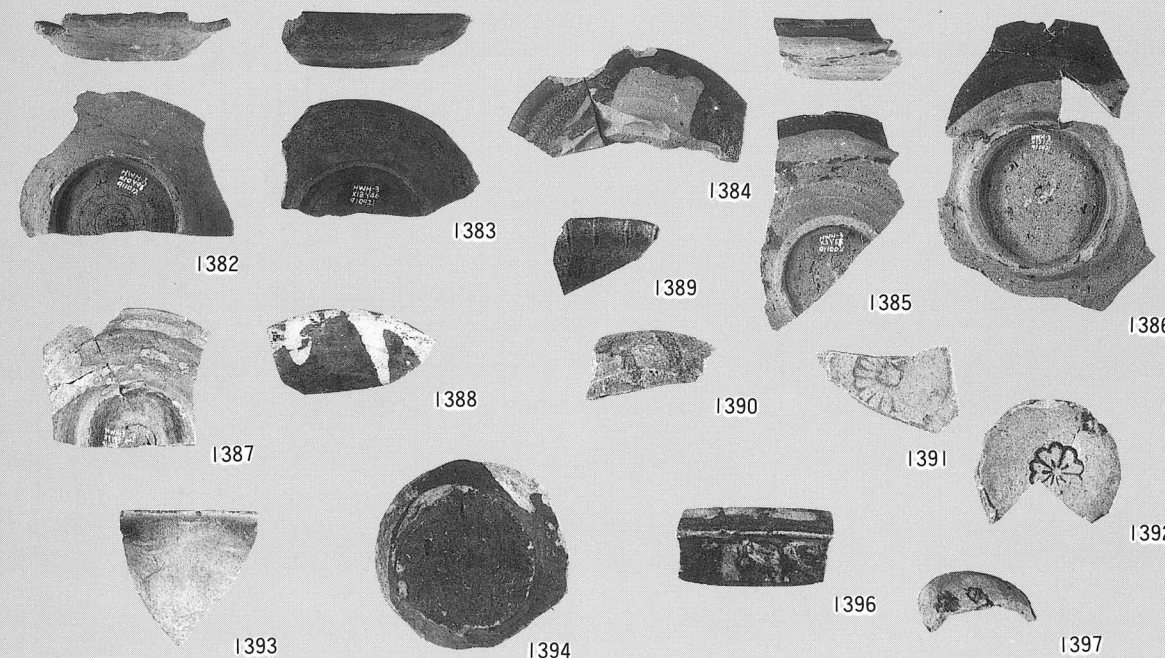
1. 珠洲

1



2. 土師皿  
八尾焼  
瓦質土器

2



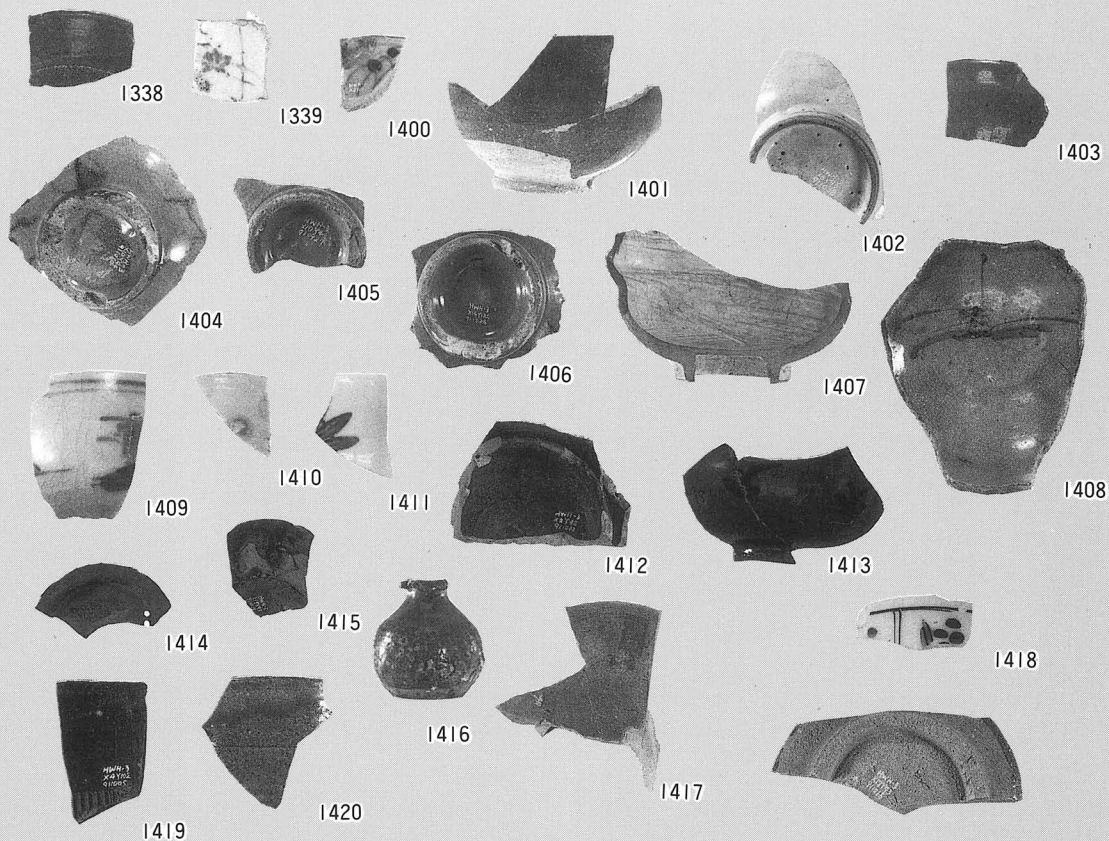
3. 越中瀬戸

3



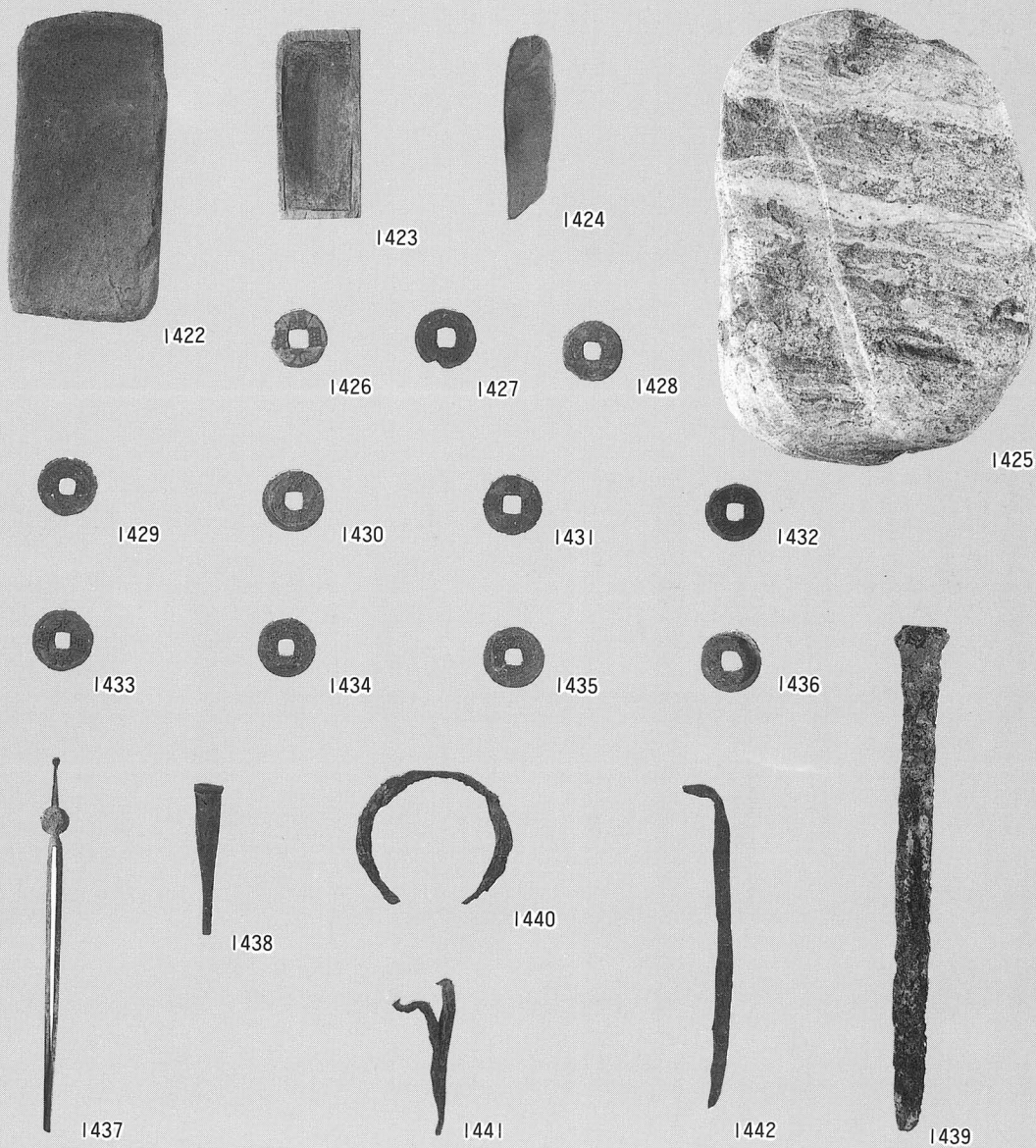
図版第45

遺構外の出土遺物



1. 肥前系  
 (1398~1412)  
 関西系  
 (1413・1414)  
 九州系  
 (1415)  
 産地不明  
 (1416~1421)

1



2. その他  
 石製品  
 (1422~1425)  
 銅製品  
 (1426~1438)  
 鉄製品  
 (1439~1442)

2



図版第46

遺構の出土遺物  
(弥生時代)



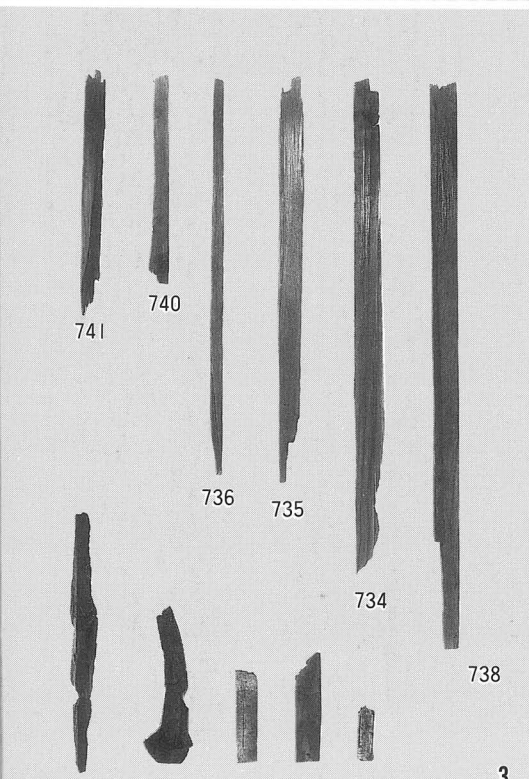
732

1



2

1. SE01外面
2. SE01内面  
(約1/8)



741

740

736

735

734

738

3



737

738

742

4

3. SE01内出土  
(約1/12)
4. SE01  
(1/6)

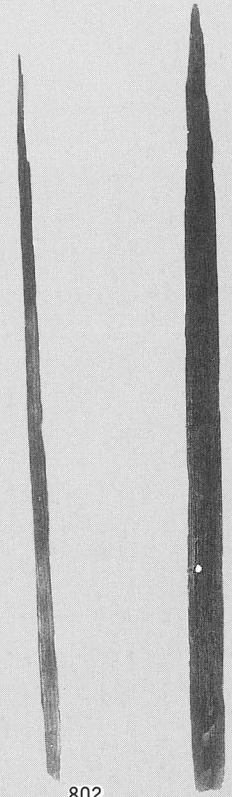
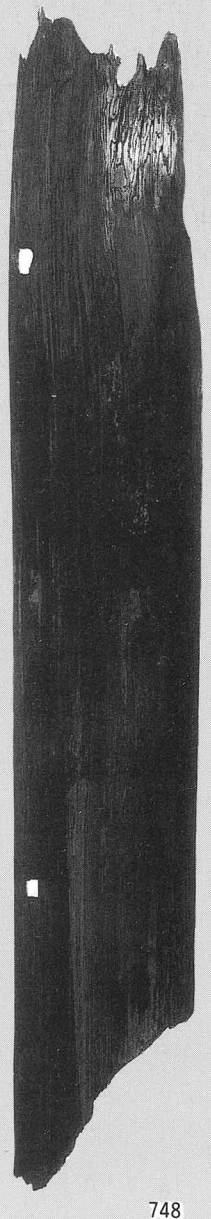
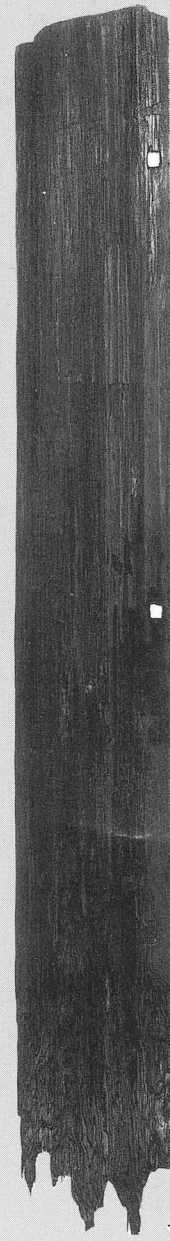
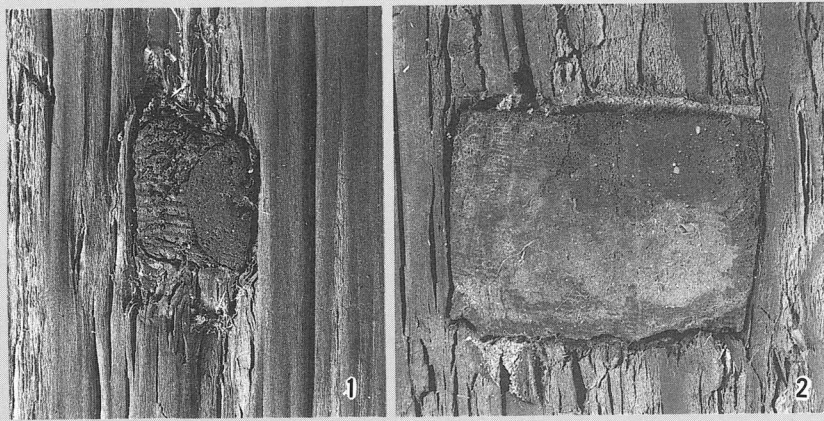


図版第47

遺構の出土遺物  
(弥生時代)

SE201上段側板  
1.2. 側板の角孔  
(実大)  
745外面  
(約1/7)

側板のささえ部材  
(約1/7)  
747~749・802



745

747

748

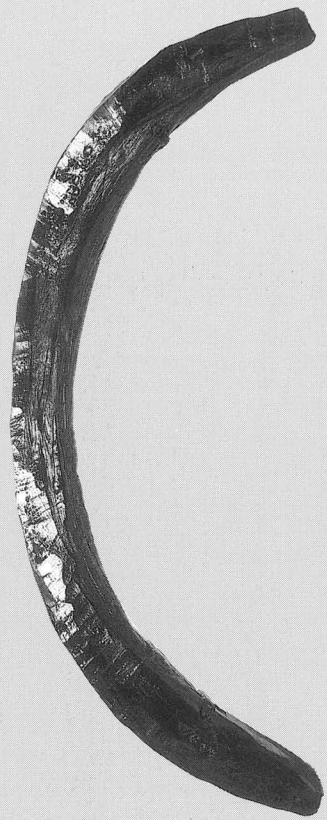
802

749

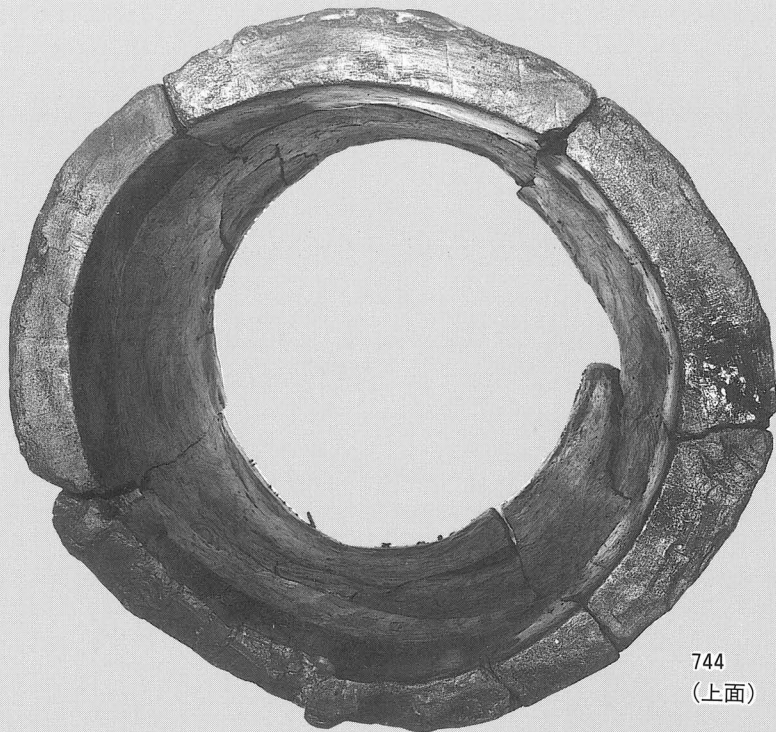


図版第48

遺構の出土遺物  
(弥生時代)



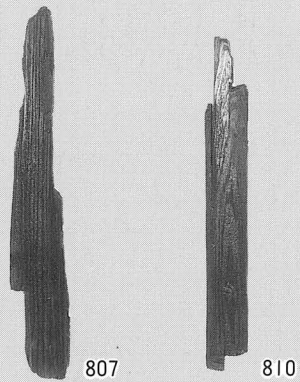
746



744  
(上面)

1.2. SE201下段  
746弓状部材  
(1/5)

1



807

810



804



805

812

3



744  
(外面)

3. SE201内出土

2

4. 工具痕



4



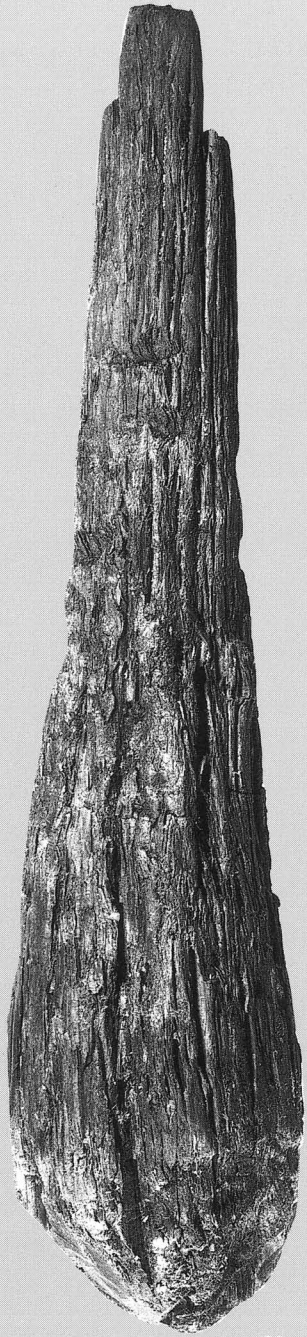
図版第49

遺構の出土遺物  
(中世)

- 1. SB03
- 2. SB07
- 3. SE602

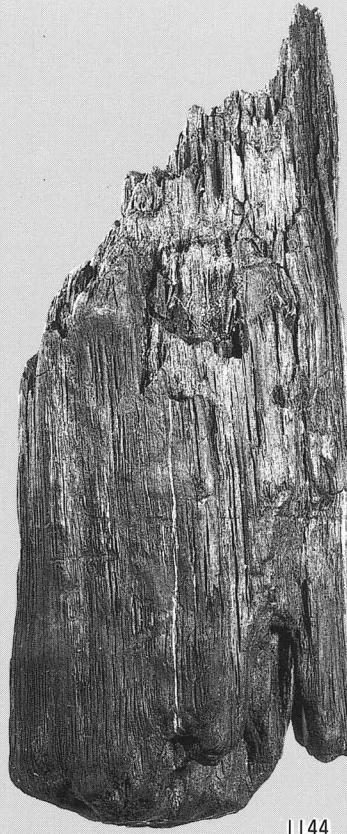
4. SE335

5. SE600



1138

1



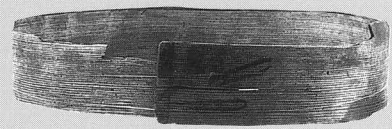
1144

2



1152

3



1145

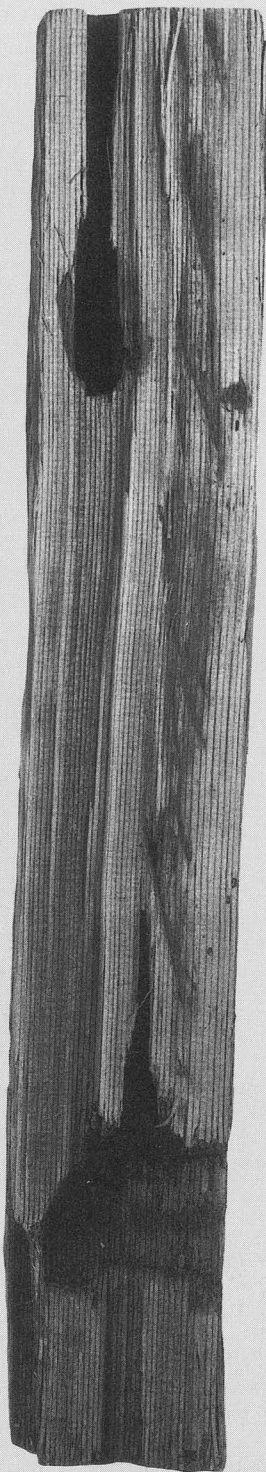
4



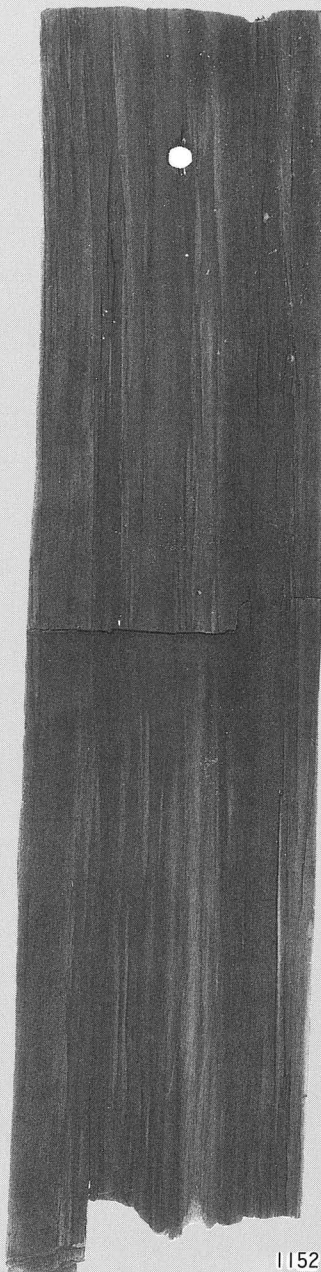
1146

5

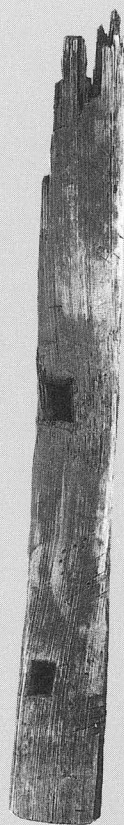




1150



1152



1151



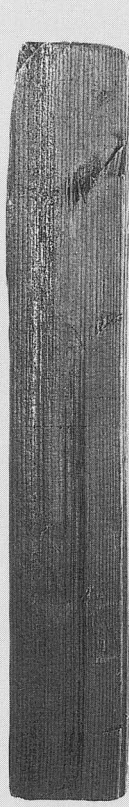
1149



図版第51

遺構の出土遺物

SE603



1162



1164



1163



1158



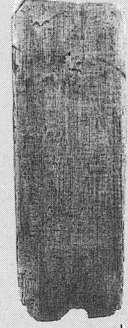
1159



1160



1161



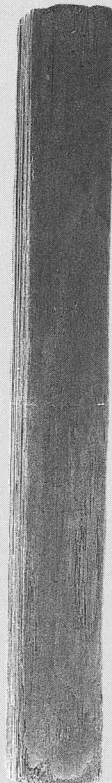
1170



1166



1167

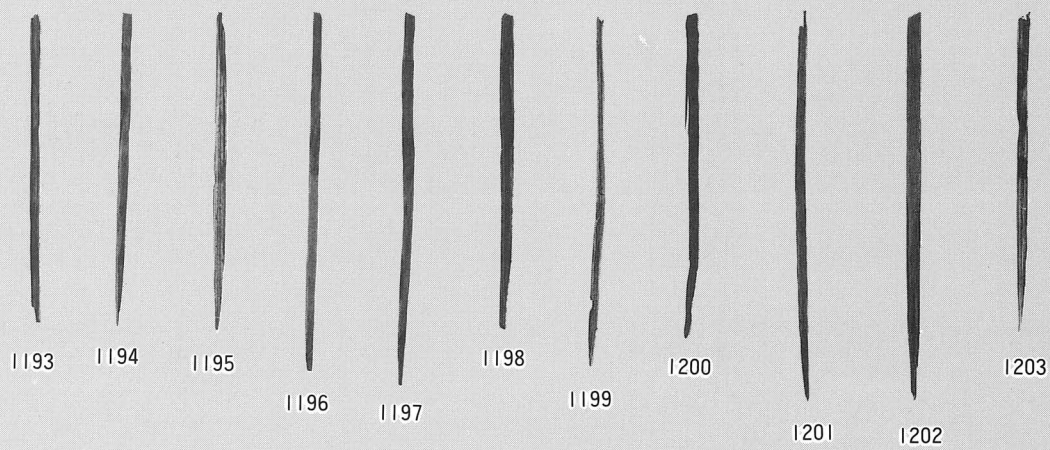
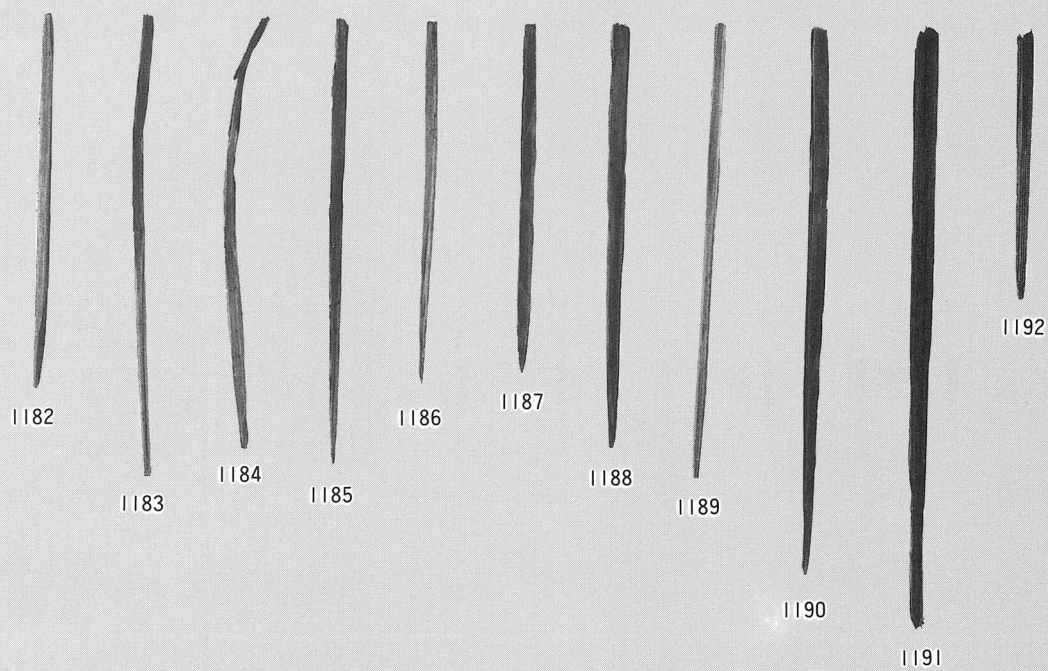
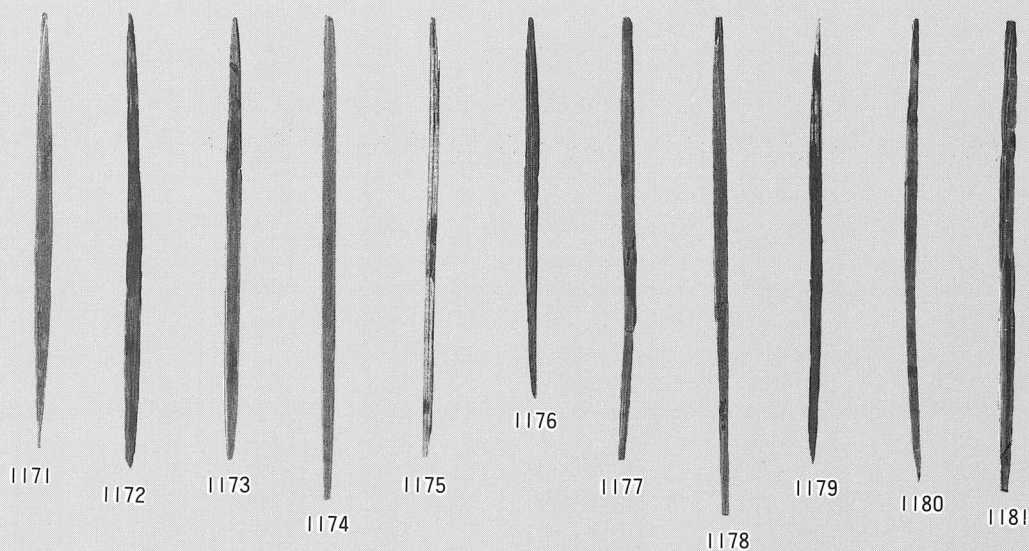


1165

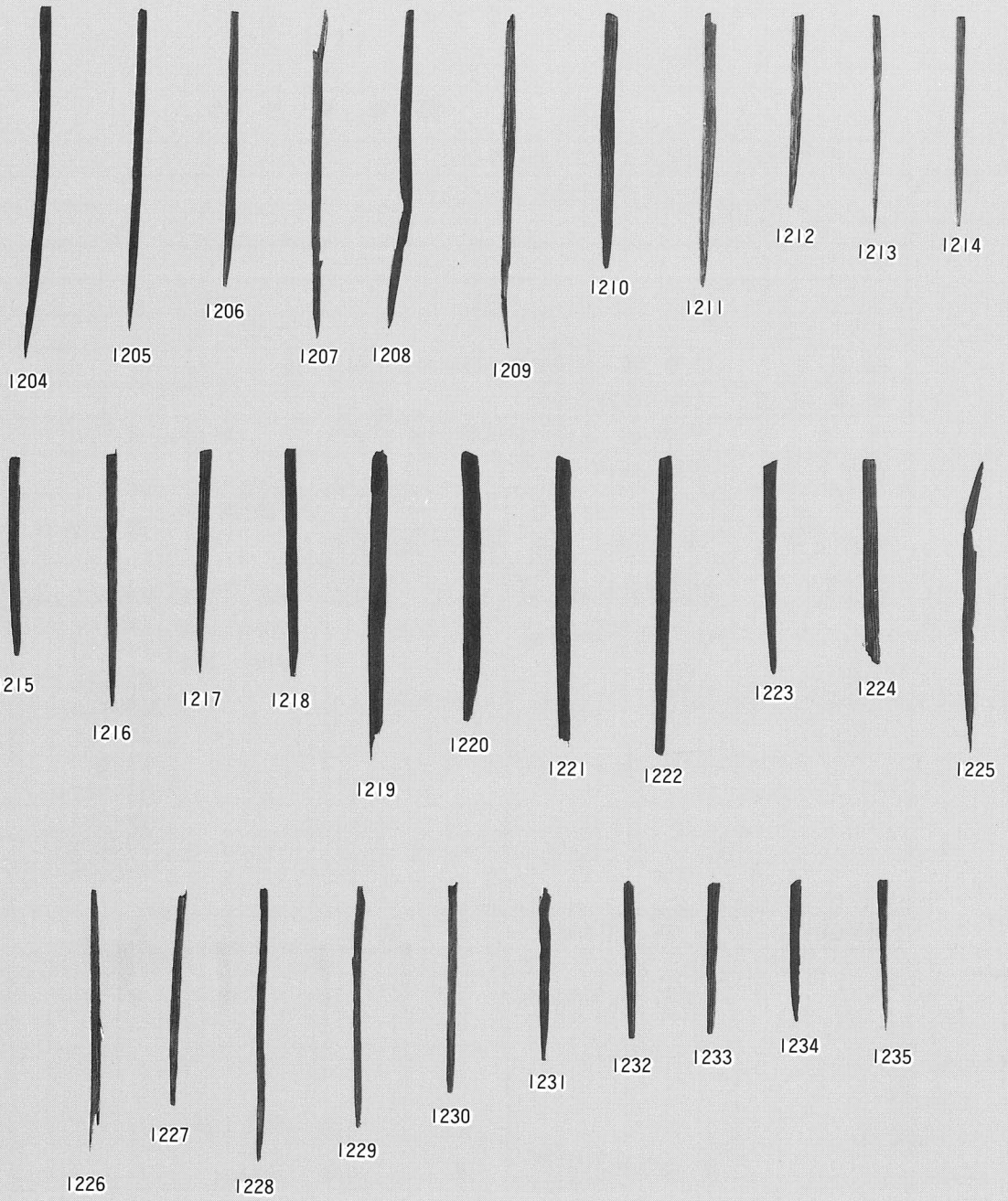


1157









1. SE603

1



2. SE606  
3. SD100C

2



3

報告書抄録

ふりがな	こすぎまちはりわらひがし		
書名	小杉町針原東遺跡発掘調査報告		
副書名			
巻次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編著者名	上野 章・原田義範・稲垣尚美・桐谷 優		
編集機関	小杉町教育委員会		
所在地	〒939-03 富山県射水郡小杉町戸破1511 Tel 0766-56-1511		
発行年月日	西暦 1994年3月22日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はりわらひがし 針原東	とやま いみず こすぎ 富山県射水郡小杉 ひばり はりわら てきき 町戸破字針原・手崎 はりわら 字針原	16381	025	36度 42分 46秒	137度 7分 30秒	試掘調査1次 19891127～ 19891221 試掘調査2次 19900704～ 19900719 本調査 19901022～ 19901211 19910902～ 19911226	3,700 3,722 1,350 9,300	企業団地造成 に伴う事前調 査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
針原東	包含層	縄文(晩期)		縄文土器	縄文・弥生～古墳・奈良～平安・中世・近世～近代の複合遺跡。
	集落	弥生(後期) ～古墳初め	井戸 2基 溝 4条 土坑 44基	弥生土器 石器 木製品	弥生の井戸は、1基が井戸側に原木の中を筒状にくり貫いた一本作りのものを使用。 1基は、井戸側の下段を一本からくり貫いた桶を転用。上段は、四分割した側板を円筒状に組合わせている。
		奈良～平安		須恵器・土師器・瓦	
	館跡	中世	堀 5条 溝 15条 掘立柱建物11棟 井戸 8基 土坑 11基	土師皿 陶磁器 (瀬戸・美濃瀬戸・珠洲・八尾) 輸入磁器 (青磁・白磁) 輸入銭 (唐銭・北宋銭・明銭) 石製品 (硯・砥石・五輪塔) 瓦質土器 木製品 (漆器椀・曲物・柱根・板材・箸)	一辺96mの堀とその内側に一辺68mの堀を二重に巡らせ、その内側に11棟の建物跡を擁した中世の館跡を検出している。
		近世～近代		陶磁器 (越中瀬戸・伊万里肥前系) 銅製品 (煙管・簪) 土製品 (泥面子・土鈴) 鉄製品 (釘・たがね状製品)	

## 小杉町針原東遺跡発掘調査報告

---

発行日 1994年 3月22日

編集  
発行 小杉町教育委員会

富山県射水郡小杉町戸破1511

〒939-03 電話(0766)56-1511

印刷 (株)キューエツ

---



